THE CENTRAL REVIEW

中央公論

秋季大附錄號

第三十五年





"HOMEWARD"



我國社會公益事業の現狀を難ず……法學博士 堀江歸一……(三)



"HOMEWARD" CARL KAYSER—EICHBERG.

物的社會改造より心的社會改造へ

人類の物質的生活に關係する社會組織上の缺陷を以て現代制度の唯一の缺陥とするもの、經濟組織の改革を以て眼前唯一の急務となすもの、少くとも此事以外他の事を考慮する遑なしと爲し他の事を考慮するは即ち此事を等閑に附する所以と認むるもの、之等を總稱して物的社會改造論といふ。

之に反して現代制度の缺陷は獨り其の經濟的方面のみに存するに非ず、經濟的方面の改造は所謂改造事業の全部に非ずとするもの、孰れを重しとするか又之を重しとするの程度如何は人によりて異ならんも要するに經濟的改革を以て唯一の急務と做すに反對するもの、從て概して心的方面を重要視する傾向に立つもの、之等を總稱して心的社會改造論といふ。

物的改造といひ心的改造といひ、これは總名である。其中に包含せらるゝ個々の說には幾多のニュアンスがある。其最も極端なるものに至ては兩者固より相容れずと雖も、其中間のものは社會改造に於ける物的心的兩面の要素を認め、只其の主として重きを置く可しとする所につき觀る所を異にするに過ぎない。

第十九世紀以前の改造論は全然心的であつた。吾人の生活を支配する主人公は心のみではない、物的環境が實に意外の大影響を吾人の運命の上に投ずるものである事を明にしたのは、第十九世紀中葉に於ける科學研究の賜である。之より所謂唯物史觀は動す可らざる眞理となつた。

物が心を動すの事實は最早疑ふことが出來ない。けれども經濟生活は人類の全生活の最も根本的な、否唯一の根源なりやといはゞ容易に首肯することが出來ない。此點に於て唯物史觀は動もすると其の正當なる範圍を超えて所謂唯物論的人生觀に墮するの懸念がある。從來多くの社會改造論者が、哲學的唯物論を奉ずる者に非ずと斷りつゝ、而かも唯物的人生觀の立場から其の言論行動を發足せしめた嫌あるのが、最近所謂心的改造論の奮起を促した原因であらう。

今日の心的改造論は第十九世紀以前のそれの如く心の一方に偏するものではない。物の力の偉大なるを認めつゝ、猶ほ一切の社會事象の根本に心を最終の要素として認むる者である。要するに人生を如何に觀るかの問題である。物的改造より心的改造への推移は誤つた人生觀より正しき人生觀への推移である限り、文化的に有意義である。

中央公論



第卅五年第十號
秋季大附錄號
第三百八十七號

正及び善の原則を論じて社會主義と國際聯盟に希望す

杉森孝次郎

道德的價値を正及び善の二概念に分類する事は可能にして有理だ。けれどもその場合には、その二概念の内容は多少從來の慣例や通義とは異なる。吾人が信奉するに値ひする正は何であるかと問はるれば、分配の理想態だと答へる。また吾人が服事する事を可なりとする善は何であるかと尋ねらるれば、生産の理想態だと應答する。正は分配の理想態であるが故に、既に善を豫想してをる。なぜかといふに、分配するためには、富なかるべからず。吾人は無を分配する事

は出來ない。分配の論理は有の世界に於て始めて成り立つ。母が五人の小供に一個づつ梨を與へる事も分配だ。又、其長幼に比例して一、二、三、四、五と遞次個數に與へる事も分配だ。絕對額としての十五個を三倍にして四十五個となし、そしてこれを前と同じ割り合ひに與へる事も分配だ。しかしながら母の手に一個の梨も曾て入らなかつたなら、分配は不可能だ。正は富または價値としての有を必要を標準として供給する事だ。必要の持ち主は個性だ。言ひ換えれば人だ。必要といふ言葉が强く響き過ぎる場合もあらう。その場合には輕く要求というて置く。人は通例日に三度は多少饑え且つ渴する。饑は食物を對象とする要求であり、渴は飲料を目的物とする要求だ。飯と水とは富または價値だ。饑えたる者に食を與へ、渴したるものに水を與へる事は理想的分配の基礎條件だ。更らにその食物と飲料の量を饑渴者の要求を標準にして十分にし、及び其食物と飲料の質を饑渴者の衞生的及び賞味的眞要求を標準にして出來るだけ善美にするならば、分配の理想態は一層完備する。梨の例にしてもさうだ。子供が梨を欲しがるにも拘らず、その梨を生產し得ない事は善を實現し得ない事だ。若しまた桃の好きな子には桃を與へ、林檎の好きな子には林檎を與ふるならば、これをその分配といふ側面から觀れば正であり、欲望の滿足を出現したといふ側面から觀れば善だ。正は善の手段であるといふ意義はこの偶然の事例にお(ママ)ても既に閃光を放つ。

これを最近代の歷史について說くならば、產業革命以來今日に到る百年間は、富の生產を飛躍的に增し高めたといふ意味に於て善であつた。富の生產はそれ自身のためになされたのではない。欲望滿足の手段としてなされた。蒸汽力利用の術が發明された前と後との世界は、人間の欲望の滿足の比較的に著しく小さかつた世界と、それの比較的に著しく大きくなつた世界だ。欲望の滿足が善である事は平凡なる眞理だ。況んやその欲望の滿足が單なる主觀の態度の改變によつて得られたものでなく、また單なる客觀的事實の組み變へによつて得られたものでもなく、感情の評價と、知力の考察

と、意志の實行とを原因とし、物の世界を手段材料として新らしく或實在狀態を造り出だす事によつて得られたものである場合には、それが善たるの資格は禁欲主義や調和主義に比して明らかに高い。近代から產業を除き去つたなら、近代の道德は殆ど零に近い程度に降る。心頭を滅却すれば火もまた涼しいといふ哲學が、佛敎の唯一の智慧であるとするならば、佛敎よりも近代の產業文明の方が遙かに高度の善だ。主觀的に人が感覺を支配し得る能力には限度がある。その限度以內の能力を十分に利用する事はよい。その限度以外の感覺に幸福を與ふるためには、吾人は工藝の力を借らねばならん。否な、現存の客觀的實在に不滿足なるいづれの場合に於ても、吾人は吾人の智力意力を働かせて、吾人に滿足を與ふる客觀的實在を生產し創造し作出する事によつて、此理想的新事實によつて彼の反理想的舊事實を非存在に移さねばならん。これが工藝と技術の倫理的意義だ。吾人は心頭を滅却する學と術のみを尊信すべきでない。猛火を客觀的に滅却する學と術をも崇拜しなくてはいけない。崇拜して之を愛護助成しなくてはいけない。消火器をも發明し改良し、消防組織をも發明し改良しなくてはいけない。若しも基督敎が、貧者をそのまゝに讚美し、また吾人をして範を野の百合の働かず紡がざるに取らしめんと欲し、空飛ぶ鳥の蒔きもせず、刈りもせず、納屋入れもせざる自然生活を學ばしめんと欲したとするならば、基督敎の善は近代の善よりも低い。吾人は野の百合の如くに沒意思的に成長すべきでない。吾人の成長は選擇による成長でなくてはいけない。吾人は天なる父の脛齧りであつてはならん。吾人は勞作し、紡績する事によつて成長し、蒔き、刈り、納屋入れする事によつて糊口すべきだ。その理由は簡にして明だ。野の百合には自由意思なく、吾人には自由意思あり、空飛ぶ鳥には蒔く手も、刈る鎌も、運び込むべき納屋もなく、吾人には比較的自由の利く手と、鎌を製作し、納屋を建てる智能がある。その自由意思とその智能とこそが、すくなくとも素質として、傾向としての形に於ては、天なる父のたまものだからだ。道德は經濟だ。消極的經濟が正で、積極的經濟が善だ。消極的經濟と

を發見する。だから吾人は且つ働き、且つ紡ぐ方法によつて創造せざれば幸福が得られない。否、生存が出來ない。こゝで發見といふたのは、吾人は人として生まれ、野の百合や空飛ぶ鳥は、野の百合や空飛ぶ鳥として生まれたといふ事實を指したのだ。出發點だ。與へられたる事實だ。產まれ落ちて見たら、吾人は人であつたといふ事實の認識をいふ。意思と聰明を本質的に所有して宇宙に出席したる吾人は、その意思と聰明といふ資本を、一面に於ては理想的分配方を發明して出來るだけ上手に使ひ、他面に於ては理想的生產方を發明して出來るだけ多く增殖せねば、自己に不忠な事によつて自己の親としての天なる父に不忠になる。產業の創始乃至發達は、それだけの關係に於ては善だ。產業の播種及び成長を呪ふ道德家は、機械の發明及び進步を咀ふ藝術家と等しく、頗る事理に暗い。

生產は善だ。けれどもその生產の結果としての富の分配方如何によつて、正不正が起こる。富の分配の規範は本質的必要にある。本質的といふ形容詞を冠らせたのは、當人の感ずる必要が必ずしも最眞の必要ではないからだ。グラ付く齒を自然に拔けるまで保存する事が必要だと素人は感じ且つ信じても、否な實に考へ且つ信じても、齒科の良醫に診斷させると直ぐに手術を施して拔き去る事が、そして新らしい齒を自由に其跡に生えさせるなり、或は入齒をする事が、その患者の齒全體のため、健康のために必要な事が屢ある。この種の例は社會の制度、習慣の各方面に亘つて多少常にある。それで、科學的確實性を有する、即ち客觀的妥當性ある必要でなくては、富の分配の規範とはならない。さて、富の分配の規範としての本質的必要とは、具體的にはどんなものであるか。一社會の全員に通存する本質的必要の內には、例へば

健康もある。教育もある。殆ど例外なしに家庭もある。娛樂享樂もある。何よりも主要のものとして道德的人格的個性的自由と尊嚴と權威とがある。健康と教育と家庭と娛樂と最後に、しかしながら最中心的に道德的獨立とを可能にするために或種類及び或程度の富は必要だ。最低限の人間的必要に屬する富がある。人間的必要だから、男女に拘らず、老幼に拘らず、無論正業としての職掌や事務の差別に拘らず共通に存する必要だ。正業としての職掌や事務の差別の內には、熟練職工と不熟練勞働との分かれもある。勞働者と組織者と科學者との分かれもある。筋肉勞働者と頭腦勞働者との分かれもある。頭腦勞働者の中には教育者もある。藝術家もある。立法者もある。執政者もある。必要には、しかしながら、人間的最低限の必要のみは屬しない。人間的最低限の必要が必要の全部では勿論ない。社會の總員通有の必要があると同時に、社會の各員特有の必要がある。富の分配の理想態はこの兩種の必要を組織的に滿たすにある。社會の各員特有の必要とは何か。科學者たるべき天分が、他の社會奉仕の途に進むべき天分に比して高い人は、その科學者たるべき訓練、教養を十分にするために必要な富と、教養し訓練せられたる科學者的能力を十分に仕事に翻譯するために必要な富とを、彼れ特有の本質的必要として彼れが屬する社會から認めらるべきだ。即ち社會は彼れにその富を供給すべきだ。科學者は一例に過ぎない。同じ原則が、富の生產者としての勞働者にも、組織者にも當て篏まる。否な單に富の生產者としての科學者や、勞働者や、組織者に當て篏まるのみではない。同じ原則は實に社會の各員に當て篏まる。文化的價値の創造者としての思想家にも、藝術家にも、教育者にも、科學者にも當て篏まるのだ。序でながら一言して置くが、富の生產者と文化的價値の創造者とは、特徵に從つての識別であつて、機械的に區別し得る二元的關係には決して立たない。科學者殊にその或部面の者が、富の生產者としての位置を明確に占有すると同時に、文化的價値の創造者としての位置をも顯著に體證してをる事は、思想家にも藝術家にも共通であり、勞働者にも組織者にも共通である法則の一象徵だ。藝

術的天資の殊に厚き人をしては、社會は十分にその成長と作業とを可能にするだけの富を享受せしむべきだ。この正義の意味は、社會が公定制度の力によつてその各員の受くべき富の額を、或は富の質及び量を決定すべきであるといふよりも、各員をして自己の眞の必要を滿足させるための富を享樂する機會上の自由あらしめる事を主要點とする。

富の生產の人間的原因が間接には社會内の各正業に從事する各正員であり、直接には勞働者と科學者と組織者であるとするならば、その功績に對する報償の分配も、能力に對する教練及び活用の機會の分配も、人間的最低限必要に對する富の供給と等しく本質的には各員本位であるべきだ。人間的最低限必要といへども、具體的には各員特有の事實だ。ただ吾人が各員特有の事實を比較して、そこに大同小異を發見し得るが故に、便宜上それに通有事實としての概念を代用するに過ぎない。社會主義の目的が個性主義にないならば、その社會主義はいかに努力しても不正だ。社會内の各正業に從事する各正員とは、富の生產と文化的價値の創造に參與する各人をいふ。富の生產にも文化的價値の創造にもなんら貢献する意思なくして、專ら他人の努力の結果を消費し享樂する意思の人々が社會の不正員だ。不具、廢疾、老幼等はすくなくとも意思に於て社會の正員たり得る。社會は寧ろ彼れらに特別の尊敬と愛護を與ふべきだ。彼れらは、力によつて自己の權利を主張し得ざる、あたかも捕縛せられたる勇者の如き位置にあるからだ。無論世には本來惡人にして、途中から不具、廢疾等になるものもある。その詳論はこの場合の要事でない。

生產の結果としての富の分配を合理的にする事が正の一適用であると同樣に、生產の原因としての勞働の分配を合理的にする事が正の他の一適用だ。謂はゆる怠惰なる富者はこの正の法廷に引きだされて特權の純化と責任の自覺とを餘儀なくされる。社會に無勞健體の一員もなからしめよ。ただ吾人は、聰明なる分業の原則をば飽くまでも主張する。或人は自由に文化的價値の創造にその全生活を消費し、或人は自由に富の生產にその全精力を傾倒する事を非認しない。

・遺傳と素質の形に於て自然が社會に分配する個性を承認して、これに機能の特殊化と組織の原則を適用すべきだ。機能の特殊化が抱帶する倫理的形式は自治であり、機能の組織が抱帶する倫理的形式は責任だ。自治と責任とは、單一なる運動の求心的側面と遠心的側面だ。自治と責任とは正比例して增減する。不完全なる一徴象としての民族自決と國ぶ聯盟との關係を見てもわかる話だ。機能の特殊化を十分にする努力は、機能の組織を十分にする努力だ。各の人は際少の程度に於てすべての人だ。けれども、すべての人の最大幸福を遂げるためには、言ひ換えればすべての人の個性を完全に保護するためには、社會の總成員を分子として、その分母を最大限にすると同時に最小限にする必要がある。分母は各成員の生活內容だ。それが最大限單位を假定した場合には、總成員が質に於ては一員となる。各員が織りもし、耕やしもし、建てもし、手術をもし、警察をもし、航海をも航空をもする事になる。協力は單純なる量的協力となる。これに反して、分母が最小限單位を假定した場合には、頭數に於て萬の社會は生活內容の種類をすくなくとも萬別して所有する事になる。協力は質的協力となる。個性間に通有質を發見してこゝに量的協力を組織し、またその個性間に特有質を發見してこゝに質的協力を組織する。量的協力は形式論理學で呼ぶところの外延に該當する。三角塔の基底だ。水平線だ。地を拔く百尺の小丘も、一萬二千尺の高嶽も、水平線をば共有する。質的協力は形式論理學で呼ぶところの內包に該當する。三角塔の尖頂だ。高脚にして遠望する。孤聳すれども視界には群巒平野河海を統ぶ。地球は一圓だ。三角塔は一體積だ。個性が通有質と特有質とを組織的に所有する如くに、社會も分業と通務とを組織的に所有する。唄ふ者をして心置きなく唄はしめよ。彈く者をして心置きなく彈かしめよ。舞ふ者をして心置きなく舞はしめよ。一人にして三藝を兼ねる事は、三人のすべてが一藝のみに腐心すると同じ損失だ。個性の損失であると同時に社會の損失だ。富の生產も、文化的價值の創造も、機能の特殊化と組織の原則を實現する事によつて始めてその能率を高め

る。

參產權の分配は、富の分配と、勞力の分配と、經營の分配とに細別される。經營の分配は、富の分配と勞力の分配とを十分に包括的なる意味に解すれば、その内に含有され、附帶される。他の何人の功績であるよりも高い程度に於て或人の功績である事實に對しては、最も多くその人に報償すべきであるが如くに、他の何人の興味、幸福、利益にむかつてよりも、或人の興味、幸福、利益にむかつて餘計に切實な、直接な關係を有する問題をば、その人に最大決定權を持たすべきだ。自治自營の領分は、生產についていふならば勞働者にも科學者にも組織者にも特有さるべきだ。

參政權の分配も、參產權の分配も、從來は國內的規模に限られてゐた。今後はこれが國際的規模に於ても發達しなくてはいけない。國際聯盟は、不完全ながら參政權の國際的分配の一努力だ。保護主義と自由貿易とが、各國の任意に隨替しつゝある現狀は、いまだ國際的參產權分配の段階に吾人が進んでゐない事を示す。分配の理想態は必要にむかつて供給を十分に且つ組織的に分配するにある。能力にむかつて機會を分配し功罪にむかつて賞罰を分配する事は、必要に對する供給の分配の內に實は含まれて意味される。必要といひ、能力といひ、功罪といひ、その所有者は最後の意味に於ては常に必ず個性だ。或は民族的團結の形をなし、或は職業的組合の形をなしてその所有者が現はれようとも、無假定の實在としての所有者は人だ。世界の道德的中心は、實に斷々乎として各個性にあるのだ。なぜかといふに、自由意思の持ち主は各人だからだ。團體や組合や社會やは、畢竟するに自由意思の所有者でない。自由意思はその團體や組合や社會の成員たる人々が各自に所有してをるのだ。その成員の總數または過半數の間に選擇の偶合もしくは協調が發見されもしくは成就された時に、吾人はその狀態を便宜上呼んで團體や組合や社會の自由意思發動となすのだ。林は樹よりもあらゆる意味に於て大なる實在であり、價値であるかも知れん。人は或る意味に於て團體や組合や社會よりも大なる實在で

あり、價値である。樹は自由意思を有せず、人は自由意思を有するからだ。倫理學は心理學の基礎の上にでなければ成り立たない。爲善去惡の心理的自由なきところに、爲善去惡の責任が成り立つ筈はない。

一とたびこの平凡なる事理を理解すれば、既に諸國民が一社會を形成してをる以上、參政權や參產權の分配が、各國内にのみ追求されて、列國間に追求されない現狀が、いかに暫時の現象にとゞまるべきかは想像するに難くない。原始無自覺の狀態だ。機能の特殊化と組織の原則も、これを各國内にのみ適用すべきでは無論ない。人類社會の全部面に適用すべきだ。各國民の奥に多數の個性を認め、人類的社會の全個性にむかつて十分にその保護成長の機會を分配する事が正の努力でなくてはならん。成長する多態であり、同時に自由意思の持ち主である人的個性を社會の單位と正認し、正信して、交通機關によつて經濟的生活内容と文化的生活内容と道德的生活内容とが運搬される限りを社會そのものと正認し、正信して、その唯一眞社會の名に於て、吾人は各單位に理想的境遇を分配せねばならん。

正は分配だ。必要と能力と功罪とに對する供給と機會と賞罰との相當分配だ。これを他面から言ひ表はせば個性の特有質と通有質とにむかつて自治と責任を分配する事だ。けれども、畢竟するに正は善の次位に立つ。正の目的は善だ。善の目的は善だ。善は生產だ。換言すれば創造だ。

創造の倫理は良心と功利との關係を理想的に支配するところに成り立つ。良心は發見すべき實在だ。功利は創造すべき實在だ。良心は吾人がこれを吾人自身の意識内に努力して發見すべき價値だ。功利は吾人がこれを吾人自身の世界内に努力して創造すべき價値だ。良心は瞬間もこれを手放してはならん。功利は時あつてかこれを手放さなくてはならん。眞に自己が發見した良心であるならば、これは實に激浪狂風四方晦瞑の眞唯中を漕ぎ進む一葉小舟に取つての羅針盤だ。文字通りに命の綱だ。しかしながら久しく功利を逸せば良心はその所有者と共に現存の勢力でなくなる。吾人は

良心を固執せなくてはならん。これは生活の第一責任だ。良心を固執する第一責任は、功利を創造するといふ第二責任を遂行する事によつてのみ果たされる。現有の良心が滿足し得る功利を吾人が發見し得ない時は、現有の良心が滿足し得る功利を吾人は創造すべきだ。俗に謂はゆる禍を轉じて福となし、窮して達する眞正道はこゝにあるのだ。近代は發明の時代、創造の時代、生産の時代であるが、良心に背水の陣を布いた功利主義に於て、發明と創造と生産の睛は點ぜられる。良心本位の功利主義は、先づ人物の上に革命的進歩を與へる。それから客觀世界に於ける新價値の寄與となる。いかに機能を十分に特殊化して自治を實現し、またいかに機能を完全に組織して責任を實現しても、これだけでは創造の準備に過ぎない。創造は萬様に可能だ。藝術的創作もある。科學的發明もある。工藝的生産もある。けれども、創造中の創造は、道徳的創造だ。倫理の根本概念として創造を信ずるに至つて、他の諸般の特殊的創造はその活源泉を穿つた事になる。競爭の倫理が、今日では、個人間に於ても、階級間に於ても、國際に於ても、盗奪的であつて創造的ではない。個人的競爭の創造化より始めて、團體的競爭の創造化に移らねばならん。當面の問題としては、國際競爭に對するこの原則の適用が急務だ。倫理の根本概念とは生活の根本規範といふ意味だ。

正は善の手段だ。全手段ではないが一とつの絶對的必要手段だ。正は法律と握手し、善は宗教と握手する。全體的必要を部分的能力單位に分配する理想的方法が秩序だ。正は關係だ。善は實在だ。部分と全體との關係の規範が正だ。國民と國家、國家と國際的社會との關係を參照すべし。善は各部の生存と成長、隨つて全體の生存と成長だ。法律は道徳の必要的最低限だ。正もまた道徳の必要的最低限だ。道徳の可能的最高限は正にあらずして善だ。宗教と繫がるのだ。宗教そのものの堂奥に居据はるのだ。現代は正が叫ばれる時代だ。社會主義がその一大例だ。國際聯盟がその一小例だ。大小といふよりも歴史の深淺だ。將來の意義は兩者共に大だ。願はくば社會主義と國際聯盟とをして、十分に善を

豫想する正たらしめよ。生産と創造を、即ち個性の成長を目的とする分配たらしめよ。社會主義は參産權の分配の合理化の努力だ。その合理化に客觀的妥當性を與ふると共に、即ちその合理化に純眞性を與ふると共に、その努力に國內的社會のみを與へず、同時に國際的社會を與へよ。國際聯盟は參政權の國際的分配の着手だ。各國をして國際的社會に於ける一自治體、國際的社會に對する一責任體たる實を愈完全に擧げしめると同時に、否な實にそれに先きんじて、國際的社會の富と文化的價値とに貢獻する意思を高めしめよ。新社會倫理は、善を信ずるが故に正を愛するものでなくてはならん。生産を好むが故に分配に對して敬虔的態度を採るものでなくてはならん。

日本社會主義同盟に就て

室伏高信

一

この十月を期して、日本社會主義同盟が成立するの運びとなつたといふ計劃がこの同盟の發起人の諸君によつて發表された。この計劃が今後において如何なる困難に遭遇するかは解らないといふのほかはないが、兎も角その計劃は着々進められてゐるようである。そして如何なる困難に遭遇するにしても、何等かの形においてこの同盟が事實のうへに成立することは何人も如何ともすることはできないであらうし、萬々一十月になつて不幸にして成立の運びに至らないようなことがあるにしても、この種の團體が近き將來において成立することは必至のことである。この事件は今日の諸新聞紙によつては割合に小さく取扱はれてゐるようである。或は甚だしいのになると全然この事件を彼等の紙面から默殺しつゝあるようである。また怜悧な評論家は、外國の諸事件については、または誰れも知りぬいてゐるような原理原則についての講釋的な評論については、可成りに饒舌であるにもかゝわらず、こうした事件には、なるべく觸れずにゐることが賢明であると思つてゐるのであらう。しかしこの事件は、資本主義の諸新聞紙がこれに對して如何なる態度を示すにしても、また怜悧な評論家が如何なる賢明な態度を示すにしても、默殺しさるにはあまりに重要な意義のあることである。私はこの事件を中心として少しく日本の社會主義運動について意見を述べて見たいと思ふ。

二

今日われ〳〵の面前において成立しようとしつゝある社會主義者の團體としての『日本社會主義同盟』は勿論日本における最初の社會主義者團體であるのではない。日本における社會主義運動の記錄は、可成りに古るくからあつた。日本の社會主義の歷史を書くものはみな明治十五年に遡るようである。この年

に樽居藤吉なる人があつて社會黨の組織を企てたことがあるからである。この社會黨の計劃はあまり世の中の反響もなしに失敗に終つたらしいが兎も角この事實によつて既に明治の初年に社會主義の思想が輸入されてゐたことが解るのであり、またこの時に既に社會主義運動が存在したことが解るのであり、その早さにおいては諸外國に對してもあまり劣つてはゐないのである。明治十五年といへば西暦一八八二年に當るが、英國で社會主義運動が復活されたのは丁度この頃である。即ちハインドマン一派が社會民主主義聯合を組織したのは樽居藤吉が日本に社會黨を組織しようとした前年であり、（社會民主主義聯合は最初は民主主義聯合と稱した）フエービアン協會の成立したのは一八八四年であるから樽居の社會黨よりも二年間後れてゐる。またフランスにおいてゲードによつて社會主義運動が復活されたのも一八八〇年のことであるから樽居の社會黨に二年先つてゐるに過ぎない。獨逸社會民主黨にしてもその成立したのは一八七五年であるから樽居の社會黨とあまり隔つてはゐない。しかし樽居の社會黨が英獨佛諸國の社會運動と異つてゐる點は英獨佛においては政治狀態及び社會狀態が既に社會主義運動を要求してゐたと思はれるのに對し日本においては未だ社會主義のために社會生活の諸狀態が熟してゐなかつたといふことである。

明治十五年といへばまだ日本には憲法もないし、資本主義も幼稚な狀態にあつたし、內外の狀勢は社會主義運動に對してよりは資本主義の政治運動としての自由黨や改進黨の成立に適してゐた——自由黨や改進黨にさへどれほどの程度に於いて適してゐたか疑問である位ひであつたのである。だから樽居の社會黨計劃が單なる樽居の社會黨計劃であつて一般に大した反響もなく、また彼れの計劃が豫定通りの失敗に終つた後に一切の形においての社會主義運動、或は廣く社會運動が續いて行はれなかつたのは當然のことであつたと思はれる。樽居の理想が復活されたのはそれから十六年後のことであつた。即ち明治卅一年になつて村井知至、河上清、片山潛、佐治實然、幸德傳次郎、岸本能武太の諸君によつて『社會主義研究會』が組織されて、プルウドンや、フウリエや、サン・シモンや、マルクスなぞの社會主義についての研究が團體的に行はれた。それが二年後にはいよ〳〵『社會主義協會』と名を改めるまでとなつた。『社會主義協會』は會員三四十名に過ぎない小團體であつたが會員はみな社會主義者であつた。それが明治三十四年になつて『社會民主黨』の計劃にまで發展した。社會民主黨はその名の示すとほり政治團體であつて軍備の撤廢、土地及資本または鐵道船舶等交通機關の公有、階級制度の全廢、平民敎育等の社會主義の諸

政黨に共通する綱領を掲げてゐた。そのうへに『人類同胞主義の擴張』といふような基督教的の文字もこの政黨の綱領を飾つてゐたのであつた。その組織者は片山潛、安部磯雄、幸德傳次郎、木下尚江、河上清、西川光次郎等の諸君であつたからその顏觸れにおいても相當有力なものであつたと思はれる。しかし社會民主黨はその宣言の發表された翌日に解散を命ぜられ、宣言書は沒收されてしまつた。この時は伊藤内閣の時であつたがその後第一次桂内閣の時になつて前記の六人が社會主義團體としての『日本平民黨』を組織するの計劃を立てたがこれも當局者によつて成立に先つて禁止されてしまつた。その後日露戰爭とともに社會主義者の非戰運動が起り、非戰論の故をもつて『萬朝報』の記者を辭した幸德傳次郎、堺利彥の兩君は西川光次郎、石川三四郎の兩君と協力して『平民新聞』を起した。それが明治卅六年十一月十五日であつたがいよ〳〵日露戰爭が起ると『平民新聞』は萬國社會黨大會――第二インタナショナル――に訴へて戰爭反對の立場を明らかにした。片山潛はアムステルダムに赴いて萬國社會黨大會に參列し、ロシアの委員フレツカと握手し、そしてこの大會においては彼等の希望通り日露戰爭反對の決議が通過したのである。『平民新聞』の時代は今日までの歷史においては日本において社會主義が最も多く『宣傳』

された時代であつたがまた『平民新聞』の政府からうけた迫害も甚だしいものであつたように見える。平民新聞に揭げられた『小學教師に告ぐ。』とか『所謂愛國者の狼狽』とか、『嗚呼増税』とかいふ諸論文は、その執筆者または編輯人發行人を刑罰に問ひ、その新聞の發賣を禁止するの理由となつた。明治卅七年十一月十三日には『共產黨宣言が』翻譯揭載されたがこれまた發賣禁止の厄に會つた。たゞに發賣を禁止されたばかりではなしに、平民新聞は十一月十九日に遂に發行を禁止されて印刷機械は沒收された。西川光次郎、堺利彥、幸德傳次郎の諸君は交々刑罰に服した。その後に『平民新聞』は『直言』に變じ、更に幸德、堺等の諸君によつて『社會主義研究』が發行され、これにも『共產黨宣言』の翻譯が揭載されてゐたように思ふ。しかしかくのごとくにして政府の迫害のもとに惡戰苦鬪してきた初期の社會主義運動はその後に赤旗事件となり、更に幸德事件となり、そして傷ましい最後のもとに、表面から久しい間一掃されなければならなかつたのである。

三

幸德事件の判決の與へられたのは明治四十年一月十八日のことであつた。これより先き平民新聞時代においては日本の社

會主義運動は熱心なる宣傳とそしてこの時代の社會主義者の文章的才能とのために一部の青年または勞働者の間に感激をもつて迎へられ、政府の干渉と壓迫とのもとにあつて尙ほ大に發達し彌漫すべき形勢のもとに置かれてゐたのであつたが、幸德事件の判決書が大審院の薄闇い大法廷で鶴裁判長によつて讀み上げられた時はまた第一期の社會主義運動に對する終焉の宣告が與へられた時であつた。爾來社會主義運動はその殘骸を止めてゐたといふに止まり社會の表面からは日本の社會主義運動は死滅したかのように思はれてゐた。丁度第一インタナショナルが失敗に終つた後に『社會主義は死滅した』と論ずる人達のあつたがごとくに、幸德事件の判決文が大審院の大法廷で讀み上げられた瞬間に。おいて多くの人々は社會主義は日本において久永に死滅したと思つたであらう。この時からして日本の社會主義運動はたゞ政府の壓迫のもとに身動きもできなかつたばかりではなしに一般國民からも誤解と憎しみとをもつて迎へられてゐたようであつた、その間が約十年間である。約十年の間、日本の社會主義運動は壓迫と憎しみとのうちに死滅に等しい狀態のもとに置かれてゐたのである。丁度パリー・コンミユーンの失敗に終つてから十年間ヂユール・ゲードによつての社會主義運動の復活に至るまで、フランスの社會主義運動が身動きもできなかつた狀態のもとに置かれてゐたように日本の社會主義運動は十年の間少しもわれ／＼の耳には聞えてこなかつた。また實際に多くの社會主義者が刑に死んだし、生殘してゐるものも、次第に改宗するものが增加してゆき、社會主義者として存續したものは、『賣文社』の一角に據つて纔にその生活を支へてゆくといふほどのみぢめな有樣であつた。しかし死滅したと思はれた社會主義が第二インタナショナルとして復活されたごとくに、またパリー・コンミユーン後の十年間がジユール・ゲードの出現を待つてゐたがごとくに、日本における社會主義運動も決して死滅してしまつたのではなかつたのである。否なこの時代こそ日本において社會主義の勃興すべき條件が最もよく發達した時代であつた。資本主義の發達がそれであつた。

四

マルクス、エンゲルスがその『共產黨宣言』を書いた時には、ヨオロッパにおいて資本主義が發達の狀態に置かれてゐたのは英佛和の諸國に過ぎなかつた。エンゲルスは一八九五年になつて『歷史はわれ等（マルクスとエンゲルス）が誤つてゐたことを證據立てた。歷史は大陸に於ける經濟的發達の狀態が資本主義的生產方法を廢止することのために、少しも熟してゐなかつ

たことを明白にしたことと述べてゐる。ヨオロッパにおいても、二、三の國を除くと、資本主義の發達は極めて近世のことである。日本における資本主義の發達は日露戰爭の前後からのことである。だから日本における社會主義運動はその資本主義の發達の割合からいふと可成り早く輸入されてゐたものであつたとともに、またその第一期運動は『資本主義的生産の廢止のために』充分に熟してゐない時代において行はれたことの事實を認めなくてはならないであらう。しかし日露戰爭の後における日本の資本主義の發達は目ざましいものがある。この間に藩閥政治は日露戰爭における赫々たる武勳があるとされてきたにかゝわらず、またこの武勳をもつて政治上の權力を征服してゐたにかゝわらず、資本主義の發達の結果は政治上においても、次第に純粹なる資本主義の政治方法へと導かざるをえなかつた。政黨政治の發達がこれであつて官僚政治家も自ら政黨を組織し、或は既成の政黨に降伏して、今日では藩閥の勢力は軍閥または貴族院、樞密院、元老會議等に存在してゐるに過ぎないものとなつた。日本における資本主義は今や衆議院を征服してゐるに止まらずその魔手をもつてあらゆる政治機關を把握しつゝある。日本におけるあらゆる政黨は資本家の集合かそれでなければ資本家のスポークスマンの集合である。日本におけるあらゆる新聞紙は資本主義の機關である。日本における唯一の生産方法は今や資本主義的生産方法である。日本におけるあらゆる敎育は資本主義的精神の鼓吹である。かくして資本主義の魔力はわれ等の社會生活の一切を征服してゐるといふことができるであらう。この資本主義の權力はもとより日本獨特の産物でなくして單なる摸倣であり、輸入であることは如何なる資本主義者と雖拒むことはできないにかゝわらず、『權力』は資本主義をもつて社會の秩序と定め、資本主義に反對するものは社會の秩序に反對するものであるとされ、或は日本の國體に背くものとさへされてゐるのである。この精神を最もよく代表してゐたものは總理大臣原敬が第四十二議會を解散した時の演説であつた。原敬氏がその反對黨の首領としての加藤高明氏とともに現代日本における最も有力なる資本主義のスポークスマンであることは更めていふまでもないことであるが、彼れが第四十二議會の解散——普通選擧の反對のために試みた數回の演説は彼れの資本主義的精神の如何に昂奮狀態にあるかを天下公衆の前に赤裸々に暴露したものとしてわれ〳〵の決して忘れることのできないものであつた。彼れは勿論普通選擧に反對した。彼れが普通選擧に反對したことは、普通選擧論が『階級打破』を目的とするがためであるといふことであつた。そして『階級打破は國家の基礎を

危うくする』とは彼れの演説の骨子であつた。然り、彼れは『階級打破』をもつて『國家の基礎』を危うくすると考へてゐるのである。彼れにおいては、國家とは國民ではなくして階級であつた。國家の職分とは、彼れにおいてはこの威厳あり、そして豊かな階級――ブルジョア階級を擁護することであつた。苟くもブルジョア階級の基礎を危うくするものは『國家の基礎』を危うくするものであり、從つてあらゆる手段をもつて階級を擁護しなければならないのであつた。これ實に彼れの政治の根本であつた。彼れを日和見主義――タイム、サアビイングの政治家だと批評する人達は未だ彼れのこの根本の信念、然り階級擁護の信念に想ひ到つてゐないがためである。この精神は他の國家機關としての裁判のうへにも明白に現はれてゐる。森戸事件の第二審の判決はこの意味においても注意されなければならないものであつた。それによれば『私有財産』――資本主義の根本要素としての私有財産制度は『社會制度の基礎』である。そしてこの『私有財産制度』に反對することは『社會制度の基礎』を危うくすることであり、また從つて『朝憲紊亂』である。といふのが判決書に示されたところの、日本の司法機關の代表的の態度であつた。かくして資本主義は日本の『國體』となり、『國家の基礎』となり、そしてまた同時に『朝憲』となつた。日本における資本主義の發達が如何に目ざましいことであらう! 過ぐる十數年の間は實に資本主義は萬々歳であつた! 人々はみな資本家となるために生きてきた。資本家は『見えざる王(インビジブル・キング)』であつた。

五

エンゲルスのいつたことは眞理であつた。資本主義の未發達の狀態は『資本主義的生産方法の廢止のために』熟してゐない狀態であつた。しかしエンゲルスの言葉は次のごとくに書き換えることによつて一層適切ではないであらうか。資本主義の發達の狀態は資本主義的生産方法の廢止のために熟した狀態であると。われ〳〵はこのことの眞理であるか否かを見るために世界の近狀とそして日本の現狀とを少しく考へて見ることが必要である。

六

私は既に第一インタナショナルの失敗の後に國際社會主義が第二インタナショナルとして復活されたと述べた。第二インタナショナルの復活されたのはフランス大革命の百年紀念祭の時であつた。獨逸からはリープクネヒトやベーベルやフォルマア

やベルンシタインやクララ・ツニトキン等の諸名士が、英國からはケーア・ハアデエや、ヂヨン・バアンスや、エリイナア・マルクスが、そして白耳義からも、オーストリアからも、スペインからも、和蘭からも、伊太利からも、ロシアからも社會主義の戰士が巴里へと集まつた。この會議は一八九一年、九三年、九六年、一九〇〇年、一九〇四年、一九〇七年、一九一〇年と引續いて開會された。そして世界戰爭の將に起らんとする時に、一九一四年七月に、ブラツセルにおいて大會を開いた。そしてハーゼは獨逸を、ヂヨウレスはフランスを代表して、戰爭反對の演說を試みた。しかし第二インタナシヨナルは遂に戰爭を防止することができなかつたのみではなしに、ブラツセルの非戰論としてのハーゼはライヒスタハにおける主戰論者であつた。ヂヨウレスは間もなく何ものにか殺された。各國の社會主義者はみな『愛國者』となつた。或は愛國者となるべく餘儀なくされた。第二インタナシヨナルもかくのごとくにして事實上死滅したのであつた。その後第二インタナシヨナルは形式上瑞西において回復されたにしても、それは氣息奄々の第二インタナシヨナルであつた。かくのごとくにして第二インタナシヨナルは世界大戰とともに事實上崩壞してしまつたのであつて、社會主義の反對者は、第一インタナショナルの失敗の時と同じく、萬國社會主義は死滅したと喜んでゐたのである。しかし第二インタナシヨナルの死滅は社會主義そのものの死滅ではなくして却つて眞實なる社會主義の復興であつたこそ社會主義の敵にとつて不幸な事實であつた。第二インタナシヨナルの衰頹は社會主義の死滅ではなくして社會主義の過激化であつた。卽ち第二インタナシヨナルの末期において、第三インタナシヨナルとしてのモスコウ・インタナシヨナルが起つた。モスコウ・インタナシヨナルは一九一九年一月廿四日レエン、トロツキイの名によつて召集されたものであつた。彼等は『世界の共產主義者』に訴へたのである。その結果は一九一九年三月の第一週日に、クレムリン宮殿において第三インタナシヨナルが成立したのである。第三インタナシヨナルは『共產主義者インタナシヨナル』であり、ボルシエヴヰキ・インタナシヨナルであり、從つて社會主義の過激化の傾向を代表してゐるものである。ロシア・ボルシエヴヰキは勿論、獨逸のスパルタカス、伊太利の社會黨、フランスのロリオ黨、英國の社會主義勞働黨、米國のI・W・W・ノルウエーの社會民主黨なぞ合せて約四十ばかりの各國の社會主義團體がこれに加はつてゐるのである。そしてモスコウ・インタナシヨナルには加はらないにしても、獨逸の獨立社會黨のごとき、英國の獨立勞働黨のごとき、瑞西の社會黨のごとき、

有力なる社會主義團體は更に第四インタナショナルの組織に着手してゐるといふことである。だから第二インタナショナルの衰頽は決して社會主義の衰頽ではなかつた。世界大戰はあらゆるものをその渦中に投じたがごとくに社會主義をもその渦中に投じないではゐなかつたにしても、そしてフランスにおいてはこれがために近代における最も偉大なる社會主義者であり、同時にまた最も偉大なる人格であつたヂョウレスを失ひ、獨逸においてはカール・リープクネヒト、ロオザ・ルクセンブルヒとともに多數派社會黨がその社會主義の精神を失ひ、英國においてはマクドウナルドやスノーデンが議席を失ひ、そしてヘンダアソンでさへ一時議席を失つたにしても、それはたゞ社會主義運動の勃興のための犠牲としか思はれないほどに、世界大戰は、各國勞働階級の社會主義的精神に鞭うつの大なる動機となつてゐるのがわれ等の現前の事實である。ロシアはいふに及ばないであらう。ロシアのボルシェヴキキは今日まで幾度となく殲滅を傳へられた。レニンが死んだ！　トロツキイが逃げた！　こうした新聞電報をわれ／＼は幾度讀まされたことであつたらう。日本の有力な一新聞は『レニン逃亡、トロツキイ殺害』といふ電報――それが『特電』といふ威厳のあるものであつた――を喜びに滿ちた態度をもつて號外の形において勢ひよくわれ／＼に讀ませてくれた。しかし資本主義の新聞紙によつて幾度となく『殺害』されたレニンもトロツキーもロシアにボルシェヴキキ・レヂームを施いてから既に滿三年にならうとする。この間に英佛の資本主義はポーランドの幽靈を使つて、日本の資本主義的軍國主義は東方から、相呼應してボルシェヴキキの破滅のためにどれだけの人命と財力との犠牲を拂つたか知れないにかゝわらず、ボルシェヴキキの死滅がたゞ『新聞紙上の死滅』に止まつてゐることは各國の反動主義者に如何に深く癪の種であることだらう！　獨逸においては兎も角多數派社會黨が一度政權をとり、今日においてもそれと獨立社會黨との提携ができさへすればほゞ政權獲得の力をもつてゐる。オーストリアにおいては、曾つて一八八九年にこの國の社會民主黨を代表して巴里に使したアドラア博士が一九二〇年には全國民を代表してヴェルサイユに使したことは人々のよく知つてゐるところであらう。フランスにおいては、一九一九年の總選擧において社會黨はその勢力を失墜したにしても、それが戰爭熱の反映であるに過ぎなかつたことは何人も拒むことはできないであらうし、また社會主義の變節者として著名なフランスの今日の首相ミルランは彼れ一流の反動的政策によつてC・G・T・を不合法のものとして撲滅しようとしつゝあるにもかゝわらず、それが何等の效果を

も與しなかつたことは既に證明された事實となつた。社會主義は米國には適しないといはれた其米國においてさへI・W・W・運動が此數年來顯著なる發達を遂げたことは目を蔽ふてゐる人々のみ知らずにゐることのできる事實となつた。また社會主義の敵として自ら標榜してゐる米國近代の勞働運動の大なる、そして反動的指導者としてのサミユエル・ゴムパアスの死物狂ひの努力にもかゝわらず、A・F・L・が社會主義化しつゝあることは目立つた變化である。英國においては勞働黨が依然勞働運動の重要な一中心であるが、勞働黨は今やその敵としてのチヤーチル・ロイド・ヂヨーヂのデマゴーグが冒つてゐるとほり疑ひもなく社會黨である。そしてこの社會黨としての勞働黨の天下が近づきつゝあることは、補缺選擧の見事なる勝利によつても、またチヤーチル・ヂヨーヂ一派の狼狽と狂燥とによつても、明らかに示されてゐるところである。『共産黨宣言』の作者は嘗つてその宣言の冒頭において『共産主義のスペクトル』がヨオロツパのうへにかゝつてゐるといつたことがあつたが、そのスペクトルは今や世界のうへにかゝつてゐる。そして今また再び日本のうへにもこの『スペクトル』は現はれようとしつゝある。『日本社會主義同盟』の成立がこれである。

七

かくのごとき世界の形勢にもかゝわらず、日本の資本家とそのスポークスマンとしての政治家にとつては過ぐる十年は實に幸福な十年であつた。彼等は何ものの妨害もなしに、また何ものの『不埒』な平和の攪亂者もなしに、過ぐる十年を思ふ存分に振舞つてきた。彼等は政治上の權力をその掌中から離さなかつた。新聞紙は彼等のために便利な『輿論』を製造してくれた。そして社會主義は既に死んだとばかり思はれてゐた。しかし炯眼な人々はこの資本家とそしてそのスポークスマンとしての政治家や新聞紙の『幸福』を目擊しながらマルクスの言葉を思ひ出さないではゐられなかつたであらう。『彼等は自ら穴を掘つてゐるのである！』――彼等は自らの『幸福』によつて彼れ自らを埋めるところの穴を掘つてはゐなかつたであらうか、といふことをわれ〳〵は考へずにはゐられない。この『幸福』なる十年の間に日本の富は著るしい勢ひをもつて增大したし、大工場が盛んに出來たし、また從つて賃銀勞働者が激增してきた。その間に世界的思想の影響はわれ〳〵の胸にも反響なしではゐなかつた。就中、世界大戰を機會としてわれ〳〵の思想的生活が非常なる急速度をもつて世界的となつたことはわれ〳〵の生活の

將來に來るべき、或は今ま正に來りつゝある大なる變化の、導きであつた。われ〳〵の思想生活における最初の世界化はデモクラシーの思想とともにきた。そのデモクラシーの思想は颶風のように全國の津々浦々をまで捲き込んで行つたかのように見えた。そのデモクラシーの颶風は最初は單なる政治的デモクラシーであつた。デモクラシーの最初の戰士はデモクラシーとは單なる政治的のものであつて、議會とか政黨とか投票とかいふことのうへにのみ存在するもののように說いてゐたのであつた。かくのごとき狀態はたゞ軍閥のためにのみ不幸であつたに過ぎなかつた。資本家のためには、その一切のスポークスマンのためには、幸ひなことであつた。彼等の『幸福』なる十年間が『デモクラシーの讃歌』によつて基礎づけられるかのように見えてゐた。『黎明會』は實にこの時代を紀念すべき團體であつた。しかし事態は決して少數の人々のみが永久に『幸福』を貪ることを許してはゐなかつた。政治的デモクラシーの思想はこゝに一轉して社會的デモクラシーの思想となり、そしてまた產業的デモクラシーの思想となりつゝあるからである。過去一年有餘の間は、日本の歷史上における如何なる時代においてよりも社會主義思想の勃興した時代であつた。この時代にはたゞの一つの社會主義團體も許るされてはなかつた。明白に社會主義者であると思はれる人々までが決して自らは社會主義者であると名乘つてはゐなかつた。また社會主義の宣傳は、事實上宣傳でないことまでも宣傳として、刑罰と發賣禁止とをもつて迎へられた。それにもかゝわらず社會主義の思想は何ものも押ゆることのできないすさまじさをもつて勃興した。著名なる一大學敎授は社會主義研究とそして同時に宣傳のための有力なる連續刊行物を發表して多くの社會主義についての知識なき人々を社會主義へと導いた。都下の幾多の有力無力なる諸雜誌は爭ふて社會主義者の論文を載せた。諸大學の政治學、經濟學または社會學の諸敎授はわれ劣らじといふ勢ひで社會主義と勞働組合とについての長たらしい講釋に忙殺される有樣であつた。先づ上杉博士の國體論が不流行の標本となることによつて大學における政治學の基礎が一變しつゝあつた。マルクス經濟學の勃興によつて正統派經濟學の基礎が動搖してきた。殆んど凡ての大學生が社會主義の諸雜誌と書物とを手にしたであらう。『皇室中心社會主義』といふものさへ現はれた。高畠素之君一派の『國家社會主義』もこの間に現はれた。惡きもの、善きもの、取りまぜて如何に多くの社會主義の書物が刊行されたことであつたらう。社會主義の天國が近づきつゝあると思はなかつた人が幾人あつたであらうか。嘗つて英國の政治家ウヰリアム・ハアコー

トは一八八〇年代以後の英國における社會主義思想の勃興に當つて、われ〳〵は今や悉く社會主義者であるといつたことがあつた。そのハーコートの言葉が想ひ出されるほどに、われ〳〵は過去一年有餘を社會主義の空氣のうちに呼吸してきたのであつた。この空氣が何等かの形において、社會主義者の團體を要求してゐたのだといふことに對し、誰れ人かよく異議を唱へることができるであらうか。『内外の形勢は、何等かの形に於ける團體の出現を迫つて居ります。日本社會主義同盟は斯やうな形勢と機運とのうちに自づから生れたものであります』——こういふ宣言とともに『日本社會主義同盟』の生れたことは蓋し事態をありのまゝに押しすゝめたものであるといはなくてはならないであらう。然り政治的デモクラシーの思想の普及において『黎明會』が生れたごとく、社會主義思想の普及の産物として『日本社會主義同盟』が生れたのである。だからこの團體の生れたのには何の無理もなかつたのであつて、この團體の發起人としての、堺利彦、山川均、大杉榮、麻生久、赤松克麿、荒畑寒村、大庭柯公その他の諸君はたゞこの團體の誕生を助けたアカアシヤアであつたといふことを、われ〳〵は先づ承認しなくてはならない。

八

『日本社會主義同盟』が如何なる種類の團體であるかは、今日のところでは、それがたゞ社會主義者の團體であるといふことの以外には、正確には解らないことである。しかしこの團體の特質は、この團體が『廣き意味』においての社會主義者の團體であるといふことである。このことは發起人の諸君によつて發表された宣言書の文面に記るされてゐるところでもあり、またその發起人の顔觸れによつても知られるところである。この發起人のうちには堺利彦君のようなマルキシストもあるし、大杉榮君のようなサンヂカリストもあるし、また麻生久君のような勞働組合の指導者もゐる。そしてわれ〳〵の知らない人のうちに、ギルヅマンも居るかもしれないし、ボルシエヴヰキもゐるかもしれない。その何れにしても、この團體が數種の社會主義の異れる思想系統を包容してゐることは明白であるし、またこの宣言書によつて見れば今後においても各種の流派の社會主義者が參加するであらうといふことは想像に難くない。たゞこゝに奇異に感ずることは國家社會主義者として、マルクス『資本論』の飜譯者として著名なる高畠素之君並にその一派の人々の顔觸れの見えないことである。この點から見ると、『日本社會主義同

盟』はその發起人の宣言のうちに『社會主義のうちに種々なる思想傾向のあること』を承認し、そして『廣き意味で、總ての社會主義者の包容を期する』といつてゐることは次の二つの條件においてのみ滿たされることであると見なくてはならない。その一つは國家社會主義は社會主義でないといふことである。勿論、ビスマークの所謂國家社會主義は社會主義の分派のうちに入れることはできないであらう。しかし高畠素之君の國家社會主義がビスマークのそれと同一であるとは思はれないところである。尤も高畠君の周圍には、その國家社會主義が如何にも反動的なものとしか思はれないような思想の傾向を示してゐるものもないとはいはれないにしても、高畠君自らはこの國家社會主義をナショナル・ソシアリスト・パアティと稱し、そしてそれがエッチ・エム・ハインドマンのそれから名づけたものとなしてゐることを記憶しなくてはならない。縱令今日の英國においては、ハインドマンよりも、パウルやマックマナスや、マアフヰイ等の方が、より多くマルキシストとしての權利を主張することができるものであるにしても、ハインドマンがマルキシストであること、そして彼れのナショナル・ソシアリスト・パアテイが社會主義黨であることは誰れ人も否認することはしないであらう。私は高畠素之君の國家社會主義がハインドマンのそれと全然同一であると思ふものではないが、『廣き意味』において高畠君の國家社會主義が社會主義の一派であることは拒みがたいことであると思はれる。第二の條件は高畠君自らがこの種の團體に參加することを欲しなかつたであらうといふことである。このことはありうることである。恐らく後者の事情からして高畠素之君の名が『日本社會主義同盟』の發起人のうちに發見されなかつたことであらう。また後者の事情を考へてのみ、『日本社會主義同盟』が『廣き意味』においての社會主義團體であるといふことがいひえられるところである。

九

廣き意味においての社會主義の諸系統を一團體の共同意思に統一することは必ずしも不可能なことではないにしても、それには非常な困難の伴つてゐるものであることは社會主義の歴史がよく證據立てゝゐるところである。第一インタナショナルの崩壞がマルクス派とバクーニン派との爭ひの結果であつたことはわれ〳〵が社會主義の早き時代の歴史において數へられたところであつた。この教訓はたゞに社會主義と無政府主義とを分裂させたに過ぎないといふ人があるかもしれない。しかし社會主義の歴史は單に社會主義と無政府主義とが分裂することを示

してゐたばかりではなしに、フランスのサンヂカリストは斷乎として社會黨との提携を拒絶した。否な社會主義自身のうちに、ミルランの入閣事件がフランスの社會黨をゲード派とチョウレス派とに分裂した。其分裂は一九〇四年に統一されたにしても、更に新らたなる社會主義團體が生れてゐる。急進社會黨のごとき、無所屬派社會主義のごときはこれである。獨逸においても世界大戰は社會主義者を妥協しがたき二つの團體に區別した。そして國際社會黨の舞臺において、ゲードとヂョウレスとがフランスから出でゝ、ともに相敵對して戰つたがごとく、多數派社會黨と獨立社會黨とは國際的にもまた相戰ふ二つの社會主義團である。米國においても、世界大戰は社會黨をヒルキット等の一派とスパルゴウ等の一派とに分けた。英國においては、英國社會黨、大英國社會黨、國民社會黨、ナショナル・ギルツ・リーグ、獨立勞働黨、社會主義者勞働黨、フエービアン協會などが對立してゐるのである。かくのごとくに社會主義の分立は各國に於ける顯著な事實であつて此分立は主義のうへにおいてとともにまた各種の事情によつて成立することである。英國においては嘗つてウヰリアム・モリスの時代（一八九三年）に、社會民主主義聯合と、フエービアン協會と、ハムマアスミス社會主義者同盟との間に共同宣言を發表するために協議會を開いたことがあつたが、モリスの書いたことはバアナアド・ショウの意に滿つる筈はなく、またハインドマンの立場とショウの立場とは遂に一致することのできないものであることが證據立てられた。否なウヰリアム・モリスの傳記を讀むものは彼れの十何年かの社會主義生活のうちにおいて既に三つの社會主義團體を創立しなければならなかつたことを知るのであらう。況んや一つの團體のうちにマルクス主義、修正主義、サンヂカリズム、ボルシエヴヰズム、I・W・W・主義、ギルド社會主義のごとき諸系統の社會主義または社會主義的思想を包括することには大なる困難が包まれるに決まつてゐることであつてかくのごとき種類の團體は次のごとき結果に、到着するであらうと思はれる。その第一は分裂である。分裂の狀態は既に述べたところに附け加へていふことの必要がないであらう。第二は一團體内部におけるある一派の優越である。例へば米國のI・W・W・團のうちにおいては、最初は政治行動もまた產業的行動とともに許るされてゐたところであつたが次第に直接行動派が勝利を占めてしまつた。英國の勞働黨なぞもいろ〳〵な分子の寄合ひ身上であるが、そは次第に社會主義の征服するところとなつてしまつた。フエービアン協會のごときは、『社會主義者』の團體であつて別にマルキシストを排斥するといふわけでもなく、ギルツマンを入

れないといふわけではないにしても、それは自然に國家社會主義(コレクチヴィスト)者の團體となつてしまつたのである。第三の結果は最弱の分子が他の諸分子を引廻す狀態である。即ち共團體内における最右翼派が事實上團體の方針を決定するといふことである。英國の勞働黨の初期の歷史はこの事實を證據立てゝゐるのであつて、一團體内の各派が協調を保つ場合は主としてこの第三の狀態であると見なくてはならない。『日本社會主義同盟』の前途がこの三つのものの何れに該當するであらうかは何人にも豫言のできないことであるが、その今日の狀態においては、第三の狀態に該當すると見るのほかはないであらう。即ち『日本社會主義同盟』は『廣き意味』においての社會主義者の團體であるとともに、その團體としての意思と活動とは、そのうちに如何なる左翼派を包容するにしても結局そのうちの最右翼派の主張に一致するのほかはないであらう。從つてこの『日本社會主義同盟』の團體としての立場はそのまゝの分子が包容されてゐる限り、決して過激なものまたは急進的なものではないであらう。

十

しかし日本社會主義團體が社會主義の左翼派であると右翼派であるとにかゝわらず、この團體の前途には幾多の困難が橫はつてゐるのである。官權の壓迫と資本家の壓迫とがこれである。世界の何れにおいても、社會主義の諸先輩は多くの困難と戰つてきた。就中常に官憲との壓迫と戰はなければならなかつた。しかし日本の社會主義者のごとき困難と迫害とをうけなければならないものもまた少ないであらう。私は近頃になつてベルフオード・バックスの回顧錄（E.B.Bax, Reminiscences & Reflexions of a Mid & Late Victorian. 1918）を讀むとができたがこの回顧錄を讀むものは英國における社會主義者が如何にも自由であり、幸福であつたことを思ふであらう。實に英國の社會主義者は暴動を指導したことのごとき特種の場合を除いては、最初から官憲からの壓迫らしい壓迫をうけてゐなかつた。社會主義者は雜誌にパンフレットに書物に集會に、そして屋外集會でさへ『ドツド街の勝利』の後においては殆んど官憲からの『オブストラクション』をうけることはなかつたのである。これに反してロシアのごとき獨逸のごとき諸國家における社會主義の先驅者の困難は同情に價ひするものである。レニンやトロツキイがロシアに居られなかつたことや、カール・マルクスが『ライン新聞』以來如何に多く獨逸の政府から迫害されたかはこゝに物語ることの必要はないであらう。ベルンシタインのごとき穩和社會主義者と雖も尙ほその故國を追はれなければならなかつ

た。一八七八年の獨逸の社會黨鎭壓法にこゝに詳らかに述べるためにはあまりに多く知られてゐる。それは『社會民主主義、社會主義または共産主義』の何れによるとを問はず、苟くも『國家または社會の現状を打破することを目的』とする團體や、集會や文書や、示威運動や、定期刊行物やの一切を禁止したものであつて、社會主義運動は一切不可能にされた。そしてその法律の出た最初の第一日に伯林から六十七人の社會主義者が追放された。『友よ！ われ等の妻と子供とを記憶してくれ』——こういふ言葉を殘して住みなれた伯林を追ひ拂はなれければならなかつた六十七人の社會主義者に誰れ人か憎しみを感ずることができるであらうか。しかしこの狀態は決して獨り獨逸の社會主義者のみが遭遇した立場ではなしに、日本における多くの社會主義の先驅者が同じやうに遭遇した立場であつたし、また新に生れようとしつゝある『日本社會主義同盟』の遭遇せんとしつゝある立場である。既に『日本社會主義同盟』はその成立に先つて文書を沒收されたと報ぜられてゐるのである。日本の現在の法律においてはこの種の團體と運動とに迫害を加へることのできるあらゆる規定が完備してゐるのであつて、演說會の禁止または解散、文書の發賣または頒布の禁止は朝飯前のことである。治安警察法第八條はこの種の團體を『安寧秩序』を保持するといふ名目のもとに內務大臣の一命によつて禁止することの絕大なる權能を定めてゐる。此權能は曾つて伊藤內閣によつて使用された。桂內閣においても使用された。『平民宰相』としての原敬氏が如何なる態度に出づるかもほゞ想像のできることである。然り、社會主義壓迫の不名譽な歷史が『平民宰相』によつて再び繰返されてゆくことであらう。しかしかくのごとき政策は一、正しい政策であらうか。二、それは果して目的を達するであらうか。或は果して賢明なる政策であらうか。私はこの問題について少しく意見を述べて見たいと思ふ。

十一

第一に社會主義團體は禁止しなければならない正當の理由があるかどうかを考へて見たい。これを法律上の解釋から見ると、治安警察法第八條には次のごとき規定がある。『第八條、結社にして安寧秩序を保持する爲め必要なる場合に於ては內務大臣はこれを禁止する事を得』と。從つてこの規定は如何なる場合にも禁止することを內務大臣の責務としてゐるのではなくして、それが安寧秩序を保持するうへに必要である場合にも內務大臣はそれを禁止するとせざるとは自由であるから、凡て結社の禁止は法律の要求ではなくして政權の掌握者によつての政策

の如何の問題に歸着するものである。また安寧秩序が如何なる意味を有するかは法律の專門家に任せるであらうが、安寧秩序の意味にして、若し『廣き意味』においての、或は一切の社會主義思想と兩立のできないものであるといふ人があるならば、彼等の安寧秩序とはたゞ特權階級の安寧秩序である。國家の安寧秩序はかくのごとき現在の政權または經濟的權力の所有者の特權狀態であるといふことができるであらうか。否な法律においての安寧秩序とは全然抽象的のものであつて、國家にして若し何等かの階級の機關でないとするならば、その國家の安寧秩序は決して一階級の特權の擁護のために利用せられてはならないのである。また若し安寧秩序の意味にして社會または國家の『現狀』といふ意味に解する人があるとするならば――資本主義の政治家は常にかくのごとくに曲解してゐるのである――社會または國家の現狀とは何ぞやの問題に逢過するであらう。そしてその問題は詭辯と虛僞とによらずしては說明することのできないものである。何となれば國家または社會の諸狀態はその權力の所有者とともに常に流動するものであり、この流動はたゞ國家または社會の死滅によつてのみ除くことができるであらうからである。また若し安寧秩序の意味を『現狀』といふ具體的のものとして考へられるものであるとするならば、私はさういふ人達に問ひたい。産業革命は安寧秩序を紊亂したものではなかつたかと。それは政治的にも社會的にも、中世的な安寧と秩序とを轉覆するに至つてゐるからである。それゆえに安寧秩序の意味を國家または社會の現在の勢力の分布または制度だと見るものは、この制度や勢力の最も顯著なる顚覆者としてのヂヨン・ケエやアークライトや、クロムトンや、ヂェームス・ワットや、ハアグレーブスのごとき大發明家を斷罰しなければならないといふ滑稽な自家撞着に陷らなくてはならないであらう。それゆえに資本主義の政治家が唯一つの賴みとする法律の立場からしても、社會主義團體を禁止することのできる正當な理由は、如何に妥協していふにしても、その社會主義團體が國家の成立を破壞することを目的とする團體でない限り、國家がこれを禁止すべき何等の理由もありえない。抑も社會主義の發生したのは資本主義成立の結果であつて、資本主義の存在するところには必ず社會主義が存在する。世界各國の事實は何ごとよりも雄辯にこの事實を物語つてゐるではないか。日本においても既に資本主義が輸入され、そして既に大なる發達を遂げてゐるのであるから、こゝに社會主義の存在することは、その主義の正不正の問題ではなくして、不可避の事實である。曾つて福田博士は社會主義は資本主義のアンチドートであるといつたこと

があるように記憶してゐるが、社會主義は、少くとも、資本主義のアンチドートとして解放されなくてはならないのである。若し一方に資本主義を承認しながら他方に社會主義を禁止しようとするならば、その人々は、自ら今日の國家が資本主義の機關であることを天下公衆の前に承認するものであるといはなくてはならない。

十二

第二に私は社會主義の禁壓が可能なことであるかどうかの問題を考へて見たい。この問題は私が資本主義の存在するところには必ず社會主義が伴ふものであるといつたことによつて盡されてゐるのであるが、私はこゝに一つの實例によつてもう少し布衍して述べて見たい。世界において社會主義を禁止せんとした最も著名なる實例はビスマークの社會黨鎭壓法である。この法の大體の内容については既に述べてきたからこゝに繰返さない。こゝにはこの法律が如何なる效果を示したかを述べるに止める考へである。社會黨鎭壓法の成立は一八七八年の十月であつた。この法律は社會主義者に對して五百マークの罰金と三ケ月の禁獄とをもつて報いたものであり、社會主義運動はこの法律のもとにおいて表面上は全然不可能のこととなつた。そして社會主義の諸首領は彼等の黨員に對してひたすらに隱忍をすゝめた。「工場における友よ！挑發されることなかれ。……反動は勝負に勝つために暴動を求めてゐる」――それが社會黨の首領等がその黨員に與へた警戒の言葉であつた。そして形のうへにおいて社會主義團體は獨逸には存在しないこととなつた。フオヴエルツと他の二つの有力な機關新聞とは最初の一週間のうちに禁止された。二ケ月の間に全獨逸を通じて社會主義の機關新聞はたつた二つしか存在しないこととなつた。伯林においても、ハンブルヒにおいても、ライプチヒにおいても、マインにおいても、社會主義者は相次いで追放された。ビスマークとそして多くの反動的政治家とは社會主義はこれによつて鎭壓することができたと思つたであらう。しかし淺慮なる政治家よ！彼等が社會主義は鎭壓されたと思つてゐた時に、彼等はたゞ彼自らを埋めるための穴を掘つてゐた愚昧なる政治家達であつた。然り、彼等が社會黨鎭壓法のうへに彼等の階級的安寧と秩序とが維持されると思つてゐた瞬間に、シユロス・ワイデンにおいて、一八八〇年の社會主義者の秘密會議のあつたことは、彼等の注意深い探偵さへも氣の附かないところであつた。一八八三年においても、一八八七年においても、秘密會議は、見事に行はれてゐたのであつた。そして社會主義の諸新聞紙が禁止された

時にわれ等は革命的の宣傳者としての「デイ・フライハイト」がロンドンにおいて、そして「ゾチアルデモクラート」がツーリヒにおいて、何れも社會主義新聞の左翼化として現はれたことの事實を見た。そして鎭壓法のもとにおける社會主義者の三つの會議における特殊の現象がこれまた社會主義の左翼派の出現、そして終に無政府主義者の出現の事實であつたことをわれ〳〵は正直な歴史上の記錄によつて告げられてゐるのである。またこの鎭壓法のもとにおける二つの選擧――一八八四年及び一八八七年――においての社會主義の投票の增加は、嚴肅にこの法律の存在が、社會主義の存在に油をそゝぐものであることを證據立てた。われ〳〵は獨逸にその例を求めなくても、日本における歴史がこの事實の疑ひなき證據であることを知ることができる。卽ち日本の社會主義は明治卅年代においては、基督敎社會主義の臭味を帶びてゐたものであつたにかゝわらず、政府者の慘忍なる壓迫の結果は、社會主義が次第に矯激の傾向を示すのを見た。幸德事件なるものが實にこの過激化の紀念塔であつたのではないであらうか。そしてまた社會主義者の故をもつて日本の故國に止まることの許されなかつた片山潜が日本人としてのボルシエヴキキ――第三インタナショナルの參加者であることの事實が同じくわれ〳〵の前に與へられたよき敎訓の一つではないであらうか。私は凡ての國民に對するとともに日本のあらゆる支配階級と、その支配階級のスポークスマンとしての政治家と、そして司法機關とに告げていひたい。國家の基礎の下に、穴を掘りつゝある人は、實に一切の壓迫者であると。また私は社會主義を追ひのけようとする人々に告げていひたい。社會主義を追ひ拂はうとする人達は、その目的を達する唯一つの方は、たゞ資本主義を追ひ拂ふことがあるのみであると。

十三

グラッドストーンは社會主義は獨逸製のものであるといつたことがあつた。しかし資本主義の祖國としての英國こそ實に社會主義の祖國であつた、社會主義は今や世界のあらゆる文明國に存在する特質である。それは最早や何人もこれを拒むことはできない。われ〳〵は最早やビスマークの失敗を繰返すべくあまりに賢明であつた。――社會主義は少くとも解放されなくてはならぬ。（大正九年八月十六日）

我國社會公益事業の現狀を難ず

法學博士　堀江歸一

社會公益事業は何か

何を以て社會公益事業とし、又何を以て然らざる事業とす可きものであるかと云ふ點に就ては、人の見解に依て、自ら相違することを免れないであらうが、私は立論の便宜上、國民として、又市民として、我々が團體生活をする場合に、或る物資若しくは或る勤勞の規律あり、又繼續する供給を必要とし、其供給が斷續するやうな狀態では、殆ど團體生活の基礎を危うするに至る事業を以つて、社會公益事業とし、一方に物資勤勞の供給に斷續があつても、之に堪へられるとか、代用品の供給で補充が付くとか云うやうな場合には、其事業を以て、社會公益事業と認めないことゝする。此標準に基いて、事業を區別すると、鐵道郵便電信電話の如き、電燈電力瓦斯水道市街鐵道の如きものが社會公益事業であることは、論を俟たないのであつて、前者が國家に依て後者が都市に依て、夫れ〳〵所有經營されて居るが如き、要するに其社會公益事業である事實に關聯するものと云はれなければならぬ。唯前者が國有であり、後者が公有であると云ふ相違の存するのは、一方が國家全般に利害の關係を持つことに對して、他方の利害關係が一都市に止まることの結果であつて、其社會公益事業たる本質に就ては、何等區別す可き所はない。現に我國に於て多年、民有民營の下に置かれて居つた鐵道が國有國營と爲り、郵便電信電話は其創設時代から國家が經營を擔當して、私人企業者をして指を染めしめることを許さなかつた、而して大都會に於ては、瓦斯電燈の市營は行はれて居らないとしても、水道は何處でも市營であり、電車鐵道も亦市營の風潮の動かす可からざるものゝあるのは、是等の事業が社會公益事業であり、而して社會公益事業は國家又は都市と云ふやうな公共團體の經營に託するのを以て、至當とする議論に據つた次第であると云はなければならぬ。

社會公益事業と自由競爭

固より歐洲諸國に於ても、又我國に於ても上記諸種の事業が民業として經營されて居つた時代はある。民業として經營される事業が能く社會全體の利益に調和すると云ふのは、自由競爭の作用に信頼するを得るからである。例へば一の當業者が物資勤务の供給を過度に制限したり、又は其價格料金を法外に引上げたりして、正常點以上の利潤を得ることを謀つたならば、他も資本を有し、事業の經營に才能を備へて居る者は此狀態を默視しては居らない、正常點以上の利潤を收めやうと云ふ考から、盛に競爭事業を起して、結局物資の供給を增加させれば、其價格をも低落させる。當業者が如何に横暴を逞うしやうとしても、競爭の自由は彼等に之を許さない、而して其競爭は啻に內地市場に行はれるばかりでなく、通商自由の認められて居る今日に於ては、國際間を通じて行はれる。旣に此道理の存する以上は、國家は社會公益事業と國民經濟との間に於ける利害を調和する上に於て努力したり、配慮したりすることを要しない、唯自然的調節の行はれんとする道程に存する障害物を除却するを以て、足れりとすると云ふことが一般の信念と爲り、斯くて社會公益事業を私人の經營に委して、顧みなかつた次第である。

然しながら社會公益事業に對して、自由放任、自由競爭の政策を取つたならば、如何なる結果を生ずるであらうか、其結果の不良であつて、上記の信念に裏切ることは、事實の證明する所と爲つた。蓋し社會公益事業は其規模の大なる點に於て其經營される地域に制限の存する點に於て、國家又は公共團體の特許を有する點に於て、將た又巨額の資本殊に固定資本を擁する點に於て、獨占事業たる可き性質を持つて居るのである。時に國家又は公共團體の對獨占事業政策に於ける錯誤の爲めに、本來獨占事業たる可きものに、競爭が起つたとしても、競爭に基く經營上の困難は當業者を覺醒させて、事業の合同又は營業上の協定を實現し、無競爭獨占時代の舊態に復歸せしめるのである。東京市に於て、往年東京瓦斯會社と千代田瓦斯會社と合併したり、最近東京電燈會社と日本電燈會社と合併したり、市內の電車事業が電氣局に統一せられ、電氣局と東京電燈會社とが電燈料金や、電燈供給地域に就て、協定を守つて居り、米國諸地方の鐵道會社が所謂咽喉突き競爭（カツト、スロート、コムペテシヨン）と云はれるまで、劇烈な競爭を試みた後に、現在の賃率協定、貨物分配を主眼とするプールの時代に移り、倫敦に於て瓦斯會社がテームス河を界として、瓦斯供給の區劃を定めたと云ふやうな事實に徵したならば、自由競爭の原則を社會公益事業に應用して、國民經濟上の

利益を專ら目的とするのは、甚だ困難であつて、畢竟獨占の弊害を現出するに至ることを認めなければならぬ。或は自治體の監督で、獨占業者横暴の弊を抑制しやうとする議論があり、又一つの制度として、認められて居るやうであるが、官廳の判斷で、營利を目的とする營業者に事業の擴張を命じたり、料金の決定に干渉したりして、社會全體の利益に調和させやうとするのは、甚だ困難であつて、納税相容れざる結果を生ずることを免かれない、是れは日本の各地方で、會社の下に行はれて居る社會公益事業に對して、地方自治體の監督が如何なる狀態に置かれて居るかと云ふことを考へたならば、別に説明するまでもなく、諒解されるのである。

斯く論じ來つたならば、社會公益事業は其利益の及ぶ地域の如何に依て、其或るものを國有とし、他の或るものを市有とする理由を知ることが出來るであらう。今や英吉利では炭坑の如きも、石炭が國民生活に於て、最重要の燃料であり、其價格の確實、供給の豐富を要することゝ、炭坑に使役されつゝある勞働者の勞働條件を改善することゝ二つの理由に基いて、勞働黨の側から、國有の必要が唱道されて居る。如何なる程度まで、斯る提案が實行可能の性質を持つて居るかは、一個の問題であるが、國有計畫の適用され可き社會公益事業の範圍の擴張され

ることは、一つの注目に値する現象であると言はなければならぬ。

四 國有公有事業の成績

然らば斯く國有公有に移つた社會公益を舉げる諸事業は果して其目的とする社會公益に貢するを得たであらうか。英國にフエビアン社會主義者と稱せらるゝ一派の思想家がある。此等の者の主張する所は一方に國民的最小限度（ナシヨナル ミニマム）の政策を採用し、勞働時間を制限することに依て、國民に休息の最小限度を保護し、工場法に於ける勞働者の保健防災の設備を完全にして、彼等に國民的保健の最小限度を認め、國民教育の制度を勵行普及して、國民的知識の最小限度を國民全體に與へ、勞働組合の標準賃銀制度と國家の制定する最低賃銀制度とに依て、國民所得の最小限度を定め、而して一方に鐵道其他獨占的性質を有する事業は國家又は公共團體の手に移して、富の分配に於ける從來の不公正を除かうと云ふ諸點であつて、フエビアン協會なるものを組織して、此趣旨を世間に宣傳しつゝある。社會公益事業の國有又は公有が一國に於ける富の分配に如何なる影響を及ぼすものであるかは、フエビアン一派の主張に據つても、其一斑を窺ひ得る次第であるが、斯る議論は單に理論上に於て然るの

みであつて、實際上に於ては、其期する所を實現するに足らない憾なきを得ない。日本現在の事實に就て、之を見ると、我々は果して如何なる結論に達するであらうか。先年鐵道國有法の實行されるときには、政府は何を以つて私設鐵道を買收する理由に充てたかと云ふに、國有後に於ては全國に亘つて、運輸の系統を統一するとか、運賃を整理し、且つ之を低廉にするとか、未成線を敷設するとか、從來の鐵道行政に於て、國民一般の望んで已まなかつたことが國有鐵道の下に、容易に實行されるやうに、聲言されたのであるが、國有實行後相當の年數を經た今日に爲つて、既往を回顧したならば、果してどうであらうか。國有實行當時に聲言された所は多く實行されず、我々の目前には、設備の不充分なる運送力の遲鈍なる、而して物資輸送力の弱きに拘はらず、貨車運賃の獨り不廉なる鐵道を見るのであり、郵便電信電話の如きも、設備不良、勤勞不完全、料金不廉である譏を免かれない。殊に近來從業者に對する待遇の時勢に釣合はない爲めに、能率が劣等と爲つて、益々國民に不便を加へて居るのであり、又財政上財源を調達することの困難に制せられて、事業を擴張することも、當局者の希望に副はず、益々事業の規模をして社會の進運に遲さからしめるの嘆なきを得ない。現に近代的の大都會に就て見ても、同一市内に於ける電報の送達に數時間以上を要したり、郵便では一日以上の日時を費したり、電話の呼出は數分を待たなければならなかつたり、鐵道で貨物を託送するには、必ず豫期よりも遲れるもの、旅行することにしても、時間通りに到着することは、十中の八九まで見込みのないのと云ふやうな事實が一般に諒解されて居り、斯る運輸通信機關に見るを許さゞる間違が起つても、世間で別に當局者に攻撃を加へないと云ふまでに、神經が麻痺するに至つたのは、歎かざるを得ない所である。

國家が社會公益事業の經營に就て、斯う云ふ惡例を示して居る以上は、此國家の下で、公益事業を經營するに公共團體が正しき經營方針を取るが如きは、遂に望まれないことである。現に東京市で市民の最も多量に水を要する盛夏の候に、數日の晴天が續けば、水道は何分止め、飲料用の水は一切停止と云ふ水責めの狀態に市民を陷らせる、電車は停電と遲刻と立往生と、時に脫線衝突とを覺悟した上でなければ、乘ることが出來ず、朝夕乘客の混雜する時刻には、命懸けでなければ、乘れず、婦人小兒の如きは、殆ど蹈み殺されるばかりの憂目に遭うし、瓦斯は冬に爲れば、充分に配給されず、燈火用としても、熱用としても、力が足らず、電燈は裝置してあつても、何時停電するか、測り知れない爲めに、洋燈と石油とを用意して置かなけれ

へて居るに拘らず、何時其便宜を奪はれるかも知れず、又其供給の斷續的である危險に遭遇しつゝあるのである。偶々此點まで執筆した時に配達された大阪毎日新聞を讀むと、大阪市でも市營の電車鐵道は當初の計畫通り均一主義の料金制度を實行して、市民の便宜に副ふ考であつたのに、近頃電車が市の諸方に擴張されることゝ爲つてから、到底均一料金制度であつては、收支の均衡を求められない。隨つて料金制度を一變して、區域制度とすると云ふ議論を生じたが、區域制度にしたならば、料金は短距離の乘客に對して、比較的荷重と爲り、其負擔に堪へざる結果、自然彼等をして短距離の間を徒歩するの已むを得ざるに至らしめ、斯くて市民に對する都市交通機關の效用を沒却することゝ爲る恐があるのである。思ふに大阪市で區域主義の料金制度が採用されたならば、東京市も得たり賢しと之に倣ふことであらう。斯の如きは要するに市政當局者の方に、何處までも社會公益主義で、公益事業を經營し、以て市民全體の利益を擧げやうと云ふ熱心と誠意とに缺けて居る結果であつて、吾人の甚だ心寂しく感じる所である。

公益事業不振の原因

やうな誤まつた方針の下に、經營されて居り、社會公益事業と稱しながら、廣く國民なり市民なりに充分の利益を與へない、寧ろ與へ可き利益を局限して居る次第であるが、此狀態は是等の諸事業に於ける收支の計算上の關係が窮迫した結果として、生ずるものではない。私は今京都府下の一寓居に於て、此論文を起草して居るのであるから、詳細に各種の事業に亙つて、幾何の純益金を擧げて居るかを示すだけの統計を手にするを得ないのであるが、鐵道にしろ、郵便にしろ、電信電話にしろ、政府が其等の經營を通じて、若干の純益を收めて居るのは、明白の事實であつて、此點に於ては、普通のやうな營利事業と選を一にするのである。而して一方に政府が料金を高くして、事業に於ける便宜の普及されることを制限しつゝありとすれば、政府は事業に於ける獨占權を利用して、社會公衆が社會公益事業に對して期待しつゝある所に反對する所業を敢てするものと見なければならぬ。國家が官業を經營する場合に、私經濟的要求の下に、世間普通の利益を收めて然る可きものであるか、獨占權を利用して、普通以上の利益を謀つて、差支なきものであるか、其れとも利益の一部を擲つても事業の效用を廣く一般公衆に普及するのが正しいものであるか、三個の方針の選定に就て

は、種々の議論なきを得ないが、社會公益事業である以上は、

私は第三の方針の下に、經營され可きことを以て、最も事の宜しきを得たものと考へる。其れが日本では反對の事實が行はれて居つて、鐵道でも、郵便でも、電信電話でも等しく國家の收税機關に供されて居るのである。さうすれば料金の高いだけ、是等社會公益事業の利用は民衆の間に於て、局限されざるを得ないばかりでなく、現に日本の鐵道經濟などに、就て見れば、鐵道賃金の收入は設備經營に供される費用に比較して、三等乘客の拂ふ賃金から餘計に稼ぎ出され、一等乘客の拂ふ賃金の不足を此剩餘で補はれる始末である。果して然らば下層階級の人々は自ら餘分の負擔に當つて、上流階級の人々に割安の奢侈をさせて居る譯であつて、斯う云ふ反社會的事實の行はれて居るのは、吾人の默諾せざるを得ない點である。國家が公益事業の經營に就て、斯う云ふ範を垂れて居るとすれば、地方自治體が市の事業を經營する場合に公益の普及と云ふことよりも、私益の獲得と云ふことに重きを置くのは、當然であつて、日本では國營と公營との別を問はず、公益事業が私營事業の經營と同一の觀念で律される譯である。

勞働問題と官公營事業

外國勞働界の實狀を見ると、國家なり、自治體なりに屬する事業に於ては、民營事業に率先して、勞働者に對する條件を改善し、以て民間の雇傭を指導するの趣がある。倫敦に於ける公營事業が所謂公正賃銀條項(フェーヤ、ウエーヂス、クローズ)なるものを承認し、公營事業に從事する勞働者に對して、時勢の進步の要求するだけの待遇を與へたのは、餘程以前の事である。勞働移動の自由が認められ、一の事業から、他の事業へ仕事を移すことに就て、何等の障害の存しない今日、一の事業殊に多數の勞働者を定期に使役する公營事業で、勞働條件が改善されたならば、其影響が廣く他の諸事業に及び、是等諸事業の條件に改善を促す刺戟と爲ることは論を俟たないのである。然らば、此點に於ける日本の狀況は如何であるか。我國に於て國營事業や、公營事業が勞働條件の改善、勞働者の優遇に就て、模範を他に示すと云ふことは、薬にしたくも、之を見ることが出來ず、多くの場合に於ては、官權や公權の威力を藉つて、勞働者を窮地に陷らせることすら、憚らないのである。私は架空の言を弄して、官營事業や、公營事業を傷けやうとするものではない、此言論を爲すに就ては、動かす可からざる事實上の資料を備へて居るのである。昨年の夏頃東京砲兵工廠で、同盟罷業の起つた時に、官憲は如何なる態度に出でたであらうか、同盟罷業の始めに於ては、官憲

代罷業者に對して、非常に寛大な態度を示し、罷業者に對して何等の束縛を加へず、殆ど同盟罷業をして此行はれるに任せ、治安警察法第十七條の如きは、一時高閣に束ねられた趣であつた。然るに罷業が段々進行し、結局罷業職工の代表者と陸軍大臣と會見して、最後の妥協條件が成立したと爲ると、官憲は此翌日から掌を飜す如く、從來の態度を更めて、治安警察法の適用を始め出し、罷業の首謀者であつて、他の罷業者を誘惑煽動したとか、罷業者を結合させる爲めに、暴行脅迫を試みたとか云ふやうな嫌疑のある者は一網打盡の姿で、檢擧したのである。檢擧され可き犯罪があるならば、犯罪の起つたと同時に、檢擧す可きであるのに、此時には之を不問に付しながら、事後に處分すると云ふが如きは、官憲の勞働者に對する一種の詭計であつて、此一事を以てしても、官憲が勞働問題を解決し、又勞働者に臨む上に於て、如何に誠意を缺いて居るか、威壓一天張りで、勞働者を威服せしめやうとするものであるかの一斑を明にするを得るのである。

國家の、勞働者に對する態度の粗暴であるが如く、地方自治體の勞働者に對する態度も亦何等選ぶ所あるを見ないのである。私は此適例として、最近東京市電氣局に起つた勞働爭議の事實を擧げたい。此爭議の如きは、本來資本主たる電氣局が事を構へて、勞働者を挑發しやうとした趣のあるのを免かれない。即ち電氣局は此機會に於て、平生邪魔物扱いにして居つた交通勞働組合を叩き倒す考を懷き、着々之を實行したのは、爭う可からざる事實であつて、罷業の首謀者を解雇したのは勿論ブラック・リストを全國主要の工場に送つて、彼等の就業を妨げたと云ふことである。是れが全國に冠たる東京市政當局者の勞働問題に對する態度であつて、或は此態度は監督官廳たる內務省邊の政策に一致するものであるかも知れないが、國民公權を挾んで、勞働者の有す可き權利を蹂躙し、又彼等を迫害するものと認めざるを得ない。斯る有様では東京市に設けられた社會局と云ふやうなものが社會局と云ふ相當に立派な名を持つて居るに拘はらず、慈善救濟事業位で、お茶を濁して、此以外に何事をも爲し得ないのも、亦怪むに足らないのである。

私は勞働者に罷業權のあることを認める。隨て我國現行の法制に於て、罷業權を蹂躪する法規の存在することを以て、現代の恨事とせざるを得ない。然し將來幾ら罷業權が勞働者に與へられたとした處で、社會公益事業に從事する勞働者が此權利を濫用して、些細な爭議を解決する場合にも、罷業を敢てするやうな態度に出でたならば、物資なり、勤勞なりの斷續せざる供給の社會に保證される必要に矛盾する結果を生じ、國民とし

て、又市民としての團體的支障を來す次第であるから、社會公益事業に對しても、最も早き機會に於て、仲裁制度殊に强制仲裁制度を適用して、是等の事業に爭議を根絶する、少なくとも事業主勞働者間に爭議の起つた爲に、第三者たる社會公衆の生活に攪亂を及ぼすの弊害なきに至らしめなければならぬ。是れが社會公益事業の爭議に對して處する方法の理想的のものとして、私の懐抱して居る意見である。或は仲裁々判の制度は一片の規則や、條文ばかりで、成り立ち得るとしても、其の運用を圓滑にして、充分の效果を發揮せしめやうとするには、事業主の側にも、勞働者の側にも、産業の平和を尊重する公共的精神の存在することを必要とする。然るに我國に於て國營公營事業の當局者自身が進んで此精神の要求する所に反き、殊更に勞働者の團體運動を妨害し、敵討するやうな態度を持して、憚らないことは、私の甚だしく遺憾とする所である。

如何にして弊を除くか

社會公益事業が斯う云ふ狀態の下に、國民なり、市民なりに負擔を加へて、財政上に增收を謀る所の機關とは爲るが、此以外に社會全般に公益を及ぼす機關として、遺漏するもの丶多いのは、何故であるかと云へば、要するに我國に於ては公益事業の國有（Nationalization）なり、市有（Municipalization）なりは、既に行はれたが、更に一歩を進めて共社會有（Socialization）の行はれて居らないことを以て、重なる原因としなければならぬ。社會公益事業は其社會全體の用を爲す可きことの關係から、社會に屬する總ての人に依て、所有され、經營されなければならない道理であるのに、我國の公益事業を支配するものは少數の官僚であり、吏僚であつて、民衆は如何にしても自己の勢力に依て、各自の希望する所を公益事業の經營上に發現するを得ない。是れ即ち公益事業の經營が少數者階級に使用されるやうに間違つた方嚮に向はざるを得ない所以である。世間一般の樣子を見ると、昨今當業者の暴利收得を非なりとする感情は歐洲戰爭以來諸國に勃發し、一方にプロフキチヤーリング（Profiteering）なる新成語の生ずると共に他の一方には立法上の取締を必要とするに至つた。昨年二月二十七日倫敦中央會館に催ほされた國民產業會議で、指命した勞働組合代表者が勞働不安の原因併に救濟策に就て、調査を試み、近頃發表した報告書を讀むと、プロフキチヤーリングに就て、左の如き意見を述べた一節を見出すのである。

暴利收得が戰時空前の程度に於て、行はれたと云ふ信念の勞働者階級に懐抱せられて居ることは、勞働不安を惹起するに

至つた重大の原因の一であることを認めなければならぬ。殊に勞働者階級の消費する物資を通じて、暴利收得の行はれたことは、普通の人々に明瞭でない暴利收得よりも、人心に大なる刺戟を與へざるを得ない。

我國では民間の事業家の試みた暴利收得に對しては、政府で殆ど效果の擧がらなかつた暴利取締令を適用したり、諸外國とは殆ど比較に爲らない位の極微な税を戰時利益の收得者に課しただけであつて、是等以外に暴利收得者を取締ることに就ては、事前にも、事後にも何等施設する所はなかつた。此事は經濟行政上の見地から云つて、社會政策上の立場から見ても、緩怠の甚だしきものであつて、寺內內閣なり、原內閣なりの秕政の一つに數へなければならないが、更に一歩を進めて考へると、政府なり、地方自治體なりが今日幾多の公益事業を經營する場合に於ては、實に一個の暴利收得者に爲つて居るのである。政府が暴利取締に冷淡であつたればこそ、別に問題にも爲らなかつたやうなものゝ、若し此點に於て何か施設したならば、政府自ら其經營に屬する公益事業を通じて、暴利を貪りながら、民間の暴利收得のみを取締るのは、何故であるか、斯る片手落ちの政治を行つて、政府としての面目が立つかと云ふ非難を招くのは當然であつて、政府も此非難を受けては、之を如何ともする

ことが出來なかつたらうと想像されるのである。

社會公益事業の社會化を實現させるには、種々の方法があるが、其內の重なるものとしては、第一普通選擧に依て、政府と人民とを擧げて同一體のものとすること、第二事業に從事する勞働者に對しては、其精神勞働者であると、肉體勞働者であるとを問はず、總て一つの團體を組織させ、此團體に於て、產業を管理する權利を持つこと、第三消費者も亦進んで團體を組織して、事業の經營に干與し、斯くて從來閑却されて居つた消費者全體の利益を擁護し、斯くて社會公益事業の民主化を期するが如きは、最も必要の手段と認められるのである。普通選擧の如き極めて簡單な問題であつても、我國に於ては今日橫暴なる一つの政黨あるが故に、容易に實行されない、勞働組合の法律的地位も公認されない、而して勞働者の產業管理權の如きは、全然官僚又は當業者の念頭にも上らない、纔にホヰツトレー委員會報告に發表された勞働委員會制度の一やうなものを擬きして、鐵道從業委員會を組織して、產業管理權の一部を勞働者に與へる端緒を開いたと强辯し、消費者團體の如きに就ても、配給的消費組合ならば兎に角生產的消費組合に至つては、全く其跡を認め得られないと云ふのが、我國現時の狀態であるとすれば、我國に於て社會公益事業の不振今日の如く爲るも、亦與

とするに足らない次第である、斯る狀態で推移して行つたならば、幾多の社會公益事業は今後と雖も、國家なり公共團體なりの財政上の要求に脅かされて、其利益を社會に普及することを妨げるであらう。官僚や吏僚の僻見誤解等から、事業の經營をして公益上の要求に遠ざからしめることもあらう。唯時勢が進歩すれば、社會公益事業の範圍は擴張され、又其種類は增加するであらう。殊に社會政策を目的とする公益事業の增加するのは、當然の數であつて、東京市に就て云つても、公衆食堂とか、職業紹介所とか、兒童補育所とか、託兒場とか、市に相當した小さい方面に互つて、施設しなければならぬ社會公益事業は多々之を見出すを得るのである。然し是等の事業は公益に關係する所の深い關係から、財政上の利益は全く之を考量の外に置かなければならず、寧ろ他の方面に財源を求めて、是等事業の利益を實費以下で、廣く市民に分配することを必要とする。即ち此點に付ては、地方自治體は決して現に今日の我國が爲しつゝある所を學ぶ可きではなく、寧ろ其反對の道を進まなければならぬ。唯此方針を以て進んだ場合に、社會公益事業の生ずる利益は廣く國民に分配されるであらうが、其代りに事業經營に要する財源は如何なる方面に求め可きであらうか。是れが社會公益事業の經營に就て、生ずる所の重大問題である。茲

洲殖民地に於て公益事業の經營に伴う損失を補うのに、專ら土地に對する課稅の收入を以てするが如きは、要するに中產以上の階級に對する負擔を重くして、無產階級に對する負擔を輕くし、前者の費用を以て、後者の保護を行はうとするが如きは、公益事業の經營法として、最も適したものであるとしなければならぬ。而して斯る事實を實現するに至つた原因は如何なる邊に在るかと云へば、要するに政治上にデモクラシーの行はれた一面に社會生活上に、經濟上に所謂產業的デモクラシーの行はれるに至つたことを擧げ得るのである。

思ふに今後の日本に於ては、社會公益事業とか、社會事業とか云ふやうな名目で種々の計畫が行はれるであらう。然し之に對する當局者や、事業其ものを監督する國民幷に市民の對社會公益事業の觀念が定まらなかつたならば、結局羊頭を懸けて、狗肉を賣るの結果を生ずるに過ぎないであらう。現に政府が鐵道を國有とし、又他に多くの獨占事業を其公益事業たる故を以て、國有又は公有として居る今日、過般の議會に半官半民の組織で、電力會社を起さる計畫を提出したことの如き、政策上に於ける矛盾の甚だしきものである。斯る事は電力會社の重役に或る政治上の有力者を据へやうとか、會社の株式を與黨の議員や、其他に分配して、彼等を操縦する用に供しやうと云ふ考が

生じた次第であらうが、政府に社會公益事業に對する根本的政策の確立して居らないのは、此一事を以て之れ知るを得ると共に電力會社の計畫に對する反對論中、社會公益事業に關する原則論に此點を缺いた議論に接しなかつたことは、共に私の遺憾とする所である。

經濟界の不況と我國勞働運動の將來

早大教授　北澤新次郎

一　反動來と勞働運動の沈默期

一時非常な勢威を以て高潮した我國の勞働運動は經濟界の反動來と共に鳴を靜めた觀がある。そして或者は我國に於ける勞働問題は之れを以て終結を告げたとさへ言明する不見識者さへある。然しながら我國に於ける勞働運動は決して一時的の性質を有するものでなく、現代の資本主義的經濟組織の存立する限り益〻進展するもので、唯之れが經濟界の不景氣が來ると一時沈默期に入つただけで、實は眞劍の勞働運動は之れから始まるのである、蓋し歐洲戰亂中及戰後急激なる速度を以て社會の前線に顯はれた我國の勞働問題は勿論我國に於ける勞働者階級の覺醒の結果である事は疑のない處であるが、一方に於ては經濟界の環境と四圍の形勢が勞働者運動の進展を可能ならしめた事も爭はれない。即ち戰時及戰後に於ける豫想外の我國の經濟的好景況の下に於てなしたる勞働者の運動は比較的其のヤリ口が甚しく原始的で且つ屢拙劣なるものがあつたけれども、其の割合に效果は顯著なるものがあつた。故に勞働爭議の場合に於ても資本家は今日の經濟組織の下に於ては少しく頑張　ば容易に勞働者を壓倒する事が出來得たのであるが、其れをするよりも勞働者に少しばかり讓歩して、一方に於て大規模に勞働者をエキスプロイトした方が算盤に割皆く當るから先づ大概の事は大目に見て居つたのである。之れに乘じて勞働者は愈其の要求

を增進して行き、(又左樣しなければならないが)要求した幾分は成就すると云ふわけで、我國の勞働運動はトン／＼拍子で高調し來り、此間に賣名的の所謂勞働運動指導屋や、勞働運動を喰物にして一儲けせんとした勞働ブローカーや、若は官憲の走狗、傀儡となつて勞働者の假面を冠ふて勞働者を煽動使嗾したる勞働スパイが仲間入りをしたので、無經驗な正直な我國勞働者の或部分は知らず／＼此等の山師的勞働運動者に多少利用せられ勝ちで、其の根本的に必要な團結の基礎に細心の注意を拂はなかつた傾向がある。尤も我國に於て多年の苦き經驗と艱難を味ひ來つた友愛會並びに其の團結的根據の比較的鞏固な勞働團體例へば交通勞働組合、信友會等は此等の虛僞的勞働屋に支配せられなかつたが、突如として雨後の筍の如く現はれた似而非勞働組合の中には隨分如何はしいのが數多あり、此等のものは其基礎の薄弱なるが故に徒らに虛勢を張つて、所謂勞働運動をやり、虛冒壯語して勞働者に阿諛し、明日にも勞働者の天下が實現出來るかの如く僞はり、表面勞働者の味方を裝ふて其實自己の利慾を謀つて居つた。此事に就ては自分は既に幾度となく勞働者に注意する處があつた。然るに一度經濟界の不況に陷り、失業者の續出となり、勞働運動が非常に困難となり、且つ其れが世間の注意を喚起せざるに及ぶと、從來の山師的勞働運動屋は勞働運動が何等彼等の利慾とならざるを感知し、何時のまにか其の影を隱して跡方もない。此れが今日の狀勢である。こうなると平常から團結基礎の鞏固ならざる勞働組合は忽ち其の組織に動搖を來し、其の大部分は瓦解するものもあり、瓦解しない迄も殆んど其れに近い狀態を呈してゐるものもある。茲に於て今迄斯かる僞善者に信頼して共に行動して來た勞働者の覺醒したる少數(マイノリティ)の者はみじめなる裏切りの悲哀を實感し、一般勞働者は甚しく不滿に思ふ樣になつた。

二　覺醒せる少數者の失望と眞正なる勞働指導者の懊惱

思ふに我國の勞働者は資本主義の專制と橫暴とを感知し、此等の上に加へられたる社會の不合理的壓迫を會得して來たものの、之れを正當に理解してゐる勞働者は何んと云つても少數である。今日組織せられたる勞働組合の內には非常に階級的に覺醒せる勞働者は居るには居るが其の數は決して多くはない。そして此等の者が昨日迄其の仲間として深く信頼してをつたものが、今日は其の獅子身中の蟲であつた事を覺知する時の失望落膽は如何ばかりであらう。さなきだに現在の經濟組織では一旦反動が來れば勞働者の失業問題は續出し、殊に之れが勞働組

會のために被る損失に加へられるが爲めに一般の勞働組合に加入してゐる勞働者は戰々兢々として居る際であるから一般勞働者の士氣は沮喪して居る最中の事であるから尙更彼等の苦痛は思ひやられる。しかも斯かる山師的勞働運動屋の多くは智識階級に屬する者であるから夫れざるを得ない。從來我國の勞働者（歐米諸國でも最初は左樣であつたが）は智識階級に對しては盲從的に尊敬して居つた。しかし智識階級の殆んど全部のものは勞働者の味方ではなかつた。否寧ろ敵對者であつたと云つても過言ではない。實にこれ迄は勞働者の運動を直接間接に妨害抑壓を加へたるものは勞働者と資本家との中間にあつたインテリゲンチャであつた事は勞働運動者の親しく實驗する處である。これは我國インテリゲンチャの我利的心理に基く無自覺なる自殺的行爲であるが、此等のものに對する勞働者の反感は可なりに高まつてゐる。しかるにインテリゲンチャにして眞摯なる時には勞働者の友人であり、指導者であると稱しながら一旦自己の不利益なるに於ては其僞瞞的本體を暴露する裏切者を勞働者が見る時に於ては愈彼等の智識階級に對する怨恨の深まるは少しも怪しむに足らない。何れの國に於ても斯くの如くして從來インテリゲンチャは勞働者の信頼を失墜し、侮蔑せらるるに至つたのである。

處で此潮流に逆行して甚だしく弱者の境遇に立つものは眞正なる勞働運動指導者である。此等の人々は内心勞働者に對する燃ゆるが如き同情と理解とを有し、且つ今日の資本主義的經濟組織に於て最も不合理的抑壓を受けてゐる勞働者階級の解放を謀らんとて獻身的の努力をしてゐる。そして勞働運動が順調に推移して居る間は兎も角今日の如く經濟的不況の襲來に伴ふて一般勞働者の士氣が頗る沮喪してゐる際には之れを統制して自己の信ずる理想に向つて突進させる事は容易の事でない。元來我國目下の狀勢は勞働指導者の勞働運動に關する理想と見識と目標と一般勞働者の其等とは非常の懸隔があるので之れは一面から見ると結構な事であるが、他面には又勞働運動をなす上に非常なハンデイキヤツプとなる事が尠くない。更に此等の勞働運動者は實に精神的に難境に立つのみならず、一方に於ては又生活上の逼迫にも打勝たねばならない、此等の人々は日頃でも極めて少額の收入でキリつめた生活をして居るにも係はらず、反動期に伴ふ失業者の頻出の結果自然勞働組合員の會費納入も滯納勝ちとなり、其が爲めに此等の人々の受くる打擊困難は多大なるものがある。實に此等の人々の或者は今日に於ては彼等の未だ曾つて爲したる事のない全家族を擧げての副職內職等をなし、以て組合の財政的缺陷を援助し一般勞働者を補助してゐ

るものさへある。實に此等の純正なる勞働者の知己のなす處を見るにつけても、眞實なる勞働運動は正義と眞理を熱愛するに非れば出來ないものであるかゞ理解せられる。

三　失業問題と勞働運動の目標

資本主義的經濟組織の下に於ては經濟的不況と失業問題とは相離るべからざる關係を以てゐる。そして勞働者に取りて失業程恐ろしいものは餘り澤山はない。失業は單に勞働者から職業を奪ふのみならず、勞働者及其の妻子からパンを奪ふ。經濟界の好景氣の際には勞働者は團結の力を以て其の賃銀の増加をなし得るが、經濟界が不景氣になると賃銀値上の爲めになす同盟罷業の武器は餘り效果がない。其れどころではない、資本家は事業縮少の爲めか或は其他の事情に依つて勞働者の數を減少せしめんと企つるものもあり、若しくは從來の賃銀率を低下せんとするものも出てくる。而して資本家が勞働者の一部を解雇せんと思ふ時は勢ひ彼等の事であるから素町人根生を赤裸々に發揮して、曾つて好景氣の折に同盟罷業を起した主謀者や勞働組合の幹部乃至會員から始める。斯して勞働者の弱點につけ込んで失業と云ふ恐怖に乘じて自己の工場に於ける勞働者の團結的組織を芟滅して以て他日の憂をなくしようと謀る。故に失業は勞働者のパンを奪ふばかりでなく、勞働運動を阻害する事も一通りでない。從つて我國の勞働者が今後の生活上の安固と勞働運動の進展を期せんと欲せば、從來の如く勞働運動の全勢力を賃銀値上と勞働時間の短縮のみに傾注するのは全く愚な事で、失業の依つて起る現代の資本主義的經濟組織の根本的改造を主張要求せねばならない。そして其の第一歩として先賃銀制度の廢止を要求する必要がある。一體人間の勞働力を貨物同樣金錢で賣買する事は人格の侮蔑で、勞働者を奴隷扱する事に外ならない。故に勞働者がかゝる不合理的な制度から解放せらるゝ事が其の人格の承認を得、自由人として存在する上にも、獨立生産者として生活する爲めにも其の楷梯であらねばならない。要するに今後我國に於ける勞働運動の目標は歐米諸國の勞働運動發展の進化と同じく奴隷的生活から人間的生活への解放である。

四　新産業的秩序の建設

現代の産業組織が多くの點に於て著大なる缺陷と弊害とを具備してゐる事は公平なる觀察者は否認しないであらう。アダム・スミス一派の Laissez-faire の哲學が頗る我利的な無秩序的な現代産業組織を確立した。個人主義的な唯物的慾望を滿足せ

んが爲めにブルヂョワーは貪慾飽りなき自利心の衝動に駆られて猪進した。そして其れが爲めには個人社會、並びに國家の利益福祉を犠牲にする事は何とも思はざるに至つた。否急激なる富の増加は彼等は自己の利害と國家の其れと同身一體（アイデンティファイ）なりと曲解して其醜惡なる掠奪心を満足せしむるに躍起するに及んだ。斯くして一國の生産の目的は社會の爲でもなく、國民の性能發揮の爲めでもなく、唯富の蓄積、掠奪心を飼養（フィード）する爲めとなつた。従つて産業組織も其目の的を成就するに都合が善い様に仕組まれる事となつた。其の結果は一部少數の資本家には工合がよいが、社會の大多數である消費者生産者に取りては非常に弊害の尠からざるものになつた。殊に生産者たる勞働者は自己が生産の中樞的要素であるにも係かはらず、生産經營には何等の參與權もなく、加ふるに賃銀制度なる雇主には頗る便宜な方法のある爲めに、全く其人格的價値は蹂躙せられて所謂賃銀奴隷の桎梏に繋がれて、其生活は不安と不快と不足と不満の慢性的疲弊に苦しめられてゐる。要するに現代の産業組織は何等の社會的理想を包含せざる結果かくの如く不合理にも社會の大多數を苦しめる事となるのである。今日世界に急速にしかも根強く進捗しつゝある勞働運動はかくの如き無秩序なる、不合理なる産業組織の下に最も迫害虐待をなめ盡した勞働者が彼等を貨物と同一視し、其人間的價値を否定する奴隷的制度から解放せられんとの運動である。其處に勞働運動の文化的創造力がある。しかるに人間は一旦獲得した特權はよしや其れを固執する事が社會の福祉を阻害する事を感知しても、其れを容易に手離すものでない。其れには非常の果斷が要る。現代の資本家も彼等の利益伸暢の爲に確立したる今日の産業組織が社會の大多數の無産者の健全なる進展をなすには甚しき弊害のあるものである事を幸いに覺知しても其れが變更を易々と許容しない。否却つて殆んど全部の資本家は今日の産業組織は其當然の既得權（Vested Interests）であるのみならず、之が社會、國家を富裕幸福ならしむるものであると曲解してゐるから、勢い彼等と勞働者の間には軋轢衝突を惹起せざるを得ない。換言すれば資本家の固執するものは現狀維持の哲學である、勞働者のは現狀打破の哲學である。だから兩者其根本に於て其の主張する點が異なるものがある。

若しも今日の資本主義的産業組織が甚しく缺陷弊害を有するもので、之れが爲めに一部少數の特權階級以外の大部分のものゝ健實なる社會生活の進展を阻止するものであるとするならば現狀維持は禁物である。現狀打破は進歩の關鍵である。すべからく現時の不合理不健全なる産業組織を改造して消費者も其欲するものを質に於ても、量に於ても何等かの障碍なく得らるる様

になり、生産者も亦今日の如き賃銀奴隷の境遇から解放して、自由獨立の生産者として一部特權階級の營利心を充足する手段の爲めでなく、社會全體の幸福増進の爲めに其の建設的衝動を發揮せしむる制度を樹立せねばならない。要するに社會の消費者並びに生産者の最大最高の滿足を與へる產業組織が必要である。斯くの如くにして始めて今日の如き階級的爭鬪は其跡を絶ち、總べてのものが人格の所有者たる人間として社會的生産に從事するに至る。玆に於て勞働運動の使命は始めて成就し、勞働問題の解決は完了する。これに到達する迄は勞働運動は依然として進展し、勞働爭議は愈增加するに違ひない。一時的の經濟界の不況の爲めに、倚頼的な社會の弱者たる勞働者は一時其の不滿と不平を忍んで、勞働運動は一見頓挫したかの如く見はれるかも知れないが、其實はかゝる時こそ却つて覺醒せる勞働者は現代產業組織の缺陷と弱點を痛切に感知し、從つて勞働運動の必要を深刻に體験するのである。故に經濟界の不況の襲ひ來て共に我國に於ける勞働運動は終熄したものと速斷するは現代に於ける勞働運動の使用と勞働者の心理とを理解せざる皮相的見解である。實に我國に於ける眞實の勞働運動は之れから愈眞劍になつて行く事を知らねばならぬ。

新涼の氣に爾の熱頭を冷やせ

文學博士　三宅雪嶺

斯かる詩的の題は、圖畫物で意義が通じ、散文的に說明しては、風致を地圖で說き明かすやうな事になる。いくら地圖で說いても、風景を見るやうにならず、或はいよいよ說いていよいよ風景の興味から遠ざかつたりする。唯それで地圖を棄てることも出來ず、無味蠟を嚼むが如きを忍ばねばならぬことがある。

詩的の語は大抵實質と形容との兩意義を含んで居る。全くな

實が無いではない、多少の事實有りながら、何處までも事實とすれば間違ひ、比喩に屬する事が多い。と言ふて比喩のみかと思へば左うでなく、或る程度まで事實に根差して居る。生理的に云へば、體温は四季を通じて略ぼ相ひ同じく、逆ふのを病的とし、健康狀態で特別に熱頭と云ふべきものがあるべきでない。然し熱頭らしく感ずる事は確にある。日光に照らされては、頭が熱くなり、時として腦充血を惹き起すに至る。水を以て冷やすの必要を感ずる。或は氷で冷やさねばならなくなる。日光に照り付けられたのでなくても、暑中は總じて熱く、身體が弛て勉強し難く、頭で考へる事も纏りが好くない。暑い時は六つかしい事を爲ぬことになつて居る。暑い時は衣服も輕く、家屋も開け放し、それだけ壓迫を感ずる事少く、延いて氣の伸び〳〵した所があり、想像を逞しくする事は出來るけれど、骨の折れる事を避けるに傾く。水浴するなり、温浴するなり、何かしてサツパリする事を求める。

秋に入ると共に散漫なものが收縮し、注意しなかつた事に注意するやうになる。夏は日光が最も照り耀いて、草木が生ひ茂り、大自然の恩惠を享けるのであるが、進歩は秋に入つてからである。夏のみで續けば、進歩があつても、其進歩が停まつてしまふ秋。に入り大自然の恩惠を減ずるので、茲に進歩を見るが、好んでも、餘儀なくされても、兎も角も進歩の事實が現はれる。熱帶地方に最初の文明が起り、頗る旺んなるを致したけれども、文明を繼續し、更に之を發展したのは、温帶に於てする。自然の恩惠を享ける事熱帶に如くはないが、それだけ進歩する譯に行かぬ。エデンの花園では發展が無く、それを放逐せられて歴史を形造る。夏ほど無雜作に生活し得る時季が無く、食衣住を簡單にして濟むけれど、斯くて續けば、何時までも簡單になり、簡單で可いとすればそれまでの事、簡單で氣が濟まねば他に求むる所無くてはならぬ。何か變つた事を爲さうとし、石を積み上げてピラミツトを作つたり何かする。大いなる石を積み上げた所が驚嘆に値するにしても、後世の文明と趣を異にする。今の文明は温帶の賜物であり、寧ろ寒帶に近い處から利益を受けて居る。

歴史に於て温帶が發達した如く、年々人が秋に入つて、幾分の發達を遂げる。昔、蒙古邊の酋長は、天高く馬肥える頃、大いに出兵しようとなし、漢の政府が頗る當惑した。夏は休んで居るが、秋に入ると共に、馬を揃へて長城を指して進むのである。秋は大いに兵を動かすの時とした。文化の及ばぬ沙漠地方

では、斯かる事に身を委ねるが、文化の進んだ所では、個々人々各新たなる氣力を以て事に當らうとする。「新涼入郊墟。燈火稍可親」といふ句が、何時頃よりか世間に弘まつて居る。日本で舊幕時代から之を引用するのが多い。韓退之の句であつて、人生の浮沈が讀書の如何で分れる事を説いたのである。初め全く同等であつて、後に或る者が宰相となり、或る者が之に遣ひ使はれ、全く境遇を異にするのは、一方で頻りに詩書を讀み、他方で早く之を捨てたのに由る。何でも秋口の涼しくなつた所、燈火の下、頻りに讀書すべき事を勸めたのである。夏は暑くて倦んでも仕方がなく、涼しくなると共に大いに勉強すべしといふのである。支那では實に退之の曰ふたやうな所がある。日本でも左ういふ事があり、多く讀書するのが立身出世する所以となる。彼の如き句が頻りに誦せられたのは、如何にも尤もらしく思はれたからであつて、今も學校で頻りに勉強する學生は、官吏となるにしても、銀行會社に入るにしても、都合が好い。支那の如く四書五經で堅め付けたやうな所では、朝から晩まで書物を繰返し、暗誦するやうになるのが、所謂青雲に攀ち登るの捷徑である。けれども支那で斯く讀書に重きを置き、之を怪まなんだのは、文明が停滯し、動もすれば退歩するに與つて居る。[illegible]詩を暗誦して朝廷に用ひられるにしても之を暗誦する事が何程の實益あるか。若し古書を讀むの努力の或る部分を他に移したならば、別に何等かの發展を遂げ得たでないか。今の讀書は支那の古典を專らにしたと違ひ、新時代を理解するに必要なものであり、之に力を注げばそれだけの利益ある譯である。燈火の下に書を讀む事、昔と違ひなく、而して今は唯徒らに讀むのでなく、特殊の智見を具へる事になり、時の必要に應ずる事が出來る。新たなる意義に於て燈火稍可親の頃る意義に富むを覺える。同じく書を讀むにしても、昔の人は無益の事に勞し、氣の毒に思へる程である。今の人が勉強すれば、時間を少くして效用を大くする事が出來る。今こそ秋に入つて燈火に親しむべきである。力を養ひ得る事は言ふを要せぬ。

然し讀書のみがそれ程有用か。其他に有用の事はないか。詩人ワルズヲールスは曰ふ、

「起きよ、起きよ、我が友よ。爾の書物を伏せよ。必ず[illegible]を倍にする事が出來る。面白くなくて骨の折れる書物を棄て、森の中に入り、快い音樂を聽けよ。其方が遙かに利益が多い」

と、果して森の中でそれだけの利益を得るかは、解釋次第で疑問になるが、讀書以外に利益を得る事の多いのは否定が出來ぬ。東洋でも此類の事を言ふ者が珍らしくなく、[illegible]がちワルズ

ワールスを取入れて云ふべきでないが、文化の進んだ社會に此
聲を聽くのは、何物かを暗示せぬと云へぬ。

　昔は兎も角、近來歐米で自然に接觸しようとする事が旺んになつて來て居る。山登りの大流行も其の一つに居る。新鮮の空氣を吸はうといふ事が、一つの主なる要求となつて居る。煤煙に充たされた都市を出て、新鮮の空氣を吸ふのは、生理的必要から出て居るにしても、そこで孟軻の所謂浩然の氣を養ふところ無いとせぬ。森林の中を徘徊するのは、何の意義無いやうで、頗る意義に富む。壓迫から脫し、自由なる思想を得、新に工夫を凝らし得るのは其邊から出來る。ビスマルクは夜中田園の中を徘徊したが、其政策は其處で案出されたのが多い。社會の壓迫を離れ、自然に親炙するのみが能事でなく、社會に沒頭し、社會を徘徊する事、森林に於けるが如くなるのも、興味あり利益がある。傍觀者とならず、有象無象と共に立ち働いて、前に得られぬ經驗を得る。有象無象を輕んずるのは、自らの考の至らぬのであつて、見様次第、取様次第、有象無象が社會の根柢と爲つて居る。之と共に爲ずして何を爲さうとするか。涼風の立つに伴ひ、寢轉んで居らうと思ふても居れぬやうにならう。そこで新たなる元氣を以て進む所で、前に無かつた何物かを作り出す事が出來る。熱帶を離れ文明を增進し來つた如く、

個々人々として、秋に入り向上發展を遂ぐるを得る。

　然し之れ眞實の温熱に就て云ふ所であつて、熱頭は逆上とか、上氣とかいふを喩へる事になつて居る。檢温器で別段温度の騰つて居るのでなく、心理的に斯く形容し得るのを覺える。何となくのぼせ上つて、思慮の足らぬのが稀れでない。普通よりも多く熱を受けては、逆上氣味を免かれぬ。生來隨分聰明らしくて、理解力の鈍ぶいのがある。或は初め賤しい身分であつたのが、富貴に馴れて前の事を忘れ、別世界から世間を見物するやうな心得になる。何の時代にも此類の事があり、それで通つて行かれるが、又通つて行かれぬ事がある。世間に騒ぎが起り、革命が勃發したりするのは、斯かる事の積み累り、或る階級で他の階級の事情を解せぬやうになる所よりする。自分一代或は二三代が安全にしても、何時ぞで子孫が禍を蒙る事がある。其邊の事が解らず、力きんで通せるので通さうとするのは、逆上としか云へぬ。一時の爲めに目が眩んで居るのである。誰でも分るべき事が分らなくなつて居る。斯ういふのは頭から冷水を掛ける必要がある。常に貴く、常に富んだやうな身分は、常に夏の氣分になつて居るが、氣を注けてもだらしのない所がある。空氣からして進步

發展を望み得ぬ事は、熱帶に於けるゝ化に異ならぬ。印度や埃及や、階級で固定して居つた。之を破るのも物憂く、其儘に過した。其文明を作り上げたものが溫帶に移つたならば、更に文明の程度を高めたのであるのに、左うは行かなんだ。貴族富豪は自ら相應に用心して居つても、何時となしに逆上の嫌ひがあり、時々頭腦を冷やすべき事を忘れてはならぬ。今日白人が何故に比較的多く勢力を張つて居るか。彼等は曾て溫帶にさへ住む事が出來ず、氷(グレーシャー)河の間に辛うじて生命を繫いだのである。氷河の經驗が彼の文明を生み出して居る。而して常に大自然の恩惠に浴して居つた黑人は現に見るが如き狀態である。恩惠に慣れては、何處ぞで禍を受くるを免かれぬ。大自然は公平であり、不可思議の方法を以て禍福を平均する。逆上の氣味ある者は深く警め、頭腦を冷やし、心臓を溫くするやうに心懸くべきである。

世界米化主義對世界文化主義の前衛戰としての排日問題と其解決

永井柳太郎

(一)

唯物論者フォイエルバッハは人間の理性を否認し、「Der Mensch ist was er isst.」即ち「人は其食物に外ならず」と云つた。予は斯くの如き極端なる言葉に與する者ではないが、然し食物が或程度迄これを食ふ者の精神に影響する事は爭ふべからざる事實だと思ふ。牛馬の如き菜食獸は其性質が比較的溫順であるけれども、虎狼の如き肉食獸は其性質獰猛にして、容易に馴らし能はざるは人のよく知る所である。人間も亦其如く、歴史なき時代より常に遊牧を業とし、肉食に依りて生活しつゝあるヨーロッ

ヘ諸民族が、肉食獸の如き猛烈なる感情を有し、虎狼の如き獰猛性を有する事は自然の數と云はねばならぬ。佛蘭西の哲學者アルフレッド・エミール・フュイエは其名著「歐洲各國民の心性」に於て、獨逸人が慓悍にして闘爭を好む事を非難し、「獨逸史中の英雄は勇氣を鼓舞する爲に人血を吸り、又同胞の心臟を皿に盛るを憚らざりき」と云ふて居るが、斯くの如きは啻に獨逸人のみの特性に非ずして、實はヨーロッパの諸民族に共通の特性である。現に佛蘭西人自身の歷史を觀るも、其頁の多數は殘忍なる虐殺と鮮血に塗れて居るではないか。ユーゲノットに對する迫害は遂に、セント・バーソロミューの夜の大虐殺となり、巴里の街路に横はる死屍をのみ以ても一萬を算した。佛蘭西大革命に際しても、ギロチンに命を落した者はルイ十六世以下數萬の多數に及んだのである。素より斯くの如き猛烈なる感情は一千有餘年に亘るクリスト敎の感化に依り或程度迄變質し、平素は稍々靜肅なる狀態に在りと雖も、社會學者、ルボンが「人間は群集となれば其原始的精神に遡るものなり」と云へる如く、偶々激昂すべき事件に遭遇すれば、其内心に於けるアリアン人種の原始的特質が直ちに反應し、其肉食獸に似たる本性は忽ち猛然として發作するのである。從て歐洲諸民族は、大體に於て其敵に對して頗る殘忍であり、又何か外部より壓迫せらるれば直ちに戰鬪的となる傾向を有する。彼等が國際的生存競爭に臨めば直ちに帝國主義者となり、階級的生存競爭に遭遇せば直ちにサンヂカリストの如き者となるのは決して偶然でない。

（二）

米國人は、大體に於て、北歐洲諸民族中最も生活慾の强烈なる、最も冒險性の多い、そして最も抵抗力の盛なる者の集合である。從て米國の歷史は一方に於て各個人の生存及び自由に反する一切の制度を打破して其生活慾に徹底せんとする自由革命の歷史であると同時に、他方に於て米國人自身の生活の理想及び樣式と相容れざる一切の異人種を排斥し、南北兩米の全土は云ふ迄もなく、進んでは全世界をも自國の生活目的に化せんとする征服主義の歷史である。コロンビア大學のギディングス敎授は、其有名なる民主的帝國主義論（デモクラチック・インペリアリズム）に於て、民主的帝國主義の可能を論じ「凡そデモクラシーとエンパイアとは全く相反せる兩箇の現象にして、デモクラシーはエンパイアの廢墟にのみ之を建設し得べく、エンパイアの建設は又直ちに自由の破壞を意味するが如く思惟するは一般の傾向なりと雖も、吾人は今日デモクラシーとエンパイアとが同時に共存し、相俟つて發達しつつある事を目擊す。即ち各國は一方に於て其生活の樣式、立

法の精神、及び社會の制度等に於て年々民主的傾向を增加しつゝあると共に、他方に於て或は新領土を合せ、或は將來新領土となさんと欲する地域に諸種の複雜なる帝國的行政を施し、以て益々其國民的生活を擴大せんとす。今やデモクラシーとエンパイアの結合は實驗時代を過ぎて完成時代に入り、所謂民主的帝國主義の有機的實現を觀んとするに至れり」と云ふて居るが、若し民主的帝國主義とも稱し得べき最も顯著なる實例を求むれば、ギディングス教授自身の屬する米國こそは確にそれであると思ふ。

米國の獨立は千七百七十六年であるが、當時米國の國土は尙未だ東部十三州に限られ、其面積は合計約三十三萬五千方哩に過ぎなかつた。それが左の如き勢を以て擴張せられ、今日では實に三百七十一萬三千方哩を超ゆるに到つたのである。

革命當時	三三五・四六六方哩
一八〇〇年	八九二・一三五方哩
一八五〇年	二・九九七・一一九方哩
一九〇〇年	三・七一三・一三一方哩

今日は一九〇〇年に比べると更に約百方哩を增加して居る。米國人は屢々日本人を評して侵略民族なるが如く云ふけれども、安ぞ知らん米國人自身こそは確に侵略民族中の最も尤なる者であることを否認することは出來まい。

（三）

米國は既に斯くの如き大國であるにも拘はらず、米國人は猶ほ其膨脹の野心を絕ち得ない。米國は國際聯盟の規約に特にモンロー主義を公認する一ケ條を挿ましむる事に努力し、遂に之に成功した。斯くの如き努力は、世界は人類の世界たらざるべからずと云ふ精神を基礎とする國際聯盟の本義に反する事は云ふを俟たぬのであるが、然も國際聯盟の發議者たる米國自身が其本義を無視して迄もモンロー主義を公認せしむるに努めたと云ふ事は、米國が南北兩米の統一に關し如何に猛烈なる野心を有するかを暴露するものである。モンロー主義の根本　想は人爲的活動の地方的封鎖であつて一種の封建思想に過ぎぬと云ふ學は、米國人中に於ても正直なる學者は既に之れを自白して居る。イエール大學教授ビンガム博士は所謂ラテンアメリカのオーソリチーとして著名なる學者であるが、同博士が先年公にしたモンロー主義論に於ても、明白にそれが世界文明の大勢に對する逆行である事を認めて居る。而してモンロー主義者が「南北兩米の各國家は地理上の位置、自然的同情並びに政體の類似に依りて、互に商業上並びに政治上の友邦たり。又同盟國た

るべきものなり」と云へるを駁撃し斯くの如き議論は事實と一致せず、何となれば南米の最大國たるブラジルはニユーヨーク及びニユーイングランドよりもスペイン及びポルトガルに接近し、フロリダ州の最南端キーウエスト とリオデヂャネーロ及びブエノスアイレスとの距離は反つてジブラルタールとの距離よりも遠く、パルパライソ、サンフランシスコ間の距離はパルパライソ、ロンドン間のそれよりも更に遠ければなり。從て自然の同情心と云ふも亦何等の根據あるに非ず。南米人より之れを見れば今日のモンロー主義は啻に一種の負擔たるのみならず、南洋の事情を知らざる米人が強ひて南米の監督者たらんとする事は反つて南米の爲に有害無益なり」と云つて居る。メキシコの前大統領ウエルタ氏も亦米國がモンロー主義の名に依り南北南米を盤踞せんとするに憤慨し、嘗て英國のデーリイ、テレグラフの記者に語つて「モンロー主義は既に其目的を遂げたり、ラテン共和國が猶ほ未だ幼稚にして獨立し能はざる時代に於てモンロー主義は能く其獨立を保ち其發達を助けたりき。然れども今やラテン共和國は既に發達したるが故、強ひて之れを昔日の如く他國に依り一監督し、又、訓練せんとする事は反つて諸種の困難を惹起すべし、殊に米國の如く暴力を用ひ、掠奪的精神を以て干渉を試むる場合に於て、特に其弊害の甚だし

きを見る」と云ふたのである。米國を除きてはラテン・アメリカを保護し其發達を扶くるものなしと云ふが如きは、彼の英國人が常に英國海軍のみは如何に強大となるも世界の平和を脅威することなしと云ふに等しく、世界に通用せざる獨斷論である。が、而も米國は飽く迄も其獨斷論を徹底せしめんとし、今や米國の南方の國境は、事實に於てメキシコとの境界線ではなく、パナマ運河の一線に在りと云つても差支へない。米國人の眼中既にメキシコなく、中米なく、今や南米全土に羽翼を張らんとして居るのである。南米に於ては近年A・B・C同盟即ちアルゼンチン、ブラジル、チリーの三國同盟を作り以て米國の勢力に對抗せんとする目論見があつたけれども、斯くの如き同盟の力に依つて果して米國の膨脹力に抵抗し得べきや否やは、頗る疑問である。

殊に注意すべき事は米國が南方に延んとすると共に、更に北方をも侵略せんとする野心を包藏して居る事である。先年の大統領選擧に當り、タフト氏は米加互惠條約を締結せんとする米國政府の眞意に就き、自己がルーズベルト氏に宛てた秘密の信書を公開されたのであるが、其書翰には明にキャナダに對する野心を表示したのであつた。勿論之より先と雖も米國議會に於ては屢々キャナダ合併すべしとの演說が繰り返されたのである

が、タフト氏の手紙は此野心を最も明暸に表示したものであつて、此文中「米加互惠關稅條約締結の結果遂にはキャナダをして米國の一屬領地たらしむるに至らん」とあり、ルーズベルト氏も亦之に答へて「余は經濟上、政治上の理由に依り、キャナダと互惠關稅條約を締結する事に贊同す」と云ふたのであつた。此書翰が一度發表せらるゝと共に英國及びキャナダに於ては非常なる物議を醸し、殊にルーズベルト氏が政治上の理由に依りて贊同すと云ふ點は大に英國人の惡感を招いたのであるが、斯くの如き事實に徵しても、米國人が今猶はモンロー主義に執着し、唯に之を南方に對してのみならず、更に北方に對しても、徹底的に實現せんとする野心を有することは明白である。素より米國が一方に於てモンロー主義を主張すると同時に、他方に於て米國も亦米大陸以外の大陸に於ける出來事に對し絶對に干渉せざるならば稍々恕すべきであるが、米國自身は他國にモンロー主義を公認せしめんと努力し、而も米國自身は世界各國の出來事に干渉する權利を主張するのであるから、米國の態度は、事實に於て、世界的帝國主義のそれであると云はねばならぬ。

巴里講和會議に於て、舊獨領殖民地を國際聯盟の所有權に移すと云ふ事を立案したのも米國である。舊獨領殖民地はアフリカより太平洋諸島に亘り、其面積約百萬方哩を算した。此廣大なる領土を擧げて日・英・佛諸國の分割に委ぬる事は米國の忍び能はざる所であつた。殊に獨領太平洋群島の一たるマリアナ列島の一隅には米領グワム島がある。グワム島は米國がスペインより掠奪したる所にして、布哇、ミッドウエー島及びヒリッピン諸島と共に米國よりアジア大陸に發展するに必要なる"Points of support"即ち交通の據地をなして居る。殊にグワム島は天然の良港を有するのみならず、恰も太平洋の中心に位するので、米國は此處に軍港を建設し、太平洋に於ける米國艦隊の根據地として居た。然るにマリアナ列島及びカロリン群島の如きグワム島の周圍に於ける諸島が悉く日本の領有する所となり、且つ悉に武裝せらるゝに至れば、グワム島は軍港としての價値を失ふは明白である。米國は戰前に於てさへグワム島の日本に接近するを憂とした。若しマリアナ列島及びカロリン群島が日本の領有に歸すれば、マリアナ列島中のサイパン島より僅に百二十一海里、カロリン群島中のヤップ島よりと雖も猶ほ四百五十八海里を去るに過ぎぬのであるから、米國としては殆どグワム島を奪はれたるに等しい心地がするに堪ひない。加ふる

に獨領殖民地が米國以外の國々に分割さるれば米國が自由に資本を投じ、自由に貿易の發展を圖る能はざる事獨領時代に異ならぬ。故に米國としては獨領殖民地の全部を國際聯盟の所有權に移し、一方に於て日本の恣に南洋諸島に武裝するを豫防すると共に、他方に於ても英佛等の獨領殖民地を獨占するを禁じ之れを世界貿易に開放せしむる事が得策であつた。是に於て米國は他の國々が最初に對獨講和條件を議し、次で國際聯盟案の討議に移るを順序としたるに拘はらず、衆議を排して國際聯盟案を講和會議の劈頭に提出し、日・英・佛諸國に獨領殖民地の分割を議するの暇を與へずして、直ちに之れを國際聯盟の所有權に移した。斯くの如くしてグワム島は安全を加へたるのみならず、今や海底電信根據地たる理由を以てヤップ島の管理權をも日本の手より奪はんとする形勢であるが、斯くの如く米國が太平洋に於ける區々たる島嶼の管理權に就いてまでも最深の注意を用ふるは何故ぞと云ふに、即ち太平洋を橫斷してアジア大陸に突進せんとする遠大の計畫があるからである。日本人は開國の恩人であると云ふて今猶はペルリの功績を賞讃して居る。乍然安んぞ知らん、ペルリの來航は日本を世界文明に導くが爲に非ずして、海軍根據地を得んとするが爲なりとは。ペルリは實に英國が香港を得て其海軍根據地としたように、日本の琉球若くは他の港を占領して、太平洋に於ける米國海軍の根據地となさんとの目的を以て遠征を試みたのである。此事實は千八百五十二年十二月十四日付で、ペルリが本國の政府に送つた手紙に依つて明白であるのみならず、之に對する國務卿エベレットの返信に於てもペルリの意見に同意する旨記され、日本と戰端を開く必要無き範圍に於て琉球を占領する事に同意であるとの記錄が今尙殘つて居るのである。此等の事實に依りて是れを觀れば、米國人は世界の如何なる侵略民族にも劣らざる大侵略民族であるのみならず、今や其侵略的野心は吾等の鄕土たる亞細亞大陸に殺到し來らんとするのであるが、只其野心を滿足せしめんとする方法に於て、米國は獨逸の如く武斷的でないけれども、獨逸人が"Weltmacht"即ち世界的帝國を理想とするに對し、米國人が"Americanization of the world"即ち世界米化を主張するは、其根本精神が等しく世界的帝國主義に存するを暴露するものである。

（五）

此アリアン人種中最も生活慾の强烈なる、最も冒險性の多い、そして最も抵抗力の旺んなる米國人が、大西洋文明時代より更に進展して太平洋文明時代を建設せんとするに際し、太平

洋沿岸を其郷土とするアジア諸民族中最も生活慾の強烈なる、最も冒險性の多い、そして最も抵抗力の旺んなる日本民族と、先づ衝突するに至りしは實に免れ難き運命である。殊に日米兩國人は不幸にして各々異なれる人種に屬し、著しく其生活の理想及び様式を異にして居ると云ふ事が、更に其衝突を早めたのであつた。凡そアリアン人種中英米兩國民は最も廣く世界に發展し、最も早くより異人種と衝突した關係上、人種的反感が他の歐洲諸國民よりは遙かに深刻である。詩人キップリングは白色人種以外の者を評して "White men's burden" 即ち「白人の負擔」と云ふたのであるが、彼等の多數は其感情に於て、均しく白色人種以外の者を厄介視して居ると云ふ事は、蓋し爭はれない事實であらう。英國のバルフォアーの如き賢明なる政治家と雖も千九百四年三月廿一日下院に於て南アフリカに於ける黒人問題に言及し「彼等は白色人種よりは遙かに迅速に繁殖す、彼等が南アフリカに存する限り南アフリカの問題は人類の歴史に於て未だ曾て見ざる重大なる紛糾を生ずる危險性を藏す、南アフリカの前途は彼等あるが爲に暗憺たり」と嘆じたのである。グレー卿も亦同年四月十二日美術協會の講演に臨み「英國政治家たる者は其前途に黒禍(ブラックペリル)ある事を忘るべからず」と叫んだのである。米國に於ては不出世の大政治家リンコルンありて

一時奴隷を解放したりと雖も、今日の米國政府は、其内心に於て、彼等の種屬の消滅せんことを祈つて居る事は疑ない。私が米國滯在中偶然にも此事實に首肯すべき談話に接した事は少くないのであつた。今日米國に生活する黒人は約九百萬に達して居るが、米國人は之れ等の黒人を保護監督すると云ふて居るけれども、事實は決してさうでないのみならず、總る機會に於て、彼等を虐待侮辱した。千九百九年の調査に依れば、米國南部十二州に於ける黒人は全人口の四割を占めた。然して南部十二州に於ける小學教育費は合計三千二百萬弗と云ふ事であつたが、此内黒人教育の爲に割愛したるものは僅に四百萬弗、即ち全額の一割五分にも達して居ないのであつた。斯くの如く黒人の教育に毫も熱心でないのみならず、偶々無教育なる黒人が米國人に反抗するとか、又は侮辱でも加へる如き事あれば、直ちに所謂私刑(リンチング)を以て之に酬ゆる。凡そ私刑(リンチング)は法律の發達せざる國に行はるべきもので、文明國には行り得べからざる蠻行なるに拘はらず、其蠻行が白晝公然行はれて、千八百八十五年から千九百十五年十一月迄の間に米國で行はれた私刑(リンチング)の中、政府に報道せられたもの丈でも實に三千五百八十三件の多きに及んだのは驚くべきではないか。千九百十五年に於ては、一月より十一月に至る間にさへ七十八回の私刑(リンチング)が行はれ、内二十一人を除

く外明は全部黒人又はメキシコ人であつた。米國人は私刑を辯護して白人の婦人を保護する爲に止むを得ざる刑罰なりと云ふけれどもそれは事實ではない。現に千九百十五年に行はれた私刑(リンチ)の理由に關し、政府が調査したものを見ても、強姦並に十、強姦未遂四、白色婦人侮辱二に過ぎぬ。其他は恐く直接婦人に關係無き犯罪である。是等の事實に依つて觀ても彼等の間に於ける人種的憎惡が如何に猛烈なるかを想像し得るが、此人種的憎惡心は、日本が日清、日露及び日獨の三大戰役を經て世界に於ける大國の班に列するを視るに及んで、人種的嫉妬心を併發し、排日の氣勢を強めた。

（六）

米國太平洋岸諸州に於ける排日運動は其由來する所頗る複雜である。其原因は大體に於て是を(イ)社會的(ロ)經濟的(ハ)政治的の三種に區別しなくてはならぬ。社會的原因とは生活の理想及び樣式に於ける日米兩國人の相違である。アリアン人種は古來主として遊牧生活を營み、絶えず移住した人種であるから、自ら其間に民主々義の思想が發達した。殊にクリスト教の感化が其傾向を一層顯著ならしめたのであるが、それが米國に渡るに及んで最も自由なる新社會の基礎となつて現れたのであつた。然るに日本人の祖先は早くより農業に生活し、一定の土地に住し、夙に家長の命令に服從する所謂家長主義の社會倫理を生命として居たのであるから、其生活の理想及び樣式に於てアリアン人種中最も自由なる發達を遂げた米國人と互に理解し、互に調和する事は容易でない。

經濟的原因中最も顯著なるものは米國勞働者對日本勞働者の賃銀の爭であるが、大體に於て日本勞働者が米國勞働者に比して、勤勉且つ從順であるのみならず、低廉なる賃銀に甘んずると云ふ事は爭ひ難き事實である。是に於て米國勞働者は到底生存競爭に勝利を得る能はざることを知つてこれを排斥するに至つたのである。だから日本勞働者が米國勞働者の勞働組合に加入し、米國勞働者と同樣の勞働條件を以て勞働に從事すれば、米國勞働者が日本勞働者を恐るゝ必要はないのであるが、米國勞働者は人種上の理由と、自己の仲間が多數になると云ふ事は勞力の供給を增加し、賃銀の騰貴を圖るに不便であると云ふ理由とに依つて日本勞働者を勞働組合に加入せしめないのである。蓋し一方に於て日本勞働者の入國を適當の數に制限すると共に、他方に於て日本勞働者を米國勞働者と均しく勞働組合に加入せしむれば、左程恐るべき事でないに拘らず、彼等が飽く迄日本勞働者を排斥せんとするのは其思想の根柢に人種的反感

が蟠つて居るからであらう。現に私が一昨年桑港勞働組合擁護ポール・シャーンバーグ氏に何故日本勞働者の勞働組合に加盟すことを許さぬかと質問した時の如きも、同氏はそれは感情問題だから別段理由の說明は出來ぬと云つた。

これ丈の原因が錯綜する丈でも太平洋岸に於ける排日運動は激烈ならざるを得ないのであるが、更に之に政治的原因が加はつて愈々火の手が盛になつた。政治的原因とは何であるかと云ふに、國民の投票を得て、或は元老院とか或は代議院に地位を占めんとする議員候補者が、勞働者の投票を求むる目的を以て、盛に日本勞働者の排斥を叫び、以て一般勞働者の歡心を得んとする事と、或は船舶業者とか、或は貿易業者の手先となれる議員や新聞雜誌記者が政府より保護金又は獎勵金を支出せしむる目的を以て盛に日本の經濟的競爭の危險を誇大に吹聽する事である。今キャリホルニヤ州に於て日本人排斥の主謀者は、フィーラン、インマン、バーカー、ネーラン等であるが、フィーランは加州選出上院議員であり、インマン、バーカー、ネーランは共に加州議會議員である。又先に山東問題を提げて頻りに日本を罵詈讒謗しつゝありし上院議員も總て太平洋沿岸諸州の選出代議士であつた。即ち著名なるハイラム・ジョンソンは加州選出議員であり、ウイリアム・ボーラーはアイダホ州選出議員であり、マイルス・ポインデッキスターはワシントン州選出議員であるが、是等の事實に依つて觀ても、所謂排日問題の裏面に政治上の理由が伏在する事は疑ないのであつて、是等の煽動政治家が存在する限り、排日運動なるものは益々複雜なる關係を生ずる事は蓋し避け難き所であらう。

(七)

今日の加州排日運動は(イ)日本人が加州に於て農場を所有し、或は收得する會社の株主となる事を禁じ、(ロ)日本人を父母としたる未成年者の土地所有に對する後見權を其父母たる日本人の手より米人の手に奪はんとし(ハ)若し出來得べくば、米國にて生れたる兒童と雖も、其兩親が公民權を有せざる場合は同じく米國の公民權を得しめざるよう米國憲法第十四章第一節を修正し、(ニ)猶は現在日本人が有する三年の借地權をも奪はんとするものにして、從來の排日運動より遙かに徹底的であるから、若し此運動が效を奏すれば加州に於ける日本人の土地所有權及び借地權は殆んど全滅し、延いて加州に於ける日本人の發展は不可能となるのである。蓋し米國憲法第十四章第一節には「米國に於て出生し、又は歸化に依りて其法權に服する者は、北米合衆國並びに其居住する州の公民となす」と云ふ明文

が存するのであるが、此條文を修正して今後に日本人の子孫は、將へ米國に生れたりとするも、公民權を有せざるものと變更するは容易の業にあらざるべきのみならず、此條文が存する限り、假へ其兩親が公民權を有せずとするも、米國にて出生したる日本人の公民權を否認し、其土地所有權を奪ふ事の不合理なるは勿論である。故に日本政府は此點に關し米國政府に強硬なる談判を試み得べきのみならず、借地權に關しても努力の餘地は十分あると思ふ。私が一昨年米國に滯在中ワシントンにて米國勞働聯盟（アメリカン・フェデレーション・オブ・レーボル）總幹事フランク・モリソン等を訪ひ日本勞働者は生活程度低く、日本勞働者の入國を許可する時は米國勞働者は之れと競爭する必要上、遂に自己の生活程度をも低下せざるべからざる危險ありと云ふ非難に答へて「米國に於ける日本勞働者の生活程度低きは現在せる米國移民法の罪なり。米國の移民法は今尚ほ日本人の歸化權を認めざるのみならず、太平洋沿岸諸州は日本人の土地所有權及び長期借地權をすら否認す。是に於てか日本人は勢ひ入國の翌日より既に歸國の準備をなさざるを得ず、然して彼等が歸國に際し携帶し得べきものは唯金錢あるのみ。是れ日本勞働者が出來得る限り其衣食住の費用を節約して金錢を貯ふるに汲々たる所以なり。故に日本勞働者は其貯金額に於て寧ろ白人勞働者に勝れるのみならず、日本人中に於ても殊に既に土地所有權又は長期借地權を獲得し、永住の希望を有する者は其生活程度に於ても、其兒童の教育に於ても、又今回の戰爭に際し軍事公債に應募したる金額に於ても毫も白人に比して劣る所なかりき。余はタコマに於ても、リビングストンに於ても、又フレスノに於ても其實例を示すを得し」と論じたる時の如きも、モリソン氏は米國人側に於て此種の調査の不完全なる事を自認し、若し日本政府又は友愛會の如き日本勞働者の代表機關が此種の論旨を書面に認めて正式に申込なら、米國勞働聯盟も亦正式に是れを實行委員會（エキゼキユーテイヴ・コミテー）の議に附し或は特種の委員を任命して調査するを辭せずと答へたほどであつた。故に政府にして其交渉宜しきを得れば、排日運動に對抗し、能く日本移民の基礎を擁護し得べきのみならず、却て如斯き機會に乘じて排日運動の不合理且つ不公正を指摘し、逆襲的に日本移民に對する不當なる移民法と待遇を破ることも不可能でない。然かし問題は現在の日本の政府及び日本の外交官に如斯き外交的逆襲を試むる見識及び勇氣ありやと云ふ事である。

然し之と同時に總ゆる機會と總ゆる機關とを通じて大規模の倫理的逆襲、即ち人種的偏見打破の宣傳を行ふと共に、併せて日本移民自身が反省して自己の人種的優越を實證せんと努力す

る事も必要である。今日加州に於て排日の氣勢盛なりと雖も、米人中に於ても人種的偏見打破の正論がないではない。現に加州に於てもスタンフォード大學名譽總長ジ・ルダン博士及び加州の名望家にして且つ雄辯家なるアイリッシュ大佐の如きは熱心なる排日運動の攻擊者であるのみならず、加州知事スティーブン氏及びフレスノ・リパブリカン紙主筆にして加州の有力なる政治家たるチエスター・ローエル氏の如きも亦出來得る限り排日運動が擴大せしめざることに努め、日本人の待遇を現狀以上に惡化せしめざることを希望して居ると傳へらるゝ。又サンフランシスコ附近のキリスト教會が聯合して今春以來排日運動の鎭壓に苦心し、委員を設けて其方法を研究したるのみならず、各教壇よりも正論を鼓吹する申合せをしたと云ふが如き報道もあるのであるから、我官民の代表者が是等の勢力と呼應して加州に於ける排日論の根據を覆すべき大遠征を試みると云ふが如き事も焦眉の急であると思ふ。日本政府及び其代表者は今日に至る迄米國の新聞紙を大仕掛に活用し、日本に對する誤解を釋き、其反感を緩和する事に絶えて努力した事無きのみならず、吾外交官は少數の例外はあるが、概して世界各國の文化運動乃至勞働運動に關する智識無く、排日運動の中心勢力たる勞働組合の首領や排日主義の政治家などゝ往來して議論を戰はし、意志の疏通を計る能力を持たなかつた。然し若し我官民の代表者の人選其宜しきを得て大規模に彼等と意志の疏通が出來るなら問題の解決は意外に容易かも知れない。最近鈴木文治氏が二三度米國の勞働組合を歷訪しただけでも、米國勞働者と意思の疏通を計る上に於て從來の外交官以上の仕事が出來たることは爭はれない。

元來排日運動は普通の外交問題と異なり客觀的事實よりも寧ろ主觀的推定を主要なる基礎として居るのであるから、普通の外交上の懸案の如く仲裁々判や戰爭等に依つて一氣呵成に解決し得べきものではない。從て米國人の日本人に對する誤解及び反感の基礎たる主義的推定を打破する事が眞の根本的解決であるのであるから、其打破の方法が法律的又は軍事的に非ずして、倫理的及び教育的であらねばならぬのは自然の數と云ふべく、從て其根本的解決に到達する迄に多大の時日を要することも亦實に止むを得ないのである。

（八）

然し加州在留日本人と、加州米人との衝突よりも更に恐るべきものは、軈て益々痛切ならんとする日本國民對米國民のアジヤ大陸に於ける衝突である。日本が加州問題の爲に米國と戰ふ

と云ふが如きは、加州問題ゝ性質上有り得ない事であると同じく、米國も亦單なる加州問題の爲に日米の國交を犠牲とする程の無謀 敢てしないと思ふ。從て加州問題は日本民族の前途に取つて重大なる問題であるには相違ないけれども、然しそれが今直に日米國交斷絶と云ふが如き重大なる外交的結果を生むとは考へられない。從て日米兩國のアジア大陸に於ける衝突程重大ではない。日本がアジア大陸に於ける米國との衝突に於て加州に於ける日本移民の如き地位に陷らるゝ事ありとせば、それこそ日本民族自身の滅亡であるのみならず、米國は此衝突を機會に或は自國の太平洋岸諸州に於ける日本移民をも悉く軍隊の力に依て放逐するに至るかも知ない。嘗て歐洲の某國に駐在したる米國外交官、匿名にて"American foreigne policy"即ち「米國對外政策」と稱する著述を公にし大に讀書界を驚かしたのであつた。彼は米國の富源が如何に大にして遍く世界の需要に應ずる經濟力を有するかを說き、「斯の如く世界の需要に應ずるに足る雄大なる國土を有する我等は如何で新世界にのみ屛息して他の世界と沒交渉たるを得んや。米國が各世界の外交問題に發言權を有すべきは自然の數なり。殊に極東の中立市場を維持するの緊急なるは勿論にして日本が排他勢力を得んとするは最も粉碎すべき禍敵なり」と吟じたのである。誠に此言の如く、米國の經濟的侵略は、凡てアジア大陸に對する米國の侵略的外交を誘致せずには止まぬのであつた。是に於て米國は先づアジア大陸中の最大強國にして然も米國と同一の共和政體を有する支那が近來日本と快からざるに乘じ、是と結托して日本ゝ勢力を支那より驅逐して、アジア大陸を米國商品の販路となすの基礎を確立せんとし、今や或程度迄其排日的外交に成功しつゝあるのみならず、更に進んで日本政府の外交及び殖民政策ゝ缺陷に乘じて朝鮮の獨立を煽動し、シベリアに於ける日本の勢力の排除を試み、日本は今や孤立無援の地位に陷らんとして居る。今若し日米兩國間に國交斷絶するが如き不祥事が起るならば、假へ日英同盟の成文が殘存するとも日本に對して米國と同樣の心理狀態を有する英領カナダ、及び濠洲は日英同盟の規定を守つて、果して嚴正中立の地位に止まるべきや否やは疑問であるのみならず、支那の民心は必ずや米國の勝利を希望すべく、恐らくは米國と呼應して日本の背後を脅かすであらう。シベリアに於て日本軍隊の爲に壓迫せられたる多數の過激派は必ずや奇貨措くべしとして所在に蜂起し第二、第三の尼港事件を演出すること明白なるべく、朝鮮、臺灣の如きに於ても不逞の徒は必ずや此機を捉へして獨立を計るに相違ない。斯くの如きに至れば、日本は恰も孤軍重圍に陷入れる窮鼠よりも更に困難なる狀

態に陷入るべく、假へ二十五萬圖の陸軍、百萬噸の海軍ありとも如何ともする事が出來まい。

米國の極東外交の主眼は日本を斯くの如き地位に陷入ることにある。然して米國は或程度迄其計畫通り一歩々々と日本を斯くの如き地位に陷入るゝ事に成功し、然して暗愚にして先見の明なき歴代の日本政府は、又自ら進んで一歩々々と其危險なる地位に踏み込みつゝある。米國の有名なる極東學者、ゼームス・フランシス・アボット教授は一昨年九月發行の雜誌「アジア」に於て日本のアジアに於ける外交政策が文化主義を基礎とせずして軍國主義を基礎とする事を痛擊し「之れ日本自らドイツと同樣の運命に陷らんとするものなり」と云ふて居るが、若し日本にして眞にアジアに於ける孤立の地位を脫出し、米國の世界的軍國主義に對して、全アジア人と共に全アジアの運命を擁護せんと欲するならば、省みて日本自ら先づ其軍國主義を棄り、全アジア人をして安んじて日本に倚り、信じて日本と提携せしむる事が急務である。そして日本は一日も早く其陷りたる孤立無援の地位より一歩々々と這ひ出さなくてはならぬ。

（九）

アジア大陸に於ける日米兩國の衝突が遂に避け難き運命であるとすれば、日本はアジア大陸の天王山を奪はれない工夫をする事が必要である。アジア大陸の天王山とは、云ふ迄もなく支那である。アジア大陸に於て生存競爭を試むるものは、支那を味方として勝ち、支那を敵として敗る。殊に日本は戰鬪員の關係に於ても、原料の關係に於ても、又根據地の關係に於ても常に支那と結合し、支那と一心一體であれば、假令世界より如何に猛烈なる攻擊を受くるとも毫も恐るゝ所はないが、誤つて支那を米國に奪はるれば、ドイツが露佛の大國を腹背に受けたるよりも更に重大なる窮地に陷る。固より日本がドイツの如き悲運に遭へば、遲かれ早かれ支那自身も亦白人種に對して、到底其頭を擡ぐる時期はないのである。日支兩國共に倒るれば爾餘の有色人種は永久に白人專制の脚下を脫する事は出來ない。故に日本にして眞に世界の白人專制を破り、世界をして全人類の世界たらしむる實を擧げんと欲するならば、日本自ら如何なる犧牲を拂ふとも、支那人と提携して之と一心一體となり、世界米化主義に對立して飽く迄世界文化主義を擁護することが必要である。思ふに今日實に支那に於てのみならず、ロシヤに於ても、又朝鮮及び臺灣に於ても常に日本國民に對する反感を排發し、世界文化主義を擁護するを天職とする日本をして世界文化主義の仇敵なるが如き非難を受けるに至らしめたるものは我軍

閥外交である。然るに今日に至る迄日本國民の多數は此軍閥外交の弊害を認め乍ら、而も軍閥外交を打破し得なかつたのである。私は軍人を尊敬するけれども、軍人が其職務以外の外交に容喙して、恣に國運を決せんとする事は、却て軍人の本領を自ら傷くるに等しいと思ふ。

彼の普墺戰爭に際し、サドアの一戰に於てプロシヤ軍はオーストリヤ軍を破り、勝に乘じて縣軍長驅してオーストリヤ首府ウヰンナに迫り、城下の盟を爲さしめんとした。然るにビスマークの深謀遠慮なる、プロシヤはオーストリヤに對し實力の彼に勝れる事を示し、以てドイツ民族に對する號令權を收むれば足る。百年の敵はオーストリヤに非ずして寧ろフランスにあり、今若しオーストリヤをして城下の盟を爲さしめ、其恨を千載に殘さしむるに於ては、他日プロシヤが佛國の壓迫を蒙り、全力を盡して之に當らんとするに際し、背後より其復讐を蒙るべきは必然のみ、既に一たびオーストリヤをしてプロシヤの實力の優越なるを認めしめたる以上、直ちに兵を還し、速に恨を解いて、全ドイツ民族の提携すべき素地を作らざるべからずと主張し、頑として唯一人軍隊のウヰンナに進むるに反對した。是にはモルトケ將軍と雖も猶且つ異議を挾み、軍隊中に於ても青年士官の如きは憤激の餘りビスマルクを呼ぶに卑怯者を以てし、私かに彼を狙擊するに至つた。ブルンチユリー氏の「同胞殺し」に依れば、ビスマルクは此人々が彼を卑怯者と呼べるに憤激し、プロシヤ王に拜謁し「陛下倘ほ軍を進めんと欲せば請ふ臣が宰相たる任務を解け、予は一兵卒となつて軍に從ひ、陛下の馬前に於て予が決して怯懦なる人物に非る事を證明せん。」と云つたといふ。此に於て遂に其軍隊はプロシヤに還るに至り、オーストリアの態度は、ビスマルクの想像したるが如き結果を齎した。果して後年プロシヤがフランスと戰を交ふるに至るや、オーストリヤは能く背後よりプロシヤを攻擊しなかつたのみならず、非ドイツ派のボイグト宰相を辭し、親ドイツ派のアンドラシー之に代るに及んで、遂に獨墺同盟條約成り、兩國は共同して露佛の壓迫に對する事となつた。而して今回の大戰に際し兩國は殆ど一心一體となつて、世界の列强を相手に奮戰したのである。

我日本に軍閥外交を抑へて兩國共存の基礎を確立し得る一人のビスマークがないのであらうか。固より今日の霞ケ關外交官中にビスマークを求むる事は不可能である。然かし六千萬の國民中一人のビスマルクなしと信ずる事は出來ない。先づ日本外交の少數專制を打破し、六千萬の國民より衆智衆力を動員して之に當らしめよ。之れ實に日支共存の根本義を確立し、米國のアジアに對する世界的帝國主義の實現を不可能に終らしむる唯

一の途である。日本のアジア大陸に於ける地位の確立は、縱て又加州排日問題に對する我發言權をも重大なるものとするのである。故に日米外交の根本的解決は、言は頗る奇激に似たれども、結局霞ケ關外交を打破し、進んで黨閥外交を打破し、日本國民自ら世界文化主義を理想とする國民外交を行ふの一點に歸する。（完）

社會問題として見たる最近に於ける迷信流行の傾向

大山郁夫

一

最近に於ける大本敎の異常なる傳播は、或る意味に於て主要なる社會問題の一つと見做されるやうになつて來た。この頃の諸新聞紙の社會面は、それに關する何かの記事を載せて居ない日が殆んどないといつた程の有樣である。それほども、一般公衆の注意が、この問題に向つて牽き附けられて居るのである。

一般公衆の注意が斯ういふ風にこの問題に向いて牽き附けられて居るのは、無論、大本敎そのものゝ本質的價値のためではない。大本敎の信者達に取つてこそ、それは世にもありがたい宗敎に相違なからうが、一般公衆に取つては、それは馬鹿げた迷信の數々の寄せ集めから出來て居る宗敎擬ひのものにすぎないのである。で、單にかうしたものが、世間のどこかの片隅にころがつて居るといふだけのことだつたり、別に誰れもが氣にとめないでも濟むことである。が、しかし、事實はさう簡單な譯でなく、この大本敎はいつのまにか全國の各地方に宣傳せられて居て、今では侮るべからざる勢力となつて居るのである。しかも、それが無學文盲の人達の間にばかり認められて居るだけのことならまだしもだが、相當の程度の敎養のある、いはゆる知識階級のうちにでも、それに歸依して居るものが少からず

ある、といふことである。かういふところから、この大本教の流布といふことが、現代に於ける一つの奇異なる社會現象として、公衆の注意を牽き附けるやうになつたのである。

諸新聞紙の傳ふるところによれば、いはゆる知識階級のうちでも、特に各種の迷信と縁の近いのが此り相場になつてゐる高級軍人の仲間に於て、この大本教が可なりの勢力を持つて居る(低い等級の軍人の仲間に於ても矢張りさうだらうが)といふことであるが、これだけのことならば、まだ〳〵別に不思議がある程のことではない。かの日蓮主義の如き、我々の眼には狂氣じみた軍國主義の福音位にしか映じない教義すら、高級軍人の仲間に於て若干の熱心なる渇仰者を持つてゐるといふ始末だから、それとは多くの點に於て似寄つたところのある大本教が、矢張りこの同じ圏内に多數の信者を得たからといつて、それは別に怪しむに足らないことである。しかし、此大本教が幅を利かせて居るのは、單にかういふ軍人達の仲間うちばかりではなく、それは、銀行員とか、會社員とか、官吏とか、青年學生とかの間に於ても、相當の地盤を開拓して居るといふことである。しかのみならず、時としては、それだけでも「最高學府」と自稱して居る官立大學の學士の肩書を持つて居て、しかも或る程度の社會的信用をさへ得て居る人達のうちにでも、大本教に歸依して居るものが相當にあるやうにいはれて居る。かういふ人達の中には、ある物質上の利益を宛て込んでさうしてゐるものがないには限るまいが、しかし皆が皆までさうだとは、決して言へないのである。それからまた或るものは、何かの心理的轉機で大本教に迷ひ込んだものゝ、あとで段々その馬鹿げたことが判つて來たが、さうと氣が附いた時には最早それから脫け出られなくなつて居たといふやうな破目に陷つて居るものも、また決して少くはあるまいと考へられる。が、かういふことを十分勘定のうちに入れて考へても、それでもなほ、大本教のやうなものが世間に蔓延して、そして知識階級の一部をも侵して居るといふことは、そのまゝ輕々に看過してしまふことの出來ない現象である。これはたしかに、社會問題の一つとして、相當の注意を以て考察すべきものであるに相違ない。

二

大戰後に迷信が流行しかけたのは、單に我國だけに起つた現象ではなく、世界各國を通じて起つた現象らしいのである。そして、この事に關するあらゆる事實を精密に調べたら、恐らく、大戰の戰はれた場所や、それに近接して居る場所に於て、そしてまた、大戰に直接に參加した諸國民の間に於て、あらゆ

る種類の迷信が最も盛んに跋扈して居るのであつて、我國の如きは唯その餘波を受けて居るのに過ぎない、といふやうなことになるかも知れない。それは兎に角、大戰後の世界各國に各種の迷信の流行りだしたといふことだけは、最早推測を通り越した事實である。新聞紙の報道によると、大戰の結果久しく開會を見なかつた世界自由思想家大會が、このたび戰後第一回の會合を新興國たるチエツコ・スロヴアキアの首府プラーグに於て九月五日から九日までの五日間に亘つて開催することに決したが、そこでは、戰後の世界に大流行の迷信を如何にして除くべきかといふことが重要議題とせられる筈だ、といふことである（八月二十日の『東京日々』の社會面參照）。この報道が眞實を傳へたものだとして見ると、迷信の大流行といふことがヨーロツパ諸國に於ても大問題となつて居る事實が容易に察せられる。がさうでなくとも、さうした傾向が、そこでも甚だ顯著に現はれてゐるといふ位なことは、誰れにでも見當がつくことである。

かういふ譯であるから、現下の世界に於ける迷信流行の趨勢から出發して我國に於けるそれの社會的意義を考察することも可能であれば、現下の我國に於ける迷信流行の趨勢から出發して世界に於けるそれの文明史的意義を類推することも可能である。唯、私達自身だけの立場から言へば、前者を企てることは、材料の蒐集の關係上、今のところではまだ出來ない相談であるが、しかし、後者を試みることは、我々の眼前に展開せられて居る幾多の諸事實から取材すればいゝ譯であるから、全然及びも附かないことゝは言はれないのである。縱しまた、此迷信流行の趨勢の世界に於ける文明史的意義の探求といふ風に大きく出なくとも、この趨勢の我國に於ける社會的意義を討究するといふことだけでも、我々に取つては、可なり重要な仕事だといはなければならぬ。若しこの問題を正解することが出來れば、我々はそれから各方面に向つて考察の手を擴げて、さしづめ我國の現在の社會的及び政治的病弊の根源を知ることも出來れば、それに對する救治策の端緒を探り當てることも出來るのである。少くとも、私自身はさう考へて居る。であるから、私は先づこの戰後の立場から現下の我國に於ける迷信流行の傾向に關して或る考察を試みようとして居るのである。斷るまでもなく、この企てに於ては、私は私の努力を、唯この傾向の社會問題としての意義の探求の範圍内だけに限る積りである。

三

迷信はいつの世にも、また、如何なる處にも存在する。それは、原始時代から今日に至るまで、世界に亘つて行はれて來た

ものであり、また、現に行はれつゝあるものである。

科學は段々に迷信の範圍を狭めるものだとは、多くの人々に依つて言はれて居ることである。この見解がたゞしいものだとすると、科學が尚ほ發達せず、從つて自然力に對する理解が缺けて居た原始社會に於て、迷信が、それに常に伴つた魔術とか巫術とか、託宣とかいつたやうな種々の怪奇なる儀式と共に、人々の生活のすべての方面を支配して居たのは、當然のことだともいへるのである。しかし、さういふ原始社會のことは兎も角として、今日に於て見るやうに、偉大なる物質的文明が科學の勝利を誇り顔に幅を利かせて居て、しかも一部では科學の萬能を稱へる讃歎さへも聞かれる世の中に於て、迷信が依然として跡を絶たないばかりではなく、時としては或る事件に誘發せられて中々すばらしい勢を以て蔓延する傾向をすら見せることがあるのは、一體どうした譯であらうか。

もつとも、今日に於ては科學が發達して居るといつても、それは比較的な話であつて、今日の科學の發達の程度を以てしては、決して宇宙の秘密が悉く開かれる譯には行かないといふものがあるが、それはさうであるに違ひない。それからまた、かの最近までのところでは科學界に於て絶對の權威として認められて居たニユートンの引力の法則にしても、アインシュタインが戰時中に大成した萬有引力論に依つてもの凄い多大の制限を受けたやうに、今後に於ても、科學界に於ける定論は幾たびも起り得る餘地があるといふものもあるが、これも我々のやうな門外漢にでも首肯し得られることである。更にまた、科學萬能といふこともそれ自身が既に立派な迷信であるといふものもある。斯ういふことは、我等の知つて居る範圍内では、主としてカトリック教の側から言はれて居ることであるが、かういふことも、その意味の解釋次第に依つては、我々にも全然承認が出來ないことでもない。

かういふことのすべてを承認してかゝつても、少くとも現代の科學的常識から見て迷信であることが明白なものだけは、現代に於ては跡を絶つてしまつてもよかりさうなものであるが、それが中々さう行つてゐないことは、我々が一應は疑問として見る價値のあることである。もつとも、現代に於ては、少くとも或る程度に於て科學が發達して居るといふものゝ、その教養に於ては毫もその恩恵を受けて居ないところの、所謂無學文盲の人達も隨分多くあることだから、かういふ圏内に於て、各種の迷信が盛んに流布して居るからといつて、それは毛頭不思議とするにも値らないものだ、といふことも出來よう。しかしながら、時とすると、科學者自身が奇妙な迷信の俘となることが

あることは、ダーウィンと時を同うして生物進化の理法を發見したといはれて居るサー・アルフレッド・ラッセル・ウォーレース及びその他の有名なる若干の科學者達が一種の心靈術を信じて居たといふ實例に依つても判ることである。こんなことは縱し例外的現象として扱ふべきものであるにしても、それでも尚ほ、現代の教育制度の下に於て或る程度の科學的知識を注ぎ込まれた筈の、いはゆる知識階級に屬する人々の間にも、現代の科學的常識では明かに迷信だといふことが判り切つて居るものが相當の勢力を持つやうなことが絶えず起るのは、一體どうした譯であらうか。

精確にいへば、「現代の科學的常識」といふことにも、種々の議論の餘地があらうが、私は玆ではかうした異論の起きさうにもない問題に立ち入ることを避けて、この點に關しては直に客觀的テストを用ひて私の議論を進めようとして居るのである。といふのは、私の當面の論點を明かにする目的のためには、さうするだけで充分であつて、それ以上の詮議立ては全然不必要だと考へて居るからである。で、この立場から大本教のやうなものに就いて言ふ時には、全體として我國のあらゆる種類の印刷物のうちで最も頒布高の多いことの疑ふべくもない諸新聞紙は、いづれも皆一樣にそれを迷信と呼んで居るのみならず、大本教の信者以外の一般公衆は、少くとも大體に於ては、この呼び方を承認して居るのである。否、現在に於て大本教を信じてゐる人達の中にでも、始めの程はそれに對して變な迷信もあるものだ位に考へて居たものも、決して少くはない樣である。かういふ連中が、この迷信の正體を見破るつもりでそれに近づいて居るうちに、いつの間にか木乃伊取りが木乃伊になる格で、自からそれに囚はれてしまつたといふやうな實例も、私達の聞き知つて居る範圍内でも少くないことである。そしてまた、その範圍外では更に多いことであらうと思はれる。

かういふ風に、その信者以外の、常識のある公衆には一般に迷信だと考へられて居る大本教といふものが、單に無教育者間に侮るべからざる勢力を扶植してゐるばかりではなく、いはゆる知識階級の一部をもどん〳〵と浸蝕しかけて居る事實を見れば、それを一つの重要なる社會問題として取扱ふ價値は充分にあるものだといへるのである。殊に、最初はからかひ半分に大本教に接して居たものが、いつの間にか本物の大本教信者となつてしまつたものが、いはゆる知識階級中にも少からずあるといふことは、この問題の一つの社會問題としての重要さを増しこそすれ、決してそれを減ずるものではないのである。

大多數の流行を一種の變態心理的現象として研究したものには、前に掲げた意味の『木伊乃取が木乃伊になる』といつた運命に陷らなかつた一人であるところの中村古峽氏がある。氏は最近に於て『大本教の解剖』といふ著書を公にされたが、私はそれをまだ讀んで居ないから、それについて何ともいふことは出來ない。が、氏が同じ問題に關して去る七月下旬の『讀賣新聞』に連載せられたものを、私は多大の興味を以て通讀して、色々の事實を敎へられた。しかし、中村氏の大本敎の流行に對する批判は、姉崎博士も指摘して居られる通り（八月十一日の『東京日々』の第七面、及び十二日の同紙の第六面に連載せられた同博士の論文『大本教について』參照）、主として個人心理の立場から述べられたものであるから、それを社會問題の一つとして取扱ふ場合に於ては、當然社會心理的說明を以て補足すべきものである。かうした意味の補足といふことをその目的の一つに合ませて、姉崎博士は、右の論文に於て、大本教が一部の熱狂者を生じ、殊に軍人連の中に迷信者を出して居るのは、要するに『時代相應』なことだ、と說明して居られる。そして、博士が『時代相應』といつて居る意味は、若し私の解釋が間違つて居なければ、第一は大本教には現前直接の利益（健康を主とし、財産問題之に次ぐ）に訴ふる部分があり、第二には、それには假令未來の世界戰爭に於ける日本の全滅の豫言といつたやうなこの頃軍人間に流行してゐる偏狹なる愛國主義に投合する部分がある事實を指して居るものである。さうして博士はそれに附加して、我國の科學教育は、まだ〳〵注入的段階を通り越して居ないで、それには殊に、科學研究の眞精神ともいふべき批評分析及び歸納研究といふものが缺けて居るのだが、この事は知識階級の人々をも迷信者とならしめ、狂者とならしめるに至る原因だ、といふやうな意味を述べてゐられる。

姉崎博士の說明は、一應その儘承認が出來るやうであるが、しかし、私の考へでは、最近に於ける大本敎の流行といふ現象の社會心理的說明としては、それはまだ〳〵不充分であると思ふ。少くとも私は、それはまだ、根本的說明といふ程度には行つて居ないものと思ふ。私は、社會心理の立場からのこの現象の根本的說明といふものは、どうしてもそれを現代の社會組織の根本原則と結び附けてゞなければ出來ないものだと思ふ。そして、私は、かうした點から出發して到達した私の說明を、次に試驗的に提出してみようと思ふ。私は私の說明でもすべての要點を盡くすことが出來るとは思はないが、私が問題の核心だと思ふものだけは述べてみる積りである。少くとも、本文の主題を闡明するために必要なる範圍内に於ては、それを試みてみ

る謬りである。

四

迷信が科學の絶無若しくはその幼稚といふことに或る關係のあることは、いはゆる自明の理に屬することである。で、私はこれに對して敢て異を樹てようとしてゐる譯ではない。しかしながら私は、迷信を一つの社會現象として眺めるときには、前段にも述べた通りに、それを科學の絶無若しくはその幼稚といふ單一の原因に歸してしまふことは、不充分でもあり、また當を得てゐないものでもある、といはうとしてゐるのである。

社會學者たちの研究を綜合すれば、原始社會の人々の生活事實及び人事關係のすべての上に、彼等の身邊を絶えず脅かして居た生の不安及び死の恐怖といふことの影が、まざ〳〵と反映せられてゐたといふことは、疑ひを挾む餘地のないことのやうに思はれる。して見ると、原始人らの生活事實に於ける最も顯著なる特徴の一つとみるべき迷信といふことも、その來源に向つて溯つて居ると、結局はこの原因にまで辿り著かねばならないものであるといふことも、何の無理もなしに、自然と考へ附かられることである。

原始人らの間に於て、かうした生の不安及び死の恐怖の絶えなかつた譯は、まづ第一には、彼等が求めることが出來た食物の量が僅少であつたことゝ、もう一つは、彼等が自然力に對して持つて居た理解の缺乏してゐたことである。といふうちにも、殊にその直接の、そしてその主要の原因となつて居たものは、いふまでもなく前者であつた。自然力に對する理解の缺乏といふことは、風雨雷電地震山鳴といつたやうな諸現象に對して原始人らが持つて居たところの、今日の我々には殆んで想像もつかないほどの戰慄を與へることに依つて、大に彼等の生の不安及び死の恐怖の實感を挑發したには違ひないが、しかし、自然力に對する理解の缺乏が彼等に向つて、文化發達の低い段階に在る人々に向つてよりも、一層痛切に生の不安及び死の恐怖の實感を與へた所以は、主としてそれが彼等をして食物の獲得に關するより簡便なる手段方法を發見することを得さらしめたからであるに違ひない。斯う考へて來ると、彼等を取卷いて居た不斷の生の不安及び死の恐怖に對して最も直接の關係を持つて居たものは、畢竟、食物を得ることの困難といふ一つの經濟的事實であつたことが、一層明白になるのである。

人間の生涯の行動の衝動は「空腹と戀愛と」に限れて居るものだといふのが、Lippert の發した警句だそうだ（オッペンハイマーの「國家論」—— Franz Oppenheimer, Der Staat, 1912

――の二一頁から）、いかにも人間社會の生活事實の眞相を詳にすれば、それをかういふ言ひ方で簡約することも出來るのである。だが、この二つの主なる衝動のうちでも、人間の自己保存の本能を代表する『空腹』の方が、その自己複製の本能を代表する『戀愛』よりも、寧ろ人間の行動の最後の決定者だと見做されることに對する優先權を握つて居るものであることは、諄々しい說明を須つまでもあるまい。それは、『命あつての物種』といふ我々の俗諺が、何よりも最も如實に言ひ現はしてゐることである。

五

原始人らの間に於ける迷信を、彼等の食物を得ることとの困難といふ一つの經濟的事實に歸してしまふことは、決して無理な憶測ではない。彼等の間に於ける迷信は、まづ第一段には、彼等の上に絕えず臨んでゐた生の不安及び死の恐怖の諸問題の解決に際して彼等を導く指針としての役目を務め、そしていよいよ最後といふ場合に於ては、彼等をして安んじて死に就くことを得しめる麻醉劑としてもちゐられて居たものであつたが、しかし、彼等の生の不安及び死の恐怖は、彼等の生活狀態の簡單さから、食物獲得運動の上に最も露骨に現はれて居たものである。たとへば、食物獲得運動を中心として、彼等と自然との間の戰ひが戰はれたり、また同じことを中心として、彼等の種族と異種族との間の相互的掠奪鬪爭が行はれたりして、そしてさういふことの裡に、彼等の生涯を暗きものにしてしまふ契機が隱されてあつて、從つてそこに彼等の間に行はれてゐた一切の迷信の芽生えが潜んでゐたのである。

自然力に對する理解の缺乏もまた、原始人らの迷信の原因となつたものに相違ないが、それは前にも一言した通りに、その最も多くの、そしてその最も主要なる場合に於ては、食物を得ることとの困難といふことを通して、さういふ働きを示して居たものと見るのが至當である。

科學といふものは、その最も幼稚な形式のものからして既に人間が自然力に對する理解を得ようがために試みた努力の結晶であつた。そしてそれは、先づ人間の自然力に對する理解を開發したり、また、人間に簡單なる器具を作ることを敎へたりすることから始めて、次第に食物獲得運動を容易にすることに依つて、それだけづゝ生の不安及び死の恐怖の餘地を狹ばめて行つて、從つてそれだけづゝ迷信の範圍を縮めて行つた。この點からいへば、科學は文化發達上の後の段階に在る人々に向つて、迷信が原始的社會の人々に向つてしたと同じ仕事をして來て、

そして今でもそれをしつゝあるものだ、といふことが出來るのである。

しかし、科學は次第に生の不安及び死の恐怖の餘地を狭ばめて行き、從つてそれだけづゝ迷信の範圍を縮めて行つた、と私が今しがた言つたことは、それに何等の修正を加へないで、どんな場合にでもそのまゝ無制限に押し通すことができるものであらうか。この問ひに對しては、私は何の躊躇するところもなく、『否!』と答へようとするものである。

科學の出現は、その最も幼稚なる段階に於てさへ、人間の自然力に對する理解を開發したり、人間に簡單なる器具を作ることを敎へたりすることから始めて、一方に於ては、原始的形式に於ける生の不安及び死の恐怖の餘地を狭めて行き、從つてそれだけづゝ原始的形式に於ける迷信の範圍を縮めて行つたことは事實である。しかしながら同時に、科學はまた、他方に於ては、食物獲得運動から幾分づゝ解放せられたる人間の努力を別の方面に向はせるとに從つて、人間の社會生活の内容を次第に複雜化する原因となつた。そして、斯うした過程に從つて人間の社會生活が次第に複雜化するに從つて、生の不安及び死の恐怖は、次第に別樣の形式を取つて現れる樣になり、從つてそれに伴ふ迷信にしてもまた、次第に別樣の形式を取つて現はれる樣になつた。かうして段々に變化して來た生の不安及び死の恐怖、乃至、迷信は、其形式に於ては、最早原始的のそれらではなくなつてゐた。――もつとも、原始的のそれらのまゝの形式で存續したことも、隨分例のあつたことであるが。――けれども、かうして段々に變化して來たそれらも、その最初の原因に溯つて考へるときには、矢張り『空腹』の充足といふ一つの經濟的事實、――若しくはその變形にすぎないところの、『より良き生存』に對する憧憬といふとに基因してゐるものである。

六

私が前々から述べて來た樣に、迷信といふ社會的現象を始めとして、其他一切の人間の社會的生活事實までをも、結局に於ける經濟的事實に根ざして居るものとして見るやうな考へ方に對しては、ある方面から屹度異議の出て來るであらうことを、私は豫め充分覺悟して居る。そして、かうした種類の異議が、殊に『風致の維持』といつたやうなものを山家の專賣特許品とでも心得て居さうな道學者や其仲間――主として『御用學者』といふ稱呼を冠して居るところの――側から、最も高聲に叫ばれるであらうことをも、私は百も承知で居る。そして、彼等はかういはうとするであらう。――さういふ考へ方は、一切の人間の行動

に關する高尚な、動機といふものを否認する結果になるものである、と。

しかし、若しも彼等が實際こんなことを言ふものとしたら、それは飛んでもない見當違ひである。さうだ、私がさういふ考へ方をするからといつて、私が一切の人間の行動に關する高尚なる動機といふものを否認しようとして居るものだと思ふのは大きな見當違ひである。まづ第一に私は今、個人的生活事實としての人間の行動に就いて話して居るのではなく、社會的生活事實としての人間の行動に就いて話して居るのである。もつとも、今日の通常の社會狀態の下に於ける各個人の各行動は、いづれとして純然たる個人的生活事實としての意味ばかりを持つてゐるものはなく、從つていづれとして社會的生活事實としての意味をも加味してゐないものはない、といふ言ひ分も成立つであらう。で、それも承認してよろしい。さうした場合に於ても、私の考へでは、社會的生物としての人間の行動の『高尚』とか『醜惡』とかを評價する最後の決定者は、社會生活若しくは集團生活といふものゝ、複雜なる意味に於ける生存上の合目的性といふことを外にしては、別にある譯がないのである。それと離れたどこかの邊に、人間の行動の動機の善惡正邪を決定する尺度といふべき超越的原則があるのだといふ見方は、私が與することの出來ないところのものである。私をして言はしむれば、人間の行動の動機に關聯して發せられる「高尚」とか、「醜惡」とかいつた言葉は、どこまでも社會生活上の、若しくは集團の生活上の表現である。かうした立場から、私は人間の行動の動機の高尚なものをも、醜惡なものをも、共に否認しようとはしないのである。

イギリスの碩學であつた故のモーヅリー博士は、戀愛と性慾との關係について、かういつて居る。——『戀愛は明かに性慾に根ざしてゐるものであつて、そしてそれが自然の理法に依つて徐々に社會的展開を遂げて行くまに〳〵精神化せられたものである。それ故、空中に咲く美しき花は、地中にあるその醜き根を蔑むの權利を持たないのである。』(同氏著『有機的から人間的へ』——Henry Maudsley, Organic to Human, 1916——の一五〇頁から)。前揭の Lippert の意味に於ける『空腹』の相棒たる『戀愛』に關してモーヅリー博士が言つて居る言葉をその儘借用して私はそれを、『空腹』そのものと、それに根ざすところの、人間の行動の高尚な動機といふものとの關係の說明に適用したいのである。たゞし、經濟的事實といふものを、「醜き根」といふやうな侮蔑的意味に解せられる表現を以て形容していいかわるいかは、それに對する人々のそれ〴〵の主觀的判斷に依

つて決まるものであつて、經濟的事實そのものは、もと〱普羅発說の批判を離れてそこに存在して居るものである。

七

引用序でに、もう一つアメリカの社會學者であるトッド博士が、原始人の迷信について言つて居ることのうちから、次の一節を紹介しよう。それは、私が今取扱つて居る問題に關して、ある重要なるヒントを與へるものと思ふから。

「原始人らの間に於ける魔術や其他の迷信に注意を喚起するのは、決して侮蔑的意味を含ませてのことでない。なぜなら、迷信といふものは、唯程度上の言葉にすぎないのだから。それは積極的の誤謬といふよりは、むしろ不充分なる眞理といふべきものであつて、そしてそれは、決して野蠻時代ばかりに特有のものだといふ譯には行かないのである。なぜなら、我々自身にしても、過去からの迷信の遺物若しくは我々自身新製の迷信の無盡藏の浴泉に入り浸つて居るのだから。迷信は外部から押つ冠ぶされた或るものでもなく、または、生の他の諸要素と分離して存在してゐる或るものでもない。それは、生の——主として災害の——諸問題を解決しようとする試みであり、一つの實效ある假說を、一つの人生哲學を打建てようとする試みである。それは斧や、槍や、火や、藥や、政府などゝ同じやうに、生の諸利益を增進しようがための道具である。若し文明人が錯骨な種類の迷信を利用する處がより少いとすれば、それは彼が同じ仕事を完成するために、より好き道具を發明して居るからである。それ故に神話と科學とは、その本質に於てもその起源に於ても一つなのである。」

（トッドの『社會的進步の原理』—— Arthur James Todd, Theories of Social Progress, 1919 ——の八九頁から。）

斯ういふ風に、迷信は外部から押つ冠ぶされたものでなく、生の諸問題を解決しようとする人間の內心からの衝動に驅られて生じて來たものであるといふ立場から出發して、それは、同じ仕事の完成のためのよりよき手段のない間は、必然的に人間の心に宿るものであるといふことも推論し得られるのである。そしてこの解釋は、迷信の流行を一つの社會問題として取扱ふ時に際して、多くの疑問の上に光りを投げ與へれるものである、と私は考へて居る。しかし、これは、私がもつと後段へ行つてから觸れようとしてゐる一つの要點である。

八

一つの社會現象として見たる迷信といふものは、他の一切の

人間社會の生活事實と同じく、其原因を奥へ奥へと遡つて行つて居ると、それは結局、食物の獲得といふ一つの經濟的事實に行詰くものであることは、私が既に前段に於て述べたところである。そして、その時にも言つた通り、各種の迷信に衝動を與へる直接の刺激物たる生の不安及び死の恐怖（以下の表現の簡單を謀る爲に、此二つの意味を『生存の脅威』といふ言葉に含ませて、それを用ゐることにする）は、原始社會に在つては、最も多くの、そして最も主要の場合に於て、最も頻繁に食物獲得行爲といふことの上に現はれて居たのだから、その間の關係が比較的に簡單明瞭であつた。ところが、現代の文明社會になつては、人々の生活内容が非常に複雜なものになつて來た結果として、『生存』の上の要求にしても、單に『空腹』の充足といふことが主になつて居ることとの明瞭なものばかりから成立つて居る譯でなくなり、その外に尚は、普通『文化的』といふ言葉で形容せられて居る樣々の要求をも含むやうになつて來た。で、斯うなつて來ると、『生存の脅威』といふことも無限に複雜なる形式で現はれるやうになり、從つて、それと異なる『空腹』の充足といふ一つの經濟的事實との距離が非常に懸け離れたものとなつて見えることもあるのである。しかしながら、いくら懸け離れてゐるやう見えても、空中に咲く花を枝から幹へといふ風に次次と辿つて行けば、遂に地中の根に到達すると同じやうに、いくら『文化的』若しくは『精神的』意義を持つて居る『生存』の要求にしても、或る點に於ては、その根ともいふべき『空腹』の充足といふ一つの經濟的事實を交渉して居るのである。かういふのは、前にも言つた通り、決して『生存』の要求の『文化的』若しくは『精神的』意義を輕視して居るためではなく、いはゆる精神的若しくは文化的生活を物質生活とは縁もゆかりもないものとして眺める見方に反對していふものである。

社會組織の各樣式が、その根本に於ては右に述べた意味の『空腹』充足手段の別名たる『生産』の樣式といふ一つの經濟的事實と密接なる關係を持つて居るものであるとはいふまでもない。さうだとして見ると、迷信といふのも、それが行はれてゐる時代の社會組織と關聯して考へなければ完全に理解ができないものだ、といふことになるのである。私は斯くして、今漸く私の出發點に立歸つて來たのである。

當面の時代の社會組織と關聯して考へなければ完全に理解ができないものは、前々からの論述の裡に暗示せられてゐる通り單に各時代の迷信ばかりではなく、各時代の政治上及び法律上の機構を始めとし、科學、哲學、藝術、風俗、習慣の如き一切の社會現象も、皆さうでないものはないのである。そして、是

等のものが、その時代の社會組織と關係があるといふことは、結局、是等のものがその時代の社會組織を通して、當該社會組織の根本となつてゐるその時代の生産の樣式と關係を持つてゐるものであるといふことになるのである。この點は、詳々しい說明を要することでもなからう。しかし、今は迷信以外の社會現象のことを言ふ機會でないから、それはこれ切りにする。

單純に迷信が社會組織と密接なる關係を持つてゐるといつても、その中には、迷信の內容や、その形式やの問題も含まれて居れば、また、非直接の刺戟物たる「生存の脅威」の問題も含まれて居るのである。で、今まづ第一に迷信の內容や形式と社會組織との關係からいへば、社會組織の樣式の進化するに從つて常に新しき迷信の內容や形式やがつくられて行くとは、原始社會に於ける共産的部落生活の下に於ても、封建的社會組織の下に於ても、資本主義的社會組織の下に於ても、それぞれの社會組織に相應した迷信が行はれて居るのを見ても判る。もつとも同じ社會組織の下に於ても、時代の推移するに從つて迷信の內容や形式の上に變化の起ることとも、實際に於ては屢々見ることであるが、しかし、迷信の形式や內容やの主要型は、矢張り上に述べた理由で、社會組織の各樣式に從つて大別するのが、最も當を得たものだと考へられるのである。

しかしながら、或る社會組織の下に於て舊社會組織の下に於ける迷信が、——そしてまた、或る時代に於て前時代の迷信が——形式をも內容をも變へずに、若しくは形式か內容かを變へずに、その儘存續することがあるのも、實際に於て屢々見られることである。そしてこの事は、迷信の內容の場合に於てよりも迷信の形式の場合に於ての方が、常により多く現はれるものである、と私に考へられるのである。たとへば、我々は、現代に於てさへも、或る迷信の內容が現代の社會組織から派生したものであることの證跡を明かに示して居るにも拘はらず、それに伴つて居る形式が原始社會に行はれて居たものと殆んど異つて居るところがないと思はれる樣な實例を、常に屢々目撃することができるのである。かういふことに對しては、社會生活の他の諸方面——殊に風俗習慣といつたやうな方面——に於てよく見られる通りの、人間の保守的本能が、舊來の形式に對する執着といふことの上に最もよく現はれるものであるといふ事實が、少くともその部分的說明となるものであるのかも知れない。

また或る社會組織內に於ける迷信の分布といふことも、右の事實に對する補助的說明として位の役目を務めることができるものと思ふ。原始的共産社會に於ては、共同生活團體の單位であつた一種族若しくは一部落全體が、大體に於て同樣の內容及

び形式を持つた迷信に支配せられて居たといつた状態が行はれて居たものと想定されて居るが、しかし少しでも複雜化した社會組織の下に於ては、もうさういふ事は跡を絶ち、そして各共同生活團體が、幾つもの社會群に分たれる樣になつた結果、各群がそれ〴〵自身の迷信を持つて居たり、または、比較的各種の迷信から離れて居た社會群があつたりするやうなことに、段々となつて來たのである。かうしたことは、遲くとも奴隷制度を持つて居た社會組織の下に於て發生し始めて、それから封建的社會機織の下に於ては、もう既に充分に完成して居たが、更に資本主義的社會組織になつて來ると、一層顯著に現はれるやうになつて來たのである。これらの社會組織は、この頃では最早極めて普通なものになつて居るところの一つの見方からすれば、先づこれを所謂掠奪群と被掠奪群との二大綱に大別せられ、この二大綱が更らにその細目ともいふべき幾多の小社會群に分たれて居るのである。そしてこれの小社會群は、或は職業を目安として、或は身分若しくは社會的地位を目安として、或は其他の原因に依て生じた集團生活といふものを目安として、といふ風に、無限に複雜なる方法に依つて分たれて居るが、迷信といふ現象は、他の多くの社會現象——たとへば、風俗習慣とか、日常の生活樣式とか、社會とか人生とかいつたものに對する見方とかいふやうな——と同樣に、樣々の割合でこれらの無數の社會群の間に分布して居るのである。もとより同じ社會群の中にでも、深く迷信に入り浸つてゐる分子もあれば、比較的に迷信から遠ざかつて居る分子もあり、また、同じ迷信が幾つもの社會群に亙つて流布して居ることもあるが、かうした迷信の分布關係は、非常に複雜なものであるから、唯その大體の傾向を指し示す以上のことは、殆んど不可能であるといつていゝ。そして、今茲で言はうとして居る迷信の形式に關しては、原始的形式、若くはそれから餘り多く懸け離れて居ない形式の迷信は、自然、無學文盲の人々が多く包容せられて居る社會群の間に於て最も多く流布し、比較的教養のある人々の多く包容せられて居る社會群になるほど、原始的迷信の範から遠ざかつた形式の迷信を受け容れ、或はあらゆる種類の迷信から比較的多く解放せられて居る、といふこと位はいひ得られる。しかしかういふのも、矢張唯大體の傾向を指し示すものに過ぎない。「唯一つ明確に言ひ得られると考へられることは、如何なる社會群といへども、全然迷信から解放せられてゐるものではない、」といふ事である。「迷信は程度上の言葉だ」といふのは、かういふことをいつたものだとして見るとき、一層意味の深いものとなるやうに、私には考へられるのである。

九

更らにまた、内容から見た迷信の分布關係の社會的意義を考察することは、非常に興味の多い仕事でなければならない。もつとも、原始的共産社會に於ては、大體に於て同一の形式内容の迷信が、種族若しくは全部落の内に行はれて居たが、奴隷制度を持つ社會組織から、封建的社會組織を經て、段々資本主義的社會組織へと降つて來るに從つて、各種の形式内容の迷信が次第に複雜なる割合を以て、次第に増加して來る社會群の間に分布せられる傾向が生じて來る樣になつた、といふ概括論は既に前段に述べたことであるが、私は今、社會組織の各樣式に關聯して内容から見た迷信の分布關係を特に細説する餘暇をも準備をも持合はせて居ないのを殘念に思ふ。けれども私は、本文に於て問題にして居る大本教の最近に於ける大流行の趨勢に對する觀察から、この點に關する或るヒントを得たやうに考へてゐる。今それを、次に手短かに述べてみよう。

各個人が持つて居る迷信の内容が、その性、年齡、職業、身分若しくは社會的地位等に大なる關係を持つて居るものであることは、いふまでもない。妙齡の婦人の迷信が戀愛の成否の豫占の上に現はれたり、老人の迷信が後生安樂の祈願の上に現はれたり、その他、相場師や、力士や、賣笑婦や、船乘りや、官吏や、軍人などの迷信が、それぞれその職業上の成功の希望の上に現はれたりして居ることは、我々が日常絶えず觀察して居ることである。時とすると、各種の迷信には最も緣の遠い社會群に屬して居るもののやうにみえる青年學生らさへ、彼等が難關と思惟する試驗期などに際しては、その無事通過を祈るために相當に迷信かぶれとなるやうな現象さへ見られないではないのである。

かういふ譯であるから、更らに迷信を一つの社會現象として大局の上からそれを觀察するときは、或る時代に於て如何なる種類の内容を持つ迷信が最も優勢を占めて居るかを知ることは、其時代の社會生活が如何なる性質のものであるかを知つたり、また、さういふ社會生活を包容してゐる社會組織が如何なる成り立ちのものであるかを知つたりする上に於て、少くとも補助的材料としての役目を充分に務めることができるものである。

で、前にも述べた通り、人類が過去に於て經過して來た社會組織の各樣式の下には、それに相應した迷信が行はれたものであるが、それを裏からいへば、茲で述べて居る通りに、或る時代に於て盛に行はれて居る迷信の内容を知れば、少くとも、其の時代の社會組織を知る助けにはなる、といふことになるので

ある。

斯ういふ立場から、我々が現在我國に於て最も優勢に行はれてゐる大本教を始めとし、それに類似して居る各種の迷信の内容を眺めるときには、我々は、我國の社會組織が現在經過しつゝある過程を指し示す樣々の徴候が、それらの上に極めて明瞭に浮び出て居るのを見逃す譯にはゆかないのである。もつともそれらの迷信に含まれてゐる健康とか長壽とかの享受といつたやうなことは、時處に拘はらざる人間の普遍的欲求を代表したものであるから、それは玆では問題外としていゝ。それからまた、財産の蓄積を主とした現世的福利の享受といつたやうなことは、私有財産制度を認めて居る各社會組織の下に行はれる迷信に通有のものであるから、これも玆で取り立てゝいふまでもないやうであるが、しかし、それも見方に依れば、それは我國の全社會組織が段々資本主義の上に根據を据ゑつゝある狀況を或る程度に於て反映してゐるものと見る所ができるのである。殊にかうした信仰關係が、大本教のやうな迷信的宗教に於ては投機的精神を煽るやうな幾多の讖言みたやうな豫言と結び附いてゐるのは、大戰中から吹き募つて居た黄金風といふ一時的現象と關聯して考へることができるものである。

しかのみならず、是等の幾多の讖言みた樣な豫言は、一方に於ては、我國の全社會組織の資本主義化を反映して居ると同時に、他方に於ては、斯ういふ風に資本主義化しつゝある我國の社會に於ても尙ほ儼然としてその立場を守つて居る封建主義的精神を象徴してゐるものである。大本教が帝國の將來に於ける繁榮なり富強なりを豫言してゐるのは、貿易政策に依つて世界の市場を征服しようとか、武力を背後にした金融政策に依つて海外に勢力範圍を打建てようとかいふ資本主義的精神を大跨に飛び越して、帝國が武力を以て世界を統一するといつた樣な、封建主義の顯著なる特徴をなして居る、武斷政策の主張と關聯して居るのである。

先きごろ、急に持上つて忽に立消えになつた、例の湘南地方に於ける列車の一等車輛連結復活問題に於て、我々は資本主義的精神の跳梁の外に、封建主義的精神の殘儘を認めたが、この問題に於ては、大臣の立往生防止とか、元勳の優待とか、代議士連の旅行の安易とかいつたやうなことに關聯して、封建主義は、それ自身の一面たる階級差別的精神を見せたが、それは、大本教の豫言に於て見られるやうな、封建主義の他の一面たる武斷的戰歷的精神と合體して、この方面に於ける時代相の全形を示してゐるのである。

一〇

其意味に於ては、迷信の直接の動機としての『生存の脅威』（生の不安及び死の恐怖といふ意味を含めての）といふ問題を研究することは、迷信の內容及び形式を研究するよりは、一層興味の多いことである。假りにそれは兎も角のことゝするも、私は記述の順序上、今はこの問題に向つて、——殊にこの問題が現在の社會組織に對して持つ交涉點に向つて、歩み寄らなければならないことになつて來た。

大戰後のヨーロッパに於て迷信が大に流行しかけたといふことは、さもあるべきことである。ヨーロッパに於ては、科學が非常に發達して居るといふことは、國々に依つて多少の相異があることを勘定に加へても、大體に於ては眞實である。けれども、ヨーロッパに於ても、その教養上に於て直接に近代的學の恩惠を受けてゐないものがまだまだ澤山あることは、各國の教育統計を見れば、直に見當のつくことである。それに、多少の科學的教育が行き渡つて居ても、迷信の力が教育の力よりも強く働いて居るところも少からずある。これは殊にカトリック教の勢力の盛んなところでは、戰時または戰後といはず、平時に於ても、よく觀察し得られることである。

それに科學は或る程度に於て迷信に取つて代はる能力があるとは言ひ條、それは絕對的のものではない。殊に『生存の脅威』が迫つて居る場合には、科學が迷信の前に於て持つて居る權威は、非常に稀薄なものになつてしまふのである。相當の科學的教育を受けたものが、瀕死の境に於て稱名を唱へたり、神の名を呼んで救を求めたりするのは、よくあることである。「苦しい時の神頼み」といふ我々の俗諺は、この關係を簡潔に說明して居る。

大戰がヨーロッパ人の頭腦に異常の印象を刻みつけたことは當然の話である。そこでは個々の人々の反省では如何ともすることの出來ないある見えざる力の衝擊に依つて、幾千萬の人々が大殺戮場の中へ追ひ遣られた。そして、そこでは、あらゆる意味に於ける『生存の脅威』が極度に働いて、そして殆んど堪へ切れない程の生命が實際に於て破壞し盡くされたのである。かういふ慘劇が行はれて居た最中に、その影響を直後に受けた人々の多くの群れが、ある程の迷信の俘となつて居たつて、それは少しも不思議とすべきことではない。また彼等の多くの群れが、戰後に於て前日の出來事を回想する餘裕を得た時に、卻てます／＼さうした迷信に深入して行つたといふことも、當然ありさうなことが起つたといつたまでのことであつた。

しかし、大戰後に於ける各國の民衆の上に臨んだ生存の脅威は近き過去に於ける生の不安及び死の恐怖の追懷ばかりではなく、現在に於て民衆の上に差し迫りつゝある生の悲痛の現實感となつて現はれてゐる。それは殊に大戰後に於て覿面に表はれた財界の動揺から來る不安、生活費の無際限の昂騰から來る苦痛。産業界の不振から來る失業の危險といつたやうなものを通して迫つて來た。

かうした方面からくる『生存の脅威』は、主として現代社會に於ける所謂被掠奪群たる民衆の側に於て負擔せられたものであつた。斯かる事情の下に在る彼等の間に於て各種の迷信が流行しだしたのは、全く無理もないことだといへる。しかしながら、迷信は民衆のすべてが趨つた唯一の避難所ではなかつた。彼等のうちの迷信に就かなかつたものらは、社會改造の方向を指して突進しかけた。そして、今日民衆の側から擧げられて居る社會改造の際には、必ず資本主義の撤廢といふことがその中心目標となつてゐる。それは、利潤を目的として企てられる資本主義の生産組織は、あらゆる意味に於ける『生存の脅威』を以て民衆の生活に臨むものだといふことが、世界大戰といふ異常の出來事を通じて、十分に、十二分に、民衆に依つて味識せられたからであつた。

しかし、生存の脅威を痛感したものは、獨り所謂被掠奪群に止まらなかつた。所謂掠奪群を構成する資本階級にしても、或る他の種類の『生存の脅威』を受けない譯には行かなかつた。戰後に於ける産業界の大動揺は、この階級仲間の多くのものを一時に浮沈極まりなき運命に遭はせた。そして、かうした事件の進行は、まだ／＼決して終局を告げたものといふことは出來ないのである。けれども、この方面からやつて來てゐる彼等の『生存の脅威』は、他の方面からやつて來てゐるそれに比すれば、尚ほ且つ甚だ輕微なものであるのかも知れない。他の方面からやつて來るそれとは何であるかといへば、それは無論、民衆の覺醒と共に襲來する虞れのないではないところの、資本主義撤廢といふことを中心とする社會改造の實現である。それは、ロシアに於ては既に現實の問題となつてゐるが、その他の國々では、まだ議論やら宣傳やらの時代に在ることは事實である。けれども、今日のやうな社會的並びに政治的大轉機に於ては、如何なるものも、それ自身の明日の運命を豫知することが出來ないのである。

かういふ資本階級の仲間へも、世俗的意味に於ける迷信の各種が入り込んで居ようとは思ふが、然し、私はそれを今確證し得る材料を持つてゐない。然しながら彼等は、或る他の意味に

於て今日では最早迷信となつて居る幾多の政治的信條を固守し過去に於て彼等の特殊的地位の擁護の具としての役目を務めて來た立法行政司法等の政治機關を最後の堡壘として、社會改造の名の下に於て潮の如く寄せ來る革命的氣運を喰ひ止めることに努力して居るのである。しかし、彼等のこの努力は、民衆間に於ける政治に對する反感を強めただけのことであつて、肝腎の革命的氣運そのものは少しも冷却せしめてゐない。ソヴィエット主義のやうなものまでが、『健實』とか、『保守的』とか形容せられて來たイギリスの民衆の間に於てさへ或る感化を及ぼすやうになつて來たといふやうなことは、大戰前には豫想も出來なかつたことである。社會と政治との離反の傾向！私達はこのフランス革命以來の大運動の成行を注意して見守らなければならぬ。

二

我國の社會生活へも、戰時から戰後にかけてヨーロッパに起つた各種の社會的騷動の影響が波及して來た。この間に亘つて我國の社會生活の上にも、所謂國民思想の動搖も來たし、勞働運動の勃興もあつたし、戰爭成金の輩出もあつたし、生活費の昂騰もあつたし、殊に最近に於ては財界の變動も見舞つて來てそれに伴つて、商工業者及び銀行業者の破綻とか、失業問題の擡頭とか、中產階級の生活の危機とかいつた諸問題も一通り揃つて遣つて來た。實際、最近の二三年間は、我國民が既往に於て一度も經驗したことがなかつた程の目まぐろしい社會的變動が、あとからあとからと追つ驅けながら遣つて來た期間であつた。斯うしてゐる間に、我國の思想界に於ては、資本主義否認を中心とする社會改造論が流行しだし、また我國民の社會生活の或方面に於ては、各種の奇怪な迷信が横行跋扈しだした。斯ういふことは、すべて皆ヨーロッパで行はれた型を追うて來たものであつた。

唯、我國の資本階級が一切の社會改造論の系統に對する思想に對して懷いて居る憎惡は、縱しヨーロッパに於ける同階級が懷いて居るそれと異るところがないにしても、我國の政府の所謂『危險思想の取締』の態度は、ヨーロッパでは到底見られない程の峻嚴なものであつたといふのは愚なこと、涙の出る程滑稽なる辛辣味を帶びて居たものであつた。ヨーロッパでならば殆んど人の注意に上らない程も何でもない思想を發表したものが隨分非道い目に逢つたといつた例も若干あつた。これもその筈で、我國の政府は、たとへ政黨內閣が政權を運用して居る時でも、一方に於て資本階級を擁護して居ると同時に、他方に於

は官僚仲間や貴族院に巣くつて居る一種の封建主義に迎合して居るのであるが、この一種の封建主義といふものは、資本階級以上に社會改造論を嫌忌してゐるのだから、我國の社會改造論は、どちらを向いても、到底助りつこのない運命の上に置かれてゐる譯である。

それに我國の社會改造論は、まだ本當に議論の時代——しかも甚だ初歩的な議論の時代にあるので、その實現性は甚だ稀薄な——といふより、絶無といつていゝ程であるのに、それに『危險思想』といふ赤札が掛けられてあつて、そしてその上に凄く光る警察眼が置かれあるのである。イギリスの如きは、社會改造の實現性が餘程迫つて居るにも拘らず、それに關する一切の議論は極めて自由であるが、我々は今の所、遠方からそれを羨んで居るより仕方がない始末なのである。かの最近に於て、社會主義者及び社會主義的傾向の思想家らを糾合して組織しようとして居た社會主義同盟が、まだ產れない先きから、内務當局に依つて絞殺されることに決定せられたやうなことは、どのやうな口實を以てしても、到底辯護の出來ない程暴虐な遣り口と言はなければならぬ。社會と政治との離反！それが我國の行政の各方面にも現はれて居るのは、今更の話ではないが、しかし、言論思想の自由の方面に於て、最も著るしく目に立つので

ある。

一二

自由に思想の發表も出來ず、また自由なる思想の發表も聽けない（外國の刊行物にでも頼るのでなければ）我國の公衆は、うつかり迷信の方へ出掛けて、『生存の脅威』から脱がれる消極的安易を貪る工夫を講ずることも、思ふ存分には出來ないのである。といふのは、迷信の上にもまた、其筋の警戒線が張られてあるのである。すなはち、新聞紙の報ずるところによれば、内務當局は、大本教及びその他の迷信的宗教の上に嚴重なる警察的監視を加へる筈で、既に大本教の神諭と稱する『火の卷』外若干の印刷物を押收し、またその鎭魂歸神法とかいふ儀式の執行の上に或る制限を置いたといふ話である。

内務當局が大本教に對して加へた取締が、果して眞面目な動機から出たものであるか否かに就いては、疑を挾む餘地が大にある。當局の說明によれば、大本教そのものは別に禁止しないが、大本教の出版物等に安寧秩序紊亂の虞れのあるものは、片端からこれを禁止するし、それに鎭魂歸神法の儀式の如きは、そこに參加するものを發狂させる虞れがあるから、それにも適度の制限を加へたのだ、といふことである。この取締りの理由は

眞面目にこれを考へてゐると、隨分變なものである。そのうち大本敎の或る儀式がそこに參加するものを發狂にする虞れがあるといふことが實際なれば、社會衛生の上からそれを取締る必要がまんざらないではあるまいが、しかし、大本敎の出版物が安寧秩序を紊亂するといつてそれを沒收して肝腎の大本敎そのものをその儘にして置くのが訝しいのである。なぜなら、大本敎のやうな多人數の信者を集めて居る迷信團體では、たとへその出版物を禁止されても、それにあるほどのことは、口移しに依つてゞも耳から耳へ宣傳することができるのである。けれども、大本敎の信者以外にその內容が漏れる虞れがあるから、――ともいへなくはないやうであるが、しかし、大本敎の信者以外の人々の中には、そんなものを眞面目に讀むものも滅多になからう。であるから、大本敎の信者以外にその出版物の內容が漏れるのがいけないからそれを禁止するといふなら、少くとも、その前に、さうした內容が信者の間に口移しに傳へられるのを防ぐことが必要である。それをするには、大本敎そのものを禁止するより外に方法がない。けれども旣に大本敎そのものをその儘にして置く位なら、その出版物などは、右の理由によつて、別に禁止するにも値らないことである。當局者はまた、大本敎の豫言の或るものは國交を害する虞れがある、と說明して居るが、それは恐らく例の世界戰爭の豫言を指して居るものであらうが、對支二十一個條や、シベリア出兵ではあるまいし、どの外國があのやうな氣違じみた豫言で之を惡くしようか？當局の說明も、かうなつて來ると、滑稽を通り越して寧ろ愛嬌に近いものになる。

當局の大本敎系統の迷信取締りの態度があまりに不徹底であつて、そしてまた、その說明が餘りに支離滅裂である處から、あれは何か他に目的があつてして居ることではないかといふ推測もせられるのである――たとへば、先き頃から原首相は、政府は國民思想の『惡化』を防ぐために相當の手段を取る積りだといふやうな趣旨を處々で說いてゐるが、當局は恐らくそれに準據して、今後思想の取締を一層嚴重にする積りであらう。かの未成の社會主義同盟の禁止の如きは、この方針の現はれの一つでなければならない。けれども、政府が單に思想方面にばかり辛く當つて居ては、政府の處置が餘りにも不公平に見えるから、その釣合ひを取るために、丁度いゝ時にのさばり出かけた大本敎などを槍玉に擧げて、大に公平ぶる積りであらう。――と斯ういふ推測も立てられるのである。かういふことを考へるのは、或は氣を廻しすぎることになるかも知れないが、しかしそれは現代日本の政府にふさはしい遣口でないとはいへないの

である。

一四

迷信のパラドックスは、それが信者以外のものらに取つて如何に狂氣じみたものにせよ、信者に取つてはそれが眞面目も眞面目も大眞面目なものであるといふことである。すなはち、彼に取つては、それを信じることが、『生存の脅威』を避けるための最善の道なのである。この意味に於て、それは外部から彼に押つ冠ぶされたものでなく、彼の内心の要求から彼が任意に採用して居るものである。それ故、彼からそれを强制的に取上げるのは、彼から彼の精神の唯一の避難所を奪つて、彼を無邊際の生の沙漠へ追ひ遣るやうなものである。

斯ういふ譯であつてみれば、或る個人を迷信から解放しようとするには、彼をしてその迷信の不合理なことを悟らしめるのが最良の方法である。そして、彼をして此事を悟らしめようとするには、彼をして自由に意見を發表し、交換し、討議する機會を持たしめなければならぬ。これを社會的見地に適用していへば、或る社會から迷信を驅除しようとするには、言論思想及び討論の自由を完全に保障するのが最良手段である。言論思想及び討議の自由を抑壓するのは、思想の自然淘汰を妨げて、自然に迷信を助長する結果になる。若しこの際に於て、一方に於て言論思想及び討論の自由を抑壓し、他方に於て迷信を禁止すれば（出來ないことだが）、世間を擧げて不安焦燥に陷らしめることになるであらう。

我國に於ては、政府が斯の如く言論思想に對して全然社會の要求と背馳した政策を取つて居るのみならず、議會もまた、それに負けず劣らず、この點に關して政府監督の職責を怠つて居るのである。最近數個年に亘つて、議會の會期每に思想問題に關する質問といつたやうなものが日程に上ぼせられたが、それに關して要領を得た問答が取交はされたことは未だ嘗てないのである。

西洋諸國に於て、最近社會問題の解決に關して議會が信用を失墜して、それに伴れて直接行動を叫ぶ聲も段々盛になつて來て居ることは事實である。殊にロシアに於て一九一七年十一月の革命後ソヴィエット制度が創設せられてからは、在來の政治的傳統の上に運用されてゐる議會政治がこの新政治組織から手痛き挑戰を受けたことは、最新の事實である。斯ういふ風に西洋諸國の議會政治は、既にその基底に於て容易ならざる損傷を受けて居るにも拘らず、唯、從來に於て行政部の專制に對する抑制機關として、從つて政治的自由の擁護機關として、極めて

有效なる役目を務めて來たものだといふ歴史的名譽は、いまだに之を保有して居るのである。しかるに、我國の議會は、社會問題の解決に關しては、西洋諸國の議會よりも更らに幾倍の無能振を暴露して居る上に、行政部の專制に對する抑制機關としても、從つて政治的自由の擁護機關としても、少くとも言論思想の自由といふ主要なる一點に關しては、大にその本來の職責を怠つてゐるのである。最近我國に於ても議會の否認、直接行動の必要といふ聲が、可なり處々に擧げられてゐる。これは必ずしも、一概に我國民の模倣性からばかり來たこととはいへないのである。社會と政治との離反！　この事は、我國の立法部を中心としてもまた現はれ居る。そして、それは議會が自ら蒔いた種子から刈り得た最後の收獲でなければならない。

附記　本號のためには本誌夏期特別號記載の拙稿「民衆文化の社會心理的考察」の續稿を書く筈であつたが、準備が整はなかつたから、間に合せに本稿を書いた。極めて匆卒の間に執筆したので、氣にしまぬところが甚だ多く、時間さへ許せば、訂正したい個所も補足したい個所も可なり澤山あるが、締切切迫のため、遺憾ながら今はそれが出來ない。それでも私の考への荒筋だけは述べたつもりだが、色々不備のある點に對しては、切に讀者の諒恕を乞はなければならぬ。

それからまた私は、世界大戰の結果として、一方に於ては、各國の社會生活の上に迷信流行の傾向が促進せられたと同時に、他方に於ては、普通迷信とは考へられて居ないが、その實矢張り一種の迷信にすぎないところの、過去に於ける樣々の社會的及び政治的信條——たとへば、在來の『國家至上主義』とか、『立法者の萬能』とか、『議會の神聖』とかいつたやうな——の一つ一つが破壞せられて行つて、或る新らしきものがこれらに取つて代らうとして居る傾向を論じようと計畫してゐたが、これも時間の都合で、よさなければならなくなつた。もつとも是等のことは、本篇のしまひの方で少しは暗示してあるが、しかし、私はそれらをもつと詳細に論究しようと考へてゐたのである。そしてまた私は、同時に暗示して置いたところの、最近に於ける一つの世界的傾向となつて居る『社會と政治との離反』の趨勢は、新らしく生まれようとして居る社會生活及び政治生活の先驅であることをも論じてみたかつたのである。が、これらのことは、時間の不足のために、すべてよすことにした。このことは、特に茲でお斷りをしておく。

物的改造論より心的改造論へ

實際問題と理想問題

文學博士　金子筑水

今日は何と言つても經濟政治社會等に關する實際問題の世の中である。空想や理想や哲學や人生觀やを語る時代は最早過ぎ去つた、恐らくそれは永久に過ぎ去つて、最早再び還へり來る時は無いかも知れない。現實のパン問題と政治問題とが唯一の重要な事實で、美しい理想や空想を語るには、今の時代は餘りに切迫し過ぎた大事實の面前に立つてゐる。哲學も文藝も乃至は道德さへも、畢竟は省けば省き得られる贅澤品であつて、單純に活きるといふ大事實から觀れば、實はどうでもよい、場合によつては無い方がよい餘分な現象に過ぎない。物質がすべてゞある。勞働が一切である。思想や哲學や理想やは、今日のやうな極端に現實的な人生を指導するには、餘りに空疎であり淺薄であり無力である。否、思想や概念や理想やは、素と生活といふ事實から引出された抽象物に過ぎないのであるから。斯かる抽象物が活きた人生を支配し得ると考へるが、そも〳〵大なる誤解である。人生は理想や概念で動くものでない。具體的なパン問題といふ根本的事實が唯一の動機で、人生はたゞ此の根本的事實によつてのみ支配される。隨つて經濟問題と社會問題とは、將來に於ける一切の問題であつて、理想問題や人生問題やは、永久に社會の外に葬むり去らるべきである。文藝とか哲學とか思想とかいふことは、畢竟これまでのブルジョア階級の贅澤品に過ぎないと、これが最近まで社會の各方面に彌漫した人心の特殊な傾向であつた。

私はこゝで唯物論や唯物史觀を批評しようとは思はない。たゞ世間には、實際唯物論を主張しないまでも、衣食住といふ現實の事實問題と、廣い意味に於て謂ふ思想問題又は哲學問題との關係をば甚しく誤解してゐる者が多い。直接生活の事實問題（又は實際問題）に對して、廣い意味の思想問題をば、假にこゝで理想問題と名づける。此の理想問題と實際問題との關

係が世間普通には甚しくあやふやに考へられてゐる。例へば現實の生活と理想問題とは、本來其の間に密接な關係は無く、何となく互に離れた別々な問題のやうに考へられてゐる。或はまた現實の生活問題だけは先づ第一に片附けられて、理想問題はつぎ〳〵に徐々に處理さるべきものとも考へられてゐる。「物的改造より心的改造へ」といへば、何となく心的改造は第二義的な附加物のやうにも考へられる。或はまた徹底的唯物觀が主張するやうに、物的問題――物的改造さへ解決されれば、理想問題――心的改造はおのづから實現されると考へてゐる者もある。兎にかく實際問題と理想問題との關係は普通には甚しく曖昧に考へられてゐる。

然しながら公平に人間又は人間生活といふ事實を觀察すれば、そは單に唯物的な存在でもなければ、また單に唯心的な存在でもない。一面肉體を備へた動物であると同時に他面思想感情を備へた生物が人間である。人間はどこまでも二元的にデュアリスチックに出來てゐる。食を求めては人間はたゞ餓ゑるのみとか、理想の前にはすべてが膝まづくなど言はれるが、そは極端な場合を誇張的に言ひ現はした言葉で、常則的に言へば、衣食すると同時に思惟し感激し欲望するが人間である。事實と理想とは、普通に考へられるやうに、決して全く離れたものでなく、寧ろ事實は理想によつて活き、理想は事實の裡に活きるといふが普通である。卽ちパン問題と理想問題とは、精確に言へば、決して引離して別々に考へらるべきものでない。「斯くある」(What is) といふ事實問題と並んで、「如何にあるべき」、「まさに然かあるべし」(Ought to be) といふ價値問題とが恰も人類生活の兩面であるとは、一たびロッツェによつて主張されてこのかた、殊に新カント學派に取つては、一個哲學上の常識とさへも見做されるに至つた。事實問題と價値問題とは、決して引き離すことの出來ない人類生活の兩面で、生活が有るところには必ず此の兩面が備はつてゐる。便宜のため私は此の觀察法をば玆で問題にしてゐる實際生活と理想生活との上に適用して見たい。我々人類に取つて必然的な機械的な現實の生活問題（物的問題）は、自然界の他の事物と同じく機械的因果法によつて支配さるべき純然たる事實である。我々は此の事實をどうすることも出來ない。然しながら人類生活は、決して此の現實な事實のみではない。人間が感情や欲望を備へてゐるかぎり、價値判斷は、如何に之れを除外し禁止しようとしても、到底除外し禁止することの出來ない一面の生活である。事實が存する所には必ず價値判斷が有る。人類生活に取つては、價値判斷が寧ろ主要な問題である。所謂理想や哲學や人生觀や、すべ

て此等に多數の價値判斷の結晶に過ぎない。價値判斷はやがて思想であり哲學であり理想である。故に價値若くは價値判斷が人生の一面——重大な人生の一面であつて、これなしに人生は成立しないとすれば、思想や哲學や理想やを缺いた唯の事實一邊の生活といふやうなことは果たして確實に考へられることであらうか。思想や感情や欲望やを動かさない唯の衣食一邊の生活といふやうなものが、果たして實際に存在し得るものであらうか。人生をパン問題のみと解するは、餘りに人類生活を狹く解釋することではないか。パン問題が有る處には、既にそこに思想問題が有り理想問題が存すると言はなければならぬ。

以上の理論をば我々は唯の理論としてゞはなく、十分明確に之れを史上の事實の上に徵することが出來る。否、斯やうな理論も、實は活きた事實の上から歸納された結果に過ぎない。戰後世界各國の問題が、一面に於ては勞働問題、資本問題、社會政策問題等の純經濟問題であり、他面に於ては、民本主義、階級撤廢主義、自由主義等の純政治上の問題であり、これに婦人問題、社交問題等の所謂社會問題がからんだものであることは、眼前に我々が目擊するとほりである。即ち眼前當面の問題は、甚しく多種多樣であり混沌を極めてはゐるが、これを概括すれば經濟問題政治問題並びに社會問題等に類別することが出來る。さて假に此等の實際問題を純粹の事實問題——純經濟問題純政治問題として觀察した場合、其の裡に果たして何等の理想問題も精神問題も含まれてはゐないであらうか。目前の經濟問題や政治問題やは、果たして全く價値判斷や理想を拔きにした唯の事實問題に過ぎぬであらうか。多少精確に事物を考へる者に取つては、此等は決して唯の事實問題——生地のまゝの物質問題ではなく、其の裡には既に一定の價値判斷や理想や哲學やが含まれてゐる。近代歐洲の歷史を通觀すれば、政治問題、經濟問題、並びに社會問題の發達には、其の根柢に於て深く根強い思想上又は理想上の根據が存し、此の理想的根柢に由來して、近代の政治問題經濟問題等が發達したものであることは到底爭はれない。若したゞ生地のまゝの事實として經濟問題等が發達したとすれば、各種の經濟問題にそれ〳〵特定の方針や傾向が存する譯はなく、經濟問題でさへあれば、全く無方針であつても差支ないわけではないか。然るに政治上に於ては何故特に各種デモクラシーの精神が主張されたか、又經濟上に於ては何故特に生產の公平な分配が主張されたか、何故特に勞働者の自由が主張されたか、乃至社會上に於ては何故女子の向上並びに解放が主張されたか。言ふまでもなく、個人又は個性の自由獨立は、近代歐洲文明發現の根柢で、故近代の政治問題並

びに經濟問題も、實は此の個性の自由獨立といふ精神又は理想から胚胎した實際問題に外ならない。個性の自由が根本であればこそ、政治上に於ては各種のデモクラチツクな運動が主張され、又此の理想によつて動かされてゐればこそ、經濟上に於てもどこまでも多數民衆の自由な發達が目標とされたのである。政治上並びに經濟上の民衆主義は、畢竟個人格の尊重といふ大理想から胚胎した傾向ではないか。個人格の尊重――個性の自由といふ精神又は理想なしに、果たして今日のやうな民衆本位の政治運動や經濟問題が發達したであらうか。民衆主義の根本精神を缺いた政治問題又は經濟問題といふやうなことが、果たして精確に我々に考へ得られるものであらうか。今日の政治問題や經濟問題やは、假令甚しく複雜であり混沌を極めてゐるにもせよ、其の根柢に何等の理想も精神も宿さないほど無方針無法則無規律なものであらうか。無方針無規律で差支ないならば、たゞ經濟問題たゞ政治問題といふだけで、其の内容や方針はどうでも宜いわけではないか。

されば今日の政治問題經濟問題社會問題等が其の裡に何等の價値判斷も理想をも交へない唯生地のまゝの事實問題――赤裸々に單純な實際問題であるとは、如何にしても考へられない。反對に個人格の獨立自由といふ根本精神が無かつたならば、今日のやうな政治問題經濟問題が發達したかも疑はれるわけではないか。さればまた今日の實際問題は、一層根本的な理想又は精神によつて統御され指導されてゐると批判されなければならぬ。

斯やうに理論に訴へ又事實に徵しても、事實問題(實際問題)は理想問題を離れて單獨に存立し得るものでない。人生が二元的であるかぎり、實際問題は理想問題によつて活き、理想問題は實際問題によつて制約されるは、寧ろ自然であり又必然でもあると言はなければならぬ。我々はこゝからリアリズムとアイデアリズムとの相關問題をも解釋することが出來る。勿論今日は最も嚴密な意味に於けるリアリズムの時代である。戰後の大勢はます〱此の傾向を追つて進むに相違ない。所謂物的改造は戰後第一着手の事業であり、然かも此の方面の事業は今後ともます〱擴大されるに相違ない。然かも戰後の大勢が斯やうにリアリスチツクであるからと言つて、所謂リアリスチツク一邊が將來の文明であるやうに豫想するは由々しい誤解である。リアリスチツクな脈をたどつて進む時には、人間の思想感情が大抵半無意識的な直覺的なインスチンクチーブな様式を取るものであるから、其の裡に隱れてゐる理想や哲學や人生觀やはあらはには目だゝない。此等が活潑に表面に現はれる場合が、哲

學や人生觀やの目だつアイデアリスチックな時代に外ならない。隨つて絕對的な意味に於て、何等の理想も哲學も無いといふ時代は、我々には考へられない。絕對に哲學が無いところには人生も無い。されぱまた戰後に於て、リアリスチックな文明の脈と並んで、特にアイデアリスチックな文明――文化が發達すべきは、人類生活に自然又必然な約束で、此の方面の文化が發達しないことは、直に將來の文明の衰滅をさへも意味する。將來に於て人類生活が發達するかぎり、アイデアリスチックな文化は、當然　必然發達するものと豫想されなければならぬ。人生の進歩は主として此の點に存し、又人生は斯くしてのみ進歩するものとも考へられる。

可なり大仕掛に過去の文明を破壞したフランス革命は十九世紀に於て特殊のリアリズムとアイデアリズムとの兩方面の文明を產み出したのではないか。一はカント、ゲーテ等によつて源泉を開かれたドイツ理想派の文化を意味し、一はフオイエルバハ及びマルクス、エンゲルス等に極まつた極度にリアリスチツクな社會主義的運動これである。カント及びゲーテ對マルクス及びラツサルは、共にフランス革命が產み出した十九世紀文明の双璧ではないか。マルクスなしのカントが片輪であるやうに、カントなしのマルクスも、同じ意味に於ての片輪である。此の意味に於て、十九世紀は多方面的又は多產的な時代であつた。

種々な方面から觀察して、今回の大戰爭は、恰も前代のフランス革命を數十百倍世界的に擴大した世界的大革命であつた。此の世界的大革命が將來如何なる文明を產み出すかゞ、今日の我々に最も深い興味を與へる問題である。フランス革命が痛く當時の人心――殊に若い青年の心を動かしたと同じく、今や世界的大革命の刺戟は各方面に著しい。フランス革命さへがカントやゲーテを產み出したとすれば、世界的大革命は、更に世界大のアイデアリズムを產み出さでは已まない運命を擔つてゐる次第ではないか。アイデアリズムとは、要するに明確な價値判斷の謂ではないか。

『物的改造』と共に如何なる『心的改造』が行はるべきか。こは玆で簡單に取扱はるべき問題でない。私は玆では『物的改造』と共に『心的改造』が必然又當然であることを明らかにするだけに留めたい。將來のすべての改造が個人格の自由を根本精神となすべきことだけは　今日もはや何人にも明白な文化の大勢である。

勞働哲學改造の方向

土田杏村

1

私は此の短かい論文の中で、經濟學或は特に經濟哲學に取り可成りに重要な意味を持つた提唱をして見たい。(と特に言ふ譯は、一般の評論雜誌に載る論文は專門的見地から見れば割合に重要で無いもの丶樣に見られがちだからである。)私が此處に書くことは元來はもつと長い、又より專門的な叙述を試みようと思つて居たものゝ一部である。其れを要約的に書くことであるから、議論が抽象的になるのは已むを得ない。此の論文が專門雜誌で無い一般評論雜誌に掲載せられたとしても、世の專門的なる經濟學者、政治學者、文化哲學者等が、今私の爲して居る提唱を決して遺留しない樣にお願ひして置く次第である。其の論旨は恰も本號の論評題目である「物的改造論より心的改造論へ」に關係あることは言ふまでも無い。

リカアドは其の經濟學の著の序文の中で、To determine the laws which regulate this dirtsibution, is the principal problem Political Economy. と言つてある。彼が『分配』の分と言つて居るのは、勿論地代、利潤、勞銀の分配であり、即ち收益の分配を意味して居る。今分配の意義を此れよりもずつと廣義のものに解し、兎に角生產物全體の分配を意味するとして考へて見る。然る場合には、社會問題、經濟問題の結局は分配問題にあると考へるのは從來の經濟學のやり方である。私は此の點で、經濟學の核心を分配問題に置いたのは、ひとり社會主義の經濟學だけでは無く、スミス、マルサス、リカルド等の經濟學亦實に然りしと斷言して憚らない。

此の純理問題を實際の社會問題の上に翻譯する時は、其れは即ち世界の人間の貧乏を如何にして根絕することが出來るかといふ問題になつて來る。世界の人間の九割何分かは貧乏して居る。其れは何故であるかと言ふに、資本家が勞働者の勞働力を絞取し、利益を自分だけで壟斷して居るからである。つまり利益の分配が不都合だからである。分配問題は社會問題のアルフアにしてオメガである。斯樣にして貧乏を如何にして救ふ可きかと言ふ社會問題の考へ方と、分配を何の原理によつて支配す可きかと言ふ經濟學の考へ方とは同一點から出發して來るのであつた。

貧乏を無くするとは、現在の貧乏人が物質的に幸福な生活が

出來る樣な世の中にするといふことである。もつと色濃く言へば現在の貧乏人も資本家の樣な快樂的の生活が出來る世の中にすると言ふことである。斯樣にして現在の救貧問題は、救貧の理想は社會の最大多數が最大幸福を得ることである。(もつと進めて言へば)人生の理想は快樂であるといふことの前提の上に立つて居るといつて差支へ無い。此れを經濟學の方面で言ふならば、經濟價値の內容を快樂であると解すると言ふことになり、其れは倫理學上の功利論者であるミルの經濟學の當然採つて居る方向である。私は此等古典的經濟學者の經濟學等に就いて未だ一亘りの研究しか爲して居ないものではあるけれども、其の考察の到達した限りでは、スミスの如きも此の傾向は頗る色濃く持つて居り、マルサス、リカルド亦實に斯く解し、唯物史觀の上に立つマルクスは亦更に色濃く此の考へを懷抱して居たと考へる其れ／＼の根據があるのである。然らば經濟價値の內容を快樂と解する、換言すれば經濟生活の理想を快樂と解する點に於ては、個人主義の經濟學者と社會主義の經濟學者とに何の區別も無い。併し此れ實に正當なる經濟哲學であると言はれようか。私は其の點に大いなる疑問を持たざるを得ないのである。

カントの哲學の偉大は、此如く價値の內容を快樂と解する所說を根柢より覆滅し去つたことにあると言つてもよい。今やすべての學問は、其の根據をプラグマチズム、思惟經濟說、功利說等凡そ快樂說の枝脈と認む可き諸見解に置くことを排して、カントの哲學の指示する價値の上に置くことを以て、其の本質を會得したものであるとせられた。若し經濟價値が價値であり、其の價値の上に立つて經濟學といふ一科學が建設せらる可きであるとするならば、此の價値の內容を快樂と解する從來の經濟學は先づ其の立場を失つて、新らたにカント哲學の洗禮を受けざるを得ない、而して此の試みは今や現に英國の新らしい社會主義等の試みつゝあるところである。ラスキン及びモーリスに始まつて、現在カアペンタア、ホブソン、オレエジ、ペンチィー、コオル、ラッセル等に至る諸氏の新らしく解しつゝある經濟學の考へ方、及び社會問題解決の考へ方は、此れを勞働哲學のカント化といふ目標から見る時に甚だ意義あるものであると竊かに私は考へて居るのである。

ペンティーを始めとして、現在のナシ・ナル、ギルドの主張者は手厳しく、ウェッブ一派のフェビアン協會の社會主義者を攻撃する。何となればウェッブ等は社會問題の核心を救貧問題に置いて居るからであると言ふ。單に幸福になる、快樂を得るといふ事が人間生活の理想であるとするならば、救

貧問題はに實社會問題の核心でもあらう。併し此の如くであるならば經濟價値實現の爲めの作用である勞働は常に此の快樂への途の手段であるに過ぎない。勞働は結局商品である。勞働は其れ自身自律するの意義を有せず、手段としての苦痛を除却することが出來ない。此くして攻擊せられる資本制度と此れを攻擊する社會主義との間に凡そ原理的に異つた何物が見られるか。此のことをホブソンもオレエジもコオルも等しく言つては居るけれども、私は其の最も哲學的なる表現をペンティーの其れに見る。ペンティーは資本主義者は自己の行動のジャスティフィケエションを國家社會主義者の教說に於て見出すとさへ言つて居る。(Penty, Old World for New. p.5) 私も亦實に其の議論の通りだと考へる。随つて貧乏問題を社會問題の核心であると考へ、又然か論じて居る我が國の社會改良家、社會主義者、經濟學者等は此の非難に對して何と答へるやを聞きたい。或る學者によれば、勞働問題の如きは甚ださしせまつた事實問題である。此の事實問題を解決するものはたゞ事實あるのみ、哲學者輩の無用の差出口を許さずといふことであつて、學者でありながら甚だ素朴な見解を以て私の所說を非難さへして居たが、私は現在の社會主義者の中にペンティーの如きあり、眼前の事實問題に沒頭して其の背後に形而上的問題あるを知らさるフェビアンスを非難し、或は自ら「神秘主義者」といふ名をさへ使用し、フェビアンスは法律者、文學者、哲學者であり、其の中に產業的經驗のあるものが少いから產業組織のことなどはわからないのであると非難して居る眞義を如何に解す可ぎやを知らない。世界の人間の貧乏は實にさしせまつた事實問題であるには相違あるまい。併し此の事實問題に沒頭して、此れを社會問題の核心であると考へる學者ありとせば彼は最早一步資本主義者に讓つて居る。何故なれば貧乏さへ救はれるのであれば、其の手段は何でもよい譯であり、賃銀制度であれ、奴隷制度であれ、要するに目的の爲めの手段を選ばず、其の手段の正不正を批評することは出來ないからである。

即ち其處には從來の經濟學者、社會主義者の立場の死滅すべき急所が宿つて居る。

2

ラスキンとモーリスに就ては今暫く叙述を省略する、ラッセルは社會主義のもとに於ける藝術と科學の地位を考へた。彼の論旨をよく〳〵考へて見ると、經濟活動は藝術や科學やの活動の手段であると言ふ風に考へて居るところがある樣である。若し然りとすれば、此れ即ち經濟價値の自律性を否する者である。

併し彼の論旨の中に勞働をより藝術化しようとする要求のあることは看取するに難くない。カアペンタアは現今文明の缺陷は「統一の缺乏」にあると考へて居る。(Carpenter, Civilisation: Its Cause and Cure, p. 11) 彼の言ふところを尋ねて見ると、彼は我々人間の内面により眞實なる「我」があり、すべて我々の行爲は此の「我」からエマネエトして來る、即ち健全なる人間の爲すところは、すべて生活の各部面が統一せられて居ると言ふことであると言ふのである。(此れを論ずる爲めにはペエタア以下の英國思想を顧慮する必要がある。)然らば彼は我々の勞働を人格の統一との關係に置いて考察し、勞働は人格の一表現であると考へて居ることが明瞭である。コオルは「自己表現」を重視する。人間は自己表現を爲す、換言すれば意志の主體として働き、社會のすべての統制は此れの成果であると考へる。(Cole, Social Theory, p. 192. 200. 208. Self Government in Industry p. 107) 即ち彼の社會論の前提は創造的、自己表現的なる意志であり、彼はダアウィニズムよりも寧ろラマルキズムを取ると言ふ、然らば勞働も亦一の意志の自己表現を爲すものであり、隨つて自己目的的のものでなければならない。此してペンティーに至れば最も明瞭に此等の特色は發揮せられ、道徳を離れて經濟問題は論ぜらる可からずとし、(Penty, op. cit. p.37-) 人性を知らざる社會主義者を攻撃し、道徳、經濟、政治の道論に含まれる矛盾を放逐して、藝術や術徳と同列に置かれた勞働を論じようとし努力して居るのである。此處に至つて私は、社會問題解決の核心は全く其地位を一變して來たと觀察せざるを得ない。即ち從來の快樂本位、勞働の結果本位の見方からして、人格本位、勞働の自己目的本位の其れに轉化し來つたと主張せざるを得ない。此の觀察に立つて見れば、ラッセルが衝動に所有と創造とを對せしめた根本の理由が私に理解せられて來た樣な氣がする。此れを勞働概念、或はなほ進んで社會改造の方向概念が物的より心的に展開したとも言ふことは出來るであらう。主張の諸點に相違するところはあるが、ヒレエア、ベロック及び其の一派の思想家の主張の要點も亦此處にあるであらう。

3

新らしい經濟學の立場は次の如きものでなければならない。先づ第一に勞働は人格の觀地から見られなければならない。即ち此れを哲學的に言ふならば、道徳は行爲に、藝術は感情に、知識は思惟作用に實現せられるといふと全く同一の意味を持つて、經濟價値の實現せられる作用(Akt)は勞働なるが故

に、勞働は人格を離れて其意義を持たない。此れマルクス等が資本は資本家より離して考へることが出來るけれども、勞働力は勞働者を離れて考へるとが出來ないとしたとの眞義でもあれば、又勞働は商品に非ずといふことの眞義でもなければならない。蓋し人格的なるものは、すべて目的として取扱はる可く、手段としては取扱はるゝ可からざるものだからである。

第二には經濟價値は其れが價値なる限りに於て自律す可きである。此れは決して藝術價値や眞理價値の手段たる可からずである。蓋し價値は互に全く相映し合ふ窓を持たず、其れ自身に成立して居るからである。更には經濟價値は直ちに快樂と翻譯せられてはならない。此くては經濟價値は歴史の中に現はれる經濟的制度に對して批判の原理となることが出來ない。(此れ快樂說が一般に理想論に於て失敗すると同一の理論根據による。)併し經濟價値も亦自律的、形式的なる價値なる限りに於て、其れは或は資本家制度は不正なり、賃銀制度は撤廢せらる可し(sollen)と批評命令することが出來る。此處に私は一の economical justice といふものが成立し得ると信ずる。

第三には、勞働は自己目的的でなければならない、此れは勞働は藝術化せらる可しといふ主張と同一點に歸着する。併し勞働は悅びなりとしても、此れは先驗的自我の悅び、換言すれば認識の場合の明證感情(Evidenzgefühl)といふ如きものであると私は主張し、勞働は經驗的意義の悅びなりとは言はない。此れは非常に重要なことであり、其れよりして直ちに第四の主張が來る。

第四には勞働は一の義務である。勞働が人格の上に、又良心の上に其の基礎を置く以上は、其れは直ちに一の human duty でなければならない。此の點を主張するものは從來割合に少く、隨つて經濟學に多くの難點を齎らしたと私は考へる。私は勞働は決して遊戲化せられないと主張する。何故なれば其は一の義務なるが故である。此れは勞働問題の實際に就て考へて見てもよく分る。ナショナル、ギルドの主張者等は中世のギルドをモデルとした爲め、又モーリスの思想に影響せられたゝめ、どうしても工藝家を標準にして議論する傾向がありはしないかと思ふ。勞働は藝術化せらる可しとしても、炭坑夫だとか、溝さらひだとか、便所の肥汲みだとかはどうしても藝術化せられさうに無い。現にナショナル、ギルドでは溝さらひなどをギルド以外のものゝ樣に取扱つたところがあるでは無いか。(Reckitt, The Meaning of National Guilds. p. 310.) 此處に勞働の半面は義務であるといふことの意義がある。ペンティーの所謂getting the right men into the right places は、必らずや其の一

面は悦びにして、其の他の一面は義務であるに相違無い。随つて勞働の選擇は如何に自由なりと言へ、氣紛れの選擇は自由の選擇だとは思はない。すべての人が社會の一員としてたゞ自己にのみ最適と許されたる客觀的地位は、たゞ一つしかある筈が無い。或る個人が其の地位を占め得たる時、彼は最も深き內心の悦びを得、又同時に最もよき人間の義務を盡して居るに相違無い。併し經驗的個人が此の客觀的地位を認識し得るや否やは大いなる問題であり、其地位を占めるまで、各人は價値によつて批判せられて居るのである。私は此の第四の點に於て、新らしい社會主義等が暗々裡に其の思想の中に許しつゝ、なほ且つ明瞭に斷言しなかつた點を一つ、勞働哲學に附加し得たと思ふ。ペンティーやコオルやがウェッブ等の救貧中心の社會主義に反對して勞働＝己目的本位の其れを主張したと全く同樣に、私は救貧本位にして、然るが故に經濟價値の內容を快樂と解する現在我が國の經濟學者社會主義者に反對して、勞働概念の理解を全くカント化し、其の上に新らしい經濟學を建設したいと思ふ。私は此れで經濟理想論を正當に建設し得たと思ふが故に、敢て世の經濟學者の一顧を煩はしたい。（八月十八日日本文化學院にて稿）

徐々として而かも永久に

文學博士　三宅雪嶺

人の心は社會改造を欲するやうに出來上つて居る。蟻及び蜂は社會を念とし、之に盡くして居る。本能を以て極り通りの事を爲し、極りの外に何事をも爲さうとせぬ。社會を作らぬ動物は、社會の事を考へ樣もない。孰にしても、極り通りの事を極り通り爲るに止まる。人類は大腦が著るしく發達し、本能のみで事を爲さず、本能で爲した事に就き、善いか惡いかを考へ、惡い點を改め、善いのをより善くしようとする。人に依つて性分を異にし、現狀に對する滿足不滿足の度を異にするが、全く滿足するのは、固定して衰へる事を示す。自ら好んで死ぬのがあると同じく、自ら好んで固定するのがある。然し一般の狀態から云へば、變態たるを免かれぬ。生命の持續する間、絕對に滿足する事無いと云はねばならぬ。高嶺の花とし、不可能として諦める事あるけれど、何事も欲しくなくなる事は無く、善いならば善いで、斯くもありたらばと思ふ所がある。

人類は社會を組織する本能を具へ、社會に就いて利害を感せ

ずに居れぬ。感ずるの多少があり、社會全體を慮かるのがあり、其一部分を慮るのがあり、其一微分子を慮る者があり、何程か慮らずに居れぬ。井戸端會議は長屋幾軒かに關する事ながら、それでも改造の意を含んで居る。隣りの主婦さんは非道い、あゝまで荒々しく云はなくても宜からうと云ふのは、態度を穏にするを望んでの事である。子供が泣くのにも改造を欲するの意義がある、もつと好い玩具をと望み、親は玩具店で捜し、玩具店は製造元に註文する。大なり小なり人の望む所で少しも改造の意を含まぬのは寧ろ甚だ少い。

而して近年遽かに改造の風が吹いて來たかに思はれるのは、改造の着眼點が變つて來たのである。原始時代からして改造の意があり、有史以來其顯著なるを見るが、東洋で重きを置くのは、道德方面を主にして居つた。湯之盤の銘に日日新又日新と刻してあつたのは、道德上に改善を奬勵して居る。現狀を以て安んじてはならぬ。日一日、能く勵んで向上せねばならぬと云ふのである。道德に關聯して學問上にも云ふて居る。小成に安んじてはならず、必ず大成を期せねばならぬといふ慣習になつて居つた。荻野獨園は弟子に說いて曰ふ、今でも釋迦は兜率天に在りて頻りに勉強して居られる、吾々が何として勉強せずに居れようかと。其處に獨園の一見識がある。普通に釋迦は佛として大成したものと認めるが、彼はさうでなく、佛でも尚ほ到らぬ所がある、日々勉めねばならぬと云ふのである。

何でも現狀の惡い所を去り、善くならねばならぬ事は一般に知られて居つた。然し社會を改造すると云ふが如き、人の容易に考へ及ばなんだ所である。社會の事情が之を許さぬ。政府で安寧秩序を維持し、苟くも之を紊すの恐あるは、上を畏れぬ不逞者と見られ、動もすれば縛り上げられる。父兄が子弟を警めるのも、掟を守らねばならぬといふが主になつて居り、內から罪人を出すなど先祖に對しても相ひ濟まぬ事とする。階級の關係を改めるなど、謀叛を企てるやうに考へられる。歷史上種々の事があり、春秋戰國の際、社會の根本的改造に云ひ及んだのがあり、之を知らぬでなく、註脚に註脚を加へたりするけれど、現在の社會に當て篏めるに就いて全く考へようとせず、之を考へるのを空恐ろしく感ずる。勢は自然の成行きに委すといふのがあつても、斯く改むべきものであると明言するのは、政府の權力の維持せられる間は無い。纔かに王道と覇道との差別を說く位のものである。賴山陽は胸間に不平を抱いて居る跡が明白であるが、封建制度を廢すべしといふやうな事は噯にも出さぬ。

封建の廢さるゝの日あるを想像したかも疑はしい。德川氏の覆れるのを想像したらうが、別に之に代つて將軍となるべきものあるを考へたらう。南北朝は彼の如きに終つた。幕府の政治は已むを得ぬ所としたらう。明かに社會改造を企てたのは大鹽平八郎であるけれど。富貴の徒に物見せてやらうといふのが先になり、社會を如何に爲べきかについて成案があつたか、明白を缺く。封建制度の威壓で社會改造を考へる事が出來なくなつて居つた。

歐米にいろ〳〵の例があり、社會は必ず現狀の如きに限らず、改造の方法が幾許もあると說いたので、改造を思ひ立つやうになつた。世界戰役で市町村の破壞されたのがあり、如何に之を再建すべきかといふに伴ひ、改造の聲が盛んになつて來た。加ふるに大帝國なる露國や獨逸や、數年前と全く異なる狀態となり、不可能の事と思はれた事が必ずしもさうで無いと分つて來た。それと同時に危險を感ずる事も多くなつた。夢のやうに思ふた事も强ち夢でなく、場合に依つて實現されぬと限らぬ。ウカとしては居られぬといふので、前よりも多く注意を拂ふ。改造を念とするは珍しくなく、實に道德上、學問上に奬勵し來り、時として制度上にも試みた事あるけれども、現狀を破々壞するの結果となつては、由々敷大事といふので警戒する事になつて居る。然し程度問題であつて、現在の秩序を破壞すと認められぬ限りに於て、改造を許されて居り、改造の自由があると云はねばならぬ。

改造を欲する心に變りがなけれど、以前に刺戟が弱く、今は刺戟が强く、以前よりも多く改造を心掛けずに居れなくなつて來て居る。舊幕時代好い老中が出ればよいとか、好い家老が出ればよいといふ位の所であつたが、今は世界列國を比較し、現狀を以て將來を察し、斯くしたらば何うか、斯くせねば將來悲慘に陷りはせぬかといふ心配がある。何とか善くならうといふのは、誰しも考へる所であつて、其考へ方が今は國家全體に關する事が多い。多數が成るべく良くならう、良くしようと努めるので國家の發展を見る。改造の聲の盛んになつて來たのは、國運の爲めに祝すべきである。

改造の語に飽き、何とか別の語を以てする事にならうが、兎も角も之を念とする事が强くなつたに相違ない。門閥政治で壓迫されて改造の自由を極度に制限せられたが、其壓迫の弛むと共に、各自の最も好いとする所に向ひ得るやうになつて來た。

多數の努力が集まつて、見るべき結果を生ずるものである。謂はゞ昔道德及び學問に奬勵した所を、一般社會に奬勵する事になつたのである。誰でも良くならうとし、良くしようといふ念のあるに定つて居り、唯現狀を破壞して或階級が安んじて特權を振ふのを妨げる恐あるので極力之を抑へたのであるが、今も多少の制限あるにせよ、昔と同樣に云へなくなつて居る。道德上とても昔から正心誠意、治國平天下として來て居り、日日に新たなる工夫を以て治國平天下の爲めに竭くせば、社會改造を爲し遂ぐべき筈であつたが、所謂道德家者流は殆ど全く此邊に考へ及ばなんだ。今でも所謂道德家者流は此邊に考へ及を避けるらしい。道德改造の必要も、斯くて叫ばるゝ事になる。之れまでの變遷、之れまでの歷史は進化あり退化あつても、大體を通じて大進化を遂げ來つて居る。ゴリラに三倍する大腦を具へた人類は、唯本能を以て當面に必要な事を爲すに止まらず、次から次ぎと新に考へ、零碎の改造を累積して現代の文明を造るに至つた。現代の文明は何程缺點が多く、今後も改めねばならぬ。若し人類の大腦が更に大きければ、一層多く改造し得るのであるが、今は現在の速度を以てするの外はない。心は矢竹に逸れども、何とも致し方が無い。年數を待たねばならね。大なる大腦で十年掛からべき事を、百年掛からねばならぬ。然し珊瑚蟲が島を築き上げるが如く。人類は少しの改造に次ぐに少しの改造を以てし、遂に目醒しいものを築き上げるに到る。人類以外の動物には、全く其類の事か無い。腦髓が餘りに小さい。獨り人類が大腦を以て改造を思ひ立ち、幾多の經驗を經て古人の考へ及ばなんだ所を作り上げる。千年後萬年後、今日の人の思ひ及ばぬ所に至る。然し要するに個々人々に向上の心あるに基く。

生活享樂・個性伸長

本間久雄

すでにある一部の人が指摘してゐるやうに、今日の社會改造運動は、どちらかと云へば、精神的方面よりも物質的方面に流れて來てゐる。その結果は往々にして個々人の生活の享樂、最も正しき意味の生活の享樂といふことが顧みられぬがちである。こゝにいふ生活の享樂とは、決して贅澤な意味の、又は富者階級によく見る奢侈限濟の意味のそれではない。それは次にも述べる通り、人間の生活を營み、勞働を營む上の實に必須な、實に自然な條件であり、狀態である。又社會改造運動が物質的に流

れる今一つの結果としては、個性の價値が輕んぜられたことである。天眞ある個人が、多數凡庸の群衆に依つてその天眞を發揮し得ないやうな狀態が自然に釀されることである。ある西洋の思想家は、「生のまゝのデモクラシーは、屢々偉大なる人格を嫉妬し、あるひは邪推し、またそれを侮辱することを喜び、同時に非恩的であり、浮氣であり、傲慢であり、又不正直であることもある」と云つてゐるが、これは決して單なる警句ばかりではないやうに思はれる場合がある。社會改造に精神的方面の力說の必要になる所以である。

一切の社會改造運動の目標の一つはたしかに個人の幸福の增進といふことである。個人の幸福の增進が、直ちに社會的幸福を構成するといふやうな意味で個人の幸福が增進されなければならないといふことである。

個々人の幸福といふことは、いふまでもなく、個々人の生活の享樂といふことである。個々人がその個々の立場において、個々の性格において、個々の環境において、思ふさま自己を伸ばし、自己を培ひ、そしてその自己を伸ばし培ふことの中に、自己の生長を謳歌し、歡喜することである。この意味で、生活享樂は飽くまでも個人本位であるべきである。しかし、社會の一成員としての自己の伸長發育に、やがて社會の文化に寄與すること、乃至寄與し得ることを豫想し、又は豫想し得るがために、この意味における個々人の生活享樂は直ちに、それ自らにおいて一個の社會的價値を構成するのである。この意味で生活の享樂と個性の伸長とは、互ひに表であり、裏である。

社會改造論者、殊に唯物的改造論者は、多く如上の理由を認めない。彼等のあるものは、個人といふことよりも、社會の全體といふことを眼目とする。社會の全體を律するやうな生活の改造をすることによつて、直ちに社會の全體を幸福ならしめようとする。物を質的に考へることよりも、寧ろ量的な考へ方をする。精神的よりも、寧ろ物質的な見方をする。これは彼等に取つて當然なことである。

しかしそれでは決して個々人の幸福は贏ち得られない。物質的の生活改造は必要ではあるが、それだけでは決して個々人の生活享樂の目的は達せられない。こゝに於て、多くの思想家は、別な方面から、即ち精神的方面からその改造運動を試みようとした。アト、ランドムに數へただけでも、ラスキン、モオリス、エレンケイ、カアペンタア、ラッセル等は何れもこの點で注目すべき人であらう。これらの人々の力點を置いたところ

は、夫々異つてはゐるが、結局、いかにして社會生活における個人の幸福が贏ち得られるかといふ一點に最後は落ちてゆく、この一點を度外視しては、一切の社會運動は決して完全なものではあり得ない。

唯物論的社會改造意見の中には、往々にして、知的及び物的勞働の區別をなみするものがある。そして知的及び物的勞働に對する異つた條件を認めないやうな意見もある。しかしこれは人間の才幹乃至才能上の差別をなみすることであつて、本當によく人間性を理解したものではない。言葉を換へて云へば、人間の個人性が、いかに複雜なものであり、いかに多樣なものであり、いかに陰影に富んだものであるかを理解しないものである。あることに適した人間であつても、あることに適しない人間がある。從つて、自己に適しないことをも、ある制度の下にしなければならないといふやうなことがあらば、それはその人に取つて、生活の苦痛である。

勞働運動の如きも、結局は、そこに働いてゐる勞働者自身の人間の問題がすべてを決定する。いかに八時間制が採用されても、賃銀問題が解決されても、それだけでは勞働者個々の個的生活は幸福にはならない。個々の生活が幸福になるためには、カアペンタアの云つてゐるやうに、個々人が一個の藝術家でなければならない。言葉を換へて云へば、個々人がその仕事に、自己表現、自己解放を感ずることによつてその仕事を快樂化しなければならない。こゝにも生活享樂の意味がある。そして個々の仕事に、自己表現、自己解放を感じ得るのは、その個人がその創造的衝動を基調として勞作を營むからである、この點においても、個人主義の價値が力說されなければならない。

たゞし誤解のないやうに一言したいことは、私の以上のやうに云ふのは、決して、勞働問題における物質的方面の改造を否定する意味ではないといふことである。上のやうな社會の個々の成員が、その勞働に快樂を感じ、そこに一個の幸福を見出し、生活享樂を實現するためには彼等がそれを成し得るやうな社會的環境に置かれなければならないことはいふまでもない。たゞさういふ社會的環境そのものだけでは決して十全でないといふ意味を私は云つてゐるのである。

最近わが國でも文化主義といふことが提唱された。これなども唯物的社會改造論に對する一種の反動であるとも　られる。ここでは個人の價値が重要視され、天才の尊嚴が認められる。

一國の文化は、優れた個性、豐かな天稟の人に待つことが多い。あながち、天才主義、英雄崇拜主義の人でないまでも、このことは充分にこれを承認してよい。一切の社會改造運動はこのことを見落してはならない。

エレン・ケイは其の『少數と多數』と題する有名な長論文の中で、多數主義と少數主義、換言すれば、民衆本位主義と天才主義との關係について委曲を盡した論議を恣まゝにしてゐるが、その中でも彼女は、イブセンのやうに極端にではないが、天才の價値を認め、天稟ある個性が、やゝもすれば、誤られた平等主義群衆主義の犧牲とならざるを得ないやうな傾向に近代の社會があることを嘆いてゐる。そして少數主義と多數主義とは決して唯物的社會主義者のある人々の考へるやうに相叛いてゐるべきものではないことを說いてゐる。

「天才は常に奇蹟である。然しながら、また準備されたものである。私たちはテイーラ・デル・フエゴー嶋からダーヴインの生れるのを期待しない。またエスキモー人の間に、ダンテの生れることを期待しない。私たちは、天才の生れるや、國民の教養の胎内からであるといふことを知つてゐる。また私たちは偉大なる天才の事業と同化し、そしてそれによつて豐富にされ、精純にされるところの多數者が、その返報として天才の創造力を增進するものであるといふことを知つてゐる」

又彼女は次のやうに云つてゐる。

「思ふに、國民の文化は、單にその政治的形式にのみ倚りかゝつてゐるのではない。それは其の國民が、その文化のためには喜んでその犧牲となるといふやうな物質的繁榮のうちに、いかによく生活してゐるか否かに倚りかゝつてゐる。又その國民が、その文化的事業に對して活眼と熱情とを持つてゐるか否かに倚りかゝつてゐる。國民が文化ある國民となるのは、偉大なる創造的人物の出現と相俟つて、多數者の生活が、少數者の感化によつて十分に意義あるものとなり、そして又更にその多數者が少數者に對して文化の重要であるといふ刺戟を與ふるやうになつた場合である。社會民主々義的に組織された社會においてはかくの如くにして個性が救はれるのである。」

彼女はかう云つて少數對多數の相互關係を說いてゐるが、たしかにこの說は今の場合肯綮に中つてゐる。蓋しこの場合の天才主義が決して貴族主義でないことはいふまでもなく、又この場合の文化が、所謂民衆の文化であることといふまでもない。といふのは本當の民衆文化は、如上個性の價値を十分に認めたものであるからである。

唯物的社會改造論は、やゝもすると如上の個性主義――個性

の價値と伸長とを認めないことに傾き易い。たとへ認めるにしてそれを重要視しないことに傾き易い。これが唯物論的社會改造論の大きな缺點であるやうに思はれる。

尤もかういふのは、前にも一言した通り、決して唯物論的主張を蔑視する意味ではない。否、蔑視どころか私は、大にそれを重要視する。個々人の生活享樂のために、又個々人の個性伸展のために、乃至一國の文化發揮のためには、より好都合な、より適當な生活狀態が、物質方面の改善によつて齎らされなければならないことは十分にこれを認める。しかし前にも一言した通り、それが究竟目的であつてはならない。少くもそれに力點をより多く附することによつて、他の精神的方面、個性的方面を度外視してはならないといふのである。

これについても、エレン・ケイは、前に擧げた『少數と多數』の中で、正當に妥當に次のやうに云つてゐる。

「今日豫知し難い新しい爭鬪が改造された社會にも發生するに相違ないといふことは、極めて睹易い事實である。改造された社會においては、利益に對する貪慾心がたとへ減じても、恐らくは權力に對する欲求や名擧其他の野心に對する渴望やが、一方に增大するであらう。理想的な狀態は、たゞ理想的な人々によつてのみ實現されるものである。單に物的に改造された良き生活狀態からばかりではなく、寧ろ先づ第一には、高尚な心靈のうちからこそ大なる幸福、花が咲き出て來るであらう。但しそれと同時に私たちは、道德的、知的其他の精神的活動、發展に取つて、物的に改良された生活狀態がまた重要であるといふことを忘れてはならない。物的な生活狀態は、精神的改造――今日以上の他の原動力を驅つて、新らしい生活を始めさせ、また今日以上の他の價値を驅つて、私達の努力の對象たらしめるところの精神的改造――に取つて、極めて重大な意義を持つてゐるにものである」と。

いかにも味ふべき言說ではないか。私は、我が國に勃興しつゝある現在の社會改造運動も、かういふ精神方面と物質方面とを二つながら眼下に置いた（力點を前者に置く）穩健な健全なものであることを希望する。

社會改造に於ける理想的要素の意義

慶大教授　野村兼太郎

一

社會改造の叫びは吾人の常に耳にするところである。現存する社會に對する不平不満が絶えず社會は改造しなければならないと云ふ思想となり、議論となり、行動となる。此の事實は何も現代に限る現象ではない。歴史的實證に徴する迄もなく如何なる時、如何なる社會に於いても、常に稱へられて居たのである。故に人間の歴史は是を社會改造の歴史であるとも云へやう。唯其の時代々々に於ける個人の自覺と物質的狀態との程度如何に依つて、ある時は強く其の必要を高唱され、ある時はUndercurrent として著しく表面に顯れないことがあるだけである。少くとも社會の一部に於いては絶えず社會改造の企圖は考へられて居るのである。改造が企てられない社會は死滅せる社會以外にあり得ない。現代のやうに物質的生産組織の方面と精神的人格價値の方面と甚だしく齟齬して居る時代にあつて、社會改造の問題が喧しく論ぜられるのは當然である。

以下述べやうと思ふのは斯の如き社會改良の直接の手段に就いてゞはない。將た亦何が故に社會改良を必要とするに至るかと云ふやうな根本的問題に就いてゞもない。唯吾人が現存する社會に對し不足を感じ、是を改造しやうとするに當つて、目的論的考察――換言すれば理想を包含する必要があるか如何か。如何を更に若し理想が必要であるとするならば、如何なる點に於いてゞあるか。是等の點に關して少しく余の考ふるところを述べたいと思ふのである。

二

社會改造とは何を云ふのか。云ふ迄もなく現存する社會よりも吾人一般の生活に適應した社會を作らうとするにある。從つて普通我々の生活を精神的生活と物質的生活とに分けるやうに、社會改造に於いても、吾人の精神的生活を改造する精神的改造と物質的生活の改善である物質的改造と二つあると云ふことが出來やう。物質的改造が具體的で直接的であるに反して、精神的改造が抽象的で間接的であるが爲めに屢々閑却されることが少くない。空腹を感じて居る者にあつては精神修養を說か

れるよりも、一塊のパンを給與される方が遙かに有難い。極めて不完全な生産組織を有する社會に向つて、道德的理想論を說明するも何の甲斐もないことである。然し乍ら後に述べるやうに物質的改造のみが社會改造の全部ではない。

以上は改造の目的物の如何に依つて區別したものであるが、云ふまでもなく此の區別は嚴密に分かつことが出來ない。次ぎに改造する手段の方面から改造論を分かつて因果律的改造論と目的論的改造論とに區別することが出來るだらう。前者は所謂唯物論的の觀察と云はれるものであつて、社會の進化は必然的に惹起するものである。吾人は唯其の大勢を推察して是を促進させるばかりである。即ち因果律を以て社會改良に論及しやうとするものである。斯の如き觀察を以つて、文化の全體を說明することの不當なるは繰返して論ずる必要もなからう。(拙著「經濟的文化と哲學」第三篇參照)後者は所謂理想論である。ある一定の目的を樹立して、其の進化の目標に添ふやうに社會を改造しやうとするものである。此の兩者は是を相離して考ふべきものではない。社會の進化は是等兩者の相互作用に依つて惹起されるものである。進化の意義が一方生物學的に自己の境遇に對する適應であると共に、他方論理學的に選擇目的(Auswahlzweck)を豫想するのである。尙ほ後に自ら此の問題に觸れなければならないだらう。

三

人間が生存したいと云ふ欲望を棄てない限り、あらゆる社會改造の内で、物質的方面程重要なものはない。此の點に於いてマルクス、エンゲルスの所論は常に眞理であることを失はない。然し乍ら物質的改造が社會改造の全部ではないことは前述の如くである。因果律的に考察する者と雖も、純粋に唯物的であるとは云ひ得ない。彼等は普通社會進化の主なる要素は其の環境(Environment)であると云ふ。然し其の環境と云ふも單に氣候、風土、溫度、濕乾等の物質的方面のみを云ふのではない。過去に於ける感情、觀察、習慣等は勿論、文學、傳說、其の他附近に住居する他民族のそれ等から受ける影響をも含まなければならない。エスキモー(Eskimos)の環境は其の附近の種族たるラブラドール(Labrador)の外界的狀態、及び二三の旅行者からの影響、並びに先祖のエスキモーから受けたる傳統等から成立するものである。而して文明國になればなる程、其の程度も、其の範圍も擴大され複雜になる。(John Fiske:— Outlines of Cosmic Philosophy. Part II. chap. xviii 參照)斯の如く環境の意義を解する時は、假令是等の精神的要素が其の

根本に於いて物質的影響を受けたものであるとしても、今日社會の改造を論ずるに當つては、是等精神的要素の影響を無視することは出來ない。更に後代の人類に多大の影響を與へる現在の精神的生活を、出來る限り改善しやうとするのは決して無意義なことではない。其の人類の赴くべき歸趨を明かにして、現代の精神的改造を促進するのは現代人の義務である。是は吾人が唯因果的觀察の立場に立つて、暫く社會改造の精神的方面に就いて述べたのである。更に目的論的立場に立つて此の方面を觀察すれば、吾人自ら本論文の目的たる理想の問題に觸れざるを得ない。今直ちに此のことに就いて述ぶるに先立つて、少しく社會と個人との關係に就いて論じたいと思ふ。

四

社會は個人と全く別個の性質を有するものであることはデュルケムの詳述するが如くである。けれども社會を離れて個人の存在を考へられないやうに、全然個人を無視して社會の成立を許容することは出來ない。(Gehlke:—"Emile Durkhem's Contribution to sociological Theory"參照) 此の事實から通常社會改造と稱せらるゝものゝ内に二つの方面があることを知り得る。一は社會の社會全體としての改造である。分配制度の改善とか、都市制度交通機關の改良等と稱せらるゝものは即ち是である。第二は社會に於ける個人の改造である。教育體育の設備等が是に屬する。今是等兩種の社會改造を見るに、社會として是を行はんとすれば勢ひ强制するの必要がある。然るに現代人の要求するところは何であるか。それは論ずる迄もなく自我の覺醒から生ずる自由解放の要求である。現代の社會運動、勞働運動がマルクス主義から離れて理想主義に向はんとするのは、此の間の消息を語るものではないか。故に社會が社會としての慣習傳統を以つて自覺せる個人に對する時は、必ず失敗に陷ちざるを得ない。これ現代に於ける社會改造が過去に於けるそれよりも、更に一層個人の改造を必要とする所以である。個人性の自覺は一般に於いて次第に社會の强制力を弱めてゆく。之に反して個人の意義、個人の價値は益々其の重要さを認められて來る。社會改造も斯の如き個人の價値の重要視と共に、自ら其の意義を變ぜざるを得ない。社會改造の眞意義が其の社會に住する各個人の天賦の才能を充分完全に發揮するにあることは、余の屢々述べたるところである。(前掲拙著及び「解放」八月號拙稿「個人の完成と社會的經濟生活」參照) 故に社會改造の基本は一部個人改造を基本とせざるを得ない。こゝに於いて少しく個人其のものに就いて論ずる必要が出て來る。

五

個人の社會に於ける地位は如何にして決定されるか、換言すればある個人の生存の價値如何の問題である。それは其の個人の有する性質の範圍と、その相互關係とに依つて定めらるべき筈である。其の性質は其の生活の内容となつて表現される。感情、思索、行爲、體驗は其の内容を語るものである。其の各自に就いて種々なる對立が存する。深きに對する淺き。高きに對する低き。無限に對する有限。廣きに對する狹き。是等種々なる對立が各個人の性質狀態を制約する。而してそれ等相互の關係がこゝに個人の人格を形成する。

元來個人はそれ自身に於いて一の統一を有する。而して其の個人は其の統一――前述せる内容の如何に依つて、個人相互の間には各自相違するけれども――を通じて宇宙の諸現象を觀察する。故に如何なる表現も主觀的なる人格的色彩を有するを常とする。斯の如き統一が完全になればなる程其の者は個人としての自覺を明確にすることが出來る。故に時としては自我の主張者に頑迷固陋なものがあり得る。それは其の内容に於いて、淺く、狹く、低きが故である。從つて其の内容に於いて豐富に、其の統一に於いて完全なる者が最も生存の價値を有する者であると云ふことが出來るだらう。吾人はこゝに價値判斷を下して居る。此の價値判斷の根本は上述したところに依つて略々明かであるから、敢て贅言を附加しない。

故に個人自身の改造は個人としては自己の天資を豐富ならしめ人格的統一を完全ならしむる方へ向ふべきであるが、此の點に於ける社會の職分は唯個人をして容易に其の機會を與ふる消極的方面に止まる。これ以上何等の强制力をも有たない。然るに過去に於いては勿論、現在に於いてもすべてに人類の自覺が此の點まで發達してゐる譯ではない。故に社會は單に上述消極的方面に止まらずして、ある點まで積極的行動に出でざるを得ないのである。即ち社會改造の運動は一方其の社會組織を個人の價値完成に寄與すると共に、他方個人の自覺を促進するやうに形成する必要がある。從つて此の方面に向つて便宜であるやうに、社會の經濟的構造に適應する必要がある。これは特に論ずる迄もないことであるが、これと共に、又社會の制度を個人の精神的方面の開拓に資するところあるやうに改良しなければならない。以下其の理由に就いて余の考ふるところを述べやうと思ふ。(G. Simmel :— Lebensanschauung. Kapitel. I.II. 及び G. D. H. Cole :— Social Theory. chapter XIV 參照)

六

吾人の社會生活を出來るだけよくすると云ふのは、各個人が其の人間としての生活を充分完全に營るやうにすると云ふにある。從つて一方物質的に幸福であると共に、精神的にも幸福でなければならない。今何が故に社會を改造するに當つて理想を必要とするか。唯單に物質的充足のみを以つてしては、何が故に根本的の改造を期待することが出來ないのか。社會全般として個人の精神的開發が何が故に必要であるのか。此の問題に對して先づ個人的場合に就いて述べやう。

個人として社會に於いて、精神的にも物質的にも甚だしく其の天分を缺如して居るものは貧民である。今貧民の生活を改善しやうと欲する者は如何なる手段を採るのが最も適當であるか。それには先づ貧民の生活を知らねばならない。此の點に就いて詳述すべき餘裕がないが、一言を以つて云へば、彼等の生活は本能的以外に出ることがないと云へやう。彼等の行動は全然動物的反射運動に過ぎない。貧民窟視察と稱する美裝した男女の群に對し彼等が何等の反感をも感じないのは、全く理性的反省作用を缺乏して居るが故である。意思薄弱、怠慢、貯蓄心の缺如等がよく貧乏の人格的原因として計上される。其の天賦の才能に關しても屢々貧民研究者から「根からの貧民から天才を作り上げることは絶望である」と云ふ言葉を聞かされる。斯の如き性格を有する貧民に向つて、徒らに物質的改造のみを試みても何の役にも立たない。かの貧民が新築家屋よりも街を家を好むのは、單に經濟上からの問題ではない。然し乍ら貧民は經に救助し得べからざるものであるから、牛馬と同一視するも善闘へなしと云ふ論斷を下すものには贊成が出來ない。斯の如き斷定は少しく人としての良心を持てる者は口にすることさへ好まないだらう。貧民は其の遺傳と其の境遇とから今日の如き運命に相應するに至つたのである。其の永き歴史は一朝にして改善するのは不可能なことではあるが、絶望ではないと思ふ。殊に貧民幼兒の精神的開發は最も必要である。勿論かゝる方面の改造に於ても直接必要なものは物質的給付である。然し單に物質的に豐かならしむるのみでは、到底貧民の改造は成功し得ないこと前述の如くである。即ち貧民に何等かの理想を與へることが先づ必要である。其の本能的衝動生活から離れて、次第に理性的自由意思の生活に向はしむることが肝要である。云ふ迄もなく斯の如き改造は最も根氣を必要とする。(賀川豐彦氏「貧民心理之研究」及びWill Reason:—"Poverty."参照」)

以上は特に貧民に就いて述べたのであるが是は單に貧民に限

らるべきものではない。普通人と雖も理想の缺如して居る者が、其の行動の曖昧模糊たることは敢て多言を必要としないだらう。之に反して、かの唯物論的社會主義者の如きは其の説として理想を排斥して居るにも拘らず、人自身としては一個の信念――理想を有して居ると云へやう。若し彼等に理想がないとしたならば、何故彼等の説くが如く現代社會にもつと適應した生活を送らないのだらうか。將來の社會はかくなるべきであると考へるのはすでに一個の Sollen であり、理想ではないだらうか。吾人は社會の物質的要素を排斥する者ではない。然し如何なる社會改造と雖も理想の伴はぬものはあり得ない。

以上は個人の立場に就いて考へて見たのであるが、次ぎに更らに社會全般の改造運動に於いて理想の必要なる所以を簡單に述べやうと思ふ。

七

社會全般の運動として理想の必要なる所以を述ぶるに當つて、少しく戰時中に於ける獨逸社會運動の實際の現象を借りることとする。

獨逸に於ける勞働者の代表政治團體は獨逸社會民主黨である。然るに同黨は戰爭の開始と共に多數派と少數派とに分裂するに至つた。少數派はリープクネヒト、リユーレ等の過激派、所謂「スパルタカス」派は勿論、カウツキー、ベルンシユタイン等一般に戰爭否定、少くとも當時の戰爭が獨逸にとつて防禦戰にあらざるが故に、戰費の協賛を拒まんとしたものである。多數派はシヤイデマン、エーベルト、エツプリン等に依つて主張さるゝ戰費協賛繼續派である。少くとも一九一四年八月四日戰爭開始の際、議會に於いて同黨の總裁ハーゼが黨の宣言として戰費協賛の態度を述べて「露國專制主義の勝利は我が國民及び其の平和的發展の終末を意味すると云へやう。此の危險を除去し、而して文明を擁護し、我が祖國の獨立を維持するのは、實に吾人の義務である。」と云つた言葉を遵守する者である。

此の兩派の對立はやがて一九一七年四月の少數派の分離と云ふことになつた。新團體は獨逸獨立社會民主黨と名づけられた。而して是等兩派はすつと戰爭の終結する迄、互に其の主張するところに依つて、勢力を爭つて居たのである。

以上の社會黨兩派の論爭に於いて、其の勢力の根源であつた一般の勞働者は果して各々其の信ずるところに從つて行動したであらうか。一般勞働者の實際的行動は理性的に論理的に決定されるものではない。彼等の首領の説くところは彼等自身の行動と何等相關するところがない。彼等は彼等自身の直接、境遇

に影響さるゝに從つて變化するのである。戰爭の繼續するに從つて獨立社會民主黨の勢力が増加した所以のものは、何も勞働者が平和的精神に目醒めた譯でも何でもない。一方血族の戰死に對する悲痛の感と、他方經濟的缺乏より生ずる日常生活の困難から生じた稍々自棄的の結果に過ぎない。故に彼等は永遠の平和を願ふのではなくして、兎に角目前の急速なる平和を欲したのである。理性的運動にあらずして、本能的運動に過ぎない。(Edwyn Bevan:—"German Social Democracy during the War." 參照)

斯の如き事實は何を語るか。即ちあらゆる民衆運動の特徴ではあるが、常に唯眼前の事實に依つて支配され、少しも將來並びに運動自身の價値を顧慮することなく、本能的反射的に動いて居るに過ぎない。斯の如き運動が如何に危險であるかは先覺者の傳記を繙く者の常に感ずるところである。我が國現在の經濟的恐慌の前後の社會運動を比較する時、更に其の朝にあると野にあるとに依つて其の說を適宜に變じ得る我が政黨員の運動を見る時、恰も周圍の狀況に依つて毛の色を變ずる保護色動物を見るの感がある。彼等の内のある者は自ら民衆の指導者を以つて任じ、一見社會の先覺者の如き態度を裝つて現れる。然し乍ら少しく是を冷靜に觀察すれば、彼等は社會全般と云ふよりも唯彼等が迎合するに最も都合よき問題に對して阿諛するに過ぎないことを看破し得るだらう。故に朝にあつては貴族富豪の意を迎へ、野にあつては民衆に迎合するのである。即ち又多に依つて毛色を異にする狐と何等異なるところを見ない。かゝる人物の輩出は眞の勞働問題、社會問題に對して甚だ大なる害を及ぼすものである。然らば斯の如き事實は如何にすべきであるか。以下節を變へて述べる。

八

上述するところは寧ろ因果律的に考察することの出來る範圍である。民衆の行動を心理學的に生物學的に觀察すれば、其の原因は自ら明瞭にすることが出來るだらう。然し乍ら是等の點を深く考究することなく、自己の思想から直ちに彼等民衆の運動を推斷する時は、大なる誤謬と失望とを齎すに過ぎないだらう。例へばある社會改良家が民衆の生活改善の爲めに、賃銀の値上げ、勞働組合の設立等を高唱したとする。其の結果大多數の勞働者の賛同を得た。そこで彼は直ちに勞働者は自覺せりと論斷するとすれば、それは多くの場合誤りである。ガルスワーシーの戯曲「爭鬪」は此の間の消息を描いて居ると見ることも出來やう。恰も前述せる獨逸獨立社會民主黨員の増加が何等獨逸

勞働者の平和的理想の自覺を語るものでないと同一である。

吾人々類も亦一の生物である。從つてあらゆる生物と同樣に、本能的に、衝動的に動くことも亦止むを得ないことである。其の境遇に最も順應した生活を送らんとすることは甚だ必要なことである。從つて本能的生活は吾人の生活に於いて、極めて有力なる部分を占めてゐることも否定出來ない。然し乍ら何等規準とするところなく、其の日其の日に適應してゆくことが極めて危險でもあり、文化の進歩を豫想し得ぬことはすでに述べた通りである。此の方面より見れば所謂社會改造の如きは何等の意味をも有せぬことになる。即ち保護色的改造論者を以つて唯一無二の社會指導者としなければならない。社會、眞の進化がかゝる者に依つて建設され得ないことはこゝに詳論する必要もあるまい。今は直ちに眞の社會改造に必要なる要素に就て論歩を進めやう。

九

すでに述べたるが如く、個人として最も價値あり意義あるものは其の人格的統一である。斯の如き人格的統一が基本となつて、始めて其者が諸現象に對して一定の價値判斷が可能となるのである。此立場に立つて自己を創造してゆくこと、換言すれば人格的統一を形成してゆくことが個人としての理想である。個人自身の改善修養は斯の如き理想に依つてのみ意義を有するのである。

社會運動に於いても同一のことを云ひ得る。元來社會を改造せんと欲するのは一部人士の自覺に基き現代の缺陷を感得し、是を補足せんとして發するものである。假令會々其の者にとつて斯の如き改革を企つることが周圍の事情極めて不利であつたとしても、自覺せる者にとつては、其の社會の缺陷を補足しやうとする理想を高しとして、遂行せざるを得ないのである。社會改造に於いて最も必要不可缺ものは斯の如き自覺者が眞の理想――出來る限り完全なる人格的統一――を有して、一般民衆を指導することである。

第一に社會改造に於いて必要なることは一般民衆の自覺、換言すれば各自が一層大なる理想を有することである。少くとも彼等を指導しやうとする所謂自覺者が果して眞の自覺者であるか、或ひは又單に民衆に迎合する阿諛雷同の徒であるかを、自己の理想に照合して冷靜是を判斷する能力を養はしむる必要がある。さもないと社會は眞の自覺者を認識することなく、却つて場當りの巧みな老猾者に迷はされ、其の進歩を阻止するに至る。否それ許りではなく、時に依ると先覺者を殺害し、而も自

らよしとして後代の嘲笑を招くやうな悲劇を演ずることもあり得る。歴史が幾度か此の悲劇を繰り返して居るのは眞に人類のために悲むべきことである。斯の如き悲劇を再びしないやうにするのには、如何しても一般民衆の理想的經驗を促進せしむることが必要である。

一〇

以上述べたるところに依つて、社會を改造するに當つて理想的要素が必要であり、且つ其の重大なる所以を略述した積りである。然し乍ら吾人は社會改造に於ける物質的經濟的要素を無視する者ではない。寧ろ甚だ重大なものであると考へて居る。飢えたる者には先づパンを與へる必要がある。社會の改造は先づ經濟的下建築（ウンテーバウ）の完成が必要である。（「太陽」七月號拙稿「マルクス主義と文化價値の觀念」參照。）それと共に各自の個人的自覺を促がす必要がある。パンを獲得しやうとするのは生きんがためである。故に吾人はパンを得ざるべからずとするに止まらず、更に何が故に生きんとするのかを考へさせることが社會改造に於いて必要なる條件である。

社會に於いて理想の必要なる所以は屢々人の說くところである。上述の如き理想が各人の人格的内容の如何に依つて、あるひは藝術に、あるひは宗教に、あるひは科學に、あるひは哲學に、其の他あらゆる文化價値となつて表現せらるゝことは最も好ましいことである。物質的改造と精神的改造と何れを先にすべきか。兩者相共に同時に行はれなければならない。一方因果的考察の進歩は、目的論的考察に依つて過られる文化の行程に、出來る限り添ふやうに導かれる必要がある。

上述のことはすべて吾人社會の改造を欲する者にとつては極めて自明のことである筈である。所謂一の truism に過ぎない。而も尙ほ繰返す必要があると云ふのは悲むべき事實であると云はれなければならない。（大正九年八月廿一日稿）

横斷的對立より縱斷的對立へ

法學博士　吉野作造

社會改造に關する最近諸家の議論の共通點とも觀るべきは、資本主義の批難、ブールジョアジーに對するプロレタリアートの優越の主張、從て社會改造の實際運動の第一步としての階級戰爭の提唱である。改造論としては此先きまだいろ〳〵の論點

があるのだが、そこになるといろ〳〵說が分れて來る。右述べた點までに略ぼ一致して居るので、之れ丈けを承認しない限りは昨今流行の言葉としての改造論者とは見做されない。蓋しブールジョアジーと資本主義との密接の關係、ブルジョアジーに根さす拔け難い偏見等は近世經濟組織の著しい特徵であるのみならず、之より生ずる所の弊害より免れんとするの幾多の試みは悉く失敗に歸し、今やブールジョアジーと利害を異にするプロレタリアートをして優越の地位を占めしむるにあらずんば、到底公正なる社會關係を樹立する能はざることが明かとなつた。殆んど總ての改造論者が、階級鬪爭を以て改造運動の第一歩とするに至つたのも怪むに足らない。ブールジョアジー文化は嘘の文化であつて、本當の文化は獨りプロレタリアートのみに發現せなければならないと云ふ意味で民衆文化を說くものすらある。社會改造運動も、更に進んで新興文化の建設運動も、ブールジョアジーとプロレタリアートの對立から發足するといふのが今日の論壇の傾向である。

併しながら斯くの如き階級的對立觀念は、改造論や文化問題について最も根本的なものであらうかどうか。玆に深く考ふべき問題が伏在する。

併し從來に、之は餘り疑問とせられなかつたやうだ。何故なれば從來の改造論者は目前の敵たるブールジョアジーとの階級戰に忙はしく、いはゞ只如何にして勝つべきかのみに心を碎き、何の爲めに勝たねばならぬかを深く考ふる暇がなかつたからである。饑ゑたるものが食を擇ばざると一般である。否偶々何の爲めと云ふ事を考へんとするものがあると、之を閑事業と罵倒して見たり、甚しきは爲めに階級戰爭に對する情熱を缺くと考へて敢て之を排斥すると云ふ事すらあつた。啻にそれ許りではない、遂には何の爲めなど云ふ事は考へなくてもいゝのだ、只ブールジョアジーと戰つて勝ちさへすればいゝのだ、と云ふ事を理論的に確立しようとする試みさへ行はれた。斯くして當時の社會改造論は唯物思想と結んだ。人間はすべて物質的環境の如何によつて支配される、之れさへ改めればいゝと云ふ制度萬能論となつた。最近までの社會主義は最も著しい此方面の代表者である。そして制度さへ改めれば能事畢ると云ふ立場からすれば階級戰爭夫れ自身が目的で、從つて階級的對立關係は一番根本的なものになる。例へばブールジョアジー文化に代ふるにプロレタリアート文化を以てすることが文化問題の殆總の題して最根本的の問題と云はざるを得ない。

併しよく冷靜に考へて見ると、階級的對立觀念が、最も根本

的なものかどうかと云ふ疑問は依然として殘る。何故なれば人は物質的環境によつてのみ支配さるゝとする所謂自然科學的人生觀を取るにあらざる限り、階級鬪爭に於て勝つことが、人類の仕事の最終最上のものと觀ることが出來ないからである。斯う云ふ立場は自然科學的人生觀に對する理想主義的人生觀の立場である。此後の立場からすれば階級鬪爭は或他の目的の爲めの一つの手段であつて、そが如何に實際運動としての意味に於て重要を極めて居つても、決して最も根本的なものと許すことは出來ない。と云つて階級鬪爭を無用だと云ふのではない。最も根本的な目的を達する爲めに必らず經なければならない第一の關門であると信ずる。實際問題として第一に經なければならないと云ふ事は、理論上最終のものと云ふ事は出來ない。大學へ入る爲めに高等學校に入らんとするものだ、高等學校の入學試驗を最終の根本のものと間違つてはならないと同様である。但し反對の自然科學的人生觀の立場を取れば制度さへ變ればいゝのだからかう云ふ問題は起らない。階級的對立觀念が根本的のものかどうかを疑ふのは、理想主義の立場を取る人のみに起るのである。

そこで自然主義の立場を取る人には理想主義者の此立場が分

らない。而して從來の社會改造論者殊に社會主義者は、餘りに深く所謂自然科學と結んで居つたから、あゝ云ふ理想主義的の立場を取ることは初めから社會改造者としての必要な資格を缺くものと考へた。所謂社會改造を論ぜんとする以上は否でも應でも自然科學的立場を取らなければならないやうに考へた。此事は本誌「夏季特別號」所載の拙論の中にも簡單に述べておいた。(九十四頁參照) 私が理想主義者であるのに、社會改造の問題を論ずると、西洋の唯物的議論に謬られて知らず識らず理想を取り、價値を輕蔑するやうな議論を吐くものが頗る多いが、此立場を最も大膽に最も露骨に而して甚しく尖鋭ではあるが最も下品に公表して居るものは、此二三月以來いろ〳〵の雜誌にあらはれた横田帝大助教授の評論文である。中にも八月號の「解放」には「知識階級と社會事實」と題する論文に於て頭で社會改造が出來るものと思つて居る連中を評し「彼等の說く文化や社會理想やは主観――其時々の主觀次第でどうにでも其内容を變更させ得るものなのである。こんなものによつて社會改造が指導されたり、開發されたりすると觀るのは甚しい樂天家にあらずんば甚しき妄想狂者である。」と罵倒し、又所謂「思想家の思想」を以て哲學者の寢言となし、「現代社會經濟生活に於ける知識階級と稱するものの、苦しい〳〵迷ひ言に過ぎない」とい

ひ、又「思想と云ふものは甚だ陳腐なものである。甚だ身の程を知らぬものである。それは已に或程限られたる範圍に於て僅かに社會事實たり得るものであるにも拘らず儼然たる社會事實であると信じ、尚らに進んですべての社會事實を指導し行き得るものであると思つてゐる」と說き、終りに「私は社會事實に對する思想の無能を信ずるものである。而して社會事實に對する智識階級の絶對的權威を否認するものである。……文化と云ふやうな概念、理想と云ふやうな夢で今日以後の社會事實を指導しようなぞと云ふ事の大間違であることを信ずる」を斷定して居る。此論文は土田杏村君の反論に答へたもので、態度丈けは土田君を子供扱ひにして居るやうだが、論文其物の値打がどつちが子供でどつちが大人かは餘程疑はしい。さはれ、予輩は所謂理想の有能を信ずるものであるから、横田君の說には一から十まで承服し難い。而して同君に於てまさか今頃こんな立場を取る人はあるまいと思つて居つた最も露骨な自然的人生觀の社會改造論者の好適例を認むるものである。

理想主義の立場からすれば、實に階級的對立觀念を根本的なものと觀ないのみならず、之に固執するはいろ／＼の點に於て危險であると認めなければならない。此點に於て横田君の論文中に論斷された同君の立場は寧ろ正しいと考へらるゝ。殊に本誌「夏季特別號」に寄せられた「民衆文化と予の文化主義」の一節、就中文化と云ふ觀念を民衆と云ふ集團によつて作爲的に制約するの不當を指摘し、又マルクス流の唯物史觀に陷り易き危險を說き、「理想はそれが民衆によつて或はブルジョアによつて、或はプロレタリアによつて解放せられるが故の理想ではなく、何人が之を解放するとは全く無關係の理想なるが故に理想である。」と說けるが如きは最も簡明に理想主義の立場を言ひ盡したものである。此立場の人は無論プロレタリアーのブールジョアジーに對する鬪爭を目下の急務として認めないではない。けれども彼等にとつてもつと根本的なことは所謂理想の實現である。此事の爲めに階級鬪爭が當分の所必要なのである。理想の實現は永久に階級鬪爭と終始しない。そこで一社會の人間を甲乙の階級に分けて橫斷的に對立せしむることは間違であるとはいはないが、それよりもつと根本的な、且つ大事な事は人生をどう觀るか、理想の現實性を信ずるかどうかの考へ方によつて、縱斷的に相結束すると云ふ事でなければならない。

我々と反對の立場を取る人にとつて所謂縱斷的對立は無意義

であらう。けれども此等の人が横斷的對立を最も根本的なものと考へて居る間に、彼等と反對の立場を取る改造論者が昨今非常に多くなつた。非常に多くなつたと云ふ事が縱斷的對立の現象が現實に生じた事を意味する。彼等の之を好むと好まざるとに拘らず所謂物的改造論より心的改造論への推移は、他の言葉を以ていへば横斷的對立より縱斷的對立への推移と云ふ事も出來る。

改造雜感

阿部次郎

中央公論記者足下

御約束によつて短い手紙を書きます。說いて盡すことが出來ないのは殘念ですが、今は時間がないから仕方がありません。いづれ又他日この趣旨を詳說する機會もあるでせうから、今日はほんの筋書だけで御免を蒙ります。

我々は改造によつて結局何を求めるのであるか。それは到達すべき何の目的もなしに唯現狀の變化を求めるのであるか。何處に行くといふ當てもなしに唯ブラブラ歩くことを我々は散步と呼んで居ますが、改造とは一種の社會的散步であるか。凡て眞面目な運動の傍には此種の散步家がくつついて來るものですから今更驚くにも當りませんが、世間の改造騷ぎの中にはこの意味の散步主義も少くないやうに見受けられます。尤も散步といふものは愉快なものに相違ありません。少し活氣のある人は蹲踞んでゐるよりはせめて散步をしたがるに相違ありません。さうして少し立入つて考へて見ると、散步にも立派に目的があるのです。散步には行き付く先の目的――客觀的な目的はないが、主觀的な目的は――自分を活動させて精神的にも肉體的にも自分に作業（ベシエフテイグング）を與へるといふ目的はあるのです。同樣のことは社會的散步についても云ふことが出來ます。彼等は結局じつとしてゐるに堪へないで、一種の鬱散を、一種の愉快を――もつと一般的に云へば一種の幸福を求めてゐるのです。だから我々は最も無目的らしい散步的改造論者についても、彼等の目的は一種の幸福にあるといふことが云へると思ひます。

併し退屈まぎれの作業も、散步位なら結構ですが、面白いからと云つて人の家に放火したり通行人を殺したりすることになると厄介になつて來ます。それが厄介なのは無目的な遊戲の欲求が――更に嚴密に云へば自己作業の主觀的目的が――人生の基礎的條件に無定見な手を觸れるからです。さうしてこれを函

向づくに破壊するからです。特に改造論の遊戯はそれが社會の重要な方面に觸れゝば觸れるほど、又それが危險を伴へば伴ふほど面白くなるのが普通でせうから、散歩的改造論者もいつの間にか「散歩」ではすまされなくなつて來ます。彼の「散歩」は次第に「火いたづら」に變つて來ます。思ふに此種の「火いたづら」も、又火いたづらに長じた「火の玉小僧」も論理の眼から見たら必要なのでせう。或社會に徹底的な改革を行ふためには此種の「勇敢な手足」が働かなければならないのでせう。併しこれが單純な破壊にをはらずに本當に「改造」の實をあげるためには、この手足を十分に使ひこなすだけの指導的原理がなければなりません。明瞭に目的を意識して、破壊すべきものと破壊すべからざるものとの區別を定め、終局目的とその手段となるべきものとの輕重を識る「頭腦」がなければなりません。この頭腦を支配する動機は憤激や愉快や主觀的作業慾などではなくて、人生の客觀的目的、この目的を實現するためのやむを得ざる必要などでなければならないと思ひます。さうしてこれが改造の本筋だと思ひます。

我々が自分の住んでゐる家を改造するのは何のためであるか。それは住みよくするためである。我々が道路を改修するのは何のためであるか。それは歩きよくするためである。我々は我々の家を住みよくするために、我々の道路を歩きよくするために、現在の自分達にとつては苦しい作業をも敢てする。これが客觀的目的を持つた改造であります。行き付く先を意識した旅行であります。然らば我々はこの意味の改造によつて結局何を求めてゐるのであるか。私はこの場合にも、それは幸福であるといふことが出來ると思ひます。我々が住みよき家を求めるのはよく住むためである。我々が歩きよき道を求めるのはよく歩くため——若くはよき國に早く行くためである。目的はよく生きることである。さうして私は今、よく生きることを幸福と名けます。かう云ふと昔から問題になつてゐる幸福と「善」との關係がからんで來ますが、善とは人間の根本的要求を充すものであるならば、我々は「善く」ならずにどうして本當に幸福になることが出來ませう。同時に我々を本當に幸福にしないものがどうして善であることが出來ませう。私は今福徳合致説の立場から幸福といふ言葉を使つてゐるのであります。改造の終局目的はこの意味に於いて本當の幸福でなければならないと思ひます。

かう考へて來ると幸福の中にも本當の幸福と本當でない幸福とがわかれて來ます。散歩的改造主義の病的亢進として見た破壊主義は、其人の主觀的破壊慾を満足させる點に於いては一種

の目標、一層詳言せば、從つて一段の幸福に相違ありません。併しそれはその人並びに社會一般の基礎的條件を破壞する幸福ですから、その一つの幸福を實現することはその人の生活全體の不幸の原因となります。破壞に從事してゐる間は幸福でも破壞が成功して了ふと其人は不幸になつてしまひます。破壞に從事してゐる間でも多分心持が靜かになる瞬間にはその人は乾度不幸を感ずるでせう。だからそれは本當の幸福とは云へないのです。本當の幸福とは結局我々の本性と——その本性はどんなものであれ兎に角その本性と——合致した生活にのみあり得るものと云ふことが出來るでせう。さうすると幸福とは畢竟人格の狀態である、我々の幸福と不幸とを區別する最後の根據は我々が何であるかの問題であつて何を持つかの問題ではない——換言すれば幸福とは精神的なものであるといふことになります。此處に精神的といふのは物質を排斥するといふ意味ではなくて、物質以上の意義を持つといふこと——從つて自己の要求と矛盾する限り物質の價値を否定する權威を持つといふこと——であります。精神は(人格は)主であつて物質は從であります。精神は意義であつて物質はそれ自身に於いては無意義であります。精神は太陽であつて物質はそれを反射することによつてのみ光ることの出來る月であります。我々の改造の結局目的は畢竟この精神の、この「價値」の主の、この目的の幸福であります。我々が求めるのは死せる物質の集積ではなくて人格のよりよき狀態であります。我々の精神的幸福を妨げる物質は禍であります。それは多ければ多いほど益々禍であります。かう考へるのは「淺薄な精神主義」でせうか。若しさうならば私は淺薄な精神主義者であることを光榮とします。さうして淺薄な物質主義者を憫みます。

併しかう云ふのは幸福の本質に關する問題であつて、幸福實現の手段に關する問題ではありません。改造の目的は此の如き精神的幸福であるが、この目的を實現する手段として所謂精神的改造と所謂物質的改造と孰れが重大であり孰れが基礎的であるかは別問題であります。私の前に云つたのは精神的幸福が改造のオメガであるといふきまりきつた——併し事實上徹底してゐない眞理だけであつて、精神的改造がアルファであるといふことではありません。當世の時務として經濟的改造が急要であるか若くは所謂精神的改造——たとへば宗教の振興の如きことが急要であるか、この點については私は今何とも云ひ兼ねることを感じます。私の明瞭に云へるのは唯經濟的改造が終局でないことだけであります。從つて當世の時務を考へる場合に於いても、この精神的結局目的を明瞭に意識して置く必要があること

と、この目的を明瞭に意識しなければ改造運動の遠近法（パースペクティヴ）が違ふことだけであります。

併しもう一つ——私は精神的改造が經濟的改造を實現するための條件として、改造のアルフアではなくとも少くともデルタ位の意義を持つてゐることに注意を喚起して置きたく思ひます。尤ももう時間がありませんから、これは唯一言するだけであります。

今假に經濟的改造の要點は分配の公平にあるとします。この分配の公平を實現するためにはある權力若くは制度の確立で澤山でせうか。この權力の行使若くは制度の運用は民衆の精神的道德的改造を或程度まで前提することはないでせうか。私にはどう云ふ方法が公平な分配の方法であるか、この問題に明答するだけの力がありませんが、今は唯普通に云はれてゐる方法を實行するとして考へて見ます。第一に分配の公平とは生產に與る人々の勞力の程度に比例して分配することであるとすれば、勞力の程度を認定するためにも、認定に從つた分配に滿足するためにも非常に必要なのは、官民兩者に於ける正義の觀念であります。若しその認定が私黨の私利を基礎として行はれれば、分配を公平にする制度は、其實組織的に分配を不公平にする制度に過ぎなくなります。又認定に從ふ分配に滿足することが出來なければ、所得の懸殊となり、私慾を基礎とする破壞運動となり、配當に不平なる階級の怠業となつて、結局必要なる生產の荒廢となるに違ひありません。特にこの場合に問題になるのは精神的勞働者若くは精神的職業と筋肉勞働者の分配率であります。若しそれが筋肉勞働者の經濟的專制に歸着すれば人間の生活は全體として損されるでせう。第二に分配の公平とは各人の必要に應じて分配することであるとすれば、單に各人の生存權を保證するためにも共社會には愛の精神が盛んでなければなりません。愛の精神が溢れて居なければ、必要に應じて分配する制度は沙上の家に過ぎません。この場合には他人に與へることのつまらなさから來る怠惰と、他人から與へられることを豫想することから來る怠惰と——この二重の怠惰が重つて社會生活の弛緩を招致するのは知れてゐると思ひます。故に經濟的改造の條件としても精神的改造は豫想されなければならないのであります。

而も經濟的改造が我々の唯一の目的ではないのですから、若しこの經濟的理想を——分配の公平を求むる點のみから見れば正當な理想を——實現する過程が、我々の精神的幸福の基礎を毀し、精神的幸福を味ふ能力を破壞するやうなものであるとすれば、この改造は一部分の進歩であつて全體から見れば退歩に

過ぎないことになります。さうしてこの分配の公平を求むる理想を絶對化して、これを實現するための手段を擇ばないことになれば、此の如き顚倒が起らないとも限らないのです。何卒私に極めて些細な一例を話さして下さい。

これは私の知つてゐる或女の人の話です。彼女は札の辻から電車に乗つて薩摩原で乗り換へたのださうです。乗換場に來る前に車掌が一度切符をきりながら彼女の前を通つたが、彼は彼女の差出した切符を見おとして切らずに行つてしまつたので、彼女は薩摩原で降りる時に乗換切符を呉れと云つたさうです。さうするとその車掌は「こんな奴がゐるから運轉が遅くなるのだ」と大聲で怒鳴つたさうです。彼女はこの話をして、私は泣出しさうになつたのよとつけ加へました。それは市内電車のストライキがあつて間もなくの話だつたと思ひます。

これは極めて些細な話です。併し分配の公平を求むる運動が勞働者の精神に影響してゐる一つの方向を示すものとしては可なり代表的な性質を持つてゐると思ひます。

彼等は彼等の正當なる權利を主張するための憤を移して、彼等の當然の義務を履行することを怠らうとしてゐるのです。彼等は自己の人格を主張する權利を、同胞に對する愛と親切との義務を拒否する權利と混同してゐるのです。固より私は彼等の心の荒む理由については同情することが出來ます。我々は此種類の不愉快をまだ／＼無數に忍ばなければならないのは、今日の社會の缺陷から見てやむを得ないとは覺悟してゐます。併しそれはやむを得ないのであつていゝのではありません。忍ぶのであつて贊成するのではありません。論理的に云へば電車のストライキと乗客に對する親切とは決して兩立しない譯はないのです。私はこの兩立するものを兩立させないところに人心の荒廢の徴候を認めてこれを悲むのです。若し分配の公平が制度として實現される頃には、人の心が他人と爭ふ心、利に賢らなる心、殘忍を喜ぶ心で一杯になつてゐたらどうでせう。人の心がそんなに荒く不幸になつてゐるのに、物質的分配の公平が何のたしになるでせう。分配の公平をのみ求める心持から云へば、ストライキの方法や態度は手段の問題に過ぎません。併し人間の生活を全體として見れば、その方法や態度は直ちに人間の心術の問題です、最高目的の問題です。物質分配の公平は却つてこの最高目的の手段に過ぎないのであります。故に我々はこの最高目的を損ふやうな手段は絶對的に避けなければならないと思ひます。この意味に於いても、私は經濟的改造運動に於ける精神的訓練の必要を主張するものであります。我々は物質的條件の改造を實現するために「人でなし」になるべきではありませ

ん。愛と淨化と公正との義務を忘れたあらゆる改造運動は凡て調です。その改造運動が成功する時は、人間の心が救ふべからざるほど不幸になるときです。

併し前にも云つたやうに、かう云ふのは決して物質的改造が無用であるといふ意味ではありません。先づ精神的改造を先にして、それが成就するまで物質的改造は凡て延期すべしといふ意味でもありません。精神的改造にも物質的條件があります。食ふに困つて餓死せむとする人を救ふものは、說敎ではなくて食料であります。貧乏の爲に心が荒みきつた者を救濟する第一步は、彼に或程度の物質を與へることであります。さうして凡そ物質分配の不公平は嫉妬羨望鬪爭の心を釀成する溫室であります。この類のさもしさを救ふためには物質的經濟的改造の必要があります。少くとも人間を一つの塊りとして社會的に取扱ふ時にはさうであります。この意味に於いて物質的改造の必要を認めない者こそ本當に「淺薄な精神主義者」であります。固より物質的改造の必要を認めるにも程度があつて、人間が本當に幸福にする道はその物質的欲望を最少限に限定すること——換言すれば「聖なる貧しさ（ホーリー・ポヴァーティ）」にあるといふことも十分に考へることは出來ます。併しかう云ふ考へ方をする人は、當然に、富める青年に向つては「汝の持物を悉く賣りて貧しき者に施せ」といふ人でなければなりません。貧しき者にのみ清貧を說いて、富める者の奢侈を是認し、自分も時々其餘分に預るのは御用學者か心底からの乞食坊主の仕業であります。故に或程度の物質的改造は精神的改造の準備として必要であり、或種類の物質的改造は精神的改造と同時に行はれなければならないことは、依然として變りがありません。持物を賣つて貧しき者に施すことも物質的改造の一つであります。

それから或種の精神的改造はその當然の歸結として物質的改造を伴ふ必要があります。例へば公正の精神が若し本當に社會を支配し、社會の各員を支配することになつたら、それはどんな物質的結果となつて現れて來ると思ひますか。此の如き精神的改造は當然に物質分配の公正となつても現れて來なければなりません。若しそれが物質的改造となつて現れて來なければその精神的改心は虛僞であります、不誠實であります。それは結局分配の不公正を支持するための胡魔化しに過ぎません。又愛の精神が盛んになつたらそれはどんな物質的制度的變化となつて現れて來ると思ひますか、それは恩を着せずに必要なものを必要な人に與へることです。而も與へる者の氣まぐれによらずに受ける者の權利を確立することです。何時までも自分の慈悲の名によつて物を與へむとする者は恩を賣る者です。この

意味に於いて私は資本家の温情主義に疑を挾みます。温情はそれ自身に於いては固よりいゝ事です。併しその温情が徹底すれば、當然に一種の療法として勞働者の權利を確立するところまで行かなければならない筈です。極めて立派な資本家の場合に於いては兎に角、一般の問題として見れば、其處まで行かなければ勞働者の幸福が確立しないのです。だから其處まで行くのを引き留めようとする限り、温情主義は非温情主義であり温情缺之主義であつて、それが懷柔の爲の懸引と見られるのはやむを得ません。温情といふ精神的改造は或明確なる制度、或る氣まぐれを絕した權利の讓渡しとならなければ其誠實を證明することが出來ないのです。併し世間の精神的改造論には、物質的不公平を曲庇するための申譯や、物質的改造に反對して之を防遏する手段に使はれる精神的改造論もあることを記憶しなければなりません。この意味に於いて宗教や道德が「富める靑年」が良心を胡魔化すための手先となつて使はれる場合も決して少くはありません。そんなことをするのは宗教や道德の恥辱です。我々は精神的改造論を——或ひはお人善しから、或ひは狡猾から——胡魔化しに利用すべきではありません。

云ひたいことは多いがもう時間がありません。後半は特に說明を要する點が多いと思ひますが、今度は何卒これで許して下さい。私の趣旨は要するに、改造の終局目的は精神的のものであるべきことゝ、この終局目的實現のために必要な物質的改造も精神的改造と並行しなければ實行が出來ないことゝ——同時に精神的改造論を物質的改造を妨げさはる者の口實にすべきではないと云ふことゝです。意味不明の點は宜しく御判讀を願ひます。（八月廿一日）

改造原理としての自由と愛

大島正德

一

想ふに今日の所謂改造問題なるものは、一方に於ては、權力の國民化、社會化、或は民衆化、と呼ばるべき問題を含むと同時に、他面に於ては、財貨の國民化、社會化、乃至民衆化と名くべき問題を含んで居る事は云ふまでもあるまい。此權力に關し、財產に關する問題を中心として、國家制度に關し、社會組織に就いての改造の聲が現れ運動が行はれて居る。是れが思想

的に分拆して考へて見ると、權力の民衆化に關する問題は、所謂政治上のデモクラシーと唱へられて居る問題であつて、從來政權を擅まにして居た所謂特權階級の專横から、國民多數の解放を要求する事であり、財産に關する問題は、所謂產業上のデモクラシーと唱へられて居る問題であつて、從來の所謂資本家階級の專横に依り屈服され束縛されたる多數民衆の解放を要求する聲であり、運動である。即ち從來政治生活に、產業生活に於て自由活動の可能と餘地とを奪はれて居た國民の多數即ち民衆をして、今後は各自に其の自由活動をなすを得しめよと云ふ要求に外ならぬのである。約言すれば所謂自由解放の標語は、最もよく現代民衆の主張を言ひ現はすものである。けれども又一面から考へて見ると、斯く多數の國民、民衆が其政治上乃至產業上の自由活動を要求し、解放を要求する事は、本來此社會生活なるものは互に離るゝ事の出來ない利害相通ずる聯帶の生活であるが故にであつて、さればかやうに一方には其の自由活動や解放を要求するものゝ、又同時に他面には相互間の聯帶關係を認めつゝある譯である。此事實を名づけて社會聯帶の精神と云つてよからう。されば余は現代の改造的問題を貫通する所の思想的潮流を分拆解釋して自由解放の主張と社會聯帶の精神となすのである。而て勿論此思想は相伴ふて離るべからざる現代精神であるが、或は自由解放を叫ぶに偏し、或は又社會聯帶關係を要求する事に專らなるものがある。例へば彼のアナーキズムの如きは個人々々の自由主義に全生活を徹底せしめんとするものである。又ラッセルなどが云ふギルド・ソシアリズムの中にも此精神は顯著に現はれて居るし、サンジカリズムの如きは少くも政治方面から全然解放を要求するのである。是は專ら自由解放の主張の方面に本づいたる社會改造運動である。又、他面に於ては彼の國家社會主義の如きは社會聯帶の關係を重んずる事に徹底しやうとする精神である、マルクス主義の實行なりとする、かの過激派の如き強制的な共產主義は個人の自由を認めず一切を統合的に支配せんとするものである。是は專ら、社會聯帶の精神に本づいたる社會改造運動だといへる。

今斯かる思潮精神を背景として、政治的に產業的に現はれたる諸種の社會問題に就いて一々こゝに論評する事は出來ないが、若し斯くの如き自由解放の思潮と社會聯帶の精神なるものが、諸種の改造問題の根柢に横はる根本基調であるとするなら、それを捕へて此處に論述する事は所謂改造問題に關する精神的解釋の一端であらう。で、こゝに自由と云ひ、解放と稱しても、其自由とは如何なる事を意味するか、如何なる意味に於て解放といふのであるかと云ふ事を詳に理解する事がなけれ

ば、或は是れを曲解して、我儘勝手が放恣なき事に思ひ、從て自由を無責任と誤解し、我意を專らにして他の自由を害する事を何とも思はぬと云ふ事にもなるであらう。若し是等の點に就き充分理解する所がなければ、折角選擧權を擴張し、之れを獲得しても、一個の私有財産を殖やした如く思ひ、私有權として之れを賣買して何等憚る所ないものがあるかも知れぬ。又若し社會聯帶の精神に就いても、是を人間愛の精神に迄徹底して考へる事がなく、所謂聯帶關係を重ずると云ふ事は、他人に對して共同聯帶を迫る事であるとし、ひとへに自己は社會より受くべきもの多くあることを主張するのみであつて、自ら進んで社會奉仕の精神にをり、他人に自己の身心の活動を捧げる如き事はなく、又徒らに惡平等的聯帶關係を主張する事に專らにして、社會生活を爲す上には何人にも、何物をも多からしめず、少からしめぬやうに、板の如き平たき世の中を現出する事を求むるものなら、如何にして個人の自由活動を盛ならしむる事が出來やうか。各人の創始性、各人の優秀性を發揮する事が出來やうか。所謂社會聯帶の精神を解釋して、只他人社會に之を迫り求むることであるとし、只平板なる平等的關係を強ゆることとなしたら、此社會生活、國家生活を眞に能く改造し得るかは、大に疑はしい。

さて以上の叙述を一區切りとして、進んで自由の問題、又社會聯帶の問題、內面的には人間愛の精神に就て考察し、こゝに人間の本質の何であるかを明にする事に依り、此問題に些か判斷を下して見ようと思ふ。

二

人間の人間たる本質、言ひ換れば人格の本質は其自由意志的存在たる事にある。是は倫理道德の學問の上で、學者が殆ど定說的に主張する所の說であつて、所謂道德律なるものが存し行はれるのも人間が自由意志的存在たる事に基くとされるのである。即ち道德に自律的存在である事は、人間の人間たる所以を示すものであつて、これは人間の本質は自由の存在であると云ふ意味である。他物に依り他人に由つて意志行動するのではなく、自らに由つて行動することは人間の人間たる所以を全うするものであつて、こゝに人間の本質が存するのである。是は倫理學上の主要なる問題であつて、詳細の理論を詳にする必要あれど、こゝでは出來る丈平明に此問題に就いて更に解釋を施して見ようと思ふ。

何人も人として生存するに當り、何等かの要求を持たぬものはない。人間は要求の存在であるとも云はるゝ位であつて、こ

ゝに種々の價値目的も生るゝと說かるゝのである。今是を小供の狀態から發生的に考へても、小兒の活動なるものは所謂自發活動である。それは小兒の本性である。勿論此際何か明白なる目的を以て要求をなして居るのではないけれども、自然に何となく内部から活動を迫るやうな所があつて、自然的に自發的活動をなすのである。此際には未だ自覺的な自由活動とは云ふ事は出來ずとも、外から活動を餘儀なくされるのでなく、内から湧くが如くに自らに由り活動するのであるから一種の自由活動と云へるのである。漸く長じては其自發的活動なるものに段々明白なる目的を有つやうになつて、小兒の如き簡單なる肉體的活動より進みて精神的活動をなすに至るのである。更に精神的活動の發達するに及んでは種々の慾望目的が描き出され、それの實現を要求する所から目的的活動を營むに到る。是れ人生の小兒より大人に至る姿であると云へる。要するに其活動は自らに發し、自らに由るのであつて、其自由意志的存在たることを明に示すものである。

これは外部より觀察して其自由自發の活動性たることを論じたのであるが、最も論理的には、我々は自己の内面生活を内省する事に依り、自己の活動が自らに由る活動即ち自由活動であつて、それが我其者の本質をなす事を直接に自識することが出來るのである。我々が自己の内面を省る時は抑も如何にして省るかといへば、其反省の作用は思惟の作用である。此思惟活動は内的意志活動として最も内面的なるものであるが、此活動の行はるゝ姿は實に自由の活動であるのである。種々の事を思出し、考へるに就いても、それはたゞ自分の思ふまゝに從つて思ひ且つ考へるのである。即ち内面的、自發的自由である。我の姿は如何なるものかと思つて我々が反省する時に、遂に斯く反省し、斯く思ふ所の自由なる活動より外に何も捕へることの出來ぬ事は、思惟の自由活動其物が自己の活動であり、即ち自己であるからである。嘗てデカルトは外界の一切のものを疑つて見た、歷史も、傳說も疑ひ、他物他人の存在も疑ひ、數學の眞理さへも疑つたが、最後に其疑と云ふ事實は疑ふ事は出來なかつた。そこで有名なる「我疑ふ、故に我在り」の句を捻出したのであるが、デカルトの覗ひ所は余がこゝに云はんと欲する所とは問題を異にするが、兎に角疑ふとか、考へるとかいふ活動其物を通じて我を發見したのであつて、此疑ふ活動は他に由りて存する活動でなく、それ自身自らに由り自らに發する活動であつて、我の本質をなして居るからであると見なければならぬ。斯かる内面的反省の方法に依り、我の我たる姿は自由活動にある、我の本質は自由にあることを結論される。從て自覺とは我は斯く

の如き自由意志的存在として自由活動をなしてる事を知る事に外ならぬ。

斯様に人間の本質を考へて、それは自由意志的存在である、我は自由の活動だと云ふ事に結論し得るなら、我々が内的にも外的にも自由を求むる事は當然であるといはなければならぬ。先づ内的には自分の思ふ通り考へて行きたい、信じて行きたいと云ふ如き要求であつて、こゝに發して信教の自由、言論の自由が人間の生活に於ても必要なる、意義あることであるのが理解されるのである。從つて信教問題についても、言論の自由問題に就ても其壓迫の度毎に非難反抗の聲は高まり、多くの悲惨なる革命問題も是等の點より發する事を考へるなら、思半ばに過ぐるものがあるであらう。種々の言論が現はれて種々の影響を與へ、外的に諸種の所謂危險なる行動となる恐れある場合には或は之を制限禁止するも止むを得ずとするも、思惟の自由より發して必然に言論の發表に向ふ以上は、原則としては言論思想の所謂取締りは言論思想を以てしなければならない。斯く人間は内面的に其自由を求むるのみならず、進んで外的に諸種の實際行動としての自由を求むる事も必然の要求である。從つて既に憲法にも、勿論或制限はあれど、信教、言論の自由に就ての外、出版、結社、居住、移轉等の自由を認め、個人の權利義務を規定し其活動を公に自由ならしめんことを欲し居る。然して現代の政治諸問題は既に從來許されて居る以上に、更に吾人の自由活動を政治上、產業上に亘り要求して居るのである。要求の程度や方法に就ては種々論議すべきことは多いが、人智の進步、教育の向上、及び時勢の變遷と共に、各人の自由行動が多く要求され、實現されるに至る事は素より當然であるといはなければならぬ。

此自由活動の要求を根本の理由と認むべく現はれた現代の社會運動、政治運動其物が、悉く其要求のまゝに是認され得るや否やは、實際問題として論議されなければならぬが、こゝでは其實際問題に入る事を避けて、飽く迄も思想問題として是を取扱はう。兎に角、結局の所、人間の本質が自由意志的活動なる點にありとするなら、實際の政治問題、社會問題としては其個人の活動に絕對的の自由解放を許し得る事でないとしても、又それが合法的に制限さるべきは、他の點より然るべき理由があるとしても、兎に角、斯くの如く自由意志活動たることが人間の本質的存在と認めれば、是れを尊んで伸長せしめる事は人生々活の第一義としなければならぬ。

以上は人間が自由意志的存在で、そこに人間の人間たるべき當行法としての道德律も存し、所謂人格の中心概念をなすもの

であることを說き、各人が自由活動を求むる事の當然なるを述べたのだが、更に進んで解釋を詳かにしなければ、斯る自由を求むるのは各人が勝手我儘の生活をする事を第一義とし、我儘の生活を理想とするやうにも思はれるかも知れぬのであつて、彼の自由を以て我儘勝手と心得、放恣無責任となすもの丶あるのも此邊より生ずるのである。

思ふに我の活動に其自由自發的活動たることにあるとするも、それが前後に何等の脈絡統一なく、昨日の我と今日の我と全然態度を異にするやうなものがあれば、かくの如き自由活動なるものは、決して眞の自由活動として許容され得るものでなく、それは却つて人生其物を破壞することになるのである。これも簡單には自らに由るといふ意味で、自由活動ともいへるが斯かる自由活動は瞬間的、刹那的、斷絕的活動であつて、我其者が全體として伸張發展する事に結果する所が無いからである。從つて眞の自由活動は、只端的に、刹那的に、脈絡統一なく行はる丶事でなくして、過去の活動を現在の我に攝取して、即ち過去を含んで、現在より將來に向つて自發創造して行く活動でなければならぬ。彼のベルグソンが自由創造進化を主張するに當り、常に「持續」を力說するを忘れなかつたのは此點に考へてゞある。彼の譬へに、雪達磨は轉ずる毎に段々發展する。未來に向つて成長する。そこに自發自由の活動があるけれども、過去の經來つた活動（雪）を持續的に現在に攝取して居るのである。即ち過去を現在に持ち來つて而かも將來に向つて新らしく伸び行くと云つたが、眞の我が全體としての自由活動なるものは、斯く如き時間的經過を常に現在に背負つて居て、そして未來に伸びて行くことでなければならぬ。過去の自己の諸々の活動を現在の活動の中に攝取して居る事は、我其物が、自由活動であつて、同時に因果を含んで居ると云ふ事である。眞の自由は決して因果を排斥しない。何らの因果關係を自己に取入れて用ひざる自由は、昨日と今日と全く違つた我を現出するものであつて、其處には責任も、反省も、悔悟も、改善も無い譯である。故に眞の自由活動は過去の因果をそれ自身に含んで居り常に責任を背負つて居ると云はなければならぬ。即ち其自由活動は單に瞬間的で斷絕的でなく、即ち過去の自由活動と現在の自由活動とは斷れ斷れ離ればなれに行はれるものでなく、絕えず新なる未來を孕んで自發自由の活動をなして居るが、同時に斯くなしたる過去の自發自由の活動を現在の中に收め容れて背負つて居るのである。こ丶に自由活動を本としながら、且つ因果を自らの中に作りつ丶あると解し得るのであつて、夫故にこの點についてながむれば、自己を因果的の存在と

して見る事も出來るのである。然し余の解釋に依れば、それは第二義的の解釋にして、それよりも寧ろ自由を本質として自由活動の連續の中にそれ自身因果を形造つて行くものと解釋しなければならないと思ふ。要するに自由活動は過去と離れて切れ切れのものでなく、過去を現在に含むものである。こゝに始めて自己は成長し進化するのである。而し又實にこゝに自己は自由活動で同時に過去の活動に對して自ら責任を持つのである。されば自由活動を説いて而も此責任の觀念を無きものと考へることは大なる謬見である。實に偉大なる自由活動ある所、偉大なる自己の作成あり、又そこに自己因果を作成する。夫故に盛なる自由活動ある所盛なる自己責任の精神が閃めくのである。又更に他面から考へると此自由活動なるものは、それが活動なる限り、そこにそれ自身の法則があることが發見される。それ自身の法則として最も明白なるものは思考の際に現はるゝ論理法であり、道徳的行爲の間に現はるゝ倫理法である。道徳的行爲、論理的思惟は自己が自らに由るそれ自身の意志的活動である。而もそこにそれ自身の斯くの如き法則を有して居る。されば我々の自由活動は、それ自身の法則と認むべき倫理法、論理法を充實する所に更に自己の自由活動は偉大に輝き自己其物は益々偉大となる。

斯様に考へて來れば人間が自由意志的存在として、其の自由活動を求むる事の當然なるを認むるのは或人の心配する如く危險ではない。我々は眞理に徹底すればする丈大發行の生活をなし得るのである。

さて斯く自由を論ずるに當り、並て責任と法則とに就き説明したのであるが、猶ほ問題を少しく轉じて考るならば人間は自由意志的存在である故に、各人は其自由活動を尊重しなければならねとした時、自己の自由を發揮せんとして、他人の自由を奪ひ侵す事あれば、是は甚だしき矛盾の行爲であるといはねばならぬ。人間は自由意志的存在であるから自由を尊ぶのが當然であるとした時、一の自由活動を害して、他の自由活動を立てるといふのは、明白に撞着であり矛盾である。故に誠に自由活動の尊重すべきを知る者は自己の自由を尊重すると同時に他人の自由をも尊重すべきことを決して忘れてはならぬ。然るに自由が許される限りは何事をなしても差支ないとして、他人の自由活動を脅威して我儘勝手をするのは、理不盡の行爲と云はなければならぬ。現代の弊風の如きはこゝに醸してをる。自由解放の聲が呼ばれ、自由活動が行はれると云ふて遂に他人の行爲をば、暴威を以て理不盡に脅威して憚らぬのは、他の自由を迫害する事に依り、自ら自由たらんとするの社會的矛盾を侵すものである

を。

三

さて斯様に論じ來つて、こゝに問題を轉じて考へなければならぬ事を發見する。今余は人として自由を尊重するなら、他の自由を犯害して自己の自由を恣にせんとする事は矛盾であると論へた。然し茲に就ては更に他の原理を人生々活の上に見出すことに依りて論じなければならぬのを見る。何となれば人間は自由獨立的存在であるとしても、若し其人間が個々別々な孤立的存在であり、お互を結合すべき或原理が根本的にないとしたならば、各々自己の自由を求むる事は當然でも、其結果に於て他の自由を迫害にする事が必然に悪なりとの論理は成立たぬ。其論理が成立するには利己的な、孤立的な個人主義の上に超越して、人生は社會的生活である、お互は社會聯帶の關係を重じなければならぬ、吾人間愛の精神は各人の心に深く潜む内在的原理であるといふ事に大前提を置かなければ、即ち社會的見地、人間愛の精神に立つに非れば、自己の自由を尊重すると同時に他の自由をも尊重しなければならぬと云ふ理由は成立しない、良心の聲は起らない。是に於ておのづから社會聯帶の精神、更に内面的に云へば、人間愛の精神に就いて考ふべき必要ある事を見出すのである。既に云へる如く、現代の改造運動は一面には自由要求の精神を本として立つと同時に、他面には社會聯帶關係の原理を根底に置いて起つたものと解されねばならぬ。何故に社會聯帶の關係が重ぜられなければならぬかは、人間の生活其物が社會的生活である點に本づかねばならぬことは明白である。我は孤立我でなく、社會我である事は、學者に依つて常に稱へらるゝ點であるが如くに、我々の生活の一切に亘つて唯一人で生きて行かれるものでない事は明である。既に家族相集り、隣保相倚り、民族集合して生活する事は何處の人間に於ても變りなき事實である。我々が自ら自己の所有とする衣食住一切の事は、皆他人の勞力を俟つて初めて成立つてをる事は明かである。且つ我々が自己の内面に持つ思想内容も吟味すれば、他人より受け取つたものなる事は直ちに理解される。畢竟生きる事は社會的生活を生きる事である。即ち社會聯帶の關係を重ずべき事は、人生が社會的生活なる點から直ちに結論される。然し此人生即ち社會的生活の事實は今も昔も變らないのであつて、改めて新らしく云ふ程の事もない譯である。然るに近頃になり、殊に此社會聯帶關係の重ぜられ、其見地から諸種の改造運動が行はるゝに至つたのは何故であるかと云ふ事は一應考へてみる必要がある。是は昔の社會生活と今日の社會生活と其趣

きを非常に異にして居るものと見なければならぬ。昔の社會生活は靜的な、簡單なる、變化なき生活であつた。現代のそれは動的な、複雜な、變化極まりなきものである。何故に現代の社會生活は斯くなつたかと云へば、近代文明の特徴として交通運搬の道開け、印刷術進み、物質的にも精神的にも、各人各國の往來交渉頻繁にして、變化極まりなき狀態になつた事に歸せなければならぬが、更に一大原因としては此度の大戰が世界を擧げて一大動搖の渦中に陷入れた事に重大なる理由を求めなければならぬ。要するに現代の社會生活は流動的變化的であり、複雜極まる所がない。從つて昔の靜的な、簡單な社會生活の如く、謂はゞお互に知り合ひ同志の群居生活でなくして、知らぬ同志の人々の關係が常に複雜に働くが爲に、著しく社會關係、公衆關係、經濟關係に於て複雜性を高めるに至つた。是に於て種々の社會問題が俄かに勃發して來た譯であつて、是を解決するについては、社會經濟關係の精神の上に新らしき建て直しを試みなければならないことになつたのである。

これは將に實際問題に訴へて、社會經濟の精神が各人の意識に深く上り來つた風を述べたが、更に根本的、內面的に尋ぬれば、斯くの如き精神の發揚し來るそもそもの根源は、人間各個の間に存する親しみ合ふ心、即ち人間愛の精神があつて、それが昔の靜かなる社會生活に於ては、謂はゞ五倫五常の關係に現はれたのであるが、今日に於てはそれが強く公衆關係、社會關係としての經濟共同の精神としてあざやかに炎え上つたものとせずばならない。俗語に旅は道連れ世は情けと云ふが、其の情けの心は即ち人間愛の精神を指すのである。社會學者が云ふ言葉を借りれば、同類意識、共同感情、社會感情と云ふのがそれである。結局人生の理想に横はる根本性情として、人間愛の心を吾々は見なければならぬと思ふ。此根本精神に基いて社會經濟の意識に近づける所なければ、社會經濟の精神はやゝもすると、外面的に騒々しい、互に相寄り合つて、我儘勝手を言ひ合つて、〃も損は一文もしない、他に得は一厘もさせまいといふやうな消極的な割り合ふやうな事にならざるを得ない。此人間愛の精神は人生即ち社會生活の根本原理であつて、かの自由の原理と共に侵すべからざる大切なる原理である。互に人間を大切に思ふ心は、我々が何かに自己の內省を行ふ時に共感に横はる事を見出し得るのであつて、所謂人生の價値や意味を見出したいと思ひ又見出し得るのは、かゝる心が基となつて湧き出て來る事を思はざるを得ない。實に人生は何の爲に生きるかなどの人生の意味を見出さんと欲するのも、人生を愛し人を大切に思ふ心に基きて、現れたもので、又斯く[illegible]

事の出來るのも、お互の心に通ふ同情の精神があるからである、此社會生活を根本に於て保つ所以のもの、乃ち人と人とを結び付けるものは、人間愛の精神である。此心が人の心の奧深く流れて居るが故に何等かの關係に於て、社會關係を結んで生活したいし、生活するし、又生活しなければならぬ。我々が自己の心の惱み、精神の疲れた場合に何に依つて之を癒さんことを、求むるかと云ふに、それは愛である。愛に依つて心が慰められた時此精神は甦る。故に人間愛の心はお互に生きて行く上に於て、必要なる相結び合ふ力であり、實に人間精神の内奧に横はる親和力である。孟子は之れを惻隱の心と名づけて、如何なる人も小供が井戸に陷入る間際に心動いて之れを助ける爲めに走らないものはない。而もそは小供の父母に取入る爲にさうするのでなく、郷黨に名譽を得る爲にさうするのでなく自然に惻隱の情となつて現はれるのであると説いてをる。又宗教の原理としても、愛とか慈悲とか仁とかは常に根本的なもので、則はち宗教なるものは、人間愛の精神から生れたものと云ひ得る。愛の心あるが故に神佛を思ふに至るものと云つて差支へない。又論を遠く馳せるなら、諸種の認識も此心と關係ありと云へるのであつて、彼の植物、動物を愛するものが、それの性質を能く認識し得るはこれが愛より生るるものと云はれる譯で、畢竟眞理の發見は眞理の愛より生れるもの云はれ得るのである。

此種の問題は種々の點から種々の論議を盡すべきもの多くあれど、こゝには此點に亙る必要はあるまい。こゝに云はんとする所は、人間愛の精神が人間性情の根本に横はるもので、客觀的に見出し得らるゝ社會聯帶關係の精神は、内面的には此根本性情に基礎を求めて初めて其意味を深くする事を見出し得るのである。これが實に人生の原理で、此處に社會改造の原理が横はる、かの、政治、行政、社會問題の解決も、根本に於ては此心を深く廣くし、此心に深く立つに非れば其改造を全うする事が出來ないのは明である。現代は輿論尊重の時代と云はれるが、其根本理由は、少くも此人間愛の精神に基いて解かなければならぬ。而して先きに述べた如く人間は各自自由意志的存在なれば、其自由意志活動の直接の表現なる意見、言論をお互に尊重する事は即ち眞に人間を本質的に愛する所以である、各自の自由意志的存在なることを、お互に愛し認める事が、人生生活の眞髓であつて、こゝに各自の自由意見の綜合としての一定の輿論なるものが成立つものなら、是れを尊重すべきは、當然であると云ふことになるのである。輿論尊重の意義に就ては種々論議さるべきものあれど、要するに此自由と此愛とを根據として、即ち斯かる原理に基いて行動する人格活動を根據として、

兩論が並の理由が成立つものなる事は明白である。

斯様に社會聯帶の關係、内面的に云へば人間愛の精神はかの自由と共に此社會生活の改造原理とするならば、それに基いて今日の諸種の改造問題が準據し得べき理由を見出し得る譯である。各人の政治上に於ける自由活動を要求するのは、各人の自由意志的存在たる事に基くのであるが、これを認むるか否かの、權力ある位置にある者は、人間愛の精神に基いて、現代に於て當然と思はるべき其方法を盡し、出來る限り其自由活動を容ならしむるやう、各人の意志を尊重しなければならぬ。又産業上に於ては勞働者或は無産階級なるものが、資本家に對して其自由活動を要求し、其苛酷なる束縛から逃れんことを求むるのは、彼等も亦自由意志的存在としての自由活動を求むる次第であるから、かく要求さるゝ位置にある者は、如何なる人も人間としては尊むべく、愛すべきを思ひ、人間愛の精神に基いて彼等を人格者として待遇したければならぬのは無論である。彼の勞働は商品に非ず、勞働者は人格者として扱かふべしとの要求は當然な要求である。其他此種の問題多けれども、要するに人間愛の精神に基いて、人格者として自由活動の出來るやう取扱ふべきは當然の事でなければならない。又翻つて考へれば、かく要求する所の人間即ち勞働者の方面から考へても彼等同志にお互に社會聯帶の精神に基き一致團結して其當然になすべきをなすのは、至當であると同時に其相手とする資本家に對しても、之れを單に仇敵、邪魔の如く考ふべきものではない。成程人に依つては冷酷無情なるものもあらうが、既に彼等も人間であると思ふ以上は、之れを猛獸の如く見做すべきものではなく、やはり人格者として之に對しなければならぬ。況んや今日多くの經濟學者が論ずる如く、今日の社會的缺陷は必しも今日の資本家其人、勞働者其人の人間として本質の間違ひの爲ではなく、寧ろ現代の經濟組織其物、資本主義の經濟組織其物が缺點を必然に齎し來るのであると解釋せらるゝ以上は、其現代産業組織に對しては大いに非難は出來るけれども、人間としての資本家を全然仇敵の如く見做すのは間違つて居る。人其物を所謂階級鬪爭の相手として仇敵視して戰ふべきものとなすのは謬見である。宜しく人間愛の精神に基き、人類の社會的生活を圓滿にするための運動として、勞資問題の意義のある事を、自覺すべきである。然らずして、社會聯帶とは、勞働者又は結合一致するが、他の人々は非聯帶であつて、自分等以外の人を人間に非る如く考へたり、又は勞働者が資本家を攻擊するのは、其の心の底に於て、實に資本家と同樣な所有慾に基き、彼等の分前が多く、自己の分前が少なきために、出來る丈彼等の所有を

奪ひ取り、次第に依つては自己も亦資本家の如き生活をしたいと云ふやうな利己慾を動機としてのみ、勞働運動が行はるゝならば、其解決が當を得るに至らざるは當然である。勿論所謂勞働運動は一面に資本家を相手にして居るが、單に之れを利害の物質關係に於てのみ考へるのであつて、本來社會關係の根柢は人性の最も深き所に基くのであることを忘れては、とても根本解決は出來ぬ。斯くの如き物質關係からのみ考へられたる社會關係の意識に居るのみであつて、それ以上内面的に深く人間愛の精神に立脚しなければ、其改造は同時に只獨り破壞を意味するものと云はなければならない。

「G.D.H. Cole」氏の社會學説の根本思想　田邊忠男

オムマ・ハヤムと其「四行詩」　荒木茂

の二大長論は頁數超過の爲め、次號に割愛せり。兩寄稿者の御寛恕を乞ふ。（編者白）

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA



自畫像

有平糖

四月の始めに山本鼎氏の「油繪のスケッチ」といふ本を讀んで見たら急に自分もやつて見たくなつた。去年の暮に病氣して以來は殆んど毎日朝から晩迄床の中で書物ばかり讀んで居たが、段々暖くなつて庭の花壇の草花が芽を吹き出して來ると、いつ迄も床の中ばかりにもぐつて居るのが急に嫌になつた、同時に頭の工合も寒い時分とは調子が違つて來て餘り長く讀書して居る根氣がなくなつた。今迄は内側へ〳〵と向いて居た心の眼が急に外の方へ向くと、其處には冬の眠からさめて一時に活氣づいた自然界が勇み立つて自分を迎へてくれるやうな氣がした。丁度そこへ山本氏の著書が現はれて自分の手をとつて引き立てるのであつた。

中學時代に少しばかり油繪を描いて見た事はある。圖畫の先生に頼んで東京の飯田とかいふうちから道具や繪具を取り寄せて貰つて、先生から借りた御手本を一生懸命に模寫した。カンバスなどは使はず、黄色いボール紙に自分で膠を引いてそれにビチユーメンで下圖の明暗を塗り分けてかゝるといふやり方であつた。可也澤山描いたが實物寫生といふ事は遂にやらずにしまつた。そして他郷に遊學すると同時にやめてしまつて今日迄ついに又繪筆を握る機會はなかつた。もと使つた繪具箱やパレツトや畫架なども數年前國の家を引拂ふ時にもうこんなものは要るまいと云つて自分の知らぬ間に母が屑屋にやつてしまつた位である。

あの後に都へ出て洋畫の展覽會を見たりする時にはどうかすると中學時代の事を思ひ出し、同時にあの繪の具の特有な臭氣

當時描きながら口癖に無聲で歌つた或る唱歌とを思ひ出した。そうして再び此の樂しみに耽りたいといふ慾望が可也強く刺戟されるのでむつた。併し自分の境遇は到底それだけの時間の餘裕と落着いた氣分を許してくれないので實行の見込は少なかつた。唯展覧會を見る度にそういふ望を起して見るだけでも自分の單調な生活に多少の新鮮な風を入れるといふ効果はあつた。

中學時代には油繪といへば先生のかいたもの以外には石版色刷の複製品しか見た事はなかつた。いつか英國人の宣教師の細君が舊城跡の公園でテントを張つて幾日も寫生して居た事があつた。どんなものが出來て居るか覗いて見たくてこわ〱近づくと、十二三位の金髪の小供がやつて來て「アマリ、ソバクルト犬クヒツキマース」などと云つた。實際傍には見た事もないやうな大きな犬がちやんと番をして居るのであつた。

それから二十何年の間に自分はかなり多くの油繪に目をさらした。數からいへば恐らく莫大なものであらう。見て居る内に自分の眼は段々に色々に變つて來た。そして藝術としての油繪といふものに對する考も色々に遷つて行つた。唯其の間に不斷に懷いて居た希望はいつか一度は「自分の描いた繪」を見たいといふ事であつた。世界中に名畫の數がどれ程あつてもそれは構はない。どんなに拙劣でもいゝから生れてまだ見た事のない自分の油繪といふものに對して見度いといふのであつた。

此のやうな望は起つては消え〱十數年も續いて來た。それが今年の草木の芽立つと同時に強い力で復活した。そして其望を滿足させる事が同時に病餘の今の仕事として適當であるといふ事に氣が付いた。

それで早速繪の具や筆や必要品を取り揃へて小さなスケッチ板へ生れて始めてのダップレナチュールを試みる事になつた。新しいパレットに押し出した繪の具のなま〱しい光と匂は強烈に昔の記憶を呼起させた。長い筆の先に粘い繪具をこねるときの特殊な觸感も更に強く二十餘年前の印象を盛り返して其當時の自分の室から庭の光景や、殆んど忘れかゝつた人々の顔を眼のあたりに見るやうな氣がした。

先づ手近な盆栽や菓物やコップなどゝ手當り次第に描いて見た。始めの内はうまいのかまづいのか、そんな事は丸で問題にならなかつた。そういふ比較的な言葉に意味があらう筈はなかつた。畫家の數は幾萬人あつても自分は一人しか居ないのであつた。

思ふやうに描けないのは事實であつた、其代り自分の思がけもないやうなものが出來てくるのも面白くない事はなかつた。とても描けさうもないと思つたものが存外どうにか物になつた

と思ふ事もあり、譯もないと思つたものが中々六かしかつたりした。それよりも面白いのは一色の壁や布の面からありとあらゆる色彩を見付け出したり、靜止して居ると思つた草の葉が動物のやうに動いて居るのに氣がついたりするやうな事であつた。そして繪を描いて居ない時でもかういふ事に對して著しく敏感になつて來るのに氣がついた。寢ころんで本を讀んで居ると白い頁の上に投じた指の影が、恐しく美しい純粹なコバルト色をして、其側に黄色い補色の隈を取つて居るのを見て驚いてしまつてそれきり讀書を中止した事もある。又或る時花壇ののうぜんの葉を見て居る内に曇つた空が破れて急に強い日光がさすと、澤山な丸い葉は見る間にすく／＼と向きを變へ間隔と排置を變へて我れ勝ちに少しでも多く日光を食らうとするやうに見えた、一つ／＼の葉がそれ／＼意志のある動物のやうに思はれて何だか恐ろしいやうな氣もした。

手近な靜物や庭の風景とやつて居る内に描く物の種が段々に少なくなつて來た。本當は同じ靜物でも風景でも排列や光線や見方をちがへればいくらでも材料にならぬ事はないが、素人の初學者の自分としては、少くも一わたりは色々ちがつた物が描いて見度かつた。一番描いて見たいのは野外の風景であるが今の病體では其れは斷念する外はなかつた。それでとう／＼自畫像でも始めねばならないやうになつて來た。一體自分はどういふものか從來肖像畫といふものには餘り興味を感じないし、殊に人の自畫像などには一種の原因不明な反感のやうなものさへもつて居るのであるが、其れにも拘らず遂に自分の顏でも描いて見る氣になつてしまつた。

それで或日鏡の前に坐つて自分の顏をつく／＼見てみると、顏色が惡くて頰がたるんで眼から眉の邊や口許には名狀の出來ない暗い不愉快な表情が泛ふて居るので、描いて見る勇氣が一時になくなつてしまつた。其内に又天氣のいゝ氣分の好い折に小さな鏡を机の前に立てゝ見たら、其時は鏡の中の顏が晴れ／＼として居て眼も何處となく活氣を帶びて、前とは別人のやうな感じがした。それで早速一番小さなボール板へ寫生を始めた。鉛筆でザツト下圖をかいて見たが中々似そうもなかつた、しかし構はず繪具を付けて居る内に間もなく兎も角も人の顏らしいものが出來た。のみならず矢張いくらかは自分に似て居るやうな氣もした。顏の長さが二寸位で塗りつぶすべき面積が狹いだけに思つたよりは雜作なく顏らしいものが出來た、と思つて一寸愉快であつた。それで早速家族に見せて例ると、似て居るといふ者もあり、似て居ないといふものもあつた、無論此れはどちらも正しいに相違ない。

此の始めての自畫像を描く時に氣のついたのは、鏡の中にある顏が自分の顏とは左右を取りちがへた別物であるといふ事である。此れは物理學上からは極めて明白な事であるが寫生をして居る内に始めてその事實が本當に體驗されるやうな氣がした。衣服の左り前な位はいゝとしても、又髮の毛の撫で付け方や黒子の位置が逆になつて居る位はどうでもなるとしても、もつと微細な、しかし重要な眼の非對稱や鼻の曲りやそれを一々左右顚倒して考へるといふ事は非常に困難な事である。要するに一面の鏡だけでは永久に自分の顏は見られないといふ事に氣が付いたのである。二枚の鏡を使つて少し斜に向いた顏を見る事は出來るだらうがそれを實行するのはおつくうであつたし、又自分の技量で左右の相違を描き分ける事も出來さうになかつた。そんな事を考へなくても唯鏡に映つた顏を描けばいゝと思つてやつて居る内に着物の左衽の處で又一寸迷はされた。自分の科學と藝術とは見た儘に描けと命ずる一方で、何だか繪として見た時に不自然ではないかといふ氣もするし、年取つた母が嫌がるだらうと思つたので、とう〳〵右衽に胡魔化してしまつたが、それでもやつぱり不愉快であつた。

此の自畫像NO.１は恐ろしく皺だらけのしかみ面で上眼に正面を睨み付けて居て、如何にも性急な肝癪持の人間らしく見へるが、考へて見ると自分にもさういふ資質がないとは云はれない

それから二三日たつて又第二號の自畫像を前のと同大の板へ描いて見た。今度は少し顏を斜にしてやつて見ると、前とは反對に大變溫和な、のつぺりした、若々しい顏が出來てしまつた。妻や子供等はみんな若過ぎると云つて笑つたが母だけは此の方がよく似て居ると云つた。母親の眼に見へる自分の影像と小供等の見た自分の印象とには、事によつたら十年以上も年齢の差があるかも知れない。それで思出したが近頃自分の高等小學校時代に教はつたきりで會はなかつた先生方の寫眞を見た時に一寸それと氣がつかなかつた。寫眞の顏が餘り若すぎて子供のやうな氣がしたからである。よく〳〵見て居るとあり〳〵と三十年前の記憶が呼び返された。此れから考へると吾々の頭の中にある他人の顏は自分と一處にしかもちやんときまつた年齢の間隔を保存しつゝ段々年を取るのではあるまいか。

同じ自分が同じ自分の顏を描くつもりでやつて居ると其時々で此樣に色々な顏が出來る、此れはつまり寫生が拙な爲には相違ないが兎も角も面白い事だと思つた。NO.１にもNO.２にも何處か自分に似た處がある筈であるが、１と２を並べて比較して見ると、どうしても別人のやうに見へる。さうして見ると１と２がそれ〳〵自分に似て居るのは、顏の相似を決定すべき主要な

本質的の點で似て居るのでなくて第二義以下の枝葉の點で似て居るに過ぎないだらうと思はれる。

此れについて思ひ出す不思議な事實がある。或時電車で子供を一人連れた夫婦の向側に坐を占めて無心に其の二人の顏をながめて居たが、固より夫婦の顏は全くちがつた顏で、普通の意味で少しも似た處はなかつた。其内に子供の顏を注意して見ると其子は非常によく兩親のいづれもに似て居た。父親の何處と母親の何處とを傳へて居るかといふ事は容易に分りそうもなかつたが、兎に角兩親の丸でちがつた顏が此の小供の顏の中で渾然と融合してそれが一つの完全な獨立な極めて自然的な顏を構成して居るのを見て非常に驚かされた。それよりも不思議な事は小供の顏を注視して後に再び兩親の顏を見較べると、始め全く違つて見えた男女の顏が互に似て居るやうに思はれて來た事である。此のやうな現象を心理學者はどう說明するだらうか、たしかに面白い問題にはなるに相違ないと思つた。それから又一方では親子の關係といふものの深刻な意味を今更のやうに考へたりした。もう一つ、此れはK君の話だが、同君の友人の二男が、父親よりも生母よりも却つて父の先妻、しかも亡くなつた先妻にそつくりなので、始めて見たK君は一種名狀の出來ないショックを感じたそうである。K君の認めた相似が全くオブヂェクチーヴだとすると、現在の科學は此の說明を持てあますだらうと思はれた。

一體二つの顏の似ると似ないを決定すべき要素のやうなものは何であろう。此の要素を分析し抽出する科學的の方法はないものだらうか。自分は自畫像を描きながらいろんな事を考へて見た。同じ大きさに同じ向きの像を何十枚も描いて見る。そして其れを一枚〳〵寫眞にとつて、其各々を重ね合せて重ね撮り寫眞をこしらへる。若し各々の繪が實物とちがふ「違ひ方」が物理學などでいふ誤差の方則に從つて色々に分配せられるとすれば重ね撮りの結果は丁度「平均」をとる事になつてそれが實物の寫眞と同じになりはしまいか。もしそれが實物と違へば其の相違は描き手に固有な所謂 Personal equation を示すか、或は其人の自分の顏に對する理想を暴露するかも知れない。それは兎に角何十枚の肖像を大體似て居る度に應じて二つか三つ位の組に分類する。そうして其一つ〳〵の寫眞を本物の寫眞と重ねて見てよく一致する點としない點とをいくつかの箇條に分つて統計表をこしらへる。こんな方法でやれば「顏の相似」といふ不思議な現象を系統的に研究する一つの段階にはなりそうである。

自畫像はNO. 2でしばらくやめて又靜物などをやつて居る內に一日畫家のT君が旅行から歸つたと云つてわざ〳〵自分の畫を

見に來てくれた。有り丈けの繪をみんな出して見て貰つて、色々の注意を受け、色々な面白い事を教はつて大變に啓發されるやうな氣がした。自畫像の二枚については、餘り色が白過ぎるといふのと、もつと細かに見て色や調子を研究して根氣よく描かなければいけないといふのであつた。成程そう云はれて見ると自分の描いた顔は普通の油繪らしくなくて淡彩の日本畫のやうに白つぽいものである。尤も鏡が惡い爲に實際幾分顔色が白けて見えたには相違ないが、そう云はれて後に鏡と畫を較べて見ると畫像の方はたしかに色が薄くて透明に見へて、上簇期の蠶のやうな肌をして居た。そして如何にもぞんさいで薄つぺらな者に思はれて來た。それからT君は色々の話の内にトーンといふものゝ大切な事を話した。眼を細くしてよく見極めをつけてから一筆毎に新しく繪具を交ぜては置いて行くのだそうである。或人は六尺もある筆の先へちよつと繪の具をくつゝけて、鳥でも刺すやうにして一點くつゝけては又眺めて考へ込むといふのである。此の話を聞いて居る内に何だか非常に愉快になつて來た。そういふ仕事をして居る畫家と、非常にデリケートな物理の實驗をやつて敏感な螺子をいじつては眼鏡を覗いて居る學者と全く兄弟分のやうな氣がして面白くなつて來た。そしてどういふ譯か急に可笑しくなつて笑ひ出すとT君も一處に笑ひ出してしまつた。

それから二三日經つてT君の宅へ行つて同君の昔描いた自畫像を二枚見せて貰つた。それは小さな板へ描いた習作であつたが成る程濃厚な繪の具をベタ／＼ときたならしいやうに盛り付けたものであつた。しかし自分ののつぺりした繪と比べて見ると此の方が比較にならぬ程いき／＼して居て眞黒な繪の具の底に熱い血が通つて居そうな氣がした。

尤も考へて見ると此の位の事は今始めて知つた譯ではない。此の自分の自畫像がもし他人の繪であつたとしたら恐らく始めからまるで問題にならないで打つちやつてしまふ程つまらないものかも知れない。唯それが自分の描いたのであるが爲に此んな分りきつた事が分らないで居たのをT君の像を眺めて居る内にやつとの事で明白に實認したに過ぎない。一體自分は、多くの人々と同樣に、自分の理解し得ないものを「つまらない」と名づけたり、自分と型のちがつた人を「常識がない」と思つたりするやうな事が可也ありそうであるが、幸に或は不幸にして自分の繪を一つの單純な繪として見て、黑人のと比較する時に自分の方がいゝと思ひ得る程の自信がないと見へて、T君の畫と說とにすつかり感心してしまつた。そうして頭を新しく入れ換へて第三號の自畫像に取りかゝる事にした。

T君のすゝめに從つて今度はカンバスへやることにした。六號といふ大さの畫布を枠に張つたのを買つて來た、同時に畫架も買つて來て此れに載せた。なんだかいよ〱本式になつて來たと思ふと少し氣味の惡いやうな氣もしてすぐには手を付けられなかつた。居間の隅の簞笥の脇にある鏡臺の前へ坐つて左から來る光に半面を照らさせ、そして鏡に寫つて居るものは畫架でも背後の簞笥でも其上にある本や新聞でも見へるだけのものはみんな其儘に描いて見やうと思つてやり始めた。

今度はなるべく顏を大きくする積りで下圖を始めたのであるが、どういふものか下圖を描いて居る內に思つたより小さくなつてしまつた。自分が大きくしやうと思つて居るのに手と鉛筆とが其れを押さへ〱て顏を縮めて行くやうにも思はれた。實物に近い程に書く積りのがいつの間にか半分足らず位のものになつた。實物と思つて見て居るのが實は鏡の中の虛像で鏡より二倍の距離にあるから視角は可也に小さくなつて居る、其に畫布の方は手近にあるものだから、假令映像と繪と同じ視角にしても寸法は實物の半分以下になる譯だと思はれる。それにしても人が鏡を見て自分の顏といふ者の觀念をこしらへて居るが、左右顚倒の事實は別として顏の大さといふ者に對しても正常な觀念を得る事は恐らく非常に困難な事だらうと思はれ出した。つまり吾々は本當の自分の顏といふものは一生知らずに濟むのだといふ氣さへした。自分の事は顏さへ分らないのだ。誰れかと「自分の背中だけは一生觀られない」と云つた事を思ひ出す。

下圖をすつかり消して描き直すのも面倒であつたし、又此の位の大さのも一枚あつていゝと思つて其儘進行する事にした。妻と長女とに下圖を見せて違つた處を搜させるとぢきに色々な誤が發見された。そんなに容易く見付かるやうな間違が描いて居る自分には中々分らないのであつた。

下圖はとう〱餘りよく似ないまゝで繪の具をつけ始めた。描いて行く中によくなるだらうと思つたが中々そう行かない事は後で段々に分つて來た。

勿論顏から塗り始めた。始めに大體の肉色と影をつけてしまつた時には、似ては居ないが大變感じのいゝやうな顏が出來たので此れは調子がいゝと思つて多少氣乘りがして來た、そして段々に細かく筆を使つて似せる方と色と調子とに氣を配り始めるとそろ〱六かしくなる事が痛覺されるやうになつて來た。先づ第一に困つた事は局部々々を見て忠實に寫して居るといつの間にか局部相互の位置や權衡が亂れてしまふ。右の眼の恰好を一生懸命に描いて大體よくなつたと思つて少し離れて見ると其眼だけが顏とは獨立に橫に脫線したり釣り上り捩れなどし

た。どうも右を描いて居る時と左を描いて居る時とで顏の傾斜が變る癖があるらしかつた。その爲に左右の眼は互に自由行動をとつてどうしても一つの顏の中に融和しない、仕方がないから何れか一方をきめてから他の一方を服從させる外はないと思つて先づ比較的似て居るらしい向つて右の眼を標準にする事に決めた、そして左を描く時は一生懸命に右との關係を考へ〳〵描いて行つた。

コムパスや物差しを持つて來て寸法の比例を取つたりしたが、鏡が使つてあるだけに此の仕事は靜物などの場合のやうに簡單でない。なにしろ本當の顏と鏡の顏と、本當の物差と鏡の中の物差と此の四つのものゝ内の二つを比較するのだから時々頭の中が錯雜して比較すべき物を間違へたりする。それからもう一つ鏡の工合の惡い事は、靜物などと同じ積りで、眼を細くして握つた掌の穴から覗くと、鏡の中の顏も其通り眞似をするから結局眼の近邊を描く時には此方法は無效になるのであつた。

右の眼を標準にして段々に進行して行く内に間もなく鼻から顏全體の輪廓迄大改造をやらなければならない事が分つて來たので此れは大變だと思つた。顏全體が大分傾斜しなければならぬ事になるらしい。それでは困るから結局肝腎の右の眼をもう一遍打ち壞して、すつかり始めからやり直す外はないと思ふとはりつめた力が拔けて繪筆を投げ出してしまひ度くなつた。一先づ中止としてカンバスを室の隅へ立てかけて遠方から眺めて見ると顏中妙に引き釣りゆがんで、始めに感じのよかつた眼も恐ろしく險相な意地惡るさうな光を放つて睨んで居るので、どうも其儘にして明日迄置くのは堪へられないやうな氣がした。それでもう大分肩が凝つて苦しくなつて來たけれども奮發して直し始めた。

其れから殆んど毎朝起きて部屋の掃除がすむとすぐに此の自畫像NO.3に手を入れる。餘り凝り過ぎても身體に障るから午前だけにし度いと思つたが、午前中に一段落付けた積りで晝飯を食ひながら眺めて居ると間違つた處が眼に付いて氣になり出す、もう一筆と思ふ内にとう〳〵午後の時間が容捨なく經つてしまふ。

それでも少しづつは似てくるやうであつた。時としては描きながら近くで見ると非常によくなつて殆んどもう手を付ける處がないやうな氣がして愉快になる、しかし畫架から外して長押の上に立てかけて下から見上げると丸で見違へるやうな變な顏になつて居るのでびつくりする。どうかすると片方の小鼻が途方もなく垂れ下つて居るのを手近で見る時には少しも氣付かなかつたりする。

不思議な事には此のやうに毎日見詰めて居る畫の中の顔が段々に頭の中に滲み込んで來て其れが兎に角一人の生きた人間になつて來る。其れは自分のやうでもあるし又他人のやうでもある。時としては畫の顔の方が本當の自分で鏡の中のが噓のやうな氣がする。特に鏡と畫面とから離れて空で考へる時には、鏡の顔はいつでも影が薄くて畫の顔が強い〳〵實在となつて頭の中に浮んで來るのである。此れでは駄目だと思つた。畫を見詰める時間をなるべく減じて鏡を見る時を永くしなければいけないと思つた。

畫の中に居る人間と描いて居る自分との間には知らず〳〵の間に一種の同情のやうなものが生じて來るやうな氣がし出した。畫像が口をゆがめて來ると、なんだか自分も口をゆがめなくては居られなくなるやうであつた。自分が眼を細くして居ると畫像も何時の間にかそうするやうに思はれた。畫の顔が氣持のいゝ日はなんだか愉快であるがそうでない日は自分も機嫌がよくなかつた。

調子の極くいゝ日には好い加減に交ぜる繪の具の色や調子が面白いやうにうまくはまつて行く、繪の具の方ですつかり合點してよろしくやつてくれるのを、自分は唯其處迄搬んでくつつけてやつて居るだけのやうな氣がする。こんな時には可也無雜作に勢よく筆をたゝき付けると面白いやうに眼が生きて來たり頬の肉が盛り上つたりする。繪の具と筆が勝手氣儘に繪を描いて行くのを自分はあつけに取られて見て居るやうな氣がするのである。こんな時には愉快に興奮する、庭を見ても家内の人々の顔を見ても愉快に見へ、そうして不思議に腹がよくへつて來る。

此に反して工合の惡い日は繪の具も筆も申し合せて反逆を企て自分を惱ますやうに見える。色が濃すぎたと思つて直すと乾燥過ぎる。直して居る内に輪廓も崩れて來るし、一筆毎に顔が段々無慘に情なく打ちこわされて行く、其時の心持は随分厭なものである。早く中止すればいゝと思はない事はないが、そういふ時に限つて未練が出て止めるに忍びない。丁度來客でもあつて止むを得ず中止する時には、困つたといふ感じと、丁度いゝ時に來てくれたといふ考とが一處になる。客が歸ると出來損なつた畫をすぐに見ないでは居られない。

餘り自分が熱中して居るものだから、家内のものは戯れに「此繪は魂がはいつて入るから夜中に抜け出すかも知れない」などゝ云つて笑つて居た。ところが或る晩床の中にはいつて鴨居にかけた自畫像を眺めて居ると、畫の顔が思ひがけもなくまたゝきをするやうな氣がした。此れは面白いと思つて見詰めると何ともない。しかし眼を外へ轉じやうとする瞬間に又すばやく

瞬くやうに見えた。此れは多分有り勝ちな幻覺かも知れない。プーシキンの短篇にも骨牌のスペードの女王が瞬をする話があるが、兎に角吾々の神經が特殊な狀態に緊張されると、こんな錯覺が生じるものと見へる。其れよりも不思議な錯覺は、夜床の中で眼をねむつて闇の中を見詰めるやうにするとそこに畫の顏が見へてくる事である。始めて氣のついた時はハルシネーションのやうにはつきり見えたが、其後には唯ぼんやり、しかしそれが畫像の顏だといふ事が分る位に現はれたり消えたりした。生理光學でよく研究されて居る殘像(ナハビルド)といふ現象はあるが、それは通例實物を見詰めた後極めて少時間だけに止るし、又通例陽像(ポシチーフ)と陰像(ネガチーフ)とが交互に起るものである。此のやうに長時間の後に殘存してしかも陽像のみ現はれるといふのはまだ讀んだ事も聞いた事もなかつた。恐らく此れは生理的ではなくて、病理的に神經の異常から起るハルシネーションの類だらうが、それにしても妙なものである。人殺しをしたものが長い年月の後に熱病でもわづらつた時に殺した時の犧牲者の顏をあり〳〵見るといふが、それは恐らく自分の見た幻覺と類した程度のものが見えるのではあるまいかと思つた。

もう一つ不思議な錯覺のやうなものがあつた。或る日例のやうに少しづつ眼をいじり口元を直しして居る内に描いて居る顏が不意に亡父の顏のやうに見えて來た。丁度畫の中から思ひがけもなく父の顏が覗いて居るやうな氣がして愕然として驚いた。しかし考へて見ると此れは敢て不思議な事はないらしい。自分は可也に父によく似て居ると云はれて居る、自分はさうとは思はないが何處かによく似た點があるに相違ない。自分の顏の何處かを少しばかりどうにか修正すれば父の顏に近より易い傾向があるのだらう。それで每日いろ〳〵に直したり變へたりして居る内には偶然其の「何處か」にうまくぶつかつて、主要な鍵に觸れると同時に父の顏が一時に出現するのであらう。

それから考へて見ると自分が每日筆のさきで色々さま〴〵の顏を出現させて居る内には自分の見た事のない祖先の誰れやそれの顏が時々そこから覗いて居るのではないかといふ氣がし出した。實際時々妙に見たやうな顏だといふ氣のする事さへある。

人間の具體的な個々の記憶や經驗は其儘に遺傳するものではないだらうがそれ等を煎じつめた機微な或物が遺傳して居るので其の爲にこのやうな心持を起させるのではあるまいか。漱石先生の「趣味の遺傳」は正にかういふ點に觸れたもの丶やうにも思はれる。ラフカヂオ、ハーンの書いたものゝ中にも此のやうな考が論じてあつた。吾々の祖先を千年前に遡ると、今の自分といふものは其の昔の二千萬人の血を受け繼いで居る勘定だ

さうである。そうして見ると自分が毎日こしらへて居る色々の顏は此の二千萬人の誰れかの顏に相當するかも知れない。こんな事を考へて可笑しくも思つたが、同時に「自分」といふものゝ成り立ちをかういふ立場からも一度よく考へて見なければならないと思つた。なんだか獨立な自分といふものは徴塵に崩壞してしまつて、唯無數の過去の精靈が五體の細胞と血球の中にうごめいて居るといふ事になりさうであつた。

此の第三號の自畫像は先づどうにか、かうにか仕上げてしまつた。本當の意味では何時迄かゝつても「仕上がる」見込のない事が分つて來たから、此處らで先づ一段落ついた事にしてしばらく放置して見る事にした。バックに綠色の布のかゝつた簞笥があつて、其上に書物や新聞の雜然と置いてあるのが如何にもうるさくて畫全體を俗惡にしてしまふから、後からすつかり塗りつぶして其代りに暗綠色の幕を張れたやうな工合に直して見た、さうしたら顏が急に引き立つて浮き上つて來た。のみならずそれ迄は雜誌の口繪にでもありさうな感じのあつた繪が此の改造の爲めにいくらか落ちついた古典的といつたやうな趣を生じた。色の對照の效果で顏の色の赤味が強められるのであつたが、しかし又同時に着物が矢張り赤つぽく見え出して氣に入らなくなつたがもうそれを直すだけの根氣がなくなつて其儘にしてしまつた。

すぐに第四號の自畫像を同大の畫布にやり始める事にした。今度はずつと顏を大きくして、そして前よりも細かく色や調子を分析してやつて見やうと思つた。ところが下圖を描き始めには可也大きく描いたのが眼や鼻を直し〳〵して居る内に知らず〳〵段々に顏が縮少して行くのが實に不思議であつた、大體出來た頃に寸法をとつて見るとやつと實物の四分の三位のものになつて居る事が分つた。それをもう一度すつかり消してやり直す勇氣がなかつたから今度も亦其の儘でやり始めた。

最初の日は影と日向とを思ひ切つて強く區別して大體の見當をつけて見た。其時に出來た顏は不思議に前の第三號の顏に似て居た。何かしら自分の頭の奥にこびりついた誤謬が強い力で存在を主張して居ると見へる。

此の畫はとう〳〵廿日餘りいじり廻したが、結局矢張り物にならないで中止してしまはねばならなかつた。顏の面積が大きくなつただけに困難は前よりも一層大きかつた。局部に囚はれて全體の權衡を見失ふ事もいよ〳〵多かつた。セザンヌが「解りますか、ヴラール君。輪廓線が見る人から逃げる」と云つた本當の意味はよくは分らぬが、全くそう云つたやうな氣のする事が屢々あつた。右の頬をつかまへたと思ふ間に左の頬はずる

〵逃げ出した。ずつと前にいつか或る畫家が肖像を描いて居るのを見た事がある、其時に畫家の擧動を注意して居ると素人の自分には了解の出來ないやうな事がいろ〳〵あつた、例へば肖像の眼の尖端をそろ〳〵塗つて居ると思ふと丸で電光のやうに不意に筆が眼瞼に飛んで行つたりした。油斷もすきもならないと云つた風に眼を光らせて筆をあちらこちらと飛ばせて居た。羊の群を守る番犬がぐる〳〵驅け廻つて、列を離れやうとする羊を追い込むやうな樣子があつた。今になつて考へて見るとあれは矢張り輪廓線や色彩が逃げやう〳〵とするのを見張つて居たのだと思はれた。かういふ風にやらなければならないところと中々大變だと思つた。

實際輪廓線が僅に一粍だけどちらかへずれても顏の相恰が丸で變つてしまふのは恐ろしいやうであつた。或る場所につける一點の繪の具が濃すぎても薄すぎても顏がいびつに見へた、そのやうな效果は畫に接近して見て居ては却つて分らなくて少し距れて見ると著しく見へた。六尺の筆を使ふ意味が少し解りかけたのである。

どうにか顏らしいものが出來た時にはそれが奇妙にも自分の知つて居る某○學者によく似て居た。そうとも知らず家内のある者が此畫を見て「大工か左官のやうな顏だ」といつた。

それから毎日いろ〳〵と直して變化させて居る間にいつの間にか又此の同じ大工の顏がひよつくり復歸して來るのが不思議であつた。逢ひ度くないと思つてつとめて避けて居る人に偶然出くわすやうな氣が屢々した。或日思ひ切つて左の頰をうんと切り落してから後は此の不思議な幽靈に脅かされる事は二度となくなつた。

何時迄やつても畫に出來上る見込はなさゝうに思はれ出した。或日K君に此頃得たいろ〳〵の經驗を話して居る内に同君が次のやうな事を注意した。「一體人間の顏は時々刻々に變化して居るのを或る瞬間の相だけつかまへる事は第一困難でもあるし、かりに捕へて表現したとしてもそれは其人の像と云はれるだらうか」といふやうな意味であつた。そういふ風に考へて見ると、單に早取寫眞のやうなものならば技巧の永い習練によつて仕上げられ得るものかも知れないが、或る一人の生きた人間の表現としての肖像は結局出來上るといふ事はないものだとも思はれた。或は其の點に行くと却つて日本畫の似顏繪とか或は漫畫のカリカチユアーの方が見込がありそうに思はれた。それ程ではなくても睫毛一本も見殘さず描いた、金屬製の顏にエナメルを塗つたやうな堅い〳〵肖像よりは、後期印象派以後の妙な顏の方が少くも覗ひ處だけは本當であるまいかと思はれて

くる。此の考を段々に推し擴げて行くと自然に立體派や未來派などの主張や理論に落ちて行くのではあるまいか。

仕上がるといふ事のない自然の對象を捕へて繪を仕上げるといふ事が出來るとすれば其處には何か手品の種がありさうである。一體顏ばかりでなく靜物でも何でも餘り輪廓をはつきりかくと繪が堅過ぎて却つて實感がなくなるやうである。例へばのうぜんの葉を一枚〳〵はつきり描いて見ると、どうもブリキ細工にペンキを塗つたやうな感じがする。此れは自分の技巧の拙な爲かと思ふが、しかし存外大家の描いたのでもそんなのがあり易い。此れに反してわざと輪廓を崩して描くと生氣が出て來て運動や遠近を暗示する。此れはたしかに科學的にも割合簡單に說明の出來る心理的現象であると思つた、同時に普通の意味でのデッサンの誤謬や、不器用不細工といふやうなものが繪畫に必要な要素だといふ議論に稍確な根據が見付かりさうな氣がする。手品の種は此處にかくれて居さうである。

セザンヌは矢張り此の手品の種を搜した人らしい、しかしベルナールに云はせると彼れの理論と目的とが矛盾して居た爲に生涯仕上げが出來なかつたといふのである。それにしてもセザンヌが同じ「靜物」に百回も對したといふ心持がどうも自分には分りかねて居たが、どうしても出來上らぬ自分の自畫像を描いて居る內にふと此んな事を考へた。思ふにセザンヌには一つ〳〵の「林檎の顏」がはつきり見えたに相違ない。自分の知つた人の中には雀の顏を見分ける人はあるが、それよりも一層鋭い此の畫家の目には生きた個々の果物の生きた顏が透けて廻つて困つたのではあるまいか。其の結果があの角ばつた林檎になつたのではあるまいか。

こんなさま〴〵の事を考へながら每日熱心に顏を見詰めては描いて居ると自分の顏のみならず誰れでも對して居る人の顏が一つの立體でなくて藝術の面に表れた繪のやうに見えて來た。人と對話して居る時に顏の陰影と光が氣になつて困つた。或夜顏色の美しい客の顏を電燈の光でしみ〴〵見て居ると頰や額の明るい處がどうしても未だ乾かぬ生の繪の具をべつとり盛り上げたやうな氣がして仕方がなかつた、そして其の光つた處が顏の運動につれて色々に變るのを見惚れて居る內に相手の話の筋道を取り外しさうになる事が一度ならずあつた。其後に或日K君と青山の墓地を散步しながら若葉の輝く樹冠の色彩を注意して見て居る內に此事を思ひ出して話すとK君は次のやうな話をしてくれた。ゴンクールの小說に、或る女優が舞臺を退いて某貴族と結婚したが再びもとの生活が戀しくなるといふのがある。最後の條に夫が病氣で非常な苦悶をするのを見たすぐあとでし

かも夫の眼前で鏡へ向つて其の動作の復習をやる場面がある。夫がそれを見てお前は幽靈然だ、私は見たくないと云つて突きとばすのでお仕舞になつて居る。K君は此れを讀んだ時に餘りに不自然だと思つたが、自分の今の話を聞くと、そんな事もないとは限らないやうな氣がすると云つた。此のやうな特殊な場合だけ考へると、實際世間で純粹な藝術が人倫に破壞的効果を與へるといつて攻撃する人達のいふ事も無理でないと思はれて來る。併しそういふ不倫な藝術家の與へる藝術其物は必しも効果の悪いものばかりとは思はれない。つまりかういふ藝術家や此れとよく似た科學者等は極端なイーゴイストであるが爲に結果に於ては却つて多數の爲に自分を犠牲にする事になる場合もあるだらう。そういふ時にいつでも結局一番徳をするのはかういふ犠牲者の死屍に鞭うつパリサイあたりの學者と僧侶達かも知れない。こんな事を考へて居る内に、それなら金儲けに熱中して義理を缺く人はどうかといふ問題に打つかつて少し六かしくなつて來た。

毎日同じ顔をいじり廻して居る内に時々は要領にうまくぶつかる事もあつた。何だか違つて居るには相違ないが、どう違つて居るか分らないで困つて居たやうな處が何かの拍子にうまく直つて來る時には妙な心持がした。樂器の絃の調子を合せて行つてぴたりと合つたやうな、或は嵌りにくい器械のねぢがやつとはまつた時のやうな、何といふ事なしに肩の凝りがすうつと解けるやうな氣がするものである。

さういふ風にうまく行つた處はもう二度といじるのが恐ろしくなる。それを構はずに筆をつける時には可也ヒロイックな氣持になる。しかしそれをやると屹度手が堅くなつていじけて、失敗する場合が多い。進歩といふ事にさへ構はなければ手をつけないで其儘に安んじておく方が所謂處生の方法とも暗合して安全であるかも知れない。

それで自畫像第四號もとう〱仕上げずにやめてしまつた。第三號は第一號のやうに意地の悪い顔であつたが此の第四號は第二號のやうに温厚らしく出來た。二重人格者の甲乙の性格が交代で現はれるやうな氣もした。

今度は横顔でもやつて見やうと思つて鏡を二つ出して眞横の輪廓を寫して見たら實に意外な顔であつた。第一鼻が思つて居たよりもずつと高く如何にも憎くにくしいやうに突き出て居て額がそげて顋がこけておまけに後頭部が飛び出して居て何とも云はれない妙な顔であつた、何處かロベスピールに似て居るやうな氣がした。兎に角正面の自分と横顔の自分を結びつけるのが一寸困難に思はれた。嘗て寫眞屋のアルバムで知らぬ人の顔

について同じやうな經驗をした事はあつたが、生れて四十餘年來自分の肩の上について居る顔に就てこんな經驗をしやうとは思はなかつた。

これから思ふと刑事巡査が正面の寫眞によつて罪人を物色するやうな場合には、目前に居る横顔の當人を平氣で見逃がすプロパビリチーも可也にありそうだと思つた。場合によつては抽象的な人相書によつた方が却つて安全かも知れない。或は寧ろ漫畫家の描いた鳥羽繪が一番有效かも知れない。上手なカリカチュアは實物よりも以上に實物の全體を現はして居るから。

此れと連關して自分が前から懷いて居る疑問は人間の顔が往々動物に似たり、反對に動物の顔が或る人を思ひ出させる事である。實際駱駝に似た人やペリカンに似た人がある。河豚、鱏、蟷螂、龍の落し子などに似た人さへある。古いストランド雜誌にいろんな動物の色寫眞をうまく色々の人間に見立てたのがあつた。或る外國人は日本の相撲の顔を見ると必ず何かの動物を思ひ出すと云つたが共の人の顔自身がどうも何かの獸に似て居るのであつた。レビンの描いたトルストイの顔などはどうしても獅子の顔である。

そうして見ると吾々が人の顔を見る時に頭の中へ出來る像は決してユークリッド幾何學的のものではないと思はれる。唯或る割合に少數な項目の多數な錯列によつて色々の顔の印象が出來て居る。共中に若干「相似」を決定する爲に主要な項目の組み合せがあつて、此れだけが具備すれば殘りの排列などはどうでもいゝのだらう。此の主要の組み合せを分析するといふ事は可也面白いしかし六かしい問題だらうと思つたりした。渾天に散布された星の位置を覺えるのに、星の間を適當に直線で連ねて色々の星坐をこしらへる。それを一度覺えてしまへばいつ見ても共れだけの星が纏まつて見へるし、此れと大體に似た點の配列を見れば共れが實際にはかなりいびつになつて居てもすぐにそれと認められる。吾々の顔に對する記憶も此れと似たものではあるまいか。星坐の連結法は寧ろ任意的だが顔の場合には共れが必然的で凡ての人間に共通であるとすれば此れも一つの不可思議な問題になる。

色々の「學」と名のつく學問、殊に精神的方面に關したもので、事物の眞を探究するとは云ふものゝ、よく考へて見ると物の本來の面目は矢張り分らないで、つまりは一種の人相書か鳥羽繪を描いて居る場合も多いやうに思はれるが、其のやうな不完全な「像」が非常に人間に役に立つて今日の文明を築き上げたと思ふと妙な氣持がする。唯甲乙二人の描いた人相書がちがふ場合に何方も自分の描いた方が「正しい」と云つて、主張するのはい

ゝとしてもおしまひには苦々しい喧嘩になるのはどんなものだらう。物理學では相對率原理の認められた世の中であるのに。

横顔は兎に角中止として今度はスケッチ板へ一氣呵成に正面像をやつて見る事にした。廿日間苦しんだ後だから少し氣を變へて見度いと思つたのである。今度は似やうが似まいがどうでもいゝといふ位の心持で放膽にやり始めて唯二日で顏だけはものにしてしまつた。ところが却つて此方が一番顏が生きて居てそして一番藝術的に見へた。其上此れが今迄の內で最もよく似て居るといふ者もあつた。なんだか餘りあつけなくて、前の繪にいつ迄もかじりついて居たのが馬鹿々々しいやうな氣がしたが、實は矢張り前の繪で得た經驗の摘要が此のスケッチに現はれたかも知れない。

第一號から最後の五號迄をならべて見ると隨分色々な顏である。そしていづれも偶然の產物である。此の偶然の行列の中から必然をつかまへるのは容易な事ではないと思つた。凡てに共通なのは眼が二つあるとかいふやうな抽象的な點ばかりかも知れない。尤も顏自身の日々の相が偶然のものではあらうが。

毎日變つて居る顏の歷史を順々に手繰つて行けば赤ん坊の時迄一つの「連續（コンチニユム）」を作つて居るが、此れを間斷なく見守つて居ない他人に向て子供の時の顏と今の顏とを切り離して見せて其が同人だといふ事を科學的論理的に證明しやうとしたら隨分困難な事だらう。何十年來一つ家に暮した親にでも、自分が或る夜中に突然入れ換つたものでないといふ事を證明しなければならないとしたら困るだらう。第一自分自身にさへ子供の時と今との連鎖を完全に握つて居る人はありそうもない。こんな「證明」の必要はめつた起らないから安心して居るだけである。しかし例へば生れたばかりで別れて三年後に逢つ[illegible]子供を嚴密な意味で確認し得る人があるだらうか。仕合せな事には世の中では論理的の證明は割に要求されないで、オーソリチイの證言が代用され其のおかげで物事が澁滯なく推捗するのであらう。

× × × ×

自畫像を描きながら思ふやうに描けない苦しまぎれに隨分いろんな事を考へたものである。それをもう一遍複習するやうな積りで書いて見ると隨分下らない事を考へたものだと思ふ事もあるが、又中にはもう少し深く立ち入つて考へて見度いと思ふ事もないではない。

旅順行

木村荘八

あゝ「旅順」。

あんな無氣味な要塞の――假令そこの風光は稀れに見る豊富な美しさに輝いてゐるとは云へ――味なきところを、只その名を聞いたゞけでも怪しく「懐しく」思ふのは如何云ふわけだらう。

子供の頃の心がその名に連れて返つて來るからだ。小鳥のやうに。

その頃自分はいくつであつたか、――中學校ではなかつたと思ふ。小學としては上級であつたかも知れない。兩國に住んでゐたことは確かである。父もまだ世にゐたと思ふ。ナヒモフと云ふ露西亞の軍艦が沈んだのはいつの事かはつきりしないが、何しろその時、父にその號外を讀まされて閉口した。「轟沈」と云ふ字が讀めなくてその時以來イヤに之れを今もおぼへてゐる。ナヒモフは泣き杢と云ふあざ名の人が兄キの友達にゐたので愉快を感じた。

日本海々戰のことかも知れない。その大勝利のことは銀座を學校の歸りに歩いてゐて新聞社の前で知り、亢奮した。鑛物標本を買ひに銀座へ行つたのだから中學二年らしく思ふ。するともう父はゐなかつた筈だ。

――變に混線してよくわからないが何にしても十何年昔の子供の心が、「旅順」の名につれて俄かに鮮やかに返る。

あゝ旅順、その頃の我が心よ。

自分は旅順陥落の夜おそく家を出て横山町の邊をブラついた。家にはとてもゐられなかつたのだ。家を出るとすぐ街燈のガスがボーボー云つてそれがズラリと黄色く星のやうに並んでゐたのを見た――その有様を思ひ起す。町は提灯と旗で充ち、湯氣が立つやうであつた。方々でポンポン花火を上げ、およそ人と云ふ人が外へ出たかの如く、商家の子供がかたまつて押し合ひわーと何かどよめきが聞こへる。

萬歳、萬歳！

實に爽快だと思つた。うれしいのだ。

僕は矢鱈にあの邊を歩いた。騒ぐ〱、みんな騒ぐ。騒ぐ人みんな「僕」である。滿足を感じる。

矢庭に僕の足元へ火が走つて來てクルクルとまはり、一瞬立ちすくむ間に非常な勢ひで火の粉を吹いてシュツと消へた。わあいと人がはやす。五六人かたまつて路次から通る人へ鼠花火を投げつけてゐるのだ。僕は怖かつたが又此の上なくうれしかつた。

或ひは僕は此の時程にうれしく氣に入つた經驗を他に知らないかも知れない。僕は全く醉つて町の熱狂の中をそれに隨けてブラ付いた。僕がその夜の横山町一杯の群集の中では最も小さい一人であつたかも知れないが、最も大きい一人とも同じ氣持であつたらう。又僕が最もうれしかつた一人と思ふがおよそその夜の誰に聞いてもさう云ふであらう。

旅順が陥落したからだ。が、それは理由である。それでみんなが騒ぐ事實が直接にはうれしいのだ。他の誰を見てもこの同じ心が反映するのでいつか我れを忘れる。大人も子供も同じになり、團結する。――それがうれしい。

然し僕は曖昧ではあるが、その時一個のたしかに軍國主義者であつた。旅順の陥落が直接にも斷へず意識してうれしかつた。旅順が落ちた。日本が勝つた。

露西亞はにくかつた。敵だから。――それ以上には別に考へない。何故敵だか知らないが兎に角「敵」だからにくい、勝つた方がいゝ。旅順が落ちた。「ざまを見ろ」と思ふ。くつたくなく痛快である。その點、我がことのやうに日本のことを思ふ。

我々はさう外からも露骨に教育されて生長した。その搖籃期の一つの記憶である。「旅順」の名は。

○汽車に乘る

今旅順に向つて列車が走りつゝある。快晴である。窓外は實に豊富な温かい色に充ちてゐる。マイエル、グレーフエがゴオホの傳記にアールへ行つた頃をかいて、「太陽はその地を至純なる光線に浴させ、人々は今も猶昔ローマ人がそこにアリーナを建てた時代の如く、壯大で健康である」とかいた。此の地の人々(支那人)も健康であらう。壯大は兎に角として。――稍もすると、さう云ふまだ見ぬフランス南部のアールやプロヷンスのことを思ひ合せる。殊に風光に。

今日もその感じである。

僕のうしろに外人の一團が乘り合せてゐる。僕はフランスの片田舍を走りつゝあるかの感が起る。少くも同じである。安住

を失せる旅心にとつては。此のまゝ列車をその想像の地へおけば旅びが不自然でなくつゞく。

自分は窓に近い、そこには一人だけしか座れぬ——窮屈だが然し混むと却つて樂になる小さな椅子に倚つてゐる。連れのK氏が向側にゐる。此の人のみこの地で自分を知つてゐる。あとの人々は何れも今一時遇然逢つて、あとは恐らく永久に四散して了ふ知らぬ人ばかりである。旅館でも、街でも。殊に此の車内では。

僕は此の椅子を發車前に早くとつた。旅馴れぬので早くから驛へ來た。そして座をとつて帽子をおいて一たん出た。

で、二度目にはいつて見ると、下等な顔の外人が僕の帽子をどけ、座つて煙草をのんでゐる。一體滿員なのだ。一等車だが。——僕は不快と不安を一時に感じた。旅順までまるで知らぬ何時間かの沿線を立ち通すのはイヤである。僕はその外人の肩をついて見た。

(This is my seat.)思へど聲が出ない。

「yeh?」

と云ふ樣な聲を出し彼はふり向いて、左右を見まはし、腰のわきに立てかけた僕の帽子をつまみ出して

「Is this yours?」

「さうだ」

「you——taken?」

「Oh yes」

「ハ——pardon me」

と云つて彼は退いた。イヤ實に安心したよ！

それから僕は又帽子をまん眞中に伏せておいて又車外へ出た。——まだ發車には半時間がある。

僕は驛構内の鉛筆寫生をハガキにして東京のS氏に走りがきした。

いつも東京のことを思ふ。友のことを思ふ。いつも出來事のある度びに東京の凡ての空氣、凡ての友を思ふ。元氣でゐよ！

そして知友に何か書くと、一時氣がすむ。心から不思議のカリが飛び立つて苦しみも、喜びも、心配も、寂しさも笑ひも、一つ一つ親しき故郷へ運ぶやうに思ふ。——

プラットフォームも飽きたので三度び車内へ歸ると、此度は丸まげの婦人が僕の座席に座つてゐる。日本人ではあるが。

彼女は大連から旅順へ移轉でもするらしく、見送りに來た洋傘さす婦人としきりに窓から身をのり出して、話してゐる。極く斷片のことを途切れずに綿々としやべつてゐる。恐らくもう充分に別れは告げて來たであらうに、又此所で會話術が最後の

エネルギーをぶり返した。岡から寫眞の來た事や曾て汽車が日本の伏見を過ぎ、喜んで下りたら歩だつた悲しい話や、支那人のこすく汚なく臭いことやいろいろ、全く双方から神來のリズムに乘つて間斷なくしやべつてゐる。一種の詩である。

三十位ゐの人である。夫が轉任(?)になつて行くので、夫は先きへ行つたと云ふ。彼女はあとから子供と子守りとで今日出かける。

洋傘の見送りの人とは同じ會社(か何か)の夫友達にちがひない。旅順へ行く方が上役らしく、お美しいと云つてゐる。

僕は座席をとられてその邊にウロウロ立つてゐたが、熱心に語り合ふ二人の婦人を可憐に、美しく又氣高く思つた。氣持を察した。輝く友情。——もし席をとられたらこのまゝゆづつて僕は化粧室にでもはいつてゐやうと氣をかへた。さつきの外人にわかると工合惡ひと思ひ、見まはしたが、見えなかつた。

こつちへ來て人を見ると寂しい。相もすると寂しく、つい同情したり誘はれたりして脆くなる。殊に夫婦ぎりの會社員など見ると心をうるほす。安東で自分は若い妻君が一坪程の花園を夕方水まいてゐるのを見た。小さな煉瓦長屋の一むねであつた。彼女は熱心に下向いて水をやつてゐた。自分は散歩で遠くから彼女と彼女の家——恐らく彼女の生活を見たが、夫の歸りを待つ間であらう。彼女は白いエプロンかけて清淨な天使の如く、花園は輝いて平和に見えた。

あゝ、「夫婦」。

何と云ふ寂しく美しい無垢の情であらう。天使がかき抱いて慰め合ふやうだ。澄み切つて團結してゐる。意識以上の世界で信じ合ふ。瞬に靈が互ひにわかる。およそ此の世の最も美しい無形の玉に譬へられる。形ちなく、いきなり心へ行つて結ぶものが夫婦の情である。いざと云ふ時互ひに素早く手をさしのべて、天界で結ぶ。此の世の荒波を乘切る堅固な船のホヅナの樣に。

遠くへ來て見ると、その美しい情が寒空の星のやうに點在して冴え、世をうるほすのを見る。

此所、今車内で自分の眼の前にも、その星が二つ光つて喜々としてゐる。何とその夫を信じて無心に語り合ふ清淨な妻よ。私は貴女を幸福に思ふ。貴女と貴女の御主人との間には、溫和な堅固な世界のあることをおよそ異境のどの一隅でも感じます。

ヲラールのセザンヌの本に、「私は妹によりかゝり、妹はヂユスイットの坊さんによりかゝり、坊さんは神によりかゝる。」我々はみんな團結して强い、とあつたのを見た。如何に神の前な

る夫婦が此の世の何所でゞも相結んで強いだらう。

自分は前夜うたゝねしてゐてイヤな夢を見た。何でも何時か自分が歸つて家へ行つた夢である。今家へ着いたと云ふ一瞬の夢らしい。家は今の家でなく、我々夫妻のいつも氣に入つて話す四年以前の郊外大崎の家で、裏手に繁華な街が見える。一眼で所謂横山町だとわかる。自分の搖籃。

家へつく道で暗い坂道を通つたが、それは大連市外老虎灘の新開道路に相違ない。道の一方に溝があつて、眞暗な坂を通つて行くと溝一面に見おぼえある自分の額ブチや油繪がほしてある。ヘヘア、大掃除があつたなと自分は想つた。が腹が立つた。この夜中に何で出しつぱなしにしておくのか、一つ×子を叱つてやらうと云ふ氣になつた。するとすぐそこに家がある。こんなに近ければ毎日來ればよかつたと思つた。(あとで此の考へはキズに殘り、心から寂しく思つた。)

ところが家へはいると一杯の人で、――何か會でもやつてゐるらしい。みんな知人だが母だけにしか逢はなかつた。母とは話した。誰も自分を怪しまなかつた。すると火事だ、と云ふ。見ると横山町一帶にわいわいと云ふ人でその眞中にモクモク動く灰色のものがある。たしかに老虎灘の山を歩く牧羊の群れである。然しあれが火事だと云ふ。その間に目がさめて、――妻には逢はなかつた。

自分は目がさめた時深くあゝ夢かと思ひ、どうかもう一度ねて今のつゞきを見、妻に逢ひたいと熱心に思つた。眼をつぶつたが頭が冴へて憂鬱と異様な焦慮を體感した。

○

列車が止まつた。夏家河子驛である。あと半分。

こつちの汽車は驛へ近づくと煙突わきに吊るしたベルをゆらして、カンカーン、カンカーンと知らせの合圖をする。寂しい異境の感じである。

今頃家では如何してゐるであらう。自分は健康だが。

(以上車中にて)

○戰跡を見る

○午前

六月二十七日、再び旅順へ行く。今日は山の方の戰跡を見るつもりである。何か子供のやうな好奇心で――此の字にはそれをフト意識すると自分の實感の上にも語弊こそあれ、實際――昨夜もう「たのしみ」にして今朝は六時に起床した。七時五十分の汽車で大連を立つて九時頃旅順へついた。すぐに驛前に群れ並ぶ支那人の四輪馬車に乘つて「戰跡」をまはる。

日曜でよく晴れてゐる。同じ見物の客が右にも左りにも馬車

を揃ひ、乘り込んでゐる。馬の顏がいくつも前後左右に揃ひ、動いてゐる。「競走」のスタートのやうに晴れやかで好氣分（グッドユーモア）があり、面白い。早く此の馬車よ、出ろといゝ。

然し自分の一行は平野水を買ひ込んだり菓子を積んだりしてゐたので、後れて、他の馬車は人が乘るとスグ、ガラガラ愉快相にきしり出す。いくつもいくつも一本道の街道をそれがつゞき次第に小さくなる。そのあとで、やつと勢ひよく走り出した。

自分は暫くあたりを見てゐたが、青い海だ。そして美しい空だ。とても此所に戰爭が「あつた」とさへ思へない。海軍々人がぞろ〳〵白服で行き來してゐる。町は狹く、一本道で、一方は海にせまり一方は山に圍まれ、その間に町家が並ぶ。トンと横須賀の感じである。

然し自分はそれから車內に買ひ込んだ戰跡案內の拙い本を讀み初めてから、全くそれに夢中となつた。

その本は不快な本である。一々戰爭の事實を下司な興味で書き、それを愛國心の概念で縫ひ合せ誇張してゐる。且滑稽な哀れな本だ。何とか云ふ少將が「上下眞黑の軍服に白チリメンの兵兒帶をしめ、朱ざやの大刀ぶち込んで」わあわあ騷いだと云ふ樣なことが眞正面から本氣で書いてある。かうしか感じられぬと云ふ感じが出てゐる。然しその本にはこれ等の出鱈目の合間々々に全く戰慄す可き「事實」が平氣で書かれてゐる。そこには却つて又「事實」でなしには與へない辛い刺し通す刺戟があり讀む者の心を襲ふ。

あるザンゴーに血と腦ショーですねをも沒する所があつた——とかいてある。日本兵はその中へ矢庭に突撃中飛び込んで奮つた想だ。あとで分つて見るとそこには一個手投爆彈を持つた一隊の露兵が伏兵されてゐた。そこへ砲彈が散つて、一時に彼等の手投爆彈も破裂し、人間が液體になつて濠を埋めた、と。

又或る日本兵のことが書いてあつた。彼は砲彈爆發の餘勢の爲めに身體半分地中へ埋まつて、動けなくなつた。彼は銃をふりまはして敵を見てゐた想だが、彈丸は雨と來る。戰友が見かねて彼を下半身掘り出してやうとらしたが、彼は無益だ止せと云つていきなり劍で自殺して了つた、と。

又は坑道戰の場合の工兵の驚く可き事實が書いてある。工兵は地下へ穴を掘り進める時何れも兩足へ長くひもをつけ、そして地中へ進むと云ふ。いつ何時爆發して生き埋めになるかも知れない。せめて死體だけそのひもで友に引きづり出して貰ふ爲めに。

——それ等は數限りなく此の本の隨所にある。恐らく戰時には家常茶飯の事であらう。本の著者はそれ等を本心が辛く感

じるのを否めず、且それを理窟で一時逃れする爲めに、勇壯だ、忠勇だ、と一々に書いてゐる。然ししまひには却つてそれがうつろに痛々しく響く。——此の本の著者も從軍の兵士であつたか。彼は時には忠勇だ、義烈だと書きながら筆を持つて泣いてゐる感じがある。

全く此の地で親しく戰爭のことを思ふと、その概括且抽象のプリンシプルよりはデテールの同時に具象ある「事實」に心を掴まれて、泣きたくなる。實際泣きたくなる。白晝空氣や地物の中に自然に反して死んだ人の靈があつて、ひしと生ける我々にのしかゝり、うらみ、訴へ、嘆くやうだ。苦しくて壓しつぶされる。

その間に馬車がとまつたので見ると細く長い砲身がこつちを向いて口を開いてゐるのでヒヤッとした。——昨夜自分は好奇心で今日の旅順見物を少くも感じたが、そのエピキュリアンは何所へ行つたか。自分はもう心を戰禍にとられて了つてまだ見ぬ中から膽を冷やし、臆々とした。

馬車は戰利品陳列館へとまつたのだ。砲身は前庭一面の飾りである。何れも厚い鐵板に無殘な穴が開いてゐる。あゝ、此の穴の度びに何人此の砲のうしろで死んだか。

館へはいると第一室の天井に一尺四方大の大穴が開いて、タル木がさけ破れたまゝ、シンとしてかゝつてゐる。下に說明がある。此所は元露の將校クラブであつたが見る通り我が砲彈を受け、こんなになつたとある。よく見るといつも丁寧に修理すると見えて、さけ目を避けてうまい工合に青ペンキが丹念に天井一面を塗つてある。どうせペンキ塗りにするなら穴も直したら如何か、何もこんな穴を見て人が日本の爲めにつくす心にもなるまいが。つまらぬ趣味だ。

その他いろ〳〵戰利品があつたがつまらぬものだ。捨てた方がいゝものだ。人には想像と云ふものがあるのだ。彼の思想の度につれて翼を大きくも小さくも、確かにも不確かにもする。死んだ事實をいつまでもさらしておくには當らない。それは形なく、不快である。詩なき人生のやうな五慾のものだ。が然しかう云ふものを使つたと云ふ參考にならまあいゝだらう。それにしては餘りにくどくありすぎる。

こんなに澤山いろんなものをとつたもので方々内地の學校や公園などへも大砲や彈丸をなしくずしに分けるのだナ、と思ふ。政府よ、こんなものに手數をかけるよりはまとめて何所か埋立地へでも埋めた方が有益だ、本當に。

之れを見れば又露西亞の人は永く不愉快だ。

自分は本を讀みいろ〳〵に思つて無形に壓迫されてゐた戰禍

の辛さからは次第に心が弛んで、このいろ〳〵のガラクタを見る中に一時休息心を感じて來た。若しやその息休めに此所があるのかと皮肉になる。——室内には露兵のラッパや種々の樂器、軍服などあるが優雅なものである。一隅に鐵條モーのかためたのがあつた。ためしにまたいで見ると麻服のズボンへ引かゝてチヤリンリンと云ふ。妙な一寸氣のすむ感じである。然しコイツに本氣に引かゝつては敵はないが。

何しろ之れでもか之れでもかと此所の役人(であらう)が工夫していろんなものを並べて說明を付け、戰爭の如何を陳列館で多少語つたつもりであらう。只それが餘りにくどいので汚なくなる。もしかう云ふものは保存するなら何か箱へでも入れて何でもないところへ目立たずにおいた方が、效果もある。白晝堂々とわざと見せられるのはイヤである。

一體旅順の戰跡が何れも概してさうではある。一の見せものとなつてゐる。その爲めに生活する商人も出來——例へば戰跡案內人と云ふものがある。又はあとで二〇三高地で見たが、日中いつも山のテッペンに吹きさらされて記念撮影を業としてゐる(さぞ辛いであらう)寫眞屋も居る。——恐らく「旅順」には此の戰跡がかけがへなき財源の一ともなつてゐるのか。

地物は然し何と云つても自然なので、土を踏むと生氣があり歷史が幻影となつて甦る。誰が說明しなくとも。然し又その人爲の低き說明——見よ、それぞれの堡壘の上を。醜くき砲彈形や花崗岩碑が立つて軍人の名などつけた自分勝手の紀念碑が小うるさく立つてゐる。東鷄冠山堡壘の一ケ所には石造の營舍が砲彈の爲めにぬけ落ちてガラガラに壞れてゐる。その一つの大石の下につぶされてコントラ何とか云ふ露の少將がつぶされたと云ふ。その上から下ちて少將をつぶした大石の上に、わざ〳〵石碑を立てゝ「何少將戰死のところ」などゝかいてある。「愚」の感じがする——之等下俗の說明の爲めに、又却つて心を惱まし徒らに古傷にさはられる氣の毒な人々がどんなに多いことか。

自分はその夫や、父や、子、友、親せき等を此所で失つた人々が此の地を踏む時の心を思ひ、痛ましく思ふ。彼等は見なければ平和でゐられる。見れば思ひ出して嘆き、然しそれ以上如何にも出來ない。傷を痛ますだけである。然も此の旅順はいろ〳〵あくどい人工が加はつてより以上に傷を痛ます仕かけがしてある。戰跡保存の人は彼等がそとで國家の爲めに夫が死んだ、子が死んだ、友が死んだと人々が自然に思ふと思ふか。果して君自身如何か。

戰跡は何と云つても、かくしても戰跡なのだ。それを殊更に

保存する、否醜化することなどやめよ。餘り日本の軍國主義を方々白日のもとにさらすことをやめよ。殊に外國からとつた土地などに恥ぢ知らずに愚をさらすことはやめよ。

眞の國辱である。

自分は猶陳列館の中に或る一室を見出して腸を裂かれる思ひがした。そこには一まとめに當時戰地からひろい集めた日本兵の私人的遺品が並べてある。赤裸々に並べてある。「忠勇なる兵士の」何々とはり紙して並べてある。あゝ、見るにたへない。白布をかぶせておく可きだ。

さけた軍帽が三つ程あつた。ひさしもなく、血がついてゐる。――自分はあとでエハガキを買ひ、昔戰時中に寫したと見える歩兵陣地の一枚を見たが、これには之れと同じ黒と黄の軍帽を被つて兵士が幾人も腰かけて寫つてゐた。恐らく此所に寫つてゐる人、のこらず死んだであらう。

自分は猶此所へ來る汽車中で今朝鐵道につとめてゐる人からいろ／＼戰地の話を聞いた。彼は四十代の人で僕を眺め、「御見物ですか、丁度私が旅順にゐた頃貴君位ゐだつた」と云つた。彼は明治三十七年とかから此の地に來てゐる相である。娘を一人連れてゐる。「此の子はまだ内地知らずです」と笑つて云つてゐたが何だか寂しかつた。

彼は亢奮して一時間餘の汽車中、旅順の戰時の話をした。同郷の友人をフトしたことから失つたあとで後悔した話をした。

彼は或る夜敵の近くない土地で斥候に出された相である。その友も一所に。彼等はのんきに話しながら煙草など吸つて歩いたと云ふ。道に一つホリがあつた。斥候の役でそのホリの幅をはからねばならない爲め、ハシゴを渡して見た相だ。ところが存外幅廣くてハシゴがポツカリ落ちて了つた。

「くらいでせう。よく見えないなんです。で私はその友達にオイ下へおりて調べた方が早からうと云つたのです。友達もその氣でまあ三人ばかりで下へおりることになつた。そこへ傳令が隊からやつて來て引返せと云ふんです。それで、ホリへ下りた仲間には、あとから調べて來いと云つて私達は傳令と一所に先きへ引返した。何しろ敵はまるでゐずノンキなんですからな。」

ところがその「友達」は靜かにおりればいゝものを、いきなりホリへ飛び込んだと見える。ホリには下一面にアンペラが引いてあり、さして深くはないと云ふ。只そのアンペラの下には鐵の棒のとがつたのがあつて、他のおりた仲間は助かつて幅もはかつて返つて來たが友達は鐵棒にアゴをさゝれて、間もなく死んで了つた、と。

「私は後悔しましたよ」

と彼は云つた。

「氣の毒なことだ。恐らく平氣でホリへ飛び込む位ゐ元氣な快活な氣分の夜であつたらう。家のことなど考へながら。——戰爭のことなど意識に無い方が寧ろ自然である。

彼は汽車がケン山へかゝつた時、「此の山が先づ本當の戰地の初めでしたな。サヌキの隊が占領したので五ケン山のケンの字をつけたのです。」そこまではレールの廣軌をせばめて日本列車が通つてゐた。負傷者もケン山の先きの者はここまで來て、ケン山より手前の者も同じく此所まで來て、それから汽車で後部へ運ばれた。「毎日此の邊をぞろ〳〵ケガ人が歩いてゐました。ケン山の向ふから來る者はまあ當り前に引返すのだから氣が張つてゐていゝが、後からここ迄逆戻りする連中はみじめでした。足をひきずつたり友達におぶさつたりしてポツポツ線路づたひに一里もつながつて歩くのに時々ケン山からは負傷者が乘つた汽車が悠々すぐわきを通る。まだ〳〵二三里先きへ歩かなければその汽車へは乘せてくれない。みじめでしたよ。」

その途中で死んだ者も澤山あつたと話したが自分はそれを云はせずに、「さうでせう、さうでせう」と云ひ、話を消す氣になつた。全く默して了つた。

自分は陳列館の棚の前でそのレールわきで力及ばずに死んだ負傷者のことを考へた、その名や顏まで忍ばれる氣がした。あゝ、自分がその境涯におかれる感慨は思ひ及ばない。死なないだらう。本當に肉體だけが壞れて死ぬのである。心は死なないに相違ない。人間はさうして死ねるものではない。

棚の中を見ると又大小幾つかの時計がある。いびつになり、又は針が飛んでゐる。恐らく戰死者の懷中にあつたか、又は死體のわきに散つてゐた。「彼」は之れを日常使つてゐた。誰がこんなところにおかれやうと思はう。

猶ひどいものがある。血をふいたグシヤグシヤのハンケチが丸めてかたまつて置いてある。——然し自分はもうやめる。回想するに忍びず、又讀者をよませるにも忍びぬ。

何故から云ふ個人の情感に立ち入る「悲慘」のものを麗々しく並べるのか。軍國主義の痴漢。恥ちよ。

之等は死者を尊敬して拾得と同時に燒く可きだ。

○午　後

午後、我々は二〇三高地へ行くことにした。自分は午前中の刺戟でかなり疲勞もし、もう此の上は歸つて氣分を代へたい望みもあつたが、又一方に小一時間飯を食つて休んだので、どんなものか、又刺戟に應じたい氣分もある。どうせ之等はもう一

生に二度とは見ないものばかしである。殊に自分はまだ戰跡と云ふ地形の上の戰跡は旅順港口のほか見てゐない。

さう、自分は港口を見たのだ。此の前來た時に警察の船で。

――その船は、警察の船と云ふときびしく聞こへる。遊覽船と云ふとやさしく聞こへる。その中間の變なものであつた。デツキで警察官が帽子をとつて座つて水瓜の種を食ひ、酒を呑んで赤くなつてゐた。――その感じの船である。七十トンとか云ふ三浦三崎通ひの船に似てゐる。その堅牢な、立派なもの、ロシヤから分捕つたものだ相である。

自分がそれに乘つたのは同行の人の肩書きに依つた。丁度その船を支度して旅順の高官達が釣に出かけるところであつた。自分は或る人と一所に行つて、まあうまくその船に乘ることが出來た。船はガランガラン碇を上げて、眞青な內海の上を悠々閑々と進み初めた。自分は上甲パンに立つて進路を見、さつさうたる風に吹かれ、艦長の如く、愉快を感じた、此の日天氣晴朗にして波無しだ。實に優雅な美しい海と山だ。自分は滿足した。

行手の海中にポツンと赤い輝く樽がたゞよつてゐる。近づくにつれ大きく、太つて丸く、判然とする、ヴイである。

ヴイの環カンに輕桐（シャンパン）をつないで、支那苦力が三人、船中でまぐろの樣に黑くヒルねしてゐる。カンカンと日に照らされ、スースースーと船が動く。寒くも涼しくも感じられる。我等の氣船はそれに段々と近づく。イヤ、實に近づく。間もなく衝突である。

と、こつちの水夫が船首から大聲揚げて眼下の小舟へ怒鳴りつけた。一人起きた。

その起きた男が目をこすつて立つと、ヌ――と何時の間に近づいたか大汽船がそこに來てゐる。忽ちあはて騷ぎ、奇聲を發した。他の二人の頭邊をドタバタバタと蹴り、手を上げ、矢庭に猿のやうに近くのヴイへ飛び移つて、船のモヤヒを解き放した。船中の二人も騷ぎに眠をさまして立ち上り入れ交ひ、一人は海中に手を入れて犬のやうにかき、波を飛ばし、トモの一人はガリガリろを入れて危ふく一散にその場を逃れた。

汽船は既に機關をとめてゐた。

ヴイへ乘つた先覺の男は俊カンに成つたが、汽船の水夫は拔目なく彼にナワを投げ渡して環カンへしつかりと結びさせた。此所に一時停泊するのだ。

支那苦力のシヤンパンはその後も暫く近邊にざけめき、俊カンを乘せたりいろ〳〵しやべりちらしてあつちこつち漕いでゐたが、間もなく岸の方へ返つて了つた。

船中靜かになつた。

丁度ヒルで食事が初まつた。
自分は警察官に默許して貰つて風景寫生にとりかゝつた。

○

それから港口を見たのである。
汽船は約一時間の後ヴイのナワを解いて、船首を曲げて港口に向つた。
右手にギリギリ皺のある紫の嶮山が見える。老鐵山である。その左手に老虎尾半島がつゞく。多分それに添ふて、右まはりにまがり、港口へ出た。
「これが港口だ。これを塞いだんだな」
と同行の人が自分に敎へた。港口封鎖――成程それを考へられる筈である。幅一町あるであらうか。右左りから急坂になつて岬が海にすべりこみ、岬の上はすり鉢形に砲臺となり、その二つにはさまる港口は瓢たんのやうに見る〳〵せまくつぼまつてやつと外海へ開いてゐる。ふさぐ可能性は充分にある。
「あれが廣瀬中佐の死んだところだ」
「朝顏丸は此處で沈んだ」
と交々に人が敎へるともなく話してくれたが、何れも白い砲臺の直下、全く二三尺にも思へるところである。凡て人の指さす海中の個所は。」
「何所から閉塞船はやつて來たんです？」
「それは君遙くさ」
と誰かゞ遙か外海の靜かな水平線を指して云つた。あすこから此所へ、夜、――砲臺がある、戰時である。
「みんな探海燈の密集で困つた相だ、彈丸より困つたと云ふ。つまり何所が港口かわからぬ。ある舟はとんでもない老鐵山の方角へ沈んだ。」
と誰かゞ云つた。自分は想像したがまとまらなかつた。
船は次第に港口を離れて外海へ出た、黄金臺が一とまとめに見える。成程港口は一寸何所かわかりにくい。さすがにうねりで船は上下動しはじめてゐる。然しいゝかげんのところで、まはつて、逆行した。まつすぐに港口へ。
「閉塞船の眞似だ。實際こんなもんだからなあ。」と誰か云つたが、つまりかうして何年か前に閉塞船が進んだのだ、彈丸と光射の中を、その日は暗く、波が荒れた、殊に最後の閉塞の時には暴風で各船連絡がとれなかつた。本隊からは中止の命令を出した相である。その傳達はやつと二三艘には屆いたが、とてもチリヂリの十何艘全部へ傳へることは出來なかつた。護衛の驅逐艦が既でに荒波すぎて付けなかつた。
少數の船は中途で返つた、然し大半はシケの中を遮（シヤ）二無二進

んで、友船と離れ、喚聲を上げ、或るものは港外遠くで既でに難破し、閉塞でも何でもなく、みんな死んだ。或る船はうまく港口へはいつた相だ。が閉塞して沈むと同時に誰もボートで返れる者はなかつた。その見込もなかつた。殘らず生きながら陸を目前に見て溺死した。或る者は敵壘へ切り込んで殺された。

兎に角最後の閉塞隊はみんな死んだ。死にゝ出かけたのである。暴風の中を。閉塞ではなしに。どうどの船が行動したかも明瞭でない、更に記錄がない。記錄を持つて返る者が誰もなかつた。そして閉塞はまるでうまく行かなかつた、と。

自分はブリツヂにつかまつて船が港口へ近づき、そこをよぎる間、かたくなつて見てゐた。かうして此所を通つた人があるのだ。戰時に、そして船を沈めて返る。誰も露骨に生きる氣はないであらう。

砲臺はすぐそこ、目の前にありありとある。あの白いベトンでかためたのがさうだ。あれが銃丸だ。あれから彈が出るのだ。雨のやうに。

何と決死であらう。決死すぎるであらう。

當時ロシヤの兵士は、日本の閉塞隊を神業と云つて、見て壘壘下へ朝打ち上げられた兵士の屍體を手厚く葬つたと云ふことである。その氣持はまあわかる。簡單に云ふと恐らく驚いたのだ。只閉塞隊の人の氣持は殆んどわからぬ。狂つてゐたと思ふ。それ以外の世の常の心理は、およそ人間ならば、あり得ない筈だ。自分はその現場を見て怖くなつた。恐らく露兵も怖かつたであらう。

「何しろ閉塞隊は成功はしなかつたが、戰ひの精神上に與へた無形の影響は非常なものであつた。」

と誰かゞ云つたが、さもあらうと思つた。自分は自分が閉塞に行く想像よりも、遥かの水平線から暗夜に何艘かの小さな舟が矢のやうに窮極の一つ――死――を問題外にした人間か屍體か分からぬ生きものをのせて飛んで來る。それが何回となくやつて來る。それを待ち受ける露兵の心理を思つて又、ぞつとした。「死すとも死さぬ魂」と云ふそのものであらう。もし戰爭が宗教であり、軍國主義が天國のおきてゞあるならば。

それなら人間は世にも呪ふ可き地上の害蟲だ。

自分は全く驚きを感じた。此の簡單明瞭な有る可からざることとに。

マリユスが火藥の樽へ火を近づける時にはその死を問題外にした感情、性格、生活に同感して融けて彼のシーンを想像したが、――想像して醉ひ、自分にもその血を感じたが――齊藤の汽船で港口を通つて閉塞船の人の死を越す一瞬の生活を感じた

時には、戦慄を感じた。マリユスのヒロイズムは人間にあることである。その性で無形の死以上のものだ。戦争にはそれが露骨に戯曲化して悲惨に暗黒に現はれる。且意識して悪に現はれ殊に閉塞船では全員團結して魔のやうに悪を越へる。

閉塞船が世に数へるとすれば、それが正確にまちがつてゐると云ふことだ。あつてはいけないと云ふこと、さうして死んだ蒙昧の時世の犠牲者が無数にあると云ふこと、未来はそれを如何しても無くさねばいけぬと云ふことである。

港口に永く封鎖紀念の碇形紀念碑が立つてゐるが、恐らく誰にもその意味に見えるであらう。智情ある人には。餘りに背景が濃厚で明確すぎる。理屈を付けて思ふにしては餘りに事實が悲惨すぎる。

世界の戦史にもないとだと云ふ。如何に戦局に利があらうとも人間を弾丸に代へるのはいけない。われ／＼は断じてそれに反對しなければいけない。それが今の時世には又ヒロイズムだ。

○

二〇三高地へは道が遠くうねうねとつゞいてゐる。それを馬車が進む。途中支那人街を通り、遊廓がある。遊女が盛装して窓からのぞいてゐる。亡國の無残な感じである。遠慮なくそれを日が照してゐるが、涙にかはき切つた眼のやうな熱さだ。

時々道に井戸があつて馬に水をやる。御者は汗光りで黒く、鐵佛の如く、馬も泳いだやうに濡れて泡が立つてゐる。道は凸凹で遠く、日中森閑としてゐる。ポケットの時計さへ如何かすると聞こへる。身體が煮へる音のやうに。山はまだらに青く、又赤く、大波のやうに起伏してゐる。次第に高くなる。

——或ひは然し自分は東鶏冠山への道と混同してかいたかしらん。どつちにせよ一體同じ苦しき山路である。戦時には露兵が堡塁を捨てゝ逃げた間道を今は傳ふのだ。之れは少くも道だ。堡塁の前面には道はないのだ。日本兵はそこを攻めた。

自分は白だすき隊の規約と云ふものを讀んだ。同志のわかる様に白だすきをかけ、突貫した。道なき正面から堡塁へ。見下ろしてねらひ撃ちにパタパタ撃たれる。我等は生還を期さず、とかいてある。隊長が死んだら何中尉、何中尉が死んだら何伍長、その他之れに準じ全軍の指揮に任ず。戦闘の中途退するものは「幹部に於て之れを斬る可し。」如何なる密集團に向ひ、同志少数なりと雖も、必らずその中に突撃せよとかいてある。うそでも想像でも計劃でもないのだ。現に此の規約を發布して、實行してみな殺しになつた。自分は二〇三高地の上から此所を攻めたと云ふ、その邊を見おろして、不快を感じた。決死隊の長に。

死ぬのが當り前、とれないのが又當り前である。王の頭へ無數のフをつきつけつきつけて、只うるさく思はせながらどしどし取られると同じ愚である。手になつてゐない。

「バカ野郎だ」

と僕は思つた。

少し面倒に、妄想がつきて來た。

死んだ者はいゝ迷惑である。

が、一所になつて死ぬ奴があるからそんな愚暴擧が又持ち上る。

自分は山上から見おろしてあたり一面に散亂したに相違ない決死隊の屍體を想像して見た。それはその邊にころがつてゐる無數の石と同じく思へた。そして思つた。君達はわざ〳〵死ぬ算段ばかりしてゐるのだ。そんなに死にたければどうも仕様がない。おつき合ひに死ぬ向ふの奴はどうも氣の毒だが。

そして自分には之れは無關係と思つた。

戰爭は眞面目に考へられるが氣狂ひは眞面目に考へられない。あきれるか驚くかはては悲慘に、滑稽になる。刺戟に麻痺が來る。氣分を入れかへに頭を振て山上を一まはり歩きたくなる。

何と寂しいいゝ風であらう、此所は。二〇三メートルあると云ふが、かなり高いのであらう。爾靈山としやれて名が付けてある。港口を初め旅順市街、その先きに緑の海、立派な老鐵山等、玩具のやうにキツチリと見える。その反對側にも海が見えポツンと島が一つ浮んでゐる。詩的な愛らしい景しきである。いつ此所に戰爭があつたかと思ふ。汗はどんどんとかはき、暑熱を忘れる。山から手近かの四邊には殘らずより低い山が凸凹して、成程之れと思ふ山頂は何れも人工を加へ、壁壘にしてある。此所をとられては全く旅順は全部、ねらひ撃ちである。(拔け目なく山頂に我が重砲兵觀測地と云ふ樣な標石が立つてゐるが。)それにしても、如何して歩兵の突貫でとらうとしたか。その他に道がないのか。結局何でとつたか自分は知らないが、この贊へ立つ山へふもとからぞよ〳〵上がつて來てはみんな撃たれる。石一つころげ落しても五六人は死ぬであらう。恐らく斷へず突貫したことゝ思ふ。死んでも死んでも死骸の影から斷へず又生きた兵士が現はれて夜晝此の山を圍んだと思ふ。そしてぞよ〳〵うごめき、銃を撃ち、わめいたと思ふ。不思議な蟻のやうに。自分はさう思ひ、見おろして、例へば自分が二〇三高地と同體である如く、その足の邊に皮膚病のバイ菌が一杯スキ間なく湧いた如く思つて、ぞつとした。

人間ごとではない。

(大正九年夏、大連――奉天にて)

樂屋裏に起つた不思議な話

東　花　枝

一

まだ、わたしが振分髪のころであつたから、あの事件も十年以上に過ぎてゐよう。それほどに、そのことがむかしの出來事であるのにつひきのふあつた異常のことのように、わたしには思へる。きつとわたしがこの世に生きてゐるかぎりは、そのことがらが或る種の黴菌と同じやうに、生生しく、不斷に、そして不思議な力を持つてわたしのからだにこびりついて働くにちがひない。と云ふのはそれ以後のわたしを仔細に反省してみると、その事件の幽靈が暗默のうちにわたしを操つてゐるからである。

一生のある時機に於て人間はほんの些細なことがらをも命にかかはるほどに重大に考へられることがある。ではこの事件もわたしにはやつぱりさうした類のものであらう。

すべてが夢見心地で、うつとりとしてゐた頃であつたが、そのことだけはわたしの印象がはつきりとしてゐる。そしてそのひとつを手繰ればそれに關連した情景があとからあとからと浮んで來る。

……陰鬱な雪國に春が來たと思ふ束の間に、またも重い五月雨が降りつづいた。そのあとに、天と地が一時に眞青になる若葉の頃であつたが、わたしは窓から往來を眺めてゐた。そこは黒板塀の續いた屋敷町であつた。そのころになると誰しもが感ずるあの初夏の靈感的な、それでゐて重々しい氣鬱が滿身のなかに深く澱んでゐた。陽のあるうちは元氣に飛んで跳る愉快なわたしが、夕暮になると思慮深い娘のつゝましい態度に變つてゆくのであつた。少女から娘になる。さうした意識が自然とわたしを沈ませ、悲しませた。自由な遠慮のない國から、窮屈な居心地の惡さうな大人の間仲入がどれほど恐しく、辛く感じたことであらう。その氣持に反抗してわざとはしやいでも見た。しかし結局はわたしを憂鬱に、益益感傷的に陷し入れるばかり

であつた。

その黄昏れもわたしは大勢の兄妹たちの群から離れて、窓際に佇んだ。暗い屋敷町の上を鬱然として蔽ふてゐる一ともとの大銀杏の葉かげの隙間から、ちらほらと星屑が薄青い光を放つてゐた。ふとコーラスがきこえて來た。わたしは耳を傾むけた。銀の張りのある涼しい聲が、闇のなかに美しく流れてゐる。つややかな潤いのある聲が、きつと娘たちであらう、細く、低くそしてうねりうねる小丘のやうに、押へきれぬ感情をそのものにたくして、嘆きのやうに、夢見るもののやうに彼方の町角から忽然と湧いて來た。

その一と群がわたしの窓下の黒板塀のほとりに來たときに、わたしは驚いた。まだ宵ながら街燈の光りにほんのりと浮び出た男は、まがひもなく音樂教師の森田であつた。そのまはりには三四人のわたしと同じほどの年頃の娘がゐた。そのひとりは同級生のてる子であつた。わたしは彼らの姿を認めた瞬間になにがなし見てはならぬものを見た時のやうな薄暗い心持になつた。教師と云ふものに對して一種の偶像を懐いてゐたわたしは、戀人同志のやうに夜を樂しさうに歩く態度に、憎みとも嫉みともつかぬ異樣な感情のこみ上げて來るのを感じたのであつた。

森田は半年ばかり前にわたしの女學校の音樂教師として赴任して來た。そして、そのほかに中學と、私立の女學校とをかけ持してゐた。東京の音樂學校を出たと云ふことであつた。そのときのわたしの眼にも、三十とは出ない、物優しい美しい男に見へた。輪廓の整つた、どちらかと云へば線の細い女のやうな顔であつた。それはよく舊派の女形のなかに見うけられるやうな型である。言葉つかひもちようどそれのやうであつた。どこまでも内輪に、つゝましかつた。往來で挨拶したときでも、きつとそれらの特徴を對手に見せた。そしてそれらは男生徒のあるものからは嘲弄視せられ、女たちからはあまりに自分達に類似してゐるので、かへつて煙がられ、氣味悪がられた。實際、女に欲しいほどの美しい襟筋と皮膚とを持つてゐたのであつた。しかしそれ以上に彼の眼と口とが魅力に富んでゐた。彼に反感を持つたり、敵意を懐いたものすら、彼の面前に立つたときには、星のようにかゞやく眼や、花瓣のやうにあかい口唇に惹きつけられるのであつた。そして彼から放たれたあとに、ほつと吐息をついた。彼らは何故に森田の前に立つたときさうした従順な自分であるかを疑ひ、怪しむだ。

やがて女たちのあるものは蟻のやうに、彼の周圍につどひ始めた。それればかりではなかつた。美しい少年たちもさうであつ

た。そして、そこに彼らは一種の氣分をつくつた。嚴肅にして侵すべからざる神聖な一角が崩れ始めて、それらとは全然反對なあるものが浮動し始めた。たとへば、池中の金魚の一群が、先頭に立つもののあとに從ふて、鮮かに、潑剌として浮遊するのにも似てゐた。

「小野さんの家は、こゝですね。」

森田の聲がした。

「えゝ、さうです。呼んでみませうか。」

わたしは彼等に面を合せるかはりに素早く窓から首を縮めてしまつた。

「小野さん。小野さんはゐらつしやいませんか。」

てる子の聲がしたが、わたしは返事をせずに息をこらしてゐた。

「小野さんはきつと夜出られないんでせう。」

窓下の往來で、なにかひそひそささやくやうな聲がしてゐたが、やがて通り過ぎて行つてしまつた。四五間行くと、絹を裂くやうな笑聲がその群から起つた。

その次の朝、わたしは音樂教師の森田に出會つた。それは學校に行く道すがらで、町端れの、そこから畔道にさしかかるところであつた。昨夜のことがあるのでわたしはなにか罪を犯したもののやうに少しばかりあはてゝ挨拶をした。すると彼は丁寧にわたしに頭を下げた。その擧動には微塵ゆふべの面影はなかつた。夢ではなかつたかと思ふほどに、わたしは彼の眞面目らしい後姿を見送つた。やゝ小刻みに赤靴を大地にかるく踏みならしながら、瀟洒な姿を運んでゐた。

その日は學校でまた彼と面を會すやうな機會がつくられてゐた。ちようど當番にあたつてゐたので唱歌教室に掃除のために行つた。玻璃窓から中をのぞいて見ると、ピアノの傍に森田やてる子やその外顔見知りの上級生たちがゐたので、氣負がしたのでわたしはすぐあとに引きかへした。つれのものが來るのを待つために校庭の青草の上に腰をおろした。どうしてあんなにひそひそ話をしてゐるのだらう。わたしは胸のなかで一と群を不思議に思つた。

すると、扉の外に立つたわたしを氣づかない筈の音樂教師はいつの間にかわたしの傍に來てゐた。

「けふはあなたの當番ですか。」

「えゝ、さうです。」

「さうですか。それはご苦勞ですね。」

彼は、かう云つて傍から離れやうとしない。わたしはつれが早く來てくれればいゝと云ふやうななにかなしせつぱつまつた

壓迫を感じ始めたので、それきり默つて一心に青草を見詰めてゐた。

「ゆふべあなたのおうちの前を通つてみたのですが、靜かでいゝところですね。わたしのところは、あなたのうちから近いのですから遊びにゐらつしやい。この五日には音樂會があるからぜひてる子さんと一しよに來て下さい。」

わたしが顏を上げたときに、傍に彼はゐなかつた。そしてわたしの待つてゐるつれがむかうから走つて來るところであつた。彼の細身な影が夏の陽にいりつけられながら、教室の方へと消えて行くのを、わたしは見た。

二

わたしと音樂教師との接觸はこれほどの程度のものであつた。一定の間隔を保つて月日のながれてゆくまゝに平行に進んで行つた。そしてある月日のところまで來たときに、戰慄すべき犯罪が音樂教師一味のものたちによつて行れたのであつた。

わたしは最初、てる子につれられて彼の家に行つた。彼の家は市の中央をながれるH川の上流にあつて、それは殆んど町端れとも云ふべきほどの閑靜な小丘の上にあつた。そのあたりには老松の幾株かがあつた。欝然として雲に聳え、晴れた日と、曇つた日とによつてそれぞれその趣を異にするほどの雅趣を持つてゐた。

もしわたしが音樂教師の森田が、この家の主であると云ふことを知らないでこゝに連れて來られたのであつたなら、きつと外國人の住家にちがひない、と想像するであらう。それほどに内部の裝飾が異國化されてゐるのである。いや、それよりも日本趣味にかぶれた外人の氣まぐれな部屋飾りと見た方が適當であるかもしれない。ことに二階の八疊の部屋の如きは、質素で簡單で、しかも均齊のとれた裝飾法である。H川に面した床の間の紅殻色の壁には獨逸製の等身大の大鏡が銀河のやうに懸けられてゐる。そして部屋の眞ん中には黑檀の圓卓が据へられてあつた。それと、それにふさはしい細身な椅子が適當な位置に三四脚並べられてあるばかりであつた。無論、壁の周圍には緑色のカーテンが垂れさがつてゐるのである。やゝ黑味がかつた青い帷を引くと、硝子障子を透して、晝なれば陽の光が、夜は夜で月の光が流れ込むのである。そして鏡面には刻々に千變萬化する浮雲のさまは勿論のこと、明暮に過ぎてゆく船人の姿さへうつし出されるのであつた。

わたしはこの思ひ切つた部屋飾りに奇異の感に打たれた。

「なぜこんな妙な部屋をこしらへるのであらう。」

と怪しむだ。そして普通の音樂教師としてはその收入と家との懸隔があまりに飛び放れてゐることを感じたのであつた。

しかし、それは暫くたつとわたしにすぐ分つて來た。

彼は、非常にこの部屋を好いてゐるらしかつた。この部屋にたいていゐた。時とすると鏡の前に立つことがあつた。灯のつくころしづかに薄化粧してゐるのである。それはちようど女のやうに丹精に、一と刷毛ごとに美しく、彩色されてゆく自分の顏を打ち眺めて時の過ぎるのを忘れる程に餘念がなかつた。さうかと思ふと、川に向つて煙草をくゆらしてゐることがあつた。

わたしはいちどこの部屋で芝居を見た。それは彼が脚色したものであらう、始もなく、終りもなく、筋もないものであつた。たゞ音樂につれて、原始的な姿態で色彩の强い布切をつけたまゝで、美しい少年と少女がうごくのであつた。無論、硝子戸も閉められ、青いカーテンが四方の壁に引き廻されてあつた。そして鏡面にだけそれらの奇妙な姿がうつし出された。

わたしはこの莫迦らしい光景を見て、あつけにとられた。音樂教師の人格を疑つた。その群のなかに長くゐればゐるほど、わたしはある氣詰を感じた。やゝもすれば彼らの埒外に放り出されさうな氣持を味はねばならなかつた。しかしわたしを除いたほかのものたちは、——そのなかには顏見知りのものがたくさんゐた。てる子も勿論そのひとりであつた。——お互に心の奥の底までも許し合つたやうな氣安と、快樂とを、わたしなどがうかがひ知ることが出來ない程度に味ひたのしんでゐるやうに見えた。

さらに不思議なことは音樂教師の態度であつた。彼にはもうあの處女のやうな弱弱しい優しさは見られなかつた。學校で見かけるやうな生溫い擧動のかはりに、がらりと打つて變つて男性的な彼であつた。どこか鋭い、そして圖太い性根がちらちらほの見えてゐた。それがかへつて彼の本質的のものであるらしくぴつたりといたについてゐた。わたしはなぜ森田が平生そんな假面を被つてゐるのかと驚き、怪しんだ。そして好奇に燃えた眼で、ちようど舞臺の美しい娘役者が樂屋で鬘をかぶつたまゝあぐらで長煙管を銜へたのを眺めるやうな意味で凝視した。

彼と、その周圍のものたちの背後には、なにか自分などには想像することすら出來ないやうな秘密が醸されてゐるにちがひないと、わたしには思へた。

「あなたは、あなたの課目のなかで何が一番好きです。音樂はどうです。さうでせう、誰でも音樂は好きです。おそらくこの世のなかに存在するところのもので、音樂ほど人間をたのしませ、夢見心地にさせるものはありますまい。詩でも小說でも繪

でも人間を洗ひ清めてくれることは同じですが、音樂ほど恍惚境には誘ふてくれない。よしそれはほんのわづかな時間ではあるけれども尊い瞬間です。わたしたちはこれを生活の上に持ち續けてゆく工夫はないものでせうか。」

森田がどうしてこんなことを云ふ氣になつたのか、わたしに云つた。その意味がどんなことであつたのか、そのころのわたしには合點がゆかなかつた。たゞ彼がわたしに好意を持つてゐることだけは推察が出來た。けれども人形芝居を見るやうに、わたしはある距離を飛び越へてより以上に彼に接近する程の興味や昂奮を感じて來なかつた。

ある日、わたしは學校から歸途、その足で森田の家に遺物（わすれもの）をしたのをとりによつた。その日は學校に彼は出て來ない日であつた。家にゐるのだらうと思つていつものやうになかには入つて行つた。ばあやもゐなかつたので、わたしは、そのまゝ二階に上つて行つた。そして梯子段の中ほどまで來たときに、ふと氣づいた。二階には人の氣配がするのである。わたしはすくんだやうに立つた。そして自分の不注意を悔いたのであつた。

部屋のなかではきゝ馴れぬ女の聲がしてゐた。それもたゞごとでないやうな語勢であつた。そして相當の年輩の女であるやうに想像された。で、わたしはそのまゝ階下にそつと降りて來た。

その途端、荒々しく部屋の戸があけられた。なかから女がころび出るやうに出た。それを男は無理矢理に押し止めやつとしてゐた。

「そんなことはづぶの素人娘に云ふことですよ。わたしなんかていのいゝおもちやにされたやうなものさ。だからわたしの勝手にするから放して下さい。わたしと切れても罪は罪だから……」

「いや、それが曲解と云ふものだ。人目がうるさいからと云つたまでのことだよ。」

「けつきよくわたしにここに來るなと云ふことでせう。いゝとも、誰が來るもんか。たのまれたつて嫌だよ。」

女が、梯子段からかけ下りやうとするのを、「待て」と云つて、男が、うしろから抱きかゝへやうとした、その時、階下で靑くなつてふるへてゐるわたしが眼についたのであらう、森田は、女をはつと放してしまつた。

わたしよりも一さう靑く、ヒステリカルにふるへてゐる女はわたしを見ると、ぎよつとしたらしく、そしていくらかあはて氣味に落着うとしてみなりをつくろつた。想像したやうに相當の年輩で、着物もくすんだじみな縞柄を着てゐた。わたしの興

に素早くうつつたものは、左の指の大きなダイヤモンドの指輪であつた。

わたしは簡單に、自分がけふ來た理由を述べて、かへらうとすると、森田はわたしに用があるから二階にあがつて待つてゐてくれと命令的に云つた。

二階の部屋は煙草のけむりで濛々としてゐた。圓卓の上にはすひさしの金口の煙草が灰皿のなかに投げちらされてゐた。

「君は、いつからここに來てゐたね。僕らの話をきいたらうね。」

森田の口から今までなかつた君とか僕とか云ふ強い言葉が出たので、わたしはさらにちぢみ上つてしまつた。

「いゝえ、ちつともききませんでした。」

「さうですか。ぢや誰にもさつきの女のことを話さないで下さい。あの人には少しヒステリーの氣味で、なんでもないことにあんなに氣狂のやうになるのですから。それでわたしは大變迷惑してゐるのです。」

秋の日の暮れ近いなかを、わたしは恐怖に充ちていそいで我家へかへつた。道すがら靑いやうに凄く光る眼が、たへずわたしを威嚇するやうにちらついてゐた。

それからわたしはばつたり音樂教師の家に行かなくなつた。

三

やがて冬が來て二學期の試驗が近づいて來た。

暮れ方のことであつた。門に佇んでゐるとわたしの家からすじ向ひの淺川の屋敷のなかゝら、中學に通つてゐる息子が、いそいで傍にやつて來た。

十六か七かの眉目秀麗な美少年であつた。彼の祖先は代々S家の家老職をつとめた。この町では名門の家柄であつた。

「あなたを今晩いゝところにつれて行うと思つて誘ひに來たんだけれど、いきませんか。僕と一しよに。いちど森田先生のうちに行つて、みんなと待合せることになつてゐるのだから。」

淺川も、やはりてる子と同じやうに音樂教師の家で、わたしは度度會つてゐて顏馴染であつた。

「だめ、だめ。わたしは夜出られないのだから。それにあすは試驗だから行かれないわ。」

「だが、ちよつとぐらひはいゝだらう。僕は先生にたのまれて來たんだから、うちには散步するとでも云つてくればいゝぢやないか。ね、ちよつと顏さへ出せばいゝんだから。」

「それにこのごろあまり森田先生のところへ行きたくないんだもの。」

「困つたなあ、僕がどうしてもあなたをつれて來るやうに云ひつかて來たんだから、……。」

最初はさうでもなかつたが、淺川が執拗にわたしを誘へば誘ふほど、ふと氣味惡い豫感が湧いて來て、どうしても行かないと云ひ出した。

で、とうとうわたしは門のなかにかけ込んでしまつた。

その夜の十二時頃でもあらうか、鐘の音がした。わたしはまだ机によりかかつてゐた。耳をそば立てると警鐘である。亂打する響が夜陰にこもつて物凄く響いて來るのであつた。窓際によると中央をながるゝH川より西にあたつて町の一角に紅蓮の焰が舞ひ上つてゐた。そのあたりの空は夕燒のやうに赤く爛れてゐた。

「今ごろどうして火事になつたのであらう。」

はげしい胸騷きをさせながら、わたしはかう呟いた。

翌日の新聞はさらにわたしを驚かせた。火事は放火であるばかりでなく燒跡から慘死體の女があらはれたのであつた。その怪記事は刺激の强い文字を持つて三面に滿されてゐた。

女は吉澤辭香と云つた。まだ三十には二三年の間があつた。四年ばかり以前に米國からかへつて來たのであつた。その町に居を構へるやうになつてから半年たつか、たたないかの短日月であつた。從つてかの女には親戚らしい親戚もなく、たゞ一人の年老いた母親は、四五日前から鄕里にかへつてゐたであつた。年若い下女を使つてかなり贅澤な生活をしてゐた。人の噂によると、米國人の妾であつたのが、その男とともに東京に來て住むやうになつた。男はかなりの年よりで不意の死によつて莫大な遺產を讓りうけたのであつた。だから自然と人目にたつやうなくらし向きではあつたが、男の影などは一向に見えなかつたさうである。

當夜も下女の話によれば、夕方から活動寫眞でも見て來るやうにとの主婦の許しを得たので、彼の女はいそいそと出掛けて行つた。十時半頃かへつて見ると、表戶はぴつたりと閉められてある。のぞくと中はまつくらで灯の光はない、戶を叩いたけれど寂として答へるものがなかつた。で仕方なしに自分の知り合の家に行つて泊つたとのことであつた。彼の女が外に出かける際にも女主人の辭香には何ら異つた樣子は見うけられなかつた。いつものやうに彼の女の部屋である庭に面した六疊で、本を讀んでゐたまでだとのことである。

流石に敏腕を誇る警察署でも、巧妙な犯罪に微塵の手懸りも得ないので呆然とするばかりであつた。その人たちの觀察によれば物盜の仕業ではないと云ふことだけは斷定されるのであ

た。何故なら金品類はそのまゝになつてゐるらしいから。また痴情の果てだとすれば近隣の眼に男の姿が觸れなければならないし、下女にも氣付ない筈はないから。そこでやつぱり五里霧中に事件はさ迷はなければならないのであつた。

わたしは放課時間に土手の枯草の上に腰をかけて、てる子に話しかけた。

「あなた、ゆふべ起きてゐたの？わたしびつくりしたわ。あの時、女の死體が燒けてゐたんだと思ふと、氣味が惡いわね。」

「わたしゆふべ森田先生のところに行かなかつたわ。頭が痛んでしかたがなかつたから、宵から寢たの。だから、今朝までちつともしらないの。」

てる子の話はわたしの問ひからかけ離れてやゝ辯解めいた口調であつた。まだ頭が痛むのか、蒼い顏をしてゐた。眼がひからびたやうに釣り上つてゐた。

わたしは母の使で、夕方叔母の家まで行かなければならなかつた。ゆふべの生生しい事件があるので、內心怖はくて仕方が無かつた。で、急ぎ足で家を出て、暗い屋敷町から、明い本通りに出ようとする四つ角のところに來た。すると外套の男と、マントを着た少年と、女とが、ひとつにかたまつて密談でもするやうに立ちすくんでゐた。わたしの跫音がすると、その群はひとつのものが三つに劃れたやうに三方に飛びのいた。そして三方から、ぢつとわたしを凝視した。わたしは不安で堪らなかつたので走り過ぎようとした途端、それが、森田と、前の家の淺川の子と、てる子であることが分つた。しかし、なぜかわたしはいつものやうに打溶けて言葉をかけられないばかりでなく、殺氣だつた氣分を彼らから感じたので、そのまゝかけり過ぎた。またその夜、三人のうちの誰もが、わたしに言葉をかけやうとはしなかつた。石像のやうにつ立つたまゝわたしを睨めつけた。

わたしはふるへあがつた。何か恐しいことがあるのではないかと思つた。

奇怪な事件は市民に恐怖を與へたまゝ、一個の謎として葬り去られやうとするらしかつた。日の經つに從つて益益事件は迷宮に入るらしく、その目あてさへつかないのであつた。單純なわたしたちは最早その事件のあつたことさへもさして氣にとめないほどに時が經つた。かくて、春を迎えた。わたしが進級證書を握つた日のことであつた。

そのころ音樂教師の森田は學校に出て來なかつた。あとから思へば、あの事件の前後から病氣と稱して缺席勝であつた。そしていつたい何處にゐるのか、わたしはそれすらも氣づかないでゐた。それが突然、東京に於て戰慄すべき放火殺人犯人とし

て檢擧されたのであつた。それと同時に淺川とてる子も共犯者として捕縛されたのであつた。

品のいゝ白髪頭の淺川の祖母が卒倒したほどに――彼の兩親は早くから世を去つてゐた――また、てる子の母親が悲嘆のあまり投身を企てたほどに、わたしは茫然としてしまつた。音樂教師の周圍をとりまいてゐた謎がはつきりととけて來た。いつか見た女が、靜香と云ふ女らしい。あの時の斷片的な言葉から綜合すれば音樂教師の犯罪は、誰よりもわたしにはわかるやうな氣がした。それにしてもその夜、わたしが淺川の息子に誘れて行かなかつたことをどれほど神に感謝したことであらう。なぜ、彼らがわたしを誘つたのか今だに合點が行かない。行けばきつとわたしもその仲間のひとりであつたであらう。

わたしはこのいきさつを一と言も父と母に話さなかつた。

「あいつは人間の部ぢやない。畜生だ。あんなものに大切な娘をちよつとでもまかせてをいたのが恐しい。學校も學校だ。そんな不德漢を教師としてやとふと云ふことは何と云ふ失態であらう！。」

そのころわたしの父は縣會議長をしてゐたので、非常にその事件を憤慨してゐた。だから誰にも默つてゐた。そしてそれらの話が出るごとにひやひやしてゐた。あの時、わたしの足が右にむくのが、左にかはつてゐたら、おそらく現在のわたしではないであらう。そのころ自分が地の上に生きてゐられるのが不思議に思えた。そんな氣がすることがあつた。

けれどもなぜか、わたしは音樂教師を、いちがひに世間が云ふやうに憎めなかつた。

その後、わたしは思ひもよらぬところで彼と出會つた。(彼は死刑になつてゐる筈である。淺川もてる子も有罪と決定したのであつた。)それがあるのに！わたしは不思議に思つた。しかしそれは彼の説明ですぐ解つた。そのころのわたしは境遇も思想もかはつてゐた。しかし、彼はそれ以上にかはつてゐた。むかしの彼はあるかなきかのやうに、影のやうな男であつた。そして夢物語のやうにそのころの事件を話してくれた。――

四

音樂教師と偶然出會つたのは、それからずつとのちのことである。わたしがミッションスクールを出て、目白の寄宿舍に一年ばかりゐた、そのあとのことである。

そのころは、B協會の目覺しい新劇の旗上げ時代であつた。わたしもその群のなかにゐた。そして、また、いくどか一座を組織して轉々として月日を過してゐたのであつた。

ミッションスクールを出るころから、わたしの思想はいちぢるしく變つて來たのであつた。そしてわたしの個性がはつきりとあらはれたのであらう。わたしはことごとに周圍とははなはだしい不調和を感じ始めた。それと同時に、あの自由らしく見える外國をどれほど多く慕ふたことであらう。とにかく、わたしが女優を職業として選んだのは、女の職業のなかで、比較的自由で、潑溂としてゐるからであつた。そのころから音樂敎師のことが時々わたしの胸に浮んで來るのであつた。彼の言葉が思ひ出された。

そして年月がたつた。かねて、いちどはかうもあらうと豫側してゐたものの、あたらしい芝居の衰亡はあまりに早や過ぎた。それはいろいろ理由があらう。とにかく、あのS子の變死したときから、それがいちぢるしく目立つて來た。あゝ何と云ふ兇年であらう（ことに女優には祟り年であつた）それから暫くしてT子が狂死してしまつた。それがどれほどあたらしい芝居の氣運をそいだことか、全然致命的な最期を與へたと云つてもいゝくらひである。それが過言であるなら、ひとまづ新劇の幕を閉ぢたと云へよう。それがために、かつては新劇にあらざれば芝居でないと云つたほど全盛を極めた各各の劇團は、次第に都會から偏土に落ちて光なくその日を過さねばならなかつた。

わたしの一座も多分に洩れなかつた。そのころ滿韓地方を打つて廻つてゐたが、いたるところ怪しい興行ばかりであつた。みじめな日が一日一日と迫つて來るやうに見えた。それでゐてわたしはなほ思ひ切れなかつた。今にどうにかなるだらうと思つてゐた。

「なあに、どうせこのみちに迷ひ込んだ日にあ、どぶ泥にめいり込んだと同じでさあ、浮びあがらうたつて、めいり込むばかりですよ。わつしなんざあ、若いときは座頭で打つて廻つてゐたもんだが、年をとればこの始末でさあ、それでゐてぬけ出られないんだから因業な生れつきですよ。」

六十を越へた下廻りのおやぢが、こんな述懐めいたことを云ふ日があつた。

とうどう義仁府に來たとき一座は座礁してしまつた。幾日か食ふや食はずの日が續くことがあつた。

それで、わたしはたゞひとり平壤まで行つたのであつた。もう先乘の男のいつかへつて來るのか、來ないのか、あてにならないことをあてにしてぼんやりとやいやをしてゐるほどの餘裕がなかつた。であるから平壤から一座を買ひに來たときに、ほとんど無條件とも云つていゝほどにわたしは先方の相談をうけ入れたのであつた。で、兎に角、具體的な契約は一應太夫元に會つ

てからすることにして、その男と一しよに出かけたのであつた。

その時である、彼の音樂教師の森田と出會つたのは。そのF劇場で、それも灯のつく頃であつた。

最初、あつと、わたしは小さく呟いた。しかし次の瞬間には以前のわたし自身の平靜にかへつてゐた。彼はついと通り過ぎた。どこかで見かけたやうな男であると、思つただけであつた。四十格好でもあらう、色の淺黑い、鉛のやうな皮膚をした男であつた。眼窩の奥にどんよりと光つた眼が氣味が惡かつた。しかし、鼻だけが高くて品がいゝ、それがわたしをあつと云はせたのであつた。どこかでそれを見かけたやうに思つたからであつた。楽屋裏でふいとすれ違つたばかりであつたから見直す餘裕がなかつた。

わたしは楽屋裏から勘定場の方に行つた。そこで太夫元と相談をとりきめたのであつた。

「今やつてゐる芝居の景氣はどうですか。いゝ方ですか。」

「いや、どうもお話にならないほど莫迦な目にあつちまひましたよ。もう歌劇團には音をあげましたよ。」

どうせ、まがひ物だとたかをくくつて安く買ひ込んだのだけれど、かうまでひどいものだとは思はなかつた。と愚痴をこぼしながら、太夫元は、土間のがらあきの椅子を指さした。

なるほど隨分ちやちなものらしい。衣裳も鬘も小道具も汚れきつて、ふた眼と見られないほどのものであつた。そして舞臺はまるでおもちやの安人形をぶちまけたように、雜然としてゐて、舞臺監督がどこにあるのやら、統一がとれてゐなかつた。

「一年ばかり前から、この邊をうろうろしてゐるんだが、あす打ち上げたら滿州の方に行くさうです。だが、どうせこいつあ難船もんでせう。」

ふと、わたしはヴァイオリンを彈いてゐる男の横顔に眼がとまつた、それに見覺がある。きつと最前楽屋裏の薄暗いところで出會つた男であらう。だが、それ以前にわたしの印象にあるやうである。秋の暮と云ふのに、まだ夏物らしい粗末な洋服を着て、髪をなであげてゐる。さて、わたしは、さらに驚いた。その男のヴァイオリンを彈く手つきが、音樂教師の森田にそつくりである。

「彼は死刑になつてゐる筈だ。それでなくともあかるい土地には棲息することの出來ない男ではないか。」

と云ふ不審をさへ、その手つきはめちやめちやに打ち壊して森田にちがひないと、わたしに信ぜさした。

習慣は恐しく、また悲惨なものである。面貌が土のやうに變り果ててゐやうとも、どれほど年月がそのものを腐蝕してゐや

うとも、その男のくせだけはどうすることも出來ないものと見える。いま、彼が彈いてゐる、手つきや、態度はながひ月日を遡つてむかしの彼を彷彿させるに充分であつた。

わたしは念のために、樂屋番に、その男の名前を訊いて見た。果然、森田さんだと答へた。

音樂教師と出會つたのは、かうした機緣に於てであつた。わたしは、そして劇場の近所の西洋料理屋には入つて行つた。このあたりでよく見かける、あくどいペンキ塗の色彩でむしむしするやうな二階の部屋に落着いた。森田は最初きよときよとした不審さうな態度で、わたしを見まもつてゐた。で、わたしが、十年ばかり前の小野の娘であることを説明したとき、「あゝさうか」と云ふやうな感激のない表情をして椅子についた。

二三杯ウイスキーをひつかけると、彼は、やつと人心地がついたやうに、さびしい微笑を浮べた。

「小野さんか。さうか。さうですか。だが、よくわかりましたね。」

「去年の秋、出て來たんです。二度の大赦で命をひろつたわけですが、いち度は宣告をうけてから五日目でしたが、自分では死んだ方がいゝ、と思つてゐた。だが、ここであなたに會うとは夢にも思はなかつた。今はあの座のヴアイオリン彈きで、これから滿洲まで行うと云ふのですから、もう日本にもかへられないでせう。」

彼はかう云つてウイスキーのコップを飲み干した。

そしてまとまりのないことを話し出した。そのなかに、あの事件のことも述懐めいた話しぶりで話し始めたのであつた。

五

その日もわたしは横濱に行つたのでした。海岸通りから、櫻山あたりの夕暮をぶらつくのが莫迦に好きなものですから、東京に住んでゐながらわたしは氣がむくとよく出掛けたものです。同じ都會でも東京とは異つて、あすこはなんとなく、生生（なまなま）した不氣味さを感じます。ことにあれから少しばなりそれたところにある支那町でも、黄昏れ頃から、その町特有の人に迫るやうなひいやりとした、薄暗い情調が漂ひ出す。犯せば、犯すことが出來る。何か、きつと犯罪が行れてゐるにちがひない。そんな氣持がわたしにはするのです。そして歩きながら往來を通るさまざまな人種の顏色や、姿態を見るのが好きでした。頭のなかでかうした空想をえがくだけで、實際、わたしに氣の弱い男でした。だから猶更小さい時から空想力が發達してゐたのかもしれません。その頃、音樂學校を卒業したばかりで、まだ下宿住

ひの氣まゝな生活でしたからわたしは自由でした。

その日、横山から下りてグランドホテルの前を少し過ぎたところに、トムス商會と云ふ洋服商がある、今もあるでせう、あすこで、わたしは偶然あの女に出會つたのです。かう云へばあなたは大抵想像がつくでせう。あゝ靜香と云ふ女かと。さうです、靜香に出會つたのです。この女とは、わたしが學生時代に知り合ひだつたのです。それもほんのわづかの間でして、女はモデルを商賣にしてゐたのです。ところが三四年たつた今日見れば素晴しい服裝をしてゐ　ではありませんか、無論洋服です。靜香は、前のグランドホテルに泊つてゐると云つた。その口ぶりから推せば勿論ひとりでないことはわかりきつてゐます。三日ばかり前に入港した船で米國からかへつて來たこと、今後東京に家を持つこと、そしてその時は遊びに來てくれと云ふことを簡單に話してきかせました。で、わたしは自分の住所をしらせてやりました。

かうした妙な機會から、また、女とたびたび會ふやうになつてしまつたのです。會つてゐるうちにだんだん女の素性が分つて來た。靜香の今の夫とも旦那ともつかぬ男は、加州生れの米國人であることや、それがやがて六十にも手の屆きさうな老人で、金持であることや、彼の女にかなり溺れてゐることなどが分つて來たのです。妙なものでそのことが分つて來ると、わたしはあまりいゝ氣持ではありませんでした。惡いことを空想にこそえがいても、根が善人で臆病者でしたから、なるべく彼の女から遠ざからうとしたのです。しかし、わたしに引かへて女は案外大膽でした。

ある日こんなことを云ふのです。

「あなたと夫婦になるつもりだから、早くあの爺さんが死んでくれゝばいゝ。だから、わたしはこのごろあの男に不攝生なことばかり強いてゐるのです」

わたしはその冒藥をきいてさへ嫌な氣持がするのに、女は、わたしを誘つてわざわざ横濱あたりまで藥をさがしに出かけるのでした。女の慘忍や、無謀に戰いたわたくしは、さらに、わたし自身の意氣地のないことを憐れまずにはゐられませんでした。女を嫌ふ心持が次第にたかまつて來るにも拘らず、會へば心からその企に賛成したやうな風を裝ふのです。きつとひた押しに押して來る女の勝氣に弱いわたしは押し潰されたのでせう。そのころ多額の金を女から貰つてゐたことを告白します、そして淺間しい自分を耻ないではゐられません。

それから三年ばかりたつて、男は不意に死んでしまひました。それは順當な死にかたであつたのか、女の企みが功を奏したの

か、わたしは知らない。わたしは切に前者であることを望んだのです。しかし、意地の悪い妄想はお前が殺したんだ。お前が殺したんだ。」とわたしを脅すのです。

そんなうちにも女は平氣で芝居をやつてのけたのでした。恰も世の中で一番愛する人を奪ひ去られたやうに、男の友人や、加州からはるばるとやつて來た息子の前に泣きくづれたのです。それでも金のことになると、その息子もかなり敏感でした。女に注意深い眼を見張つたのです。そつとA興信所に、女の平生の行狀から、彼の女の周圍の調査を依頼したさうです。これはあとからきいたことですが。

さう云ふ形勢でしたし、それに前にも云つたやうに女に對して一種の恐怖病を懷いてゐたわたしであつたから、幸ひ就職口があつたのを口實にして、あなたの方の學校に行つたのです。あなたには說明したところで、わたしの經驗したやうな氣持は分らないでせうが、とにかく、女に別れてひとりになるとわたしは急に生れ變つたやうな男になつてゐたのです。殺したのは自分ではないと思ひながらも、いつしか自分は殺人を犯した男だと云ふ自信――自信では少し妙ですが、そんなふてくされた氣持が湧いて來たのです。そしてわたしは出來るだけ思ひ切つたことがやつてみたいと思ふやうになつたのです。こんなことを空想することはあつても、實際、現實に考へたことはそのときが始めてでした。それからのちのことはあなたが知つてゐるでせう。とにかく、わたしは教師として、社會の一個人としてなすべからざることを平氣で行つたのでした。

それからまた女のことに話がかへりますが、その時の氣持から云へば、わたしはもう靜香が鼻について來てゐたのです。だから、なるべくならそのまゝに一生別れてゐたいと思つたのです。けれども、それからふた月ばかりして彼の女は、すぐわたしのところにやつて來たのです。

始めの豫定通り、男の遺產の半分は彼の女のものになつたのでした。そしてわたしと一しよに住むつもりで來たのでせうが、まだほとぼりがさめないから、と云ふ口實のもとにわたしは彼の女と別居したのです。ありていに打明けて云へば、いざこれから公然にふたりで暮すとなると、わたしはますます女の缺點ばかりが眼について來たのです。だいいち、靜香は九州の女でした。だから熱情的ではありますが、海に面した女共通のあらつぽい感情が、わたしの肌合に合ひませんでした。それに教養がなくて趣味が下劣なくせに、高尚ぶつたり、權識ぶつたりするのです。そしてわたしに對して高慢な態度を持するやうになつて來出しました。最初は對等であつたのが次第に主人の位置に

なほるやうになつて來たのです。こゝでまたわたしの恥を云はなければなりませんが、それであるのに、彼の女から學校の月給の三倍分も金を貰つてゐたのです。

しかし、わたしは以前のやうな從順なわたしではなかつた。靜香から見れば隨分とげとげしたわたしであつたでせう。わたしは出來るだけ自分の趣味に生きたいと思つてゐたし、長く生きる必要はないから、夢のやうに面白く暮したいとねがつてゐた。だから、ちよつとでも自分の感情を礙げたり、氣持を損ねたりすることが隨分癪にさはつたのでした。それが女の心にいくらか感ぜられたのであらう。

ある日、さうでした。あの時、あなたが階下に來てゐて、わたしたちの爭論をきいてゐた筈です。あのやうに、頑固に、執念深く、わたしと同居することを迫つたのです。朝から來て、あの頃まで口說き立てたのでした。わたしは始めのうちは優しく、いゝ加減になだめたり、さとしたり、機嫌をとつたりしてごまかさうとしたのでしたが、あいつはどうしてもきき入れなかつた。終にはあらぬことをヒステリカルに口走り出したのです。あいそがつきたとか、薄情者だとか云つて罵り騒ぐころまでは、わたしは我慢してきいてゐたのですが、そのことを口走つたときに、わたしはかつとなつた。不思議なことに女ののど首が、小さく、紙ぎれのやうに白く、わたしの眼にうつてゐるのです。顏だの、手だの、足だの、またはからだなどはちつとも見えないで、そこばかりが眼の前にちらつくのです。あとで氣がついたときに、まさしくわたしは彼の女を絞め殺さうとしてゐたらしかつたのです。わたしの眼が、さうした徵候を呈して來たときは、わたしは一種の夢遊病者です。

あの時以來、あなたとは學校よりほかでは顏を合せませんでしたね。それからだいぶたつてあなたを呼びにやつたことがあるでせう。卽ちわたしが殺人を犯した當夜でした。それをお話ししなければなりません。

靜香は、あれ以後ますます彼の女の惡い、わたしの一番嫌な性格をさらけ出すやうになつて來出した。それはヒステリーの發作から來る一時的の傾向からでもあつたからでせうが、一つは嫉妬からでした。

彼の女はたびたびやつて來出した。そして今まであまりわたしの周圍に注意を拂つてゐなかつたのが、今度はわたしを監視するやうな態度であつた。わたしはそれがひどく氣になつたのです。どうかそれだけはやめてくれとねがつたのです。ところがどうでせう。あなたを疑つてゐるのです。「いつか見た女はちつとも來ないぢやないか。」と云ふのです。それを辯解すれば、ま

た、女の常としてうるさく根堀り葉堀りきかれるのが堪らないから、默つてゐたのでした。すると何と云ふ女でせう。すつかり自分の妄想に囚れてゐるのです。わたしはあの女がこの世に存在してゐなかつたら、どれほど幸福であらう、と思つた。そしてわたしの憎惡が極度に達したときに、わたしは彼の女を自分の腦裡のなかで慘殺する愉快を味つたのです。

あなたを呼びにやつた當夜も、わたしはあんなことをしようとは夢にも思つてゐなかつた。たゞあなたを靜香に紹介してをきたいと思つたのです。無論、わたし自身の巧利的な立場からですが、さうすれば女もいくらか氣が鎭まるだらう、自分も助る。そこで彼の女に話したところ、すつかり贊成してくれたのです。手順をきめて待つてゐたのです。しかし、あなたは來てくれなかつた。そして、あのてる子と淺川と云ふ少年をつれて行つたのでした。

夜の八時頃でしたが、わたしは一たんふたりのものとともに靜香に別れの挨拶をして玄關に立つたのでした。云ふまでもなく彼の女は不興でした。それは覺悟の前でしたから、いゝ加減にきり上げてかへらうとしたのです。すると、靜香はいきなりわたしの懷中に手をさし入れて、腕輪を奪ひ取つたのです。男にそんなものは不必要ではあつたが、外國製で型や彫刻が珍しいので、やらうと云つたから貰つたのでした。「お前さんなんぞに」こゝで彼の女はお前さんと云つた。その言葉、卑しくわたしの頭にがんと響いたのです。「お前さんなんぞにこんなものをやるものか、やればあいつにやるのにきまつてゐるんだから。」かう云つて奪ひ取つたまではいゝが、そいつを思ひきり、庭石に叩きつけたのでした。

わたしはついと立つて緣側に出た。氣を沈めるために便所には入らうとしたのでした。ところがどうでせう、そのわたしが、素早く手洗鉢のなかに手拭を浸して、用心深くあたりを見廻してゐるではありませんか。冬のことですから前栽を越へた隣りの雨戸は堅く閉されてゐて、灯が、かすかに洩れてゐるばかりです。

ぬれ手拭をすつかり絞り上げると、わたしは何氣ないていを裝ふて玄關に行つた。靜香はわたしの外套を持つたまゝ、ふてくされて立つてゐるのです。わたし自身にも不思議なほどに、わたしは彼の背後に立つや否や、眼にとまらぬほどの早さで、手拭を女の首に捲きつけた。と同時にけたたましい悲鳴をわたしはきいたのです。淺川もてる子もあつけにとられて茫然としてゐたが、女のばたばたさす足を見ると、無意識にかけよつて兩足と抑へつけた。やがて、女のからだが、わたしの手に重た

く感じたので放すと疊の上に頽れるやうにすべり落ちた。やがて四五枚の疊が死骸の上に積み重ねられると、その上に石油をふりかけた。これらは瞬間のうちに、殆んど無意識になされた敏捷な仕事であつたのです。

わたしには夢か空想のなかでよく見かけるやうなものでした。ふたりのものも案外大膽で沈着な態度でした。一種の昂奮狀態で、言はば憑れたものの心理であつたのでせう。

その時でした、表戸をはげしく叩く音がしたのは。きつと、下女がかへつて來たのであらう、わたしたちは息をいそめてゐた。それから二時間ばかりの後に火を放つたのでした。

それから四ケ月目に東京であの腕輪のために捉えられたのでした。何かの因縁でせう。わたしが靜香の家を立ち去るときにふと足に觸つたのが、それです。それを東京の質屋に入れたのが足のつき始めでした。今から思えば愚かな者です。外國製でもつとも異つた細工のしてあつた腕輪ですから、すこし氣をつければ、怪しまれるものも道理です。

あの夜、あなたの來なかつたことは、あなたにとつて何よりも幸福でした。しかしあなたが來てくれればあんなことはなかつたかもしれないですね。……

南滿洲の本溪湖から無名の葉書が舞ひ込んだ。その後の音樂教師にちがひない。今、彼はどうしてゐるのであらう。

（終）

帝展刻下の諸問題

坂井犀水

一　帝展を繼續する諸問題

文展は變じて帝展となつた、そして世人の觀聽は依然として此官展に集まつて居る。一般民衆は勿論、美術家も亦官業と云ふものに對して迷信を抱いて居る間は、帝展の威力は保たれる

であらう。デモクラシーの高唱せられ、個人主義の主張せらるゝ現代に、官展の威光が斯くも全盛を極むるは、一つのアナクロニズムではあるが、帝展に對する刻下の諸問題＝紛爭、反抗、註文＝なるものは、多くは此官展の威光に對する迷信に起因することは、一種の皮肉とも見られる。

近來日本美術院や二科會や國畫創作協會の諸展覧會も亦帝展と相對立するものとして認めらるゝに至つたが、之等も初めは文展と拮抗すると云ふところに其權威を認められた主もなる理由があつたのである。併し官展以外之等の私展の權威が高まることは、美術界に取つては喜ぶべき現象であるが、國家の威力を以てせる官展にして、之等を過し去らしめしは包容力の乏しかりしを示すものである、既に其爲に實質に幾分の缺陷を生じ、活氣ある要素を幾分去勢せられたる文展乃至帝展は、官業の故を以て能くその威風を保ちつゝあるも、具眼者は其評價を割引して居ることは事實である。それに拘らず、一般民衆及び一部の美術家は今猶は過當に之を重視して、諸種の問題を醸生しつゝあるは奇なる現象である。

或は審査實權に對する暗鬪、或は木彫部分離の運動、或は日本畫出品者一部の反抗、或は工藝美術部新設運動等、幾多の問題は、刻下帝展の內外に纏繞して居る。

第二回帝展の開期近づくに就て、之等の懸案はその解決を促されて居る。その解決は久しからずして發表せられるであらうが、その決定の如何に拘らず、吾人は吾人の所信を發表して識者の考慮を煩したいと思ふ。そは帝展及び帝國美術院は我美術界に取つては、多大なる信頼を荷ひ、重大なる使命を帶びて居るのであるから、輕々に看過するに忍びない故である。

二　審査實權の紛爭

傳ふるところに依れば、帝國美術院會員中、第一回帝展に於ける審査委員の審査振に不滿を抱き、同會員等も亦審査委員中に交りて審査に干與せんことを要求しつゝありて、屢ゝ同院協議の議題となりつゝありと云ひ、之に對して審査委員等は、美術院會員の干渉を受くるを喜ばず、多少防禦的手段を講じつゝありと云ふ。

之は實際起りさうなる問題である、それは帝展成立の當初から早晩起るべく運命づけられた事項であつたのである。

蓋し鑑別審査は帝展に於る中心問題である。鑑別審査は帝展の活殺を支配する樞要なる作用である。然るに現在の制度では帝國美術院は帝展の主催者でありながら、その會員は審査の實

務に與るを得ない、唯審査委員の半數を選擧する權能を附與せられて居るに過ぎない。美術院會員は多年文展審査の實權を掌握した人々であるが故に、斯く傍に審査の實權を奪はれて傍觀の地位に置かれたことは不本意であるに違ひない。能ふべくんば審査の實權を掌握して、その抱負を實現しやうとするのは寧ろ當然である。

併し審査委員の側から見れば、既に審査の實權を委任せられてその抱負を實行したのである、今更美術院會員の干渉を受けてその所信を貫徹すること能はざるが如きは、堪へ難きところであらう。之も亦無理からぬことである。

本來の理想から云へば、美術院會員と審査委員とは相提携して鑑別審査の實務に當るのが當然であらう、それは必しも實現し得ざることではない。當初から美術院會員の或數が審査委員を兼ぬべきであつた。然るに現在の制度に於ては、それを實現せしめない爲に、兩者互に相反目するの姿となつて居る。

それは制度の罪であり、またその制度を産み出した當局の意志の錯誤の反映でもある。そを如何と云ふに、文部當局が帝國美術院を設置したのは、之をして我美術界最高の權威たらしめ、我美術界を指導せしめ様と云ふが如き正大なる動機からではなく寧ろ文展の積弊——主として日本畫部の不評——を改革することが主たる目的であつたので、審査委員の更迭を企てた結果、前審査委員の處分に窮し、養老院を設けて之を祭り込むの趣旨から、帝國美術院を設けたるものと推察すべき形迹がある。然かゝ表面は優待の形をなし、相當の——審査委員半數選擧——の權能をも與へた姿になつて居る。

此の權謀的窮策が既に錯誤であり、不徹底であつた、今日の矛盾を來し衝突を惹き起したのは當然過ぎることである。

三　帝國美術院の本質的缺陷

若し帝國美術院をして我美術界に於ける最高權威とするが本來の趣旨であるならば、何故に會員の數を前審査委員の一部及び老作家の少數のみに限つたか、該院をして眞に有力なる機關とする趣旨であつたならば、何故に有爲なる壯年作家及び識見ある評家を加へなかつたか。

見よ、今日の帝國美術院對帝展審査委員の反目は即ち老、壯作家の阻隔から生じて居るではないか。帝國美術院會員とはその大部分は功成り名遂げたる過去の功勞者で、——中には未だ老朽の域に入らざるものもあるが——將來を指導するには稍時勢の潮流に遠ざかつて居る傾がある。帝展審査委員は多くは年壯氣鋭將來に囑望せられつゝある作家——中には稍衰頽に傾い

て居る向もあるが——である。兩者互に意志疏通せず、識見扞格するは寧ろ當然である。

帝國美術院をして單に養老院的裝飾機關たらしめんとならば、何にも言ふには及ばないが、若し其存在に意義あらしめ、相當の權威ある行動をなさしめやうとするならば、其實質を形成すべき會員の選擇に就ては充分の考慮が拂はれなければならなかつた。同院は成立の際既に本質的缺陷があつた。

其點に於て缺陷の最も甚しきは彫刻部である。同部に於ては木彫家彫塑家各一名宛を有するのみであるが、今日彫刻界の大勢は彫塑が主要の地位にあるので、自然彫塑家の地位が重要となると同時に、其一人が殆んど專制的權威を有つことゝなる。審査委員選擧其他に於ても一人の權能が重大なる關係を有つことは弊害を生じ易い。文部省に半數選任權があるから弊害を生じないと言ふかも知れないが、現に彫刻界にはそれを不安として居るものが尠くないのである。畢竟帝國美術院に對する作家間の信賴の甚だ厚からさらんとするは掩ふべからざる事實である。

加之、今日自由思想の勃興する時代に於て老若新舊の反目乖離最も甚しきは免れ難き數である。老作家少數のみ、集團たる帝國美術院に對して多數少壯作家が充分の權威を認めないのは當然である、況んや其設立の動機が不純であり、其成立の施設が不徹底であり、其實質たる人選にも不備の點がある、該院の權能輕るくその實力に何等認むべきものゝないのは已むを得ない。

同院會員の態度を見るに、概して自治的自覺なく、多く文部當局の指導に甘んじて居る傾がある。每月例會を開いて協議を重ねて居ると云ふが、過去一年間何等決定したる事項あるを聞かない。

唯審査委員半數選擧を不滿として全部選任權を得んとの希望と、昨年帝展の鑑別審査を不滿とし、審査干與の權能を得んとの希望とが議題となりつつありと漏聞するのみである。斯くてゝ美術界の重望を荷ふに堪ゆるとすべきか、疑はしい。

併し帝國美術院會員が審査に與るべからずとする現制は固執するに及ばないと思ふ。現制は文展改革の爲に一時の權略として文部省の案出したものであるが、現に審査委員選任權を與へながら、審査に與る資格を與へない理由はない。勿論同院會員と雖ども審査委員としては平等の權限の下に立つべく、又會員中より委員を選任する場合には、院の面目上比較的時勢に通曉したる理解ある人物を選出するだけの德義は守らるゝものと信じ得ると思ふ。

但し同院としては成るべく後進の爲に途を開き、干渉を避け雅量を示すを美徳とする、若し彼の新聞紙上に發見するが如く門下に落選者を多く出されたるを憤慨して審査に干渉せんと欲すと云ふが如き醜陋なる事實あらば、吾人は寧ろ現制度を變更せざらんことを希望し、又特に寡頭の老大家のみを有する彫刻部の如きは、全然審査委員に一任するを得策と信ずる。

四　永久性ある審査委員會を設けよ

審査委員全部選任權を帝國美術院に與ふることは、今日の如く少數老作家のみを以て同院を組織する間は、一には時勢の要求に副はざること、二には偏頗に流るゝ虞あることに於て、不適當である。他の半數を文部省に於て選ぶ現制度も亦變則たるを免れないから、吾人は新に永久性ある審査委員會を設けて之に年々實務に當るべき委員の半數を選擧するの權を與ふることを勸めたい。

唯だ憂うべきは、作家には餘りに黨派的感情が強い爲に公平を缺くことがないとは言へない、されば評家を交へて調攝する必要があるのであるが、何故にか文部省は兎角評家を疎外する、作家も亦不便なるが故に之を喜ばない。そこで變則ながら當分文部省が幾分の干渉權を有つのは已むを得ないかも知れぬ。

現制度に於ては審査委員の任期は一年にして、恰も被傭人扱を受け、一年後の任免は全く他の權力の下に置かれて居る。其爲に多年繼續して審査委員となつて居たものも、一朝任命を受けなければ、僅に無鑑査出品の特權を與へらるゝ外は赤の他人となるのである。之は文展以來の陋習であるが、甚だ輕蔑したる取扱と謂はねばならぬ。

之を改めて永久性ある審査委員會を組織して自治的權能を付與すべきことを勸める。即ち審査委員並に推薦を受けたるものを會員とし、帝展に關する建議權を與へ、毎年審査の實務に當るべき人員は會員中より半數を選擧することゝするのである。若し會員外に適任者ある場合は之を會員に推薦し、同時に審査委員に選擧すればよい。斯くしてこそ審査委員を人らしく取扱ふことゝなり、公平なる——少くとも合理的なる選任を見ることが出來るであらう。

五　第一回帝展の功過

昨年の第一回帝展に於ける鑑別及審査に於て、文展に比して最も顯著なる變動ありしと認められたるは日本畫部であつた。其爲に從來文展の特選並に之に准ずべき階級者に落選を出したること多く、隨て一部の反感を激發せしめた。併し此果斷なる

鑑別は果して有效であつたか、有害であつたか、之を共後の日本畫壇の情勢に照して考察するに、決して有害と認むべからざるのみならず、一般に邦畫界の潮流を一變せしめ、淸新の氣風を生じしめた傾さへもある。

蓋し帝展日本畫部昨年の鑑別は、型式打破を目標とし、因襲的技巧を排斥し、新意的傾向を採擇した、随て稍突飛と思はるゝもの、稚拙と思はるゝものも、苟も新傾向を有するものは必ず之を採擇した。

共畫壇に及ぼした影響は、獨創を尙び新意を競ひ、自然に依り畫風自ら淸新となり、技巧に習熟せるものも、創意なきは顧みられない傾を生じ、たとへ個性の發露は未だ充分ならずとも技風の新らしきは歡迎せらるゝとゝなつた。行き詰まつた邦畫壇に聊か一生面を開かしめやうとする氣運に向つたことは事實である。

此急轉的なりし鑑別に憤激し反抗して一二の邦畫團體は帝展を分離して組織せられた、所謂文展型を支持せし常連の作家等が發憤して帝展に對抗せんとすることは却て喜ぶべき現象である。

然らば帝展邦畫鑑別の改革は失敗ではなかつたと謂ひ得る。

此改革を不滿として干渉を主張する帝國美術院會員があるならば頑冥と謂はねばならぬ、左樣なる干渉は斷じて排斥せねばならぬ。

吾人は曩に美術院及び二科會を分離せしめ、國畫創作協會を離反せしめた文展の偏見を陋としたものであるが、今回自由畫壇などの反抗に到つては、帝展の爲に惜しむよりも、寧ろ同畫壇等の發憤の爲に喜ぶものである。

洋畫と彫刻とは左程顯著なる變動はなかつた、之も亦帝國美術院の干渉を要しない。

帝國美術院會員が審査の實權を要求するならば、それは公明なる合理的制度を完成する爲に許すべきであつて、斷じて私見我執の實現を希ふ爲であつてはならぬ。

新審査委員の選任は遠からず發表せられねばならぬ、その詮衡は宜しく公明であらねばならぬ。偏頗と專橫との誹を受けない樣に帝國美術院に望むと同時に、文部省が特に聰明である樣に切望する。

六　木彫部獨立の運動

近來木彫家の或者は、帝展の彫刻部より木彫部を獨立せしめんと運動し、目下帝國美術院の一議題とせられて居ると云ふ。或は之は南次官の主唱であると云ひ、森院長の賛成を得たと傳

へられる。假令主唱者が誰であつても、運動者が誰であつても此運動は不合理である、時代錯誤である。

思ふに木彫は何故に彫塑と分離せねばならないか、木彫は果して彫塑と別種の鑑賞法を要するか、審美的原理に於て特殊の取扱を爲すべきものであるか、否、決して然うではない。況んや近年彫塑家にして木彫を試みる者も多く、又木彫家に於ても取題、手法共に舊來の型式を脱却しつゝある者も尠くない。

特に在來審査委員の鑑識力に於ては、彫塑家は彫刻の原理に通曉し、随て木彫の鑑賞法を理解せざる者はなきに、木彫家は木彫的手法に慣熟するも、其餘業は變則的にして、彫塑の原則手法等、特に近代藝術に通ぜざる者もある。されば木彫家に彫塑を審査せしむるは不適當なるも、彫塑家に木彫を審査せしむるは不合理ではない。

果して然らば今日に及んで木彫分離を企つるは何の必要に依るか。或は何等か爲にするところある私的偏見か、又は黨派的感情かに起因した運動であらう、公明なる條理からは許すべからざることである。

或は云ふ、木彫は日本固有の技術であるが故に特殊の發達を期すべきものであると、一應道理らしく聞ゆるが、決して然うではない。日本木彫の特色たる長所は却て彫塑家が深き理解を有つて居る、審美的原理に照して鑑賞することを知つて居るからである。特に怪むべきは近時木彫家の作品には純日本的技法を棄てゝ、材質の異りたる石彫の鑿痕などを木彫に試むるが如き無理解者もあり、今回の運動に加盟せりと傳へらるゝ作家の作品には寧ろ彫塑的手法の痕を木彫に試みつゝあるものも尠くないのを見れば、運動の眞意は測り難いものがある。

新聞に依れば、此運動に伴ふて、審査委員自薦運動も行はれて居ると云ふに至つては滑稽である。假に木彫部を獨立せしむるとすれば專門的審査委員の問題は必ず伴ふて起るから、斯る裏面の消息も絶無ではあるまい。帝國美術院が、若し此運動を是認するならば、其無識を暴露するに過ぎない。

因みに言及したいことは、帝展彫刻部の審査に就てゞある。昨年同部の審査が徒らに紛糾を極め、結局一名の特選を出したるに過ぎざりしは失態であつた。吾人はその内情を聞知するも公表に忍びないが、偏見私情を固執して後進を推奨するに吝なるは公職に在るものゝ愼まねばならぬところである。同部の審査が條理に依らずして感情に偏した形迹は掩ふべからざるものがある、同部審査委員の改選は急務と謂はねばならぬ。此事は帝國美術院及び文部省に向つて愼重なる考慮を煩はす。

吾人は文展開設以來、後進の推奨に吝にして幾多の俊才を文

展以外に逸し去らしめたる、彫刻部の審査振りを遺憾とするが故に特に之を云ふ。

且つ審査委員を擧ぐるには審査に適する人材を選ぶことを主限とすべきであつて、優賞者被推薦者必しも悉く審査委員たるに適するものでない、審査委員には技能以外に鑑識と頭腦とを要することを忘れてはならぬ。

文展當時、彫刻部審査委員の選任に、低級の受賞者が優賞者を差し置いて擧用せられたことがあつた、審査に適任の故ではなく、木彫家であつた爲であつた。頗る依怙の沙汰と思はれた。斯る情弊は再びすべきではないが、既に成績の優秀なる以上は受賞の前後に拘泥せず、適任者を選ぶことを方針とせねばならぬ。帝展事業の擧否は半ば審査委員の人選如何に係る。その選任は最も愼重を要す。

七　工藝美術部新設運動

工藝美術部を帝展内に新設せんとの希望は嘗て國民美術協會から文部省へ建言し、其後東京美術學校出身者の團體たる工藝美術會から帝國美術院へ建議した。文部省にても、帝國美術院にても、未だ解決を與へない。

工藝美術と云へば世人は直に純美術以外の應用美術を聯想するであらう、併し工藝美術には低級なる應用美術以外、別に美術家が美術的動機に依つて制作し、偶ま表現の媒材として工藝の形を選びたる美術品がある。斯の如きは純美術品として取扱はるべき價値あるものである。

總ての繪畫彫刻が必しも美術にあらずして工藝的價値以上に出でざるものもあり、之に反して所謂工藝品にして美術的價値を具うるものもある。此意味に於て帝展は工藝美術を拒むべき理由はない。同時に建築部をも設けることの必要をさへ生ずる。

當局者も、理由に於ては之を首肯するも、實行上、即ち(一)鑑別の標準、(二)審査委員の人選、(三)陳列の方法等に就て困難を感じて居ると傳へられる。併し帝國美術院會員並に帝展審査委員中の工藝に對する理解と趣味とを有する人々に鑑別審査を擔任せしめることゝすれば、第一第二の困難は解決せられる。第三に到つても審査委員中に之を適當に處理すべき適任者を得ることは容易であらう。唯鑑別の標準は嚴重に美術的資格を具備する作品に限り、寸毫も假借するところなからしめなければ忽ち低級なる工藝品の展覽に墮せん恐れがある。此鑑別が峻嚴に守られ得る限り、工藝美術部及建築部を併設することは至當である。

八　帝國美術院本來の職務

現今帝國美術院の實務は、帝展開設を以て殆んど唯一の事業として居るらしい、併し同院にして我國美術界の最高機關である以上之を以て能事了れりとなすべきでないことは論を竢たない、幼稚なる我美術界に取つては幾多の講究せられ施設せられねばならない事項がある。同會員がその職分を自覺して奮勵事に當らんことを希望する。徒らに文部省の施設に隷從してその頤使に甘んじ、何等積極的自覺的に企圖するところなきが如きは同院の存在を意義付ける所以ではあるまい。

試に二三緊要の事項を擧げて見れば、

先づ廢殘の陳列館を改築することである。廢殘其物の化身たる竹之臺陳列館は、既に久しく美術陳列館たるに堪へさるではないか、折角帝展を開設するも、相當の陳列館を改築せしめることさへ盡力しないとあつては、會員等の美術發展に對する冷淡を責められても言ひ逃るべき途はあるまい。

次は帝展に奬勵賞金制度を開始することである。會員は毎年一名乃至數名の優秀なる才分ある作家を選拔して之に研究資金を賞與するの途を開くことである。後進を誘掖しその天分を伸長せしめることは先輩として名譽の地位に立てる會員諸士の當

さに大に努むべきところである。彼の佛蘭西のアカデミーに於ける羅馬賞に類似したる留學制度は是非とも我帝國美術院の行たねばならぬものである。其資金の如きは、政府に請求するが當然であるが、民間篤志家の寄附を受くるも亦一方法であらう。若し能ふべくんば恩賜賞金を仰ぎ奉るを得ば、奬勵は一層光榮を帶びて有効の度を高めるであらう。

帝展を初め廣く美術界を通じて優秀なる作品を買上げて他日現代美術館を開設するの準備を爲す事も必要である。從來文部省の買上は必しも優秀の作品に限らず、僅かに豫算の一小部分を割きて手頃の作品を買取るに過ぎない。そして折角買上げた作品も保管宜しきを得ずして早くも汚損し去るが如き弊は速に改善の方法を講ぜしめることが肝要である。一例を云へば、故寺崎廣業がエポツクメーキングの傑作と評はれたる谿四題の如きは、本年遺作展觀に出陳せられた際、誰かその損害の慘怛たるを慨嘆しなかつたであらう。斯の如くんば折角の買上も寧ろ大なる罪惡である。若し受賞者の所藏に歸して居たならば、斯くも無慘なる損傷を蒙らなかつたであらう。我美術史上を飾るべき作品に對して敬意と愛惜とを有する者は、速にかゝる無責任なる取扱に對して改善の方法を講ぜしむべきである。差當り東京美術學校若くは帝國博物館に委托して大切に保管せしめ

ても、現在の取扱には勝りはしないであらうか。

其他國際展覽會の開催、古美術館及現代美術館の設立、古美術の探究、美術的社會教育の施設等、數へ來れば、同院の爲すべき事項は際涯を知らないが、今悉く列擧する遑がない。

聞くところに依れば、陸奥伯の主宰する雨潤會は黑田子を介して研究費壹千圓を美術院に寄附したさうで、多分大分縣磨崖石佛研究費に充當せらるべく審議中であると云ふ。雨潤會が率先して此有益なる寄附の先例を示したことは洵に喜ぶべきことである。

帝國美術院が有益なる施設を企つるに就ては相當の資金を要するは論ずるまでもない、差當り年々相當の豫算を請求せねばならぬ、同院を創設したる文部大臣が、基本金並に年額を與へないことは解し難い、院は進んで之を請求すると同時に、院長及會員は成るべく民間篤志家の寄附を勸誘するが好い。

それに就ても、帝展の收支を獨立會計とし、其收益を以て、院の事業費に充つることは速に實行せらるべきである。美術展覽會に依て得たる收益が、從來悉く國庫に沒收せられることは不合理である。之は當然美術上の施設に用ゐらるべきものである。勿論其以外院の事業費年額が政府から支出せられねばならぬ。

豫算請求、寄附勸誘の如きは美術家に最も不得意の事には相違ないが、我美術界に於ける最高の權威であり、唯一官設の機關であることを自覺して、熱心を以て他を動かすことが肝要である。切に院長及會員諸士の發奮を希望する。(八月八日)

文身研究の興味

寺田精一

一、文身と日本

我が邦は文身の最も發達した國として、歐米の學者から頗る多くの興味を以て見られて居る。時にはそれが野蠻民族の一表

徴として、時には南洋あたりに住む未開人と祖先を同じうするものとして、又時には技巧豊な藝術的特性の一として、其の他種々な意味から注意されて居るのである。

古事記の神武天皇のところに「黥利目（サケルトメ）」とあるは、顔に黥文を施したのであるといふから、文身に關しての我が邦の記事では、最も古いものであらう。後漢書の倭人傳には、「男子皆黥面文身、以其文左右大小別尊卑之差」とあるが、これは今日勢力を得て居る日本人を指したのではなくて、恐らくは當時本州地方に其の勢力を得て居つたアイヌ族をいふたのであらう。何となれば景行記の二十七年に、「東夷之中、有日高見國、其國人男女並椎結文身、爲人勇悍　是總曰蝦夷」とあつて、如何にも文身して居るものを、物珍しげに書いて居るからである。かくて平安朝時代にも奈良朝時代にも鎌倉時代にも、亦其の以後に於ても文身に關した事實は少いのである。喜多村信節の文身についての論に「ここには天正・文祿の頃、異樣の出立（いでたち）する惡徒も多かりしかど、文身のさたも聞えず、其後種々の俠客ありしも、猶其事見えざれば、專行はれしはいと近きことゝみゆ」とあるから、三百年以前には未だ餘り見られなかつたのであらう。然るにそれから百年許り降つて、延寶・天和の頃の事實として『關東俠客傳』に「淺草神田川に鐘彌（つりがね）左衛門といへる者、極めて立派なる男の、其頃にて入（い）ぼくろ大きなるは珍らしかりけるに、横筋かひに肩より南無阿彌陀佛と大文字彫付たり」といふて居る。即ちこの頃には幾分か存在したことが知られるのであるが、更に數十年を經て寶曆年間の『浮世草子』には、所謂入ぼくろする所を置いて、中には日屋などが肌をぬいで居るのに一心といふ文字や渦卷などの文身をしたのがある。けれども複雜なものや大規模なものは、猶未だ殆んど見られなかつた。而して文身が最も盛に行はれるやうになつたのは、今から百年許り前の文化・文政の頃からで、天保・嘉永の頃が全盛期であつたのである。

このやうに我が邦に於ける文身は、何人も知るアイヌや琉球や伊豆の嶋々で行はれて居た外には從來餘り多く行はれて居なかつたもので、それが一般的に人の目に觸れるやうになつたのは、近い德川時代からのことである。從つてこれを以て、我が邦の一般人を野蠻民族の一表徴としたり、南洋土人と同一系統であるといふ唯一の若しくは有力な論證にはされないのである、けれども文身の技巧は我が邦に於て最も發達し、最も規模の大なるものがあるのは爭はれぬことであり、今日も尚これが頗る多く行はれて居ることは、吾々の社會の一研究事實として、頗る興味あることであるのである。

のみならずこれが人類の頗る廣い範圍に渉つて行はれて居り、其の上に種々な原因から行はれて居ることは、一層吾々をして文身なる事實に感興を起さしめるのである。

二、肉體の變形

人類が、自然から與へられた肉體に色々な變化を加へて、自ら美しいと感じて居るやうに改修して行かうといふ要求は、様々な方面に於てこれを見ることが出來る。殊に兩手の自由に使用される人類は、可成りに未開な時代から、この肉體改修を試みて居る。而して其の多くの場合が美化であつて、吾々の強い欲望の一つである性的競爭上の優越に向つて行はれて居る場合が最も多い。かかる改修から最も容易なものは先づ毛髮である。そこで毛髮を不自然にすることは、或はそれを適當な形式に整へることは、最も廣く行はれたことであつた。紀元前五百年頃のギリシャでは、女は陰毛と腋毛とを青銅の剃刀で剃つたり毛抜で拔いたりランプで燒いたりしたものであるが、ローマ時代になると毛拔藥といふ粉藥が發明され、それに軟膏とを交ぜて腋下につけて腋毛を拔いたものである。其の他、稍々手數のかかることでは耳朶が多く耳輪や耳飾の爲めに變形され、又鼻や脣も特殊な装飾が附せられた場合が少くない、恰も今日の多くの民族に於ても見られるやうに。

けれども大自然の力から常に特殊な畏怖と威壓とを受けて居る人類は、殊にそれが自然を制御し得る程度の文化を有して居ない人類は、自己に最も近いもの即ち自己の身體に特別な變化を與へて、そこに自己の安全や種族の繁榮や生活物資の豐ならんことを希つたものである。かの北部西班牙あたりで發見された洞窟例へばカスティロ洞窟などの岩壁には、紀元前幾千年乃至幾萬年前の原始人類の繪畫が遺されてあるが、其の中に多くの手の形が赤繪具で畫かれたのがある。其の中の手形の多くは一本又は數本の指の失はれたものが少くない。これは一部の學者の説明するやうに、何等かの願望を達せんが爲めに、故らに失はれたものであらう。複雜な宗教的思想をも有せず、又發達した文明をも持つて居なかつた當時に於て、先づ特殊な象徴的意味や魔術的意味から、最も大切な自己の肉體に或種の變化を加へたことなどは、今日の吾々の社會に於て見られる種々なことから推しても、當然あり得べきことである。

かかる意味から、私は最も興味あるものとして文身を擧げる。文身とは皮膚の上に或種の技工を加へて、紋様・記號其の他を畫くものである。我邦では文身を普通に「ほりもの」といひ、劄青・刺青・劄刺・點青・膚劄などの文字が當てられて居る、

徳川時代には下卑の呼び方として「もんもん」ともいはれた。けれども剳靑とか刺靑とか黥靑といふのは、皮膚の中へ刺し入れられた墨が、表皮の薄膜を隔てて靑く見えるから、殊に靑といふ文字を用ひたのである。けれども私がここで文身といふのは、以下に述べるやうに、もつと廣い意味でいふのである。

三、文化と文身

文化の發達と肉體の裝飾とは、極めて密接な關係を以て居る。何となれば肉體の裝飾といふことは、吾々が社會生活をする上に種々な必要を持つて居るから、人智の發達は必ずや何等かの形式で、肉體の裝飾に向つて進められて居る、即ち肉體に直接に加へられる紛飾料の如き、又それに間接に加へられる服裝料の如き、其主なる例である。けれども文化の發達が、或場合には人類の自然的生活から遠ざかる程進んだものとされ、故らに不自由を忍んで人爲的生活に入り、それを以て誇りとするやうなことは少くない。かかる點に禮儀が起つたり習慣の起つたりして居ることも少くない。尤もそれが極端に走るやうになると、自然に歸れといふやうな叫びが高調されるのであるが。

私がここに問題とした文身の如きも、かかる意味に於て其の發生的關係の見られる場合がある。即ち自然から得た肉體の上に文身を施すことが、換言すれば他の動物のなし得ない技工を加へることが、恰かも吾々の社會で汗を流しながら身に衣服を纏つたり、風の吹く毎に飛ばぬ用心をして手で抑えながら頭に帽子を戴いたりすることが、文明人の表徴であると考へられて居るやうに、多少の苦痛を經驗しても、動物より優れて居るとの自尊心の滿足を買ひ、人たるの喜びを得ともするのである。



第一圖甲

元來人類が、自らの希望の下に文身を試みたことは極めて上古のことであつて、弓や槍や斧などに限られた原始的器具の使用をして居つた石器時代に、既に其の存在を認めることが出來る。

我が邦の石器時代の遺跡からは、他國に其の比を見ない位に興味ある土偶が發見されて居る。固より其の制作は極めて素樸的なもので、それからして確定的のことをいふことは出來ないけれども、其の現はされた狀態から見て、私は其の文



第一圖乙

身らしいものをここに二つ示さう。即ち甲は常陸國稻敷郡大須賀村大字福田にある貝塚から發見されたもので、頭部のみとなつて居るが、其の額や眼の下や頰などに見られる直線や曲線は、これを文身と見れば見られないことはない。又乙は陸奥國西津輕郡館岡村大字龜ケ岡で發見された扁平卵形のもので頰から下顎へかけて不規則な曲線を然かも殆んど左右相對の形式に引かれて居る。これ等の線は、土偶面の眉や眼や鼻や口以外の部分を、單純に塲塞ぎに畫かれたやうな意味の輕いものではないと思はれる、恐らくこれ等の土偶の制作者自らか、又は其の近い關係にある人々がこのやうな文身をして居つたのであらう。殊に現今生存して居る未開民族の顔面の文身もそれと比較して見て、一層この感が起るのである。我が邦の石器時代が大凡紀元前幾年位に相當するかは、容易に判定することの出來ぬ問題であるが、少くも太古の昔に於て、文身の行はれて居つたことは殆んど爭はれないのである。

けれども文化の程度の低いことは、自らの肉體を裝飾したり美化したりするのに、赤裸々な上で變化や改修が加へられて居る。然るに文化の進んだものになると、恰かも支那の婦人の纒足のやうに、歐米婦人のコルセットのやうに、間接な現はれ方を肉體に試みて居る。かかる文化の方面から來る相違は、吾々に衣服と裸體との關係を注意せしめる。

四、衣服と裸體

衣服の發達は決して簡單に述べらるべきものではないが、寒暑雨雪等の自然的要求から起るものと、裝飾儀禮等の社會的要求から起るものとを、主な原因として觀るに異論はない。この二つの要求から、初めには獸類の皮や草木の葉などが其のままに用ひられたのであるが、然かもこの要求の極めて强く存することは、人類の初期の文明の主なものとして、布を織ることに努力せしめるに至つたのである。即ち現存する未開の民族に於ても、他の文化の極めて低級であるに拘らず、織物には比較的に多くの知識と技工とを持


第二圖

つて居るのである。吾々は石器時代に於て、既に布から製せられた衣服の存在を、其の製作品に於て見るのである。即ち貝塚などから發見され土器の布目に於ても、又土偶の衣服に於ても、明かに知ることが出來る。例へば、第二圖の陸奥國西津輕郡館岡村大字龜ケ岡小字甁山で發見された石器時代の土偶の如きは、合せ目を見せた衣を着け、膨らんだ股引を履いて居り、衣の地には布を抑しつけて得られた布目を現はして居るのである。

かくの如くに衣服は、人類の文化の極めて初期より發達して居るのであるが、それが飾身的要求の深く加味される丈け、假令自然的要求から起つた衣服でも、種々な裝飾が試みられるやうになつて居る。況して普通の社會的要求から起つたものは、一層この關係が深い。從つて假令それが直接的であるにせよ、又間接的であるにせよ、身體を美化し肉體其のものへ他の注意を向けんとして居る。例へば肉體を最も嚴重に包み隱すのを禮儀とする歐米に於ても、その夜會に用ひられる婦人の服の如き、前の方は乳の付け根から、背の方は半分位も露出さして居り、手も白い皮の手袋を嵌めた上部は二の腕まで出して居る。我が邦でいふならば、半襟や蹴出しに技工を凝らした模倣を表はして、肉體へ間接に人の注意を惹くやうに發達して居る。即ち何れにしても、肉體其のものに注意せしめやうとする努力が、如何に自然的な生活から遠ざかりつゝあり、又それを以て人文の發達であると自慢をして居つても、根柢深く現はれて居るのである。そこに矢張り本來の要求が含まれて居るのである。この強い要求は、吾々が文身を考へる上に、先づ注意しなければならぬ點である。

從つて衣服が自然的要求から用ひられる必要の少ない個處、例へば熱帶地方のやうに、裸體生活を以て生活し得られる個處であると、衣服の複雜な形式を案出する前に、先づ肉體其のものに向つて裝飾の試みられ、それが飾身慾滿足の主要な部分をなすことも當然なことである、故に文身の問題も、熱帶地方の民族並にそれの流れを汲んで居る民族に於て、最も發達して居り又最も興味あるものが見られるのである。のみならず衣服を殆んど用ひないといふことは、個人の外形を單純化するものである、けれども一個體として一つの肉體を所持して居る吾々は、單に男女の區別や隣人との區別を明瞭ならしめる以外に、自我慾や優越慾の要求から、或種の特徴を自己の肉體上に得せしめんとの欲望も起つて來る。それ又裸體生活者に文身の發達し易い所以である。この意味で私は先づ、裸體生活者の文身から述べて見たい。

五、瘡痕の文身

熱帶地方で裸體生活をして居るものは、今日に於ても少くないが、これ等の民族の間では、最も粗野な形式の文身が行はれて居る。それは骨や荊棘や貝や石の鋭利なのや又は小刀を持つて居るものは小刀で、文身しやうとするところの皮膚へ瘡をつけ、其の瘡が直ぐには癒えないやうに保たれ、肉が隆起して著しい瘡痕を殘すやうにされ、其の瘡痕が幾つも列べて文身とするのである。第三圖に示すオーストラリヤのラッラキヤ族の女の背の如き顯著な一例であつて、瘡痕の配列上に複雑な注意は用ひられてなく、只左側には横の、右側には縦の瘡痕を列べて居る丈けである。吾々の眼からは一種の不快の念を起すやうなものであるが、それが吾々に強く感ぜられる丈け彼等の文身の目的としては、其の効果を收め得て居るのであらう。次に第四圖に示すは、同じくオーストラリヤのウォルキイ族の女で、胸部に太い瘡痕の二本宛なのを水平に數個列べ、左右の乳の上には又二本の縱の瘡痕を一對宛置き、二の腕にも左右共に瘡痕をつけ、胸部を中心に左右對稱の樣式を取つて居つて、前者よりも稍々美的考案が試みられて居る。



第三圖



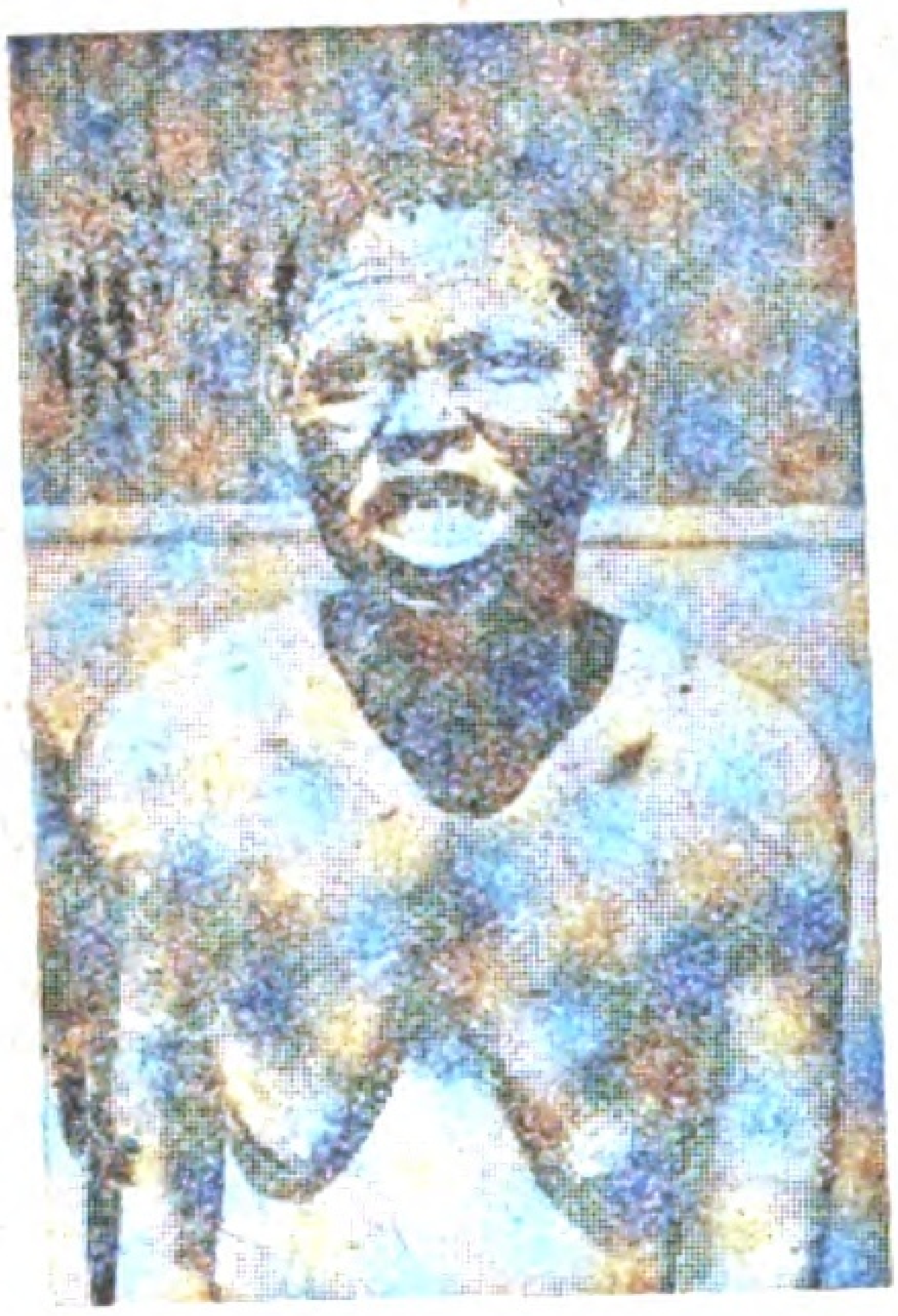
第四圖

而してかかる痛々しい瘡痕が、身體の裝飾とされるには、少からぬ苦痛が忍ばれねばならないけれども、衣服らしいものを持つて居らず、其の上に皮膚の色の薄黑いことから、瘡痕をつけてどげどげした隆起を作るのが、強い光線の下に生活して居るものには、蓋し效果の多く得られることなのであらう、かかる意味から、瘡痕の文身はアフリカに住んで居る土着民族に於ても、これを見ることが出來る。アフリカのコンゴー國の土着民族の如きはその好適例であつて、もとより地方によつて幾分の相違はある。例へば第五圖に示すやうにワンガタ族の如きは、額部と腹部とに特殊な瘡痕を作つて居り、殊に腹部の文身の如きは、椰子の葉の



第五圖

やうに斜に長く列べられた瘢痕の列を、異つた方向のものと相對せしめて、單純な模様化されたものである。然るに第六圖に示すバポト族では、恰かも第一圖甲に示した我が邦の土偶面のやうな感じのする瘢痕を文身として居る。卽ち眼と口との周圍を回る線を基本として、細かな瘢痕を列べて形造れた曲線である。尤もバポト族に見られるやうなものは、其部族に共通した文身



第六圖

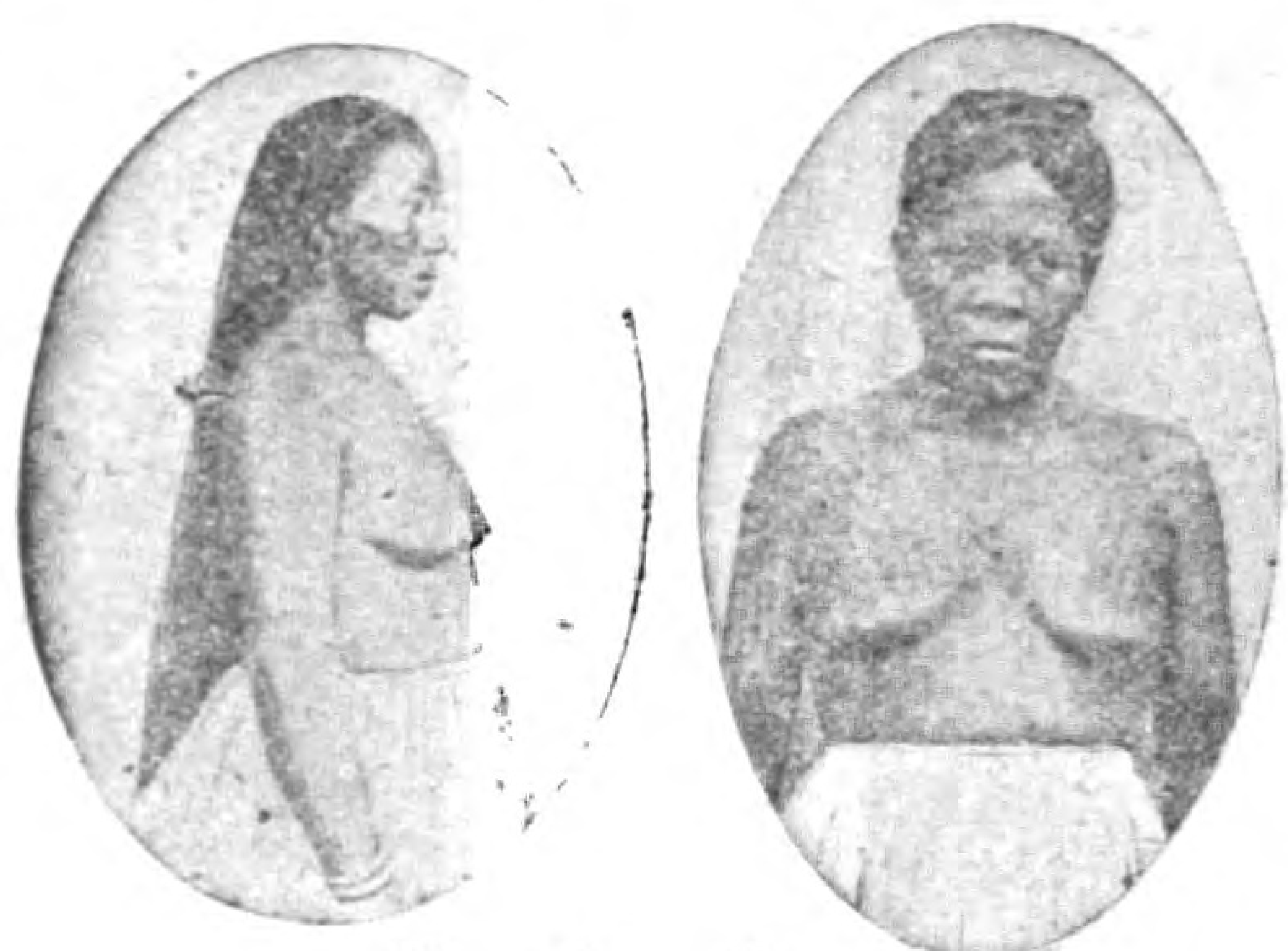
の形式であるから、我が邦で齒を染めたと相類した社會的風俗に基づいた形式といふことが出來る。

六、塗色の文身

裸體生活をして居る未開民族は、強い日光を浴びて居り、又熱帶地方に多い毒蟲などの害を受けることが少くないから、必要上様々なものを身體へ塗ることが行はれて居た。かかる必要上から起つた身體へ物を塗ることが、一つの裝飾法として發展することは、今日の吾々の風俗の色々な點でこれを認めることが出來る。勿論皮膚へ塗つて裝飾とすることは、白粉や口紅の如きものもそれであるが、これは普通の意味の文身といふことは出來ない。

かかる生活上直接の必要なことから、飾身慾の滿足に轉化したことと共に、如何なる未開の民族でも持つて居つた炭粉や赤い顏料が裸體生活をして居る彼等の間で、偶然に肉體に附着したことなどから、又飾身上に試みられたことも有り得べきことである。かの古代のアルジェリヤやアッシリヤやギリシャやローマなどの墳墓から、時々發見されて居る赤い顏料は、肉體に塗つて飾にしたものであらうと、多くの研究者から述べられて居る。然かも顏料を肉體に塗りつけるのは、前述の瘢痕を以てするものよりも困難でないのと、それを改め直すことも極めて

容易であるから、廣く行はれて居つたことは、これを想像するに難くない。今日に於てもかかる形式の下に文身を施して居る民族は稀でない。第七圖に示すのは、南アメリカに住む土着民の文身であつて、正面を向いて居るのが、ウアナナ族で、横向きのがタリアーナ族である。即ち前者は乳から上膊部へかけて點の列を幾本も平行に引いて居り、後者は頰に數個の線を耳へ向つて集まるやうな形式に引いて居り、何れも顏料で畫いたものである。かかる種類のことは、特にアフリカやオーストラリヤの土着民族に於ても屢々見られるのである。



第七圖

　このやうな形式のものとして、文明國の婦人の行つて居るものがある。例へば顏色を白く見せんが爲めに、白粉を塗つた上に故らに黶を墨で頰や額などへ畫き入れられる如き、或は眼を美しく見せんが爲めに、故らに眼瞼の眼に近い部分へ、切れ目に平行して紅の線の引かれるが如き何れもそれである。但し前述の顏料で大袈裟に畫かれるものは、それ自らが直接に裝飾となるのであるが、ここに述べるのは、間接に働いて他の性質を引き立てやうと試みられたものである。

七、刺色の文身

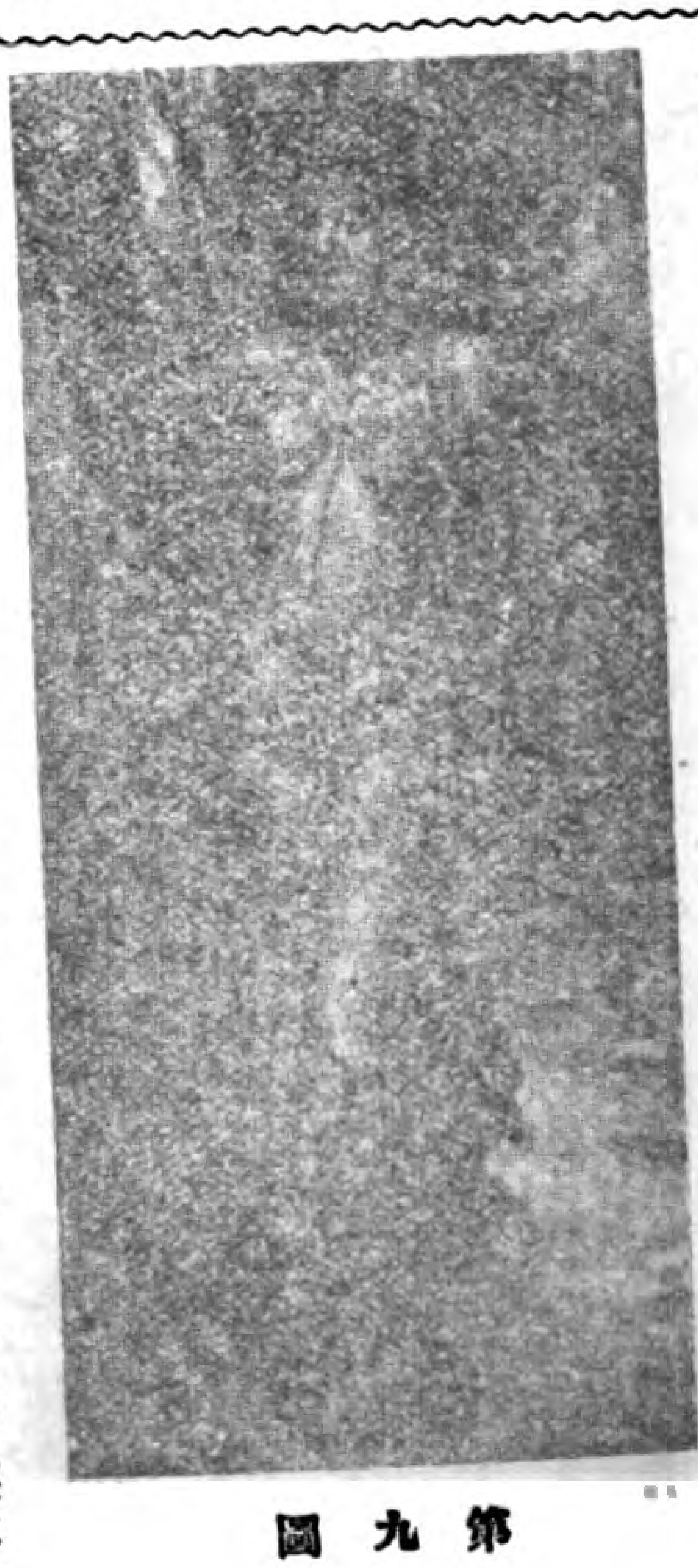
　肉體に對する直接的裝飾に、瘡痕を以てするものと、塗色を以てするものとがあれば、それが同時に行はれることも、亦想像され得ることである、即ち刺色の場合である。けれども皮膚の中へ色を入れるには、瘡が癒えてから表皮を透して見えなければ其の效果がない。そこで刺色をしやうとなると、前に述べたやうに深い瘡をつけては色を刺してもそれが深く肉の内部へ入つてしまうから、瘡は極淺くして、表皮の與卽ち眞皮の上へ色層の粉粒が殘るやうにしなければならない。のみならず皮膚へ色を刺すと、不透明な表皮を透して見るのであるから、表皮細胞に色



第八圖

素の豐富な民族であつては、其の效果が極めて少い。かかる必然的條件は、刺色による文身をして、自ら皮膚の暗黑な民族よりも、比較的に色素の少い民族に於て行はしめ又發達せしめて居る。從つて熱帶地から遠く離れた地方の色の黑くない民族に於ても、刺色の文身は見られるのである。例へば第八圖は、北アメリカのアラスカに居るエスキモー族の腕の文身を示すものであるが、皮膚が黑くない丈けに、頗る其の效果を現はして居る。

けれども刺色による文身は其大部分は油煙や木煙から得られた微細な炭粉を以てされる者であるが、それ等は矢張り裸體生活をして居るものに於て最も要求のある丈けに、比較的に多く行はれて居る。然かも其の文身の行はれる身體部位は、多くは他の方法で裝飾の試みられる部分であるのに興味があるのである。眉墨で薄い眉を美化する我が邦で、薄かつたり禿げたりした眉の中へ墨を刺して、黑く見せやうとする文身の見られるは、其の一例である。尚私は今ここに裸體生活をなし且身體の各部に文身をして居るポリネシヤのネンネル島の土着民の一人を示さう、第九圖がそれである。この文身者を見る者は何人も其の文身の配布が各身體部位に應じて如何に注意深く施されて居るかに心づくであらう。卽ち身體の各部位で比較的に廣い個處や長い個處が如何にも適宜に文身で埋められて居る。殊に他の民族などに於て、頸環が垂らされたり飾牌が着けられる胸部や、飾環が嵌められたり美しいバンドの卷かれる二の腕や、腰卷を釣るしたり奇麗な袴の先きを飜々(ひらひら)させる股部や、樣々な裝飾的な脛當てを着けたり脛卷きの卷かれる脛などに、調和よく文身さ



第九圖

れて居るのに心づくのである。換言するなれば、他の民族が衣服其の他の飾身具を以て自らの肉體を飾るやうな身體部位には、同じく文身を以て飾つて居るのである。かくて衣服と文身との關係は、複雜な飾身物を持つて居ないこれ等の裸體民族に於て、最も興味あるものの存在を認めることが出來るのである。假令かくの如き文身の形式は、其の民族の有して居る傳統に屬するものであるにしても、其の施される身體部位の狀態に應じ

て、單純な線ながらに種々に用ひ分けられて居る點は、矢張り吾々文明人が自らの身體に合せた傳統的の衣服を持つて居るのと、相類したものといふことが出來る。

八、傳説と文身

傳説が民族の精神を支配することは極めて強い。從つて少からぬ苦痛を以てされなければ出來ない文身の如きものが、この傳説の力で、當然なこととして又なさねばならぬこととして、其の部落一般に行はれることがある。私はこの種のものの中で、興味の深く且傳説的氣分の豐なものとして、臺灣の生蕃の例を擧げやう。

昔の昔の大昔に、神樣の貴い思召で臺灣の山地の或野原へ人間を下された。それは或日大きな響がすると共にそこにあつた大きな一つの岩が二つに割れて、其の中から二人の兄妹が生れ出でた。この二人は睦じくしてこの世に生きて居たのであるが、暫く經た或日、妹が兄に向つて、「兄さんは淋しくは思ひませんか」と訪ねた。すると兄は「この頃何となく淋しく思へてならない」と答へた。それを聞いた妹は兄に、「それでは今日から幾日目に、此處から遠くない谷へ行つて御覽なさい、さうすると其處には必ず一人の人が居ますから、其の人と仲よくして賑かにお暮しなさい」と教へた。兄は其の日の來るのを待ち數ねて妹の教へてくれたやうに谷へ行つて見ると、果せるかな一人の女が居つた。そこで彼は其の女と共に仲よく賑かに暮すやうに、夫婦の契を結んだのである。然かるに其の女といふのは彼の妹であつた。妹は素顏では兄に見られて恥しいから故らに顏に文身をして、兄の來るのを待つて居たのであつた。この夫婦が生蕃の最初の祖先である。これが其の傳説である。かくてそれ以來の生蕃の女は、何れも其の顏に文身をするやうになつたのであるといふのである。

九、社會的標識

普通の文身は、他人から容易に見られる個處に施されて居る。そこで文身が裝飾であると共に、自らの所屬する社會の特殊な標識となつて居ることが少くない。時に何等特別に裝飾的意味は見られなくて、單純な社會的標識たることも少くない。のみならずこの社會的標識たるものには、種々な場合があつて、或は結婚した表徴であることもあれば、或は尊敬さるべき特殊階級の表徴であることもあるのである。かかる社會的標識

であるから、未開人の中には文身を强制的に然かも粗野な手術で行つて、その爲めに卒倒するものもあるといはれて居る。

例へば我が邦のアイヌ族の婦人が子供の時から文身して、長ずるに隨ひ漸次に擴げ、結婚する頃になると其の口の周邊へ恰も男子の八字鬚の如き形となすが如き、鹿兒島縣の大島の人が、未婚の時一般に行ふものは、左手の甲へ星形に五個の十字を點し、右手の甲へ渦巻に四個の十字を點し、嫁する時はこれ等を圍んで手一面に擴がる程の輪を點じ、一手は其の實家に於て一手は夫の家へ行つて施すこととなつて居るが如き、結婚に關聯した社會的標識といふことが出來る。ボルネオやニュージーランドなどの土着民族や、アメリカ・インディアンなどは、文身をしなければ他人への仲間入りが出來ないといふので、社會の一員たる意味で文身されて居る。第十圖はニュージーランドのマオリ族の女の口及び顎に於ける一般的文身を示したものである。臺灣の生蕃の中、ツアリセン族では男子の文身は裝飾であると共に、酋長表示の記號であつて、酋長の血族に限り行はれ又スパヨワン族では、男子の文身は單に好奇によつて行ふのみであるが、女子は酋長の血族に限つて行ふことになつて居り、卽ち一つの貴い或血族の標識となつて居るのである。



第十圖

其の他、この種のものとして、或特殊な社會的團體、例へば宗教上の團體や社會上の秘密結社等に屬するものが、其の團體の標識の意味から行つて居る簡單な文身を加へることが出來る。竊盜常習者や賭博常習者などが、一つの團體へ加盟した記號として、其の團體のものに共通した文字とか花とか單純な形といつたやうなものを刺靑するが如きそれである。

一〇、迷信と文身

迷信が吾々を異常な行爲に導くことは、如何に文化の進んだ

社會に於ても跡を絶たないことである、況して未開な民族や教養の足らぬ社會に於て、迷信に支配されるものの多いのはいふまでもない。かかる意味から文身は迷信に基いて行はれて居ることが頗る多い。

モロッコやアルジェリヤなどでは、文身をして居ると、リュウマチス・神經痛・打撲・古傷・頭痛等を癒す效があると信ぜられて居る。朱で文身すると、黴毒に罹からないとの迷信もある。これについては土肥博士やフロランゲなどが、劇しい黴毒を患つて居ても朱で文身されて居る個處のみは、黴毒に侵されて居なかつたといふ例を擧げて居る。それは恐らく朱の中に水銀を含んで居るからであらうといはれて居る。これ等は疾病に關したものである。

アイヌでは、左手の拇指と人差指との間に×の形を、左肩に⊠の形を文身すると弓が巧になるとされて居る。我が邦では花札や采を文身するものが極めて多い。これは東京の大鷲神社の熊手や、大師などの土産物に、采や大福帳や小判などを附けて居るのと同じ意味で、射倖的利福を得んが爲めである。中には第十圖のやうに、株式を聯想せしめた蕪菁と小判と、大黑天の聯想から鼠とを左腕に文身したのがあつたが、これも利福を得ん爲めのものである。


第十一圖

我が邦では鼈(すつぽん)の文身が往々ある、これは鼈が食付いたら首を切られても離れないといはれる其の性質を象徴せんとするもので、一度着手したことは、邪でも非でも押通すといふ性質の得られんことを望んだものである。

多少宗教的意味の加はつたものも亦少くない。日蓮宗の熱心な信者の一人は、首に珠數を掛け背に南無妙法蓮華經と現はし、其の兩側に日蓮の紋所を文身し、それで自己の熱烈な信仰を表示し、佛の加護を得やうとした。神社佛閣の守札や呪符を文身して、終世自分の身と離さないとの誠意を見せたものもある。尤もかかるものの中には、單純な遊戯的氣分で行はれて居るものも多いことであらうが、私の見たのでは長い紐のついた成田山の守札を一方の肩から脇腹へ掛けて居るやうに文身したのがあつた。アイヌの間では、文身をして居ないと、自分が死んだ時に、あの世に行つて居る先祖に手引して貰へないとの信仰がある。

迷信は其の性質として利己的で我儘なものが少くない。例へば窃盗常習者に蠟燭や蝙蝠を文身して居るものが往々ある、これは蠟燭があれば夜もよく見える、蝙蝠のやうであれば夜間惡事をするに好都合だといふ勝手な願望を滿足せしめんとするも

のである。或は又警察官の提灯を文身して、警察官の目を透がれんと望む如きも、この種の一例である。三星一の渡邊の紋所も極めて多いが、これも一說に據れば、昔源賴光の四天王の一人渡邊綱が、羅生門で鬼の腕を切取つた故事から、鬼の腕を取るやうに偉く強く甘いことをしたいとの希望からだといはれ又一說には、この紋所が三つ目一といはれるところから、若し二つの目がある外に、もう一つ目があつたならば善惡につけ、人一倍機敏な活動が出來るであらうとの希望からだともいはれて居る、何れにしても欲の深い迷信からである。又我が邦では桃の文身が頗る多く行はれて居るが、それは後に述べる性的意味の外に、桃太郎の聯想から、鬼を征伐するやうに偉くなりたいとの願望を現はしたものともいはれて居る。

一一、孤獨の遊戲

吾々は孤獨で居ると、自己の身體を遊戲的に弄ぶ傾向がある。これは既に幼兒の中から現はれて居るもので、人によつて一樣にはいへないが、鼻や耳朶や鬚や指や爪や頬や唇や頭髮などが其の主なものである。かかる遊戲的の衝動に、落書に於て見られるやうな作用が加味されて、文身を敢てせしめることが間々ある。尤もこの場合の文身は自ら行ふのであるから、極めて簡單な小規模なもの、多くは意味の輕いものに限られて居る。私の友人にも机に向ひながら手に二つの點を文身した人がある。

而してかかる孤獨に冥想や寂寞にの加はることがあると、可成りにここにいふ種類の遊戲が熱心に行はるることがある。かかる場合に常に其の心を支配して居ることが、恰かも落書の場合のやうに、一心とか改心とか櫻の花の中に死の字を書いたやうな、意味のあるものまでが文身されることもある。囚人が監房で行ふものの如き、其の最も著しい例であるが、春期發動の頃ののが、往々かかる精神狀態から、文身をすることも亦必ずしも稀有のことではない。

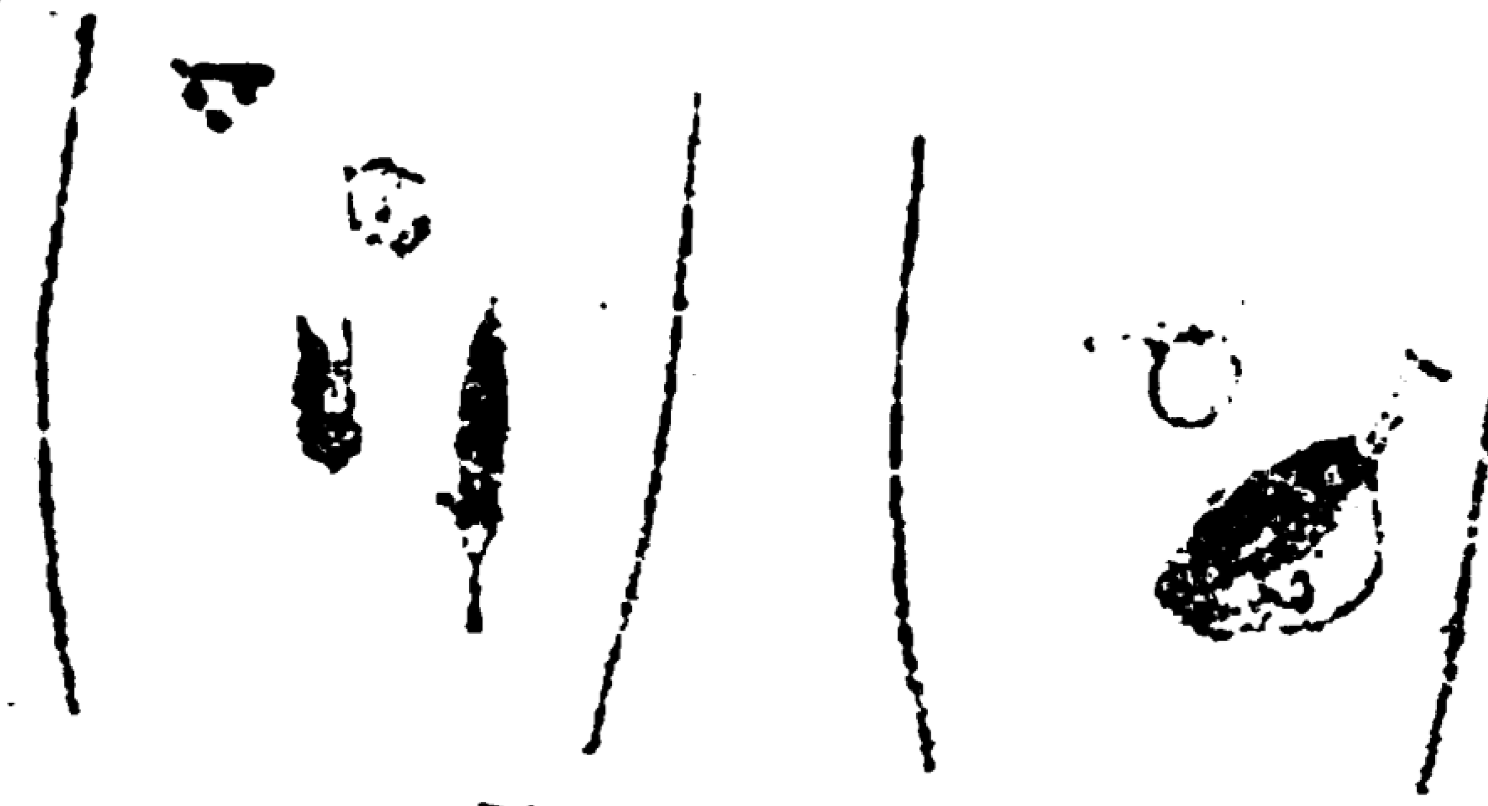
かかる特殊な遊戲的狀態が、恰かも普通の惡戲の場合に見られるやうに、烈しい感激を以て行はれることがある。吾々は一般の感情に於てもさうであるが、自己の感情の發動をさし向ける對手の得られなかつた場合には、往々自己に向けることがある。其の顯著なものとして憤怒や憎惡や怨恨や嫉妬の場合を擧げることが出來る。卽ちそれ等の感情を起さした對手に報いたいのであるけれども、何等かの事情でそれが直接に達せられない爲めに、其の興奮した感情を自己の肉體に加へるのである。かかる場合に自分の衣服を裂いたり、自分の手に嚙みついたり、

自分の頭を打つたりすることもあるが、それが孤獨で居る場合に、文身の形式を取り、苦痛を經驗しながら、そこに變態な滿足を味ふのである。

一二、性的の衝動

性的の衝動が、吾々を興味ある方面に至らしめるとは極めて多い、文身が此衝動に依て行はれるとも等閑視されぬとである。遊蕩氣分の滿ちて居た元祿時代に、痴情の誓の爲めに、男女がお互に一身とか命といふ文字を文身したことが特に傳へられて居るが、これは頗る面白いことである。性的興奮の狀態にあるものが、異性を傷け自らを傷けることは、性的生活に於ては極めて有意味なことである。相愛のものが、互に他の胸などに自らの名や誓の文字を文身する時は、性的の倚虐(サディスムス)や被虐(マゾヒスムス)に伴つて得られる高潮した感激の存在が認められる。谷崎潤一郎氏は其の作『刺青』の中に、「若い刺青師の靈は墨汁の中に溶けて、皮膚に滲んだ。燒酎に交ぜて刺り込む琉球朱の一滴一滴は、彼の命のしたたりであつた。彼は其處に我が魂の色を見た」とか、「淸吉は漸く繪筆を擱いて、娘の背に刺り込まれた蜘蛛のかたちを眺めて居た。その刺青こそは彼が生命のすべてであつた。その仕事をなし終へた後の彼の心は空虛であつた」と述べて、誠に其の刹那に於ける心理をよく描寫して居る。殊に脉々と血潮の流れて居る肉に、刺りつけられた象徵の內容が、生々と其の命を共にして居るやうな心持になるのであらう。かかる關係から、性的意味の含まれた文身は極めて多いのである。

情婦の名を文身することは、常に行はれ易いことで、これを以て自ら樂しみ又は他にも見せて誇るやうなことは、有り勝ちである。けれども甚だしい例は、一方の腕に十八名の情人の名を文身して居たのがあつた。文政の昔にも江戸の下谷上野町に「紋散らしのお玉」といふ婦人があつたが、この女は性多淫であつて、常に寬永寺の坊中に出入して寺僧と通じ、其一人と通ずる每に其の僧の紋所を文身したのであつた。尤も情人の名を文身することは、其の生活から賣春婦の間に多く見られる。巴里の下等な賣春婦などにもこの種のものが少くないといはれて居る。



第十二圖

比較的に簡單に形式のもので、興味のあるのは性的象徵の現はされて居る場合である。例へば、左の股に桃と河豚とを、右の股に赤

唐草と陰莖とを文身した如き、左の股へ桃を、右の股へ口を長く尖らしたひよつとこ面を文身した如き、左腕に瓦を、右腕に口を尖らしたひよつとこ面を文身した如き、何れも左右相對せしめて性的象徴を現はしたものと認むべきものである。稍々複雑な形式を取つて居るものとしては、左の二の腕に猫が浴衣を着て手拭を被れるところ、右の二の腕に玩具の猫と達磨とを文身せるが如き、賣春婦を聯想せしたものである。

其の他直接的表示としては、赤裸々に羞恥部を示し、或は大松茸へ裸體の女の抱きつけるもの、或は春畫を示したものもあり、或は又腹へ大章魚を出だし、其の一本の足が陰門へ入つたところを示した如き其の例である。


第十三圖


第十三圖

これ等は何れも我が邦に於ける文身の例であるが、伊太利・佛蘭西・獨逸などの文身者にも、亦かかる裸々な表示をなしたものがあると共に、上述する象徴的のものも少くないのである。例へば男女の握手せる所や、愛の神や、心臓の形や、指環などが其の主なものである。

私が調べたところに依ると、比較的に其の數の多きに注意せしめるものは、女の生首である。それも多くは朱を加へて、鮮血淋漓として居り、亂れ髪を口にして居るもの、首の下に櫛や簪を散亂せしめて狼藉を忍ばせるものの如き、人をして凄愴の感を懐かしめるものがある。それは性的倒虐（サディスムス）に其の動機を認むべきものであつて、それ自らに特殊な感興と興奮とを味つて文身し、又それを見或はそれを異性に見せつけて滿足を味ふものである。


第十四圖

かかる意味から、文身は他の様々な動機にも増して、性慾的意味の濃厚なものである。ラカッサーヌが、臍下腰部附近にある文身は性慾的の意味あるものだといつて居るが、我が邦などでは必ずしもさうばかりでない。けれども股などの文身には性慾的のものの少くないのは事實である。

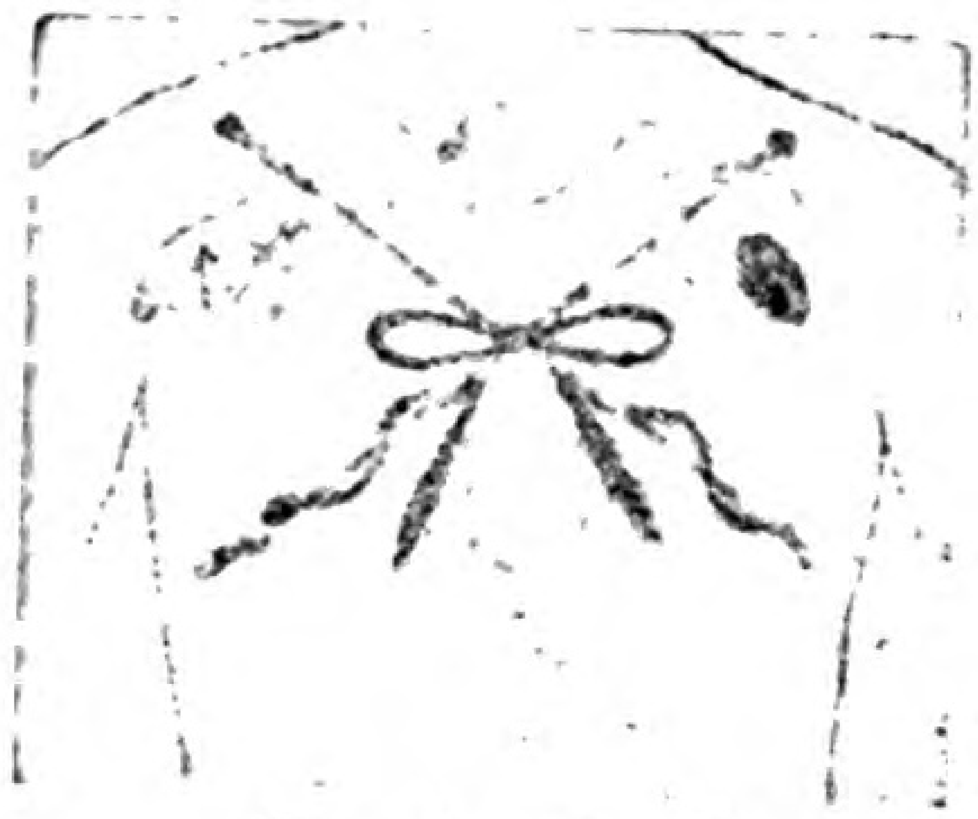

第十五圖

一三、記憶と觀念

ヨェストは、一般に旅行家・航海者・學者・商人・隨聘者・兵士な

どが、故鄕を去つて遠隔した地方へ行つた紀念の爲めに、其の土地に關係あるもの、例へば其の土地に特有な草木の花や鳥や獸などの簡單な形、若しくは其の地方の地名などを文身して、故鄕へ歸ることが少くないといふて居る。

文身は終生取り去ることの出來ないものであるから、記憶の爲めには最も適切なものである。私が調べた中には、人から受けた恩を忘れない爲めに、恩の字を文身したものがあつた。又日淸戰爭の頃に背中一面に國旗を交叉し、それに鷹をとまらせ、下へ金鵄勳章を現はしたものがあつた。圖案の奇巧もあるが紀念の爲めに文身したと本人はいつて居た。情人の眼の前で情人の名を文身して見せることなどは、深い性的の感激や興奮はなくても、單に對手の心を安んぜしめんとして試みることも少くない。時にはこれを手段として、異性を誘惑したり、利慾の爲めに詐くやうなことも行はれるのである。



第十六圖

一四、圖案の奇巧

文身が肉體に苦痛を與へてまで行はれることであるから、同じくするならば奇巧な圖案を用ひやうとの希望は、當然起るべき要求である。かかる要求は、一方に於ては美しさといふ方面に、他方に於ては珍しさといふ方面に進む。

未開な民族も、かかる點殊に美しい文身としやうとの努力は、種々な實例で見られる。第十七圖は、オーストラリヤとユーギニヤとの間にあるトルレス海峽の島に住むマブイアグの女で臀部の上に二つの蛇を裝飾化して、瘡痕による文身をして居る、但し蛇はこの部落の主な崇拜的對象である。わが邦の文身は其の技巧の進んで居る丈けに、樣々に美しく見せるやうに試みられたものが多い。私が見た例では、色白の男が二の腕の內側へ花札の二十坊主を實物大に墨と朱とで美事にあつさり現はしたのや、白い膚の二の腕に竹を卷き節を一つ置に朱で埋め、中央に朱の梅花を配し、松の葉を竹の中へ畫いて松竹梅をきかしたのなどは、



第十七圖



第十八圖

普通の文身を見るやうな妙な感は起さなくて、只美しいといふ感じがした、本人も得意らしかつた。

文身の珍しい圖案を誇るのは、文身の流行して居るやうな場合に於て見られ易いことである、我が邦の關東地方は、江戸時代からの影響で流行して居る丈けに、其珍奇なものが少くない。豆絞りの手拭を肩に引つかけたのや、石碑を現はして自分の墓としたのや、頭髪の中へ少さな頭骨を幾つも出しだのや、女子で陰毛の中へ蟹を匍はしたのや、腕や足を曲げると女陰になるやうなのなどは、只其の圖案の奇抜といふところに文身者の得意もあれば、主な目的もあつた。第十九圖は左の二の腕に文身された猫が三味線を調べて居るところで、又この種のものといはれる。嘗て江戸時代の末期に本郷春木町の或蕎麥屋に、お竹といふ雇女があつたが、この女は背部から腕へかけて金太郎を畫き、恰も乳房を含んで居るやうな文身をした、この女は力が強く常に諸肌をぬいで出前を持ち運んだ、その爲めに近邊の荒らくれ男などは恐れたけれども、却つてそれが評判となつて店を繁昌せしめたと傳へられて居る。



第十九圖

一五、虚榮と文身

文明人が其の服裝に對する虚榮心から、不相應な散財や人知れぬ苦心をすると同じやうに、裸體生活をする未開人の多くは、其の服裝に相當した文身で、甚だしい苦痛を忍ぶのである。かくて背部一面に又は腹部一面に、文身を施すやうになるのである。我が邦に於ても、徒弟や子分といはれるやうなものが、其の親分が文身して居て威勢のよいのを見て自分も文身して人に見せびらかさうとすることは少くない。尚又相當に大袈裟な文身をするには、多くの日數と金錢と忍耐と手數とを以てしなければならない。從つて規模の大きい文身をして居ることが、社會的優越を表示することにもなるのである。かの未開人などに於て、其の社會的地位の高い丈け、多くの文身を施して居る如き其の例である。又幕末の頃の親分とか頭とか立てられたものが、多くは大袈裟な文身をして居つたのも、文身流行の當時として然るべきことである。かくて文身が名譽の表示ともなつて、唐草の文身をした權太を、唐草權太と呼んで畏敬するやうにもなつたのである。かかる狀態が、それ等の社會の年少者をして、文身に多少好奇心の加味された虚榮心を感ぜしめるやうになつたの[illegible]然である。即ち今日に於ても仕事師・大工・鍛冶・左官・

石屋・工夫等の社會に於て、この種の傾向が認められ、年長者の文身が其の社會の年少者に文身せしめる動機となつて居ることが往々ある。

尚私は文身者九十五名について、それ等の文身した時の年齢を調べて見て次の結果を得た。

年齢	人數
10	2
11	0
12	2
13	4
14	6
15	6
16	7
17	10
18	6
19	7
20	8
21	11
22	4
23	4
24	5
25	4
26	2
27	2
28	2
29	2
32	1
合計	95

卽ち其の最も多く行はれるのは、概ね十四歳乃至二十一歳である。この年齢期は春機發動期を含む頃であつて、性慾と社交慾との發動から最も強く虚榮心の起り易い時期である。其の時期に文身が比較的に多く行はれて居ることは、やがて文身が虚榮心に其の動機を有する場合の少からぬのを示唆するものといはれる。

一六、威嚇的意味

文身は、一見美觀を感ぜしめるやうなものは別として、それが普通の皮膚の狀態と異ることや、瘢痕によるものはそれ自らが、又刺色によるものは其の色が特殊な感を與へることや、塗色によるものの外は血を流し苦痛を忍んで行はれたといふ聯想のあることなどが、一種の凄さ恐ろしさを感ぜしめる場合が少くない。のみならず文身の少からぬ部分は、其の動機が他を威嚇し恐怖せしめんとするものである場合である。而して我が邦の徳川末期以來は、文身の技巧が最も進歩した爲めに、これ等の威嚇的意味を表示するに足る種類のものを充分に現はし得たのである。尚我が邦の衣服が、腕まくりをしたり、片肌ぬいで威張つたりするに好都合であることも、この種のものの大袈裟なのを我が邦で發達せしめた上に、大に關係があつたのである。未開人の文身で威嚇的に見えるものは少くないが、ここには其の一例として、第二十圖にアフリカのコンゴー國のバンラガ



第二十圖

族の猶痕による頭部文身を示さう。尤もこの文身は、この民族に一般に行はれるものであるが、これを見たものは、何人も鐵の面(マスク)か冑でも被つたやうに、物凄く感ぜられるであらう。我が國の例では、女で大蛇がぐるぐると胴を卷いたのや、骸骨や、女の生首(なま)や、恐ろしげな雲に龍の如きそれである。ここに示す、第二十一圖は佐倉宗五郎に關するものだと本人が云つて居た


第二十一圖

が、左の二の腕に三つの生首(なま)を文身し、第二十二圖は左の二の腕に男の生首に電を文身したものである、何れも私が蒐集した材料であるが、これを實際に見ると、頗る物凄く恐しい感を得せしめるものであつた。

德川末期に於ける俠客や遊人(あそびにん)といはれたものは、始んど皆


第二十二圖

威嚇的な文身を施して、人を驚かし恐れしめて喜んだものである。安政から萬延年間にかけて、文身のある若者等は何れも文身を示して虚勢を張つたもので、料理屋や妓樓などでもこれを鄭重に待遇するやうにし、専ら其の怒りに觸れないやうに努め、婦女子や子供等も亦其の威に服して、文身あるものを慕ひ、藝妓や娼妓は文身あるものを情郎にしなければ耻辱と感ずる位であつた。

一七、文身が財産

裸體の未開人に文身が大切なものであつたやうに、我が德川時代の裸體生活者であつた駕籠舁は、實に其の文身が全財產でもあつたのである。當時の駕籠舁に何れも裸體稼業であつたから、彼等の虛榮心や飾身慾が恰かも流行しかけて來た文身を以てするに至つたのも自然の勢といへよう。即ち彼等は文身がなければ殆んど其の仲間入が出來なかつた爲めに、互に競つて文身した。のみならず駕籠に乘る人殊に當時の歡樂豪奢虛榮の中心であつた吉原へ遊ぶ人々は、何れも文身の美事な駕籠舁の駕籠に乘つて、威勢よく繰り込んだ者である。從つて文身の如何が、自然に其の駕籠賃にも影響して來た。かかる狀態であつたから、當時普通人の文身の手術料は一日金一分であつたのに、駕籠舁は其の稼業上の必要なものといふので八百文であつた。

けれども文身をするには、金錢と日數とが少からずかかつた。即ち一日針數六七百を限りとし、それ以上は壯健なものでも甚

だしく疲勞するとされ、一部の癒ゆるを待つては漸次に行ひ、一方で多飲多食を禁じ、又文身手術中は疊の上へ上らず、朱が變色するとて女にも接することをしないで、仕事を避け靜養する必要があつたのである。かくの如くであるから、大規模な文身でもすることになると、僅かな財産は蕩盡されてしまひ、「資本は皆かくの如く一身に附し去つた」と壯語して、大に誇り以て快としたものをも生じたのである。其の精巧なものになると、十年では完成しないやうなものもあつたのである。

一八、文身技工家

極めて小規模な文身は、自分で行ふことが出來るけれども、稍々大がかりのものであると、其の專門家を煩はす必要がある。文身の專門家は、未開人の間でもこれを見ることが出來る。第二十三圖に示すものは、コンゴー國のバポト族の女の文身技師が文身を行つてゐるところである。德川末期の文身の全盛期になると、又この專業者が頻々と輩出するに至り、他の國では見られないやうなぼかしの技術まで發達するやうになつた。當時最も有名であつたのは、淺草のちやり文・谷中の幾・並木の彫岩・髪結の達磨金・松島町の奴平・淺草の唐草權太・こんこん次郎・四谷中門の兼等であつた。就中谷中の幾は自ら山姥に金太郎の文身を爲し、細い線を文身するに妙を得、並木の彫岩は圖案を創作し人物に長じ、髪結の達磨金は左利で彫るを得意とし、且ぼかしの名人であり、淺草の唐草權太は朱を入れるに秀で、松島町の奴平は靈岸島の山王祭に青年を捕へて揃ひの文身を爲さしめて出たので知られて居つた。



第二十三圖

かくの如くに江戸で文身の專業者が出るやうになると、賃錢も大方一定し、上述のやうに普通人は金一分駕籠舁は八百文であつたが、手術を受けるものは通ふか又は文身專業者の家に寄宿して居つたものである。かくて十兩の金があれば、それを資本にして普通の營業が出來た當時に於て、專業者は一人二十五兩の工銀を得ることが出來た程、彼等の收入も多かつたし、又被術者も少

くたかつたのである。

一九、繪畫と聯絡

德川末期のやうに文身が流行することになると、其の當然の結果として文身の意匠に意を凝らすやうになつた。即ち複雜な文身の發達は、其の下繪の必要を感ずるに至り、ここに繪畫と文身の特殊な聯絡を生じ、畫家との關係が始まつたのである。

當時に於ける文身の圖案家としては、先づ浮世繪師が其の筆を執つたものである。就中其の名あるものを擧げて見ると、歌川國芳・其の門下生の芳艶・芳虎等は屢文身の圖案を畫き、葛飾北齋の如きも時々筆を執つたといはれて居る。豐原國周は「龜井戸豐國門人にては畫がくもの甚だ稀れなり、余嘗て一壯丁の爲めに武者の下畫をかき、刺靑をなさしめたることありしが、其の父母大に怒り痛く余を責めたり、これより余は決して刺靑の下畫を描かず」といふて居るのを以て見れば、當時の相當な畫家が文身の圖案を作つたことは爭はれない。

但し文身を行ふには普通身體に下畫を畫くのではなくて、紙に畫いてあるのを見ながら行ふのであるから、文身師自らが多少畫の心得がなければならない。従つて彼等文身師の中にも、木の彫岩のやうに、人物に巧なものも輩出したのである。かかる下繪の要求は、下畫としての參考畫が又浮世繪師の下で畫かれた。例へば國芳の英雄百人選の如きは、この爲めの畫であらうといはれて居る

二〇、文身競覽會

このやうに社會的に勢力を得るに至つた文身は、當時に於て一時的の文身を發生せしむるに至つた。一時的文身といふのは、役者の隈取りをするやうに、油や膠に繪具を交ぜたので恰かも文身したやうに畫くのであつて、注意して居れば三四日は保たれるさうである。即ち當時の商家の番頭や、侍などの遊蕩家が、一時の興に用ひたものであるが、又藝妓なども祭禮の時などに、この一時的の文身をたし、片肌ぬいで木遣りなど歌ひ山車を曳いたものである。かかる趨勢は、遂に古今東西を通じて恐らく最大規模の文身といはれ得るやうなものを、我が邦に於て見るに至つた。それは江戸淺草の三社の祭に若者二十人を一列に並べて、一體の龍となる群衆文身を試み、雜閙せる人中へ繰り込んで世人に一驚を喫せしめたことである。二十人合せて一つの畫になるのであるから、個人個人は或は龍の首の一端や或は尾の尖端や或は又胴の一部の表はされたに過ぎないものであつたが、彼等は皆得意になつて騒ぎ回つたものである。

尙一層興味を惹ぜしめるものは、文身競覽會の開催である。卽ち天保年間に江戸兩國の某樓で刺靑會なるものが開かれて、相會したものは何れも其の技工なり圖案なりに我れはと思ふもののみであつた。今其の中の數例を示すと、短刀を腰に文身し、摺鼻褌を締めると、恰かも短刀を差したやうに見えるもの、頭髮から糸を引いて臀部に至り、そこに一匹の蜘蛛を文身したもの、肛門の邊に糞柄杓を表はせるもの、河童の肛門を覗へるもの、背に自分の戒名を記した卒塔婆を大きく畫けるもの等であつた。この時一等の賞を得たものは、天德寺の僧が蜂に刺されたといふ歌の意から、龜頭へ蜂を一匹文身せるものであつた。

かかるところまで發達すると、文身も未開人や技工の拙な歐洲人などの文身と大に其の趣を異にして、自分の住宅を新築して誇ると頗る相類したものであつて、そこに又低級とはいへ、一種の民衆藝術に對するやうな、美的享樂の幾分が加味されて來たのである。

二一、境遇と理想

我が邦でこのやうに一時文身が流行しても、其の最も多く行はれたのは、江戸のもので殊に屋敷の人足・町方の火消人足・大工・左官・鳶の六尺・駕籠屋等であつた。從つて上流の町奉行遠山左衞門尉など、文身をすると、事々しく傳へられるのである。かかる稼業に生れたものは何れも其の稼業のもの氣質に適合するやうに敎育された。逞しい文身のある澁黑い裸に新しい褌を締め、ぴかぴかする一尺四五寸の鳶口を白木綿の胴卷へ差込んだ姿などを理想とした彼等の社會では、其の子に文身を恐れてしないやうなものがあると、「かかる卑怯者は家へ置けない、仲間へ對して面目がない」と叫んだものである。文身師の松島町の奴平の如きは、十四歲になる實子に文身を施さうとしたところが、恐ろしがつて泣いて逃げ回つたのを捕へ、梯子へ縛りつけて文身したといふ話である。

のみならず當時のかかる下級社會のものが好んだのは、武勇傳・俠客傳・奇傑傳等であつて、彼等は其の中の人物を理想とし崇拜しそれを又文身の材料として選むに至つた。かくて危險なこと困難なことに遭遇しても文身に現はされた岩見重太郎や天竺德兵衞などの手前、忍耐しなければならないとして、益々彼等に特殊な氣風を養成したのである。この事實は第十七圖に示すやうに未開人などが崇拜的對象(トーテム)を文身とすると相類した心理である。

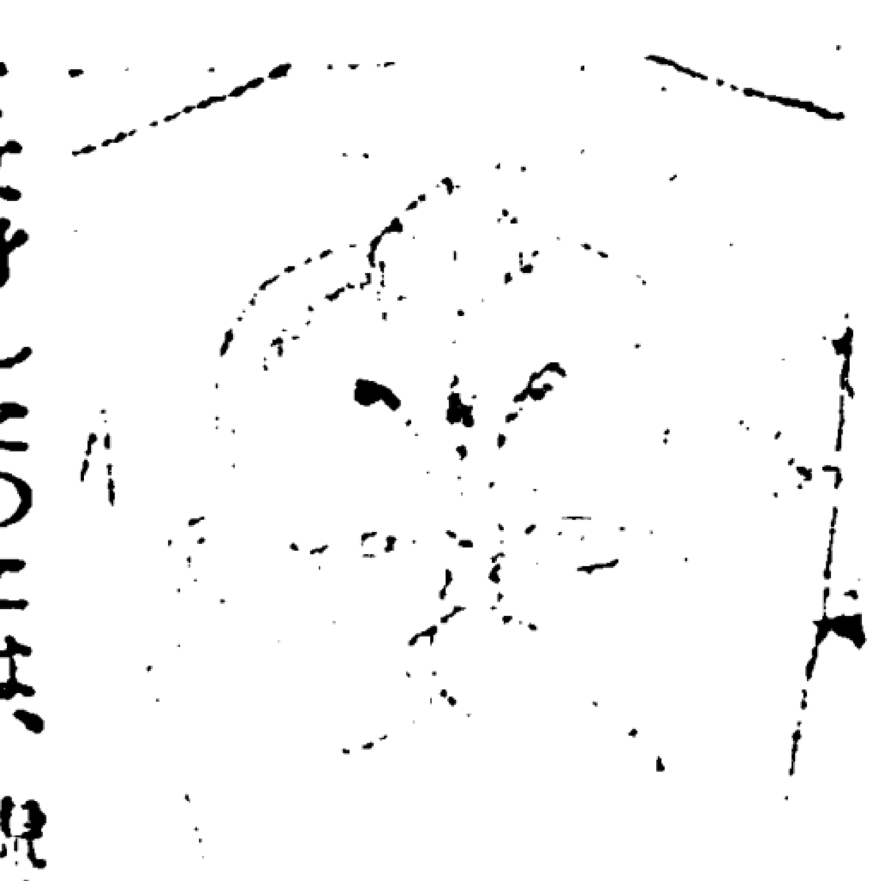
かかる理想の文身による表示は、今日の文身にも見られ、私

取扱つたものでは、「なますはすでもつ男はきでもつ」と彫つたのや、「天爵自由」と彫つたのがあつた。其の他竊盜常習者が、石川五右衞門や笠松峠のお松などいふ彼等社會の豪傑を文身したものも、亦其の理想の一端を示したものといはれる。ロンブローゾの蒐集した中に、伯林の賣春婦の一人は、澤山の陰莖を組合せた模樣の猿股を履いたやうに、腰部股部に一面に文身したのがある。これなどは勿論性慾的衝動の大に關係して居るのは明かであるが、又其の境遇から推察して興味あるものといはねばならない。其の他歐羅巴の例で水夫は錨を、船頭は帆掛船を、兵士は軍隊に關係あるものを文身し勝ちだともいはれて居る。

二二、罪人の文身

從來歐羅巴の學者間で文身の研究されたことは頗る多い、けれども其の殆んど總べては、犯罪人と關係せしめた上の觀察である。即ち犯罪人の一特性として文身を擧げるのである。ラカツサーヌは犯罪者の三分の一は既に二十歳以前に文身するものだといひ、マロはトリノ監獄で一三九八人中一一・五%、ルツキニはシエナの囚人七四六人中一九・〇七%、グリーブスはダービーの囚人五五五人中七・三%、アルボルゲリツトはベルガモの囚人中一五%、キルトは一〇〇〇囚人中二四・五%の文身者あるを見た。我が東京附近の犯罪者には、大凡二十%は見られて居る。けれども犯罪者を出すことの多い下級社會に於て、如何なる割合に文身者があるかを詳細に調べなければ、これを以て犯罪者の一特徴とはいはれない道理であるが、パッーが、佛蘭西の或軍隊で兵士三八二人中一〇五人といふ多數の文身者を見て居るやうに、特殊の社會に文身者の多いのは爭はれぬことである。我が邦でいふならば下級勞働者中には文身者が頗る多い、而して犯罪者も亦それ等の階級から頗る多く出て居るのである。

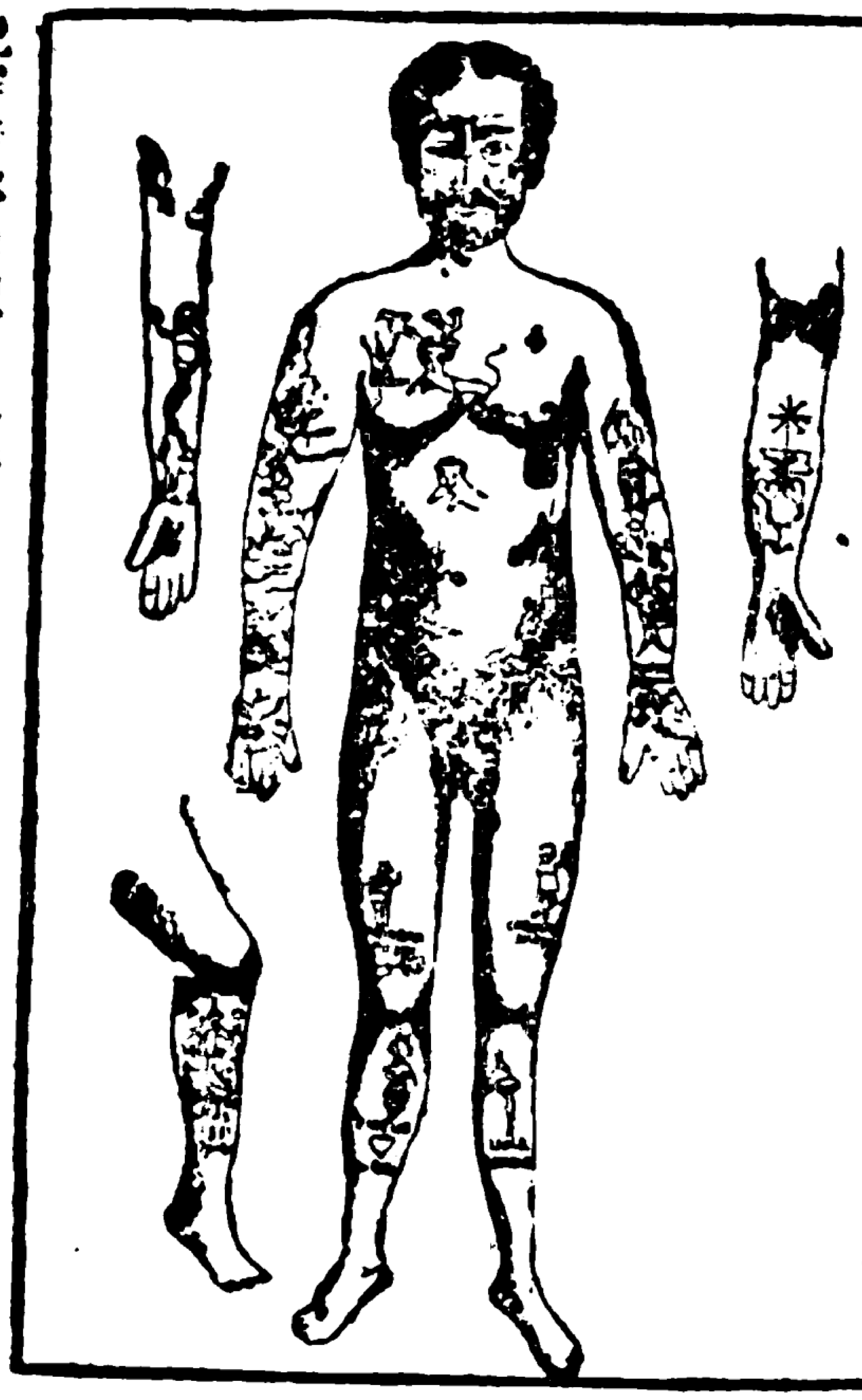
けれども文身が模倣や虚榮や威嚇や異常性慾といふやうなことから行はれるものとするならば、犯罪も亦かかる事實から起り易い傾向が少くないから、文身と犯罪との二つの社會現象が、それ等の相類した動機から起るともいはれないことはない。かかる關係を示すものとしては。私は二つの實例を示さう。



第二十四圖

第二十四圖は、私の調べたものであるが、背部一面に大きな天狗の面を文身したもので、この男は吉原の遊人で恐喝取財で二度、賭博で一度入獄して居る。かかる天狗を文身したのには、虚榮心や威張りたい心が極めて強く働いに

居たのであらう、それと共にこの文身が恐喝や賭博をする場合に　可成り惡用されて威嚇の役目をしたことであらう。第二十五圖はロンブローゾの研究したもので、この男は幾度も强姦をしたものであるが、自ら犯した性慾的犯罪に關係ある文身百五個を頭といはず手といはず足といはず彫りつけて居る。元來



第二十五圖

犯罪者が自己の犯罪に關係あることを、種々な形式で現はし殘さんとする傾向のあることは、ロンブローゾの述べて居るところであるが　少くもこの强姦犯罪は自己の性慾的犯罪に對し、極めて多くの感激と興奮とを持つて居り、それが文身せしめるまでに昂進して居つたのだとも見られるのである。

けれども一部の論者のいふやうに、文身を痛覺遲鈍の爲めと斷ずるのは早計といはねばならない。尤も中には痛覺遲鈍の爲めに、頗る容易に單純な遊戯的氣分で文身し得るものもないではないが、文身者の多くは、甚だしい苦痛を忍んで文身してゐる。のみならず其の苦痛を忍んで行ふ所に、文身としての虛榮や威嚇が生れるのが普通である。從つて文身をするやうな痛覺遲鈍者は、自己に苦痛を感ずることが一般に少く、其の結果他人に對しても同情や憐愍の念が發達せず、遂に他人を侵害するやうになるのだとの論は、直ちに認めらるべきものではない。且又、上に述べた二例のやうに、文身の內容と犯罪の性質とよく一致するものも往々あるが、犯罪者の文身が何れもかかる性質のものとはいはれない。只犯罪に關聯した迷信的內容の文身のあることは、其の境遇から見て寧ろ當然なことといつてよからう。

二三、刑罰と文身

文身を考へるものは、何人もそれが刑罰に用ひられた場合を思ひ起すであらう。元來文身が自然から與へられた肉體を損することであるから、これが禁ぜられたことは極めて古くからである。舊約全書の「利未記」第十九章二八節に「汝等死る人のために己が身を傷くべからず、またその身に刺文をなすべからず、我はヱホバなり」とある。其の他多くの文明國でも文身を禁じ、

却つて刑罰の爲めにこれを用ひて居る。我が邦では日本紀履仲天皇の元年四月の條に、阿曇連濱子が謀反に黨したといふので、勅して死罪を免じ、その從者野島海人等と共に墨刑に處したと出で居る。其の後入墨の刑即ち黥刑のことは傳へられなくて、徳川時代になつてから、男女に通じて盜犯に對する屬刑とされ、其の刺文の形狀は各藩で異り、殆んど皆腕に線を施された。刑罪書には「江戸入墨の始まりは享保九子年二月十七日被仰渡、同年五月十一日中山出雲守懸に而、長崎町平兵衛と申者、江戸橋之橋杭の卷鐵物を外し候依レ科入墨の上追放に成し」とある。かくて終生消えない文身が、懲戒威嚇の意味から刑罰に用ひられたことは、應報的復讐的刑罰思想の濃厚であつた當時としては、思ひつかれ易い刑罰の方法であるといふことが出來る。且又假令社會の一部であつたとはいへ、文身が世界に類のないやうに發達した徳川時代に、それを刑罰として、廣く用ひるに至つたことにも興味がある。



◎醫學士 森繁吉
◎醫學士 高橋政秀
◎ドクトル 竹中繁之郎
◎ドクトル 近江湖雄三
◎醫學士 井上温
◎醫學士 佐藤得齋
◎醫學士 松村可宗
◎醫學士 伊藤尚賢
先生論

疾病大字典 病氣の事は何でも分る

▽總紙數壹千三百頁四六判クロース製 定價金五圓 郵稅拾八錢

昔は病氣の數を四百四病と云ひましたが今日では其數が非常に增して壹千五百病以上に達して居ります、本書は之等多數の疾患を悉く網羅して其源因、症候、療法は云ふ迄もなく其豫防法、養生法に至る迄出來得るだけ之れを記載するに務めてあります。されば本書壹冊を家庭に備ふれば其書名の示すが如く『病氣の事は何でも分り』恰も日夕名醫を家庭に聘して病氣の相談役衛生の顧問役として居る樣なものです、病氣を未然に防ぎ病氣を輕く濟まさんと欲する方は是非共本書一冊を家庭に常備さるゝ必要があると思ひます。

◎醫學士 菊地林作先生著 ◎醫學士 伊藤尚賢先生著

肺病治療法五十種

▽菊判和裝參百餘頁 定價金壹圓也 郵稅拾八錢

肺病は決して不治の疾病ではありません。治療の方法宜しきを得れば如何なる難症も全治するは醫學上疑なき事實です。本書は古今東西の名醫碩學が研究實驗せられたる奏效確實なる肺病治療法五十種を選み之れを編纂せるものです。

家庭醫學述書合本

小兒衛生篇

定價金貳圓也

- 醫學博士 ?澤 述 小兒病の話
- 伊藤健康相談所長 述 兒童健康增進法の話
- 醫學博士 ?? 述 小兒傳染病の話(上卷)
- ドクトル落合 述 夜尿症と遺精夢精の話
- 醫學博士 ?福 述 小兒傳染病の話(下卷)
- 醫學士五味 述 齒と口腔病の話
- ドクトル竹中 述 性慾教育の話

家庭醫學叢書合本 定價金貳圓也 郵稅拾八錢

婦人衛生篇

- 醫學博士吾妻 述 お產の話
- 伊藤健康相談所長 述 婦人健康增進法の話
- 醫學士高橋 述 妊娠と避妊の話
- ドクトル落合 述 科學的美容法の話
- 醫學士佐藤 述 婦人病の話
- 森醫學士 述 病人看護の話
- 醫學士杉江 述 ヒステリーの話

右二種の書物は婦人として又母親として心得なければならぬ衛生上の知識に就て各專門大家が親切丁寧に口述せられたものです、愛兒と自身の健康を望まるゝ諸姉の一讀をお勸めします。

◎八月號本誌廣告欄に掲載の、『みみずのたはこと』定價壹圓六十錢とあるは壹圓九十錢の誤植
◎同じく『黑い眼と茶色の目』定價壹圓五十錢とあるは貳圓の誤植

發賣所 東京銀座大通 新橋際 新橋堂
電話銀座五九壹番 振替東京二〇〇番
雜誌目錄・衛生書目錄 圖書分類目錄 郵券十錢封入御申越の方へ進呈

山本鼎氏の自由畫教育提唱に對する圖畫教育者側の抗議

圖畫教育改造策としての自由畫の價値

東京女子師範學校教諭　谷鍒太郎

一

教育問題の一としての圖畫教育が、山本鼎君の自由畫唱道を機會として、多少世人の視聽に上つて來たことは、注意すべき現象である。山本君の自由畫は、氏に取つては今や研究の時代ではなく、是が圖畫教育の取るべき正道なりとの確信の下に、現在の圖畫教育改造の大策として提唱されつゝあるといふことは、氏の意氣込に徵するも、又『文部當局を動かして、之をして將來の國定的方針たらしめん』との氏の宣言に依るも、共に極めて明かな事實と思はれる。

此意氣込の下に行はるゝ自由畫宣傳は頗る華々しきものがある。有力なる新聞雜誌乃至は人士を通して、口に筆に展覽會に所在に其雄姿を現はしつゝあると共に、之に呼應する世人も亦尠からずして、圖畫教育の立場から觀れば、殆ど一世相率ゐて之に靡くかの如き概もある。

此主張にして果して正しいならば我等圖畫教育者は他人事ではない、均しく起つて相助けねばならぬ。若し又不當であるならば、同じ圖畫教育の爲めの道とは言ひながら旗鼓相見えねばならぬ苦しい破目に立至るのも、世人の偏見偏解を解かうが爲めには亦止むを得ぬ。事實は果して孰れであらうか。

二

山本君の主張を玩味するに、氏は其出發點に於て一の誤をされつゝあることが看出さるゝ。氏の看察によれば、今日の圖畫教育は概して臨畫教授であつて、干からびた手本を唯一の經典として、教育者一同は之に向つて禮拜してでも居るかのやうに取られるが、これは少しく痛み入つたる看察である。今日の圖畫教

育は左程憐れなものではない。勿論此處でいふ圖畫教育とは、普通教育全般に亘つての事である。

凡そ如何なる事業にしても其道に携はれる者の中には、進歩した者、後れた者、並に其中邊に在る者の三階級位はいつでも其存在を認めねばならぬ。さうして其道に於ける大策の樹立としては、是等の各階級に利害の共通といふことが考へて掛からねばならぬ。これは改めて申すまでもない自明の理であらう。

然るに山本君の立策の相手とせられたものは臨畫本位の階級者ばかりである。圖畫教育に於ける臨畫本位の階級者と言つたら、先づ概して斯界の下級者である。下級者ばかりに着眼したではそれは眞の大策とは言ひ兼ねる。恰かも社會教化事業としての講談、浪花節、乃至は天理教、大本教位の地位にしか受取れぬではあるまいか。一世を支配する宗教的價値にも比すべき雄偉なる事業としては、着眼小に過ぎて、それでは容易に首肯し兼ねるといふのが其眞相であらう。何となれば、若しさる偉大なる値打が其中に存在して居たならば、そは寧ろ偶然であつて、初めから總てを豫想して掛つたでない計畫には正確さがないといふことが、當然の原則として言ひ得るからである。

三

今圖畫教育研究者の先鋒は何れの邊まで進出して居るかを觀ると、畫そのものを最早此科の本體とは觀ないといふ程度にまで達して居る。『ドローキングメソッドは過去の圖畫教授なり』と絶叫して居る人もある。中には此科を最早圖畫科とは呼ばないといふ處さへもある。

斯る階級者の教授は如何なる狀態であるかといふと、恰好や色合ひに對する基礎的にして又一般的なる所得を重ずるといふ點に於て先づ皆一致して居る。さうして更に其目的を達成しやうが爲めに、畫といふ手段も取るが、又畫ならざる手段としては、雛形も使ふ。實物も使ふ、立體的にもやらせて見れば、心理的實驗のやうな方法も取らせて見る。斯くして詰りは、世の中の恰好と色合ひといふ此廣汎にして而かも簡明なる題目に向つて、我等の生活で觸れ得る有らゆる可能の材料と機會とを出來得るだけ充分に利用して行つて、結局人々の內界深くに形と色との或根底を築き上げて、內外相應じて其效果を十全ならしめようといふ處に、其努力を集中して居る。

されば其事績を外面的に觀る時は、工人生活の者は、恰好と色合ひとの判斷工夫の基礎を得た爲めそれが製作上の確かさと趣味の豐かさとに響いて表はれ、商人生活の者は、同じ基礎からそれが商品の排列、店頭の裝飾、乃至は廣告法にまで及んで

其適當と巧妙さとになつて表はれ、農民も生産物に對する意匠の鍵を握つて之に結附ける術を知り、官吏も日常執務に對する形と色との原則に睨んで不當を避くるの途を了解して居るといふやうに、多種多樣の現はれを取るは勿論の事であつて、殊に一般に通じての現象としては、此基礎からして人の日常の技術的活動に根據を得しむるに至り、室內裝飾としても器具の配置としても、什器の選擇としても、服裝の注意としても、隨分食品食卓の上にまでも及んで、恰好と色合ひとの至當にして趣味ある現はれは波及し得て、人間生活の具象方面の秩序は、斯くしてよく整へられるといふ結果に到達して來る。

更に其事績を內面的に觀る時は、恰好と色合ひといふ視覺的事實からして深く人間內部の藝術本能の一面に刺戟を與へて、人の心の奧底深く燃ゆる情熱の動力に一段の精彩と力とを加へしめ、それを以て人間活動の外面的事實の一の基礎を形造らしむると共に、人の精神に潤澤を帶ばしめ緩和を與へ、斯くて物慾と對抗する一の強大なる力たらしめる。それと同時に、一面又聰明なる理智の眼を見開かしめて、形と色との合理的判斷の一切の基礎を養ましむるといふ、此双方が合體して、人格陶冶の一部の役目を略々完全に引受け得る結果にまた到達して來るのである。

此內外兩方面に常に其働が調和し合ふことは勿論であつて、何程內面生活のみを重視し期待した處が、外部的原因が之に向て適當に豐富に具備されなかつたならば、其期待も徒らに空しくならねばならぬし、又何程外面的結果をのみ重んじ期待した處が、內部的動機が之に向つて能く熟さない限りは、徒らに原理法則位でそれ等の運用が出來得べきものでもない。即ち外部的事情は內面的效果を擧ぐる上の唯一の資料であり、內部的動力は外面的效果を擧ぐる上の唯一の基礎であり、互に因と爲り果と爲り合つて相助けて一步一步と推し進んで行くべきものであるからして、其一方に於て缺陷があれば必ずや內外双方の患ひとなり、隨つて圖畫教育としての大體上の不結果を來し易からしめるといふ事は、恰も人が一つの機能に故障を得れば、それが全身の病となつて現はれるといふのと、何の變りもない事であらうと思はれる。

山本君の自由畫の主張は、前記の如く其趣旨に於て斯る圖畫教育の進步的方面を見落して居られると同時に、更に又其先きの缺陷としては、此科の仕事を畫を描かせるといふ狹い一事に殆ど限つて觀て居られる事にある。それは氏の主張の全文を通讀しても、亦氏の催された展覽會を見ても、將た其主張の題目を自由畫とされた事に徵しても、何れも皆斯く斷定することの至

當が思はれざるはない。されど既述の通り今日の新しい圖畫教育の思想からは、こはどうしても否定さるべき事柄である。

抑々內面的效果を擧げんが爲めにも畫描くといふたつた一つの外部的事實を通らせようとすることは、既述の意味に於て材料がそれでは餘りに貧弱であると同時に、反對に之を外部的結果の方から觀ると、畫を描くといふたつた一つの事柄に通じただけの事にしかならぬ。勿論『こは只其根本を培養するまでゞあつて、根本既に成れば之を諸般の事柄に適用する途はいくらでも附く』とは、斯る際に於ける根本論者の常套的な辯明である。されど是も前述の意味で、根本を造り上げてしまつてから其れの應用をやらせると斯く別々に考ふべきではなくて、始めから互に因となり果となり合ふ親密な相互關係を念頭に置いて掛る方が、結果から言つても、今日の思想の行き方から觀ても、共に至當であるべき筈である。況んや今日の教育の傾向はまだ、學校を實生活の準備乃至豫備の場所と觀るではなくして之を始めから實生活の一部と看て、出來るだけ實生活の狀態に近く實生活で行はれる材料を取つて陶冶して行かうといふ趨勢になつて居る。此點から觀ても外部的原因を畫とだけ考へることは、今では餘りに狹隘で且つ超世間的な態度と認めねばならぬと共に、又舊思想に囚はれ過ぎてるものとも言ひ得る譯になつて來る、どうせ自由を主とする態度に出ようとするならば、此際は畫といふ過去の拘束からすつぱりと解放されて、諸般の有形的陶冶を自在に取り得るといふ實際的沃野に放牧されんことを希ふ方が、何程より廣く、より自由な天地であるか知れぬではあるまいか。

さりながら最近本誌所載の山本君の主張には『彼れが中學の課程に進んで認識の複雜と知識慾の爲に描寫がおつくうになり出したのを見たら、勿論強いて畫學をやらせなくともよい。其時期には描寫は從にして知識的な美術教育を主として施すべきだ』といふ文字が現はれて居る。こは自由畫の主張に始めて現はれた畫ならざる手段の承認であつて、其始め氏と會見した時の氏の主張の如きは、初等中學教育を通じて自由畫を以て足れりと信ずるとの斷言であつた。それが斯る方向に氏の思想の進展を視出す以上は、自由畫といふ意味は段々稀薄になつて來ようけれども、其內容は漸次上記の點に近接して來るには違ひなからうと思ふ。こは恐らく推究を重ねる以上、避くべからざる自然の歸結と認めらるゝ。

四

氏の最も主力を盡されてる部分であつて、且つ又世の共鳴の

的とも思はるゝ處は、現時の自由解放の思潮に乘つての教授態度の自由の高唱である。自由畫は殆ど是あるが爲めにこそ其價値あるものとも判ぜられる。

此思想は苟くも現代に盲目ならざる限り、又我等が聊か順應の原則を承認する限り、何人と雖も今日では異議あるまじきものであらう。問題となる處は、只其程度如何に在るのみであつて、當然なる事柄が當然に唱道されたといふに過ぎぬ。只山本君に感謝すべき處は、逸早く此點を提げて世間に向つての疾呼となつたが爲めに、疑つて居るものは醒まされ、頑迷な者も疑ひ出す程度にまでは迅速に引上げられたであらうと言ふ點にある。こは我等當事者には中々容易に出來ぬ業であつて、氏の如く自在に東奔西奔することが出來且つ社會的名聲も有つて居らるゝといふ人にして、始めて都合よく行き得る道と思はれる。圖畫教育界の爲めに此點は氏に深甚の感謝を捧げねばならぬ。

氏と我等と恰も方向を一にする此途でありながら、猶其程度の見解が違ふために一致が出來ないといふ事は、悲むべき現象である。氏の主張は殆ど絶對自由に近いものであつて、教場も内外勝手でよし、畫く材料も任意でよし、教師の指導は無用、批評も無用とせらるゝるのであつて、凡て其行き方は藝術界最近の行き方其儘である。されど此事實は氏が藝術界と教育界との事情の差別を無視された爲めに生じた謬と思はるゝ。

藝術界と教育界との事情の差別の原因として是非共此處に擧げねばならぬ一事は、時間の問題である。獨り藝術のみと言はず總べて一般專門界の研究は朝から晩までの引續きであつて、所謂寢ても覺めてもの事である。隨つて畫なら畫といふ一つの題目に就いては、年が年中考へ通しの狀態にあるものとも言ひ得るのであつて、常に機緣がよく熟して居るからして、見るもの聽くものに連れて獨り自覺し開悟する機會は此方面には極めて多い。然るに教育界に於ける圖畫科は實に一週たつた一時間の課程である。其前後一週間の空隙は生徒は總べて他の學科に考が變つて居て、次の圖畫の開始までには前の事は多くは頭から飛んでしまつて居るのである。勿論飛んでしまふが故に命も續くので、總べての學科を年が年中考へ通しだつたら、教育界はまさしく人間の屠殺場とならねばならぬ。

然るに總じて自覺開悟といふやうな働きは、機緣の熟することを要件とせねばならぬ。機緣の熟するには多くの時日を掛けるといふことが大切の要素となる。毎週一時間の圖畫科などは、此點に於て甚だ便宜少いものであるといふ事は明かに察せられるであらう。此乏しき時間に相當の效果を擧げようとする其處に、教授法の必要は生じて來るのである。即ち或事柄は何時迄

でも自覺を待つべくもないからして、注入的に教へてしまはねばならぬし、或事柄は又機會を與へて開發的に引出す態度も取らねばならぬ。此二つの教授の樣式には輕重はあるが絶對價値はなく、相並んで教育界に必要の認めらるゝといふのも、其原因は此點に存するのである。今更本誌上でぺん〳〵と教授法の講義でもなからうけれども、山本君は専門家だけに、教育界では明白な是等の事實も御承知ないやうであるからして、其爲め飛んだ講習の一幕を演じたのである。

斯る次第で専門界の眼から眺めたならば、教授法なるものは實に不可解な不可思議な現象とも見へるであらうし、又餘計な仕事とも受取れるであらう。されどもこは弱者の食餌に適合する一の必須の消化劑である。前記の事情の下に在る生徒等は、此消化劑なしには營養の攝取が甚だ困難であるといふ事實を如何ともし難い譯である。今までの事實で見ると、専門界から教育界に這入つて來た人はよく無教授法で生徒に對する。されども直きに行詰つてしまつて、間もなく教授法を考へ出すようになる。此事實はそれ等の人々が教育界の空氣に化せらるゝと觀るよりも、自身が行詰つて動きが取れなくなる爲めの自發的反省が大なる動機を爲すものと私は認めて居る。今之に對する一例としては、餘程以前に國語界で樋口勘次郎氏の自由作文といふ主義の行はれた事實を擧げ得る。自由作文は一切の方法を無視することに於て丁度今度の自由畫のやうな行き方であつた。それが又一時は非常な勢で全國を風靡したものであつたが、手段のないのではたと行詰つてしまつて、間もなく火の消えたやうに消滅してしまつたといふ。前車の覆轍は我等は今も鑑みねばならぬ。

兎に角生徒個性の發展や本能の啓發の如き内面的事實に向つて教育者が努力をしやうとする時に、出來るだけ之を抑壓するな、自然の伸長を重んぜよ、自由な天地に解放されたる歡びを以て努力せしめよといふ事は、それは眞理である。されども野生に任せよといふのとは違ひ、無干渉とも異る。之に對して更に助長といふ手段があるといふことを位は、誰しも當然考慮に上せねばならぬ事實である。助長は抑壓とは違ふ。されども良い意味での干渉ではあるかも知れない。此の助長の必要が認めらるゝ以上は其處に助長の種々なる手段の考へらるべきことは亦當然となつて來る。此意味からして山本君の自由畫の方法は、干渉を厭ひ過ぎて餘りに手段なきに過ぎてるといふ事が認められねばならぬ筈である。

更に又教授の手段に感激を主とする興味的方面のみではなくて、他の一面には必要を主とする克己的鍛錬的方面のあるとい

ふ事をも認めて居らねばならぬ。山本君は感銘に因つて自發的に發かせて行くといふ教授の方面は認めて居られるが、必要の爲に克己的鍛錬的に教へて行くといふ方面は考にも上つて居ないらしい。斯くては教育といふ事は片輪になつてしまふ。例へば或成分を缺いて育つた植物の弱々しく青白いやうなものである。若し又斯る必要上からの克己的鍛錬的手段を一切干渉抑壓として排除しやうとする時は、人類は秩序節制を失つて只野性の動くがまゝの行動に移るより外仕方はなくなる。これは今日の思想を以てするも中々許し難い處である、此點の考慮を疎略にして、抑壓を排し自由を重んずるの餘りに、極端から極端の行動に移つて、內面的衝動に任せて只管直觀的にのみ上へ上へと伸びさせ、理屈も思索も克己も鍛錬も顧みられないといふ山本君の思想態度は、氏が厭はれても、やつぱりどうもサンチカリズムと言ふ邊が近いではあるまいかと思はるゝ。

此點に就いて氏は或は『藝術教育は凡て感激に因るべきものであるからして、必要から來る克己鍛錬的態度の如きは寧ろ他教科の事でなければならぬ』と言はれるかも知れないが、此點若し異議があるやうならば、更に他日の細説を期せやうと思ふ。

要するに氏の自由畫主張の主眼點なる描寫に際しての極度の自由といふことは、其稱道せらるゝ辭句がいかにも[illegible][illegible]巧妙であつて、現代思想を迎ふて何物かを渴仰しつゝある世人に對しては、殆ど一杯の鑛泉でも與へらるゝかの如き魅力を有し、一世讃嘆の的となつて居る是が自由畫の標牌であると思はれるにも拘はらず、猶『多方面の考察を缺いて洗錬に不足なる生一本にして生硬な見解』といふことを私は斷言して略々差支ないと思つて居る。

五

最後に一言を添へたいことは、山本君は圖畫教育の改造を策しながら其方法上の事にのみ力を入れられて、其根本を爲す目的の論議には甚だ疎略であつたといふ一事である、これは根本大策の樹立者としては恕し難き缺陷と言はねばならぬ。或は場合に因つては此一事からして、細節を吟味するまでもなく主張の全部が無效にならうも知れぬ。

勿論氏は『圖畫教育は即ち美術教育である』とは再々隨處に斷言せられた。されどもそは方法を力說される爲めのほんの豫備であつて、其處の研究に特に重きを置かれた形跡はないといふことは、氏の宣言と氏との會見より得た私の感想である。若し果して此處に力を注がれたとしたならば、到底斯る[illegible]大の長

白では滿足出來べくもない筈と思はれる。或は今少し分解的に考へて見たくもならうし、又綜合的に組立てたくもならう。既說の目的も現行の要旨も皆併せ參照されて、縱より橫より目的なるものを攻究して見る必要が感ぜらるゝに至るであらう。さうして其結果はもつと綿密な表白となつて來るに違ひない。左樣な事實を現出さないのは、卽ち氏に目的の研究は特に無かつたとする所以である。

畫家たる氏に對して斯る要求をするのは、それは氏の立場を餘りに察せぬ盲目な仕打と或は言はれるかも知れぬ。されども氏を大策の樹立者と觀ようとする時、何としても此點は逸する譯には行かぬ。何となれば、目的は有らゆる事業の根本だからである。

斯くして氏は、輕々に斷ぜられた目的の上に強大な方法の殿堂を打建てられた。其危うさ宛然として砂上の樓閣である。而かも其目的は古來圖畫教育に言ひ古りた事項の一つにしか過ぎぬ。古めかしい感じはするが新味はない。

今や時代の變革は一世の事物を驅つて根底から改造せしめねば止むまいとして居る。存鑿張り假修繕はもう駄目な世の中となつた。此際に當つて只方法上の立策位で改造の大策と認めて居るでは、寧ろ餘りに不徹底ではあるまいか。碎けた喩を取るならば、聊か無性者の化粧といふ嫌ひがある。化粧する前にちと入浴を勸めねばならぬ。

六

以上述ぶる處に因つて、山本君の唱道せらるゝ自由畫なるものは、其聲名の大なる割合には其基礎と其內容とに於て意外に杜撰であるといふことが看出さるる。其原因としては、氏の判斷が直觀的に過ぎて思索の徑路を迴る點、大分の不足あるが爲めと思はるゝ。これは藝術は直觀のものであるからして、氏や我等の如き藝術眉の者には止むを得ず附纏ふ缺點とは思はるゝが、さりとて斯る立策に當つては、何としても思索の徑路が踏むことが多くなくては秩序立つて且つ遺漏ない畫策は出來難いことゝ思ふ。これは必ずしも氏を責めるではなくして、お互に相憾みねばならぬ事實である。

今一つは、氏の論斷が總じて極端から極端へ奔る點に於て亦憾みの深いことである。例へば、臨本主義を排せようとしては、極度の詰込一點張りの臨畫教授が其對象とし揭げられ、之に向つて絕對自由にも近い自由畫主義が對立高唱される。又教授の非を說くに當つては、其最惡な壓制的手段が取出されて教授は總じて三文の値打もないかのやうに扱はれてしまつて、さ

うして一方には寛闊な自由放任の態度が擧示提唱される。模倣は創造への一の通路であるといふやうな事には頓着なしに、一概に之を抑壓主義といふ罪名の下に罰してしまつて、さうして之に對立しては絶對自由に近い創造主義が顯揚呼唱されるといつた段取りで、どうも一般に穏健な中庸性を帶びることが少くて、凡てが餘程極化する傾があるといふことが認められる。若し『穏健とか中庸とかいふ事はそは不徹底を潤色する一の保護色に過ぎない、苟くも徹底を期する以上は、極化する位は當然の歸結である』といふやうな意味で、氏自身之を善い事と認めて居られるならば、『それは極端と徹底とを混同視した誤である』といふ武器を提げて、今一度評つても見ねばならない。けれども多分私は氏の眞意はさうではないのであらうと思つて居る。自分を以て人を推察しては違ふかも知れないが、元來氏も私も文章などの畠の人間ではないからして、いざ筆執るとなると思ひも寄らず言ひ込つたり、言はねばならぬ事を後から氣が附いたりして、我々の作文といふものは中々さう思ふやうには眞意が傳へ切れないといふ不備性を具へて居るものである。此推察にして違はないならば、氏もやつぱり時には私の感じつゝあるやうな、『さう取れたとは思ひも寄らなかつた』といふ遺憾を折々嘗められる一人ではあるまいかと想像する。斯く考へるならば、極端から極端へも強ち推察の附かぬ譯ではない。

斯くして氏の主張に對する私の結論としては、氏の主張を若し一段低い階級のものと見て、圖畫教育界の或階級或積弊だけに向つて救急的に投劑せんとした一の應急療法と觀るならば、それは我等は大體喜んで此運動の厚意を迎ふべきである。されども既述の通り之を圖畫教育改造の大策と看做さうとする時は、此主張ではさる大さとさる深さとは有たぬ、即ち値打のそれに伴はぬものである、さる根本的の大策ならば、自由畫以外の別な形を以て改めて他日起り來らねばならぬ筈であるといふことを、遠慮なしに言ひたいと思ふ。『俺の主張は勿論そんな鹿爪らしいものぢやなかつたんだ』とならば、こつちも詰り買被り過ぎたので、相方笑つて濟んでしまふ話である。

山本鼎君の自由畫を論ず

日本中學校 本間良助

澤柳博士邸に於ける旭川會といふ研究會では五月會に山本君

に囑して自由畫の說明を得た、六月會には自分の創作主義圖畫教育の研究を發表し、次で七月會には再び山本君に囑して質疑應答をして見やうとの事で盛んな論戰があつた。歸途山本君は本問題を本誌臨時號に載せるから、谷君と自分に誌上で意見を述べよとの事であつた。

一

山本君の自由畫論は一藝術的見地、後期印象派的美術觀から教育を律せんとするものであるから、特定した圖畫教育といふ立場から見るならば、そは一の撞論たる事を否定する事は出來ない。圖畫教育史から見ても、或時は舊日本畫美術觀に依て脅威せられ、其餘燼未だ治せざるに今度は新西洋畫美術觀から追迫を受けるといふ感じがしなくもない。今是を論評するに當つて先づ其の標準となるべき我が圖畫教育の立場を略述し、夫れに據つて是非するを最も妥當なる手段と思ふ。徒らに人のあら拾ひをして潔しとするものではない。

今自分の自由畫觀を略述すれば、自由畫は

一、圖畫教育の目的を美術教育のみなりとし、圖畫教育では左樣に局限して居ない事

二、效果を美術思想の涵養なりといひ、圖畫教育では美術に局限せざる視方、考方、表し方等の能力の陶冶にありとする事

三、今日の圖畫教育を臨畫主義なりと斷ずるは撞論たるべき事

四、教授法を無視し、自由放任、不干涉、範畫提示の否定、成績批判の否定、時間の無制限といふ極端なる放任主義なる事

五、個性發揮、創作を標榜するも考方を除外したる創作は創作の低級なるものなる事

六、美術教育は美術家教育に非ず、されど自由畫教授法は宛然たる美術家教授法なる事

七、用器畫を圖畫教育より除外せんとする意見

八、自由畫は小學校に限らず大學迄もといふ意見、

今自分は夫等の逐條審議をする紙數を持たないから、其の中の主要なるものに觸れて見やうと思ふ。

二

少しく專門に涉るけれども圖畫教育を其仕事の方面から言ふて見ると左の三つになる。

（一）視方――外界の物象或は作品を見る

（二）考方――新奇なる形象の考案（意匠、發明）

（三）表し方――圖畫、等の製作

觀方――其對象は物象の場合と――作品の場合とあり、物象に對しては繪畫的に看る場合と、圖學的に看る場合とある。又作品に對しては美術作品を鑑る、（鑑賞）と製圖、設計圖を祇る（讀圖）とある。今心的狀態から見れば主觀的、客觀的抽象的の三者に分ける事が出來る。自由畫ではこういふ穿鑿を聞かないけれど、對象にしては物象のみ、心的狀態からは主觀的而も後期印象派的なるもののみに局限して居る。

(1) 客觀的視方、――物象を自己を容うして線、形、濃、淡、色或は姿態として見るもの（古典的見方）

(2) 主觀的視方――外象を直感的に、色や形といふよりは內容を感じとして、感銘するもの（後期印象派的見方、日本畫的視方）

物象に對する視方が作品に表現せらるれば作品は亦畫者と同樣の感じを看者に與へる。であるから此視方は、物象に對するよりも作品に依てより以上明瞭に說明する事が出來る。由來西洋畫は客觀的表現に持長を持ち、東洋畫は主觀的表現に長所を持つて居るものとせられた。西洋畫は近似の物から云へば寫眞の樣に、形や色や濃淡が恰ゝ實物の如くに表現する事を研究され、東洋畫は描線は曲らうが撓ねらうが色は自然とは可分違さからうが其の直感を變し、感銘を實錄したのであるが、後年日本畫にも西洋畫類似のものが流れ、西洋畫では印象派が感興し殊に後期印象派に至つて形も色も主觀的に表現さるゝ樣になつた。素より日本畫と後期印象派とは感じ方、表現方に於て必ずしも等しくはないけれども、主觀的たるに於ては相等しと言はなければならない。夫等の見方、それを總稱して繪畫的な視方とし、圖學的視方と是を分ける。而して夫等の中何れの視を方圖畫敎育に主として採用せんとするかといふ事は、圖畫科の目的が先決問題として定められてからでなければ動もすれば判斷を誤る事となるであろう。自由畫は目的を美術敎育なりとし、視方を後期印象派的なるものを採らんとするものらしいが、元來圖畫敎育の目的が美術敎育のみではない（後述）から寧ろ客觀的な古典的なものを採用するを最も安當と自分は思つて居る。

(3) 抽象的視方――（圖學的）圖學は抽象の約束である。其組織は科學的である、然しそれは吾人人間の自然の流露から抽象したものであつて、兒童が天眞發露の繪畫、乃至野蠻人の原始的作物を蒐集するならば、所謂繪畫的な表現なると同時に所謂圖學的な表現ある事を氣付かぬ筈はない。人間の顏を描かしむれば、正面圖や側面圖を常に見るであろう。器物の畫には常に其正面圖を、本などは常に平面圖を見るであらう。菊の花を描か

しむれば其花は平面圖に、其葉や莖は正面圖をなすであらう。そういふ氣分それを綜合し整理したものは圖學であつて、彼のエスペラントの樣な理智のみの産物ではない。

されば吾人の物象に對する時、繪畫的に見る觀方と、圖學的に見る觀方とある、從つて繪畫的なるが故に美であり圖學的なるが故に醜であり或は實用であるとのみは云へぬのである。殊に圖學的作品、製圖、設計圖を觀る即ち讀圖力を養ふは工學的基礎能力として必要の事である。自由畫ではこれを數學や博物の補助學科として授けよといふは推論も甚だしい。

三

考方は自分の創作圖畫教育に於ける生命である。少しく自分の主張を聽かしめて貰いたい。一個物を製作せんとする前に其物象を胸裏に想ひ浮べるであらう。一度瞑目する時自分の机の狀形を想ひ浮べる事が出來るであらう。天外萬里の旅程に在つて家居の有樣をありありと想ひ浮べるであらう。夫等の想ひ浮べそれを構象といふ。

其構象は圖畫の經驗なき者でも浮べ得られるけれども、鍛錬なき構象は勝手なものであるのに、それが寫生の經驗を得れば寫生風に構象し、圖學の經驗を得れば圖學風に構象する。そこに圖畫科教養の效を認めねばならぬのである。新らしい圖畫科は正に構象能力の陶冶を中心としなければならぬ。

此力(一)過去の印象の記憶から構象する事が出來(記憶)(二)現在目前の物象を直覺により構象する事が出來(寫生)(三)未見未知の物象を誘導し改良し創作して構象する事が出來る(考方)此三者の中(三)の創作的構象——それを中心とするのが自分の創作主義圖畫教育の旨であつて、夫れが美的に出現した場合、是れを社會的實用上から云へば作畫、意匠、圖案に表現され、工業的に表現されたものは考案、發明となる。普通教育ではそれは社會的實用になるものを望まない迄も、此能力の陶冶に力を注がねばならぬものである。圖畫教育として言へば前述の如く觀方も、表はし方も大切である。然し國家の現狀から考察するならば、我國民が他に優逸せん事に急務なる今日、優逸度を競ふになくて協はぬ創作力の涵養の必要を叫ばれて居る今日は、圖畫科は此考方を中心として國家の急に應じなければならぬといふのである。

創作的構象能力の陶冶。(等しく創作といふが山本君のは單に個性の表現の意、自分のは他より優逸せる自己考案の表現の意)それが美的に表現せられるには美術となり、物體の形狀構造、組合等の上に表現されれば發明となり、職場に表現すれば

職術となり、事件の上に表現すれば計畫となる。山本君の自由畫提示、將又宣傳の畫法となる。斯ういふ能力の陶冶、それは後期印象派美術觀自由畫では養はれ得ぬのであつて、而して圖畫科を措きて他學科に於て企圖し能はぬ國民必須の教養であるのである。

四

表出法は形や色に關する教養には新らしい研究では描寫其物ばかりを墨守しては居ない。或時は言葉に、文章に、或時は手工に或時は實驗に、或時は、草案に、濟書に表出せられて居るので、自由畫の如き描寫一方の不自由なものではない。描寫は自由描寫、用器描寫、の二つあるが、今自分は用器描寫の效を擧げて自由畫と論爭せんとするものではない。茲に一話說がある。自分の友人の小供、五才六才の頃から三角定規を用ゐて隨意畫を描くに興を得、軍艦でも、電車でもボギー車だ、普通車だと要點を捕へて瞬く間に描き上げる。一體子供は直線を引くのは何氣ない樣でも曲ると拙いと自覺する、それをどんどん眞直に出來るんだから面白いわけである。どうでせうか用器自由畫を奬勵して見たら……兒童は藝術家の美しいと感ずる樣な自然觀よりは、汽車や、電車や自動車や、飛行機を一層喜んで描いて居るから。

五

紙數盡くるに垂んとして問題は夥多殘つて居る、夫等の巨細は雜誌「圖畫研究」其他の教育雜誌に詳說する事とし茲に餘白を塡めて自由といふ標題に就て一言して見たい

自由畫……ロシヤ主義……放任教育……初め自分は夫等の學を聞く時、社會にデモクラシーある如く、ボルシエヴイズムある如く、比較的自由放任を許されて居る藝術に據り、圖畫科に根ざして一種の思想を兒童の柔かき腦裏に刻印するものではないかと思つた。山本君の告白にも教育者から怪疑はれた事をいふて居る。それは教育の定規を逸せよといふからである。教授法を無視せよといふからである。言ふ事が過激なるが爲めである。然し直接山本君の謦咳に接して見ると全く思ひ邪なしなんだ。純な藝術生命の發展を希望して居るんだ。君ト臨本廢止を以て滿足すと言ふが、自分はさうは思はない。孔子が其近を布かんとするや先づ少正卯を誅したそれ　んだ。手段なんだ。其の目的は創作を奬める事にあるんだ。君が本誌に告白する樣に左樣に自由なる文字に執着しないのならば綺麗さつぱり自由を棄て創作に歸つてはどうか。徒らに流行文字に纏綿し、保守頭

固を甘んずる教育者に賑さがれる事でもあるまい。

爭はん文かきさして涼む夕
ゆくりなく友はトルストイ說く

自由畫教育の要點につきて

東京府立第三高女教諭　今井作次郎

一　緒言

私は只今中等教育の圖畫科を擔任して居りますから其實際教授者と云ふ立場から山本氏の提唱せらるゝ自由畫教育の要點(夏季特別號所載)について所感を述べ併せて圖畫教育振興に關する愚見を述べたいと存じます。

二　自由畫主義の教育には贊成

自由畫教育と云ふのは兒童の個性に留意して其發堤を助長せしむる樣に導けと云ふに在るらしい、其教授は寫生を本位として學ぶ者本位であるべく敎へる者のための教授であるべからずと云ふこと、此等の趣旨に就ては何人も不贊成の者はあるまいと思ふ。

又其提唱せらるゝ圖畫科の目的が美術教育である、美の感情教育であると云ふ點についても無論異議のある筈はないと思ふ、但しこゝに注意すべきは圖畫科の教授すべき範圍が所謂美術教育のみであるかといふことである、此點については次項に少しく述べて見たいと思ふ。

大體に於て趣旨は誠に結構なことで、我々も從來其趣旨の一部は實現して居つたと思ふ、私は此趣旨を正當に理解して適當に圖畫教育界に採用せらるべきことを希望するものゝ一人であります。

只山本氏の所論を讀むと日本中の圖畫科が殆ど臨畫に偏して無味乾燥にして兒童の心理狀態と合せざる教授法を採て居らるゝ如く感ぜらるゝが、特に小學校の圖畫科が臨畫のみである樣に論ぜられてある樣であるが、我國今日の圖畫教育者が斯くの如き狀態にありとは思はれぬ。けれども之に關して思ひ出したことがあります、私は十年程前初等教育に從事して居つたことがありました、其時に私の郡の聯合教育會に於て一大展覽會を催したことがありました、圖畫も其出品成績の一でありましたが、出品の結果を見ますと二十數ケ町村の兒童成績が悉く臨畫成績であつて只獨り私の學校の成績に寫生畫が有つただけで

した、當時私は及ばず乍ら圖畫教育は寫生に依らねばならぬ、臨畫が圖畫教育の目的ではないといふことを叫んだことがありました。

十年前の小學校圖畫教育は斯くの如く臨畫本位であつたものですが其後今日まで大分の年限を經て居りますから勿論進歩して居ること丶思ひますが、日本中の大部分が十數年前の樣な狀態であるとすれば、山本氏の言を待つまでもなく世の教育關係者は大に圖畫改良のために努力せねばならぬこと丶思ひます。

三　現在の圖畫教員は相當に研究して居る

私は初等教育には稍遠ざかつて居りますから其現狀に就て如何であると云ふことを述べることは避けますが、中等教育に於ける圖畫教員は如何であるかと云ふことを一寸述べておきたいのです。

自由畫教育の要點を讀みますと要點以外に現在の圖畫教員のなしつ丶あることについて餘程說明を要することがあると思ひます　其區々たる皮肉的の語句に就ては一々辯明することを止めますが、大體に於て現在の圖畫教員には無智固陋の者多く型にはまつた教授法にとらはれて無味乾燥の教授をなしつ丶あるかの樣に論じて居られる。實際圖畫教員の凡べてが斯樣な有樣でありませうか？私の知る範圍は狹いかも知れませんがそんな人は只の一人も居ないと斷言したいのです、勿論現行の圖畫教育に弊のあることを認めて居ります、又圖畫教員の凡べてが悉く理想的の教員であるとは云ひませんが、少くとも熱心なる態度を以て始終研究努力しつ丶あると云ふことは大に認めてもらいたいのです、私は獨り山本氏にこれを求むのではありません、汎く天下の識者に之れを訴へたいのです。

圖畫教員の内には圖畫科が普通教育の教科目には編入せらて居るもの丶隨意科の位置に置かれていつも他學科の下位にあるを慨して如何にせば一般國民に効果ある樣に應用し得らる丶かと云ふ理論の方面を研究して其振興策を講じて居る者もあります。

又熱心なる實地授業法の研究者もあります。現に臨畫主義を排して寫生主義を採り十年以來其方針を變へぬ者もあります、此人の許へ或時教科書（御手本式の）運動員が行つて其採用方を依賴したことがあつたとの事です。其時此人の言に曰く『お手本を使うと生徒の繪は拙くなる、僕の學校の生徒の成績を見給へ、此通り上手だらう……』と云つて其成績を示したとの話もあります。ですから日本中の學校で皆お手本ばかりを描かして居る譯のことを思はれては實際教授者として大に迷惑を感ずる

のです。

猶又技術を研いて居る教員もあります、私は圖畫の教員が一枚の製作をするといふことは科學の教師が一冊本を求めて讀むより一層大なる研究と思ふのです、何となれば科學の方面には圖書費として少い乍らも校費で支辨する途がありますが圖畫教員に研究のための繪具代を支給して呉れる學校は極めて少數だと思ふからです。

それからこゝに一言したいのは臨畫教授をなすと云ふことは罪惡であると論評されたことです、斯く云へば臨畫させた教師は恐く罪人扱ひにされることゝなる、成る程臨畫の型に兒童生徒を押し込むのはよいけないかも知れぬが、兒童が他の優秀なる繪に共鳴して描くのに何の無理を作りませう、此心は人間の作り出した藝術といふものを味ふ、即ち藝術を理解する端緒ではないかと思ひます、模倣といふことは兒童の有し居る天性の一であると思ひます、一方に發明、創造といふ働きもあれば又一方に模擬、模倣といふことも認めねばならぬと思ひます、小供が兵隊遊びをするのも、飯事遊びをするのも、あれは模倣ではありませんか、此心の働きを圖畫教育に無視し、拒否するといふのは如何かと思ひます、臨畫と云ふことは此模倣を利用したことになりはしませんか、私は兒童に不適當な臨畫を強制的に教授することには勿論賛成しませんが、臨畫教授をなしたるものに向つて罪人的の言を述べら　たのを聊辯明しておきたいのです。

教科書もお手本式の臨畫教科書を廢することには異議ないけれども、圖畫教育に教科書を全く無くするといふことは其發展上却つて不可ないことゝ思ひます、私は圖畫の内にも技能教授に屬する部分と智識教授に屬する部分とあると思ふのです、それで一般にはこの技能方面のみしか認めて居らぬ樣ですがこの方面だけならば教科書は無くとも教授は出來ますが、智的方面即色彩、圖案、用器畫、美術史、現代の美術工藝等に關する智識を一定の時間内に教授せんとするには適當なる教科書のあることを便利と思ひます。

四　圖畫教育の範圍

圖畫教育といふものはどれだけの範圍に於て教授すべきかといふことについては實地教授者間に於ても隨分區々たる議論のあることゝ思ふ、技能に重きをおく者は主として技術の習得に時を費し、發明創作に利用せんとする者は意匠考案といふために時間を取り、美感の養成に努力する者は此方面に時間を費して居る、又工藝の基礎學科と認めて研究して居る者もある樣です。

斯くの如く圖畫科が各方面に岐れて研究されて居ると云ふこと

とは一面大に喜ぶべき現象であると同時に一方に於ては我國圖畫教育の根本方針に不備の點があるのではないか、私は職を奉じて居る者であるから當局のままに務むべきこれ等の仕事にまで言及して批評することを遠慮せねばなるまいと思ふ。けれども此根本方針が確立して實地指導者、否一般國民に徹底すれば從つてどれだけの分量は其の教授せねばならぬと云ふことが自ら定まつて來ることゝ思ふ。

現今でも圖畫科の課程は示してある、其教授要旨には自在畫を課すべし、時々寫生畫を描かしむべし、又は用器畫を課すべし等としてあるが私は斯樣なことを指示するよりももつと時代の進運に順應した、徹底した方法に依りたいと思ふのです。

山本氏の所論にも圖畫教員の教授法に就いて大分非難して居られましたが普通教育には教育の目的がある、圖畫科には圖畫科の課程がある、其教授要旨に從つて教授して行くのが教員の本分であると思ひます、此方法の惡ければ要旨を改良すればよろしい、其要旨を無視して自由勝手の教授をするわけには行かぬと思ふ。

美を解し美的感情の陶冶は人間を造る上に必要であるといふことは某當局の言明せられたところです、又去る八月十日讀賣新聞に現れたる赤司局長の言と稱する言句の内にも圖畫は美術教育であるとしてあるのです、但し私共の圖畫教授者の立場から見ますと其は美術教育の範圍をどれだけまで採るべきかが問題になると思ひます、即兒童の心意發達に留意して物體を描き表はさしむるといふたことだけに止めて置くか、又は其描き得る能力を日常生活に應用し得らるゝ處まで導くべきであるかと云ふことであります。

私はこゝに於て從來の圖畫教育が如何に變遷して來たかを一言して此問題を解決したいのです。

普通教育が我が國に行はれたのは明治の初年からであつて其時から圖畫科も一科として存在しては居りましたが、明治二十年頃までは西洋風畫に鉛筆畫が本であつたと思ひます、此時代は臨畫の最盛んに行はれた時代であつて日本畫の凡べてが臨畫で行つたと云ふも過言でないと思ひます、それで意匠を練るの考察するのと云ふことは殆皆無と云ふ位であつたと思ひす。

次の時代は日本畫風の毛筆畫が本となりましたが矢張り臨畫が主であつて殆ど臨本模寫を事として居つたと思ひます、此時代に種々樣々考察と云ふ樣な圖が教科書中に挿入せられてありました、これは明治三十五六年頃まで續いたと思ひます、

これまでは其教科書と云ふものは專門家の描いたものです、

それを教師が恰も讀本教授の如く生徒各自に教科書を持たせて第一圖、第二圖と順を追つて描かせて行つたものです、ですから此時代の教授は一種の美術家養成の初歩教授であつたと思ひます。

只今社會の表面に立つて活動して居る有力なる人士の國民教育は此時代に於て行はれたものと思ひます、圖畫教育も斯くの如き狀態に於て實施せられたものです、故に各人が今相當の位置に立つたとき自分等の受けたる圖畫教授を回想して國民生活に何等の効果のなかつたことを思ひ其無意味であつたことを叫ぶのも無理のないことゝ思ひます。

但し明治の中頃から手本に依る圖畫教授は圖畫科の目的を十分達し得らるゝものでないと云ふことを認めた識者が在つて自在畫には寫生を主とせよ……圖畫は寫生の準備として取扱へ……自在畫のみでは日常生活に應用することと不充分であるから意匠を練り考案をなさしめよ……又他の學科と連絡を取りて其補助學科としても効力を表はす樣にすべし、これがためには用器畫其他の理論も必要である……と云ふ樣なことが唱導されて以て現今の樣な狀態に變遷して來たものと思ひます。

ですから圖畫科の民衆化とか、又は日常生活に應用するとか、他學科に連絡をとるとか云ふことは十數年も前から研究せられて居つたことゝ思ひます。

私はこゝで斷言したいのです、圖畫教育の範圍は只單に自在畫を描かしめることで學校の課程を終るべきものでないと云ふことを！

そして今迄發達し來つた其應用方面をも圖畫教育の一部として普通教育に採り入れねばならぬといふことを力說したいのです！

此點については自由畫主義の教育に於ても無論御異議のある筈はないと思ひますが自由畫教育の要點中には此處まで及して居られず寧ろ科學の補助學料たる色彩や、圖案や、用器畫や美術講話等を圖畫科から排斥したい言ひ振りでありますのでこゝにこれを述べるのです。

若し自由畫主義に依つて圖畫を教授することが單に物體を描き出すと云ふことに止まつたならば明治初年から中頃まで續いた圖畫教授法と大差はなくなると思ひます、只異る處は前の臨畫主義が自由な寫生主義に變つただけで美術家教育とは異ると高唱はするけれども矢張一種の寫生を主とした專門家教育となることゝ思ひます、若し圖畫教授が斯くの如くした技術本位の教授となつて其應用方面に就て少しも顧ず日常生活に應用し得らるゝ處は生徒各自の發明に委かせるとして少しの指導もな

さぬとすれば圖畫科教育上の價値は今の程度より半減せらるることゝなりはせぬかと思ひます。

私は重ねて云ひます、普通教育に於て課すべき圖畫科は單に形の描出のみでないと云ふことを!!

それならばどれだけの範圍とすべきかと云ふに私は次の諸項を必要と認めて居るものであります。

(1) 自在畫——形體色彩の觀察理解
　　　　　——形體色彩の描出

(2) 考案畫——色彩形體の發明創造

(3) 用器畫——實用を主とするもの

(4) 美感の養成——日常生活に應用し得る美の理解
——衣服、調度——室內裝飾——其他一般造形美術に
關する鑑賞能力の養成

以上の四項は現今及將來の圖畫教育には是非共課せざるべからざるものと確信して居るものであります。

これだけの條要が何故に必要であるかと云ふことの說明は長きに失する恐れがありますから今こゝには省畧に從ふことゝ致しますが、後に必要があれば發表して是非一般識者の御注意を促したいと思ふのであります。

五　圖畫科の教授時間は不足である

若し普通教育に於て圖畫科が以上述べたる四項の教授を必要とするならばこれを課程として教授して行くのに現在の教授時數で充分であるか如何、私は勿論不充分であると云ふことに躊躇しない、現在の教授時間では不充分であると云ふことは恐らくは天下の圖畫教育者一人も否認する者無からうと思ふ。

現在の時間數では圖畫科の一部分だけでも滿足に教授する事は不可能であると思ふのです、私は圖畫教育に關する各種の議論や研究も聞きましたがまだ圖畫科の教授時間數の少いことを大聲に強く力說した者のあるのを聞きません、何故でせう?

如何に圖畫科の大切なることを云つても、改良を叫んでも効能を述べてもこれを教授する時間がなければ不可能ではありませんか、圖畫科の正に爲すべき條項を認めた以上これを教授するに必要なる時間の要求を叫ぶと云ふのは國民教育のために忠實なるものと信じて敢てこゝに此言を發表し、天下の識者にこれを訴へる次第であります。

今試みに中等學校に於ける圖畫の教授時間を申しますれば、

(1) 師範學校——豫備科一週二時間、本科は一週一時半の割合

(2) 中學校——各學年一週一時間

(3) 女學校——各學年一週一時間なれども最高學年の圖畫科を全く削除

斯くの如く圖畫科は時間數の多い學科の五分ノ一若しくは七分の一の時間だけしかありません。

師範學校の教授時間は割合に多い様にも見受けられますが非常に實地授業の練習等の時間を取れば眞に技能の習練をなす時間は甚少いものとなると思ひます、今日初等教育に於ける圖畫科不振の聲高く一大改良論等の出でて居るのも一つは實地教授の任にあたる者の技術の程度にも依ることゝ思ふ。山本氏は兒童を愛する、愛の心さへあれば圖畫教師の資格ある様に云はれるが技術の學科には技術が必要であることは勿論のことで技術なき教師の技術教授には權威なく、同情なく、感化なきものと認める、恰も科學の教師が科學の力なくして教壇に立つのと同様の結果となると思ふ、但しこゝで斷つて置くことは自己の習得したる技能を生徒に強制的に注入するのが教授法であると云ふのではない、自己の技能を以て兒童生徒を導くために技能が必要であると云ふのである。

であるから初等教育に於ける圖畫科を振興せしめんとせば先づ師範學校の時間を增さねばならぬと云ふことになる。

中學校も同様である。一週一時間——正味は四十分か四十五分——一年間で四十時間これを連續すれば僅か一週間か十日位の時間しかない、一二枚の繪を描けばなくなつてしまう筈である。それも將來は女學校最高學年の圖畫を削られた如く削られはせぬか、甚心細い次第である。若し世に普通教育にはことを口にするのがあつたならば、圖畫科教授、數の現狀に注意せらるゝことを切に希望するのであります、若し圖畫科の効力を幾分なりとも普通教育に認めんとするならば斯くの如き少なる時間で如何にして技術教育を施し得るであらうかと云ふ事を疑るゝであらうと思ふ、世の大教育家教育行政者、一般教育に對する諸君の注意を切に促したいのであります。

技能教育に要する時間は斯くの如く少にて宜しきか如何であるかと云ふことを!!

更に女學校に至つては一層甚しい寧ろ慘めな感じがする。今迄は少い乍らも中學同様一年から最高學年まで一週一時間は在つたが今度は最高學年の時間さへ削られたのである。斯くの如くして今一步を進めば圖畫科は實に一科としての體をなさなくなると思ふ、殊に女子教育に對しては圖畫科の應用せらるべき範圍は廣かるべしと信じて居るのに、斯くの如く減ぜられては到底圖畫科の目的を十分に完成するとは不可能の事と思ふ。

私は微力であります、私だけが斯様なことを申しても無論顧る者はないかも知れません、但し天下には圖畫科の同情者もあることと思ひますからこゝにこの實情を披瀝して一般の注意を喚起したいのであります。

圖畫科の如き學科は教師がなくとも働けるものである、宿題として差支なき性質のものであると云ふ論者もありませう、けれども私は圖畫科の正に負擔すべき課程だけは學校の教授時間内に於て教授すべきものと信じて居ります、宿題は練習應用に屬する部分を課すのが至當と認めて居るものであります、現在の處では此課程の半ばを教授する時間だにないと思ひます、殊に宿題を多くすると云ふことは家庭に於ける仕事の負擔を多くして他學科の豫習復習にも大なる差支を生ずべきものと思ひますから圖畫教授の大部分を宿題となすことには不賛成と表する者であります。

要するに現在の教授時間では圖畫教育を十分有効ならしむるわけには行きません。少くとも現在の倍だけの時間は必要と思ひます。

五　圖畫教育調査會設置の必要

文部當局の某氏は云はれました。圖畫科は美の教育である、人間を造る上に美の要素を涵養して行くことは必要である、故に圖畫科は尊重して居る、圖畫科に就ても常に調査研究して居ると……私は當局に斯くの如き熱心と同情のあることを心強く感ずる者であります、圖畫科の改良振興と云ふことも追々實現されると期待して居る者であります。

けれども事實に於ては先年小學校に於ける圖畫科の一部を必修課から隨意科に削されました、又本年は女學校の最高學年の圖畫科を全く削除してこれを理科と數學とに[illegible]されました、私は理科數學の時間數が多過ぎると云ふ者ではありません、圖畫科の教授時數の餘りに少ないこれを切に感じて居る者であります、當局はこれでも圖畫科の實績は舉がる見込みでありますか。私共はこれに從つて十分努力はするつもりですが如何にしても心細い感じが致します。

これと云ふのも圖畫科の本方針が不明瞭であるからではありませんか、圖畫の如き技能學科がどれだけの時間があればよいかといふ確かなる見込みがないからではありませんか、圖畫科が普通教育に於て占むべき位置は隨意科の待遇に在つていつまでも諸學科の下位に置かるべきものであるか、（それは丁度職員録を見ても圖畫の教員ならば下の方から押して行くのが便利である様に

私は圖畫科の根本方針—圖畫科の範圍—圖畫科の教授時數—圖畫教員の養成—圖畫の視學制度—圖畫教員の待遇等に就て權威ある調査會の設置を天下の識者に向つて叫びたいのです、そして徹底的に圖畫科の教育方針を定めたいのです、彼の自由畫主義と云つても現狀の樣な教授時數や、學科の取扱ひ方ではとても豫期した効果は擧るまいと思ひます。

故に私は此調査會が一部實地教授者の小會合でなく、汎く各般の有力者に訴へて權威ある會とし圖畫科の調査研究をせられんことを切望して止まない者であります。　す八月十二日稿

中澤臨川君を悼む

法學博士　吉野作造

八月九日中澤臨川君は逝かれた。予輩は讀者と共に深く君の訃を悼むものである。

個人として君は十數年來の良友、公人としては實に當代思想界に輝く明星であつた。中央公論は長い間君の思想的活動の舞臺であつたのみならず、殊に晩年に於ては殆んど唯一の論談場であつただけ、讀者は特別の親しみを君に對して有たれたであらう。君の訃は亦實に我々に取つても大なる損失である。

君の世間的の專門は電氣工學である。工學士中澤重雄として君は曾て京濱電車の技師長であつた事もあり、近くは自ら社長として中澤電氣化學株式會社を經營して居つた。此方面に於ける君の造詣と手腕とは不幸にして予輩之を詳にしない。唯ひそかに聞く所に依れば、自然科學の最近の進步に關する二三の著書論文に於て、其道の人々は優に君の專門的智識の亦決して凡ならざるを認めると云ふ。但し此の方はどうであつても、臨川中澤の名は實に人道主義の勇敢なる鬪將として既に大きく當代の論壇に輝いて居つた。君の天分は寧ろ人文の發展を指導する思想的先覺たるに在つたと謂つていゝだらう。

思想家として君に最も卓越せるは、其の態度の中正、健實、眞摯、純情なことである。殊に人生に對する深厚熱烈なる同情は君の談論の全體に溢れて居つた。君の文章がまた之に相應しいものであつた事は、讀者の既に知らるゝ所であらう。

人生に對する同情はまた君の人格をして溫潤玉の如きものたらしめた。君の人格は實に其の思想文章よりも尙ほ貴い逸品であつたことは、知友の齊しく一致讚歎せる所である。予輩は人を信じ人を愛し又人を樂しんだこと君の如きを未だ多く見ない。斯かる人生觀は君に於て想ふに生來のものであつたらう。君は科學者であつた。又或る意味に於ては哲學者であつた。が、君の人生觀は君に於て其科學よりも其哲學よりも先きに在つたのである。君の人生觀は其の科學其の哲學によりて豐富にされた

事は言ふ迄もないが、其の科學其の哲學に依つて始めて得られたものではない。

そこで君と多少でも交際ある我々は、人道主義の不屈の鬪將であつたといふ事よりも、人道主義其ものゝ權化であつたと云ふ事に、寧ろ君の本當の特色を發見せざるを得ない。君が昨今の時勢に棹して更に敢勇一番したのも、畢竟この熱烈なる魂の衝動に促されたものに外ならぬ。尤も君が人道主義の爲に奮鬪された事は近頃に始つた事ではない。最近十年あまりの本誌を通じて靜に君の述作を吟味するならば、蓋し思ひ半ばに過ぐるものがあらう。而して戰後世界の思想界が舊套を脱して將に新粧を着けんとするの今日、君は素志將に成らんとするに多大の希望を前途の光明に繋けつゝ、更に勇躍禁じ能はざるものがあつた事は固より怪むに足らない。不幸にして不治の病魔に囚へられ、肉體は日に日に衰弱を增した。にも拘らず、君の勝ち誇つたる魂は、凱旋將軍の概を以て、最後まで活動を續けて熄まなかつたのである。

予輩はいろ〳〵の意味に於て君の訃を悼む。けれども君が勇躍奮進の光明裡に大往生を遂げられしを觀てはまた多少慰むる所がないでも無い。否我々は寧ろ君の訃に依つて、君の活動の育める多くの魂と共に君の志を大成するの仕事に一層努力するの責任感をさへ強められる。願くは君の志の近き將來に成らんことを。

對支政策の轉回

過般の政變で段祺瑞一派が脆くも全敗し、所謂親日派は根本的に凋落して再起の望無きものとなつた。代つて立つた直隷派が、噂の如く英米の傀儡か否かは姑く措き、日本の所謂勢力が北京の政界に於て特殊の根柢を失つた事丈けは疑を容れない。今や我々は徒らに諸外國の辣腕が羨望的に兎や角云ふを咎めて、此際如何にして局面を我國の有利に展開すべきやを考ふるの必要に迫られて居る。

官僚外交の當局者は、段派の滅亡は必ずしも親日派の凋落ではない、と云ふかも知れない。今度の安直兩派の爭鬪に對しても帝國政府は諸外國と共に絕對的中立を表明した。事實に於て我々は決して政爭の何れの派にも特別の援助を與へなかつた事は疑無い。從つて段派を以て親日派と云はるゝのは我々の迷惑とする所でなければならない。併し之は形式論で、實は過去に於て帝國は餘りに段派援助に深入し過ぎたので、最近時勢の迫る所、已むを得ず方針を變へても已に晩かつた。政府は本氣に中

立を決心したのだけれども、世間では之を信じない。否、帝國の軍人中にも内々段派を援けるのだと考へたものも少からずある。從つて軍人側の意見では、最後まで段派の勝利を確信して居つたではないか。支那の一部の人が、日本現に段派を援けつゝありと傳へたのは、爲めにする所ある流言であつたとしても、肝腎の段派自身が最後まで日本を自派の友と考へて居つたことは、形勢の段々不利となるや曹汝霖の徒をして屢々帝國公使館に足を運ばしめたことによつても分る。支那人が敵味方共に日本を段派の友と見做し、西洋人も亦之を疑はなかつたのだから、最近の中立の聲明は實際に於ては何の効果もなかつた。之れ過去に於て餘りに深入し過ぎた結果である。而して深入し過ぎた事の結果は、單に之ばかりではない。急に方針を一變することによつて、段派自身からも遂に非常に怨まるゝと云ふ事になる。同じやうな過ちをセミヨノフ問題についても之を觀るが、下らないものに引つかゝつて飛んでもない馬鹿を見る事が殆んど帝國外交の一特徴をなすの觀あるは我々の遺憾とする所である。

何れにして目下の北京政府には、日本にとつて何等特別の因縁のないものとなつた。最近まで日本はいろ〳〵の意味に於て外交上優越の地位を占めて居つたが、今や此特權的地位は完全に覆されて、我々は他の諸國と同列に立つて競爭せねばならぬ事になつた。事に依ると他の國が特權的地位を代り取つて居るかも知れない。其上若し過去に於ける特權的地位の過度の利用が少らず支那の民心の反感を買ひ、且つ又之に乘じて種々陷穽の策を弄するものありとすると、日本は可なり不利なハンデキヤップを附けられた譯になる。斯くして外交上相當の地歩を占めようとするには、非常の奮發が入る。況んや我々は支那に對して爲すべき事の多き到底歐米各國の比にあらざるに於てをや。濡れ手で粟の夢からは全く醒めなければならない。賄賂と强壓によつて利權を獲得すると云ふ舊式の手段は全く之を捨てなければならない。卽ち對支政策はこゝに一轉回して、新規蒔直しをやらなければならない。而して新しい方針は徹頭徹尾誠意と公正を中心とすべきは云ふを俟たない。今日の場合、政治的に觀て極めて不得策と思はるゝ小幡公使の段派元兇擁護の聲明が、其卒直の點に於て意外の好感を寄せらるゝに觀ても、如何に支那の民心が誠意と公正を許ぶかゞ分る。國民の決心と外交當局の手腕とによつては今日の不利な形勢を近き將來に轉回するの望みは全く無いでない。

只此際呉々も注意しなければならないのは、過去の失敗を再

び繰り返してはならないと云ふ點である。過去の失敗は誠意の欠缺も慥かに一つの原因には相違ないが、もう一つは支那の時局に對する觀察と見識に大いなる誤りのあつた事を數へなければならない。此點に深い注意を拂はなければ如何に誠意と公正とを看板にしても失敗を繰り返すべきは火を睹るよりも明瞭だ。然らば何が過去に於ける失敗の原因であつたか。予輩は其最も主なるものとして次の三つを擧ぐる。

第一は所謂有力者の勢力を過信せることとである。即ち我が政府は、袁世凱とか段祺瑞とか最も傑出せる人物を選び、之と結んで事を爲すと云ふ方針で一貫して來た。之は獨り支那に對してばかりではない。何か面倒な外交問題が起ると、我國より第一流の人物を派し、對手國一流の人物と秘密裡に會談することによつて事件は完全に始末し得べし、又此方法によつてのみ始末が着き得るのだとするのが、我國先輩政治家通有の思想である。米國に向つてすら、大統領に直談判することによつて總ての困難なる問題が解決が着くと考へて居るのだから堪らない。尤も支那は日本が山縣公の日本であると同じやうな意味に於て袁世凱の支那であり、又段祺瑞の支那であつたことがあつた。併しながら只一人の人を專制時代の君主の如く見做して交渉するに方つて我々は、他面民衆勢力の勃興を觀ねばならず（殊に最近の支那に於て此點が最も著しい）又共和國となつた後の支那に於て最高の地位は兎角他の嫉視を免れ難い、と云ふ現象を觀なければならない。甲と乙と勢力を爭ふとする、甲は丙の力を藉りて乙を討伐した。甲は其地位の安全を計るが爲めに遂に丙をどうかせねばならぬ必要に迫らるゝ。否、之れより先き已に丙は其事あるを豫期して甲に反噬する計畫を廻らす。斯くして甲乙の爭は、やがて甲丙の爭となり、更に又某々の爭を導いて底止する所を知らない。此間に處して最も有力なるものが武力統一の功を全うすると云ふ事は殆んど不可能である。況んや統一の爲めに武斷主義を取るものは、其れ丈け又民間の反抗と憎惡とを強からしむるに於ておや。而して過去に於ける帝國の官憲は此武力統一の可能を信じ、或る一人の有力者を選んで極力之を援くるの方針に出でた。支那をして一日も早く安定を得しめんとした誠意から出でたものであつたにしろ、外面の形は武斷主義の援助となり、而かも事實に於て支那の治平を幾分攪亂するの嫌ひないでなかつた。

第二は主義の提携がやがて情實となり、遂に大局の打算を誤る事である。例へば段祺瑞が支那に於て最も有力なるものにしろ、其一派を極力援くる事の結果、遂に深入し過ぎて段派以外のものは全く眼中に措かない、段派の敵とするものは又自分の

敵とすると云ふ如き目的態度を取るやうになる。段派を援けるのは日支共存を基礎とする東洋の平和の爲めとするなら、此主義の達成が一切の行動の準據でなければならない。此主義から觀て段派の行動に誤りがあるなら斷乎として之を糺さなければならない。場合によつては敝履の如く之を捨てなければならぬ必要もあらう。大義親を滅すると云ふ事もあるのに、一旦援けた以上見殺しにも出來ぬと云ふて妙な所に武士道を擔ぎ出すが如きは、甚だ國家を誤るものである。主義の爲めに或一派を援けるのはいゝ。情實が主義を犧牲にするやうになつては以ての外だ。個人の交際なら格別、公けの行動としては過去の對支政策にに此種の過ちが甚だ多かつたと思ふ。

第三に外交上の方策を利權擁護の犧牲としてはならないと云ふ事である。支那と日本と親善ならざるべからざる一つの理由は經濟的方面にある。故に外交關係の開拓の基礎の上に、各種の利權を獲得するは夫れ自身に於てわるい事ではない。只此獲得の手段方法が、飽くまで公明正大でなければならない。而して其一旦獲たる利權は之を適當に擁護するは固より勿論であるけれども、之が爲めに、外交方針を左右する事は大いに愼まなければならない。而して過去の對支外交に、果して此嫌ひはなかつたらうか。我國は段祺瑞政府と親むことによつて各種の利權を獲た。此利權を確實にする爲めには段政府の存立擁護を便利とする、否必要とする。斯くして我國は段祺瑞一派に向つて過分の援助を與へ以て彼國民心の反感と疑惑とを深らなかつたらうか。餘りに外交方針を犧牲にし過ぎると、利權獲得の原因までが何等か不正の手段で獲たものではないかと疑はるゝ。此點に於て我々は大いに警戒する所なくてはならない。

今後の對支政策はどうすればいゝか。之は之からの問題として更に研究を續けよう。只其先決問題として過去の明白な誤りを再びせない丈けの要心をする必要がある。對支政策の新轉向は先づ以て此警戒から發足しなければならない。

波蘭問題の教訓

講和條約が出來、國際聯盟に關する各種の會合が重ねられても、未決の問題尚頗る多く、動もすれば平和を脅かさんとする陰險なる空氣は、殊に歐羅巴に於てまだ可なり濃厚である。就中、波蘭問題の如きは最近に於て其最も著しきものである。波蘭問題はチエツク・スロヴアック新共和國との國境の制定についても可なりの困難を豫想されたのであつたが、昨今は意外にも殆

西亞との間に大いなる紛援を生じ、之がいろ〳〵な問題と關聯して頗る中歐の風雲を險惡ならしめて居る。

露波紛爭の差當りの起因は、波蘭の無謀なる野心と之に對する露西亞側の憤激にある。波蘭が舊い民族的傳說の無謀なる實現を空想して、不法の侵略主義を試みたことが問題を惹き起した基といはれて居るが、其裏に英佛のブルジョア政治家の陰密の後援はなかつたらうか。而して之に對する露西亞側の憤激も尤ることとながら、彼等は又之を對英佛政策に利用せんとしてゐることは極めて明白な事實である。此れ丈け考へても此問題は決して單純な問題でない事が明白である。從つて此事件は、現に歐米の政治家を悩まして居る各種の複雜なる國際問題の一つの標本と見てもいゝ。斯く觀る時に、我々は此事件の眞相を攻究することによつて、現代國際關係に關する幾多の教訓を學ぶことが出來る。

一體今度の平和を出來せしめた根本の思想から觀れば、波蘭問題の如きは決して解決の困難な問題ではない。所謂平和を腐した根本精神の何かについては本誌に於ても屢々之を述べた。之については根本的に我々と見解を異にする人も少からずあるやうだが、更に我々は近代に於ける世界の人の共通の惱みと共通の悶えと必人道主義の希望に導かれて、過去の歷史に深く根ざして居る幾多反對の思想と惡戰苦鬪して、漸く贏ち得た精神的勝利の記念物と見て居るものである。過去の歷史に根ざして居る反對の諸思想は、無論今尙相當に有力だ。之に對する惡戰苦鬪は今後も永く續くに相違ない。而して之にも拘らず勝敗の數已に明かなりとする我々と同じ立場を取るものもあるが、また惡戰苦鬪の容易に收らざるを觀て、全然前途を悲觀する論者もないではない。斯う云ふ立場の人から觀れば波蘭問題が紛糾し、其他巴爾幹や中央亞細亞乃至東亞に事件が紛糾するのを觀て、當然の現象だと云ふに相違ない。けれども我々は此等の現象は過去の歷史に深く根ざすいろ〳〵の傳統、いろ〳〵の關係が容易に消えざらんとして藻搔く苦悶の現はれに過ぎずして、新精神から觀ればいはゞ產みの苦しみと觀ていゝと思ふ。我々は新精神の最後の勝利を信じて疑はない。只產みの苦しみを出來る丈け輕減せしむることは、新生兒の將來の健全の爲めに必要であるから、今日此儘終始傍觀するを得ない。そこで何が新精神の平穩な發展を妨ぐるかを愼重に攻究して自ら敎へ又世を警むる必要を認むるものである。

平和を導いた根本思想から觀れば波蘭問題の如きは、頗る簡

單な問題だと云ふ事を述べた。何故ならば此等の問題に關する戰後新精神の標準となるものは、民族自決主義であるからである。特殊の民族には人種、言語、歷史、風習等を參酌して當然の範圍を認むべく、其範圍は理論上自ら一定する所あるべきを以てゞある。然るに之が理想通りに行かなかつたのは、各民族に民族的利己心が強かつたからである。茲に於て我々は理想の正道な實現を妨ぐる第一の原因として民族的利己心の旺盛を擧げなければならない。民族的利己心を民族自決主義と共に一様に民族主義と云ふ言葉で總括さるゝ事があるが、之は明白に區別して用語の紛更を避けなければならない。或る民族が過去に於て他の民族を征服した事や、或は他民族の領土を占領した事の歷史に執着して、自家權力の不當なる擴張の承認を要求することや、又は少くとも自家民族の利益の爲めに他を犧牲にするも辭せざらんとする利己的方針を稱して民族主義と云ふ事があるが、併し之は各民族に其民族當然の地位を確保し、彼をして自主的に其運命開拓の任に當らしめんとする意味の民族主義とは根本的に其立場を異にするものである。此後の意味に於て我々は民族主義を現代精神の一面の現はれと云ふ。而して前の意味に於ける民族主義は卽ち之とは全く反對の主義なのである。而して此意味の民族主義が今日尚相當に旺盛を極むることは波蘭が卽ち之を以て誤り、民族自決が未だ之に累せられて、過度の壓迫を加ふるに於て明白にあらはれて居る。匈牙利などに於ては自己の領土が、聯合國側の專獨意志によつて勝手に切り開かれた事に憤慨の情を燃やしたと云ふ丈けで極端に反動的の政府を國民が許して居ると聞いて居る。其他伊太利にしても佛蘭西にしても一度自家民族の利害と云ふ問題になると、卽ち理性が闇まさるゝと云ふ例を我々は屢々觀るのである。所謂民族的利己心が如何に今日世界の聰明を掩ひ、著しく平和を害して居るか、我々は深く反省する所なければならない。どうせ何處までも之で行くのだから我々も亦大いに利己的方針で猛進すべしと云ふものゝあるに至つては沙汰の限りである。

民族的利己心の相當に強かるべきことは講和會議に於ても明白に知られて居つた筈の事實である。之を押へて、公明な、道理に基いた所置をすると云ふのが講和會議の本來の仕事であつたから、此會議を指揮した政治家は、此強い利己的思想と戰ふには十分の勇氣を奮ひ起す必要があつた。然るに彼等は此等の問題は他日の專門的攻究の結果に任かすと稱して、斷然たる決定をしなかつた。茲に我々は第二の原因として各國の政治家が目前の功を擧ぐるに急にして、根本的に禍根を芟除するの勇斷を缺いたことを擧げなければならない。現に波蘭問題でも、若

し講和會議で萬難を冒して國境を定めて居つたら、或は今日のやうな紛擾を來さなくて濟んだかも知れない。尤も各國の政治家夫れ自身が實は皆、利己の塊だと譏る人もあるが、併し餘りに功を急いだと云ふ點に於ては、特に我々はウイルソンに最も多くの遺憾を感ぜざるを得ない。尤もいろ〳〵實際について研究して見たなら、餘儀ない事情もあつたらう。が、今度の問題に限らず一般に政治家が動もすれば現前の事實に威壓されて、理想の所命に勇ならざるの缺點は之を認めなければならないと思ふ。

第三には英佛兩國が餘りに露波兩國の紛爭を利用したと云ふ事實をも指摘しなければならない。あらゆる問題を自國の有利に利用するとは夫れ自身咎むべきことではない。けれども利用に熱中するの極、大局の打算を誤まり、却て無用の紛糾を來すことは殊に之を愼まねばならない。英佛が強いて波蘭を助けんとしたことがいゝかわるいか。之も問題になるが、援けるにしても、兩國は各々自家の立場に執着して援助の程度を同じうしない。英は佛に反し、露西亞にも相當の秋波を寄せた事は露との通商開始が自國の利害に重大の關係があるからであらう。此目的の爲めに開かれんとして居る倫敦會議を中心として英露がいろ〳〵交渉して居つたと云ふ事は佛の餘り快しとする所ではなかつた。とすれば此問題が歐洲全體の平和の上に最も都合よき解決を告ぐるかと云ふ事が主たる問題でなく、どうすれば此問題の解決によつて自國が最も多く利し、又は最も少く傷けられて濟むかをのみ考へるなら、圓滿なる解決を見ないのは當然である。

尤も英佛の此問題に對する政策が一致しても、其儘之を強行し難い事情がある。此兩國が波蘭を極力援助するに決しても、獨逸が兩國派兵の國內通過を許すまい。其外外交上いろ〳〵の障礙があらうが、之にも增して大きな障礙は國內に於ける勞働者の反對である。英でも佛でも各種の勞働者團體は、同じ勞働者の支配する露西亞に味方し、自國ブールジョアジーの支持せんとする波蘭の爲めにする露國との開戰には極力反對を絶叫して居る。英佛のブールジョアジーがボルシエヴイズムを徹頭徹尾嫌つて、盲目的に波蘭を援けようとすると同じく、勞働者は又只勞働者と云ふ名の爲めに、理が非でも露西亞に味方すると云ふ偏僻の態度を固執して居るのは、昨今殊に著しい現象である。理非の辨別を超越して社會階級の間にかゝる盲目的反感の橫溢して居ると云ふ事がまた平和な理性的解決を妨ぐる第四の原因として數へなければならない。勞働者、資本家と云ふ社會階級の間には、現在の事實として超ゆべからざる溝渠あることは疑を容れない。さればと云つて資本家のすることは一から十

まで排斥すべきもの、勞働者のなすことは一から十まで味方すべきものとするなら、世界の人の心の底に新たに芽生えた道理の光りは永久に承服を拒むであらう。西洋の或る社會主義者の團體は只同主義者と云ふ丈けの理由で、幸徳秋水一派の處刑に多大の同情を表し、多額の慰問金を送らんとしたとか聞いて居るが、此處まで極端に行かなくとも、相對抗する二派が、朝に一城を讓れば更に夕に一壘を屠らるるを怖れて、理が非でも先づ第一線を固守すると云ふ態度は資本勞働の爭に於て常に觀る所である。此等の點よりして政治家は國と國と縱斷的に相爭はんとして居る時に、勞働者は各國を通じて此社會階級の間に横斷的抗爭を打立てんとして居る。横と縱と相交錯して事件を紛糾せしむるのみならず、此際には又歷史に據らんとするものと世界的の共通な理性に活きんとするものとの思想上の爭が更に此紛糾の根柢を深からしめて居る。

之を要するに波蘭問題夫れ自身が相當に複雜な問題である外更に戰後新たに起り、此解決を將來の長い苦鬪の後に決せらるべき、而して現に大いに戰はれて居る世界的問題が背景をなして居る。之れ獨り波蘭問題のみに限つた事ではない。玆に我々は講和條約の政治問題が、同時に深く思想問題と相連絡することを知り、從つて之が解決は只だ政治家の手にのみ任すべかざらる所以を知らなければならない。

日本社會主義者同盟

社會主義者同盟の計畫があると云ふ噂を聞いた時、予は自分も或意味に於ては社會主義者だ、若し誘はれたら之に參加すべきであるかどうかを私かに考へて見た。

今日の如く少しでも現在の制度に變更を加へようとするあらゆる改造論を壓迫して居るやうな時代に於ては、社會主義者の大同團結は焦眉の急務に相違ない。苟くも社會改造を說く以上、現制度の根本に觸れるは避け難い。之を一から十まで抑壓するやうな事では何時に改革の實を擧げることが出來るか。而して當局と並びに之を後援する社會多數の頑迷者流は、只熱心な改造論者の結束した努力によつてのみ覺醒することが出來る。して見れば我々も亦之に參加して少しでも同盟の威力に加ふる所あらしむることが必要のやうにも思はるゝ。

併し又翻つて考へると、同じく社會主義の立場を取つて居る人の間にも、我々と根本的に人生の觀方を異にして居る人がある。さう云ふ人々とは到底社會改造の大事業を共にすることは

出來ない。社會主義者だと云ふ事は只一所に高等學校の入學試驗と云ふ門口を突破することに一致したと云ふまでゝある。更に大學に入つて如何なる專門を選ぶかは人々によつて必ずしも同一ではない。況んや根本的に人生觀を異にするものは、改造の意味をどう觀るか、從つて改造實現の爲めに如何なる手段を取るか皆段々違つて來る。此等の點を顧慮せず、只第一步の踏み出しが同じいからとて提携をしては早晩必らず相乖離するに極まつてゐる。傳聞する所によれば、堺利彥氏の如きは、我々はブールジョアジーと戰ふと云ふ目前の急務を控へて居る。根本の人生觀がどうのかうので爭ふて居る暇がないではないかと平常いはれて居るさうだ。文化學會の島中君は「精神運動」と云ふ雜誌で社會組織の改造は、精神問題などを考ふる暇ない程急迫した問題だと云ふやうな事を書かれて居つた。斯う云ふ立場に我々は全然同意することは出來ない。

若し唯物的人生觀を取れば、唯物、改造其物が根本目的だから其上人生觀がどうのかうのと云ふ問題の起る筈はない。けれども我々は繰り返して述ぶるが如く、根本の立場が違ふのだから同じく社會改造の爲めに實際運動を起すにしても、根本の人生觀を同じうするものゝみ結束するを必要と考へて居る。此點を顧慮せずして、一緒に結束しても、其結果は決して永く續く事は出來ないだらう。

之によつて思ひ起すことは今より二十年許り前に、予輩が當時の社會主義者の團體と小論戰を試みた事である。當時予は大學の學生で、社會主義に關し餘り深く知る所はなかつたけれども、折角出來た大同團結から安部磯雄氏が脫退されたのを觀て、氏に對する予の敬意と又團體に對する同情とが、延いて此事件を非常に深く考へさせられた。而して一方彼等の團體の中には木下尙江、石川三四郎氏の如き基督敎を信奉する鬪將があるかと思へば、他方には幸德秋水の如き無神論を力說するものがある。此重大なる人生觀の相違が如何にして社會改造と云ふ重大問題に永く彼等を提携せしむることが出來るかと云ふのが予輩の疑問であつた。後安部磯雄氏の脫退の理由が、仲間の某々一二氏に係る道德問題であつたと云ふ事を聞き、同時に又安部氏は此事を重大視するに反し、他の某々氏は當面の主義には何の關係なき微細な出來事と觀て居つたと云ふ風說を聞き、玆に相容るべからざる二大潮流の現存することを觀て、社會主義者の團體が早晩分裂せざるべからざる所以を或雜誌で論じたのであつた。之に對して專ら辯解の衝に當られたのは木下氏で、我々は主義の爲めに結束した以上、些々たる感情の行違で決して分裂するものではないと說かれたのであつたが、其

後の形勢を觀るに、内情はどうであつたか、又表面の理由は何であつたか知らないが、理想主義者と目すべき連中は、一人一人段々に脱退して、遂に幸徳氏の如き無政府論者のみが残ることゝなつたのである。表向きの理由が何であるにしろ、予は之を以て今尚根本的の人生觀の差は、決して我々を永く同一事業に提携せしむるものではないと思ふ。況んや社會改造事業の如きに於てをや。

して觀れば社會主義者の大同團結の如きも畢竟極めて限られたる範圍に於てのみ、即ち官憲と資本家と鬪ふと云ふやうな、一時的の又消極的の仕事に於てのみ提携し得るので、事少しでも永久的な、積極的な問題に入ると決して提携し得べきものではない。外國と戰爭するといふやうな非常の場合に勞働者は一時資本家の政府を援けたけれども彼等は依然として敵味方であつたやうに、社會主義者も亦少くとも之からは多少永久的に結束するなら、少くとも二つの集團にならなければならない。大同團結は二つの集團が出來た上で初めて一時的に之を試みることが許され得る。我國ではまだ何等の結束も試られてゐないが、併し二大集團に分立すべき要素は十分にある。此意味に於て結束の機運已に熟して居ることを認めながら、漫然たる大同團結には其儘參加し得ずとする所以であり、又私かに其成功をも危む所以である。

小題小言八則

●**炭坑爆發調査の急務**　最近夕張炭坑で續け樣に二回の爆發を見た。外にもちよい〳〵あることで、統計を取つたら全國を通じて毎年夥しい數に上ることであらう。而して之が爲めに犧牲となる人民の損害も亦頗る多い。のみならず之に關聯して幾多の悲劇の伴ふことを思ふ時、我々は悚然として肌に粟を生ぜざるを得ない。そこで考へて見るに、斯くの如き災厄は到底之を豫防することが出來ないものだらうか、少くとも之を豫知することによつて、人命の損失を免れしむることが出來ないものだらうか　今日の科學の力で或點まで之が出來得ない筈はない。之には先づ爆發の起つた度毎に一々之について原因の調査を精密にすることが必要であらう。然るに今日斯の如き調査が行はれて居るかと云ふに、遺憾ながら全然缺けて居ると聞いて居る。無論炭坑の持主からは一通りの報告は來る。が、多くの場合に於ては賠償責任を少しでも減免せんことを願うて爆發の原因を坑夫の過失に歸することが多い。本當の原因は爲めに掩はるゝのであるが、よし斯う云ふ魂膽がない

としても、爆發原因の調査研究は非常に困難な事業であつて、又費用もかゝり人命尊重の觀念なき今日の會社に向つて其精密なる研究を期待するは殆んど不可能である。であるから今日までの所、爆發原因の調査は手を着けられてゐないと云つていゝ。だから豫防等の方法の講ぜられざるも亦當然である。併しながら之は經濟上から云つても、人道の上から云つても等閑に附すべき問題ではない。若し出來るなら爆發の都度、政府が政府の費用で精密なる調査をすると云ふやうな事には出來ないものだらうか。それが出來ないなら、政府の勸告の下に各礦山主の組合を作り、共力で以て專門家に精密な調査を託すると云ふやうな方法が立て得られないものだらうか。遺族に對する給與が段々多くなつて來ると云つて一時勞働者は滿足しても、やがて頻々たる爆發に對しては國家と資本家との怠慢を責むるの時が來るに相違ない。怠慢を責めらるゝまでもなく、何等かの方法を立てることが急務であると考へる。

◎大本教の取締　思想は思想を以て對抗せしむべきもの、若しくは官憲の威力を以て取締るやうな事でもすれば、却て反對の結果を生ずるものであると云ふ事は、政府の、所謂危險思想取締について云はれて居つたが、同じやうな現象を昨今大本教についても之を見ることになつた。尤も取締の對象物が違ふので、一方は取締の結果却て識者階級の間に蔓延して行くに反し、他方は所謂愚民の間にどん／＼擴まつて行く。大本教の如き迷信の出つて來る所以については、先般或新聞紙上で姉崎博士が頗る肯綮に中つた論評をせられて居るが、之が取締についても姉崎博士の説に同感するのみならず予は更に其無能なることを主張するものである。姉崎博士の云ふが如く大本教の流行は時代特有の病弊であつて一時はどんなに盛んでも早晩衰ふべき運命にある。昔一八三三年米國新英州に於てウイリアム・ミラーなるものが、アドヴエンテストと云ふ一派を開いた。基督教會一部の傳説となつて居る基督の再臨が十年後の一八四三年に間違なく實現すべしとて非常に人心を煽揚した。基督の再臨は或意味に於て世界の滅亡である。此時に基督の審判によつて天國に生きんとするものは來つて我が教に投ぜよと云ふ點が一寸大本教に似て居る。之が當時の人心に投じて非常に流行した事は今日の大本教の比ではない。此流行は十年續いた。けれども一八四三年が暮れても基督は來なかつた。それから教勢は俄然として衰へた。今日は更に六派に分裂して違つた意味で餘喘を保つて居る。畢竟斯くなるのが、此種迷信教の運命であらう。

大本教の豫言する大事件は大正十一年と云ふから世間を騒がすのもあと二年餘りの事と見ていゝ。深く顧慮するにも當るま

い。予輩の説く所によれば如何に此敎が流行しても識者階級は依然として輕蔑の眼を以て觀て居る。所謂上流階級に屬するものにして之に歸依せるなきにあらざるも之は姉崎博士のいはるゝ如く思想上の低能兒に多い。外の理由で取締るなら格別、只一種の迷信を流布すと云ふ丈けなら、官憲の取締は寧ろ無用であると考へる。

◉警察官の思想取締　内務省警保局に思想の取締を專門の任務とする警務官なるものを置くと云ふ説が新聞にあらはれた。全く嘘だとの説もあるが、斯う云ふものを必要とする事實はないでない。何故なれば從來の警察官は如何にして不都合なものを取締るかを學んで而かも何が不都合なものであるかを殆んど全く知つてゐないからである。何を取締るべきかを知らずして而かも取締ることを直接の任務として與へられて居るものゝ、必ず陷るに極つて居る過ちは、怪しいものは何でも取締つて置けと云ふ態度である。役人としての差當りの任務を盡すと云ふ點から之程萬全の策はないが、併し菽麥を辨ぜず滅茶苦茶に干渉されては、社會の爲めにならない。何故なれば、官憲の不當なる干渉は個人的創意の活躍を大いに妨ぐるからである。如何にして取締るかの智識の外、何を取締るべきかの智識を十分に具備する特別の警察官を設くることが出來るなら、是非設けて貰ひたいものだ。

◉司法官化石問題　前と同じやうな事は司法官についてもいへる。彼等は罪人に對して法を適用することは敎へられた。併し何が罪人であるかについては、少くとも當今の思想問題については著しく理解を缺いて居る。從つて思想問題に對する刑事裁判の判決を見ると、水を掛けることを知つて何處に火事があるかを知らない消防夫のやうな感がある。鐵砲を打つことを知つてどれが敵かを知らないものが無暗に鐵砲をふり廻すのだから、無辜の良民の流彈に中るものが可なり多いやうだ。司法官養成の方法を根本的に改むるにあらずんば、寧ろ制度を改めて事實の認定は彼等の職分の外に置いた方がいゝ。現在の制度の下に於ても無智の問題に限つては鑑定人の意見を聞くと云ふ方法もあるのに、思想問題に限つて司法官が專門家らしい顔をするのは、滑稽と云ふよりも寧ろ危險である、僭越である。大學敎授の思想を司法官の一存で取締ると云ふ大膽には呆れるの外はない。要するに此點については司法官も警察官と同類だ。只司法官は警察官よりも比較的敎養が積んである丈け、世間は若干此方面の諒解を期待して居るの差がある。でも實際は餘り此期待に應じてゐないから、そこで世間では司法官の頭腦の化石を云々するのである。化石を云々するは獨り大木法相の

みに止らない。所謂法相の失言に對して一部の司法官は非常に激昂し、結束して詫狀を取つたと云ふが、いくら法相の詫狀を取つても天下の輿論は依然として彼等の頭腦を化石視して居る。又化石の事實は詫狀を取つたことによつて變らない。詫び狀を取る取らぬで騷ぐ暇があるなら、進んで自ら頭腦の化石を防止するの工夫を廻して貰ひたい。

●**權限の衝突** 取締ることを知つて取締の意味を識らぬ俗吏の爲す事に、本來の主意に反する樣な結果を生ずる事の多きは怪むを須ひぬ。之に責任回避の横着が手傳つて近頃起つた出來事に、東京場末の某々警察署が互に管轄の形式的所屬の如何を顧慮し合つて、一旦村役場に引渡して假埋葬まで濟ました一婦人の屍體を再び河の中に抛り出したと云怪ふ事件がある。斯う云つた樣な權限の衝突は度々あるが、さう云ふ消極的の權限爭ひばかりでなく、之が己の領分だと同じ物を爭ひ合ふといふ積極的の種類も亦決して少く無い。最近なにがし商船學校を文部遞信の兩省が爭ひ合つてゐるなど云ふ事も其一例に過ぎない。之等の小競り合ひの結果、事務の澁滯を來し無用に精力を浪費するの弊害多きは今更算へ上げるまでもない。幾ら爭つても解決が相當につけばいゝ。つかずば同じものを二つ作るなど云ふ國帑濫費の惡弊となる。陸軍と海軍とが各別に飛行機の研究乃至製作に從事するが如きも亦此例だ。聞く所によると、我國一ケ月の飛行機製造能力は高々數機に過ぎず、而かも一機の壽命は一回試運轉をすればアト三ケ月位のものなさうだ。斯んな事でイザと云ふ際どうする積りだらうか。ウツカリして居るべき時でない。蝸牛角上に形式爭ひなどするをやめて、我々は一日も早く實質に突入すべきではあるまいか。

●**非役壯丁税の是非** 形式に固執する俗論の一例として山梨陸軍次官の非役壯丁税論を紹介しよう。時は七月二十一日と覺ゆ。臨時議會の豫算委員會か何かで、荒川五郎君が兵役の服務を免ぜられたるものに課税するの可否を問ひたるに對し、山梨次官の答辯が斯うだ「兵役を免れたるものに課税すれば、納税の結果兵役を行ひたる者と同樣の感念を生ぜしむる要なしとせず」(東京朝日新聞による)と。納税すれば兵役を免れ得るとする制度ならば此論も一理あるが、兵役を免れ得ん事を翼ふの風ある今日、又免れ得たる事を屈辱とも何とも考へざる今日、あんな議論をしたとて何の效あるか。山梨次官の論理は恐らく、(一)兵役は國民の高尚なる義務にして之を果さゞるは其理由の如何に拘らず一種の恥なる事(二)之を恥とするの感念は兵役を果さゞる者に永く抱いて之を忘れしめざる事が得策なる事、(三)納税は即ち此羞恥の感念に對する責任解除の如

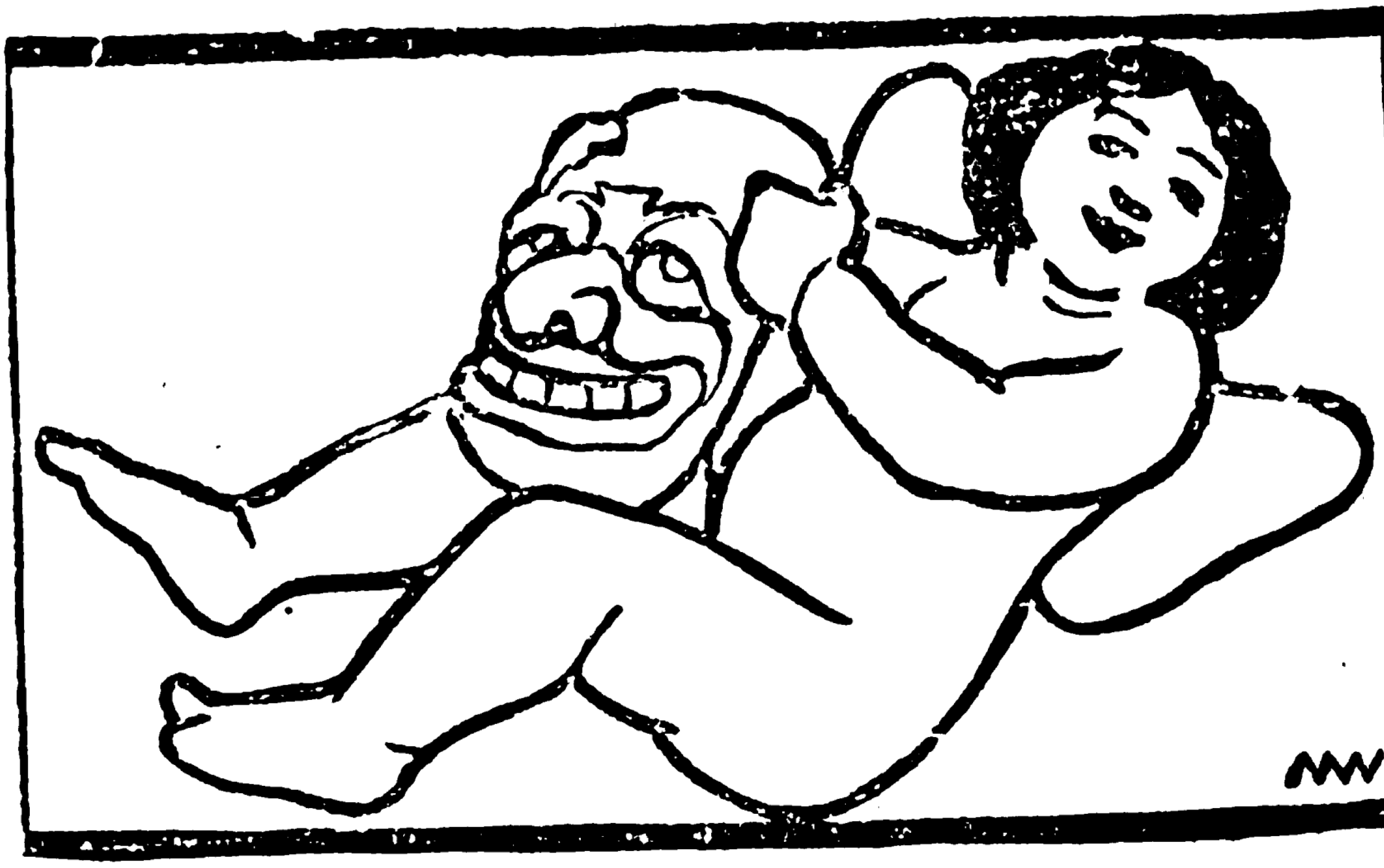
き形となるを以て道徳上面白からぬ結果を生ずる事といふに在るのだらう。併し此は前提が間違つて居る。兵役の義務に關して斯くあれかしと云ふ希望を斯くあるの事實と妄想して居る。事實の觀察が間違つて居るから、納税をさせないからとて國民の兵役觀の上には何の影響もない。却てマザ〳〵好個の財源を失ふの愚を敢てして居るだけの事である。尤も兵役の免除を私に喜ぶの弊風に至つては予輩も當局と共に之を憂へる。が之が對策は自ら別にあるのであつて、非役壯丁税非認說の如きは何の關係もないのである。

●偏狹なる武士道と大局の誤算　支那に於ける直隷派安徽派の爭が何れの勝利に歸するのが、大局の上に好いのか、又此爭鬪に對して日本が嚴正中立を守つたのが得策であつたかどうかは、姑く別問題として、日本が從來否最近まで段祺瑞や徐樹錚を援けたのに今急に手を引いて彼等を見殺しにするのは義に於て忍び難しとするは、一應尤もの樣で而かも之れ程度を誤るの說はない。此點に於て近頃最も奇怪なる說を予輩はセミヨーノフ將軍の參謀であつたといふ黑木豫備少佐の口から聞く、政治上如何いふ理由あるか知らぬが、日本軍の所謂撤退騷ぎは、セミヨーノフ將軍及び將軍を慕ひ其保護の下に生命と財產とを托した幾十萬の土民を非常な窮地に陷れた。今迄世話してやつたものを途中から見殺しにするのは如何にも忍びないから、自分は日本の武士道のために死を決して再び西伯利に走りたい。之が黑木少佐の談として先き頃の新聞に現れたのである。日本の武士道は――少くとも二十世紀の今日に通用する武士道は、腐れ緣に引き摺られて如何さまのものと情死するまでくつ付いて往くことを最早許すものではない。日本政府が大局の打算の上からセミヨーノフを見殺しにするも致方なしと決したる以上、此方針に不服ならば大局論の上から彼を見捨つ可らざる所以を反證せねばならぬ。此立證が出來ないなら、彼れの窮地に陷るは已むを得ずとして、只其私的關係に於て彼の安全と幸福とを謀つてやるべきである。黑木少佐の眞意は恐らく新聞記者が之を誤り傳へたもので、予輩がこゝに同少佐を難ずるが如き態度に出づるは或は失當であらうかと想像するが、果して然らば深く少佐に罪を詫びねばならぬが、只此種の誤りを爲すもの、最近支那の政變に關連しても頗る多いから、或る一部の階級に於ける通弊として之を指摘し置くも強ち無用の業でもなからうと考へる。

●古きものに新しき意義を見出せ　予輩は必ずしも日本の武士道をわるいと云ふ者ではない。併し所謂武士道はもと封建時代に發達したもので、從て當時の思想や風習や

を衣物として着けて居る。之等の衣物を剝がし、一旦丸裸にして新しい衣物を別に着せなくては當世に通用しない。武士道の裡には偉大なる思想がある。之を今日に通用せしめんには、夫れだけの用意が要る。其れには先づ古い習慣や傳統やを一旦棄てなくてはならぬ。總じて一切の古いものを一ト先づ惜みなく捨てなくてはならぬ。古きに執着して居ては、決して新しい意味は發見されぬのである。尤も古いものを捨てたからとて、必ず新しいものが出て來るとも限らぬが、新しいものを引き出すには、必ず一旦は古いものを未練なく棄てなければならぬ。古いものを用捨なく捨て得る人のみ始めて能く新しい意味を見出し得るのである。

中央公論第三十五年秋季大附錄號創作



毒婦のやうな女

正宗白鳥

（一）

その翌日は雨が降頻つたので、事によつたらと座興半分に云つて息込んでゐた七面山登りどころではなく、見殘してゐる名所舊蹟の參拜をも止めて、陸路を俥や乘合馬車で歸ることにした。

「なんなら、もう一晩此處へ泊つて行つたつて構はないんだがね。外を出歩かなくつても、按摩でも取らせて休んでりやいゝぢやないか、近所が靜かだから緩くり寢てゐられるだらう」と、新七は宿の勘定を濟ませて歸り仕度をしながら、まだ氣迷をしてさう云つたが、おかつは同意しなかつた。

「一度極めたんだから、迷はないで早く立つことにしませう。迷ふと決して後がよかないんですから」と云つて、自分で俥の催促をした。

幌を卸した俥の中に一人で身を置いてゐると、おかつは何となく氣輕になつて、むしろ雨天を喜ばしく思つた。……富士川下りの乘合船や、紅葉の色

づいてゐる懸崖山や、癩病患者の療養所になつてゐるといふ深敬病院など、昨日鰍澤を出てから一日がゝりで見て來たさまざまな事物が、旅馴れない彼女には、みんな珍らしかつたのであつたが、身延詣での記念として何にも優つて鮮かに心の中に殘つてゐるのは、仁王門の構內で見たある若僧であつた。

昨夕は食後の腹こなしと土產物の買入れのために、新七に誘はれて、山の夜風の身に染みる寒い淋しい町を散步して、仁王門のほとりまで行つたのであつたが、信心氣のないおかつも、雲の往來が繁くて三日月が忙しさうに出たり隱れたりしてゐる山の端を仰いで、晝間案內者に聞かされた祖師の開山の緣起を思出してゐると、この世ならぬ靈場へ來てゐるやうで、この頃ひそかに思ひつゞけてゐる濁つた思ひも、一時淸められて、あの狂人じみた團扇太鼓の騷ぎも笑へないやうな氣持がした。

仁王門の內は參詣人の捧げる蠟燭の光で明るくて、調子を合せて太鼓を叩いたり拍子木を叩いたりしてゐる婆さんや爺さんの顏がハツキリと見られた。どれも皆な田舍くさい頑丈な人だちで、振動かしてゐる手にも力が籠つてゐた。口々に唱える七字のお題目も彼女の母親などがよく口にしてゐる南無阿彌陀佛の聲に比べると遙かに勢ひがよかつた。見てゐる間に、二十をあまり越してはゐないらしい若い僧侶が入つて來て、取澄ました音聲で事々しい說教をしだした。彼女の立つてゐるところとは距離が遠かつたのでよくは聞取れなかつたが、お宗旨の有難さを說いてゐるには違ひなかつた。

おかつは、あの若さで鹿爪らしいお說教なんかをしてと、人柄に不似合なやうに思ひながら、風にゆらめく蠟燭の火影に照らされて、夢のやうに浮出てゐる若僧の袈裟姿を見てゐたが、その柔和な蒼白い顏は次第に彼女の心を蕩けさせた。あのまゝ木か石に彫つたらいゝ佛樣が出來ると思つたりして見詰めてゐたが、あのまゝ珠數を持つて、若い盛りを

佛樣への渇仰心をのみ萌めて、淋しい山の中で過ごさせるのは惜しいやうにも思はれた。可愛らしく動いてゐる體で、婆さんや爺さんの垢の溜つた耳へ、佛の御利益なんかを説かせるのが惜かつた。

「寒くなつたからもう歸らう」と、新七に云はれて、ふと振返ると、新七の下びた顔がこの時は際立つて彼女の目に映つた。何だつてかう頬が尖つてゐて、それにゲヂ〳〵のやうな眉をしてゐるのであらう？

おかつは伜の中で、かの若僧の柔和な地藏眉や潤んだ眼を思出した。未來は極樂へ行けるにしても、あんな山奥で不味い物を食べてゐるのでは詰らないといふ氣にはならないのであらうかと思ふにつれて、自分が甲府のやうな田舎町で、怠けてゐられるだけの取柄で、いゝ當てのなさゝうな日を續けてゐるのが、いよ〳〵溜らなくなりだした。今に財産を頒けて貰つたら、自分の一存で店が出せるやうになるのだから、それまでの不自由や退屈は辛抱してゐて呉れ、兩親は心が融けてゐるんだから、その中いゝ機會を見てお前に會ひたいとさへ思つてゐると、昨夕も新七は云つてゐたが、おかつは最早さういふ事を有難がらなくなつてゐた。今更男の父親や母親に會つて見たつてはじまらないし、こんな田舎町の商店の主婦になつて齷齪働いたつて何が面白からうぞと思ふやうになつてゐた。理窟もない分別もない、新七と一緒にゐるのが一圖にいやになつた。このまゝ一人で東京の方へ向つて俥を駛らせたら、さぞ清々した氣持になるだらうと、慾も得も棄てた自儘な空想に耽つたりしてゐたが、後の俥の音は、何處までも彼女の跡を追つてゐるやうに、底地惡く耳に響いた。

飯富のある神社の前で俥から下りると、丁度乘合馬車が出掛かつてゐるところであつた。座席も空いてゐたので、二人は樂々と並んで腰を掛けることが出來たが、先客の目が無遠慮におかつの方へ注がれるのを、おかつは煩がつて、茶代の返しに貰つた身延案内記を開けて、何となしに文字の上に目を落してゐた。雨避けの被幕に妨げられて外は見え

ず、車體はやゝもすると激しい動搖を續けるので、兩岸の秋景色を眺めながら川を下つた時のやうな樂みは得られなかつた。

新七は向う側の客の相手になつて、世間の景氣を話合つたり、途中の村々の舊家の盛衰や新出來の富豪を話題にしたりしてゐながら、心はおかつの方から暫くも離してはゐなかつた。女の息の淺さ深さをも絶えず耳に留めてゐた。

「ちよつと本をお見せよ」と云つて、女の手から案内記を取つて、昨日見た寺院や石段の寫眞のある所を開けて見て、

「この本は後でお母さんへ送つて上げるといゝね。お宗旨違ひだけど、何時か身延の事を聞いてゐなさつたから」

「お母さんには榧の飴でも贈つた方がいゝの。この本は私がお詣りした記念に取つて置きませう」

「それもよからう。餘程の決心でやつて來たんだからな。おれの親爺なぞも無信心の方だが、それでも身延の事といふと、土くれをも有難がつてるよ。外の土地へ遊びに行くよりも今度のやうなお詣りを喜んでるだらうから、途中が面倒でも來甲斐があつた譯なのさ」

「今時舟だの馬車だのと、まどろこしい思ひをしてお詣りしたんだから、餘程の御利益がなければ割に合はないわね。」

おかつは何氣なく御者臺の方を覗いたが、すると、富士川の流れと、嶮しい高い崖がちらと見えた。邪慳に鞭打たれてゐる馬は、その崖の方へ向つて驅けてゐるのであつた。乘客を跳飛ばしさうに車臺は搖動した。

「隨分危い所ですわね」と云つて、胸を轟かしてゐると、向ひの客は、前年大雨の後に、この近所で乘合馬車が顛覆して、多勢の怪我人が出來たことを話した。

「この頃はこの街道を重い者を積んだ車力がよく通るから、道がえらく壞れてゐる」と、他の客も調子を合せて、「若い衆さん、氣をつけてお呉んな。ひつくり返されでもしちや溜んねえからな」と、高い聲で云つて笑つた。

「あんまり馬を責めるのもよくねえだ。馬にだつて癇があるから、どんな拍子であばれ出さんとも限らねえ」

左右の人だちのそんな話を聞いてゐると、おかつはます／＼恐ろしくなつた。運が悪くて崖から落されでもしたらどうしよう。自分はこの頃悪い運に見込まれてゐるやうでならないから尚更危かしいと、不安な思ひに胸を騒がせてゐた。

ある立場で長いこと馬車が留つてゐた間に、おかつは厠を借りるために側の茶店へ寄つた。そこは川に臨んだ見晴しのいゝところで、向うから來る渡舟に雨の濺いでゐるのが厠の中からでも見えた。嬰兒を背負つて番傘を傾げてゐる田舍女が激しい雨にも激しい流れにもめげないで、呆けたやうな平氣な顔してゐるのを見て、おかつは臆病な自分の心を顧みた。厠から出ると、被幕（おほひ）の間から顔を突出して茶店の方を見詰めてゐた新七が、手招ぎしながら「早く／＼」と聲を掛けたが、彼女はわざと落着き拂つて、馬車からは見えない所へ身を寄せて、髮を解付けたり化粧紙で顔を磨いたりしてゐた。

渡舟が着くと、客が込合ふからと氣遣つて、わざ／＼茶店の中まで迎へに來た新七に急立てられて、彼女は不承々々に窮屈な馬車の中へ戻つたが、やがて渡舟から上つて來た新たな客に割込まれて、身動きのならないほどに乘り苦しくなつた上に、濡れた汚い衣服や傘の雫で彼女の晴衣をも足袋をも汚された。激しく馬車が搖れるたびに頭の髮をも亂されさうになつた。

さういふことから、おかつの神經の惱むのを、新七は小聲で宥めてゐたが、宥められたりすると、なほ更こんな餘計ないやな思ひをするのも男のせいであるやうに、おかつには思はれた。

（二）

猷澤で名物の鰻でも食べて、緩くりして行かうと、新七は相手の心を汲つたが、おかつは譯もなく歸りを急いで、馬車を下りると直ぐに乘合自働車へ移つた。ところが、運が惡くも、途中で自働車に故障が起つて、一時間あまりも泥濘の中で雨に濡れて待つてゐなければならなかつた。修復の見込がないので、泣出したい思ひをして野道を横切つて、鐵道馬車の停留所まで辿りついた時には、下駄も足袋も泥まみれになつてゐた。洗ふ暇もないので、泥足のまゝで乘つたが、かうなればもう自棄見たいになつて、頭も衣服も搆はなくなつて、べた／＼した腰掛へドカと腰を据ゑて、衆人の注視に不樣な姿を曝して憚らなくなつた。

「日蓮樣のお氣に障つたことがあつたと見えて、ひどい罰を當てられた」と呟くと、

「だから、もう一日彼處にゐればよかつたのだ。せめて猷澤でゞも晩まで遊んで來ればよかつたのに、お前があんまり急ぐからいけないのさ。早く歸つたつて仕方がないぢやないか」

新七はよく／＼の思ひで出て來た旅行が雨のために不首尾に終つたのを恨しく思ひながら、愚痴つぽい口を利くと、

「一日延したつて明日の天氣が當てになりやしませんからね。それに私昨夕は變な夢を見たもんだから、一時も早く歸りたくなつたんですの」

「どんな夢？」

「夢の話なんぞ止しませう」

おふつは先つきとは打つて變つた快活な口調で、身延の山の秋景色や宿の女中の白粉くさい厭味たらしい顔や、乘合舟にゐた繭商人の事などを話して男を喜ばせたが、この旅を最後として自分だけで永久に甲州の土地を離れようと、ひそかに決心を強めてゐると、何にも氣づかないでゐる男の樣子が愚かしく見られた。傍の者の反對にもめげないで自分

を罵つて、籠絡を掛けて來て現れた男に對しては、いくらおかつのやうな女だつて、深い事情もないのに俄かに不埒な考へを起すのを、自分ながら快く思つてはゐなかつたが、すでにさうなつたのをどうすることも出來なかつた。今まで氣づかなかつた醜さが男の鼻にも口にも現はれだした。

よぼ／＼の老婢が留守居をしてゐる假住ひへ歸くと、おかつも流石に安易を覺えた。近所の風呂へ入つて來て、坐り馴れた長火鉢の側に坐つて、鳥鍋で夕餐の箸を執つてゐると、生活の安樂に未練が殘つて、明日の日にも土地を立たうとした意氣込みが衰へだした。縁があつてこんな土地へでも來ることになつたのだから、迷はないで甲府の人になつて宮部の妻として一生を終らうかと氣を取直して、男の心を突つくやうな口は利かなかつた。

「昨夕お前の見た變な夢つて、一體どんなのだい？」と、新七が氣にかけて訊ねると、

「人の夢なんぞ執念深く訊くもんぢやありませんよ。歸つて來ると何事もなかつたんだから、私すつから安心しちやつたの」

「お前は時々突然に脅かすからいけない」

新七も安心した。そして、宵の間に兩親や兄のゐる櫻町通りの店へ顔出しして來ることにして、食事が濟むと滿腹の腹を撫でながら「別段用事はあるまいから、今夜は早く歸るよ」と云つて座を立つた。

おかつは獨りでゐる間には退屈醒ましに細工をしたり手習をしたりしてゐるのであつたが、今夜は疲れてゐるので、長火鉢の側へ枕を持つて來て横になつてゐた。すると、隣りの二階から耳馴れた琵琶唄がガヤ／＼と響いて來た。川中島の合戰に引續いてお極りの石童丸が唄はれた。

「あれにも飽き／＼したよ。彼處でやる琵琶唄には氣の利いたものは一つもありやしない。それにあんまり使ひ過ぎる

から機械が壞れたと見えて、いやな音を出すぢやないの。たまには新しいのを仕入れて來たらいゝだらうにね」と、鐵瓶に水を差しに來た老婢の方へ目をやつて云つたが、老婢は何の感じもなさゝうに、

「左樣ですね」と卒氣なく答へた。

「あんたは昨夕一人でゐても淋しかなかつたの、おつるさんも遊びに來なかつたの」

「いゝえ、誰れも來りやしません。宵に早くから戶を締めて寢ました」老婢はさう云つて臺所の方へ行きかけたが、ふと後戾りして思出したやうに、

「さう云へば今朝旦那の兄さんがこの家の前を通つてゐなさつた」と、聲を潛めて云つて、「私が御掃除してゐる時に、家の前に立つて此方を見てる人があつたから、誰れか知らんと出て行つて見ると、もうゐなくなつたんですけれど、どうも櫻町の若旦那のやうで御座んした。朝早く何處へお出でなさつたのか……」

「老婢さんは櫻町の方をよく知らないと云つてゐたぢやないの。どうしてそれが分つたの。」

「先日おつるさんと一緒にお使に出た時、途中で櫻町の若旦那に會ひましたんです。おつるさんが指差しゝて、あの人が此方の旦那の兄さんだよと敎へて吳れましたから、一心に見ときました。」

「さう?。どんな人なの。此方の旦那樣によく似てるんですか」

「そりや御兄弟だから似ていらつしやるんでせう。御立派な方ですよ。色の白い目の大きな、それで此方の旦那樣よりも脊が高いやうに思はれました」

老婢の言葉が例になく熱を帶びてゐたのを、おかつは不思議に思ひながら

「そんなに立派な人なの?。だけど、あんたは目が薄いから、ちよつと見たくらゐぢやよくは分らないでせう。なんだ

か當てにならないわね」

「ぢや、おつるさんに聞いて御覽なされ。私の目がいくら惡くつても、闇夜でゞもなければ、人樣の顔ぐらゐよく判りますさ。それを疑ひなさるんなら、姉さん御自身に櫻町のお店の前を通つてよく見ていらつしやればいゝ。」

「さういきり立たなくつてもいゝわよ。……御立派でも貧相でも、お色が白くつても黒くつても、どちらでもいゝことなんだからね。」

「でも、おつるさんはあの若旦那のことを褒めちぎつてゐますよ。主婦と連らつて歩いてゐなさる所を見ると、若旦那がいとほしくなるなんて云つてゐますよ。私は主婦は一度も見たこと御座いませんけど、あの若旦那に釣合ふやうな女は、こんな土地にや一人もないだらうと思つてゐますんです」

「また老婢さんの惡口がはじまつた。あんたの口にかゝつちや甲府も塞無しだけれど、この近所にもいゝ女がゐないこともないわね。佐渡屋の主婦さんもあく抜けがして意氣な姿をしてゐるし、角の洋品店の娘さんも齒にはみそつ齒だけど目が何時も笑つてるやうで愛らしいぢやないの。」

「なんだな、あのくらゐな容色が」と、老婢はせゝら笑つて、「あのくらゐな女は、東京なら軒並みにゐますさ」

「まさか」と、おかつは口では云つたが、腹の中では老婢の言葉に同感してゐた。そして、「あんたはこの土地にずつとゐる氣になつてるんでせう。たび／＼惡口は云つてゐても」と訊くと、

「それは姉さんがゐなさるのなら、何時までも御厄介になつてゐたいと思つてゐますけどな。……成らうことなら、まだ足腰の自由が利くうちに東京へ歸りたいと思つてゐますのです。あなたはまだ御存じないけど、甲府の冬の寒さつたらそれは格別なんで御座いますよ。私のやうな瘦せつぽちの老人には隨分に應へます」

「さうでせうね。四方が山ばかりなんだから」―

よほど〳〵の老婢でさへ都を戀しがつてゐるのが、おかつには可笑かつた。で、一しきり二人で東京の話を何といふことなしにしてゐたが、暫くして老婢が臺所の方へ行くと、おかつはふと思立つて、手習机を火鉢の側へ持つて來て、東京の母親へ宛てた手紙を書きだした。いろ〳〵な譯から親子の仲はいゝ方ぢやなかつたけれど、久しく別れてゐると、流石に懷かしいこともあつたので、筆を採ると、あれもこれもと書きたいことが胸の中に簇がつた。手習ひを勵んで字が上手になつたところを見せてやりたいといふ氣にもなつた。先づ身延詣でをしたことから、山々の秋景色の美しかつたことを書いて、それから最近の自分たちの生活の平穩無事なことを書いて、「喜んで下さい」と、浮かと書積けたが、「喜んで下さいも變だ」と、自分の筆の跡を見詰めて馬鹿々々しい氣がした。お母さんの方でも、それほど氣樂な生活をしてゐるのならもつと小使錢を寄越したらいゝぢやないかと云ふだらうが、此方のお寺詣りだつて、人に羨ましがられるほどの面白いことぢやないのだもの。

「東京が戀しくなりました。氣の合つた話相手もないのに、こんな田舍の町に小さくなつてゐるのは心細くなりました」と、書いて見たが、それはお前の勝手ぢやないか、誰れも無理に勸めたのぢやなしと、母親の方で云ふだらうし、自分も母親や兄妹に弱々しい心を見せたくはなかつた。

で、いろ〳〵に苦惱んだ揚句に、おかつは、書きかけの手紙は反古にして、新たに、簡單な時候見舞を述べて、榧の飴を附届ける次第だけを書いた。榧の飴は小包にした。そして、風呂へ出掛ける老婢に托して、郵便局へ持つて行かせた。

（三）

横になつて默つてゐると、次第に疲れが出て來て、このまゝグッスリ眠入つてしまひたくなつた。せめて今夜だけでも新七が櫻町の本宅の方に泊つて此方へ歸つて來ないで、自由な獨り寢をさせて呉れゝばいゝがと、おかつはこれを差當つての肝心な望みとしながら、ウト〳〵してゐた。降頻る雨の音が彼女を眠りに誘ふばかりで、外には物の音はしなかつた。老婢は何時ものやうに長湯をして容易に歸つて來なかつた。

戸の開く音がしたやうだつたので、おかつはふと假睡から醒めて顔を持上げたが、誰れも入つては來なかつた。「老婢さん」と聲を掛けたが返事がなかつた。夢だつたのかと思直して再び枕に就いたが、何だか氣になるので、戸口へ出て見ると、老婢が軒先に立つて誰れかと話をしてゐた。おかつが顔を出すと同時に、その影のやうな人間は、「左樣なら。お大事に」と、四十を過ぎた女のやうな聲を出して、傘を傾げて行つてしまつた。

「あの人は誰れなの。御近所の人?」と訊ねると、老婢は口の内で曖昧な返事をして、茶の間の方へ急いだ。そして、火鉢の側へ坐つてから、譯ありげな忍び聲で、

「あの人は元八日町の塚本さんのお店で御飯炊きをしてゐたんだけど、この頃は娘がいゝ所へ緣付いたから、其處へ手傳ひがてら掛人になつて行てるんでせう。お湯屋の前で行會つて久振りに話をして見ると、此方樣の事もよく知つてゐるのに驚いちやつたんです」

「立話が隨分長かつたのね」おかつは老婢の方からこそ餘計なお喋舌をしたのであらうと察して、皮肉な目を向けたが、老婢は氣にもしないで、

「塚本さんでも臺所の方の人手が足りなくて困つてるんださうですよ」
「それで、あなたに助けに來て呉れと云つたんぢやないの」
「いんね。さういふ譯ぢやありませんです」
老婢の言譯は暗かつたが、おかつはどうでもしろといふ氣になつて追窮はしなかつた。いかにも大儀なので、今夜は寢床をも老婢に延べさせて、新七に構はないで枕に就いたが、すると、老婢も湯上りのいゝ氣持でコクリ〳〵居眠をしだした。
そこへ、雨を冒して歸つて來た新七は、重苦しい思ひに屈託して、冴えない顏をしてゐた。おかつは早寢の言譯をしながら枕を離れなかつたが、新七が直ぐに寢室へは來ないで、長火鉢に寄りかゝつて煙管をいぢりながら默つてゐるのを、不斷と違つたことゝして變に思つて、
「あなたはどうかなすつたの。櫻町で變つたことでもあつたんですか」と訊ねた。
「さうでもない」
「ぢや何を考へてゐらつしやるの」
おかつは打遣つて置く譯にも行かなかつたので、寢卷の上へ羽織を引掛けて火鉢の側へ寄つた。そして、茶を入れて、濃いのを自分でも飲んで、たるんだ目蓋に力を入れた。
「私の事でまた六ケ敷いお話があつたんでせう」とおかつはわざと微笑を浮べて輕く云つた。
「格別六ケ敷い話つてこともないが、親類の奴がみんな舊弊な分らず屋なんだからね。この土地の習慣で親類が巾を利かせて餘計な差出口をしこいけないんだ」

「そのことはたびたびあなたから承つてよく分つてゐますさ。今夜のお話を腐さないで聞かせて下さいな。聞きやしませんよ」

女が平氣でゐるのに新七は力を得て、「傍で愚圖々々云へばまた東京へ出掛けるまでのことさ。……だけど、折角親密の方で預けてやうつていふ身代を棒に振つて他國へ行くのも辛抱氣がなさ過ぎるからね。どうせもう少しの間の辛抱だから、蟲を殺して待つてるんだね。そのかはり此方の物になつちまへば、大つぴらで何をしようと勝手な譯さ」と、自分で慰めるやうに云つて、「……それで明日の日にでも親爺がお前に會ひたいと云つてるんだから、お前もそのつもりでゐてお呉れよ。おれが店へ出てる間に、自分だけこの家へ來て會はうと思つてるらしいから、何時來られても構はないやうに、油斷しないでゐてお呉れよ。不斷云つてる通り、親爺は極端な質素好きで、今風な贅澤は非常に嫌つてゐるんだから、そのつもりで身つくりをしてゐてお呉れよ。質素な風をして家の中をキチンと整頓させて、働くことには骨を惜まないつていふ樣子を見せれば、親爺はそれで滿足するんだ。六ケ敷い注文はない、至極簡單なものなんだ。」

「でも私には大役ね」

「なに。親爺やお袋はおれの云ふことを信用してるんだから大丈夫さ。親類の奴が誤解してるからいけないんだが、此方で眞心さへ持つてれば、親爺だつてさう世間態ばかり苦にすりやすまいよ。」

身を堅めてこの土地で店を出すことに極まりさへすれば、相當の資本を出して貰へるし、二人しかない兄弟の一人として、財産の分前も少くはないことを、新七は何時ものやうに女の心を引立てるために話した。一人だけあつた娘が年頃になつて死んでからは、一層二人の子供に執着して、弟の新七を膝下から離して他郷で何時までも學問などさせて置くには堪へられなくなつた父親の氣休めのために、新七も一先づ小さな商人にでもなる氣になつてはゐるものゝ、未永

くこの田舍町で過す覺悟をしてゐるのではなかつた。

「今のやうに兄貴の下で働くんぢや張合ひがないが、自分が主になつてやる日にや商賣もなか〱面白いもんだよ」

今更珍らしいことではないが、新七の說明を聞いてゐると、おかつも財產家の妻になつて、兄妹や知人に對して肩身の廣くなることに心が動かないことはなかつたが、一心を籠めてこの幸運を取逃さないやうに努める氣にもなれなかつた。

長い一生新七に連れ添ふことの懶さが感ぜられるのをどうすることも出來なかつた。靜かな茶の間で男と差向ひで、將來のいゝ事を聞いたり聞かされたりしてゐながら、樂しい夢心地にはなれないで、しまひには返事をするのも大儀になつてしまつた。

「今日はいろんな目に會つた。そのせいだか、一日が大變長かつたやうに思はれてよ」

おかつがさう云つて欠伸をすると、新七もそれに誘はれて欠伸をした。

翌日新七は、前夜注意したことを、も一度繰返して、日々の勤務としてゐる櫻町の本宅（印傳の大問屋）へ出掛けた。初めの間おかつは角帶に前垂の商人姿を外套で包んで、古い鳥打帽子を被つて出て行く男を見送るたびに、いた〱しく思つたり可笑しく思つたりしてゐたのだつたが、この頃は男の樣子がスツカリ田舍商人らしくなり切つたのが不愉快に見えだした。

「本當に櫻町のお父さんが訪ねて來るのか知らん」と思ふと、自分の境涯が顧みられて心が引締つて來たが、素直に男の差圖に從つて、父親を待つてゐるのが馬鹿らしい氣がして、田舍の頑固親爺の御機嫌なんか取るには當らないと、譯の分らない不平の端くれをそんなことに對してでも洩らすつもりで、わざと身裝をつくろつて待つてゐることにした。

空が奇麗に晴れて山々の眺めは美しかつた。おかつは無駄足を厭はないで藝者町の風呂屋まで行つて朝湯に入つて來て、丹念に化粧に取掛つた。此方へ來てからも時々結つて、彼女には似合つてゐるとおつるから云はれてゐる女優髷にわざと結つた。

「姉さん、申兼ねますが、ちよつとお時の家へ行かせてお吳んなさい。午餐前に屹度歸つてまゐりますから」と、老婢は賴んだ。

「あゝいゝとも」

おかつは快く許したが、老婢が昨夕の立話に釣られて給金のいゝ所へ行かうとしてゐるのを察して、「よぼ〳〵の癖に何て慾が深いんだらう。此處を止めたら東京へ行きたいと云つてゐた口の下から直ぐあゝだから呆れてしまふよ」と、鏡に映る自分の顏に向つて呟いた。

鐵瓶に湯を滾らせて、茶や菓子の用意をもして待つてゐたが、時が立つにつれて、新七の云つたことを眞に受けて、訪ねて來る譯のない人を待つ氣でゐたことが馬鹿らしくなつた。こんな時におつるさんでも遊びに來れば、折角おつくりした甲斐があるのだがと思ひながら、退屈晴しに格子の間から表通りを見てゐた。往來の人々に目をつけて、服裝や顏形をひそかに批評してゐたが、暫くしてふと、格子戸が開いて「御免」といふ聲がした。

さては父親が來たのかと驚いて、おかつは氣取つた返事をして愼ましやかに障子を開けたが、土間に立つてゐたのは老人ではなかつた。新七の兄の幸吉であることは一目で察せられた。

「櫻町から來たんですが、上つてもいゝですか」

幸吉は極りの惡さうな顏して云つた。

「さあ、どうぞ」

おかつは茶の間を通つて奥の座敷へ客を導きながら、弟とは似もつかぬ兄の水際立つた目鼻立をウットリ目の先へ浮べてゐた。

「いろ／＼お世話になりまして」と小聲で挨拶して、お茶や菓子器を運ぶのに手間取つてから、闘の側に小さくなつて首垂れてゐたが、生れてはじめてかういふ男に近づいたといふ意識は、彼女の胸を涌立たせてゐた。

「あんたにはもつと早くお會ひせにやならん筈だつたのだが、出抜けに此方へ上つてもどうだらうかと思つて、御無沙汰してゐました。……東京からこんな田舍へ來て暮すのは不自由でせう。」

「いゝえ、別段不自由な思ひはいたしません。……ですけれど、毎日何もしないで遊んでゐちや妙利が盡きるやうに思はれてならないんで御座いますわ。お婆さんなぞお斷りして自分で家の事をしたいと終始思つてゐますのですけど」

「あんた一人で留守番してゐちや淋しいでせうから」

幸吉は彼女の母親の住所や兄妹の身の上について訊ねたが、それは通り一片の話題としたばかりで、深い意味を含んだ質問ではなささうだつた。おかつの方でもいゝ加減に調子を合せてゐた。そして、相手の方で肝心なことを云ひ出さうにしては控へ／＼してゐるのに氣を留めながら、肝心な話を待ちあぐんでゐたが、やがて、

「私はたとへこの土地で一生を暮すことになつてもよろしいんですけれど、私が此方へまゐつたゝめに、お宅の皆さんに御迷惑を掛けちや濟みませんから、何時でも東京へ歸らせて頂くやうに新七さんにお願ひしてるんで御座いますよ。」と自分の方から切出した。

「あんたの方からさう云はれると話がしよいんだが、私の家にはいろ／＼込入つたことがあつて、結婚どころではない

些細なことでも商人の一存は容易に通らないことになつてゐるんです。何もあなたに經緯をつけて彼此云つてるんぢやないから、その點は誤解しないやうにして頂きたいんだが、たゞ最初に親の許しを得ないでこんなことになつたのが、一概に新七の不始末になつてゐるんです。普通の家なら何でもなしに收まつて行くんでせうが、私の家は例外に面倒なんで困るんですよ。……無論落度は新七の方にあるんだから、あんたの考へはよく承つて、私どもの方であんたに對して盡すだけのことは充分に盡す氣でゐるんです。だから腹藏なく、あんたのお考へを私に明して下さい。私が責任をもつてあんたの面目を潰さないやうにしたいと思つてるんですから」

幸吉が言憎くさうに云ふのを、おかつは遊び半分に聞いてゐた。今から一月も前であつたら、そして相手が幸吉でなかつたなら、持前の負けん氣を出して、「手切金でも出せばいゝと思つてゐるのか、金づくでどうでもなる私ぢやない。田舍者のくせに人を見くびるな」と、芝居染みた啖呵を切るか、それとも泣崩れてこの色戀に執着するところなのだが、今の彼女はそれほどには心を取亂さなかつた。

「新七さんはあなた方にどう云つてゐらつしやるんでせうか」

おかつは落着いてさう云つて、顏を上げて相手を見詰めた。濃い眉や高の鼻が凛々しい男らしさを現はしてゐたが、近づきがたいやうな怖い男でないことは先つきからの話振りによつて分つてゐた。少し含羞(はにか)んだ眼差(まなざ)しは弟とよく似てゐながら、見てゐると身震ひされるやうな色氣をもつてゐた。

「新七の心はあなたにはよく分つてるでせう。あれは嘘を吐く男ぢやない。あれが兩親や兄や親類の者の信用を得ようと思つて、毎日店へ出て來て仕事に身を入れてゐるのを見てゐると、私も兄として不憫でならないんです。兩親だつて新七の心は酌んでゐるんだが、表立つてあなたと結婚させることはどうしても出來ない譯になつてゐるんです。あれは

まだ店の者はよく知らないから、自分の家が可成りの財産家ででもあるやうに思つてるんだらうが、私どもの商賣は見掛けばかりで、財産なんぞあるものぢやない。この家で別世帶を今まで持續けて來るために、あれも隨分苦しい算段をしてゐるやうです、」

幸吉はさう云つた後で、ふと調子を變へて、「それとも、あんたはどんな貧乏暮らしをしようとも、大びらに新七の妻として世間が通れなくつても、一生弟に別れないといふ覺悟をしてゐなさるんですか」

「兄さんは何故そんなことを仰有るんですの」と、おかつはふと氣色ばんで、「私が納得づくで新七さんに附纏つてゐると、お宅の皆さんは思つてゐらつしやるんですわね。私はそんなさもしい量見を持つてやしませんから、それだけはハッキリ申上げて置きます。」

「それはあんたの誤解だ」幸吉は慌てゝ打消した。「私が今日突然に此方へ上つたのも、兩親や新七には內所なんで、私の一量見であんたの考へをよく知つときたいと思つたためなんだから、氣を惡くしないやうにして下さい」と云つて、座を立ちさうにした。

「私なんだか腑に落ちませんから、もつとハツキリしたお話を承りたいと思ひますの。私がこれつきり新七さんにお目に掛らないで、今日の中にでも東京へ歸ることにしましたら、それでお宅の皆さんは御安心なさるんでせうか。新七さんも私も將來を樂みにして、かうして仲よく暮して居りますのに、藪から棒に、お前たちは添遂げる望みはないんだからさつさと東京へ歸れと仰有るのは、あんまり酷過ぎるやうに、私には思はれるんで御座いますが。私はとに角、新七さんがそんなにお手輕に緣仲を裂かれて平氣でゐらつしやれるやうな方だつたら、これまで皆さんに御心配を掛ける譯がなかつたぢやありませんか」

おかつは、幸吉といふ人は若い男と女との仲についてはちつとも穢しのない人、こんな役目を以て來るには不似合な人、商賣にかけては腕があるのか知らないけれど、色戀の道には暗いに極つてる人、人のいゝ人に違ひないと獨り極めにしてゐた。しかし、損害賠償として相當な金を取つて東京へ歸るにはこんな人を相手にした方がいゝかも知れないと、今の男に厭いた果てに頻りに萠してゐる冷刻な慾念も持上らないではなかつたが、幸吉の顏を見てゐると、甲府といふ土地にも俄かに愛着の思ひが起つて、慾得を棄てゝもつと辛抱してゐたくなつた。

幸吉は烈しい事を云つて弟の氣を挫かないやうに兩親が遠慮してゐることや、身延詣りを快く許したのも、それを最後にこの家を疊ませるやうにと思つたゝめであることなどを話したが、そんな話もおかつの心を脅かすよりも、彼女の氣だるい身體を刺戟して、生々と今日の日を見させた。幸吉の聲音は、言葉の意味が何であらうとも、彼女の耳に色つぽく聞えだした。……兩親に同意して二人の仲を裂く下心をもつて來たのやら、弟思ひで二人の仲を憫れんで來たのやら、どちらだつておかつは關はなかつた。そして、却つて自分の方から、

「新七さんに自棄を出させないやうに氣をつけて下さいましな。今日兄さんのいらしつたことを內所にして置きますから」と云つて、「後々のことは私後でよく考へて、あなたに御返事いたしますわ」と、淡白に云つて相手を喜ばせた。

（四）

昨夕の寢醒めに思出したりしてゐた身延の若僧の靑褪めた品のいゝ浮世離れのした顏は、幸吉の俗人らしい生々した顏に蹴押されて　おかつの胸の中から淡く消えてしまつた。長い間戀焦れてゐた男にめぐり會つたやうな氣持で、おかつは幸吉の顏形を何時までも目の前に浮べては弄んでゐた。二人きりの兄弟でありながら、何故あゝも違つてゐるのであ

らう。氣が弱くて人がよくて、物分りのよくなさゝうなところは兄弟よく似てゐるのらしいのに、肝心な顔形は何故あんなに雪と墨とほどに違つてゐるのであらう。若しかすると腹違ひなのかも知れない。

おかつは自分が東京でふとした事から馴染んだ男が、兄の方でなくつて弟の方であつたことを忌々しく思つた。籤の引損ひか、博奕の賽の目の出損ひのために、長い間の樂みをふいにしたやうな口惜しさが感ぜられた。

幸吉が行つてから間もなく、歸つて來た老婢は遲くなつた言譯をくど〳〵としてゐたが、おかつは取合はないでゐた。

「今日はどなたかお客様でも入つしやつたんでせうか」と、老婢は訊ねた。

「誰れも來るものかね」と、おかつは無愛想に答へて、自分一人の夢を見てゐた。

「でも、姉さんの御様子が違つてゐますもの」老婢は、何時もなら自分が外から歸つて來ると、さも待受けたやうに迎へて外の様子を訊ねたがるおかつが、今日はちつとも取合はないのを變に思ひながら、「かう申しちやお諂ひのやうに思ひなさるでせうけれど、頭髪をそんな風にしていらつしやるのが今日は特別によくお似合ひなさるんですよ。それに何かいゝ事の前觸れでもあつたやうに日本晴れの顔してゐなさるんですもの」

「さう、當つてもいゝわね」と、おかつは悦しさうに云つて、「老婢さんは目が薄い〳〵と云つてゐながら、人の事にはよく目が利くから油斷が出來ないのね。お客様は來なかつたけど、いゝ音信があつたんですよ」

「それ御覧なさい。……東京から郵便がまゐりましたのですか。東京からだとお手紙でも珍らしう御座いますね」

「さう、私」おかつは快い笑ひを洩らして、「私今日は奇麗になつて？。不斷よりはちつとはいゝ女に見えて？」と甘へた口を利いた。そして、何時も美しいのに、今日はこと更美しく見えると、老婢にお世辭を云はれるのが、例のお世辭と思ひながらも悦しかつた。

おかつは午餐後の常例となつてゐる午睡もしなかつた。退屈凌ぎと修養のために、新七からも勸められて日々少しづゝでも努めてゐる手習や紹刺にも、今日は手をつけないで、長火鉢の側や、冴えた日の差してゐる縁側で、ボンヤリしてゐた。新七と親しくなつた自分の有様や、その前に掛り合つてゐた男のことが、目の前に浮いたり消えたりした。手輕に掛り合つて左程の思ひを殘さないで別れて來た二三の男については、今思ひ出しても悔ひも恨みも懐しみも殆んど感ぜられなかつたが、最初ある知合ひの惡婆に易々(やす／＼)と騙されて、頭の禿げた豚見たいな男に僅かな金のために、無垢の身體を汚されたことだけは、思出すと口惜しくてならなかつた。

「勿體ないことをした」と、自分の美しい肌を粗末に取扱つたことが、悔ひても／＼足らないのであつたが、いよ／＼窮した時には、その豚のやうな爺さんを訪ねたら助けて貰へさうな氣がして、知らず／＼心の底では手頼りにしてゐるのであつた。

「あのお爺さんは私を猫か犬かのやうに寵愛して、いろ／＼の事を敎へて呉れた」おかつはそれを思ふにつけて新七の無邪氣な戀の次第を連想したが、弟と性質は似てゐるらしい幸吉をも、同じ手順で馴染を深くして行かれさうに思はれた。

美しい女として自分の顔が幸吉の目に映つたに違ひないと思はれて悅しかつた。

「老婢(ばあや)さん。櫻町の若旦那の主婦(おかみ)さんといふのはどんな方なんでせうね」と出抜けに訊ねた。昨夕ちよつと聞いたのであつたが、あれだけでは物足らなかつた。

「おつるさんのお話では、主婦(おかみ)さんは御容色人(ごきりやうじん)ぢやないさうですよ。何しろ在所の方(かた)ですからね」

「在所といつて何方だらう」おかつは、身延詣りの途中の村々を思出した。雨の中を嬰兒を脊負つて渡舟に乘つてゐた

健氣な田舎女を思出して、それを幸吉の主婦でもあるやうに、幸吉と並べて見たが、さうしてゐると、田舎女の主婦が羨ましかつた。さういふ田舎女に滿足して睦じく暮してゐる幸吉の心根が齒痒かつた。……いくら身代を延ばしたつて、その主婦を有難がつて色戀も知らずに若い時を過して、何がいゝことがあるのであらう。

日暮れ近くなつて、隣家では例の蓄音機を鳴らしだしたが、今度は聞飽いた琵琶唄や勸進帳の外に「行こか戻ろかオーロラの下を、ロシヤは北國果て知らず」といふ哀れつぽい流行唄が唄はれたり、陽氣な馬鹿囃子が鳴つたりした。おかつはそれ等の唄に調子を合せて唄つてゐたが、哀れつぽい唄には涙のこぼれるほどに哀れになり、陽氣な唄には踊りだしたいほどに陽氣になつた。

「老婢さん、今夜は御酒を取つて來て下さいな。それから蒲燒の三人前も誂へて置いてね」と、勢よく云ふと、

「御酒を召上るんですか、お珍らしい」と云つて、老婢も悦しさうな顏した。

「みんなして飲みませうよ。旦那樣も時々は醉つた顏でもした方がいゝのよ。あんただつて時々は晩酒の欲しさうな顏してゐるぢやないの」

「姉さんは口が惡い。……此間は貰物のお酒の殘りを、勿體ないから頂いたゞけなんで御座いますよ」

「老婢さんは正直ね。……私のお母さんが晩酒を飲みたがるんですよ。だから、私もちつとは御酒が頂けるんでせう」

老婢が使に出た後で、おかつは夕化粧をしてゐたが、そこへ、新七は靜かな足音をさせて歸つて來た。

「お歸んなさい」と云つて、おかつは振返つたが、新七は昨夕と同じやうに煩ひに曇つた顏をしてゐた。本宅で何事か彼れの氣に掛かることを云はれてゐるに違ひないと、おかつは察してゐたが、兄の訪問については、彼の方から言出さないかぎりは默つてゐることにした。

「お前は今日は氣持がよさゝうだね」と、一層見まさつた女の顔に、新たな愛着を感じながら云つた。

「毎日騒いでゐたつてはじまらないんですもの」と、おかつは甘つたれた聲音で云つたが、彼女の機嫌がいゝのは、新七には何よりも悦しかつた。

「本當にさうだね」と、彼れは曇りの拭はれたやうな目をした。

「お夕飯には久振りにお酒をつけることにしたのよ。いゝでせう」

おかつはいゝ匂ひのするクリームや練白粉や香油などを手の平で撫でたり鼻だの頬だのと、彼方此方の皮膚につけたりするのに、云ひ知らぬ楽みを覺えてゐたので、暇にまかせて鏡臺の前を長い間離れないでゐた。すると何時の間にか新七は鏡臺近く躙り寄つて鏡の中を覗きだした。「あなたにもつけて上げませうか」と、一度男の顔を化粧してやつたことがあつたので、新七が今もさう云はれたさうにしてゐるのをおかつは察しながら、今はそんな戯れを樂む氣にはなれなかつた。

鏡に映つた男の顔は愚からしく淫らゝしかつた。

「私今夜はおつるさんを誘つて町を散歩して來ようと思つてゐるの」と、わざと云ふと、

「約束してゐるのかい」と云つて、新七は直ぐに不快な目をして、「お前はあの女とうまが合ふんだね」

「だつて私にはこの土地に女のお友だちは一人もないぢやありませんか」

「それはさうだが……」新七は自分は今親しい友人の一人もないのを苦にしてゐないのにと思ひながら、「僕はいつそ東京へ行つちまはふかな」と云つた。

男の言葉は呻いてゐるやうにおかつの耳に響いた。「あなたの辛抱氣のないのには呆れてしまふ。昨夕あんなに云つて

ゐたすつたのに。私そんな氣まぐれは大嫌ひさ」

「だつて、昨夕と今日とは僕の境遇が違ふんだからな」と、新七は聲を落して、「親爺の仕向け樣次第で、僕はどんな酷い決心をするかも知れないよ」

「ぢや、何時まで立つても私はお宅の方の信用が得られないから駄目なのね。私さへ此處にゐなければ、あなたは御大家の御次男で文句はないんでせう」

おかつは他人事のやうにさう云つて、それよりも白粉の乘加減に一層興味を惹かれてゐるやうであつた。

「おれは明日から店へは出勤しないよ。早く自分の店が出せないくらゐなら、この頃やつてることは無駄骨なんだから……兄貴や兄嫂に侮蔑されたかないからね」

「兄さんと喧嘩したんですか。詰らないぢやないの。あなたは素直にさへしてゐれば、ひとりで財産が頒けて貰はれるんぢやありませんか」

たび／＼繰返してゐる財産の話が出ても、一月前のやうに、あるひは四五ヶ月前ほどにも、おかつの方で熱心に話に乘つて來ないのが、新七には齒痒しくてならなかつたが、相手の冷淡さを責めるのは躊躇された。「三分一でも四分一でも、お父さんの丈夫な内に頒けて貰はにや損よ」と、以前のやうにおかつに嗾けられなくなつたので張合ひが拔けた。

老妓の知らせで、二人は仕出しの出來てゐる食卓の側へ寄つたが、新七は二ヶ月あまりを過したこの隱家をやがて立退くための別れの酒宴のつもりで盃を手にした。側にゐる女の晴々した顏を見るにつけても、今日の午后本宅の奥座敷で兩親や兄が顏を揃へて評議をした時の有樣を明らさまには話されなかつた。

「何をさう思案してるんですよ。店を分けて貰へないことたの」おかつは揶揄ふやうに云つたが、今朝幸吉が此處を訪

づれたことがどれほどの程度があつたのかをひそかに知りたく思つてゐた。幸吉が訪問を隠してゐるらしいのも不思議であつた。

「お前さへ覚悟すれば僕は何処へでも行くよ。さうなりや外の邪魔は入りやしないんだ」と、新七はふいと真面目になつたが、から真面目になられたのに、おかつはゾツとした。何処へでも行くよなんて云ふのが、甲府に来る前の新七の言葉を、おかつの記憶に呼起させた。一緒になら死んでもいゝと、どうかすると思つてゐるらしいのが恐ろしくつて、揶揄つてなどゐられなかつた。話を外して、老婢をも呼んで酒を振舞つたりして気楽な世間話をして紛らせてゐた。

（五）

新七を煙たがつて、彼れが家にゐる時には成べく遊びに来ないやうにしてゐるおつるが、格子窓の外から「今晩は」と声を掛けると、おかつはそれをいゝ機會にして座を立つて、家の中へ招いて、買物を兼ねて遊びに出掛ける道連れに誘つた。

「あなたはいらつしやらないでせう」と云つて、新七を家に残して、おかつは不断着に縮緬の羽織だけ引掛けて、おつるとともに外へ出ると、

「私、今夜は遊廓の方へ行つて見たいの。連れてつて頂戴な」と云つて、新七の本宅をはじめて、外からでも見ようとした。

「あなたはお店の皆さんをよく御存じなんでせう」おかつは相手が平生遠慮して本宅の内輪の話に触れないやうにして

ゐるのを察してゐながらさう云つた。

「お顔だけなら皆さんを知つてますわ。」

「ぢや、あなたと一緒にお店へ寄りでもしたら、私つてことが皆さんに分るわね」

「だつて、彼方では姉さんを知つてらつしやるんでせう。大旦那だつて若旦那だつて、疾つくから姉さんを知つてゐらつしやるんでせう」

「ほんとに。私迂濶だつたわね。……どなたにもお目に掛つたことがないから、知らん顔してお店へ買物に行かうと思つてゐたのに、當てが外れちやつた」

疾つくから顔を知られてゐるのは意外であつたが、それにつけても、甲府といふ土地が一層狭苦しくなつたやうにおかつは感じた。「此方では知らないのに、先方にだけ知られてゐるのはいやなものね」

「でも、姉さんはお店の若旦那にはお會ひになつたんでせう」

「……」おかつは、「いゝえ」と答へかけたのを危く思直して、「おつるさんはどうしてそれを知つてらつしやるの？」と、事もなげに云つた。

「だつて今朝お宅へお入りになつた方の後姿が幸吉さんのやうでしたから」

「私あの方に叱られたのよ。彼處の人はみんな堅苦しさうね」

「さうでせうか」

おつるは信じない口吻であつた。櫻町の本宅の方へ足を向けてゐながらも、おかつは最早間が悪くつて、はじめの興味は殺がれてゐた。彼女の住居の近所とは違つて、櫻町あたりは都會らしく明るくて賑かで、いろ／＼な夜店も出てゐ

た。おかつは久振りで雜沓の中へ足を踏込むと、東京の夜が懷しくて溜らなくなつて、新七一人が男でもゐるやうに自分の身體を彼れにまかせてこんな土地へ來たことの頓間さが、新たな悔ひとなつて胸に浮んだ。町の左右の商店や飲食店や見せ物などについて、おつるが知つてゐるかぎりの說明を絕えず聞きながら步いてゐたが、おつるに對して何となく打解けられなくなつて、その言葉の端々をも邪まに聞きがちになつた。

「宮部さんのお店はそこですよ」と敎へられると、足を留めて、電信柱に身を隱して其方を見詰めた。間口の廣い立派な、見るから身代の豐からしい店であつた。額の廣い老人が眼鏡を掛けて書付を讀んでゐた。

「さあ行きませう」と、おかつは詰らなさゝうに云つて後へ戾つた。

「何時も若旦那がお店へ出てゐるのに、今夜はどうしたんでせう」とおつるが云つたが、おかつの耳には冷かしのやうに聞かれた。で、平生なら、蕎麥でも汁粉でも奢るところなのだが、今夜は何處へも寄らないで眞直ぐに家へ向つた。

「ステキな女だ」と、擦違ひに若い者から聲を掛けられると、自分がすべての男の目を惹いてゐるやうな誇りを覺えた。

おつるの家の前でおつるに別れると、おかつは自分の家を目の前に見ながら、薄暗い通りへ道を外らして、暫らく當てもなく步いてゐた。明日から出勤しないと云つてゐる新七に、寢ても醒めても附纏はれるのは、思つても氣味が惡かつた。

よく知らない町を步いてゐるうちに、ふと先つき通つた賑かな所へ出て來たので、おかつは再び宮部の店の方へ行つて、橫目でソツと店の中を覗きながら通り過ぎた。すると、老人の坐つてゐたところへ、幸吉が代つて坐つてゐて、小僧を相手に話をしながら笑顏をしてゐたのが、おかつの目に留まつた。此方へ氣がついたら、幸吉がどんな顏をするで

あらうかと、おかつはだらけた好奇心に驅られて、も一度店の前を通つた。幸吉も今度は此方を見たに違ひなかつた。通過ぎて電信柱の蔭から顧みると、幸吉の様子は先つきとは違つてゐた。口を噤んで澁つた顔付をしてゐた。澁い顔して見せたつて怖かない。顔や姿こそ違つてゐても性分は弟と同じことなのだらうからと、おかつは可笑しく思つて、親しく幸吉に近づける手段を空想しながら、今度は足早く家へ歸つた。

新七はまだ醉ひの醒めきらない顔して、火鉢の側で仰向けに寢てゐた。

「たゞ今」と、氣取つた聲で云つて、おかつは根町の本宅を見て來たことを話した。

「なんだつてそんな所へ行つたの？」

「だつて、おつるさんが連れて行つたんですもの。あの人はお腹の中にいけないところのある人ね。私これから成べく懇意にしますまいよ。とんだ迷惑を掛けられるかも知れないから」

「だから僕が不斷さう云つてゐたのに」

しかし新七は、今の場合おつるの事などはどうでもよかつたので、重ねて訊返しはしないで、今まで獨りで考へてゐたことを、粘つこい口調で話しだした。今夜中に必要な物を纏めて置いて、明日早く何處かへ行つて姿を隱さうといふのが、彼れの詰りの企てゞあつたが、おかつは、「私さへ辛抱してゐれば此處にゐたつていゝぢやないの。私があなたを唆かして他所へ連出したと思はれるのはいやですからね」と、熱心を粧つて、眉根に皺を寄せて云つた。

「誰れの口から知れたのか新聞にまで出されたから、なほいけなくなつたんだよ。」

「新聞に？。どんなことが出たのか讀んで見たいわね。あなたはその新聞を持つてゐらつしやらないの」おかつは自分の事が生れてはじめて新聞に出されたのに興味を感じたが、新七は明らさまにはその記事を語らなかつた。

「僕は家の者や世間の奴から馬鹿者にされたつて構やしないが、お前は僕が零落したつて愛想を盡しやすまいね。お前のお母さんにももつと氣楽な生活が出來るやうにして上げると約束してあるんだけど、當分約束を果す見込みはなささうだ」

「そんな不景氣な話はお止しなさいよ。氣が滅入つちまふわ」

おかつは男の煮えきらないクド〳〵した話のお相手になつてゐると息苦しくなるので、露骨に「私の情愛が薄くなつて、はじめの間ほどにあなたを大事にしなくなつたと思つて、いろ〳〵に氣を廻して心配してゐらつしやるんでせうけれど、私は現在あなた一人を手頼りにしてるんぢやありませんか。あなたの外に私の掛り合つてる男が一人も半人もある譯ぢやないし、こつちへ來てからは外の男の人とは口を利くことさへないんですからね。金のために老婢にでも聞いて御覽なさい」

「僕はそんないやなことを思つてお前を疑つてやしない」と、新七は口を尖らせた。

「ぢや、それでいゝぢやないの」

それ以上に、自分から何を欲しがつてゐるのかと、おかつはこの男の物足らないらしい口吻を奇怪に思つた。最初に馴染んだ爺さんに仕込まれた色戀の手管に新七の満足しないのが不思議であつた。

「いやねえ、あなたは。涙を落したりして」

「お前は泣くことなんかないんだらう」

「だつて、泣く譯がないのに泣けやしないわ、……口惜くつて夜つぴて泣いたこともありますさ。あなたはまだそんな思ひをしたことないでせう。……私とあなたとが浮世の義理かなんかで別れなければならない時が來たら、その時こそ

お互ひに思ふ存分に泣きませうよ。今から泣いて見たりなんぞしないでさ。見つともないから」

子供を諭すやうに云つて、おかつは手巾で男の目を拭つてやつた。新七は默つて諭されてゐたが、次の室でほどき物をしてゐた老婢が入つて來ると、つと起上つて、生眞面目に坐つた。そして、

「老婢(ばあや)はお時の家へ行くのなら、今から行つて泊つて來た方がいゝだらう。明日(あす)の朝早く起きられらちや騷々しくつて却つていけないから」と云つて、おかつに向つて、先つき老婢に急用があるといつてお時が迎へに來たことを話した。

「でも、泊りがけで行くほどのことはないんでせう」

おかつは今夜は二人きりで夜を過すのが何となく不安に思はれたので、老婢を離すまいとしたが、老婢は新七の勸めを幸ひに、泊りがけで行くやうに願つて手早く仕度をした。

よぼ〳〵の老婢でもゐなくなると、俄かに家の中が寂しくなつた。身延の宿で二人差向ひで川の音を聞きながら過した先日の宵の寂さよりも、一層氣味の惡い寂しさがおかつの心を襲はせた。新七とはその前に掛り合つた二三人の男と別れた時のやうに、手輕に別れる譯には行かないのは、今はじめて氣のついたことではないが、今夜は相手の顏を見てゐると、早晩自分の身にふりかゝつて來る災難が豫じめ彼女の神經に傳はつて來るやうであつた。「この人は死ぬるまで私を離さない氣でゐる」と思ふと、男の執念に自分の今後の幸福が暗闇にされさうで、櫻町の兩親などの計らひで穩かに別れの[illegible]さへすれば、自分に惡い名をつけられることなんか、どちらでも構はない氣になつた。

[illegible]床に就くと熟睡を裝つてゐたが、不思議に目は冴えて容易に眠つかれなかつた。時雨の音さへ聞えて、人里離れた遠い所にゐるやうであつたが、すると、自分でも譯の分らない寂しさ詰らなさから、涙が枕に傳はつた。……をり〳〵夜中の寢醒めに、どうかすると涙のこぼれることがあるのを、晝間は思出しても馬鹿らしくて誰れにも話したことはなか

つたので、飛返り一つしても氣がつくほどの新七も、いまだに氣づかないでゐるのであつた。

（十八）

「本當に今日は櫻町へいらつしやらないの」

翌朝おかつは非難するやうにさう云つて、雨戸を開けて澄んだ秋空を見上げた。老婢のかはりに拭掃除から朝飯の仕度までも自分一人の手でしなければならないのが煩はしかつたが、新七は缺勤の覺悟は堅く動かさないで、そのかはりに近所まはりの用事を自分から先に立つてしだした。今日にも立退くと云つてゐた家の土間を掃いたり、四つ這ひになつて椽側に雜巾を掛けたりした。

が、何時もの出勤時刻が來ると、新七も落着かなくなつた。暫く引續いて勤めてゐたのに、無斷で一日でも休んだなら、角立つた話のあつた昨夕の後ではあるし、本宅の方で打遣つて置く譯はない、様子を見に誰れかを寄越すに違ひないと案ぜられたので、病氣にかこつけて缺勤を屆けることにした。その使には近所のおつるを賴むことにして、おかつが流し元で食器を洗つてゐる間に、無斷で裏口から出ておつるの家へ行つた。

「オヤ、お珍らしい。おつるが何時もお世話になりいして」と、家の側の溝で大根を洗つてゐたおつるの母親は、慌てゝ衣服を掻合せて、洗い物は打遣らかして、家の中へ入つておつるを呼んだ。

新七は用事だけを云つて、直ぐに歸らうとしたが、親子に頻りに引留められて、せめてお茶の一杯でもと數勸されたので、上り框に腰を卸した。

おつるがお茶を入れてゐる間に、母親は細身の煙管と煙草の袋とを持つて來て新七に勸めて、「老婢さん」と「婦さん」

との名を先づ持出して、穏かな氣樂な三人暮しを羨ましさうに褒立てた。

「あなたのお世話であんな手ごろないゝ家が借りられたのだが、近かにあの家を出るかも知れませんよ」と、新七は話の行きがゝりで、うかと云はずとものことを云つた。

「それはまあ」母親は迂散くさい目をして、「櫻町のお宅の御近所へでもお引越しになるんで御座りいすか」

「いや、さうぢやないです。……僕なんかは一寸先きは闇見たいなもんです」と、新七はまたうかと云はずとものことを云つた。

「あなた様がそんなことを仰有つてなるもんですか。お兄さんもこの頃はあなた様のお宅へ入らつしやるやうぢや御座いませんか。ハンデお會ひになつて此方の姉さんの御氣象か分りさへすれは、お兄さんのお心も解けるに極つてゐると、私どもゝさう申してゐるんで御座ります」

「兄貴は一度もこつちへ來たことはない筈だが……」新七は獨言のやうに云つて、おつるの方を顧みた。

おつるは頼まれた使に出掛けようとして、土間へ下りたところであつたが、新七の嶮しい目付を氣遣ひながら、「お母さんは當推量でいろんなことを云ふからいけないよ」と言つて、急ぎ足で外へ出た。

母親は娘の注意に氣づかないのか、そんなことには頓着しないのか、「此間中からたび／＼お兄さんをこの邊でお見掛けしてるんで御座います。お二人きりの御兄弟だから、お案じなすつてお出でになるんだらうと思つてゐましたんです」

「さうですか」

新七は不愉快な思ひを顔に現はさないやうに努めながら、口輕く暇を告げて家を出た。兄が此方の家の閾を跨いだこ

とは一度もない筈なのだが、しかしおつるの母親が根も葉もない捨へ事を云ふ筈もないと、彼れは判断に迷ひながら、裏口からそつと自分の家へ入つた。

おかつは手紙を書いてゐたが、知らぬ間に歸つてゐる新七の屈託した顔を見つけると、「吃驚しちやつた。……あなたは默つて出て行つて默つて歸つて來るからいけない。何かお旨い物を買ひに行つてゐたんですか」と云ひながら書きたかけの手紙を静かに疊んだ。

新七は自分の邪推のためよりも、むしろ狂濁た問ひを出して女の感情を害ねるのを氣遣つて、ちよつと躊躇したが、默つて濟す譯には行かなかつたので、「この頃兄貴が訪ねて來たことがあるのかい」と訊ねた。

「え、入らしつてよ、昨日の朝。」と、おかつは即座に事もなげに答へて、何故今になつて言出したのかと、突然の問ひを訝りながらも、空呆けてゐると、

「矢張り本當だつたのか」と、新七は呟いた。そして、おつるの母親から聞いたことをそのまゝに話した。

「あなたは何だつて不断いやがつてたおつるさんの家へいらつしやるの？。櫻町へのお使ひなら車屋でも誰れでも私が頼んで上げますのに」。と、おかつは忌々しさうにツケ〳〵と云つた。おつる親子に對する昨日までの親しみを根こそぎ無くしてしまつて、「あんな人の云ふことを信用するやうぢやあなたも駄目。輕薄なお喋舌家だから、時の拍子でどんな出鱈目を言出すか分つたもんぢやない。……第一兄さんは昨日の朝ちよつと顏出しゝなすつただけぢやありませんか」

「兄が來たなら來たで、お前もおれに隱さなくつてもいゝだらうに。兄貴も昨日そんな話はしなかつたよ。……すると、親爺のかはりになつて兄貴がお前に會ひに來たんだね。お前は兄貴の氣に障るやうなことは何も云はなかつたらう」

「私餘計なお喋舌はしませんよ」

「來るのなら親爺が來て呉れゝばよかつたのに、兄貴が會ひに來たからいけないんだ。兄貴は自分の女房につゝかれたりして、はじめからおれだちに對して好意を有つてやしないんだから。」

新七は、夫婦の間の世間話の種にするつもりで、兄がわざ／＼此處の樣子を見に來たのだらうと云つて、兄の訪問の秘密にされてゐたことについての不平を、おかつの方へは向けないで、兄の方へのみ怨みを寄せた。心の中に多少疚しかつたおかつは、煩い詰問を受けないのを喜んだが、幸吉夫婦が寢物語に自分の噂をしてゐると思ふといゝ氣持はしなかつた。

せめて甲府から二里ほど距つた積翠寺温泉へでも行つて、當分身を隱してゐようと新七が云ふのを、おかつは上の空で聞きながら、今日明日に迫つたやうに思はれる自分の身の處置を考へてゐたが、考へてゐると、分別くさい身の處置どころか、わざ／＼甲府三界まで鬼か佛かに引張られて來たのを緣に、思ふ存分の事を仕遂げて見なければ、腹の蟲が收まらないやうに慾念が燃え立つた。「身延へお詣りして來ると、直ぐに新七さんと別れを急ぐ氣持になつたり、幸吉さんに會へたりしたのも、佛樣のお導きかも知れない。そんなに人の思惑を苦にしてお導きを袖にしちや佛樣の罰が當るだらう」などゝ、おかつは調子づいて自分の慾念に媚びてゐた。

「積翠寺とかへはあなた一人でいらつしやつちやどう？。私は身延で懲々してゐるんだから旅は御免ですよ」と云つて微塵動ぎもしない氣振りを見せた。

そこへ、櫻町から歸つて來たおつるが姿を見せて、頼まれ事を果した返事をすると、おかつは、「お使賃に何かお奢んなさいよ」と新七に云つて、自分は奥の室の机に向つて書きかけの手紙を書きつゞけた。

それは幸吉へ宛てた手紙であつた。「……御親切なお言葉はおろそかにはいたしません。昨日一日いろ／＼に考へまし

亡、お宅の皆さまのお計らひに背かぬやうに、私の身の極りをつける決心をいたしました。縁のある者縁のない者。人間わざではどうともいたし方のない定まり事と思はれますから、私は皆さまのお計らひにおとなしくおまかせして、自分の強情ははり通さないことに決心いたしました。つきましてはあなた樣にお目にかゝつて、最後のお茶園を頂きたいと存じますから、おいそがしいでせうけれど、至急にお目にかゝれるやうにして下さいまし。新七さまには内しよにして置きますから、左樣御承知の上よろしくお取計らひ下さいませ」

おかつはかう書いて封筒へ收めて袂へ入れたが、胸の鼓動を禁じ得なかつた。乘合馬車の窓から覗いて見た富士川の崖際のやうな危い所を動いてゐるやうな氣がした。自分の夢のやうな望みが遂げられないで、手紙の文面通りにスゴスゴこの土地を立退かされるやうになつても變なものだがと、おかつは何方向いても不安な影が身に迫るのを覺えたが、そんな甲斐性のないことでどうなるものかと自から勵ました。「ビク／＼して尻込みしたつて災難が落ちて來る時には來るんだから、思ふ存分やつて見なければ嘘さ。一目見た時から、この人になら命かけてもと思つたのだもの」

おかつはかう思ひながら、新七が自分で茶を入れて、珍らしくおつるを持成してゐるを見てゐたが、ふと、

「私これから郵便を出しに行くから、次手にお旨いお茶受けを買つて來ますよ。お二人でゆつくりお話をしてゐらつしやい」と云つて座を立つた。

手紙を直ぐにポストへ入れるのは流石に躊躇されたので、俥夫か誰れかを使にやらうかと考へたが、傍の目に觸れないやうにして幸吉に手渡しするのは六ケ敷さうであつた。たとへ手紙がうまく屆いたにしても、新七に知られないやうにして幸吉に會はうとするのは手順が困難であつた。幸吉の方で氣を利かせて呉れゝばいゝが、手紙の文面を上べだけで讀んで無闇なことをして呉れたら、折角の心を籠めた思付きも妙なことになつてしまふと氣遣はれたが、さう氣遣つてゐても

果しがないので、思切つて運まかせで、手紙をポストへ抛り込んだ。

こんな時に老婢やおつる親子が心から自分の味方になつてゐないことが不便に思はれた。

おかつが廻り道して、風月堂で西洋菓子を買込んで家へ歸つた時には、火鉢の側に新七一人例の屈託した顔してゐておつるの姿は見えなかつた。

「あなたは大變仲がよささうに話をしてらしつたのね。不思議ですわね」と云ふと、

「あの女の顔を見てると滑稽だよ。横からだとさうでもないが、正面に見てると随分しやくれてるからね」

「今日はじめて氣がついたの？」

おかつは容々しくさう云つて、火鉢の側を避けて奥の間へ入つた。心が咎めるといふほどではないが、男の顔を見たり言葉を聞いたりしないでゐたかつた。

幸ひに新七が散髪に出掛けたので、彼女は一念を籠めて手紙の成行を見詰めてゐることが出來た。冴えた日の差してゐる縁側には隣りの白猫が遊びに來て、細い目をして此方を見てゐた。

今のおかつには、幸吉といふ美しい面影を他所にしては、この甲府の土地に一刻もゐる氣はなくなつてゐたのだつたが、燃立つてゐる一念に冷たい水をぶつかけるやうな物があたりにウヂャ〳〵してゐるのが小憎らしかつた。老婢でもおつる親子でも迂散くさい目を此方へ向けてゐるのが、おかつの大望に取つては、今から小煩い邪魔物になつてゐた。

……白猫は媚びを含んだ目をして柔しい鳴聲を立てた。おかつはその聲に惹かれて知らず〳〵縁側へ出て、白猫を抱上げて撫してゐたが、さうしてゐる間に誰れもゐないといふ感じが、これまでとは違つて彼女を誘惑しだした。

おかつはふと猫の子を抛出して、自分の持物の中の大切なものを操出して一つの行李に纏めたりしてゐたが、すると

そこへ歸つて來た老婢に、改つた挨拶をして、「申上げにくいんで御座いますが」と、今日中に暇を與れと言出した。

「爲方がないわ」と云つて、おかつはそれ見たことかと、自分の豫想の中つたのをひそかに誇つて、「あんたは塚本さんへ行く氣なんでせう」

「あんな忙しいお家へは行きたかないんで御座いますけれど、おまきさんが自分のかはりに、せめて十日でもお店の臺所を助けて上げて與れ、自分がお引受けして奉公人を搜してゐるんだけれど、どうしても見つからないからと、手を合せて賴まれますので、斷り切れないんで御座いますよ」

「そんなら行つてお上げなさいな。私の方はどちらでもいゝんですから」

おかつは、くだ〳〵しい言譯を續ける老婢の方を見向きもしないで、持物の整理をしてゐた。老婢も自分の押入れを開けて、いろんな物を風呂敷や行李の中へ搔集めてゐた。おかつはあらまし片付けてしまふと、突立たつたまゝ皮肉な目で老婢を見ながら、

「あんたは旦那様のお許しがなくつても出て行くつもりなの?」

「姉さんにお願ひして戴けば宜しいんぢゃ御座いますまいか。どうせ旦那様にも御挨拶してからお暇はいたしますけれど」「でも、老婢さんは旦那様が連れてらつしつたんぢやないの。私にはこの土地の様子がちつとも分らないからつて。あんたに出て行かれちやこんな小ぽけな世帶でも、私のやうな無性者には持ち切れないかも知れないけど、それでも旦那様はいゝと仰有るでせうかしら」おかつは揶揄ふ氣で云つた。

「こちら様では私のやうな者はゐてもゐなくても同じことぢや御座いませんか」

「でも、老婢さんがゐなくなると、後が淋しくなるわね」

おかつはわざと哀れつぽい口調で云つた。下女をかねて隱し目付のつもりで雇つてゐながら、新七の方で給金以外の心付をすることもないし、おかつ自身も、はじめから老婢を好いてゐないので、屢々物惜しさうな謎を掛けられても知らん顏して、餘分な施しをしたことはなかつたのだが、暇を願ひ出た今の場合になつて、おかつはこの老婢でも自分の味方に引込んで置きたいやうな氣持ちになつた。よぼ〳〵のくせに、少しでも給金のいゝ方へと目がくれて、寒い時節をひかへて忙しい家へ奉公しようとするやうな慾の深い老婆を手懷けるのは雜作もないことのやうに思はれた。

「あんたは東京へ歸りたいと、先日の晩云つてゐたぢやないの。歸るのはお止めにして此方に長くゐつく氣になつたの？。私は都合によつたら近い中に東京へ歸らうかと思つてるんですがね」

「姉さんお一人で？」

「私一人だか、旦那樣も御一緒だか、それはまだ決らないんだけど、どちらにしてもあんたには一緒に行つて貰ひたいと思つてたんですの。だけどあんたが塚本さんへ御奉公することになつたのなら爲方がないわね。私の當てが外れちやつた」

「東京へ連れて歸つて頂ければ、私何よりなんで御座いますがね。姉さんは急にお立ちになるんですか」

「何時立つことになるか、日取りはまだハツキリ決つてやしないけれど」

「私の方では塚本さんにお義理がある譯ぢや御座いませんから」

老婢は東京へ行けるのなら、何時でも塚本の家から暇を貰つて來るからお伴をさせて呉れと熱心に頼んだ。おかつにこのよぼ〳〵の老婆の氣迷ひを可笑しく感じながら、相手の心を惹くやうな返事をしてゐた。

（七）

老婢は新七が歸り次第、鬼に角暇を貰つて直ぐに出て行くつもりで、身仕度をして待つてゐたが、新七が歸つて來ないうちに、幸吉が入つて來たのには、老婢もおかつも驚かされた。手紙がそんなに早く屆かうとは思はれなかつたが、しかし、あの手紙の文面を胸に持つて幸吉が訪ねて來たやうにおかつには思はれてならなかつた。

「新七は加減が惡いんですか」と、幸吉は二人の何方に訊ねるともなく訊ねて、上り框に腰を掛けた。

「床屋へまゐりました」と、おかつは明らさまに答へて、「もう歸つて來ますでせうから、お上んなさいまし」

「いや病氣でなけりやいゝんです」

幸吉は家の中を見廻した後で、おかつの顏に目を落したが、間が惡さうに直ぐに目を外して、「親爺が來ると面倒だから、私が代りに樣子を見に來たんですが、大した病氣でないのなら安心です。今日一日は休んで明日は店へ出勤するやうに云つて下さい」

「承知いたしました」おかつは愼しやかに通り一片の受答へをしたが、ふと、ウッカリして大切な時を取逃してはならないと胸を波打たせながら、「新七さんはお勸めにいらつしやるかどうか分りませんわ。私が勸めたつて無駄ですから兄さんが御自身でお勸めなすつて下さい」と云つて、老婢に向つて、「御苦勞だけど、あんた一走り床屋へ行つて旦那さんにさう云つて下さいな。」

「いや呼びに行かなくつてもよろしい。ただ私が來てさう云つとつたと新七に傳へて下されればそれでいゝんです」

幸吉がさう云つて、直ぐにも歸りさうに腰を浮かせたので、おかつは焦立つたが、手足ののろい老婢は成べく使歩を

を逃れたい算段をしてゐるのか、幸吉の顔を見ながらぢつとしてゐた。

「早く行つて頂戴ね」と、おかつに急立てられて、老婢はやうやく土間へ下りたが、迂散くさい目で二人を見かへつた。それがおかつにはいやに擽つたかつた。

「昨日あれからよく考へまして、先つきあなたに宛てて郵便でお手紙を差上げました。私のやうなものでも一心をこめて書いたのですから、兄さんお一人でよく讀んで頂きたいんで御座いますが。兄さんの御返事次第で、私が甲府にゐるもゐないも、一生の事が決るんですわ」

おかつは老婢が閾の外へ出ると、さう云ひながら心の中では神や佛の加勢を祈つてゐた。白々しい顔して煙草なんか吸つてゐても、これほどに思つてゐる私の事を何とか思つてゐるに違ひないと、獨り極めにして悪びれないで、

「櫻町のお父さんや御親類の方にはどう思はれても構ひませんけれど、兄さんにだけは私のお腹の中を開いて頂きたいんです。何處へでもお伴いたしますから、あなたの御都合のよろしい所へ私を連れて行つて、私が申上げたいことを充分に云はせて下さいましな」と調子に艶をつけて云つた。

「昨日であなたの心持は私にはよく分つてるんです。世間でどんな噂を立てゝゐても、私はあなたが新七を騙したといふことは信じはしません。どう決りがつかうとも、あなたの顔を潰すやうなことは私が受合つてしないから、この點だけは安心しといて下さい」

「そんなことは私どちらでもいゝんですの。昨日お目に掛つた時とは私の意見も異つてゐますのです。それで、兄さんにお手紙を差上げてその御返事を頂いてから、この土地にゐるともゐないとも決心するつもりで、御返事を待つてゐるんですわ。」

「どんな手紙かしら。私の一存で御返事の出來るやうなことなんですか」

幸吉が不安な好奇心に動かされてゐるのを、おかつはいゝことにして、

「私の申上げることは兄さんは充分に聞いて下さるでせうけれど、私にしては生命定めなんですから、こんな所でお話しする譯にはまゐりません。何時に何處へ來いと仰有れば私間違ひなく其處へまゐります、仰有つて下さい。私のためにいろ〳〵御心配を掛けたんですから、御迷惑でもこのお願ひも聞いて頂きたいんですの」

「しかし、ちよつと困つたなあ。……手紙で返事しちやいけないんですか」

「新七さんに添はれなければ死ぬるの何のといふやうな馬鹿なこと云つて、あなたを困らしやしないかと心配してゐらつしやるんですか。そんなことを考へてゐるほどなら、兄さんに御相談なんぞいたしやしませんわ。無教育な女の私が皆さんに惡く云はれながら、默つてこの土地を立たうと決心してゐるほどなんですもの。兄さんも私が是非とも申上げたいと思つてることを聞くだけでも聞いて下すつても、お人柄（ひとがら）に障ることはあるまいと思つてゐますのですが」

「……よろしい。ぢや、晩餐後鷹匠町の幾造の家へ行つとつて下さい。私が歸りにさう云つて置きますから」

「でも私お宅のお知合ひの方の家はいやで御座いますわ」

「だつて知らない人の家であなたに會ふのも困るからね」

「ぢや、道を歩きながらお話してもよろしいんです。ハッキリ時間を極めて下されば、私太田町の公園へ行つて、日朝樣（にちてうさま）のお堂の前でお待ちして居りますわ。」

おかつは日朝樣のお堂の前で願掛けをしてゐる風をして待つてゐようと空想しながら、幸吉を說きつけると、幸吉は躊躇しながらもやうやく納得した。

「あゝ悲しい」おかつは思はずはしたない聲を洩して、「ぢや、その時何もかもお話しゝますわ」と云つて、時間の打合せをした。幸吉の方でも此方を何とか思つてゐればこそこんな頼み事を承知したのだと獨り極めにして、夢心地で相手の顔を見てゐたが、此處へ新七に歸つて來られて、兄弟の間に面倒な話の取りかはされるのを、傍で聞かされるのを豫想すると、ふといやな氣がしたので、

「兄さん。今夜私に會つて下さるのなら、今は新七さんにお會ひにならないで歸つて下さいませんか。昨夕お宅でどんなことがあつたのか存じませんが、新七さんはあれから不機嫌で爲樣がありませんの。兄さんにも何を言出すか分りませんから、今日はこのまゝ知らん顔で歸つて下さいまし。後で私がいゝやうに言つて置きますから」と、先つき自分で引留めたことは忘れたやうに云つた。

幸吉も此處で弟に會ひたくはなかつたので、短氣を起さないで今日一日はゆつくり休息するやうにとの言傳てを賴んで急がしげに出て行つた。おかつは身延詣での御利益があつたのか知らんと、まことしやかに佛樣を崇める氣になつたが、男を惹く力が自分に備つてゐるのを誇るやうな氣持もした。あの人は新七に會ふよりも自分に會ひたさに來たのぢやないか。それに違ひないとふと思當つて獨りで微笑まれた。

「お客樣はどうなさいました」歸つて來るとさう云つて怪んだ老婢の問ひには答へないで、

「老婢さん。私今どんな人相をしてゐて？。運が向いて來さうに見えて？」と、出拔けに訊ねた。

「いゝお話をお聞きなすつたの。姉さんは昔からいゝ運にばかりお會ひになつてるぢや御座いませんか」

「戯談お云ひなさい。今こんなにして暮してるのはちつともいゝことないぢやないの。だけど明日の日にも私に幸福が向いて來たら、あなたにもお裾分けして上げますよ。縁があつたらばこそ、見ず知らずのあなたとこんな土地で二月も

三月も一緒に暮すことになつたんだから、これから先も懇意に突合つて頂戴な」

おかつは老婢に對して頻りに別れを惜むやうな口を利いた。そして、「旦那樣には秘密よ」と云つて、紙幣を包んでやつて、洗ひさらしの足袋をも添へてやつた。――もつとやり榮えのする物をやりたかつたのだが、持物の豐かでない彼女には、外によささうな物が見つからなかつた。――でも、老婢は意外な賜物として頂いて喜んだ。

やがて床屋から歸つて來た新七は、兄のゐないのに拍子拔けがしたが、結句それをいゝ事にした。老婢が暇を乞ふのを快く許してやつて、「此方から出すとなりや、相當の事をしてやらなけりやならないんだが、婆さんの方から出て行くといふんなら丁度いいよ」と後で云つた。

「あなたも商人の子だから勘定高いのね」と、おかつは冷かして、「誰れとでも別れたいと御自分で思つた時には、先方からさう云つてくれた方が、あなたのために都合がいゝんでせう」と、冷かに云ふと、新七は顏を赤らめて、

「さういふ譯ぢやないよ。……」と、自分が吝嗇でない言譯をしだした。

「でも、あなただつて私だつて、金持になつたら吝になるかも知れないわね。遣ふためのお金だから、惜まないでドシく遣つたらよささうに思はれるけれど、持つて見ると、出惜みをするやうになるんでせうね」

おかつは努めて相手の話に相槌を打たうとしながら、日の暮れまでの待遠しさにいらくして、時々はトンチンカンな返事をした。

「口では手強いことを云つてゐても、まさかおれだちを見殺しにすることも出來ないんだね」と、新七は兄の訪問をも自分の都合のいゝやうに解いて一時の氣休めにして、昨夕のやうに昻奮はしなかつた。かねての希望通りに財産の分配をされる時を否想して、さうなつた時には惜しげもなく遣つて見せるやうな口を利いて得意な色を見せたりした。

「あなたが財產家になつたら、おつるさんに帶の一筋も買つてお上げなさい。物を慾しがつてる人に物をやるのは張合ひがありますからね」おかつは自分の平生の贅澤な望みなどは口に出さないで、淡白にこんな返事をしてゐた

「老婢でもゐなくなると淋いわね」おかつは稍々もすると返事もしないで、空に物を思ひながら口を噤んでゐる言譯にさう云つたが、新七も何となく淋しかつた。

「さう云へばさうかも知れないね。……今度下女を置くやうだつたら、もつと小奇麗なのを雇ふんだね」

その日は夕餐を早目に濟ました。そしておかつは食後風呂へ行くと云つて家を出掛けたが、出がけに何の氣なしに振返ると、新七は淋しさうに立上つて此方を見入つてゐた。その顔が暫く彼女の目先にちらついて無氣味であつたが、湯屋の戸を開けるまでには自から消えてしまつた。

約束の時間のことを考へながら身體を洗つてゐたおかつは、餘裕があつても心が急かれたので、不斷の長湯に似ず、今夜は慌たゞしく切上げて、火照つた顔を夜風にさらした。公園へ着くまでには、星が見えだして細い月も冴えた空に照つた。身近の山の夜がふと彼女の胸に浮んだ。公園の片隅にある二階建ての料理屋には賑かな人影が見えて三味線の音もしてゐたが、日朝樣の方は薄暗くて燈火も點いてゐないで、たゞ蟲が鳴いてゐるばかりであつた。

おかつは附近に人のゐないを幸ひにして、薄暗い方へ道を採りながら、湯屋で貰つた釣錢を賽錢として投げるつもりで手に握つてゐた。が、お堂の前へ着かない前に、木蔭から出拔けに人影の現はれたのに驚かされた。黒い帽子を目深に被つて外套をも着てゐたので分らなかつたが、近寄つてからよく見ると、それは幸吉であつた。おかつは既に心を許し合つてゐる戀人に會つたやうな氣持がして、打解けた微笑を洩らした。幸吉はわざとらしくも生眞面目な態度を持して、

「私はあなたと約束したから來ることは來たんですが、こんな所に長くまごついてる譯には行かないから、用事だけを早く云つて下さい。」と云つて、あたりに目を注いだ。

「用事を云へと仰有られちや私困りますわ。……私の手紙はお讀み下すつたんでせうか」

「見ました。……」幸吉は池の方へ向つて歩きながら、「手紙には私の差圖によつてどうとも決めるといふやうなことが書いてあつたが、私も權柄づくの差圖は出來かねるんです。成べくならあなたにも新七にも傷がつかんやうにして極りをつけたいと思つてるんだから」

「お互ひに何時まで煮え切らんことを云つてゐてもはじまりませんわね。私は兄さんの權柄づくのお差圖を受けたいんですの」

おかつは池のほとりのベンチを見つけると、自分から先きに腰を卸した。そして、手に握つてゐた賽錢は池の中へ拋り込んだ。私を嫌つてゐなければこそ此處まで來たのであらうのにと擽つたく思ひながら、

「でも、私に會ひによく此處まで來て下すつたわね。私の願ひが叶つたんですわ。昨日兄さんにお目に掛つた時から、私は今までのおかつぢやありませんの。生命を棄てても、義理も人情も棄ててもといふ氣になりましたの。あなたも今朝訪ねて來て下すつた時から、さういふ私の心をちやんと察していらつしやるんぢやありませんか」

「私にはあなたのいふ事がよく呑込めないが」と、幸君は慌てながら、女の方から目を外して、「新七を棄てるといふことなんですか」

「新七さんに關係したお話は、今夜は一口も仰有らないで下さいね。命に掛けて戀焦れた私の思ひを察して會つて下すつたんだから、今夜といふ今夜死んでも滿足だと私思つてゐますの。私今は甲府といふ詰らない土地にゐるやうな氣は

いたしませんの。……私、兄さんのお指圖で地獄へでも監獄へでも行けと仰有れば喜んでまゐりますわ。どうにでもして下さい」

さう云つた女の熱い息に驚いたやうに幸吉はつとベンチから立上つた。

「全體あなたは私をどうしようと云ふんだね。此方ぢや眞面目に聞いてゐるのに戯談を云つちやいけないね」

昂奮してさう云つた幸吉の胸の鼓動は、おかつの神經にはよく響いた。

「戯談ですつて？。戯談か戯談でないか、兄さんのお腹の中ではよく分つてゐらつしやる癖に。私のやうな馬鹿な女にでも、これだけの事を云はせといて、耻を掻かせないやうにして下さい。兄さん、後生ですから―

「私は新七の兄だからね。そんなあなたの話を聞いとる譯には行かない」

「新七さんとは別れゝば赤の他人ですわ」

おかつが追驅けるやうにさう云つた時には、幸吉は足早く池のほとりを離れてゐた。おかつは待つて呉れと聲を掛けようとしながら唇を閉ぢた。そして、幸吉の姿が闇の中に消えるまで、ぢつとして見送つてゐた。

「なんて卑怯な人だらう」

おかつは相手を憐れむやうに心の中でかう叫んだ。折角心を籠めて待設けてゐたこの最初の密會が色も香もなく卒氣なく終つたのが口惜しかつたが、幸吉の心の底は見透かされるやうだつたので絶望の惱みは感じなかつた。眞直ぐに家へ急ぐ氣にはなれなかつたので、當てもなく彼方此方の町を歩いてから、おつるの家の前へ出ると、外から聲を掛けた、

「私の家へ遊びに入らつしやらない？。私今一人で公園まで散歩して來たところなの」

「お一人で？」と、おつるは障子の間から顔を出して、「老婢は急にお暇を頂いたんですつてね。お困りぢや御座いませ

んの」

「老婢(ばあや)はお宅へお寄りしたんですか」

「いゝえ。私先つきお宅の前を通りがけに聲を掛けましたの。あなたのお歸りが遲いつて新七さんは心配してゐらつしやいました」

「さう?」

　おかつは、何時かのやうに新七が湯屋へ迎へに行つてゐやしないかと思つて、今さらのやうに煩く感じた。うるさく待つてゐられるところへ歸つて行つて機嫌を取つたりするのがいやだつたので、無理におつるを誘出して、一緒に家へ連れて行つた。

　夜の公園の寂しい有樣を語つたり、日朝樣へ願を掛けたことを語つたりして、自分の後暗い所行を言紛らせて、おつるを相手に賑かに宵の内を過した。そして、今夜はどうしても新七と二人きりで夜を過すのが厭だつたので、いろ〳〵に說勸めて、おつるを泊らせることにした。新七だけを奥の室へやつて、自分とおつるとは茶の間に寢床を並べることにした。若しも幸吉が今夜の事を彼れの妻や兩親や、あるひは新七にまでも明らさまに知らせたならばと、ふと氣遣はれて、眠りかけた目も醒まされたが、それは彼女に取つては瞬間の迷ひに過ぎなかつた。……弟によく似てゐる兄ではないか。不意打ちに吃驚したやうに一度は氣強くあゝ云つたものゝ、どうせ腹の中は分つてゐるのではないか。

　おかつは幸吉がその妻と添寢しながら、今夜の事を思出しては眠りかねてゐる有樣を想像して、「私を跳ねつけて見たつて、今夜いゝ夢は見られりやしないだらう」と、目の前に描出した男に向つて冷かすやうに云つたが、おかつ自身も夜つぴていゝ夢は見られなかつた。

（八）

翌日の午過ぎまで櫻町から何の音沙汰もなかつたので、あの事については幸吉の胸一つに收められてゐることを察して、おかつは意を安んじた。そして、自分の不所存の詫言をして、氣持よくこの地を立ちたいから是非會つて呉れと書いてやつて、も一度幸吉を何處かへ引出さうかと企てゝゐた。

「今日はちよつとでもお店へ顔出ししていらつしやいな」と、時々思出したやうに新七に出勤を勸めてゐたが、新七は出勤どころか、自分一人だけでは一歩も外へ出まいとしてゐた。おかつの方で不平らしいことさへ一言も云はなくなつたのが、彼れには却つて氣掛りになつてゐた。早晩別れなければならぬやうな破目になりかゝつてゐるといふ豫感は頻りに彼れを脅かしてゐた。

「家でボンヤリしてゐても詰らないぢやないの。ちよつとでも出ていらつしやいよ。お父さんの氣に入るやうにしといた方が、あなたのためにも私のためにもいゝんですからね」と、おかつは唆かしても新七が動かないのがもどかしくて、

「おや、どうでもなさい。末を樂みにしてどんな辛抱でもすると、あなたが不斷云つてゐたのは嘘だつたのね」と拗ねて見せたが、女に拗ねられるのに張合を覺えた新七は、その言葉に縋つて、いろ／＼の口說をはじめた。

何時もと同じやうな詰らない愚痴として、おかつの耳は惱まされた。男は何故こんな詰らない愚痴ばかり並べるのが面白いのか知らんと、無理にも悅しがらせの一言も云へなくなつて、欠伸の出かゝるのをやうやく噛殺してゐたが、そこへ櫻町の小僧が新七を呼びに來たので、彼女も油斷してゐられなくなつた。

「まだ加減が惡いからもう一日休むと云つといて呉れ」と、新七は小僧を返して、「また兄貴でもやつて來るだらう」と

皮肉のつもりで云つたが、おかつは受答へをしないで奥へ入つて夜具を出して横になつた。他所目には不貞腐れと見えるやうな態度で、新七の云ふ事する事の相手にならないで、剛情に自分一人の思ひに耽つてゐた。若しも幸吉が愚かにも卑怯にも裏切りでもしようなら、その時こそ負けてはゐない、此方から身を投出して宮部の一家に小つぴどく恥をかゝせてやる。碌でもない男に長い間自分の身を任せた果てに、ケチをつけられて、スゴ／＼この土地を去るやうでは甲斐性がなさ過ぎる。腹が癒えない。新七の質問や猜疑が何の足しにもなるものか。

家の中は靜かであつたが、ふと首を曲げてそつと目を開けて見ると、新七は茶の間で肱枕して足を曲げて假睡をしてゐた。寒さうで寢息も微かであつた。

おかつは咽が乾いてゐたので、新七の眠つてゐるのを幸ひに起上つて、鐵瓶の湯を呑んだが湯は生温くて、長火鉢には火の氣もなかつた。

そこへ、櫻町からの使が再びやつて來たが、するとおかつは新七には知らせないで、自分で土間へ下りて、小僧を裏手の庭先へ連れて行つて本宅の樣子を訊ねた。

「今直ぐに一緒に連れて來いと大旦那が仰有つたんですから、此方の旦那にさう仰有つて下さい」と小僧は手短く云つた。

「おや、今起しますから待つてゐらつしやい。……お宅の若旦那は昨夕もお店へ出てゐらしつたの？。」

「えゝ。昨夕はおそく歸つて來ました。」

小僧が好奇心に唆られた目でおかつの顏を見ながら、氣味な返事をするので、おかつは老人夫婦や若主人夫婦の氣風やこれ等の人々に對する店員の氣受けなどについていろ／＼と訊ねた。主婦と若旦那とは仲がいゝかと訊ねると、小僧は

ニヤ〳〵笑つた。

「待つてゐらつしやい」と云つて、おかつはふと思出したやうに家へ入つて、小紙幣を鼻紙に包んで來て、使賃として小僧の手に握らせた。この小僧にしろ老婢にしろ、僅かな金を悅しさうにして受けるのを、おかつは見るにつけて、もつと金が自由になつたら、かういふ人だちの手に播いてやつて、自分の思ふやうに皆んなを使つて見たいと考へたりした。

「あなたに賴みたいことがあるんだけど聞いて下すつて？」と、懷つこさうに云ふと、

「へゝえ」と、小僧は無邪氣な笑ひを浮べた。

「ぢや、ちよつと待つてゐて下さいな」

　おかつはふと思ひついて、家へ入ると急いで机に向つて、「昨夜は申譯のないことをいたしました。お許し下さいませ。もはや皆さまにお目にかゝるも耻かしく、いつそ自殺しようかと存じましたが、一言あなたさまにお詫びして、許すとのお言葉を頂きませんと、この世に思ひが殘つて死ぬにも死なれぬやうに思はれます。おしつけがましく何とも申譯は御座いませんが、昨夜と同じ時刻に同じ所へお出で下されて、私に會つて下さいませ。一分間でゝもよろしいのです。私の一生の望みはこれ一つで御座いますから、人ひとりのあの世の迷ひを救つてやるとおぼしめして是非聞きとゞけて下さいませ」と書いた。

　これだけ書くにも案外手間取つたので心が焦立つたが、幸ひに新七の眠りは醒めなかつた。おかつは針のさきで小指を突いて、自分の名前の下を血汐で染めた。

「これを秘密で若旦那に上げて下さいな。たゞ默つて渡せばいゝんですから、誰れにも見せないやうにね」と手紙を小

僧の内懐へしつかりと挾んで、「あたたのお名前は何と云ふの？」と訊ねた。

それから新七を揺り起すと、新七も不承々々に行く氣になつたが、おかつは不斷の出勤の時とは違つた他所行の晴着を出してやつて、「今日は度胸を据ゑて確かりした口を利かなきや駄目ですよ」と力を添へた。

「僕は大丈夫だ。直きに歸つて來るから、お前は何處へも出ないで、火でも燃して待つといで」新七は稍や元氣顏しながら快活にさう云つて、小僧と一緒に出掛けた。

いよ／＼こんな家に退屈して安閑としてはゐられない時が迫つて來たのを感じて、新七が歸つて來るまでに悟を極めなければならないと、おかつは昂奮して頻りに心が急かれたが、しかし、昨夕の所行についての悔悟の念はちつとも起らなかつた。むしろ、破滅なら破滅でよかつた。どうせ一度は免れることの出來ない新七との別れ際の爭ひを表立つて爭ふのも結句いゝ氣持のやうであつた。獨角力は取れないために、燥ぶつて賣切らないで、面白くもない愚圖ついた生活のお附合をしてゐるよりは、擲り合ひの喧嘩別れでもした方がよさゝうであつた。

左吉は昨夕おそく歸つて來たと、使ひの小僧の云つた言葉も、彼女は自分の都合のいゝやうに解いて、「私の云つたことが氣になつて、夢中で方々を歩いてゐたのだらう」と頼もしく思つてゐた。

立つてゐるおかつの頭の上にふと電氣が點いた。時計は止つてゐたが、日の暮れかゝつてゐるのに氣づくと、おかつは昨夕のやうに外へ出る身仕度をした。どんな破目にならうとも世を憚つて腑甲斐なくコツソリ逃げだす氣は最早なくなつてゐたので、自分の持物を新七の留守の間に持出したりなどしなかつたが、自分の手元にある金は財布に浚へ込んで表の戸を引寄せたゞけで外へ出た。

おつるの家の外には遊びに行く所のない彼女は、また風呂へ入つて時を過した。新七の前へどういふ話が持出されて

ゐるかと自分が櫻町の次の室に忍込んで立聞きでもしてゐるような氣で、石鹼を片手に、茫然とした樣子して耳を澄ましたりしてゐたが、「入らつしやいまし」と、直ぐ側で聲を掛けられたのに驚いて目を据ゑると、櫻町の家族の顏は湯氣の中へ散つて、おつるの母親のダブ／＼した身體が彼女の鼻先で場所を取つてゐた。

「オヤ、ちつとも存じませんで」

おかつは惡い人に見つかつたと、いゝ幸先でもないと思ひながら、一しきり愛想のいゝ受答へをして、母親よりも先きへ湯から上つた。

公園の入口まで行くと、おかつも流石に危かしいやうな羞かしいやうな氣がして、ふと足が留つて進みかねたが、でも、スゴ／＼家の方へ後戻りして、新七の歸るのを待つてゐたつても、別にいゝことのあらう筈がなかつたので、ふとした氣おくれを振拂つて昨夕のところへ押進んだ。昨夕此方の魔力にかゝつて來た幸吉が今夜あの手紙に惹かれて來ないつてことはないと、おかつは疑はなかつた。

昨夕詣りそこねた日朝樣のお堂の前へ行つて、蹲んで見上げたが、お堂の中には燈火一つ點いてゐないで陰氣で薄汚さうであつた。身延の仁王門の側で見た時のやうに此處では佛樣も尊げには見えなかつた。おかつは賽錢を闇がりの中へ抛込みながら、參詣人のないかういふお堂の中こそ、媾曳に都合のいゝ所だと不意にさう思つたが、さうすると、薄汚い陰氣なお堂の中も懷しく見られ出した。昨夕のやうに星が冴えて、弱々しい蟲の音も足下から聞えた。

昨夕と同じ時刻になつたことはあたりの樣子で知られた。おかつは階段の側に蹲んだり立つたりしてゐる間に、知らず／＼佛樣に向つて熱心に祈願を籠める氣になつた。佛の御利益を說いてゐた身延の若僧の姿も、彼女の祈願に力を添へるやうに目の前に浮上つた。待焦れてゐる自分の思ひが佛の助けによつて幸吉の心に通つて、此處へ寄つて來るやう

にと口の中で祈つてゐた。珍しくも両手を合せて目を瞑つて額づいたりした。

闇に包まれては尊い御姿も見えなかつたが、暫く瞑つてゐた目を開いて見据ゑると、お堂の正面には幸吉の姿がまざまざと現はれた。驚く間もなく直ぐに消え失せたが、おかつはそれを佛の示現のやうに感じて、改めて眞心から合掌禮拜した。燈火も人影も見えないお堂のあたりが、色つぽい不思議な靈場となつて彼女の心を蕩けさせた。風は動かないで冷々とした空氣は彼女の湯上りの肌の温みをさました。料理屋のなかからは木の間を潜つて三味線の音が微かに聞えて來た。おかつはいくたびか足音の近づくのを耳にしては欺かれてゐたが、やがて、人影が間違ひなく此方へ近づくのを見つけて夢から醒めたやうに目を見張つた。人影は屢々立留つたり、あるひは横道へ外れたりするので、おかつは半信半疑で、正體を見つけるつもりで、自分から乗出して、木蔭に身をかくしながら星の光で相手の顔形の分るところまで近寄つた。

正體を一目見たおかつは、足下に蛇を見つけたやうに驚いて思はず後退りした。ボンヤリしてゐる薄暗い人影も、血眼になつて彼女を捜してゐる新七の面相を彼女の心に呼起させた。

おかつは後退りして、還つた道を求めて急いで公園を出た。後を氣にしてたびたび振返りながら、暫く當てもなく歩いてゐたが、心が次第に鎮まるにつれて、幸吉が手紙の秘密を弟に告げたのぢやないかと疑はれて、その卑怯な所行は憎々しく思はれた。

佛樣の御利益も何も滅茶々々になつたので、おかつはガツカリした。眞心を籠めたつもりの戀の邪慳に壞されたことが一圖に悲しくなつて、誰れとも爭はうとする力が抜けて、こんな土地に一日もゐたゝまらないやうな氣になつてしまつた。

「どうにでもなるがいゝ」おかつは弱々しく自分の心に向つてさう云つた。そして、新七の歸つて來るのを待つて、彼れの心まかせに最後の處置をつけて、自分一人で今夜にでも東京へ立てるものなら立つことにしようと考へながら、フラ〳〵と家へ歸つた。表の戸は開けつ放しになつてゐた。

火の氣のない火鉢の前にぢつと坐つて待つてゐると、新七の思惑などはどちらでもよくなつて、口惜し涙が留度なく流れた。

新七が歸つて來たのは暫く立つてからであつたが、先つき出て行つた時とは見違へるやうな蒼褪めた力のない顔をしてゐた。「お前は何處へ行つてゐた？」と、咎めるやうに云つたが、女の身に異狀もなかつたのに安心してゐることは言葉にも顔付にも現はれた。

「私此處にぢつとしてゐたつて詰りませんからね」と、おかつは當てつけるやうに云つて、相手の鞭の下りるのを待つてゐると、

「僕は何が何やら分らなくなつたよ。親爺や兄貴には相變らず眞綿で首を絞められるやうな意見をされた上に、今日は變な事を云はれたのだが、それは別の話として、家へ戻つて來ると、お前はゐないしね。一人でゐると、あれやこれやと考へられて氣持が惡くなつたから、昨夕お前が公園に行つたとおつるに話してたことを思出して、僕も氣晴らしに公園の方へ散歩に出掛けたのだ」と、新七は努めて靜かに云つて、おかつの方へ目を注ぎながら口を噤んだが、おかつは沒表情のまゝで確かりした受答へもしなかつた。

「さうすると公園で僕が誰に會つたと思ふ？。僕は吃驚したよ。……」

「へえゝ……」と、おかつの目はきらめいた。思はず訊返さうとしながら、言葉を嚙殺して、相手の問はず語りを待設

けてゐた。

「日朝様のお堂の側をまご〳〵してゐる男があつたから、何の氣なしに側へ寄つて見ると、それが兄貴だつたよ……少し前に氣分のよくない事を聞かされた後で、思ひも染めんところでまた出會つたんだから、僕は變でならなかつたが、兄貴の方でも吃驚しとつたよ。……お前は何とも思はないのかい」

「それが私にどういふ關係があつて？」

「僕には今日の事がみんな腑に落ちないんだよ。兄貴も氣が欝してならないから散歩してるんだと云つて、僕を誘つて田圃の方を歩いて、歸りには汁粉を奢つて呉れたんだが、その間に僕の腑に落ちないやうなことをいろ〳〵話してゐたよ。この間中とは人が違つたやうに、兄貴は親身にいろ〳〵な事を云つて呉れたが、途中で別れてから考直すと、親身な話でも以前のやうにそのまゝにや受取れなくなつた。二人きりの兄弟で、子供の時分から大した仲たがひをしたことなしに大きくなつて來たんだが、この頃はどういふものか一人しかない兄が本當の兄のやうに思へなくなつたんだよ。兄貴の事を考へるといやあな氣がするんだ。今日に限らず不斷でも僕の爲めを思つていろんな事を云つて呉れてるんだらうが、……」

新七はつゞいて云はうとしたことを直ぐには云出しかねて、澁い顏して口を噤んだが、おかつも浮かりした口を利いて藪蛇になるのを恐れて默つてゐた。火の氣のない火鉢の側に差向ひで默つてゐる間の鬱陶しさつたらなかつた。新七さへ公園へ行かなかつたなら、望通りに幸吉に會はれたのだと思ふと、おかつは新七に對してどうかしなければ腹が癒えないやうに焦立つたが、我慢して目を伏せてゐると、

「兄貴はこの頃僕等に對して嫉妬心をもつてゐるんだ」と、やがて新七は言ひづらさうに云つた。

「さう？　可笑いわね」
「そんなことは思つても不愉快だから思ひたかないんだけれど、どうもそれに違ひないよ。お前は勘づいてやしないのか。二三度兄貴に會つたんだから、話の中に自然に思當ることがありさうなもんだがなあ」
「分らないわ、あなたの仰有ることは。嫉妬と云つて何を嫉妬するんです」
「そんなことを立入つて口に出して云ふのはいやだ。考へるのもいやだ」ふと氣色ばんでさう云つた新七の聲は震えてゐた。そして、努めて心を鎭めながら、
「おれは今夜の中にでもこの土地を立ちたくなつたよ。お前もどうせ此處にゐる氣はなくなつてるんだらう。後の仕末は後で考へりやいゝんだから、一刻も早く他所へ出て行かうぢやないか。此處にかうして居つちや先きが恐ろしいやうに思はれてならないんだ」
「私と一緒にゐると恐ろしいことがあるんですかねえ」と、おかつは無感興な返事をして、「ぢや、私がゐなければいゝんでせう」卒氣なく云つて、長いこと坐つてゐた火鉢の側から立上つたが、すると、新七は今まで壓へ／＼してゐた疑惑の惱み忿懣の思ひを最早、自分の心一つに收めかねて、われ知らず立上つておかつの後に立つた。
「お前は僕に苦痛を與へるつもりなんだな。僕を苦めといていゝ氣になつてゐるんだな。……それなら僕は云うぞ。お前は利益のためには僕等の家庭を亂してもいゝと思つてるんだらう。僕と一緒にゐたつて得になる見込みがないと分つたら、どんな手段でも取る氣になつてるんだらう。僕は傍で何といはれても、今まではお前を些とも疑つてなんかゐなかつたのだが、先つきからのお前の樣子で自分が馬鹿だつたことが分つて來たんだ」
新七の目に涙の溜つてゐるのをおかつはふと顧みたが、直ぐに顏を背けて、

「何とでも仰有いよ。私が得をするためにどんなことをしたんですかねえ」と空々しく云つた。そして、かねて別にして置いて風呂敷包を開けて、他所行の衣服を出して着替えようとしながら、まかり間違へば、打つたり蹴つたりくらゐされるかも知れないと覺悟して待つてゐたが、それつきり荒い言葉も聞かれなくなつたのを却つて無氣味に感じて、そつと振返ると、新七は後に突立つたまゝ目を据ゑて此方を見入つてゐた。それが、怒つてゐるといふよりも、見惚れてゐるといふやうにおかつには思はれたので、これならいゝと安心して、早く衣服を着替えて、

「私、これから母の所へ行つてよく相談して來ますからね。留めないで下さいね」と、輕く云つて部屋を出掛けた。夜行で東京へ行くかどうするか、まだ極つてゐなかつたのだが、とに角それを口實にするのが穩當だと思つたからであつた。

「此間から僕が誘つた時には、母親なんかに會ふのも詰らんやうに云つてたぢやないか。一人で東京へ行く氣になつたのか」と、新七は前を遮つて云つた。

「だつて、私は母にでも相談するより外は誰れも親身な話相手はないんですからね。私の邪魔をしないやうにして下さい」

「ぢや、どうでもしろ。……こんないやな思ひを殘して別れてもお前は何ともないんだね」

新七が惡夢に襲はれてゐるやうで、藻搔きながら手出しはしかねて、ぼんやりした目で女の動作を見てゐる間に、おかつは心忙しく出て行つた。後から追驅けられるのを氣にしながら、横町から横町へ外れて、暫くして後を顧みて、新七らしい影の見えないのにやうやく安心した。

案外無事に濟んでよかつた。こんなことなら、今まで詰らない我慢をしてゐるには及ばなかつたと、おかつは悔めか

ら解かれたやうで晴々した。それに、幸吉の心の中までへ疑ふ餘地のないやうに知れて來たために、空手で東京へ歸れる筈はなかつたので、足は無意味に停車場の方へ向ひながらも、幸吉を呼出す工夫を凝らしてゐた。

老婢がこの土地へ來たはじめに足がゝりにした鑛山の姪にあたるお時の家は、停車場の近くにあつた。おかつは罐詰や菓物などを僅かばかり店先へ置いてあるその家の前に立つた。そして嬰兒を抱へて店先へ出てゐるお時に向つて、老用があつて塚本さんの家にゐる老婢にちよつと會いたいんだが呼んで來て貰へまいかと頼んだ。「東京へ歸るかも知れないんですからね。さう云つて下さいね、老婢さんと約束してることがあるんだから」と言添へた。

お時はぢろぢろおかつの樣子を見ながら、嬰兒を脊負つて、奥にゐる誰れかに店番を頼んで出て行つた。おかつは明るい所を避けて片蔭に身を潛めて、旨く事の運ぶやうにと念じながら、表の人通りを見てゐた。停車場の近所であつても人影はまばらで、この頃までの賑かな町にあこがれてゐた彼女は、何處へ行つてもこの市中には自分の心を惹くやうな所のないのを今更のやうに感じて、どんないゝことがあるつもりで、新七なんぞに誘はれてこんな土地へ來たのだらうと、出京間際の自分の氣まぐれな考へを思出したりしてゐたが、ふと新七に違ひない若い男の影が日の前を横切つたのに驚かされた。脇目も振らずに足早に歩いてゐた。

「何といふ煩い人だらう。私を追つて停車場へ行つてるんだ。男のくせに見つともない」おかつは自分が直ぐに停車場へ行かなかつたことを喜んで、用心のために表から見えない所へ身を潛めた。

平生の新七の擧動から推して、彼れがあはてゝ狂人見たいに彼女の行衛を捜廻ることはおかつには明かに分つてゐたが、今はそれを苦に病むほどに恐ろしくはなかつた……もう私の身體をあんな男の自由にさせることつちやない。あの人の親切ぐらゐは、私ほどの女が一月あまりもこんな土地で弄び物になつてゐたので、充分過ぎるほどに返禮してゐる。

自分ゆゑにこの田舍の町に一騷ぎの起ることも、むしろいゝ氣持で想像された。そして、大きな騷ぎか小さな騷ぎか騷ぎの起るのを覺悟してゐると、氣に張りが出來て、人には無理無體と思はれさうな戀慕も難なく遂了されさうに思はれた。

「老婢さん、お氣の毒でしたわね」と、踞んでゐた暗い所から立上ると、忙しく息をはいてゐた老婢は、

「何時お立ちになるんですか。今夜のことぢや御座いますまいね」

「都合で今夜立つかも知れないわ。それについて、あなたにお賴みしたいことがあるんですがね」

おかつは低い聲でさう云つた。そして、お時に硯箱などを借りて急いで手紙を書いて老婢に渡しながら、幸吉を宮部家の代表者として會つて置く必要のあることを話いて言譯をした。

「成べくお店の人に目立たないやうに、あなたが若旦那に直かに會つて、これを渡して御返事を聞いて來て下さいね」

「はい」

老婢は力のない返事をした。下女として雇はれてゐた間でさへ使歩きは大儀だつたのに、わざわざ呼びつけられて可成り遠い所へ使にやられるのは不平であつたが、その大儀さうな風に氣づいたおかつは、

「成るべく急いで行つて頂戴な。そのかはりお禮は充分にしますよ。東京へ行つたら屹度あなたを呼んで上げてよ。……宮本さんとこは仕事が樂ぢやないでせう」と、人情のありさうな口を利いた。

「お禮などどちらでもよう御座いますが、東京へは連れてつて下さいましよ」と、老婢は俄かに悅しさうな顏をした。

「歩くのが大儀なら近所まで俥に乘つていらつしいな」と、おかつは無理にいくらかの金を押付けた。そして、老婢が急ぎ足で行くのを見えなくなるまで見送つてゐたが、お時に勸められて、家の者の寢室になつてゐる二階へ上つて休ん

でゐることにした。すでに敷かれてゐる寢床をわざ〳〵片付けられたりするのを、おかつは氣の毒に思ひながら、新七と親む前に東京のある家のこんな二階である男と出會つてゐたことを遠い昔のことのやうに思出したりしてゐたが、一人になつて薄つぺらな座蒲團にキチンと坐つて待つてゐると、一刻々々が長く待遠しくて堪へられなかつた。

お時に澁茶を入れて來て、お愛想に世間話を持出したが、話が新七の事に觸れるので、おかつは返事をするのに苦んだ。老婢を雇入れたのもお時の世話だつたので、お時の亭主は以前宮部家へ出入りしたこともあつたのだから、おかつは油斷してはゐられなかつた。

「櫻町の大旦那はそりやお堅いんですからね。新七さんにもお氣の毒で御座いますよ」と、お時は的の外れた同情をしておかつが一人で東京へ歸るやうな破目になつたのを憐れむやうな口を利いた。

私もこんな見窄らしい田舍の主婦に氣の毒がられるやうになつたのか知らんと、おかつは擽つたい氣持がした。

餘程立つてから戻つて來た老婢は、階子段を上るや否や、先方の返事を傳へる先きよ、「姉さん、今其處でお宅の旦那樣にお會ひしましたよ。私何も申上げませんでしたけれど」と、さもおかつの心を呑込んでゐるやうにキョト〳〵してソッと云つた。

「さう……。何處へ行つたんでせう」おかつは空呆けてさう云つたが、驚きをかくす譯には行かなかつた。

「お前は何處へ行くとお訊きなすつたから、ちよつとお時の家へとお答へすると、歸りに寄つて行けと仰有いました」

「へえ。……」おかつは殊さらに云つて、「それで櫻町の方はどうだつたの？」と、老婢ののろさを齒痒がつて訊ねると、

「若旦那樣はお店の火鉢の側で青い顏して俯首いてゐらつしやいました。お手紙を差上げると吃驚しなすつて、今夜はおそいから、話があるのなら明日にでもして呉れよといふ御返事でした。そして大變慌てゝゐらつしやいました」

「明日にしろつたつて、私はもうこの土地には家がないぢやないかね」おかつは、老婢の所爲でゞもあるやうに思はず氣色ばんで突つかかつたが、「あなたが出て行つた後で、私もあの家にはゐないことに極めてるのよ」と後で顏を和らげて云つた。

「こんな穢るしい所でゞもおよろしければお泊んなさいましな。私がお時にさう申して置きますから。……姉さんもこのまゝ東京へ歸んなすつちや詰らないでせうから、櫻町のお家で道をつけて下さるまではこの家にでも泊つて待つてゐらつしやいましな。私もお役に立たなくつても御用があれば何でもいたしますよ」と、老婢は意外にも焚付けるやうに云つた。

「えゝ、有難う」おかつは老婢の心は見え透いてゐながら、何となく心元なくなつてゐる今の場合さう云はれるのは有難かつた。「あなたにはまたお頼みしたいことがあるんですけど、今夜はもう歸つて下さいな。遲くなつたらお家へ惡いでせうから。私もお暇しませうよ」と、座を立ちかけると、

「姉さんは御遠慮なさらないでこちらへお泊んなさい。その方がよう御座いますよ。姉さんは今夜からお時の家にゐらつしやるつて、櫻町の若旦那にさう申上げといたのですから。若旦那にお會になつて話がつくまで此處をお動きにならない方がよろしいと思ひますよ。……私はおつるさんにも塚本さんの方にも、どなたにもあなたが此方にゐらつしやることを話しませんから。東京へお立ちになるまで、安心して何日でも此處にゐらつしやいましよ」

「ぢや、老婢さんは若旦那にいろんなことをお話したのね」。

「私の方から申上げた譯ぢや御座いませんけれど、若旦那がお店の角まで私に隨いていらしつて、いろんなことをお訊きなさいますから。……それは姉さんのことばかりお訊きになつたんぢや御座いませんです。實はおつるさんが櫻町の

若旦那には大變な執心なんで御座いますから」

老婢は自分の餘計なお喋舌を言紛らすためにおつるのことまで持出したが、おかつはおつるなどに對して嫉妬を起すにはあまりに自から恃むところがあつた。むしろ嘲笑ふやうな氣持で聞いてゐた。

度胸を据ゑて此處に泊ることに極めて老婢を歸してから、おかつは階下でお時や初對面のお時の亭主を相手に、就眠前の暫くの時間を過したが、幸吉夫婦の話が出ると、痒いやうな刺戟を感じた。幸吉の妻の平たい肥つた赭ら顔が、自分が何處かで見たことがあるやうに明かにおかつの胸に映つた。そして、その女に對して嫉妬の思ひのむらむらと起るのをどうすることも出來なかつた。……今夜は自分のところへ來る筈の幸吉が、自分のことを忘れてはゐないに極つてゐるのに、氣臆れして、そんな配偶(つれあひ)のところに今まで通りに添寢するのを情無く思つてゐた。

卑怯な人、腑甲斐ない人と、おかつは男つてものみんなそんなのか知らんと、勝手に蔑(さげす)視みながら、直ぐにも達せられさうな望みの容易に達せられないことの抵牾(もどか)しくて、幸吉に對する戀しさは、夜の明けるまでどうしてぢつとしてゐられるかと思はれるほどに燃立つた。

二階へ上つて煎餅蒲團に横たはつて枕に就いた時には、表の戸も鎖されて、外の足音にも夜の更けたことが知られた。汽車の音が耳近く聞えてから次第に遠くへ消えてしまふのが、おかつの心を何となく哀れつぽくさせて涙をさへ浮べさせた。無理にでもこの戀を遂げなければと荒れてゐる彼女の心もふと鎭められて、かの豚ぶとりの老爺のことが思出された。無垢な自分を最初に弄んだ憎い爺さんだけれど、親切なことは親切なのだから、此方から泣きついて助けを乞ふたら見殺しにはすりやすまい。「どうせ滿足に世が渡られる身ではないし」無理な色戀には諦めをつけて、お爺さんの所へ行つてあの後の身の上話でもして、思ふさま泣いて見ようかと、おかつはふと心弱くなつたりした。涙に濡れた枕紙

に額を押付けて寝苦しい思ひをしてゐる間に知らず〲眠入つたが、彼女の夢の中に忍込んで來たのは、幸吉でも新七でもなくつて、豚のやうに肥つた頭の禿げた老爺であつた。お爺さんはニコ〲した顔してやつて來た。

老爺に枕を投げると同時に、おかつは目を醒ましたが、夢の中でいやらしかつた爺さんの擧動は、醒めてからも目の前にちらついて、おかつは寝卷を脱いで振拂きたいやうな氣持がした。眞夜中過ぎになると、俄かに冬が來たやうに、寒い空氣が薄い夜具の隙間から彼女の肌を冷やした。

(九)

一番の汽車に乘る客が外を通つてゐる頃であつた。戸を叩く音と呼起す聲に、明け方の眠りを醒まされたおかつは、自分に關係したことで誰れかゞ訪ねて來たのに違ひないと思はれたので、胸を躁かせながら聞耳を立てゝゐた。雨戸の隙間は薄明るくなつてゐた。お時が寢呆けた返事をして、愚圖々々してゐる間に、手早く衣服を着けながら、戸外の音聲に耳を澄ませてゐたが、やがてお時と話しだした客の聲には見當がつかなかつた。自分に逢ひに來たのぢやないと思直すと、寒いのに早くから起きてゐたつて仕方がないので、再び寢床へ入りかけたが、すると、話聲が切れて、お時が梯子段を上つて來たので、おかつは先つきよりも一層はげしく胸騷ぎをさせた。

「宮部さんの御親戚の方が、あなたにお目に掛りたいつて入らしつたんですが、お通し申してもよろしいでせうか。」

お時は側へ寄つて小聲で云つた。

「御親戚の方ですつて?」おかつは氣抜けがしたやうにさう云つて、ちよつと間を置いて、「私宮部さんの御親戚の方にはお會ひしたくないんですから、お斷りして下さいな」とキツパリ言放つた。

「若旦那の叔父さんに當る方なんでせう。ちよつとでもお會ひになつてお話をお極めになつたらいかゞでせう」

「いゝえ、私その方にはお會ひしたくないんですの。お氣の毒ですけど、斷つて下さいな」

「さうで御座いますか」

お時は不機嫌な顏して下りて行つた。おかつは張合ひがなかつた。寢卷に着替えて寢床へ入つて、日が差すまで、もう一眠入りするつもりになつてゐたが、階下では朝の仕度やら子供の泣聲やらで騷々しくなつた。鐵道馬車の音も聞えだした。ふと壁一重の隣りの二階から、拍子木の音に和して南無妙法蓮華經の聲がかしましく聞えだしたので、おかつは自棄見たいな朝寢が出來なくなつて、夜具を片付けて階下へ下りて顏を洗つた。化粧道具さへ持つてゐないのが不自由であつたが、自分の荷物を取りに行く譯には行かないので、お時の鏡を借りて頭髮だけ解きつけてゐた。眠不足のためか、いやな夢に惱まされたためか、疲勞が目頬にあらはれてゐるのが、おかつ自身にもよく分つた。

「主婦さん。老婢さんの緣で此方の御厄介になつたのですけど、御迷惑なら直ぐにお暇しますよ」と、後から此方を見てゐるお時に云つた。昨夕は一睡消るのさへ多少氣がひけてゐたのであつたが、最早さういふ些細たことに神經を病むには及ばないと度胸を据ゑて、自分の力一ぱい幸吉の家に取付いて離れない覺悟を極めて、どうかなるまで此處に寢起をしてゐようとした。

「主婦さん。私、櫻町の若旦那の幸吉さんにお目に掛つて、私の顏の立つやうにして頂いて綺麗にお別れすることに約束がしてあるんですからね。幸吉さんの外の方かいらしつたら、お斷りして下さいね。若しも新七さんが訪ねて來ても私は此方にゐないつて云つて下さいな。お世話になり女手に、それだけは堅くお愼みしますわ」

「承知いたしました」お時は相手の手強い言葉に呆れて、押して忠言めいた口は利きかねた。

「私のやうな者をかくまつて置いては宮部さんのお家に濟まないと思ひなさるのなら、さう云つて下されば何時でもお暇しますよ」

「姉さんをお泊めしたつて、宮部さんの方で私どもにお小言を仰有る氣遣ひは御座いませんよ」

お時が卑下してさう云ふので、おかつは思上つて、自分が彼等の目上の者で、些少の金でもやつて彼等を自由に差圖するのが當然なやうに思つたりした。

「新七さんが來たら私は他所へ行つちまつたと云つて下さいな。大事なお願ひなのよ」と、おかつは念を押して、お時が一も二もなく命令に從ふのを見て、ひとりでに自分の部屋と決つた二階へ上つて身を潜めた。そして、幸吉に宛てゝ同じやうな呼出しの手紙を書いた。「……明日といふ日は待遠しくてなりません。今日の中に私の身もあなたのお身の上もどうなるか分りませんのですから、一ときも早くお目にかゝれるやうにお願ひいたします。人間はいつ何時じゆ命が切れるか分らないですもの。私は心がせかれてなりません」と、今の今心底から思はれて仕方がないことを書添へたが以前の手紙とは違つて、今度のは上べも底もない露骨な色文みたいになつてしまつた。

おかつは躊躇しないで、お時に頼んでその手紙をポストへ入れさせた。一日を待暮すのは容易ならぬ辛抱の入る譯だつたが、おかつの昂奮した心は、退屈する暇のないやうに忙がしかつた。新七の屈託してゐる顔や、血眼になつて捜洞つてゐる顔なども、彼女の目の前に渦を巻いた。

おつるが訪ねて來たのを、知らないと云つて返したと、お時は二階へ知らせに來て、「何だか言ひにくく御座んしたけれど」と、嘘を吐くことの苦しさを洩らした。

「おつるさんにはなほ更會ひたくなかつたんですの。よく斷つて呉れましたわね」

おかつはお時の手柄を褒めそやすやうにさう云つて、おつるの言つた事を訊糺した。新七が外に手頃な相談相手がないから、據なくおつる親子に縋つたことが、おかつにはよく察せられた。

時々窓を開けて富士を眺めたり汽車の煙を眺めたりしたが、午過ぎまで一歩も外へは踏出さないでゐたおかつは、お時一人が内職のやうにやつてゐる商賣のあまりに暇過ぎるのに氣づいて、自分が店へ出て看板になつてやらうか、さうしたらもつと繁昌するだらうと酔興な空想を起して、お時にその考へを洩らして、この商ひのことを訊ねた。

「品物がよく賣れゝば商賣は面白いものらしいわね。私もこの土地にゐて何か商賣をはじめようか知ら」と云つたりして價値のある者のなさうな見窄らしい商品棚を覗き見などしてゐたが、鐵道馬車の煽り立てた埃風に包まれて店頭に立つた客は、ふと見ると、勢ひのない顔した幸吉であつた。

「オヤ入らつしやいまし」と、お時は悦しさうに云つて迎へて、「汚いですけどもお二階へお上んなすつて」と、おかつにかはつて案内した。

お時が無沙汰のお詫などしてゐる間に、おかつは幸吉の落着かない素振や落着かない返事に注意してゐたが、お時に行かれた後で何と云つて話の口を切つていゝかと氣迷ひされて、一人でゐた間の決心も鈍つて、明るい光が眩しかつた。

「なにか御用が御座んしたらお呼びなすつて下さいまし」と、お時が座を外した後で、底深い沈默が二人の間に澱んでゐたが、

「私は緩くりしちやゐられないんだから、あなたの望みだけ早く云つて貰ひませう。あなたが此處にゐなさることは新七にも秘密にしてあるんだが、私に當てゝあゝいふ手紙をたび〳〵寄越されちや非常に迷惑するんです。親戚の者を代りに來させても會つて貰へないから、私が責任を持つて來にくい所を無理に此方に來たんだから、そのつもりで話をし

て下さい」

「なぜそんなことを仰有るの？。……私の心の中は分つてゐらつしやるくせに」おかつは相手の角張つた造り文句がいやになつて、笑ひをこぼしながら馴々しく云つて、「此間の晩公園でお目に掛つた時には大變お怒りなすつたけれど、私はあなたのお心の中はよく分つてゐますから、そんなに失望はいたしませんでしたの。本當に失望したなら、今まで生きてゐてこんな土地にウロ〳〵してはゐませんわ。……でも、よく訪ねて來て下すつたわね。頻く申上げた甲斐があつたと思つて悅しくつてなりませんわ。……早く恨みを云へと仰有つたつて、かうしてお目に掛ると口へ出してはなんにも云へないんですから勘忍して下さいましな。お互ひに心の中が分つてゐればそれでよろしいぢやありませんか」

おかつの媚びを含んだ眼差しは幸吉を戰かした。自分の破滅を恐れたやうに思はず後退りして、「あなたのやうな人こそ毒婦と云ふんだらう」と、聲を震はせて云つた。顔にも血の氣を失つた。「そんなことは自分一人で穩便に仕末しようと思つて、誰れにも云はないで昨夕は一晩中考へたくらゐなんだが、あなたの方で無理剛情に私の家庭を亂さうと思つてるんですか。私は家の者や世間に對しても迷惑するから、お時を呼んで立合つて貰つて、自分の潔白を明して置かう」と云つて座を立ちかけた。

おかつは引留めもしないで、夢でも見てゐるやうな目をしてぢつと見上げてゐた。

「お時さんなんかを證人にして、それであなたの潔白が通つて、この先何時までも安心してゐられるんでせうか」と、やがて、彼女でない誰かが彼女の口を借りて云つてゐるやうな聲で、おかつは氣拔けのした顔して云つた。

立ちかけたが知らん顔して立上りもしないでゐた幸吉は、「私はもうこれきりあなたに會はないから、さう思つてゐて下さい。あなたは[illegible]らんだらうか、あなたのためにもなるやうに、相當な人を入れて話をつけることは

承知しといて下さい」と云つたが、その言葉には力がなかつた。手應へがないので梯子段の方へ向ひながら躊躇してゐたがおかつは夢から醒めたやうな目を向けて、

「それで事が濟んだと思つてゐらつしやるの？。これからもお家の中が穩かで日が送れると思つてらつしやるの？。男の人は卑怯にしてれば世の中が仕合せになるんですかねえ。あなたは何が怖くてビク〳〵してゐらつしやるのか知れないけど、私に會はないと仰有るのなら、私これきりお目に掛りやしません」

「それであなたはこれからどうするんです？　此處にゐるんですか」

「私はこれから新七さんの家へ歸りますわ。私の荷物も置いてあるんですもの。新七さんは私が歸つて行きさへすれば昨夕からの心配は忘れて生返つたやうに喜ぶに極つてゐますわ」

　おかつは愚圖々々してゐる幸吉を侮蔑した目で見ながら、梯子段から下を覗いて、「主婦さん。若旦那はお歸りになるんですつて」と叫んだ。

　幸吉は逃げるやうに出て行つた。

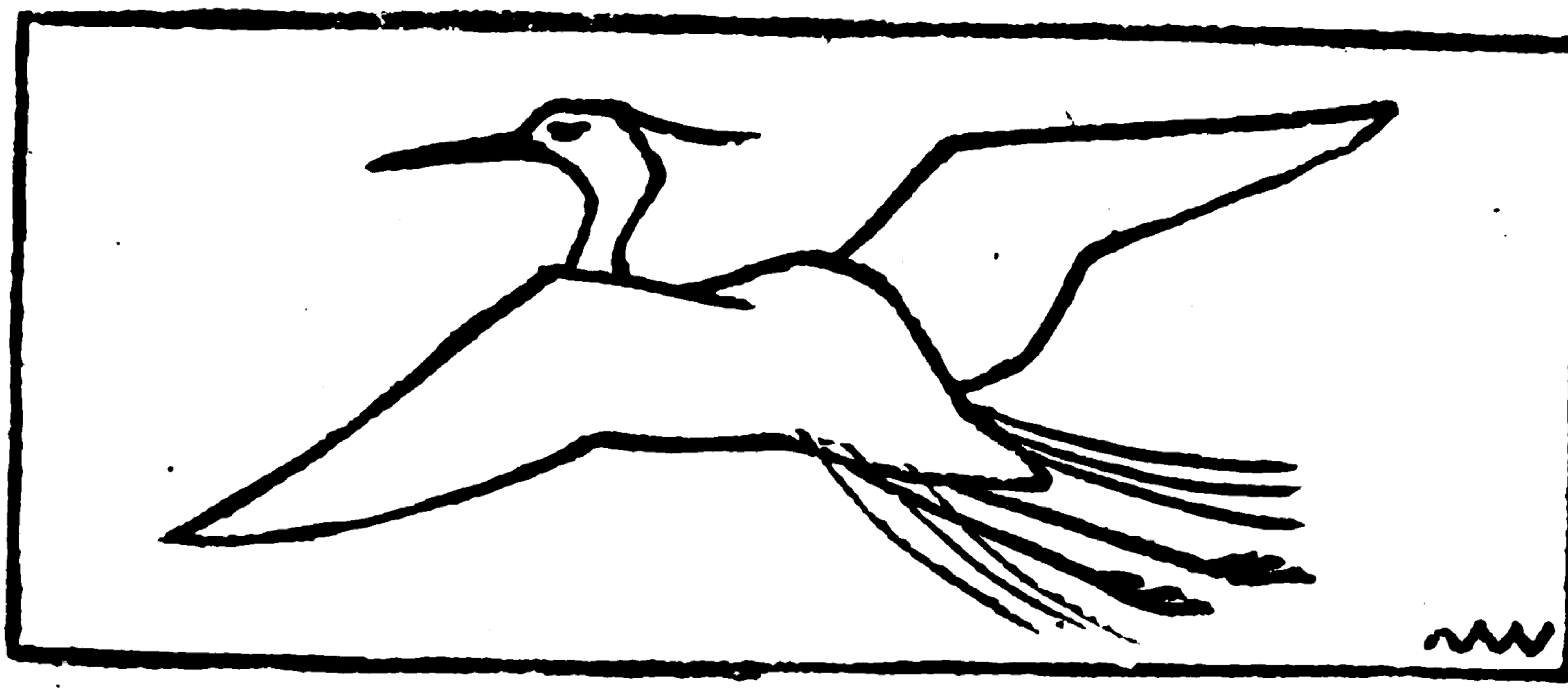
　おかつは暗くなつてから、二度と足踏みすまいと思つてゐた新七の假宅へ歸ることにしてゐたが、幸吉が行つた後間もなく、老婢が姿を見せて、せか〳〵息を吐きながらその後の新七の事を慌たゞしく知らせた。

「私と姉さんと相談づくでお家を出たやうに、旦那樣は思つてゐらつしやるんです。だから私が姉さんの行先を知つてゐるに違ひないつて、私をお責めなさるんですよ。云はなければ私をどんな酷い目にでも會はせて白狀させると思つてゐらつしやるんだから怖くつてなりません」

「ぢやア正直にさう云つたらいゝぢやないの」と、おかつは事もなげに云つて、「私これから家へ歸るところなんですか

らね。心配しなくつてもいゝのに」

老婢は呆氣に取られてゐた。やがて、新七の氣の立つてゐる所へ不用意に歸つて行く危險を說いたりしたが、「大丈夫ですよ」と云つて、おかつは取上げなかつた。見たところは雲と墨とほどに美醜の差別はあつても、氣心は同じい幸吉と新七との顏を彼女は目の先に浮べて見詰めてゐた。



戯曲

邯鄲

野上彌生子

若き盧生（序詞）

盧生（若き牧人の扮装にて舞臺の中央に立つ）　私はこの蜀の國の山間谷に住む盧生と申す羊飼ひでございます。私には親もなければ兄弟もございません。また力になつてくれる親類とてもございません。頼りないたゞ一人の孤兒が、誰と云ふともなく、情ある村人たちの手から手に渡されて、やつと育つたのださうでございます。それ故今に家らしい家とてもなく、ひどく貧乏でございます。學校へ上つたことがございませんから、文字も知りません。いや、知ると云へば何一つ人並みに知つてゐると申せるものはございません。私に出來ますことのたゞ一つは、この蜀の山の中で羊を追ふことだけでございます。これが私の職業であり、生活であり、希望であり、また悦びでもありました。またさうしてをりさへすれば村人たちは皆んな私を調法がつて親切にしてくれました。而して信用して彼等の羊を托してくれました。たまに私の貧しいことや、何にものを知らないことを冷笑する若者たちに出

逢ふことがあつても、私は決して臆病にはなりませんでした。四つ足の仲間たちの間にさへ歸れば、私は常に誰よりも『愛されたるもの』でございましたから。彼等が甘へた、可愛い鳴方で鳴き寄ることに依つて、その鈴のついた毛深い頸をすりつけることに依つて、また獸らしい大きな灰色の二度目を輝やかせることに依つて、競つて私に示めさうとする深い愛情は、どんな屈辱の中からでも、直ちに私を救ひ出して與れました。また味のよい野山の木の實、香ばしい草の葉、甘い木の根、谷蔭の清い泉は、私の乏しい食物を、いつでも豐富に補つてくれました。斯うして心が常に愛に充ち足りてゐると共に、胃の腑にも何等の不足をも感じませんでした。そればかりではありません、私の目と耳は人間が見得るうちでの一番美しい光景を見、一番美しい歌を聞きました。一つは山の上の日の出と日沒の景色であり、一つはさま〴〵な珍らしい歌ひ方で、一日私を樂しませてくれる山の鳥の歌でありました。これ等は皆んな私のものでした。その他四方の高い山々の峰でも、その上にそゝり立つてゐる古い岩でも、樹木でも、花でも、また牧場を青く埋めてゐる草でも、この山の上にあつて、私と私の羊の群とだけに親しいものは悉く私のものでないものはありませんでした。斯う思つた時、私はもう貧乏ではなくなりました。人の知らない珍らしい寶が私の一身に充滿してをりました。その中でも一番の目覺しい富は私の太陽でありませう。太陽は、如何なる朝でもそれが現はれさへすれば、先づ最初に私と私の羊の群を照らさないでは、麓の方の何物をも照らさないのでした。私は高い岩の上に立つて、全身に眩い朝日を浴びながら、東の空の方へ兩手をさし擧げて叫びました——私の太陽よ、私の輝く大きな寶玉よ、お早う——と。夕方私と私の羊の群とが山を下りかける頃には、太陽は西の空の高い峰の一角に留まつて、私たちを待つてゐてくれました。太陽は、朝この地上へ昇つた時に最初に出逢つたもの丶群へ、また一日の最後の祝福を與へて去ることを悅ぶかのやうに、思ひきつた盛んな光線を私たちの上へ注ぎかけました。私も私の羊の群もまつ赤になりました。私はその赤い夕日の中

からまた叫びました。――私の太陽よ、私の燃ゆる寶玉よ。左様なら――と。その時立ち留まつて四方を見廻すと、山と云ふ山の頂上が悉く赤く燃えてゐました。山の岩が燃えてゐます。樹木が燃えてゐます。花が燃えてゐます。足許の草の露まで燃えてゐます。この美しい天地が他の誰のものでもない、私のものだ、私と私の羊とだけが、見てをり、知つてをり、有つてをるものだ、と感ずるこの瞬間の感銘程、強く私を打つものはありませんでした。私の心は滿足と誇りで一杯になりました。私は兩手を擴げて誰かに呼びかけ度いやうな氣がしました。また地上にひれ伏して何者かに感謝し度いやうな氣になりました。でも誰に呼びかけませう。何に感謝しませう――私はお話した通り、何にも知らない人間なのでございますから。私はこの感情を紛らすためにたゞ無暗と笛を吹きました。私の角笛は夕暮の山路に、高く、鋭く、震えて鳴り響きました。麓へ下りつくと私は路に近い家から順々に預かつた羊を返して行きました。村を突つきつて村端れに在る私の小屋に歸りつく頃には、丁度羊は一匹もなくなりました。――一匹の羊さへ私にはないのでございますから。でも、それを不足に思つて見るやうな時間は、私は有つてゐませんでした。私は疲れてゐます。朝はまた早く起きなければなりません。私は羊を渡した時親切なかみさんたちが私の手の上に載せてくれたものを、何か知らロの中に頬ばつて、それで晩飯をすますと、その儘眠つてしまひました。――私は斯うして十八年生きて來ました。規則正しい暮らし方をしてをりましたから、身體はいつも健やかであり、心は平和であり、毎日來る日を悦びで迎へて、歸る日を滿足で見送りました。私は不滿も、憂ひも、悲しみも知りませんでした。私の生活は、私一流の生き方で完全に統一されてをりました。あゝ、けれどもそれは今の私のことではございません。すべてが過ぎてしまひました。私の中にはいつからともなく今までの靜かな、落ついたものゝ代りに、絶えず震へ、騒ぐものが住むやうになりました。それが私をかき亂し、いら〳〵させ、怒らせ、悲しませ、溜め息を吐かせます。村のおぢいさんやおばあさんたちは、私の角

笛が近頃ひどく調子が荒びたと申します。又おかみさんたちは、私が彼等の羊を今までほど優しく取り扱はないと云つて小言を云ひます。――周氏の一匹の羊はこの間も少しで深い谷へ落つこつて死ぬところでした。彼の右足はまだびつこを曳いてゐます――怒つた周氏は私を擲りつけようとしました。あゝ何もかも知つてをります。私が悪いのです。罪は私にございます。――が、私はどうしたらいゝのでせう。山へ登つても私はもはや羊の番をしてゐるやうな氣にはなれなくなつてゐます。今まで私をあれ程慰めてくれた鳥の歌さへ、何の興味もなくなりました。日の出の美しい太陽も、日沒の盛んな光景も、もう決して私を引きつけることは出來ませんでした。私は羊の群れが勝手に何處へ散ばつて行かうが、また鳥がどんな歌をうたはうが、また太陽がどんなに美しく照らさうが、そんな事には目もくれないで、毎朝山へ登りつくや否や、牧場とは反對の方向をさして急ぎます。裏山の大きな岩の一つに攀ぢ登つて、深い谷の方を見下すとすぐ目の下が棧道であります。或る時私は迷うた羊を探しながらその岩の傍へ來て、何心なくその深い、山の中腹の嶮路を眺めた時其處には不思議な美しい光景が展けてゐました。その美しさは今まで私の知つてゐた美しいものとは全然違つた種類の美しさでありました。それは慥かに人間であるには相違ありませんでした。でも、私たちがこの山の中で考へてゐる人間とは、またずつと〳〵違つたものでありました。而して夥しい人數でありました。それが悉くすばらしい武器を持つてゐました。目の覺めるやうな色の樣々な旗を持つてゐるものもありました。丁度行列の中央に當つて武器と旗とに圍まれて、一つの見事な乘物が、大勢の人の肩の上に高くかきあげられてゐました。私は乘物の中にゐる人を見ようとして岩から身を乘り出しました。が見得たものは、長く垂れた織物の襞と、その下に僅かに現はれてゐる紫色の着物の一部分だけでありました。私はまだ望みを捨てませんでした。私は頓て一つの場所がその行列の前に現はれるとを知つて居ましたから。どんな急ぎの旅人でも、その棧道を通るほどのものには、足を留めさせないでは措かぬと云はれてゐ

る、溪中第一の景はすぐ前にありました。果して乘物は其處に留まりました。私は胸を躍らせました。續く瞬間に私が見たものを何といひ現はしたらいゝでせう。――私はたゞ怖ろしいものを見た、とより他には云ふことが出來ませんでした。夕方里に下ると村の人たちは、隣り國の王樣が、唐の大王樣の御機嫌伺ひのために、今日棧道を渡つて都へお上りなされた、と云ふ噂をしてをりました。私は小屋へ歸つて、土の荒い壁に向つて云ひました。――あれが王樣と云ふものか。而してまたあの王樣にわざ〳〵都までお辭儀をしに行かせる大王樣と云ふものもあるのか、それが私たちと同じ人間であるとは。――同じ人間。同じ人間。――私はとうと一と晩眠ることが出來ませんでした。その日を境界として私の今までの生活は根柢からくつがへされてしまつたのであります。私は初めて見るもののやうに、自分自身の上に目を落しました。私に果してどんな人間か、何處に何をしてゐるのか。何を有つてゐるのか。私にあんな夥しい家來たちがあるか。武器があるか、旗があるか、あんな見事な乘物があるか――それどころではありません。私には家すらないのです。一匹の羊すらないのです。私の兩手は空つぽです。――いや、さうではない、と私はまた思ひました。私は家來や武器や旗や乘物は有たなくとも、尙ほその他の多くのものを有つてゐると云はうとしました。私はあの羊たちの愛と山の太陽と岩と、樹木と花と鳥と草を數へあげようとしました。が併し、羊の愛が私のものだと云つたところで、私はそれを取つて人の目の前に示めすことは出來ないのです。あの太陽が私のものだと云つたところで、あの太陽を私が私の手の中に握りしめて見ることは出來ないのです。また、岩と樹木と花と鳥と、あの山の中にあるものはすべて私のものだ、と云つたところで、――あゝ何になりませう。あれはおれのだと云ふ人が他に何人現はれるか分りません。私はそれを否定することは出來ないのであります。私はこの瞬間ほどみじめな自分を見たことはありませんでした。私は毎日棧道を眺めては重い息を吐きました。――私は空つぽだ。何一つ有つてない、何一つ知らない、併しあの棧道の向にはすべての

ものがあるのだ。あの王様も、王様のさして行つた都も、その都の大王様も——私の今まで見たことも聞いたこともない様々な世界があるのだ。——其處に行きさへすれば、私は私の有たうとするものが恐くしつかりと有たれ、私の知らうとするものが何もかも知られさうに思へます。私は其處にあらゆる美とあらゆる富と、あらゆる快樂と、而してあらゆる知識と名譽を想像します。想像するだけでも全身が震へます。私はこれまでにもこの山の中から逃れて都の方へ上つて行つた若者たちのあつたことを知つてゐます。彼等がどんな心持ちであの棧道を通つて行つたか、私は今初めてそれを思ひ知ることが出來ます。併し村の老人たちはその度に私たちを戒しめました。彼等は都は怖ろしいところだと教へました。この山の中から一歩踏み出せば、すべてが煩悩の世界だと教へました。棧道の盡きるところが、地獄の口の開くところだと思へと教へました。——あゝ何でもよい、たゞそのまん中に私を飛び込ませて下さい。よしそれが私の想像とはまるで違つた地獄の底であらうとも——いや、あの王様や、大王様や、大王様の都がその地獄の底にあるのならば、私は悦んで地獄に落ちませう。而して私の兩方の空つ手で掴める限りのものを掴みませう。掴んだものが鬼火になつて燃えてなくならない以上、屹度何かゞ殘るに相違ありません。私はその時こそ初めて何かを有つのです。これが自分自身のものだ、と大きな聲で云つて見せられるものを有つのです。あゝ、それがあの王様の頭の上にあつた冠と同じ冠でないと、誰が斷言出來ませう。よし王様の冠の代りに乞食の杯であつたとしても、有ることは、無いことよりも確實な所有です。よいから何でもたゞ有たせて下さい。知らさるものを知らせて下さい。私は決して失望しないことを誓ひます。如何なる運命の中にでも邁進して行く決心と勇氣を有つてゐることを誓ひます。——あゝ運命よ、運命よ、私の新しい運命の棧道よ。私をあの向ふの世界へ渡してくれ。其處に在るあらゆる美、あらゆる醜、あらゆる善、あらゆる惡、あらゆる悦び、あらゆる悲しみ、あらゆる光明、あらゆる暗黒を私の上に投げかけてくれ。私はお前を目がけて兩手を擴げてまつしぐらに驅けて行くぞ。（退場）

第一幕

邯鄲の旅亭。舞臺の中央から右手の方はすべて旅亭の前庭になつてゐて、植込みの間に卓や腰掛が置いてある。その前庭に添うて、鍵の手の形になつて、廣い廊下がある。その廊下の、丁度曲り角になつたところに、一つの長い木の寢椅子が置いてある。

この前庭はまた同時に旅亭の入口であつて、旅人たちは路からそのまゝ庭に入つて卓の上でものを食べたり、寢椅子で休んだりすることが出來るのである。

中央は店先の體裁になつてゐる。左手は野で、煮たきの有樣や、その材料や、道具などの一部分が觀客の目に入るやうな位置に置かれてある。

旅亭の主人なる太つた老翁が、一人退屈さうに店先に安坐して大きな團扇を使つてゐるところで幕が開く。

盧生が前と同じ牧人の扮裝で、ひどく疲れた樣子で下手から登場。彼は但し以前は持つてゐなかつた笠と杖を持つてゐる。これが彼の旅支度の全部である。

暑い夏の午後。

盧生。あゝ咽喉が乾いてたまらない。あの休み茶屋で水を一杯飲ませてくれないかなあ（店先に近づいて）御免なさい。

老翁。これはお出でなさい。今日はお暑いことで、さぞお疲れでございませう。

盧生。氷を一杯飲まして下さいますまいか。

老翁。　へい、へい。(厨の方に向つて、)おばあさんや、お客さんが水を呉れと仰しやるよ。奥の清水の冷たいところを大急ぎで持つておいで。

厨の奥の聲。　はい。はい。

老翁。　お若い衆さん、まあ庭の方へお出でなさい。そちらの方が幾らか凉しうござんすよ。(自分も下りて、先に立つて庭の腰掛の一つに案内して、自分も腰をかける。其處へ主人の妻の老媼が水を入れた容物を盆に載せて、厨から出て來て、庭の卓の上に置く。)

老媼。　此處へ置きますよ。

盧生。　――あゝ、おぢいさんも、おばあさんも、私をさう人並みのお客様扱ひにしないで下さい。私にはお金がないのです。――その一杯の水の代だつて私は拂へないのですから。

老翁。　(盧生をぢつと見詰めて)難儀な旅をなさるのだと見えますね。――まあ、まあ、水の一杯や二杯にお金を貰はうなんて思つてやしませんから、その冷たいところを遠慮なしにお飮みなさい。

盧生。　(水を飮む)あゝ、生き返つたやうな氣がする。

老媼。　咽喉もそんなに乾かしてちや毒ですよ。おぢいさんも云ふ通り、何にも心配はいりませんからね、いゝ程お飮みなさい。もう一杯持つて來てあげませうか。(これ等の言葉の間に、二人が盧生を憐む情が十分現はれると共に、その話しの調子に親しみのあるぞんざいさが加はつて行く。)

盧生。　すみませんね。ちやも一杯貰ひませうか。

老媼。　さあ、さあ。(老媼は水の容物を持つて退場。)

老翁。――若い衆さんは、何處から何處へ行きなさるのですね。

盧生。私は蜀の生れの者ですが、少し思ひ立つたことがあつて、都へ上り度いと思つて蜀を出たのです。

老翁。――都と云ふと、長安の都のことですか。

盧生。さうです。私は長安へ行くつもりだつたのです。

老翁。飛んでもない。そんならお前さんは北と南と、まるであべこべの道を何百里と間違へて來なすつたことになりますよ。

盧生。私は道をよく知らなかつたので人に聞きました。すると、右の方へ行くのだと云ふ人があるかと思ふと、左の方だと云ふ人がありました。同じ山一つでも、上るのだと教へてくれる人もあれば、下るのだと教へてくれる人もありました。河が現はれるとまたその河を渡るのだと云ふ人と、河を渡つてはならないと云ふ人と、二人の人が現はれました。私はその度に正直に右に行つたり、左に行つたり、山を上つたり、下りたり、河を渡つたり、また後戻つたりしました。おしまひには私はどちらへ向つて進んでよいのか譯が分らなくなりました。それからは私はもう誰にも尋ねないことにして、たゞ足の向いた方へ一生懸命歩いてゐたら、ふいと斯んなところへ出てしまつたのです。

老翁。――世間の旅をしてゐると解かりますよ。道一筋でも本當のことを教へてくれる人は滅多にゐないのですからね。(老媼が替りの水を持つて來たのを見)この若い衆さんは、長安の方へ行く積りで斯んなところへ迷つて來なすつたのだとさ。

老媼。おやまあ、それはお氣の毒なことでしたね。――長安の方へは何ですか、用事でもあつたのですか。

老翁。都へ上つて見度い、と云ふそのことが用事でさねえ、若い衆さん。用事に二つはない。どこの國の若い衆さ

んの用事も、みんな同じ用事だ。お前さん國では何をしてゐなすつたのです。

盧生。　私は羊を飼つてゐました。

老翁。　親御さんたちは。

盧生。　どちらもありません。

老翁。　兄弟もないのですか。

盧生。　私は一人つきりです。

老翁。　さうですか、そんなら何日までに急いで家へ歸らなければならないなんてこともないんでせうから、どうです。どうせこちらへ來た序でに、この近所の町で働いちや。長安程はなくとも、も少し北の方へ行くと可なりな王様の町もありますよ。何なら町の知るべのものへ附け手紙をしてあげてもいゝ。

盧生。　有り難うございます。

老嫗。　お前さんは素直な質らしいから、少し辛抱してゐるうちには屹度よい運が向いて來ますよ。ねえ、おぢいさん、

老翁。　さうとも。だが町へ行くにしてもその儘ぢや疲れてゐるだらう。幸ひ他にお客さんもないから、あの寢椅子の上へ行つて一と眠りして、元氣をつけてから出掛けなさい。――何か食べるものはなかつたかね、おばあさん。

老嫗。　今お粥をたきかけたところですから、出來たら御馳走しませう。その間、おぢいさんの云ふ通りに、あの寢椅子の上で手足を延ばしてお休みなさいよ。

盧生。　どうもすみません。あなた方の御恩は死んでも忘れません。

老翁。　さあ、お上んなさい。(老翁が先に立つて寢椅子に導く。)おばあさん、枕を持つて來てお上げ。

老媼。はい、枕。(老媼は奥の方から持つて出た長い皮の枕を渡す。)

老翁。この枕をして眠ると、お前さんの望み次第の夢が見られますよ。――お金でも、美しい女でも、立派な家でも、名譽でも、位でも、勳章でも。何でも、かでも――

盧生。(非常に眞劍な調子で)それは本統のことですか。

老翁。ハッハッハッハ。(笑つて)若い軍馬が進軍ラッパを聞いたやうな顏をしますね。

老媼。(笑つて)おぢいさんの冗談ですよ。さあ落ちついてお眠みなさい。お粥が煮えたら起しますからね。

この言葉と共に盧生は寢椅子の上で眠る。但し純然たる横臥の形は取らないで、枕に頭をもたせかけ、寢椅子の一端に右手の肱を突いて、手で顏を半分蔽うて、單に凭りかゝつてゐるやうな姿勢を取る。

――すぐダーク、チェーンジで次の場面に變る。

* * * * *

楚王の宮殿。――美と威嚴があらゆる樣式で極度に表現されてゐる宮殿の中の一つの廣間。正面に玉座があつて、若い楚王がかけてゐる。そのかけ方は正座でなしに、第一幕の一場で、盧生が旅亭の木の寢椅子に凭りかゝつて眠つた瞬間の姿勢と、同一の姿勢でなければならぬ。同時に觀客は、この若い楚王こそ盧生であると云ふことを知る。王の愛人の光麗姬が入つて來て、顏を覗き込む。

光麗姬。お寢つてゐらつしやるのかと思たわ。――斯んなところに、たつたお一人で何を考へてゐらつしやるの。

王。おれは餘り幸福過ぎやしないか、とそのことを考へてゐたのだ。

光耀姫。そんなに幸福なの、あなたは。

王。さうさ。お前が斯うしておれの側にゐてくれるだけでも、幸福過ぎるほど幸福ぢやないか。（王は光耀姫を强く抱擁して接吻する。）その上、國は豐年續きで、どの家にも食べるものや着るものが餘るほどである。人民たちは滿足して自分自分の仕事を一生懸命してゐる。而しておれを信賴して、おれの爲めなら何でもしようと待ち構へてゐる。敵の國へ軍隊を出すと、城が何十城と降參する。どの軍隊も大勝利で歸つて來る。よその國の人民までおれの人民になりたがつてゐる、人民ばかりぢやない、王までおれの下について、おれの指揮の下で働かうと云つて來てゐる——先刻まで此處で會議のあつたことを知つてゐるだらう。あれはね、趙の國と魏の國と韓の國と衞の國とが同盟して、おれを盟主として、おれの支配の下に服し度いと云つて來た提案に對して、最後の回答を送つたのだ。——おれはもう單なる楚一國の王のみではなくなつたわけだ。恵まれたる運命は男らしく進んで受けよう。感謝もしようが、それと共に增されて行く責任を思ふと怖ろしくなるね。何十萬人、何百萬人、何千萬人の男たち、女たち、年寄りたち、子供たちの一生の安危が、悉くおれの兩方の肩にかゝつてゐるのだと思ふと、本統にうつかりしてはゐられない氣がする。どうぞおれの政治が常にいゝ政治であるやうに。おれの裁判が常に正しい裁判であるやうに。おれの軍隊が常に正義の軍隊であるやうに。

光耀姫。私にもつけ加へさして下さいましな。——どうぞいつまでもあなたが私のあなたであり、私があなたの私であるやうに。二人の愛が、他の如何なる力にも壓されず、破られず、いつまでも今の純眞と熱情と香氣とを保ちますやうに。——

王。——何だつてそんなことを云ひ出したのだ。その言葉は取り樣に依るとひどく悲劇的に響くよ。少くともおれ

たち二人の唇からは永久に洩らす必要のない願ひだと思ふね。

光耀姫。　さうでせうか知ら。――趙の國の王樣には美しいお姫樣がお三人おありになつて、中でも一番下のお姫樣は、目の覺める樣な美しい方でございますつてねえ。

王。　知らないね。

光耀姫。　――まあ。

王。　おれがお前に嘘を云つたことがあるかい。

光耀姫。　では、あなたは本統に何にも御存じないのでございますか。――宰相は今度の同盟を永久につなぐ堅いきづなとして、趙のお姫樣のお一人をあなたのお妃樣に迎へる積りなのでございますわ。宰相の氣に入りの家來たちは、その內相談のためにもう疾くから趙に參つてをりますつて。――御殿の女たちは何でもよく聞き知つて、噂をいたしてをります。新しいお妃樣へお宮仕へをするために私のところから下つたものも澤山ございます。

王。　何と云ふひどい奴等だらう。――しかしあの爺のおせつかいなら今始まつたことではないぢやないか、あれはおれの赤ん坊の時に乳母を世話したと同じ心持で、今に何でもおれの身の廻りへ手を出さうとするのだ。安心してお出で、おれが一睨の下にはねつけてやるから、――趙の國の王女たちが氣に入つたのだら、遠慮なく幾人でも連れて來るがよい。お前には息子が大勢あるのだから――何ならその一番美しい末の王女をお前が貰つたらどうだ。と斷ろ罰つてやるよ。

光耀姫。　他のものならそれでへこむかも知れませんが、あの宰相だけはへこみませんわ。忠義一徹なお爺さんで、あなたのことを本統に愛してゐるのですから、あなたの爲によい事だと信じ込んでしてゐることなのですから、ことが

六ケしうございますわ。それに宰相は私が低い身分の生れであることを何より嫌つてゐるのでございますもの。――あゝ、あなたがえらい王様におなりになればおなりになる程、あなたの國が大きくなれば大きくなるほど、あなたの氣高い性格や、智惠や、武勇を讃美するものが多くなれば多くなる程、あなたと私はだん〳〵押し隔てられて行くのでございますわ。いつそ、あなたが王様である代りに、山番か羊飼ひでもあればよい。そしたら二人つきりでどこかの山の中でのんきに暮らされるでせうねえ。いつもお顔が見てゐられるでせうねえ。其處には、私から絶えずあなたを奪つてゐる大臣たちもゐなければ、將軍たちもゐないし、またお化粧上手、お追從上手で、あなたに色目ばかり遣つて暮らしてゐる貴婦人たちもゐないのでございますわ――あゝ、思つて見るだけでもせい〳〵する。

王。一本氣なお孃さん。お前の駄々はそれだけかい。もつと聞かせてくれてもいゝよ。(光耀姬を引き寄せて強く接吻する)――おれの可愛い小鳥。

光耀姬。――

王。お前は何故もつと自信を持たないのだ。威張つてやらないのだ。お前がおれを要する時に、お前からおれを奪ひに來るものがあつたら、大臣でも將軍でも構はない、追拂つてやればいゝぢやないか。――ことにあの胸糞の惡い女だちのことなぞ、云ふだけも馬鹿々々しい。

光耀姬。いゝえ、いゝえ。あなたは私の心持をちつとも分つては下さらないのね、――私は威張ることはいやでございますわ。あなたの愛を恃んで威張るなんて、醜いことだと思つてゐますわ。――それに大臣たちや將軍たちは、あなたに必要な人たちでございますもの。楚の國王としてのあなたのお仕事の上に、大事な掛け替へのない人たちだ、と云ふことを私は知つてをりますわ。あの人たちがあなたを求めて來る時には、あなたのお仕事の上に何かの急を要する

用事の生じた時だと云ふことをよく知つてをりますわ。私はお引き留め申してはならないのです。甘へた我儘を云つてゐてはならないのです。あの人たちを追ひ拂ふ代りに、私の方が急いであなたから飛びのかなければならない、あなたのお胸から顔を放さなければならない、あなたの手の中からすり拔けて逃げなければならないのでございますわ――あなたのお仕事のために――

王。　さうだ、おれは仕事を持つてゐる。國王としての多くの仕事を持つてゐる。幸ひにまた間違つた仕事もしてゐない積りだ。おれの政治もおれの戰も、萬人の幸福を基礎としなかつたことは一つもなかつたのだから。四國との今度の同盟にしてもそれだ。天下を秦の暴力から救ふためには我々の團結が必要なのだ。すべての情實と私意とを離れて堅く結びつかなければならない。おれが選ばれて彼等を繋ぎ合せる大きな手となつたことは、近頃でのおれの滿足な仕事だつた。――しかしお前を愛することはおれの仕事以上のものだ、いや最も神聖な仕事であることを忘れないでくれ。そのためにはおれは他の何物をも拋つていゝのだと云ふことを誓つて置かう。

光耀姬。　――それが出來さへしたら――

王。　おれを信じないのか。

光耀姬。　――いゝえ、私としては、どんな悲しい、辛らい目を見ようが、あなたの大事なお仕事の邪魔をいたすことは出來ないと申すのでございますわ。

王。　――お前は今日は先刻から變なことばかり云ふね。一體どうしたのだ。何故そんなことを云ふのだ。

光耀姬。　本統に何故でせうね。私にも分かりませんの。

王。　おれが惡かつた。おれは近頃餘りに政治上の計畫に夢中になり過ぎてゐて、お前に不親切であつたかも知れな

い。もしさうであつたら謝罪るよ。許してくれ。ねえ、機嫌を直してくれ。

光麗姫。 勿體ないことを仰しやらないで下さいましな。私はあなたがどんなにお忙しいお身體になつていらつしやるか、またそのお忙しい中からでも、私のことをどんなに優しく思つてゐて下さるか、ようく存じてをりますもの。——それだのに、どうして斯んな怖い、悲しい氣持ちになるのでせう。

王。 ——まつ青な顏をして震えてゐる。光麗姫。どうしたのだ。何がお前をそんなに悲しませてゐるのだ。さあ云つてくれ。

光麗姫。 ——申しますわ——でも、何と申したらいゝのでせう。あの暴風雨を感ずる時の小鳥たちの心持ちが斯うもあるのでせうか知ら。何故ともなく、何者ともなく、また何處からとも知れず、不思議な怖ろしいものが襲ひかゝつて來るやうな氣がいたしますの。それが私を目がけて、睨み据えて、じり〳〵と詰め寄つて來るやうな氣がいたしますの。——それは〳〵云ひやうもない怖ろしい、悲しい、心持ちですわ。——あつ、來ましたわ。來ましたわ。

王。 何が來た。——何にも來はしないではないか。

光麗姫。 ——あの向ふの廻廊を宰相がまゐりました、と申したのですわ。

王。 お前のやうな云ひ方をすると、お前の幽靈とあの宰相とが似たものでもあるやうだ。

光麗姫。 ——そつくりだわ。

王。 ——光麗姫——

光麗姫。 宰相が私を見る目が、私は怖うございますもの。あの目からぢつと見詰められると、私はぞつといたしますわ。私の怖いものが、丁度あんな風に何處からともなく私を見詰めてゐるのでございますわ。——あゝ、上將軍も一

精でございますね。

王。——上將軍が歸つて來た。

光麗姫。——あの廻廊の所に立ち留まつて、宰相と何か話をして笑つてをりますわ。日に燒けて、怖ろしくきつい顏になりましたこと。

王。將軍は北の方の城を見廻りに行つてゐたのだから、まあ戰場に出てゐたと同じだ。何しろあの邊は河一筋で秦の領土と向き合つてゐるのだからね。——どんな樣子だつたらう。あの邊の城はおれの獨特の工夫で築かしてある。もし秦の兵が攻め込めば、河の水を利用して一人殘らず溺れ死をさしてやれるやうに出來てゐるのだ。

光麗姫。——お話をやめて歩き出しました。私は奥へ參りますわ。

王。いや、此處へおいで。

光麗姫。——

王。何故、おれの側にゐ度くないのだ。

光麗姫。——人を殺ろしたり、殺されたり、城を取つたり、取られたり、國を奪つたり、奪はれたり、あゝ、さう云ふ戰や政治のお話をちつと取りすまして聞いてゐられるやうな女に、私がなれさへしたら——それよりか、晩までのお別かれに何故抱いては下さらないの。(この言葉と共に光麗姫は王の抱擁の中に飛び込む。)可愛い、可愛い方。

王。おれの太陽、おれの生命。——さうだ。お前はお前の王國に閉ぢこもつてゐればいゝのだつた。愛と美の王國——お前はその王國の永遠の女王なのだから、おれが宰相や上將軍たちとするやうな話に、興味を持つて呉れと云ふのは、冒瀆であるかも知れない。——だが、おれは、お前が餘りに美し過ぎ、餘りに優し過ぎ、餘りに清淨過ぎるために

怖ろしい氣がするよ。この人間界には相應はないものだとして、お前を創り出した神秘なものゝ手から、また奪ひ返されはしないかと、心配でたまらない。――もつと顏を見せてくれ。晩までにおれの目が飢ゑないやうに、ようく見せておいてくれ。

光麗姫。あの人たちがもう廣間まで參りましたわ。宰相が私を見てゐますわ。――あの目で見てゐますわ。――放して、放して。（光麗姫が王の手から拔けて奥へ駈け込むと同時に、下手から宰相と上將軍とが連れ立つて入つて來る。）

宰相。上將軍が歸られました。

上將軍。陛下の麗はしいお顏を拜して歡喜に存じあげます。

王。將軍も無事に歸つて目出度い。どうだね。あちらの模樣は。

上將軍。私の巡視しました範圍では、城はいづれも堅固です。濠は深く掘られ、壁は厚く塗られ、武器藏には武器がよく手入れされて居り、兵糧藏には食物が一杯詰まつて居ります。守備隊の元氣も旺盛であれば、土地の人民たちとの折合も至極理想的に行つてゐるやうに見受けます。一二年前までは我々が先に立つて、劍を振つて進まなければ入れなかつた土地に、今では至るところに陛下の旗が揭げられ、陛下の萬歲が叫ばれてゐるのを聞くことは非常に愉快でした。

王。殊に、あの方面を第一に占領したのは上將軍の麾下の手兵であつたのだから、君には一層意味ある、愉快な旅行だつた筈だ。自分の勳功を一つ〳〵確かめて歩いた譯だからな。

上將軍。いや、すべては陛下の御威光に依ることでございます。――併し陛下、これは宰相にも只今ちよつと話しましたことですが、秦は油斷が出來ないと思ひます。

王。何か計畫してゐることがあるらしいかね。

上將軍。　あの北の城に拮抗して、河の向ふに新しい城を築き始めました。

宰相。　その築城のために一つの山が切り壞されたと噂される位だそうで、大分大規模のもらしうございます。上將軍はひどく氣にしてゐられるのです。

上將軍。　實際、幾らかでも兵を用ゐるに經驗のあるものであるならば、あの城が何のために築かれてゐるかは、一目で分ることなのでございます。あちらでは矢尻研ぎのやうな下士まで申してをります。討つならあの城の出來上らない、今のうちだと。でなければ今度はこちらが討たるゝ番になるのでございます。

王。　上將軍。いつもながら君の綿密な觀察と、機を見るに敏な忠言を感謝するよ。併しおれの衷心からの希望を云ふならば、今の場合また新たな軍を起して領土を擴張するよりも、現在握つてゐるものを靜かに育て、はぐくみ度い氣がするのだ。おれは暫く甲冑を脱ぎ捨てゝ文官の服を着てゐ度い。純政治家となつて、自分の國におれの理想通りの經綸を施して見度いのだ。兵士たちは今やつと戰場から歸つて來たばかりなのだからね。彼等を今暫くでも母親の胸に、妻の腕の中に、また子供等の抱擁の中に休息さしてやり度い。而して彼等の劍に依つてもたらされた平和が、如何に有效に利用せられ、如何に美しく飾られ、如何に神聖に保もたれてゐるかを深く思ひ知らせてやり度い。敵に對しては常に怖るべき戰士であつた彼等に、よき人間であり、節制ある市民であり、愛ある隣人であるべき、教養と文化とを持たせ度いのだ。

上將軍。　それは立派な御抱負だと存じます。且また、陛下の賢明にして周到なる御用意に依つて、屹度豫期以上の成功を納めらるべきことを疑ひません。併し私は軍人でございますから、何事でも先づ軍事上の見地から考へさせられます。而してその意見を正直に陛下に申上げますことは、私の義務であり、また正當の權利でもあると存じますから、

まつ直に申上げます。それは、陛下の優れた御事業が完成する以前に、既に秦は城を築き上げてしまふだらう、と申すことでございます。他に申上げますことは何事もございません。——では今日はこれでお暇を頂き度うございます。御用事がございますならば、いつ何時でも御召出し下さい。出陣の用意は常に整つてをります。宰相、お先へ失禮、どうか私の不躾な言上に就いて陛下にお取り做し下さい。

宰相。　御心配は要りません。陛下は君の率直な忠誠をます／＼お愛しになるばかりだと信じます。

上將軍。　どうかさうであつて欲しいものです。（上將軍退場。）

王。　あの男は戰がすむと、その明けの日からもう生てることが退屈になるのだね。

宰相。　ですからあの男には、戰をさしてくれる君主が、最も奉公のし甲斐のある君主なのでございます。御し易いと共に、非常な危險を伴つてゐます。

王。　おれが戰をさせなければ、おれにでも叛くと云ふのだな。

宰相。　仰せの通りでございます。叛くだけではございません。あの通りの單純な男ですから、向ふの誘ひ方一つでは、昨日の敵とも容易に兵を合することが出來ます。——秦はちよつとしたお世辭と餌で、味方に優勢な武力を加へると共に、敵に大事な主將を失はせ得るのでございます。

王。　併し、おれは北境の事態が、上將軍の云ふ程切迫してゐるとは考へられない。秦にしたところで、さう戰ばかりしてゐられる筈はないのだからね。第一金がないと思ふ。秦は近年飢饉續きの上に洪水がある、疫病が流行るで、内治上にも種々困難な問題が生じかけてゐるし、財政狀態もひどく惡くなつてゐることは明白なのだから、これまでのやうな積極は出來ないよ。その築城一件だつて、見方に依ると、多難な國情を見透かされないために、わざと虛勢を張つた

仕事であるかも知れない。

宰相。　と致しますと、討つならば今だ、と云ふ上將軍の主張が、一層有意義になつて來るわけでございますね。

王。　宰相、君まで主戰論者になつたのかい。

宰相。　私はたゞ陛下の王國を泰山の安きに置いて死に度い、と願ふばかりでございます。私はもう年を取りましたが、まだ幾らかは陛下のために働くことが出來る積りです。ですから今のうちに禁にとゞめが刺して置き度いのです。陛下の競爭者が地上に倒れて、天下が完全に陛下の手に歸するのを見て死に度いのでございます。それまでは死んでも安心は出來ないのでございます。この最終の目的のためには、あらゆる手段が講じられなければなりません。なし得る限りの畫策がなされなければなりません。陛下、陛下の平和政策はお美しい。それは取りも直さず理想國の出現でございます。併し建設の途中に邪魔が入つては何にもならないではございませんか。それ故家を建てるものが土をならし、石くれを取り除くと同じやうに、先づ起るべき禍の根から滅ぼしてかゝることが正しい順序だと存じます。さうはお考へになりませんか。

王。　おれは小さい時から何事でもお前にさう云ふ風に說き聞かされつけてゐるせゐか、お前の言葉はいつとなしにおれの暗示になつて來る。――併しその問題はよく考へなければならないからね。

宰相。　何にも多くをお考へになることは要りません。たゞ陛下の理想國をもつと大規模にしよう、もつと美しく、もつと完全にしようとさへ決心なされば、ことは直ぐ極まることでございます。――一つの花園を拵へるか、十の花園を打つて一つにした一大花園を拵へるか。問題はたゞ簡單なこの二つでございます。

王。　――あゝ、何と云ふ怖ろしい誘惑だらう。やつと洗つたばかりの手に、おれは又血を塗らなければならないの

か。――宰相、おれの國庫には何年位戰ふ金があるだらう。

宰相。その點ならば今陛下ほど多くの軍費を容易に支出し得る國王はあるまいかと存じます。我が王國の國庫は申すまでもなく陛下の御自由でございます上に、陛下は尚ほ他に四つの國庫を持つてゐられる譯でございますから。

王。それはおれの同盟國の金を意味するのだな。

宰相。左樣でございます。あの四國の富を利用いたさないのは嘘でございます。取り分け趙は最も富んでをり、また最も深く陛下を信賴いたしてをります點から申しましても、一番陛下のお力になる國だと存じます。今度の同盟にしても、あの國が他國に先んじて熱心に提唱したればこそ成功したのでございます。それ故陛下の御希望とあれば同盟の規約以上にどんな事でも悅んでいたすに極まつてをります。財政上の援助は勿論、武力とても亦同樣でございます。我々は必要に應じていつでも百萬の援軍を集めることが出來るのでございます。これは私の想像ではございません。非公式ではありますが趙の責任ある說明なのでございます。この問題から見えた使節は、私との內談の際、これは國王陛下の意志だと云つて、その點を力說してをりました。

王。趙の國王はおれのことを買かぶつてゐるのかも知れない。おれの力以上のものをおれに望んでゐるのかも知れない。――實際おれがどんな男だかは分る筈はないのだからね。おれが向ふを分らないと同じに。おれたちは外交上の文書で交際してゐる以外には、逢つたことも、話したこともない。顏を見たことさへないのだからな。――そのおれに何だつてさう肩を入れたものだらう。

宰相。趙の國王は陛下に依つて、この世に生れ出る王子のうちでの、一番美しい、一番聰明な王子を、御自分の孫と呼び度いのでございます。

王。　さうか。それで初めてお前の長い序論が分つた。

宰相。　陛下を措いて他に御自分の娘を托すべき男はないと思ひ込んでゐられるのださうでございます。

王。　それも、お前の所謂非公式の聲明なのかい。

宰相。　いや、これは聲明以上のものでございます。使節は趙の國王の熱心な希望を述べて、是非この結婚を成立さしてほしい。幸ひにそれが出來れば、趙の悦びのみではなく、各同盟國の信頼と融合を象徴する生きたきづなとして、政治上からも非常に有意義なことだと信ずると申してをりました。私も同意見でございます。

王。　意氣投合と云ふ譯なのだな。併し斷つて置くが、おれは御免だよ。――そんな結婚を誰がするものか。

宰相。　この結婚のどの點が陛下のお氣に入らないのでございますか。

王。　どの點と特に一つを數へあげることは出來ない。すべてが氣に入らないのだ。と云ふよりはおれはもう結婚してゐるのだ、と云つた方が早分りがするだらう。

宰相。　あの孤兒の小娘が、陛下のお妃だと仰しやるのでございますか。

王。　うん。さうだ。光麗姫はおれの妻だ。

宰相。　失禮ながらあの婦人にはそんな資格はございません。第一、あれは大藏卿の家に使はれてゐた庭園師の娘で、たゞ偶然の機會に陛下のお目に留まつたと云ふことの外には、氏も素性も知られてない賤しいものでございます。

王。　お前の云ふ通りだ。しかし、おれから愛されてゐると云ふことだけで、如何なる王侯貴人の娘も持てない資格を光麗姫は持つてゐるのだと思つてゐて貰ひ度い。

宰相。　陛下がさう云ふお考へであれば、その點に就いては何事も申上げますまい。たゞ併しお世嗣ぎのことはどう

遊ばすお積りでございますか。光麗姫は陛下の寵愛を受けてもう三年になつてをります。然るにまだ一人のお子様もございません。典藥の頭の意見では、あの婦人から王子を得ることは不可能のやうに存じます。

王。――あれはたゞ美の精なのだ。愛の精なのだ。人間の姿こそしてゐるが、本統は人間ではない。人間以上のものだ。

宰相。それは兎もあれ、陛下のお世嗣としては、姿も人間であり、本質も人間である王子が必要なのでございます。

王。――おれは、おれの子供と云ふことをまだ眞面目に考へて見たことはなかつた。

宰相。今こそ最も眞面目にそれを考慮すべき機會が參つたのでございます。――陛下、光麗姫は陛下の後宮のどの片隅に置かれても不平は云はない婦人だと存じますが。

王。お前は何と云ふ殘酷な人間だ。お前の批評は間違つてはゐない。光麗姫はおれの名でする事であれば、どんなことをされても怒らない女だ。併しさうしておいて如何しようと云ふのだ。お前たちの希望通りおれを趙の王女と結婚さして、その盛んな儀式や、祝賀會や、厳かな立后式を後宮の片隅の窓から光麗姫に見せようと云ふ工夫なのか。

宰相。若しそれが可哀想だと思召すなら他に幾らも方法はございます。

王。さあどんな方法でも云つて見ろ。

宰相。陛下が趙の王女と結婚なさる代りに、光麗姫を趙の國王へお遣はしなさることも一つの方法でございます。

王。何だと。

宰相。趙の國王は陛下の寵姫を決して粗末に取扱ふ筈はないと申すのでございます。

王。あゝ、その口がお前の口でなかつたら――立ちどころに裂かれてゐろ。――不埒者、恥知らず、悪黨。おれは

お前ほど醜い人間をまだ見たことがない。お前が今まで云つたことをよく考へて見ろ、（この台詞の間に、いつとも知れず下手の幔のかげに身を潜めてゐた宰相の腹心の家來の一人が、觀客の目から消える。）一言にして云へば、金を拵へるためにおれによその國の王女の寵臣になれ、それぱかりではいけない、おれの戀人をもその國王の閨に貢れと云ふことに過ぎない。假りにおれがそれを承諾して金が手に入つたとする。そんな金でも何かに使へるのかね――宰相、お前たちはその金でおれにどんな大事業をさせようと云ふのだ。どんな立派な仕事が出來ると云ふのだ。さあ、お前の献策から聞かう。

宰相。　帝王の生活は特殊なものでございます。その倫理、德操、戀愛は決して一般の庶民の律則を以つて論ずることは出來ません。選まれたる帝王が、その尊い使命を遂行する上に行はなければならないことは、何事も正理であり、何事も美であり、何事も善でございます。同時にまた帝王は、庶民の持つ慾望と快樂から嚴かに離れなければなりません。最も恐ろしいことは、その使命の遂行の上に何等の意義もない偏愛でございます。帝王は庶民が人を愛するやうに人を愛することは禁じられてをります。それ故趙の王女と御結婚なさることが、陛下の使命の遂行に取つて必要な手段であれば、その結婚は善であると共に、光寵姫を捨てる事も美でございます。何を惑ひ、何を苦しむことがございませう。それとも陛下はおれは選まれたる帝王だとは信じない、果すべき使命も持つてはゐたい、賤しい一婦人との愛に生き、死ぬこと以外には、何等の希望も滿足もないと仰しやるお積りなのでございますか。

王。　ソフィストだな。何處から何處までもお前はソフィストだ。おれは善き帝王であると共に善き庶民であり度い。さうでなければ滿足されないのだ。おれの守る倫理、德操、戀愛が庶民の守るそれと違つたものであつてはならない。この二つが完全に一致した國を拵へあげることが、即ちおれの使命なのだ。

宰相。 それまでには、あの婦人は趙の國王の閨にある代りに、秦の後宮に運ばれてゐるかも知れないことをお覺悟なさらなければなりますまい。

王。 ——光麗姫、光麗姫。お前の幽靈はおれをも苦しめてゐる。おれに山番か羊飼であれ、と嘆じたお前の心持は今おれによく分つた。けれどもおれは決してお前を見捨てはしないよ。永久に見捨てはしない、二人は最後まで一緒だ。

その時二人の宦官があはたゞしく馳け込んで來て、王座の下にひれ伏す。

宦官の一。 陛下、一大事が出態いたしまつた、

宦官の二。 光麗姫樣の御殿に賊共が押入りました。

王。 賊が入つた。おれの後宮に、然かも白日の下に何と云ふことだ、で光麗姫はどうした。

宦官の一。 光麗姫樣は丁度お湯浴みを遊ばしましたばかりで、端近くでお涼みになつていらつしやいますところを、不意に取り圍んで、絹の青い袋の中に押し籠めようとしてをりまする。

王。 あゝ、今日の太陽は永久に呪はれてあれ。——宰相。門と云ふ門を兵士の劍で埋めろ。蟲一匹も洩すな。その賊を捕へた者は一城の主だと觸れろ。

宰相。 畏りました。

王が下手へ宦官と共にあはたゞしく退場すると、それと引き違へに上手から、先刻立ち聞をした一人の家來が現はれる。

家來。 お話を洩れ伺ひますと、どうも事面倒と見受けましたから、思ひきつてやりました。

宰相。 止むを得ないね。

家來。夜分では陛下が御一緒で却つてことがし惡いかと存じまして——。

宰相。さうだ。晝の間は警備も手薄だからよかつた。拔りはないだらうね。

家來。お指圖通り、袋のまゝ待たせてあつた輿に載せて、お下屋敷の方へ運びました。

宰相。趙へやるまではあすこへ置いておくがよい。それから向ふの方の用意はいゝのだらうね。

家來。こちらからのお迎ひが參り次第、趙の王女はいつでも御立ちになれるのでございます。

宰相。色々御苦勞だつた。——何しろ、お坊ちやま相手の仕事で、何をするのにも手數がかゝつて仕方がない。

（幕）

第二幕

第一幕と第二幕との間には二十年近くの歳月がたつてゐる。

楚王の宮殿の夜の饗宴。舞臺の右手、觀客席に近く、一段高くなつて、王と王妃の玉座がある。それと反對の右手に長い卓が置いてある。また所々にかゞり火が焚いてある。北隅へ下手の長い回廊から食べ物の皿を持つた女、酒の壺を持つた女、花を持つた女、飾り燭臺を持つた女たちが現はれて、それ等のものを卓の上の適宜な場所へ置く。飾り燭臺は玉座の前へ置く。すべてが頓て開かるべき夜宴の準備であることを示す。

侍女の一。今日で丁度七日七夜のお酒宴なのね。

侍女の二。杜氏のぢいやがこぼしてゐたわ。三月分の酒槽がこの一週間で空になつたつて。

侍女の四。ぢいやでなくたつて、誰だつてこぼすわ。私なんかもう疲れて〳〵、一年も寝なかつたやうな氣がしてよ。

侍女の一。皆んなさうなのね。皆んな眠りながら歩いてゐるのだわ。

侍女の二。それにしても王様のお身體がよくもお續きになつたものだと思つてよ。ちつともお眠らないのね。而してしつきりなしにお酒を召上つてゐらつしやるのですもの。

侍女の四。でも、一日増しに凄いお顔におなりになるぢやないの。

侍女の一。——北の方の戰爭はどうなつたのでせうね。

侍女の三。勝つたり負けたりだつて話ですわ。

侍女の二。 いゝえ、この節は彼の方がずつと旗色がいゝのだつて云ひますよ。この間の軍にはこちらの將軍の麾下の兵士が大分裏切をしたのですつて。

侍女の四。 そんなことは一切御殿の中へも知らさないやうにしてあるらしいわね。

侍女の二。 だつて王樣の御樣子を見ればすぐと分るぢやありませんか。戰地の方から惡い報知が屆いた後には、普斷のあの御機嫌が一層六かしくなつて、大臣たちまでちり〳〵してゐるのですもの。これはきつとよいお話ではない、と思ふやうな會議の後は、私お側へ寄るのも怖ろしいやうな氣がしますわ。

侍女の一。 さうね、而してその後は屹度斯う云つたやうな長い御酒宴が續くのね。

侍女の四。 而して一層無理非道なことを平氣でなさるやうですわ。

侍女の二。 さう云へば昨日もまた表御殿の前の廣場で、怖ろしいお處刑があつたのですつてね。

侍女の四。 どんなお處刑？

侍女の二。 火焙り。

侍女の三。 あゝ、聞いてもぞつとするわ。

侍女の二。 その黑煙りが人の焚ける匂ひと一緒に御酒宴の場所へ渦卷いて入ると、王樣は折に取つての餘興だと云つて笑つてゐらつしやるのですつて。

侍女の一。 男？ 女？

侍女の二。 若い御近侍ですつて。それも何でもない落度ですつて。お沓の直しやうが惡かつたとか、遲かつたとかつて。

侍女の三。　あゝ、仕合せと私はまだそんな御酒宴に出逢つたことはないわ。

侍女の四。　私は一度磔を見させられてよ。それも王様のお盃を缺いだとか、毀したとか云ふ、ほんの些細な罪だつたわ。

侍女の一。　考へて見るとでも人の身の上ではないのねえ。私たちだつて御機嫌次第でいつどんな目に逢はないとも限らないのですもの——王様のお気に入ればいゝで、またお妃様のお目が怖いしさ。

侍女の二。　全くね。王様は王様としても、お妃様のなされ方もおひどいのね。

侍女の一。　一夜でも王様のお伽をしたものは翌る明けの日はお殺ろしになるつて、あれは本統のお話。

侍女の四。　本統ですとも。鴆毒を飲ませたり、刺し殺したり、重い石をつけて池へ沈めたり、深い淵へ突き落したり、お妃様の方にはさう云ふことの上手な御家来衆が多勢おあんなさるのだから、あの女を、と目くばせ一つ遊ばすだけで、どんな目にだつて合はされるのですわ。

侍女の一。　そいちやお二人が競争で人殺ろしをなすつてゐらつしやるやうなものだわね。

侍女の二。　王様はお妃様のなさることを御存じないのでせうか。それともお妃様の後にある大臣の勢力を憚つて、知つて知らぬ振りをなすつてゐらつしやるのでせうか。

侍女の四。　分らないわね。——でもどちらにしろ王様は誰に對しても特別な執着はおあんたさらないやうね。その場きりで、あとは目もくれないと云つた風な愛し方なのだから、お妃様のなさることだつていつそ面白い位ゐに思つてゐらつしやるのかも知れなくなつてよ。

侍女の三。　聞けば聞く程怖いところですことね。私は王様の御殿の中の生活つてもつと美しい、もつと立派なもの

だとばかり思ひましたのですもの。斯んなではもう一日だつて勤まりさうにはありませんわ

侍女の二。　あなたは新參だからそんな氣がなさるのよ。そのうちに馴れて御覽なさい。斯んなことだつて平氣になつて來ますから。怖い中に面白いことも樂しみなこともあるのがお宮仕へぢやありませんか。

侍女の一。　――まあ何にしても今が王様の全盛時代ね。天下に王様は數あつても、秦とつゝ張つて負けずおらずの權柄をふるうことの出來るのは、こちらの王様だけですもの。豪氣な話だわ。

侍女の四。　――豪氣な話つてば、今拵へてゐらつしやる離宮の話をきいて。

侍女の二。　御殿の數が三十六あるとか云ふ話だけは知つてるわ。

侍女の四。　――その三十六の御殿が皆んな違つた材料と違つた建て方で、それに皆んな違つた裝飾がしてあるのですつて。壁や床をすつかり金で張りつめてゐる御殿もあれば、銀で張つてある御殿もあり、海の底のやうな青い石で出來てゐる御殿もあれば、氷の山のやうにまつ白い大理石で積み立てた御殿もあるし、またいつも花の匂つてゐるやうな、暖い色をしたうす桃色の石の御殿もあるのですつて。日が射すとどこもかしこもぎら／＼して、眩しくつて、どの御殿がどんな形やら見分けがつかないやうですつて。

侍女の三。　私はお湯殿の話を聞きましたわ。玻璃で疊んだ長方形のお湯槽が、五十人も一緒に入れるほど廣くつて、そのまん中に在る鉢形の噴水からは、瀧しぶきのやうに香水が絶えず吹いてゐるつて云ひましたわ。

侍女の一。　大理石の御殿の圓柱の數が百六十六本あるのですつてね。

侍女の四。　それが決して特別に多くも、また高くも感じられないのだつて云ふから素破らしいものぢやありませんか。花園の端から見渡すと、ただずつと象牙の箸でも立ち並んでゐるやうにしか見えませんとさ。

侍女の二。 それでいつ出來上るのでせうね。御落成のお祝ひはいつなさるのでせう。

侍女の三。 ——戰爭がすんでからではないのでせうか。

侍女の一。 あの戰爭はいつすむ戰爭だか分らない戰爭ですもの。それを待つてた日にはきりはありませんわ。

侍女の四。 そんなことどころぢやない。伶人たちはもうそのお祝ひの日に奏する音樂を練習してゐますよ。そして、ほら何とか云つた、あの美しい舞姫が、そのために特別に拵つたお目出度い舞を舞ふのだつて云ひますわ。

侍女の二。 ——玉蓮花でせう。

侍女の一。 さう、さう。玉蓮花だわ。可愛い名前ねえ。

侍女の三。 美しいことも舞姫たちの中で一番だとおもひますわ。

侍女の一。 だけども癖のある顏ね。大變美しく見える時と、醜い、凄いやうな時とあるわ。

侍女の二。 あの女には屹度外國人の血が交つてゐると思つてよ。ねえ、あの目つきをごらんなさい。あの皮膚の色をごらんなさい。

侍女の三。 さうかも知れないわ。而してあんな商賈の女に似合はず愛嬌がないのね。私あの女の笑つた顏を見たことがないわ。

侍女の四。 その癖驕ぶつた風もないのにね。——話なんぞ誰とでも無邪氣にしてゐるぢやありませんか。

宮廷向きの舞姫の一人である玉蓮花が登場。

玉蓮花。 この離宮がこの御殿での私の初舞臺であつた。私は二月前に此處で初めて菲彩譜を舞つたのだわ。——王樣は花を投げて下すつた。お妃樣にはそれがお氣に入らないらしかつたわ。

侍女の一。　玉蓮花さん。皆様はまだこちらへはゐらつしやらないのでございますか。

玉蓮花。　皆様は今お庭へお下りになりましたの。いつものやうに涼しい木蔭で一と休みなられてからこちらへはいらつしやるのでせうよ。

侍女の二。　王様の御機嫌は。

玉蓮花。　だん〳〵とお悪くなるばかりですわ。つひ先刻も、元の宰相のお孫さんだとか云ふ若い將校の方が今少しでお手打ちになるところでした。

侍女の二。　――まあ、あの評判の優しい、美しい方をねえ。どうなすつたつて云ふのでせう

侍女の四。　ですから人から恨まれるのも無理はないのねえ。餘り殘虐ななされ方ですもの。人民たちは、王様のお身體には世界にあるうちでの一番怖ろしい悪魔が憑つてゐるのだと云つて、小さい子供たちにまでお呪ひをさせて、いつも唱へてゐるつて云ふぢやありませんか。

玉蓮花。　でも皆さん。あのお装束係りの婆やさんだけは、人が何と王様の悪口云つても決して信じませんよ。王様はそんなたちぢやない。お小さい時から聖人の生れ代りだと云はれた位ゐそれは〳〵お優しい方で、戰場に臨んでこそ人一倍の強さをお見せなされたけれども、普斷は高い聲一つなさらない、それで理非のお裁きの正しい、神様のやうな方だつたと云つてをりますわ。而して思つて見るとお可哀相な方だつて、涙をこぼしてをりますわ。

侍女の四。　おかしな婆やさんだことねえ、楚の國に人が何千萬人ゐるか知れないけれども、王様のことをお可哀相だなんて涙をこぼす人は、まあ婆やさんより外には一人もないでせうよ。

玉蓮花。　それには必度何か譯のあることだと思ひますよ。でもそれから先きの話になると婆やさんは急に口を閉ち

て、決して一言も云ひませんわ。

侍女の二。　さうね。それ程すぐれた、立派な王様が、今見たいな恐ろしい、いけない王様におなりになるまでには、必ず何か深い譯がない筈はありませんからねえ——婆やさんの話が間違ひでなかつたとしたら。

侍女の四。　あんな亂暴な、めちや苦茶なことを遊ばしてゐながら、それでゐて何處となしに強く人を引きつける力を持つてゐらつしやるところを見ると、婆やさんの話も満更な嘘でもなさゝうぢやないの。

侍女の一。　どちらにしても、お妃様よりは氣持のよい方だつてだけは確だわ。

侍女の三。　全く。殊にこの節のお妃様の威張り方つたら、どうでせう。何から何までお里の國のことをお持ち出しになつてさ。私たちの着物の型や髪の結ひぶりまで、お國風でないと御機嫌がお悪い、と云つた調子ですもの。堪らないわ。

侍女の四。　——しつ。いらしたぢやありませんか。聞えてよ。

侍女の二。　——何處へ。

侍女の四。　花園の方の路を御覧なさい。——あら高股子がまたお伴をしてゐるわ。

侍女の三。　どれ。——本統にね。あんな好かない奴つてありはしない。小僧つ子の癖に、一つ端しお妃様のいゝ人氣取りでゐるのだから滑稽だわ。

侍女の一。　あれで何人目のお氣に入りでせうね。

侍女の二。　さあね、そればかりは御本人のお妃様にお聞き申して見ないことには、はたのものには分らない問題だわ。

王妃が寵臣高殷干を伴つて登場。

王妃。　おゝ眩しい。花園の暗い木かげから此處へ出ると、目が痛いやうだ。何んだつて斯う灯をつけ散らしたものだらうね。陛下のいらつしやるにはまだ間がおありなのだから、この灯は消してお置き。（持つてゐた團扇で玉座の左右の飾燭臺をさす。侍女の一人が同じく團扇で灯を消す。）

高殷干。　晝は明るい程よい晝で、夜は暗い程よい夜でございませう。

王妃。　さうとも。お前のやうな詩的な云ひ方をすると、暗い夜に一層風情があるやうな氣がする。——あの私は長いお酒の席でのぼせたやうだから、此處で一人靜かに休んでゐ度い。陛下のお見えになるまでは、お前たちも自由にあちらで遊んでゐてよい。

侍女たち退場。玉蓮花も續いて去らうとすると團扇をあげて呼び留める

王妃。　玉蓮花。——あれのゐたのに氣がつかなかつた。——

玉蓮花。　——はい。

王妃。　お前は今夜は何を歌ふのかえ。

玉蓮花。　何とも別に御所望はございません。たゞ私の一番面白いとおもふものを、歌つて、舞へとの仰せでございました。

王妃。　——すつかり甘やかしてゐるのだわ——玉蓮花。今夜歌ふことはよした方がよい。およし。

玉蓮花。　——

王妃。　分つたかい。乾度歌はないね。

玉蓮花。歌つて、舞ふことは私のつとめでございます。

王妃。何だつて。もう一度云つて御覧。

玉蓮花。——私は歌つて、舞ふために生きてゐる女でございます。

王妃。その歌と舞をお前の主人たる私がさし留めると云ふのだ。

玉蓮花。歌つて、舞ふことを私に禁ずる人は、どなた様でももう私の御主人ではございません。いゝえ、私には初めから御主人と云ふものはございません。その點では私は他の御家來衆やお侍女衆とは違ひます。この宮廷で私の歌がもう聞き度うない、私の舞がもう見度うないと仰しやれば、よその宮廷へ參るばかりでございます。私のこの咽喉が傷つかず、この手足が自由に動いてゐる間は、どこの宮廷でも私は丁寧に歡迎せられてよい人間でございます——御免遊ばしませ——支度がおくれてはなりません。(玉蓮花退場。)

王妃。何て酷いことを云ふのだらう。すれつ枯らしの渡り者の癖に。お前もまたお前ぢやないか、ぼんやりしてゐないであの女がしやべつてゐるひまにあの自慢さうにしなしなさせてゐる手足をひつぱたきでもしてやればいゝのに。

高股干。——彼奴は風のやうにすばしつこい奴で、浮つかり手出しは出來ないのでございます。

王妃。弱蟲ねえ。——それはそれとして高股干や。よく氣をつけておいで。陛下があの女に目をつけてゐるらしい——だからあの女があんな増長した口をきくのだよ。

高股干。——また焼きもちでございますか。

王妃。——私のこの心持ちは、焼き餅とは違ふよ。いゝえ。ずつと違つたものだ——

高股干。——あの様子がをかしい。あの女を見る目つきが變だ、と絶えず陛下の一擧一動に氣を揉んでゐらして、

それが嫉妬でなくば何なのでございませう。

王妃。　教へてあげようか。これは用心と云ふものです。私の權利を犯されないための。――

高股干。　ふん、旨く仰しやつてゐらつしやる。御自分のお腹へはお姫様ばかり、今更變な女に王子樣でもお生れになつては大變と云ふので御用心でございますか。全くこれは誰が聞いても一理あるやうでございます。斯う云ふ都合のよい理窟口上をお持ちになつてゐて、憎い、嫉ましいと思ふ女は片つ端から復讐なさる。――見事な手品だ。しかしあなたはそれでよろしいかも知れませんが、先に立つて働かされるものこそ、いゝ馬鹿を見る譯でございますねえ。

王妃。　――お前がそんな愚痴をこぼす柄かい。生意氣を云ふと承知しないよ。（團扇で輕く高股干を打つ。）お前はたゞおとなしく私の云ふことを聞いてゐればよいのさ。

高股干。　はい。はい。

王妃。　だが私の高股干や、お前の目にはどう見えて。女のことで嫉妬をするほど私が陛下を愛してゐるやうに見えるかい。

高股干。　またお叱りが怖しうございますから、このお答へは御免蒙りませう。

王妃。　もう叱らないよ。あれは冗談さ。ねえ、遠慮なしに云つて御覽。

高股干。　――二十年近くも御一緒にいらして、お姫様が三人もおありになるお夫婦中に愛があるの、ないのと申すのは申すだけが餘計なことでございます。何と仰しやつてもあなたが本當に愛してゐらつしやるのは陛下より外にはございません。私のことなどを可愛いのどうのと仰しやるのは、それはほんの一時の御座興か、氣まぐれな戲れに過ぎないことを私はよく知つてをります。

王妃。感心ね。それだけ分つてをればまあいゝことにして置きませう。それ以上の己惚れをお出しでないよ。さうでないと私は直ぐ腹が立つて、憎くなるのだから――いゝだらうね。だけども私の高殷千や。私が斯う云つたからつて決して失望することはないわ。お前は可愛い顔をしてゐるもの。お前の廣い肩は、私を凭りかゝらせるために特別に作られた美しい卓のやうな氣がする。お前の手足に漲つてゐる若い力は、私をもう一度娘の心持に返らせてくれる。――さあ、もつと傍へお寄り高殷千。この玉座へ坐らしてあげようか。(高殷千を國王の座へ着かせる。)私の可愛い國王様。お美しい國王様。あなたのその恰好のよいお頭には、どんな形の王冠がお似合ひなさるでせう。またこの王冠にはどんな色の玉を飾つたらよろしいでせう。――いゝえ、いけない、いけない。さつさと下りておしまひ。お前にはそんな場所は適當しない。(玉座から追ひ下ろす。)お前は矢張り私の足下に坐つてゐるだけの人だ。その時のお前が一番美しいお前だ。

高殷千。それ以上のことを私がいつ望んだことがございました。

王妃。――望まれたら憎くなるだらう。望まれないのに慊りない。高殷千や、今一度傍へ來てお前の顔をよく見せておくれ。――お前は矢張り美しい顔をしてゐるわねえ、だけれどもあの人はお前の年頃にはもつと〳〵美しい顔をしてゐたわ。あの人の美しさは、すぐれた、若い國王としての名聲と一緒に、趙の國まで聞えてゐた。私はあの人を見る前からあの人の美しさを知つてゐた。あの人の美しい目にあこがれてゐた。あの人の赤い脣に夢の中で接吻してゐた。あの人の若い、帝王らしい大きな身體を抱いてゐた。その私にあの人はどんな仕向け方をしてくれたらう。あの人は私の方をふり向かうともしなかつた。趙の國王の王女たる私、五つの國を結びつける、生きた表象としての光榮ある花嫁を匈奴の果ての蠻人の娘かなぞのやうに冷淡な目で見下ろした。おゝ、私があの時もう一年も若かつたならば、その瞬間

に恥ぢて死んでゐたかも知れない。――いゝえ、死んでならうか。生きてゐてよかつた。私はいつまでも生きてゐなければならぬ。而して貯つたものを返さなければならない。あの人が私に何を呉れたか、あの人の魂の底の底まで思ひ知らせてやらなければならぬ。私の受けたゞけの恥ぢ、私の傷けられたゞけの誇。私の飲んだゞけの苦い涙、私の持つたゞけの激しい怒りを、あの人が悉く感じて來出したのを見るのはいゝ心持だわ。私の今日までの生の目的はそれ以外にはなかつたのだから。私はその一つのためにあらゆることをして來たのだから。――高股千。私の可愛い三人の王女を陛下がこの節どんな顔をして見るか、お前氣がついてゐるかい。

高股千。――失禮ですが陛下はこの節は王女様方を以前ほどお可愛がりなさらないやうにお見受けいたします。たま〳〵御一緒に御機嫌よくお話しになつてゐるかと思ふと、その後から直ぐといら〳〵した、六づかしいお顔つきになつて、まつ青に震えながら、いつまでも〳〵默つて王女様方のお顔ばかり見詰めてお出でになります。

王妃。――みんな罰だよ。罰を受けてゐるのだよ。自分の妻を冷淡に取り扱つた男が、當然受けねばならぬ罰を、あの人も段々と受けて來かけただけの話だ。

高股千。さういたしますとあの王女様方は――

王妃。――何んだつて、あの王女様がどうしたつて。――お默り、お默り。お前が何にもそんなことに口を出すことは要りません。――あの王女様は楚の國王の大事な、かけ替へのない王女様だ、――たゞそれだけのことだ。さうとも。お前たちにはたゞそれだけのことを知つてをればよい。またそれを誰が何と否定することが出來よう。而して私は男の子を生まなかつたのだから、私の一番上の娘が楚の女王として今父の國王の着いてゐる椅子に着けばよい。さうすれば外祖父たる趙の權勢は、今よりも一層確實に眞のものになるだらう。私の娘は父の權勢と祖父の權勢を合した上に、

それを自分の持ち前の美しさで飾る譯だ。仕合せな私の娘。お前の足下には國王と云ふ國王が集つて來て、我先きにと勝利づくだらう。お前はその一人々々に等分にほんの僅かづゝの微笑を分けてやるだけで、お前の王國はどこの王國よりも安樂で、堅固で、輝びやかな榮光に包まれて榮えて行くだらう。——高殿干。ねえ、どう思つて。私の考へ方が間違つてゐるかい。

高殿干。何もかも仰しやる通りでございます。

王妃。それには邪魔の入らない工夫が一番だからね、拔け目なく氣をつけておいでと云ふのだよ。分つたらうねえ。

高殿干。分りました、玉蓮花のことも精々注意いたしませう。

王妃。——あんなものゝ何處がいゝのかねえ。——ふん。今にどういふ目に合ふか見てゐるがいゝ。

王が數人の廷臣と共に登場。

王。——お前はそんなところにゐたのか。——そんな暗いところに、燭もつけないで。

王妃。月の出るのを見てゐました。

王。——おれは、其處にゐたのかと聞いただけで、何をしてゐたのだと聞いたのではない。お前の如何なる行爲に對しても、おれは説明を聞かうとしたことは一度もなかつたのだから。まあ、そんなことはどうでもよい。もつと明るくしろ。月が出たなら月に負けない程燭をつけろ。おれはあんな青白い、祭壇の灯めいた燭は嫌ひだ。おれの夜宴の燭は、もつと盛んな、まつ赤な燃ゆる燭でなければ似合はない。篝火をもつとうんと焚け。火焰の熱い伸び上る舌で天を焦がせ。

多くの侍女と近侍が登場。近侍は篝火を盛んにし、侍女は先に消した燭に再び點火する。

王。 あゝ、これでよい氣持ちになつた。何處も彼處も明るく、きら〳〵してゐる。賑やかで愉快な光景だ。さうだ。今夜は何を見ても愉快で面白い。さあ、幾らでも飲めるぞ。一番香りの高い、一番強い酒から先づ注いで吳れ。（侍童が杯を取つて進め、侍女が酌をする。）何んだこの酒はまるで水だ。味も匂ひもない。何故もつと強い、いゝ酒を持つて來ないのだ。

侍童。 この酒が七つの酒藏の、七十七種類の酒の中で、味も匂ひも一番强い酒ださうにございます。

王。 誰がそんなことを云つた。

侍童。 杜氏の爺が申しました。

王。 あの爺の云ふことなら嘘はなからう。あれは正直な爺だと云ふことをおれは小さい時から知つてゐる。――が、あの爺がまだあの暗い酒藏の隅に生きてゐるのかなあ。おれはもう疾くに酒袋にでも化けてゐたかと思つてゐたに。――長命で目出度いと云つてやれ。

侍童。 爺が聞いたらば目を廻して悅びませう。

王。 ――おれは餘り長い間人を悅ばすことを忘れてゐたのだからな。そんな簡單な挨拶で人がそれほど悅ぶものならば、これからはちよ〳〵悅ばさう。――いやもつといゝことをしてやれる。長命の祝辭を述べる位のなもんではない。おれはその人の死を救ふことが出來るのだ。その人の希望に任せて百年までも、百年までも、乃至五百年までも千年までも生きさせることが出來るのだ。その力が今確實におれのものにならうとしてゐる――夢のやうに愉快な話だ。さあ、もつと酒を注いでくれ。

侍女の一。 王樣はお氣が狂つたのぢやないでせうか。

侍女の二。　本統に妙なことばかし仰しやるのねえ。

侍女の三。　でも珍らしく愉快さうな、お顏つきをしてゐらつしやいますことよ。王樣が斯んな御樣子をなすつてゐらつしやるのを見たのは私始めてゞすわ。

侍女の四。　今に何かまた面白いことがあつてよ。――御覽なさい。お妃樣のあの皮肉らしいお笑ひ顏を。――あつ王樣がお氣がづいたわ。

王。　――何がをかしいのだ

王妃。　だつて、先刻から變なことばかり仰しやるのですもの。死を救つてやるの、千年までも生かしてやるのと。――そんなことは氣狂ひか狐憑きでゝもなければ申さないことですわ。

王。　――お前はおれの批評家を以つて任じてゐるのだから何とでも云ふがいゝ。併しおれが本統に何を手に入れたかを知つたならば、お前だつてそんな皮肉な、冷淡な顏をしてはゐられないだらうよ。その時になつて喫驚するな。

王妃。　では、どんな珍らしいものがあなたのお手に入つたと仰しやいますの。

王。　――不老不死の藥だ。

王妃。　――

王。　靈藥を探し出すために五年前に出したおれの船が目的を達して無事に港に歸つて來た、と云ふ報知をおれは先刻庭で受け取つたのだ。

王妃。　――あのお伽話の寶探し見たいな話――ねえ。

王。　お伽話どころぢやない。この事業はおれには一生懸命の仕事であつた。船を出すまでには、おれも多く迷ひ惱

々躊躇もした。が結局二つのことがおれに最後の決心をさせたのだ。一つは秦が既に東の海に探險隊を送り出したと云ふことを聞いたのと、今一つは帝王の威力の絶對限を見度いと云ふ熱望であつた。おれはおれの力で昇る太陽を留めることの出來ないのを知つてゐる。併し地に屬するものである限り、地上の王の威力の及ばぬ筈はない。おれの想像力は世界の神秘境に藏されてゐる、未知のあらゆる富、不可解のあらゆる寳をおれに想像させる。おれは息を詰めて目を見張つた。若し、その何處かに不老不死の藥が藏されてゐるのだとしたならば、探つて得られぬ筈はない、――これがおれの信仰であつた。恐らく、秦の計畫にしろこの信仰に立脚したものであることは疑ひを容れない。おれは競爭心に燃えた。だから秦の船が東の方をさしたのとは反對に、おれの船は西の方へ向はした。おれは西を信じた。あの夕日の沈んで行く美しい雲の中の神秘界は、おれの判斷の無何有郷であつたのだからなあ。――而して秦は失敗して、おれが勝つたのだ。

廷臣の一。實に偉大なる御成功でございました。

廷臣の二。これとても悉く陛下の御威光の盛んなるに依ることで、誠にお目出度いことだと存じます。

廷臣の三。――秦の悔しがつてゐる顏が目に見えるやうで、私共はそれが愉快でなりません。

王妃。秦が失敗したと云ふのは確實なのでございますか。

王。その話なら侍從長が委しい。聞いて見るがいゝ。

侍從長。――秦の探險隊の隊長に任命された徐福と申します男は、私の書生時代に懇意にしたものでございました。この男は中々利に鋭い才子でございましたから、最初から探險事業の如き空漠たる仕事のために眞面目に努力する氣はなかつたのでございます。同時に彼は、不成功と共に下るべき嚴罰を豫期して、自分の家族は勿論、從類眷族に至るま

で悉く船に乘り込ませ、また有る限りの財産をば金に代へて一緒に持つて參つたと申すことでございます。今年で丁度六年になります。

王妃。　それつきり音沙汰がないと云ふのだね。

侍從長。　いや音沙汰のないのは探險の目的の藥に就いてだけで、彼自身の噂はいろ／＼傳はつてをります。東の方の島を占領して、その島の王になつてゐるとか、または島の王樣に重く用ゐられて一家一門榮華な暮らしをしてゐるとか――其處等が彼の最初からのねらひどころで、まあ目のよい賽が旨く當つた譯でございませう。

王妃。　でもよその賭博を笑つてばかりもゐられまいよ。こちらのお藥の話だつて、浮つかりしてゐると、どんな欺僞であらうも知れないのだからねえ。

王。　それはいけない。そんな言葉は今云ふべきではない。探險隊の五年間の辛苦に對しても、我々に先づ謙遜な心持で彼等の持ち來たしたものを受け取らなければならない。

王妃。　――謙遜な心持ちですつて。――まあをかしい。それは誰よりかも一番御自身にないもののことを仰しやつてゐらつしやるのぢやありませんか。

王。　いや、おれは蟲のやうに謙遜だ。反對にまた龍のやうな驕慢をも持つてゐる。お前たちはたゞおれの濃い影のみを見て、薄い影には氣がつかないだけのことだ。

王妃。　濃い影が餘りに濃過ぎて、薄い影が餘りに薄いためでせうか知ら。

王。　――おれにそんな皮肉を云つてゐる時がお前は一等愉快さうだな。――何とでも云ふがよい。今夜のおれは決して怒らないから。お前の皮肉の中からでも、何かの眞理を探り出す雅量が生じてゐるのだ。――さうだ。おれには色

へた影がある。それの矛盾と撞着をおれは否定しない。却つてその肯定がおれの誇りであつた。天帝の天上に於けると等しく、帝王は地に屬するものの全體だ、これがおれの今日までの信仰であつた。だからおれは自分の中にあるすべてのものを自由にあるがまゝに生かして來た。善きものと共に悪しきものも、美なるものと共に醜なるものも、理と共に非理も、光と共に闇も——おれはこの混淆を樂しんだ。この混淆の存する、原始的な、力ある自由に憧憬した。一箇の完全なる自由人——これがおれの理想であり、また勇敢なる遂行であつた。(この言葉のあたりから玉蓮花が舞の裝束を着けて數人の伶人と共に右手の端に登場。熱心に王の言葉に耳傾けてゐる。)同時におれはその自由を脅かすたゞ一つのものゝ存在を知つてゐる——死だ。この見覺のない、無言の遍歴者の幻影は、如何なる享樂の中にもおれについて廻つた。帝王の至上權、それが何だ。百萬の軍隊、それが何だ。所々方々の城郭、それが何だ。そのいづれかゞ一人のおれの行くことを防ぎ留め得る力を持つてゐるか。彼は絶えず斯う呼く。この聲を耳にする時、おゝの杯の酒に忽ち凍るのだ。あゝその聲がどんなに怖ろしかつたらう。どんなに苛立たしかつたらう。どんなに悄く、口惜しかつたらう。——が今は事情が一變した。おれの船がおれの求むるものを得て歸つた以上、おれは最早や死に屈服するには及ばなくなつたのだ。おれは百年の後も、二百年の後も現在の儘で、強く、健やかに生存し得られる可能力を握つたのだ。何と云ふ滿足だ。何と云ふ愉快だ。人間あつて以來、これ程大きな賜物を天から惠まれたものが他にあるか。——さあ皆んな杯をあげろ。而しておれの新たな運命との約束のために飲んでくれ。

廷臣一同。陛下萬歳。萬歳。萬歳。

王。よし、よし。——船の一行が正式に都入りをする時には、我々は出來得る限りの盛んな儀容へ以つて迎へなければならない。彼等の通る路には蜀江の織物を敷き詰めてやれ。花を降らせてやれ。爆竹と音樂とで波の單調な背に翻

れてゐた耳を聾にしてやれ。而して家に歸りついて久しぶりに眞水で湯浴みをする前に、香油と酒の洪水に溺らしてやれ。待つ間もない。二三日でその日が來るのだ。さうだ、玉蓮花。今夜はその前祝ひに、約束通りお前の一番得意な歌を聞かう。舞を見よう。

玉蓮花。　私は今夜は地獄の歌をうたはうと思ひます。

王。　塊獄の歌——妙な題だな。まあ何でもよい、直ぐと始めろ。

王妃。　玉蓮花の舞が始まるのなら私はあちらへまゐりますわ。

王。　何だつてそんなことを云ふのだ。

王妃。　——あの女の歌も舞も私は大嫌ひでございますから。

王。　——今日初めて見る玉蓮花でもあるまい。

王妃。　だん／＼嫌ひになつたのでございます。——一時間ばかり前からは殊にいやになりました。

玉蓮花。　お妃様、またとは申し上げません。今夜の歌だけはどうかお聞きなされて下さいませ。光榮に存じます。

王妃。　お默り。お前が私にそんな頼みごとの出來た義理かい。

王。　まあ聞いてやれ。——聞くことをおれが命ずる。

玉蓮花が伶人の樂に合せて、歌ひながら舞ふ。

玉蓮花。　人命は水上の泡。
風に隨つて江を廻るが如し。
魂は籠中の鳥の開くを待つて去るに同じ。

合唱。 消ゆるものは再び見えず、
去るものは重ねて来らず。
須臾に消滅し、
刹那に離散す。

天遊花。 三界無安猶如火宅。
天仙尚死苦の身なり。

合唱。 いはんや下劣、貪瞋の報ひに於てをや。
などかその罪軽からん。
死に苦しみを受け重ね、
更に悲しみ倚け添ふる。

天遊花。 刹利地獄の苦しみは、

合唱。 杵擣にて身を切り、
殺害して血に觧たり。
一日のその中に、
萬死萬生たり。

天遊花。 剣樹地獄の苦しみは、

合唱。 手に剣の樹をよどれば、

百節零落す。
足に刀山踏む時は
千肢共に解すとかや。

玉蓮花。　石磕地獄の苦しみは、

合唱。　両崖の大石、もろ〱の
罪人を砕く。

玉蓮花。　次の火盆地獄は、

合唱。　頭に火焔を頂けば、
百節の骨髄より、
炎々たる火を出す。

玉蓮花。　或る時は焦熱、大焦熱の、

合唱。　焔に咽び、或る時は、

玉蓮花。　紅蓮、大紅蓮の、

合唱。　氷に閉ぢられ、
鐵杖頭を摧き、
火桁あなうらを焼く。

玉蓮花。　飢ゑには鐵丸を嚥み

合唱。 溺しては銅汁を飲むとかや。

玉蓮花。 地獄の苦しみは多様なり。

合唱。 餓鬼の苦しみは無邊なり。

玉蓮花。 畜生修羅の悲しみも、

合唱。 我等にいかでまさるべき。

玉蓮花。 あゝら苦しや、苦しや、

合唱。 怖ろしの我が地獄。

舞やまる。

王妃。 何と云ふ氣味の悪い歌だらう。殊にあれは人の死ぬことをうたつた歌ではございませんか。死んだ先きの世の怖ろしい有様の數々をうたつた歌ではございませんか。――不老不死のお藥が手に入つたと云ふお目出度い御祝ひの席に、わざとあんな歌をうたふなんて、許し難い不敬でございます。他のものゝ見せしめのためにも、玉蓮花をその儘にさしおいてはなりますまい。――それ、あの不届きものを追ひ立てゝ牢屋へ打ち込んでおしまひ。

高殿干が立つて行つて玉蓮花に手をかけようとすると王が留める。

王。 待て。玉蓮花の髮毛一筋にも手を觸れることはならない。

王妃。 ――何故お留めになりますの。あんな不吉な歌をうたつて、滿座の前で公然あなたに裏切りをした女を、あなたはお許しになるお積りなのでございますか。

王。 おれはまだお前に司法權を委ねたことはない、とだけ云つておかう。

王妃。　では、あなたの司法權がどんなに正しく適用せられて行くか、私はそれを拜見いたしてをりますわ。

王。　それは勝手だが、此處は裁判所でもなければ、また玉蓮花を裁かうとしてゐるのでもない。玉蓮花、こつちへ來い。おれはお前と話がし度いのだ。

王妃。　そしてまた地獄の歌をおうたはせになるとよろしうございますわ。ふん。さうしたらあなたの珍らしいお藥にまた一段と價値がつくでせうから。高殿干件をしてお出で。

王妃退場、高殿干と二三の侍女がついて入る。

王。　皆のものも行け。今夜の酒宴はこれまでだ。

皆んな入つて、王と玉蓮花のみが殘る。篝火も燭も消えかけて、月の影があざやかに照る。

王。　——玉蓮花、あれは誰の歌だ。またお前は誰からあんな怖ろしい歌を教はつたのだ。

玉蓮花。　あの歌は印度の僧とやら申します、不思議な旅人のうたつた歌でございます。私の母はその旅人から歌も歌も親しく教はつたのださうにございます。

王。　僧と申すのは何んだ。歌うたひでもあるか。

玉蓮花。　いゝえ。左樣なものとは違ひます。釋迦とやら云ふ印度の名高い聖人の教に歸依して、その道を世に說いて廻る佛教者でございます。

王。　——その歌はではその釋迦とやらの教の歌なのだな。

玉蓮花。　左樣でございます。——母はまたその教についてもつといろ〳〵なことを話したり、歌つたりしてくれました。でも私は小さうございましたから、委しくは覺えてをりません。たゞその內容が驚くべきことばかりでございまし

した。口の眩らむ程の美しさと、身の毛もよだつほどの怖ろしさに充ちたものでございました

王。――遠い外國の昔話でもあらう。おれたちとは何の關係もないことだ――だが玉蓮花。お前はお前のうたつたやうた怖しい獄を信ずるのか、おれたち人間が死んで行つた先きの世に、地獄――名を聞いたゞけでも怖ろしい今一つの世界が存在してゐると云ふやうなことを。――

玉蓮花。――少くとも私の母は信じてをりました。

王。おれはお前自身について聞いてゐるのだ。

玉蓮花。――私も信じます。

王。信ずる？

玉蓮花。――信じます。私は魂の世界を信じますから。――來世のあることを信じますから。――この世で奪つたものと、奪はれたものと、欺いたものと、欺かれたものと、殺ろしたものと、殺されたものと、恣なものと、惱めるものと――すべての卑きものと、惡しきものが、最終の審判の前に同じ迎へられ方をしようとは思はれませんから。

王。――併しおれは帝王だ。生れる時から特殊の權能と自由を賦與されて來た人間なのだから、おれがこの世でどんな行動をしたとしても、お前の所謂先きの世で一般人民と同じ審判をうける筈はない譯だ――玉蓮花。さうは思はないか。

玉蓮花。――經帷巾は誰でも皆んな白でございますわ。

王。――

玉蓮花。陛下のお頭から王冠が取り下ろされ、陛下のお身體から帝王の衣が剝ぎ去られ、陛下のおみ足から玉の沓が

ぬぎとられて、唯人一枚の白い着物になつて、お輿もなければ護衛兵もなく、たゞ一人暗い淋しい幽界の道を歩いて行く時に、陛下は、陛下が持つてゐらつしやると云ふ特殊の權能を何に依つてお示めしになるお積りでございますか。

王。――お前は怖ろしい女だ。――お前の云ふやうなことを平氣でおれの前で云ふ女を、おれはまだ見たことがない。――が、そのお前がおれは好きなのだ。おれの氣に入つたのだ。お前が大膽におれを威嚇すれば、するほどおれはお前を愛する。玉蓮花。だからお前ももう印度の怖ろしい夢なぞのことは今日限り打つちやつてしまつて、それは皆んなその旅人の作り話だ。――旅人と云ふものは長い路の退屈紛らしに、何か知ら話の種を拵つて歩くものだ。彼等はそれを自分の荷物と一緒に村から村、國から國へと持つて廻るのが常だ。――次ぎの宿ではまるで違つた滑稽な馬鹿話をして、聞く程のものを笑ひこけさせてゐたかも知れないのに、お前の母が聞いと云ふだけの偶然な氣味の惡い話、お前まで嚇かされて、びくついてゐると云ふことがあるものではない。馬鹿げた話だ。さうだ、當分その地獄の歌は封じてしまへ。今日限り二度と舞ふことも歌ふこともならぬ。――この世に生きてゐる間は、この世を樂しんだだけで澤山だ。殊におれは今度手に入れた靈藥に依つて、自分自身と共に、自分自身の愛するものをも永遠の世界に住ませることが出來るのではないか。死のことや、死の向側のことなぞ我々には最早や問題にもたらないことだ。――玉蓮花。たゞおれについて來い。お前の生命はお前の美と共に永遠だ。而してお前はこの世に生きてゐる女が持ち得る限りの、最も華々しい幸福に包まれるのだ。

玉蓮花。――御自分の寢室に一と夜を明かさせた女の生命を、その日の夕方までも保護することの出來なかつた方が、永遠の美だの幸福だのと云ふことを約束なさることが出來るのでせうか。

王。――保護することは何でもなかつた。たゞおれが保護する氣になれなかつたまでだ。――おれは過去に於て餘りに美し過ぎるものを見た。而してそれを失つた。その悲しみの日以來、おれが女の方へ擴げる手は、悉くその幻影を追ふ手でなかつたことはない。併し抱きとめたものをよく見た時、激しい幻滅がおれの肝を噛んだ。おれの絶望と怒りは求めたものとは似ても似つかぬ醜いものを引き裂きでもするより外に癒しやうがなかつた。――おれの後にゐる黒い手が若し殺ろさなかつたとしても、結局はおれが自身で殺ろしたかも知れなかつたのだ――

玉蓮花。――私の分らなかつたことが、段々とよく分つて參りましたわ。――と云つてそのことが私の生命の安全を證明することになりませんのね。

王。――お前はその女たちとは別なものだ――これ程確實な證明があるか。たゞおれが失つたもの以上だと云ふことだけは許してくれ。おれの神聖なる記憶を辱しめぬために、それだけは云ひ度くないのだ。それ以外の言葉でおれの愛と讃美を云ひ現はせる言葉があつたら、おれはどんな云ひ方でもしよう。お前の價値はおれの失つたものの價値と何にも變らない、そつくりその儘だ、それほど得難いものだと云つてもよい。

玉蓮花。――さうまで仰しやるのは、陛下の昔の戀人に私の何處かゞ似てゐるところでもございますの。――例へば私の顏とか、形とか、聲とか、またものゝ考へ方とか、見方とかでも――

王。すつかり違ふ。どこを取り出しても一つとして似た點はないよ。お前の美しさとあの女の美しさは、全然違つた性質の美だ。殊に思想の相違は、殆んど極端の相違だ。あの女には自己はなかつた。あるものはたゞおれに對する愛のみであつた。けれどもお前には強い自己がある。その自己は何人の力を以つてしても動かし難いことをおれは知つてゐる。おれの生活の中に入つて來るにしても、お前はお前自身の足でしつかりと、お前一流の歩き方で歩いて來ることを

知つてゐる——いや、おれの失つたものと何處から何處までも違つた點で、おれには一層お前が好いのだと云ふことが正しいのだ。

玉邈花。でなければ猶ら美しいの、愛するのと仰しやつたところで、私はほんの幻影の橋渡しで、本統に愛せられるのは矢張し昔の方でございますもの。——それでいゝ氣になつてをればそれこそ隨分物笑ひですわ。

王。お前のその一流の考へ方がおれには面白い。——おれはそのお前をお前として愛するのだ。そのことを斷言する。さあ、これでおれたちはすつかり仲よしになれる譯だね。

玉邈花。——いゝえ。

王。何故だ。

玉邈花。——そんな斷言が何になりませう。それ以上の堅い約束を十遍なされたとしても、陛下の寢臺から一步外へ出ると共に、私は矢張り殺されなければならないことをよく存じてをりますわ。——陛下がお妃樣の後にある趙の勢力を無視することがお出來にならないうちは。

王。——あゝ、それはおれの黑い力だ。運命の重石だ、呪ひの鎖だ。——併し——

玉邈花。——お云ひ譯をなさるには及びませんわ。北の方で陛下の軍隊と秦の軍隊とが何年間戰つてゐるかと云ふことを少しでも知つてゐるものなら、陛下がその黑い力をどれ程大事がられても御無理とはおもはないでせうから。

王。——さうだ、それを利用することを敎へられた瞬間から、おれの足の向き方は變つたのだ、おれは思つてもゐない方へ方へと步かなければならなかつた。而してその力は賊族の海綿見たいにおれの生活の中へ吸ひついて、おれからおれのいゝものを悉く吸ひ取つたのだ。——併し乘りかゝつた船だ。おれはこの行を後へはもう引き返されない。

最初の一つの利用は十の利用、百の利用、千の利用をおれに強ゐる。おれは最後の港に行き着くまでは、何處までもその利用を續けなければならないのだ――柔に負けてはならないのだ、打ち勝たなければならないのだ。勝つまで戰ふことが必要なのだ。飽くまで戰つてやる。勝つてやる。

玉蓮花。――あゝ怖ろしい修羅場、怖ろしい地獄。――

王。併しそれがためにお前一人の生命を救ふことが出來ないほど無力なおれだとは思つて貰ふまい。たゞおれを信じろ。帝王の誓ひを信じろ。安心しておれについて來い。

玉蓮花。――いやでございます。

王。何だと。

玉蓮花。もしお言葉の通りに私を愛して下さいますのなら、おれについて來いと仰しやる代りに、私についてお出でなさいませ。その玉冠をお捨てなさいませ。帝王の服を一平民の着物にお換えなさいませ。――

王。――あゝ、そしておれを何處へ連れて行かうと云ふのだ。

玉蓮花。――もつと平和な、もつと自由な、もつと美しい世界へ、――陛下の尊い本質が今一度甦り、今一度新しい光りを放つ世界へ!――醜い勢力もなければ、お妃様の姦淫もない世界

王。――默れ――默らぬか――

玉蓮花。戰爭の慘禍も兵士の反逆も人民の裏切りもない世界へ――

王。いや、いや、おれは現在のおれの世界から逃れ出る必要はない。假令その世界が醜く汚れたものであらう、とも、その汚辱は決しておれをまで犯すことは出來ない。おれはその汚辱から高く抽んでゝ立つてゐるのだ。

その汚辱はおれの足の下に在るほんの一小部分に過ぎない。人間は歩く時に玉と黄金の路のみを行くことは出來ない。泥の上も歩るくのだ。

玉蓮花。　ではその路に不滿も悲惝もないと仰しやるのでございますか――泥のかゝるのはたゞ否だけだと仰しやるのでございますか。陛下が鉾を强うして誇つていらつしやる帝王の權能、帝王の自由、帝王の驕慢に何等の傷づきもないと仰しやるのでございますか――いゝえさうは仰しやれない筈でございます。

王。　――あの女を殺ろしてやり度い――何故殺ろさないのだらう。

玉蓮花。　――私をお殺ろしになれば、また一つ新しい地獄の火がふえるだけでございますわ。――おゝ怖ろしい地獄の連續――何十年、何千年、何萬年の業火の連續――永劫の火焰の宮殿の中にたゞ一人生きて、陛下は何を樂しみ、何をなさらうとお思ひになるのでございますか。それが陛下の求め得た不老不死の姿なでございますか。――あゝ、その森こそ呪はれてあれ。それは地獄の火に注ぐ油に外ならないのでございますわ。

　王が短劍を拔いて玉蓮花を刺殺す。

王。　――何度の狐憑きがやつと歇つた。――まだこんな女に欺まされるほどおれはもうろくはしてゐないぞ――おれはまだ强い。力がある。どんなことでもやれるのだ――さうだ。而して女は無智だ。――併しこの女は變な奴だつた。――不思議な奴だつた。今までどの女とも一風かはつた奴だつた。――この女の云つたことがおれにはちよつと怖かつた。何故だつたらう。――おれがこの女に氣があつたゝめかも知れない――いや、さうではない。何故だつたらう。――

第三幕

第二幕と第三幕との間には、第一幕と第二幕との間にあつた歳月と同じ位ゐの歳月が挾まれてゐる。

舞臺の後庭。荒れ果てゝ殆んど廢墟の光景を呈してゐる。紅い着物を着た一人の少女と、青い着物をきた一人の少童とが落葉を拾つてゐる。

少女。 落葉の下をよく氣をつけて御覧なさい。紅い石だの、碧い石だのが出て來てよ。

少童。 僕は紅い石を三つ拾つたよ。

少女。 私のは碧い石だわ。——ちよと拜見。まあ綺麗ねえ、夾竹桃の花片見たいね。碧いのは孔雀色をしてゐるわ。

少童。 他の丘にはこんな石はないぜ。

少女。 さうね。此處だけに限つてゐるのね。——而してどちらも海の貝殼見たいにすべ/\してゐるわ

少童。 不思議だなあ、何故だらう。

少女。 ——向ふからあんなお爺さんが來たわ。

老いたる王登場。白髪で、同じやうに白い鬚が胸の下まで垂れてゐる。顔つきだけには昔の威嚴と強さを留めてゐるけれども、足もとはもうよろ/\してゐる。杖にすがつてゐる。

少童。 あのお爺さんなら時々向ふの森の中から出て來るのだよ。

少女。 さう。私は初めてだわ。——此處の人なら乾髪石のことを知つてゝよ。今にこちらへ來たら聞いて見るとい

ゝわ。

少童。怖いや。

少女。何が怖いことがあつて。たゞ年取つた人と云ふだけぢやありませんか。

少童。だつてあんな白い、あんな長い鬚を僕他に見たことがないもの。あの人は乾度百二十位ゐだ。

少女。ぢや私が聞いて見るわ。(王に近づき) お爺さん今日は。この丘にはどうして他にない碧い石だの、紅い石だのがあるのですか。

老いたる王。――お前たちは誰だ――此處へ何しに來たのだ。

少女。私たちは下の町の子供ですわ。丘にはしよつちう遊びに來るのよ。栗のある時には栗を拾ひるに來るし、椎の實も拾ひに來るわ。而してその度に碧い石と紅い石を見つけるの。白い石もあるけれど、それは餘り珍らしくないから拾はないことにしてゐるの。――私のお寶筥の二番目の抽斗にある小箱の中には、こんな美しい石がもう三十三たまつてゐてよ。

王。――おれの宮殿がお前たちのおはぢきにまでなつた譯だな。――

少女。お爺さんのところに御殿があるの。

老いたる王。いや、あつたのだ。而してたくなつたのだ。お前たちの拾つてゐる石のかけらは、おれの宮殿のかけらなのだ。おれの過去の全生活のかけらなのだ。――おれ自身のかけらだと云つた方がよいかも知れない。

少童。お爺さんは年を取り過ぎてぼけてゐるのだよ、乾度。

少女。さうかも知れないわれ。――だけど何んだか面白さうなことを云ふぢやないの。私もつと色んなことを聞い

て見るわ。――お爺さん、お爺さんの御殿は廣かつたのですか。

老いたる王。――曠野のやうに廣かつた。

少童。　美しかつたの。

老いたる王。　――大空のやうに美しかつた。

少女。　そんな廣い、美しい御殿が何處にあつたの。而して何故なくなつたの。

老いたる王。　お前たちの立つてゐるところにあつた。おれの立つてゐるところにあつた。この丘一杯に聳えて、雲の上に輝いてゐたのだ。――それが何故なくなつたらう。――秦が侵入したためか。いや、秦が此處まで侵入したのは何のためか。趙の裏切りだ、妃の内通だ――あの憎むべき女狐に、娘を女王の位につけるために、秦と和睦しておれを敵に賣つたのだ。自分の現在の良人を、――おれがそのことを知つてあの女を八つ裂にした時には、秦の力は到底對抗すべからざるものとなつてゐた。おれの今までの同盟國は悉く秦の味方になつてゐた。――いや今は楚自身でさへ秦の同盟國だ。親類だ。おれの長い敵の息子におれの二番目の娘は悦んで嫁いで行つた。三番目の娘も同じく秦の將軍の妻だ。宰相たちはまたそれを非常に成效した政策だとして誇つてゐる。どいつもこいつも恥ぢ知らずだ――醜い獸の集りだ――

少童。　お爺さんは何を怒つてゐるの。

少女。　誰かよその人たちのことを怒つてゐるのだわ。屹度あのお爺さんをいぢめた人たちのことでゞもあるでせうよ。――お爺さん、あなたは不仕合せな人なの。

老いたる王。　お前たちの目にもさう見えるかい。――おれが不仕合せな、頼りない、憐れなもの〻やうに。

少女。 ――だつてお爺さんは悲しさうな目つきをしてゐるのですもの。――

老いたる王。 おれの目は餘りに多くのものを見過ぎたのだ。

少女。 それにお體ぢうが疲れて、蹣跚した風をしてゐるのですもの。

少童。 手足があんなに震へてらあ。

少女。 着物だつてひどく破れて、汚れてゐるし、――お爺さんを見てゐると誰だつて可哀想になつて來ますわ。

老いたる王。 お前たちの憐んでゐるものが誰であるかを知つたら、――この震へる手におれが何を握つてゐたか、この震へる足でおれが何を踏みつけてゐたかを知つたらなあ。――いや、いや、おれは昔のやうなものゝ考へ方はなりたけしないことにしてゐるのだ。おれの頭の上には、今では長い、亂れた白髮の外、何にも載つてはゐないのだから。頭の上のものがなくなつたばかりでなく、手の中のものも悉く消え去つた。而して足の下のものは却つて反對におれを踏みつようとしてゐるのだから。――なくなつたもので今も尚ほ昔の如く傚らうとすることは醜い、おれは決してそんなことはしない積りだ。子供たち、おれはお前たちの同情に對して厚く禮を云ふよ。憐んで呉れ。おれの悲運と零落との上にお前たちの可愛い憐みをかけてくれ。

王は左の方へ退場。

少童。 お爺さんは泣き出したんだぜ。

少女。 私あのお爺さんのことがもつとよく知り度いわ。――ついて行つて見ませうよ。屹度あちらの階の方へ行つたのだわ。

少女と少童が王の後を追うて退場。それと引き違へに右の方から老いたる家來（元の侍從長）と若い家來が登

場。

老いたる家來。　どちらへお出でなされたのであらう。この頃はおみ足がひどくお弱りなされてゐるのだから、氣懸りでならぬ。――お前もまた何故氣をつけてお伴を申さなかつたのだ。ふだんから私があれ程注意してあるぢやないか。

若い家來。　――お伴を申すの申さないのつて、あんな陰氣な、腐れかけた部屋の中からこの野天へ出ると、氣がのうのうする位ゐですからね、王樣がお出かけと知れば無理にでもついて參るのですが、ちよとお側を離れた際に脫け出しておしまひになつたのですから、どうも致し方がないぢやございませんか。どこかそこいらで新鮮な空氣でも吸つてゐらつしやるのでございませう。――あの御殿の中の空氣と來た日には、まるつきり酸えてゐますのですからね。私は月給をあげて頂かうの、立派なおしきせを出して頂かうのと云ふことはもう斷念いたしてゐるのですが、せめてあの御殿だけもどうにかならないものでせうか、――王樣が生きて、おすまひになつていらつしやればこそ御殿です。あれぢや穴藏よりもひどうございますからねえ。あんなところに平氣で王樣を入れてお置きになる女王樣も、考へて見ると怖ろしい方だと思ひますよ。いつそお上の牢屋の方が、壁が堅固で、屋根が頑丈で、雨風の心配のないだけでもどの位お居心地がよいか分りません。

老いたる家來。　女王樣のことは何にも申さぬがよい。こちらでよい噂をしてゐないと云ふことがあちらへ聞えればその返報はすぐと直接王樣の上へ現はれて來るのだから。何も女王樣が遊ばすことだと思へば腹が立つ。秦の仕業だと思へば、これは長い敵同士の間でのことだ。どうされたつて仕方がない。王樣の御運の末だと思つて諦めるより外はない。――私の現在のたゞ一つの希望は、王樣に、絞首臺でもなければ、首斬刀の下でもない、普通の床の上で普通のおだやかな御臨終がおさせ申し度い。たゞそれだけなのだから。――ことにあの御殿は秦がこの丘の離宮を燒き討ちした

時、深い森に遮ぎられてゐたためにその火を免れたたゞ一つの建物なのだから、荒らされても、崩れかけても王様にはおなつかしいお住居に相違ない。——王様は最後まで勇敢に戰つた。最後に火の下を潜つて落ち延びた時には、王様と私と三人の親衛兵しか殘らなかつた。

若い家來。——私なんぞには何もかも昔話ですなあ。

老いたる家來。——何と云つてもあの時分までは王様もお若かつた。刀を取つても弓を射ても、馬に乘つても、駈けても、飛んでも、まだ十分普通の人以上の力が貯へられてあつた。——が、お氣の毒ながら今ではもうおしまひだ。獅子のやうに強かつた方にも、とうと斯んな日が來たのだ。——毎晩お寢みになる時に一杯づゝさし上げることになつてゐる黑い色のお藥を、一晩たりとも決して忘れてはならないよ。あれは心臟の強壯劑なのだから。

若い家來。——承知いたしました。——お藥と云へば王様は昔御威勢の盛んな時分に、仙人の國から不老不死の靈藥を取つて來させたとか申すことを、私は乳母から聞いたやうに覺えてゐますが、それは本當のことでございますか。

老いたる家來。本當だ。

若い家來。では、そのお藥は今でも王様のお手にあるのでございますか。

老いたる家來。あるとも。それは直徑三寸ばかりの、楕圓形の青い盒に入つてゐる。盒が透き通つてゐるために、中に一杯湛へられてゐる靈藥が、外からでも容易に見られる。藥の色も盒の色と相似た濃い青い液だ。だから何處までがお藥で、何處までが盒だか區別がつかない。ちよと見にはたゞ楕圓形の青い玉の盒のみのやうである。——而してその不思議な藥液は、仙人の手から渡された當時のまゝの量をそのまゝ盒の中に保つて一滴も減じてゐない。——誰一人その藥を飲んだものはまだないのだ。王様の時にすらまだ觸れないでおかれてあるのだ。

若い家來。 それはまたどう云ふ譯なのでございませう。

老いたる家來。 ——一言にして云へば、使用法が分らないのだ。——人間の力はその仙家の靈液を見つけ出すことだけは出來た。併しそれは飲むのか、塗るのか、飲むにしても、塗るにしても、いつどう云ふ方法で用ゐたらよいのか、それを知ることが出來ないのだ。——仙人はそれを探險隊の船の船長に渡す時、この藥を用んとするものは、壺の蓋に彫りつけてある文字を見落してはならぬ。等閑に用ゐれば靈藥は反對に怖ろしい毒液に變ずる場合があると云ふことを、固く誡しめたのださうだ。——ほんの六文字だ。それが悲しいことに人間には讀めないのだ。王様は宮廷内の諸博士は申すに及ばず、國ぢうの學者と云ふ學者を召し集めて、その秘密の六文字を解かせようとなされた。或るものはこれは印度の古文字であると云ひ、或るものは遠い紅毛碧眼の土人の國の文字だと云ひ、或るものはまた、これは天上の星の世界の文字に相違ないと主張した。彼等は王様の御前で幾日も激しい議論を續けた。併し結局誰一人としてその正しい意味を說き得たものはなかつた。最後に王様はお怒りになつて叫んだ。お前たちの學問がそれを解き得ないなら、おれの權威が解いて見せる——王様は御近侍の一人を呼んで壺の蓋を取れと命じた。その若者が怖れて躊躇すると、佩劍を拔いて胸にお當てになつた。

若い家來。 ——あゝ、とうとう試されたのですね。

老いたる家來。 併し塗られたのでも、飲まされたのでもない。——蓋を取つた瞬間、小さい壺の口から一筋の青い煙が立ち昇つて、その若者の頰を掠めたと見る間に、若者はばつたり倒れた。

若い家來。 ——可哀相に、死んだのですね。

老いたる家來。 いや眠つたのだ。その儘眠つてしまつたのだ。胸に暖い血が脈打つてゐる儘、頰に紅い輝きを留め

た儘、若く、美しい青春の姿の儘、永遠に眠つて覺めない人になつたのだ。——それつきり藥は人智の測り知られぬ嚴かな神秘として、手も觸れず保存されて來たのだ。

若い家來。私は秦の王様がその藥をひどく欲しがつてゐると云ふことを、ちらと人の話に聞きました。

老いたる家來。——さうだ、秦の國王としてはそれは最も自然な慾情だと云へるだらう。あの藥のことに一番目をつけたのは寧ろ秦の方が先きだつたのだから——いや、秦に限らない。人間に生れた程のものならば、誰でもその一つのものに好奇心を持たない譯には行かない。それは滅すべきものが、不滅になれると云ふ驚くべき約束を意味するものだから、いつの時代に於ても、人間に取つて大なる誘惑であるべき筈だ——併しそれは呪はれたる願望だと私は思つてゐる。

若い家來。——では、あなたはその可能を信じないのですか。初めからその藥の力を信じなかつたのですか。

老いたる家來。いや、その藥の力を信じないと云ふことは、靈界の人の約束を無視することなのだから、私には出來ない。私はそんな冒瀆を敢てする意志はもうとうない。私はたゞ人間がさう云ふ願望を持つことは、自然の感情であるとしても、恐ろしい感情だと思ふだけなのだ。人間は不完全に作られてゐる。我々は我々の中に多くのよきものと共に多くの惡しきものを植ゑつけられて來た。美しきものと共に醜いものを蒔かれて來た。これは何故だ——私に答へさせるならば、天意が、人間の終に滅すべきものたることを意味する啓示に外ならない、と思ふ。では何故死なゝければならないか——それは私には分らない——天のみしか分らないことだ。併し人間がこの不完全のまゝ、この醜惡のまゝ、この生活様式のまゝ何千年、何萬年、何千萬年、何億萬年生き續けられる世界を想像することは、私には堪らない恐怖だ。——探險隊の船が出る時、私は船長に向つて云つた。外國の美しい女達でも百人許り乘せて歸つて來給へ。その方が結局後の面倒が少ない。と。併しあの男には私の意味は通じなかつたらしい。あの男は善良で正直な代りに、少し

お人好しだつた。そこへ行くと徐福は食へない人間だけに、要領を得てゐた。——

若い家來。——若し人の噂通りに、森の王樣がその森に何時までも執着を持つてゐるとすれば、西側もこの上なしになつて來ますね。

老いたる家來。王樣はお淋しになる氣遣ひはない。お弱りなされたやうでも、まだ中々激しい行く氣になつてゐるのを私は知つてゐる。

左の方の森の奥に當つて騒しい人馬の聲が聞える。

若い家來。——あれは何の音でせう。

老いたる家來。——

若い家來。——馬の蹄の音がしますね。——可なりな人數らしいぢやありませんか。

老いたる家來。——私は行つて見て來よう。何んだか氣懸りになつて來た。——

若い家來。私も行きます。

老いたる家來。——いや君は早く王樣をお探し申してくれ。西の崖の方かも知れない。

若い家來。——彼處からだと、どうかすると王城の高い塔や、櫓が見えることがありますからね。

舞臺廻る。舞臺一杯が高い崖になつてゐて、その崖の上に在る大きな石のところに王と二人の子供がゐる。その位置は王が中央で、少童が左で少女が右になつてゐる。王は石に腰をかけてを[illegible]、少童は草の上に足を投

げ出してをり、少女も同じやうな自由な姿勢をしてゐる。

少女。　おぢいさんは色んな話を知つてゐるのね。おぢいさんの話を聞いてゐると面白いわ。もつと話して頂戴な。その不幸な王様の話の續きを――

老いたる王。　さうだ、おれは誰よりもお前たちに聞いて貰ひ度い。お前たちはずつと後へ殘つて、先に行つたものゝ足跡を見てくれるのだ。その足跡を正しく讀め、正しく笑ひ、正しく辯護し、正しく罵ることの出來るのは、たゞお前たちだけなのだから。おれはおれの一代記が王室附の史家の形式的な撰文となつて、黄金の板に彫られて殘るより、お前たちのその小さい、鋭敏な耳に留められる方を望むのだ。

少女。　――その不幸な王様は惡い人ぢやないのね。私惡者の話を聞くのはいやよ。あとで怖くなるんですもの。

少年。　聞いてる間は、でも面白いぜ。

少女。　生意氣云つてるわ。――おはゞかりへ行けなくなるくせに。

老いたる王。　――大丈夫だ。王様は惡者ではない。――あゝ、おれは斯う云つて間違はない積りだ――併し善いことをしようとする時には、いつも色んな邪魔が入つて、反對に惡いことをする時には決して邪魔が入らなかつた。どんな惡いことでも自由に出來たので、その王様は善いことよりは惡いことの方をより多くした。王様は自分でもそのことを知つてゐた。併しこの世の中は善いことをするよりは惡いことをするのにいつでも便利に出來上つてゐたので、どうすることも出來なかつた。その中に王様はだん〳〵年を取つた。頭が白くなつて腰が曲つて來た。手にも足にも力がなくなつて來た。すると今まで王様の足の下に小さくなつてゐたもの共が、急に伏兵のやうに躍り上つて、王様を勝手次第な目に逢はした。その中には王様の妻もあれば娘もあつた。親類もあれば友達もあつた。彼等は王様の持つてゐるも

のを悉く奪ひ取つて、蹴つたり、踏んだり、なぐつたり、唾液をはきかけたりした末に、程近い雜草に押しこめてしまつた。

少女。　可哀相だわ。

少童。　王様も悪いことをしたんだもの、仕方がないや。

老いたる王。　子供よ。お前の云ふ通りだ。王様も悪いことをしたのだから仕方がないのだ。――王様は天に訴へたとしても、乾度同じ返事しか與へられないことを知つてゐるのだ。王様は自分の後に長く續いてゐる一歩一歩の足跡を見返つて身を竦めた。而して云つた。おれは決して斯んな歩き方をして、斯んな方角に來る積りではなかつたのだ――と。王様は最初の自分の足の向け方を思ひ出して見た。それに今まで來た路とはすつかり反對の方向であつた。その道をさへ歩いてゐたなら――その道がどんなにまつ直ぐで、どんなに美しくつて、どんなにすぐれた道であつたかゞ、その瞬間ほど強く意識されたことはなかつた。それはまた王様が今まで通つて來た道と比較することに依つて、一層まつ直ぐに、一層美しく、一層すぐれて見えた。王様はとうと赤ん坊のやうに聲をあげて泣き出した。泣き倒れて、地べたをころげ廻つてなほ泣いた。

少女。　可哀相だわ。

少童。　いゝ氣味だい。

老いたる王。　――併しもう一遍出直して、新しい道から歩き直すと云ふことは出來ないのだ。王様の足は既によろよろしてゐる。誰一人助けてくれるものはない。たつた一人きりだ。さうだ、たつた一人きりで、すべてを奪はれて、裸體で、思ひもしなかつた道のまん中に立つてゐるのだ――而してあゝ、その道さへ頓て盡ようとしてゐる。――

少女。　ちや王様はそれから何處へ行く積りなの。

老いたる王。　——それが分つてさへゐたら、子供よ。王様自身にもそれが分らないのだ。それの分らないことが怖ろしいのだ。その一つのことが絶えず王様を脅かしてゐるのだ。——同じ恐怖は若い日にも幾度か王様を襲つた。王様はその威嚇から遁れんがために、人間の望むべからざるものまで望んだ。——仙界からもたらされたあの藥が、終にその用法を見出されなかつたことは何と云ふ皮肉だつたらう——あれは運命が傲つた王様に見せた白い目だ——實際今になつて見れば、王様のその時代の死の恐怖は間の抜けたものだつた。餘裕のある、得手勝手な、不遜な恐怖だつた。帝王の生活を背景とした享樂的な恐怖以上のものではない。彼はたゞ失ふことのみを怖れた。消滅することのみを怖れた。自分自身と共に、自分自身に屬する一切の權威、一切の誇り、一切の活動、一切の快樂が滅び盡すことを怖れたのだ。而して自分の失つたものは恐くその儘の組織、その儘の系統、その儘の美しさ、樂しさ、安らかさを保つて、何人かの手に委ねられると云ふことが、堪えられなかつたのだ。何處までも自我の慾望を脱しきれない痴愚の恐怖だ。醜い嫉妬だ。たゞそれだけだ。それから先きはどうなるか——何處へどう行くか——は問題でなかつたのだ。——いや、たつた一度それが問題になつたことがあつた。二十年ばかり前のことだ。一人の女の不思議な言葉が王様の心をかき亂した。王様はまつ青になつた。而して顫へる手で劍を摑んで女の胸を刺した。——あゝ玉蓮花。お前の歌つた歌がだん〳〵怖ろしくなつて來る。お前の幽靈がおれをおびやかす——

少女。　——人殺しまでしたのねえ。

少童。　矢張し惡者だい

老いたる王。　——その王様が何人人殺ろしをしたかを知つたたら、お前たちはもつと〳〵驚かなければならないだ

らう。——併しそのことではもう意地目てやるな。それでなくも王様は苦しんでゐるのだ。晝も夜も責め、さいなまれてゐるのだ。何處へ行くか分らないとしても、彼等の行つたところへ同じく行くことだけは確實らしい。——王様は自分の有するあらゆる特權に依つて、幾度そのことを否定しようとしたか知れなかつた。が、終に否定することが出來なくなつたのだ——自分が殺ろしたものゝ中へ自分も行く——彼等と今一度顔を見合せる——この怖れが王様を震ひおのゝかせる。——王様はもう泣いてはゐない。裏切り者に對する怒りも、口惜しさも、以前の感情とは變つて來た。恨みも憎みも今では無限の哀愁と憂鬱に溶けて行くのみだ。——或る瞬間には、憎んだものにさへ手をさし延し度い欲望に激しく襲はれる。自分を罵り、辱しめたものゝ名を高く呼ぶ——王様は淋しいのだ。怖ろしいのだ。一人では居たゝまれない氣がするのだ。王様は自分を蹈みにじつた娘たちのところへ使ひを出した。いつ長い別れになるか分らない。それまでに一度訪ねてくれ——と。何と云つても親と子だ。——さうだ。王様は或時代に苦しめられてゐた怖ろしい疑惑から既に脱却してゐたのだ——彼に鬼に内にせられる代りに、鬼を目にしてゐた。王様は彼が何處までも彼等の父親であり、彼等が彼の娘であることを主張することに決心してゐた。——どんな娘たちであつたにしろ、それが自分の娘でない、と云ふことよりは、王様にはずつと〱氣樂なことだつたのだ。——王様は時々純粹な愛を以つてすら彼等のことをおもひ出した。王様はその娘たちに最後の暇乞ひをしておきたかつたのだ。

少女。　その時に仲直りをするといゝのだわ。

少童。　また喧嘩にきまつてら。

老いたる王。　——仲直りも、喧嘩もどちらも駄目だ。娘たちは三人が三人とも斷つて來たのだ。長女は政務が忙しいと云ふ理由で、次女は身分がその訪問を許さないと云ふ理由で、三女は夫の將軍と共に陣中に在ると云ふ理由で。

少女。何てひどい人達なんでせう。王様がどんな悪いことをしたつて、そんな意地悪に比べればなんでもないわ。

少年。大人つて、悪者ばかりだなあ。

若い家來が左の方から登場。

若い家來。王様にはこちらへお出でゞ御座いましたか。あちこちと今までお探し申しました。――お前たちは何んだ。御側へそんな馴々しい風で近づいて――さつさとあつちへ行け。

老いたる王。叱るな。この小さいもののためにおれは今日はよい氣晴しをしたのだ。おれたちはすつかり親友になつてゐるのだ。――

少女。私たちはこのおぢいさんに色んなお話をして貰つてゐたのよ。叔父さんも今少し早ければ聞けるとこだつたのに。惜しいことをしたわねえ。

少年。このおぢいさんも悪者か知ら。

少女。さうでもないらしいわ。

若い家來。あんなことを云つてる。なんて臆面のない奴等だらう。而してまた何處から來たのだらう、あの子等は。――おや、先刻の音が此方へ來るのぢやないか知ら――

木立の奥で一際高い呼子の笛が鳴る

老いたる王。ト――あれは呼子ではないか。而かも親衛軍の吹き方だ――この近に今頃どうしてあの笛が聞えるのだらう。おれの遠くなつた耳も、あの笛の音だけは聞き誤らぬ。――

若い家來。先程は御殿の森の方に當つて夥しい人馬の音が聞えました。私と共にお後を尋ねて參つてゐた侍從長様

は、様子を探るために引き返されたのでございます。あゝ、また戻つておいでなされました。――ひどく青い顔をしてゐる。あの冷靜な侍從長にあんな所作をさせたのは、何か餘程のことだ――

　老いたる家來が右の方から登場。

老いたる家來。　女王陛下のお出でゞございます。

老いたる王。　なに女王が來た。――勿論おれに逢ひに來たと云ふのだらうな。

老いたる家來。　仰せの通りでございます。

老いたる王。　矢張り來てくれたか。――女王よ。お前だけはおれを見捨てなかつた。――さあ、おれを娘のところへ連れて行つてくれ。

老いたる家來。――女王様は頓てこちらへ御出でになる筈でございます。――が、今日の御訪問に餘り多くを期待なされてはなりません――人の家には、悦びを持つて來るお客様ばかりはないものでございます。

老いたる王。――どうしてそんなことを云ふのだ。

老いたる家來。――お逢ひになつて見なければ、お客様が何を持つてお出でなされたかは分らないものでございます。早すぎた悲しみは後の悦びで取り返しがつきませうが、早すぎた悦びは、後の悲しみを一層大きくするばかりでございます。

老いたる王。――お前の謎が氣懸りになつて來た。

　老いたる家來が若い家來を木かげに呼んで囁く。以下の二人の台詞は出來るだけ小音でする。

若い家來。――いよ〳〵となれば、ではどう處分いたしてもよろしいのでございますね。

老いたる家來。　よろしい。

若い家來。　――承知いたしました。

若い家來が左の方から退場する。引き違へに右の方から女王が數人の廷臣と共に登場。

女王。　お父様、御機嫌でお目出度う存じあげます。

老いたる王。　お前も機嫌で目出度い。――さあ、もつと側へ來てお前を見せてくれ。おれはもうひどく目が惡くなつてゐるのだ。

女王。　お見受け申したところでは、どこも以前とお變りになつたやうにはございませんわ。

老いたる王。　お前はおれに氣休めを云つて悦ばせようとしてゐるのだ、おれは知つてゐる。おれはもう長くは生きてゐない。生命のあるうちに一度お前たちに逢つておき度いと思つた。だから使をやつたのだ。あれはもう半年以前になるね。

女王。　あの時分は私は特別に忙しかつたのでございます。國内には色んな事件が次ぎ次ぎに起るし。隣國との間には、國境の駐屯兵のちよとした衝突から、面倒な外交問題が生ずるし、旱魃で、不作で、人民たちは氣が荒くなつてゐるし、私の即位以來の一番多事な時代であつたかも知れません。――さうでなくても帝王の椅子は、私の用事のためには一時間も離れ惡いものだと云ふことを、誰よりもお父様はよく御存じの筈だと思ひます。

老いたる王。　おれはその時のことを云ふ積りではなかつたのだ。――いや、その時は腹が立つた。如何なる理由も、おれの最後のたつた一つの乞ひを斥けることは出來ないと思つた。お前たちの忘恩と不孝を憎んだ。――併し許してくれ、おれが過まつてゐた。おれは今時分になつて不意におれを悦ばせてくれようとは、その時は夢にも思はなかつ

たのだから――お前の優しい心がおれはどんなに嬉しいか分らないのだ――お互ひに過去の苦しい記憶はすつかり忘れよう。おれは何事もなかつた遠い昔のお前に逢ふのだ。うなゐ髪の、小さい、可愛らしいお前に逢ふのだ。

女王。――それはお父様の御自由でございますが、事實の上では私は何處までも獨國の女王であることをお忘れ下さいますな。而してまた、私が自身で今日わざ〳〵訪ねて參つたことを、たゞお父様の御機嫌伺ひだとばかりは思召さないで下さいまし。

老いたる王。――

女王。私は私の二人の姉妹の希望、並びに私の政府の當事者の熟慮ある決議を齎れて、お父様に或る一つの事をお願ひに上つたのでございます。

老いたる王。――おれがまだお前たちの役に立つことがあらうとは思はなかつた。――それは何事だ。

女王。秦の皇帝陛下に、お父様のお持ちになつてゐらつしやるお樂を譲つて頂き度いのでございます。

老いたる王。――侍從長、おれのお客樣の用事がやつと分つた。

女王。秦の皇帝は非常にそれを望んでいらつしやるのでございます。これまでもあの樂のことは幾度も問題になつたのでございますが、父上に對する尊敬と愛のために、私一人で反對して參つたのでございます。――けれども、見るだけでも見度い――と云ふ今度の要求をまで斥ける力は私にはございません。二人の妹は、この上自分たちを困らせてくれるなと申して參りますし、大臣たちは無謀な拒絕のために引き起される後難を怖れてをります。お父様どうか私の苦しい立場をお察し下さい。而して私のお願を叶へて下さい。

老いたる王。ならぬ。――

女王。　妹たちの位置を考へてやつて下さいまし。

老いたる王。　秦にゐられなければいつでも歸つて來いと云へ。――彼等の結婚からして旣に恥づべき結婚であることを云へ。――彼等は名譽ある國王の娘として、その位置と誇りに相當する、正しい迎へられ方をして嫁いだと思ふか。いや、いや、秦の目からは、彼等は戰勝軍の捕虜以上ではないのだ、女奴隷のやうにたゞ奪はれて行つたまでだ。――彼等は父親の敵の息子の寢床に眠つてゐる。父親の軍隊を滅亡さした將軍の寢床に眠つてゐる。而して父親の一生の競爭者であり、和解すべからざる敵であるものを、舅と呼び、主君と呼んでゐるのだ。――その娘たちのためにおれに何をしろと云ふのだ。これでもまだ犠牲の量が足りないと云ふのか。おれの最後の血の一滴まで彼等の幸福のために捧げさせようと望んでゐるのか。――

女王。　お父樣はさう云ふ風にお考へになつてゐらつしやるから、すべてのことが間違つて來るのでございますわ。私にしろ、妹たちにしろ、自分自身の幸福のために計つたことは何一つございません。私たちのいたしましたことのすべては、悉く楚國の平和、安全を基礎とし、お年寄られたお父樣の御一身のためによいやうにと考へたことでございます。これが私の施政の根本方針であり、同時にまた不幸な死方をなされたお母樣の、最後の息にまで殘されてゐた希望であつたのでございます。お母樣がその一つのことのためにどんなに多くの力を盡されたか、秦と楚と、その他の同盟諸國との間に立つて、どんなに苦しい折衝をなされたか、またこれまでの兩國の關係上、それがどんなに困難な斷行であつたかは、私が一番よく存じてをります。それの正しい報ゐられたもなさらないで、――あゝ、私たちの不仕合せなお母樣――

老いたる王。　――その人殺ろしは誰だ、と云ふ云ひ方だな。――併し斷つておくが、おれがあの女を殺ろしたのは

正當の理由に基く。殺ろさずにすんだならば、おれのこの苦悶な重い心の、何分の一かも輕くなつてゐたかも知れないが、おれとあの女との關係は運命的の不幸であつた。勝つか、負けるかだ。おれが殺さなければ、あの女に殺ろされるのだ。あの時、若し秦がおれの死を要求したとしたならば、あの女がそれを拒絶したとはおれは信じない。彼女は彼女自身、並びにお前たち三人の姉妹の安全のために、猶豫なくおれを見にしたに相違ないのだ。——あの女に對するおれの見方はお前の見方とは全然反對だ。

女王。それでは、あの場合にお母様が率先して秦との和議を講ぜず、諸同盟國との間に新たに了解を求めることもしなかつたならば、楚一國の運命、引いてお父様の御身の上はどうなつたと思召すのでございますか。楚が今も昔の如く楚の名に於て存在し、一王國としての威嚴と繁榮を續けることが出來たと思召しますか。お父様のおん身の上の變化も想像するだけが怖ろしうございます。——一時の感情は兎も角、お母様の御功績をいつまでも否定されてはなりません。併し、お母様のことにはこれ以上申すことはやめませう。要はたゞ私の政策は何處までもお母様の持[illegible]を繼承するものであることを認めて頂けばよろしいのでございます。同時に秦を敵視する考へ方はお捨てなさらなければなりません。國家の爲政者に取つては、たゞ利益の相反する國のみが敵でございます。同時にまた場合と事情では昨日の敵とも友達にならなければなりません。この事は私よりもお父様が十分御承知の上のことであり、また實行なされたことであると信じます。

老いたる王。その考へ方がどんなに怖ろしいものかと云ふことも、お前もいつか經驗する瞬間が來るのだ。

女王。遠い先のことは私にはまだ問題ではございません。私はたゞ今の時代に於て、秦が自分の味方にするとしないと、秦に好意を持たれると持たれないとでは、一國の消長に非常に影響があると云ふことを知つてゐるだけなのでご

さいます。お父様、曾つてお父様のものであつたこの美しい國土を愛し、その國土の持つ誇るべき歴史を尊重して下さいますなら、お年寄りの頑なる意地のために兩國間の和平を傷けないで下さいまし。——私のお願ひお容れて、秦の望むものを、余與へてやつて下さいまし。

老いたる王。——秦の皇帝におれからの傳言だと云つてくれ——あの藥のことならば、おれの手の中にあるものを欲しがるのは卑怯だ、今一度船を出して探すがよい——と。

女王。ではどうしてもお聞き入れ下さらないのでございますね。

老いたる王。勿論だ。所望者が他の人であつたら別だが、あの男にはやれない。

女王。併し、今一度お考へ直しを願へますまいか。あのお藥は藥と云へば藥で、どう用ひてよいやら用ひ方さへ分らず、お手許にお留めおきになつたところで、不用のものかと存じます。その上發見の當時から、役にも立たぬものゝために、夥しい財貨を消費したと云ふ點で、一部の論者の中には非難の聲が高かつたのでございますから、今私が頂戴して、それで以つて秦の滿足を買ひ得るとしたならば、時は後れてもその非難を償ふことにもなり、あの藥の利用法としては最上の手段であると信じます。私は楚國の利益、並びにお父様の御名譽の恢復のために、重ねて冷靜な御考慮を仰ぎ度いのでございます。

老いたる王。——女王よ。お前の行き方はすつかり現代の政治家的だ。旨い。それでやつて行けばおれの藥なんぞを持つて行かなくも秦の御機嫌を損ねる心配はない。おれが保證する。楚國は萬々歳だ。——しかしおれが若い時代に夢見てゐた國は永久に實現しさうもない。——さ、用事がすんだなら歸つて貰はうか。これでおれたちは綺麗にお別れだ。

女王。――これ程にことをわけて話しても聞かれないとなれば――

老いたる王。――兎に角歸つてくれ。おれの目の前から姿を消してくれ。おれはこれ以上感情をかき亂され度くないのだ――おれの弱つた心臟には堪えられないことだ――お前が來ぬまでは、おれはお前たちをなつかしくさへ思ひ出してゐた。お前は來ておれを失望さしたのみでなく、おれの中を明るく照らしかけてゐた一筋の光をまで閉してしまつた。おれの心はまた元の暗黒だ。孤獨と絕望だ。未來永劫の氷の窖だ。この中からお前たちを思ひ出す日のことを思ふと怖ろしい。――何故歸らないのだ。

女王。――お言葉には及びませんわ。私の參つた用事をさへ果せば、直ぐにもお暇をいたします。――(廷臣に目くばせする)

廷臣の一。――畏りました。(一人の兵士に向つて)女王陛下の命令だ。軍隊に打ち入つて探せ、天井の一つ一つの石の窪み、床の下の一つの土の穴も見遁すなと云へ。靈藥の發見者には、楚の女王陛下、並びに秦の皇帝陛下の御名に於て一州の富が約束されてある、と觸れろ――

兵士退場

老いたる王。――何たる暴言だ――お前があんな命令を發する筈はない。何故留めないのだ――あの兵士を引ずり戻せ。

女王。御心配なさるには及びませんわ。お父樣の御殿を毀せと申しつけたわけではございません。たゞ探すだけのことでございます。

老いたる王。不屆者奴。――何の權利があればおれの家を犯すのだ。――おれの拒むものを取らうとするのだ。

――娘が父の持つてゐるものを、力づくで奪ふ――あゝ、何と云ふ淺間しさだ。恥ちてあれ、呪はれてあれ。

女王。――これは私事ではございません。楚の女王が法律の名に於て沒收するのでございます。――公私の區別を混同なさらないで下さいまし。――さ。どんな様子か行つて見ようか。

女王廷臣を引き連れて退場

老いたる王。――あの女の頭に雷が落ちかゝれ。あの足が毒蛇に嚙まれろ。手が腐れ。――而してあの女が王城に歸り着く前に、あの驕慢な美しい顏が、惡鬼の形に變れ。あの白い肌が青黑い鱗で蔽はれろ――あんな女が人間の姿を保つてゐるのは冒瀆だ――あれはあれの母以上の惡だ。――おれの心の中にはまだ怖ろしい火が燃え出した。呪ひと怒りと憎みがきしみ合つてゐる。全身が熱い。昨日までの靜かな寂寥、人なつかしい憂愁は何處へ行つたのだ。この激しい憎惡、いらだたしい鬱憤に比べれば、死の怖れも寧ろ安らかな悶えであつた。

森の奥に當つてときの聲があがる。ものを破壞する響がする。

老いたる王。――侍從長。あれを聞いたか。おれの家が兵士の土足で踏み荒らされてゐるのだ。すべてを失ひ盡したおれの手に、僅かに殘されてゐた一つのものが、奪ひ取られようとしてゐるのだ。――これを聞くためか。これを見るためか。おれの目はまだ盲になりきれなかつた。おれの耳は聾にならなかつた。

老いたる王が悲憤と絶望の餘りに石の上に倒れ伏す。

老いたる家來。――お氣を確かにお持ちなさいませ。――お藥は大丈夫でございます。決して彼等の手に落ちるやうなことはございません――多分、深い土の中に埋められたか、遙かの谷の底に投げ落されてゞもゐるでございませう――人間の手の及ぶところにはもうございません。――藥の歸すべき本來の位置へ歸したのでございます――あゝ、も

うお分りにならないらしい。多事な御一生であつた。長い、華々しい時代をお持ちなされただけ、晩年のお不仕合せが一層お痛しい。——が、これでもう何もかもお仕舞ひだ。

少女。——可哀相に。あのおぢいさんが死んだのだわ。

少童。うそだい。草臥れて眠つたんだ。

ダアクチェーンジ。第一幕と同じく邯鄲の旅亭。舞臺の裝置は、盧生が第一幕にて木の寢椅子の上で眠りに落ちた瞬間と一分一厘の相違もあつてはならぬ。盧生はまだ眠つてゐる。而して旅亭の老翁は盧生が初めその旅亭へ立ち寄つた時と同じ店先に坐つて、依然として退屈さうに團扇を動してゐる。頓て盧生が目を開いて、靜かに身を起す。

老翁。——もう、お目覺めですか。——もつとゆつくり休みなされればいゝのに。

盧生。(まだ夢中の帝王の心持ちで)——お前は誰だ、

老翁。——何んですつて。——もう寢ないのなら顔でもお洗ひなさい。裏へ行くと冷たい流がありますから——

盧生。——おれは何處にゐるのだらう。

老翁。寢ぼけちやいけませんぜ。——おい、おばあさんや、旅の若い衆さんのお目覺めだ。裏の流へ案内して顔でも洗はしておやりなさい。

老媼が厨から出て來る

老媼。まあ、こちらでお洗ひなさい。――何をぼんやりしてゐなさるのです。魂でも取られた人のやうな様子をして。――夢でも見なすつたのですか。

盧生。――さうか。あれがみんな夢なのか。――私は夢を見てゐたのですね。

老媼。どんな夢を見なすつたのです。

盧生。――長い夢だつた。――短い人生だつた。――

老翁。まあ、夢の話は話として、顔から先に洗つて來なさい。――町へ行くにしても餘り遅くなつちやまづうござんすよ。――引き合せの手紙はもうちやんと出來上つて居るのですからね。

盧生。私はこれから何處へ行くのでした。

老媼。――あんなことを云つてる――若い衆さん、確りなさいよ、あんたはうちのおぢいさんの世話で、この山の向ふにある王様の賑やかな町で一と働きするつて約束だつたぢやありませんか。

盧生。――あゝ王様――王様――

老翁。王様のことなんぞはこつちには用事はない。さあ、若い衆さん、行くのなら早く支度をなさい。

盧生。――

老翁。おばあさんや、若い衆さんに御馳走する筈のお粥はどうなのだ。まだ出來ないかね。

老媼。今火を引いたばかりですから、もうちよつと待つて下さい。

盧生。おぢいさんも、おばあさんもどうか構はないで下さい。折角の御親切ですが私は町へ行くことは見合せました。

老翁。 それは。それは。

盧生。 ――私は今一度故郷へ歸つて見たくなりました。而してよく考へて見たくなりました。その上でまた出直して參るなりなんなり、最後の方針をきめようと思ひます。

老翁。 それもよござんしよ。――若い衆さんのは、初めの振り出しから道が間違つてゐたのですからね。また御縁があつたらこつちへお出でなさい。幾らでもお世話を致しますよ。

盧生。 有り難うございます。

盧生が庭に下りて急いで歸り支度をする。笠と杖を持つ。

老媼。 折角のお粥が間に合はないで殘念でしたね。――お腹が空いてゐなさるでせうに。

盧生。 いゝえ。お腹の空いた位ゐはもう何でもなくなりました。――いろ／＼お世話をかけて相すみませんでした。いつまでもお達者でゐらして下さい。

老翁。 ――あなたも御機嫌よう――

盧生。 ――ではこれでお暇をいたします――左樣なら。

老翁。 ――

老媼。 左樣なら。

盧生が左の方へ去る。

老媼。 ――正直さうな、いゝ若い衆さんでしたね、可哀相に。これから丁度苦勞の始まる年頃だ。

老翁。 面白いこともこれからだよ――併し、この路ばたへ斯うやつて足休めの店を出してゐるだけで色んな旅人を

見るなあ。——

老嫗。　皆んな何かしら用事を持つて歩いてゐるのでせうがねえ。——何處から來て何處へ行くのやら。——

老翁。　——まあ、そこらでも片附けておきなさい。またどんなお客様が來ないとは限らない。（幕）

場面

幕の前（序詞）
第一幕
第二幕
第三幕

登場人物

盧生
旅亭の老翁
旅亭の老嫗
王（盧生）
光麗姫
宰相
上將軍
宦官の一
宦官の二

家來（宰相の）

侍女の一

侍女の二

侍女の四

侍女の三

玉蓮花

王妃

高殷于

侍童

廷臣の一

廷臣の二

廷臣の三

侍從長

少女

少童

老いたる家來（侍從長）

若い家來

女王

廷臣等（女王の）

兵士等（女王の）



眞鶴

志賀直哉

伊豆半島の年の暮れだ。日が入つて風物總てが青味を帶びて見られる頃だつた。十二三になる男の兒が小さい弟の手を曳き、物思はし氣な顔付きをして、深い海を見下ろす海岸の道を歩いて來た。弟は疲れ切つて居た。それに睡むくもなつて居た。子供ながらに不機嫌な縮を眉間に作つて左もいや／＼に歩みを運んで居た。然し兄の方はそんな事には氣づかなかつた。彼は獨り物思ひに沈んで居る。彼には此氣持が何んであるかよく解かつて居た。彼は戀と云ふ言葉は知らなかつたが、今、其戀に思ひ惱んで居るのであつた。

こんな事があつた。或時、彼の通つてゐる小學校の教員が、新しく來た若い女教員と連れ立つて行く後を彼は何氣なく從いて行つた。其時不意に教員が、「オイ」と云つて彼へ振返つた。「我戀は千尋の海の捨小舟、寄る邊なしとて波の間に／＼。」お前に此歌の意味が解かるかネ」とかう云つた。かう云つて教員は笑ひながら女教員の顔を横から覗き込んだ。女教員は俯向くと、默つて耳の根を赤くして居た。

彼も變に耻かしくなつた。自分がそれを云はれたやうな、又それを自分が云つたやうな氣も一寸した。

「どうだネ。解かるかネ」と再び云はれると彼も女教員のしたやうに默つて俯向いて了つた。そして、沖の噴々した所に小舟のゆらり／＼搖られて居る樣を、彼は何と云ふ事なし繪のやうに想ひ浮べて居た。戀と云ふ言葉を知らぬ彼には素より歌の意味は解からなかつた。

貧窮の漁師の子で、彼は色の黒い、頭の大きい子供であつた。

そして彼は今、其大きい頭に凡そ不釣合な小さい水兵帽を兜巾の如くに戴いて居るのだ。咽は其ゴムでメめ上げられて居た。此様子は遙に思ひ做んで居る者としては如何にも不調和で可笑しかつた。然し彼にとつては不調和でも、可笑しくても、又滑稽でも、此水兵帽は左う輕々しく考へらるべき物ではなかつたのである。

其日彼は父から歳暮の錢を貰ふと、小川原まで、弟と二人の下駄を買ふ爲めに出掛けた。所が下駄屋へ來るまでに彼は不圖、或る唐物屋のショーウィンドウで其小さい水兵帽を見つけた。彼は急にそれが欲しくなつた。其所で後先の考へもなく、彼は彼の財布をはたいて了つたのである。

彼の叔父に、元根府川の石切人足で、今、海軍の兵曹長になつて居る男がある。それから彼はよく海軍の話を聴いた。そして、自分も大きくなつたら水兵にならうと決心して居た。

「どうだ、此ボイラーの小せえ事、恰でへつつひだな」とこんな風に、或る時此叔父が煙突の上に丸しオーヴンでも乘せて居るやうな熱海行きの軌道機關車を笑つた事があつた。これ以外の汽車を知らぬ彼には此言葉だけでも此叔々を尊敬するに充分だつた。そして彼は彼の水兵熱を益々高かめて行つたのである。

それ故水兵帽を手に入れた事は彼にとつて此上ない喜びであつた。が、同時に彼は後悔もして居た。折角下駄を樂

みに從いて來た弟も可哀想だつた。二人が貰つた金で自分だけの物を買つた事を温和な父がどんなに怒る事かと考へると流石に氣が沈んで來た。

然し祭飾りの出來た賑やかな町を歩いて居る内に彼は何時かそんな事も忘れて、そして前から聞かされて居た、宮[illegible]德の社へ詣でるつもりで、其方へ歩いて行くと、或る町角で、騷々しく流して來た法界節の一行に出會つた。

一行は三人だつた。四十位の眼の惡い男が琴をならして居る。それからその妻らしい女が顔から手から、頸中に塗り立てゝ、變に甲高い聲を張上げ〳〵月琴を彈いてゐた。もう一人は彼と同年位の女の兒で、これも貧相な顔に所斑らな厚化粧をして、小さい拍子木を打ち鳴らしながら泣き叫ぶやうに唄つて居た。

彼は其月琴を彈いて居る女に魅せられて了つた。女は後ろ鉢卷の爲めに釣上つて居る眼を一層釣上がらすやうに眼尻と眼の上とに紅をさして居た。そして、薄よごれた白縮緬の男帶を背中で房々とたすきに結んで居た。彼は嘗てこれ程に美しい女を知らなかつた。彼はすつかり有頂天になつて了つた。それから彼は一行の行く所へ、何所までも從いて行つた。

一行が或る裏町の飯屋に入つた時にも彼は忠實なむく犬のやうに弟の手を曳いて其門口の脇に立つてゐた。

――沖へ〳〵低く延びて居る三浦半島が遠く薄暮の中に光つた水平線から宙へ浮かんで見られた。そして影になつてゐる近かくは却つて暗く、岸から五六間沖を延ばした一艘の漁船が穩やかなうねりに搖られながら、舳に赤々と火を焚いてゐた。岸を洗ふ靜かな波音が下の方から聽こえて來る。それが彼には先刻から法界節の琴や月琴の音に聞こえて仕方なかつた。波の音と聞かうと思へば一寸の間それは波の音になる。が、丁度睡むい時に醒めてみようとしながら、不知夢へ引込まれて行くやうに波の音は直ぐ又琴や月琴の音に變つて行つた。彼は又その中にあ[illegible]

た。何々して、「梅―の―は―な―」から云ふ文句までが聴取られるのだ。

「奴さんだよう」こんな事をいつて下で兩手の指先を合はせ中腰で兩膝を開いて、首を振りながら、二三度足を前へ擧げた形とか、捨兒の劍舞で眞白く塗つた顏を歪げて泣く樣子、所はげた人形にする頰ずり、それらを憶ひ浮べると彼の胸は變に惱ましくなつた。

遙か小田原の岸が夕もやの中に見返へられる。彼は今更に女と自分とのへだゝりを感じた。今頃はどうして居る事か。

彼にはあの泣き叫ぶやうな聲を張上げて居た少女の身の上が此上なく羨しく思はれた。然し彼は其少女にいゝ感じを持たなかつた。彼の[illegible]の前に立ち話して居る時に少女は時々媚態を含んだ險しい眼つきを彼の方へ向けて居たが、仕舞に男と代り／＼給仕をしてゐた女に何か此方を見い／＼つげ口をした。彼はヒヤリとした。然し女は何の興味もたさゝうに一寸此方を見て、直ぐ又男と話し續けたので、彼はホッとした。

夜がせまつて來た。沖には漁り火が點々と見え始めた。高く掛かつて居た半かけの白つぽい月が何時か光りを冴して來た。が、眞鶴までは未だ一里あつた。丁度熱海行きの小さい軌道列車が[illegible]た火の粉を散らしながら、息せき彼等を追ひ拔いて行つた。二等連結した客車の窓からさす鈍いランプの光りがチラ／＼と彼の横顏を照らして行つた。

少時すると、手を曳かれながら一足遅れに歩いて居た弟が

「今日の法界節が乘つて居た」とこんな事を云つた。彼はドキリとした。彼は自分の胸の動悸を聞いた。そして自分も何んだかそれをチラリと見たやうな氣がした。汽車は何時か先の出鼻を廻はつて、今は響きも聽こえて來なかつた。

彼は今更に弟の疲れ切つた樣子に氣がつくと急に可哀想になつた。そして、

「くたびれたか」と訊いてみたが、弟は返事をしなかつた。彼は又

「おぶつてやるかネ？」と優しく云つた。弟は返事をする代りに顔を反向けて遠く沖の方へ眼をやつて了つた。弟は何か口を利けば今にも自分が泣き出しさうな氣がしたのであらう。優しく云はれると、尙であつた。

「さあ、おんぶしな」彼はかういつて手を離し、弟の前へ蹲んだ。弟は無言のまゝ倒れるやうにおぶさつた。そして泣き出しさうなのを我慢しながら、兄の頸に片頰を押し當てると眼をつぶつて了つた。

「寒くないか」

弟はかすかに首を振つて居た。

彼は又女の事を考へ始めた。今の汽車に乘つてゐたのかと思ふと彼の空想は生々して來た。此先の出鼻の曲り角で汽車が脫線する。そして崖からころげ陷ちて、女が下の岩角に頭を打ちつけて倒れてゐる有樣を彼はまざ／＼と思ひ浮べた。彼は又、不意に道傍から其女の立上がつて來る事を繰返へし／＼想像した。彼は實際に女が何所かで自分を待つて居さうな氣がしたのである。

弟は何時か脊中で眠つて了つた。急に重くなつた弟の身體を彼は揺りあげ／＼して歩いた。段々に苦しくなる。腕が拔けさうになるのを彼は我慢して歩いた。彼はこれを我慢し通さなければ駄目だと云ふ氣がした。何が駄目なのか自分でもハツキリしなかつた。然し兎も角彼は首を龜の子のやうに伸ばして、エンサ／＼と云ふ氣持で歩いて行つた。

やがて、其出鼻へ來たが、其所には何事も起こつて居なかつた。そして、それを曲がると彼は突然直ぐ間近に、提灯をつけて來る或る女の姿を見た。彼はハツとした。同時に其女から聲をかけられた。それは餘りに歸りの遲いのを心配して迎えに來た彼等の母親であつた。

すつかり寢込んで了つた弟を彼の脊から母親の脊へ移さうとすると、弟は眼を覺ました。そして、それが母親だと知

ると、今まで壓へ〳〵して來た我儘を一時に爆發さして、何かわけの解からぬ事を云つて暴ばれ出した。母親が叱ると尚暴ばれた。二人は持て餘した。彼は不圖憶ひ出して自分のかぶつてゐた水兵帽を去つて弟にかぶせてやつた。

「えゝ、音無しくしろな。これをお前に呉れてやるから」かう云つた。

今は其水兵帽を、彼はそれ程に惜しく思はなかつた。(完)

香爐を盗む

室生犀星

男が出かけようとすると、何時の間にか女が音もなく玄關に立つてゐて、茶色の帽子をさし出した。男はそれを手にとると格子をあけて出て行つた。女はしばらくぼんやり立つてゐたが、間もなく長火鉢のところにぐつたりと座つて、いつまでも動かないでゐた。それは女のくせで、いつも男が出て行つたあとは考へ込んで、すつかり陰氣になつて、なにも手のつかない一二時間をぼんやりして送るのが常である。そして考へつかれるとやつと縫物をはじめるのだ。海苔のやうな布片を絎くるやうにして、暗い糸を通したりしてゐた。さういふ一時間が經つと、かの女はまた上目をしながら神經深くなつて、何か纖かい感情の上のことや、茶碗のふちが、少しばかり缺けたことや、男の出掛けぎわに故意と視線を外らしたことや、口へまで出てわざと默つた素振りをしたことなどが、つぎからつぎと考へられた。その考へにふければふけるほど、しぜん仕事が留守になつてしまつて、あけた障子のそとのあかりを茫然と上目をしながらながめるのであつた。

實際、女は日に日に瘠せおとろへてゐたのである。あごの尖がつたのや、ほつそりと顏全體が何日鉋をかけたやうに剝がれてゆくのや、病的に沈みきつて蒼みをもつた皮膚が、きみの惡いほど艶を失つて、喉のあたりまで白く冷たく流れこんでゐるのや、それらは永く正視できないなど憂鬱に凝りたつてゐるものに見えた。一つには彼女が物音を極端におそれたり、一つ事を永く考へ込んだりする性質からきてゐるのである。たとへば男の室に、男のゐないときに不思議に起る咳の音や、衣ずれのすることや、何か小言をいふらしいけはひなどが、よく空耳を襲ふて彼の女をぎつくりさせるのであつた。かの女はそのほつそりした弱々しい顏をあげ、ぢつと耳をすまして、男の室におこる物音をしかも男のゐない日に殆耕のやうになつて聞くのであるが、さういふとき彼女は眞青になつておのづから顫へるやうな氣がするのであつた。

かの女の眼底にはいつも黑ずんだ男の姿が、はつきりと仕事に向つて終日こつこつと彫りものをしてゐる手つきまでが映つてゐて、それが異樣な單に黑ずんだ影のやうになつてみえるときと、その顏まで生白く映つてくるときと、また別な餘り見たことのない他人のやうに見えるときとあつた。一つの材料に向つて毎日彫りものをしてゐる鋭い刃が、ちらちらと鉋屑のなかに光つたり、たくみに彫つては木屑をすくひ出したりしてゐるのが、その鋭々とした姿と一しようにうつつてくるのである。男はいち日、ものも言はず不機嫌に仕事をし、不機嫌に咳をし、不機嫌に日に三度きて一しよに食事をするのであつたが、何ひとつ愉しさうな顏をせず、特に何事かを話し合ふといふことがなかつた。かれは女の蒼白い顏を見ることをおそれるもののやうに努めて視線を避け、つとめて話をし合はないやうにしてゐた。女はさういふとき室にゐて時々男の仕事にきき耳を立てることもあつたが、すぐ寂しさうにれいの暗い糸から糸を引いては縫ひものをつづけるだけであつた。

男は夕かたになると外へでかけた。男にはあきらかに女ができてゐることも、そとで初めて明るく微笑へることをも、女はいつのまにか感じてゐたけれど、女はしつこく默つて、いつも

「いつていらつしやいまし。」

さう言つて茶いろの帽子をわたすだけで特に妬くやうな素振りも言葉づかひもしなかつたのである。そのため男は夕方になると妙にもぢもぢと時計や庭や空をながめたりして落ちつかなかつたが、しまひには思ひきつて立ちあがるので、そのときの苦しさうな淋しい顏立ちのなかにしんと靜まりかへつた表情が、いつも女にはすぐ讀みとれた。かの女は柔順に男を出してやり、男はおそくなるとひどく醉つてかへつてくるのである。が、ふしぎなことには、男の目にうつる女のやつれやうの烈しさは見るからにいたいたしく、細れきつて精根もないそうめんのやうに小寂しくなつて見えるのであつた。それゆゑ女が玄關に出て夜おそく迎へにでると、男のかほは後悔と羞恥とのいろを瞬間にたたへたが、まもなく氣の強くなつたやうな顏をして自分の室へはいつたきり出てこないのである。

女は日に日に瘠せるばかりで、どういふときにも音といふものを立てなかつた。すうと襖をあけたり、猫のやうな柔らかい足つきで疊の上を辷つたり、深く睡りこんでゐるやうに押入と障子との隅にぺたんこに座り込んで、いつまでも默つてゐたり、さうかと思ふと何か洗濯ものをしながら、盥のそばにかぢりついてゐたりした。それは水のやうに音のない、どこか足のない生きもののやうにも見られた。かの女が男の仕事場の障子をあけて

「…………」と何かの用事をいふとき、男はをともなく開いた障子と同じいいろをした女を見ると、わけもなくぎつくりした。障子に半分以上を隠した顏が、半分に切つた鷄卵のやうに、つやを失なつて見えたからである。おどおどしながら、はじめ半分ばかり見せた顏をだんだんに障子のそとに隠してしまふのであつた。

「どうしてお前はおれに恐がるんだ。そんなにおどおどしてさ。」

男が鑿で荒彫りを一と刃さつくりと立てながら、ひよいと顔をあげて言ふと、女はひくい聲で

「いいえ。べつに恐がつてゐるわけぢやありませんの。」

殆ど呟くやうに言つて、男の顔色がすこしばかり苛立たしくなつてゐるのを讀んだが、いつもの不機嫌とは違つた何かの優しさが含まれてゐるのをすぐに見て取つた。いつもと異つた氣もちでわたしと優しく何かを話しようとしてゐるのだと、女はすばやく考へた。

「それならそれでいいがお前のやうに一日考へ込んでばかりゐるとしまひには病氣になる。いまもからだが悪いやうぢやないか。めつきり痩せてしまつたぢやないか。」

女の肩のさびしい斜線の、すうとうすい鉛筆でひいたやうに薄く流れてゐるのを、男はその細い腕のあたりまで目にいれて言つた。

「自分ぢや何んともおもつてゐないんですけれど……それに別に何處が不良いといふことがないんでございますが……。」

「お前の痩せかたがあまりひどいんだ。考へない方がいいのだ。」

男がかう言つたとき「痩せたことは知つてゐるんですが……、」と女はこたへると、袖のところを捲つて細い手をさすつて見せた。肘から手首まで鮎のやうに細く、生白いむづむづした臆病さうな艶を失なつた褪せたいろで伸べられた。葉脈のやうなうすあをいものがすいて見えた。

「お前は取越し苦勞ばかりをしてゐるんだ。つまらないことは一切考へない方がいいんだ。」

男が烟草を喫ひながら言ふと、女は何か言はうとしながら口を噤んだ。表情はすぐ喩の斷へたのをきつかけに、一層の冷たさと蒼白さを加へた。それは何時も彼女が何も彼も押し默つてゐるときに不意にあらはす表情で、男はこれを見るとその執拗さと混亂された心をすぐ讀みわけた。それほど男にとつて永い間女と一しよにゐただけ、すぐに感じられる表情であつたのである。

「…………」女は默つて、目をあげて男をながめた。男はその目のいろを見ると、そこから奥深い、女がもつ特有な炎をかんじた。怨みぶかい纒にからみついて取れないしつこさをもつた目であつた。

「も少し仕事をしよう。あつちへ行つてゐてくれ。」

男はこんどは女の方を向かないで。鑿のさきでコツコツと細部の彫りものにかかりはじめ、再度と女のはうを向かなかつた。女はその俯向きになつて仕事をはじめた男をみると、二分ばかりもぢもぢと何か男の氣に入るやうなことを言はうと、心のうちでさがしたが浮ばなかつた。女は音のしないやうに障子をひいた。白々と閉まつた。男はそのときやつと安心したやうに目をやると、また仕事にむかつた。

女は自分の室にかへると、ぺつとりと糊のやうに座つて、手を膝の上にをいてぼんやり何か考へこんだ。

日が昏れかけると男はさらりとした着換えをすましたころ、勝手で茶碗や皿類を洗つてゐた女の手がぴりぴりと顫へたかと思ふと、その手がきうに止つてしまつたとき、女の眼が大きな水甕の胴體に吸ひつけられた。あめいろをした甕の地に蜆のやうな燒きの斑點が、幾十となくあつた。それを數へつくしたときに、内部に殘つたうなぎの肌のやうにぬ

らぬらした生きものの、長くとぐろを巻いた水が森として目にうつつてきたのである。かの女はさかんに燃えるやうな一つの火になつたかと思ふほど、眇になるほど、強烈な凝視をつづけたのであつた。そのとき彼女の視界に何がうつつたのか、いそいで休めた手を前垂れでくるくると拭いてしまふと、ほそい縄を片はずしに桶の輪のやうに脱つて手拭かけにだらりとかけた。そしてすぐ茶の間へ出て、鏡をちよいと覗いた。夕あかりを胎んだ鏡は深くひかつたが、何處か白紙のやうに寂しくみえた。

かの女は玄關へ出て、れいの茶色の帽子をとつて細つそりと立ちあがつた。そのとき、男は自分の室からぶらりと玄關へ出てきて、女を見るとびつくりして顔いろを變へた。ふしぎにどういふ時にでも、外出するときになると、どういふ忙しい仕事をしてゐても女はいつも先廻りをして玄關へ出て待つてゐるのが常であつた。それが食後なれば外出することを感じやすいのは誰でもあるが、食事前にでも女はいつもれいの茶いろの帽子を持つて、音のない水のやうに立つてゐるのである。それゆゑ男は暗いいろをした襖をうしろにして今の今、かうして女が立つてゐるのを見ると、ぎつくりと胸にこたへた。あれほど靜かに着換へをしてゐたのに、もう感じ出したのかと、そつとひと目くれると、女はしめつた聲で

「いつていらつしやいまし。」

さう言つて茶いろの帽子をさし出した。ほそい豌豆のやうな指さきが、柔らかい帽子のふちにあたまをそろへてゐるを見ながら、男は帽子をうけとると默つて習慣的に下駄をひつかけて、自分でもびつくりするほど強く格子を開けると、四角な箱のやうな玄關から、するりと脱けて出てゆくのであつた。女はすこし上目をしながら見送ると、そつと障子をしめてしまつて、長火鉢のところへ又ぺつとりと坐りこむのであつた。

水氣ぐんだ暗みが夕明りの隅々に這ひかけても、かの女は座つたまま、永い間一ところを凝視しつづけたのである。片手だけ疊の上にちからなく垂れ、片手をひざの上におきながら、烈しい一點にあつまつた目をめがけて、目や鼻や唇や、やせた頰の肉が一時に集中されたやうに、頤ちうが尖がるほど、女の眼は凝りあがつてみえた。そのとき女は前に置かれた新聞紙を一心になつてみつめてゐたが、ちよつとの間その表情が動いたかと思ふと、ますます烈しい凝視をつゞけた。蒼白い顔面はまるで一とすぢの布きれのやうになつて、その新聞紙の上にそそがれたが、間もなく女はそつとその新聞紙をひいたとき、そのしたから胡麻粒のやうな一面の赤蟻が、殆見わけることのできないほどの微かな、いくすぢとない行列を疊のへりから障子ぎわの閾までつづけてゐた。女はそれを見ると、ぬれた雑巾でいちいち拭きとつてしまふと、また座つて毎夜のやうに壁や障子を見つめたのである。ふしぎに女が永い間壁や障子を見つめてゐるうち、あたまがはつきりしてきて、いつも影のやうなものを障子や壁のそとに映してくるのがつねであつた。それが次第にくせのやうになつて男が留守にさへなれば、壁のうしろに（實際はそこは隣りとのさかひ目であるが。）もう一つ室があつて、そこには電燈があかるく吊されてあり、白々した光を放つてゐるのまで瞭然と目にうつつてくるのであつた。その室の特長として映るものは自分の家とは全でかけ放れた明るさをもち、新しさをもち、その上掛軸や活花が整然として飾られてゐるやうに思はれた。何よりもはつきりと目に見えるのは男の姿で、その男がずつと以前に女にして見せた同じい微笑と、同じい胡坐をかいてゐることと、同じい聲音とであつた。おなじい微笑をしながら何か話しては、興味さうに、時には喜ばしさうにからだを動かしたりするのが、その手つきにまであらはれてみえた。

男の姿がそれほど明瞭にうつつてくるのにひきかへ、女のはうは影のやうにぼんやりして、いくら能く見ようとして眼をすゑても、だんだん小さくちぢんで遠くなつてゆくやうな氣がした。しかしその不分明なむしろ朦朧とした顔つき

にも、にんがりと踏みつぶしたやうな妖艶な微笑がうかんで、ことに黒ずんだ両脇の唇はまるで一疋のゐもりのやうに跳ね返つて、はげしい肉情のまとになつて見えてくるのであつた。その唇を見つめては、酔つたやうなふらふらした目をした男が、手を伸しては女の手をとらうとしたり、唇に唇を合せようとしたりする苛々しい二つの影が、夜を透したふしぎな室のなかに、ずるずると衣擦れの音とともに女の視覚と神経とをすつかり支配しつくしたとき、まるで女はきちんと正しく座つて、氣でも狂れたやうに棒みたいに硬ばつてゐた。蒼白い皮膚にますます烈しい生白さと、異常な精神の緊張とを完全なまでに湛ふて、一面に微かな顫へを細しくあらはしてゐた。ことにいまは眇になつたやうな斜視がたえまなく白い糸のやうなものを壁のそとにそそいでゐるやうであつた。壁のそと側のあやしい人物は幻燈のやうにくるくるうごいて、あやうく女と男とが一つのかたまりになりかかつたり、いきなり真赤なゐもりのやうに吸いだりする微笑された口もとが、かつとほのぐらい四邊に彫られたりした。男はまさしく餓ゑたやうに女のそばに喰つ付き廻つてゐて、物憂い晝間の仕事臺に向つてゐたときの男とは別人のやうな元氣と精力をもつてゐるやうにおもはれた。

「わたしが毎晩かうしてあのひとのことを考へてゐるうちに、だん〱瘠せほそつてゆくのだ。わたしはあのひとが毎晩出て行つてからのことをすつかり永い間見てゐる。あのひとはそれを知らない。わたしは見まいとしながらも引き摺られるやうに毎日あのひとのことを考へたければならないのだ。」女はさう思ひながら、ふと一時に氣のぬけたやうに腰と腰との間におしりをおとした。ぐつたりと生白い泡のやうにしぼんだかと思ふと、悪夢から醒めたやうに目をきよろきよろとさせた。そのときの疲勞しつくした眼の下には黒ずんだ輪さへうかして、じとじとしたあぶらが、瀬のうへに浮きでてゐた。

女は恐ろしいものから遁れたやうに、「ああ。」と言つて溜息をついたが、息がはずんでゐるために肩さきが震へ

て見えた。女はしばらくすると勝手へ出て行つたが、すぐ、生水を呷つてゐるらしい喉鳴りがごつごつりと、幾たびもつづいた。女はもとのところに座ると、目のさきにふらふらと動くものを感じて仕方がなかつた。目のせいかと平手で目をこすつたりしたが、しかし動くものは絶え間なくその動きをつづけてゐて止まなかつた。はつと氣がついたとき柱時計がそこにかかつてゐるのを見た。何心なくであつたが

「時計がうごいてゐたのだ。」さう言つて女はうつすりした微笑をうかべた。笑つてゐるのかゐないのか判らないほどの、きわめて變な微笑であつた。間もなく一度時計を見るとこんどは氣味惡く聲にまで出して微笑つたとき、女は自分で自分の微笑ひ聲にびつくりしてあたりを見まはした。そのとき九時を二十分過ぎた針がおたまぢやくしのやうにちよろちよろ泳いでゐるやうに見えた。

十時がすぎ、十一時がすぎ、最終列車の汽笛がいつものやうにしたときまで、女はやつぱり座つたまま眠るでもなく醒めるでもない、うつらうつらした範に揺られるやうな氣でゆらゆらしてゐた。が間もなく何時ものやうにその時刻から尻のはうから逆に上つてくるやうな水のやうなものをかんじ、はつきりと目薬をさしたやうに瞳が冴え返へつてくることをかんじるのであつた。何が故であるか、その晩い時刻は先のかの女をおそふた幻影の内にもう一度かの女を引き摺り込むのであつた。かの女は搾木にかけられたやうに硬ばつて、頻りにその聽覺をかたむけはじめた。そのとき何處か道路のやうなところで跫音がした。いそいで來るらしい木魚のやうな遠い音が、明るい電燈の點いてゐる廣いところから、鍵形にまがつて急にほの暗い通りに歩き近づいてくるやうな氣がしてきた。

かの女はそのとき目を閉ぢて耳だけを澄してゐたのである。奇妙な下駄の音はすこしづつはつきりしてきて、坂のやうなところを上つてきた。ふた側の新しい家並みも寢しづまつてゐて、男の黒ずんだ姿だけが闇のなかに、もつと暗い

影をひいてゐた。「あそこの角は果物屋になつて居り、となりが床屋になつてゐる。床屋だけが寢しずまつた通りに明るい電燈を道路に投げてゐる。そこへ暗い影が浮き出た。男がいまそこを通つたのである。それから溝川のごぼごぼいふ重い音がして、男がそこをそつと通ると、暗い小路をまがつた。漆のやうな闇がつゞいた五軒目の、ぼんやり點れた電燈にまざまざと格子戸がはまつてゐる。……。」と浮へ沈んだとき、がつたりと音がした。女がびつくりして目をむけた。格子戸があいて男がかへつてきたのである。

女はすつと立つて玄關へ出た。

「おかへりなさいまし。」

茶いろの帽子はまた女の手にもどつたが、それはすぐ帽子掛にかけられた。男は醉つた聲で低く遠慮してゐるやうな聲でささやいた。

「誰もこなかつたかね。郵便も。」

「いえ。どなたもお見えになりませんでした。」

女はさう言つて、ちらりと男の顔をみると先刻の男と異つてゐるところがなかつた。ゐもりのやうな眸をしてゐる女が、玄關の内側に佇んでゐるやうな氣がして、暗い男のうしろをながめた。軒燈をうしろにした格子が寒々と荒い模型にはめられてゐた。

「さうか。さびしかつたかな。おそいから寢たらいいだらう。」

男はさういひながら女の顔をみると、夕方出て行つたときから、また一と皮だけやつれてみえた。顔いろが日に日にわるくなつてゆくのも目についた。

一お床をとりませう。」

女がさう言ひながら床をとつてしまふと、男はぐつたりと疲れたからだを横にした。ほんとに氣味の惡い女だ。なにも彼も見てゐたやうに變なかほをしてゐる。さう思つて細目に眼をあけてみると、女は閾のところに手をついて

「おやすみなさいまし。」

男の顏をまじまじと見たが、すつと音のしないやうに立つて自分の室へ行つた。變な女だ。猫のやうに音をたてない。上目してぢつと見つめられると、何も彼も寫眞に撮つたやうに知つた顏をするのだ。男はさう思つてゐるうちにうとうととした。

女は着物をきかへながらほつそりした胸を鏡にうつして、女自身もふしぎに瘠せほそつたからだをつくづく眺めこんだ。ちいさい乳房や鳩胸のさびしい高まり、それに喉ぐちがほつそりと上へ向けて伸べられてゐた。喉のうへにはれいの蒼白い首があつた。女は全身のなまなましいからだから放つ紙のやうな白さを、夜更の冴えた電燈にさらしながら、ながい間見つめてゐるうちに、

ふふ……と微笑んで見た。また、こんどはきつとした眞面目な緊張した表情をして、目をいからして見た。かと思ふと、またきうにうつとりと媚びたやうな艶めいた目つきをしたが、それらをいきなり取り崩すやうに又微笑つてみせた。白い歯があらはれた。寒かつた。

男の室から小さいいいびきが起りはじめた。うさぎのやうに耳をつツ立てた女が、それをきくと見る間に憂欝な蟄つた眉と目とのあいだから、さめざめと泣き出した。一時にためた様々な悲しさうな長い忍び泣きがつゞいた。それはふしぎに笛のやうな聲にも似てゐたし、鼻でくんくん啼く犬のこゑにも何處か似てゐた。

男はある日仕事場の鉋屑をまぜ返したり、道具箱をがちやがちや鳴らしたりして、しきりに何かを捜してゐるやうであつた。雨は飴いろにそとの空氣をそめた陰氣な午后であつた。

女がひよこり仕事場に顏を出すと、男はあはてた恰好でたづねた。

「鑿が見えない。鑿が……。」

鉋屑を掻き廻しながら言つた。

「さう。箱のなかにないでせうか。」と女は道具箱を覗き込んだが、そこにもなかつたのだ。

「いや箱にはないのだ。ふしぎだ。實にふしぎだ。現に今使つてゐたんだが。」

男はさう言つてぼんやり女のかほを見た。女はそのとき鋭どくあたりに目をくばつて、そこらの棚や仕上物や材木のあたりを凝視め出した。そのとき不思議に女の眼がだんだん眇になり出してきたのである。いつもするやうな烈しい斜視が、めらめらと燃えつくやうに鉋屑のあたりを這ひ廻つた。

男は何氣なくふと女の眼を見ると、すぐ驚いた。それはあまりに劇しい凝視と、氣でも狂れたかとのやうな怪しい光とをもつてゐたからである。そのとき、女は立つて鉋屑をつめこんだ俵のなかを指さした。

「あのなかに這入つてゐないでせうか。わたしにはさう思へるんでございますが……。」

「俵のなかにかね。」

「ええ。」

「まさか──かうつと、さつき鉋屑をつめこんで……と……何か堅いものがお手にあたらなかつたかしら……。」

男は考へこんでしばらくすると、びつくりしてすぐ俵のそばへ寄つた。

「あ。たしかに木屑と一しよにつめ込んだのだ。」

さう言つて男は鉋屑をつかみ出した。と、[illegible]延の白い刃のついた鑿が木屑と一しよにまぎれ込んでゐるのを發見けたのであつた。

「危ないところだつた。それにしても能く怪我をしなかつたものだ。」

男は刃わたりを手のひらで촌べたときに、漸つと女が俵のなかにあることを言つたことを考へ、ぎつくりして顏いろまで變色て、女を見つめた。しかし女は平氣になつてゐたが、つかれたらしい蒼白い揉みくちやにした紙のやうになつて、うつすりと優しく微笑んでさへゐたのである。その落着きを見たとき、男は腋の下のさむくなるのを感じた。

「しかしお前にはどうして鑿が俵のなかにあることがわかつたのだ。」

かう言はれると女は微笑つて言つた。

「でもあそこより外にあるとは考へられないんですもの。」

「それもさうだが……。」

男はそれきり默つて氣味惡く女をみつめた。そのとき男はいつもの女とは異つたものを見たやうな氣がした。何かわからなかつたが男にないものを女がそのからだに含んでゐるやうに思つたのであつた。何かから特別な靈氣とか媒とかいふものが、その肉體にふくまれてゐるやうにさへ、一種言ひがたい變な氣がしてきたのであつた。

女はそつと次ぎの室に行つたあとで、男はいろいろなことを考へた。女は[illegible]なく沈んで何かをしつこく[illegible]戚つ

てゐることや、ふしぎに退屈もしないで一と處に何もしないで座つてゐることなぞ、いまは次第に男の心を變にうち沈ませた。

日が暮れた。男は女が庭へ出てゐる間に手早く仕事着をぬぎすてると、そと着をひつかけた。そして急いで玄關へ出たとき、男はびつくりして一尺ばかり飛び上つた。そこに何時の間に襲ぎつけてきたのか、れいの鼠の皮のやうな茶いろの帽子をもつて、女がほそながく立つてゐたからであつた。

「いまお前は庭に出てゐたやうであつたが、それとも家にゐたのか。」

男は帽子をとると、かう言つて女のかほをながめた。

「でもおでかけのやうでございましたから……。」

女は答へると玄關の障子をそ とあけて

「いつていらつしやいまし。」

手をついて言つた。指のないやうな圓い手が疊のうへにをかれた。

「うむ……。」

男は下駄をひつかけてそとへ出た。夕明りがまだ漂よふてゐる中空に、くらい蝙蝠が暗みを縫ひながら低く地べたをすれすれに馳つたりしてゐた。

「どうもあの女には別な氣もちがあるらしい。しよつちう考へ込んで何かを搜りあてようとしてゐるのだ。」男はさう思ひながら何時もの溝川の橋までくると、きうに立ち停つた。溝から泡がぶつくりと浮きあがつて、魚の鱗鰭のやうに破れてゐるのを眺めてゐたが、男はそのとき橋をわたらないで、自分の家へ向つてあと戻りしたのであつた。

家では男が出ていつたあとで、女は又ぺつたりと坐つて、うつらうつらと何か考へてゐたやうだつたが、いきなり端背を持つて引き据えられたやうに顔をあげた。眞白になつてゐた。耳はその輪廓が幾重とない渦巻をあらはして、ぴいんとつツ立つた。

「はてな。」

女はちいさい聲でつぶやいたとき、外では男が濕つた板戸にぴつたりと下蜘蛛のやうに忍びよつたところであつた。星ぞらではあつたが、もう完全な暗みがそこらぢうを染めあげ、あるものはだらりと暗く地上を這ふてゐた。

「とすると……あの方は橋のあたりから引きかへしてきて、勝手の板戸のところにゐるのにちがひない。」

女はさう心でつぶやいたとき、はつきりとうす暗く忍んでゐる男の姿が、よこ板を使つた勝手の板戸に平たく、黑い斑點のやうになつてゐるのを考へついた。そしてぶるぶると蜻蛉のやうに震へた。見つめてゐるうちに黑い大きなひらめのやうな影が、一枚の障子にうつりきれないで、もう一枚の方にまでその影を伸しながらうつつてきたのである。妙にさらさらと障子紙が擦れて鳴るやうな氣がした。

時計はそのあひだに十分二十分を過ぎた。間もなく三十分を過ぎた。夜はしづかに小雨あがりの濕つぽい土に沈く雫の音のほか、何事をも起りさうもない沈んだ靜かさのうちに、闇はしだいに熟れてゆくやうであつた。――女は烈しい緊張のために呼吸を飲み込んではゐたが、それがまた喘ぐやうな苦しい調子になつて、がんがんと空氣を吸はうとしながら、からだが引きしめられてゐるやうで自由にならなかつた。足や手や顎やがしんしばりをしたやうに張りつまつた。ことに胸が板のやうに硬ばつてきて、からだを動かすちからが抜けたやうになつてしまつてゐた。

そとの姿はやはり板戸にくツついて、それが二枚の障子に寫しかへられてかの眼にますます濃い姿をうつらせた。女

のかほは紙のやうに乾いてゐて、まるでそれは一枚の紙きれにすぎない死んだやうな白さであつた。呼吸はますます苦しさうに見えた。れいの斜視は最初の十分からもう一時間以上を経てゐた。

と、そとの影が板戸をすうつと明りへぺかしたやうに離れた。そのとき障子のかげもするすると動いた。女の斜視は形にひらめいたとき

「一歩(ひとあし)、二歩(ふたあし)、三歩(みあし)……。」

と、女はひくい聲で心臓のはげしい鼓動と一しよの息ぎれでかぞへはじめた。柔らかい土には音がなかつたが、女が五歩まで數へたとき障子のかげはすつかりなくなつて、いきなり玄關の格子ががらがらと雷のやうな音をたてて男がはいつてきた。が、その格子の音がするほんの二秒ほど前に女は恐ろしい驚くべき緊張と凝視との世界から切りはなたれて、ほそい腰から二つに折れたやうに氣を失なつて前へつつ伏したのであつた。骨まで折れたやうにがつくりして――

間もなく女は床についた。その目はいつも光線のある方を向かないで暗い障子のあるところ、隅々のくらみをもつたところに注がれてゐたのである。彼女は乾した鰯のやうにほそれきつて、すこしばかりの粥と青白い乳や、たまには果物などをたべた。ただその瞳は異様に磨かされてゐて、光は床につかない前よりも鋭どくなり増つてゐたのである。もあう、自分の指紋をしらべたり、ほそい腕をさらさらと臆病さうに撫でさすつて見たりするほか、うとうとと少しばかりの睡眠のあひだをさまよふたり、またぽつかり目をさましたりしてゐた。さうかと思ふと彼女はいつも、殆絶え間もなく同じい數を算へたりしてゐたのである。

「一二三四五……。」

それが何の理由もなく繰りかへされ通されたのである。醫者は精神衰弱であるといひ、殆精神病者に近い憂鬱症に陥つてゐるといふことを男に注意した。

男そはの仕事のひまひまには女の室へ行つて

「なにかほしいものがないか。」

よく尋ねたが、女はあたまを振つて

「いいえ。何にもほしくはありません。」

さう答へるだけで目を閉ぢるのであつた。かれはその蒼白くやせ込んだ額や首すぢをみたりすると、いつかの晩の氣絶したときの女の變にゆがんで、死人のやうにくたくたに柔かくなつた身體をすぐおもひ出した。それは、手も首もはなればなれにぐなぐなになつてゐたからである。首を起すと、だらだらと流れるやうに肩のつけ根から下がつた腕と、俯向けになつた手首が疊の上に擦れて、げじげじ蟲でも這ふやうな厭な掻くやうな音をたてたからであつた。

「わたし今どういふ風にねてゐたんですか、言つてください。」

から女が言つて、うつすりと目をあけたとき、男は氣味惡いほど女が何故氣絶したかを次第にわかるやうな氣がしたのであつた。

「俯向けに——かういふ風に。」

男は自分で腰を折つて、つツ伏した姿をしてみせたとき、女は嬉しさうな表情になつて

「まあ……。」

と言つて男のかほをちらと見て微笑んだ。それがまた男にはわざとされたやうな氣で、きうに默りこんでしまつたのである。

男は仕事場にかへつて、こつこつと彫りものをはじめた。さうしてゐるうちに、かれはそつと障子をあけて次の室の病人がどういふ風に寢てゐるかといふことが氣になつて、四ツ這ひになつて、つぎの障子戶までしづかに忍びよつたのである。

男は障子のすき間から覗いたとき、起き上つた女が眞靑になつて、男の忍びよつたことを疾くに感知し待ちうけてゐるやうな聲で言つた。

「なにか御用でございますの。」

その聲は落ちついてゐた。男は吃驚して冷たくなつて、からだを縮めながらそれには答へないで默つてゐた。

「そんなことをなすつても、ちやんとわかりますの。」

言はれたとき、男はおもひきつて障子をさらりとあけた。女は微笑んでみせた。つめたい蠟のやうに瘠せた皺が頰のところに寄つた。

「どうしてお前におれの姿がみえるのだ。氣味の惡い――。」

男は棒立ちになつて、なまじろい女のはだけた胸をみつめながら言つたとき

「あなたこそ氣味の惡い、四ツ這ひになつて忍びよるなんて。」

さう女がこたへると、男は又冷たくなつて急に言葉もでなかつた。ただ不思議なものをみるやうに、この變な女をつくづく眺めた。いまは彼女はただ氣持ばかりで生きてゐるほど細ながく伸されたやうになつてゐたのである。横になれ

ぱなつたままで、のろのろと這ひ出し兼ねないぬらぬらと細く、きみわるい蒼白さに潤んでゐたからである。

「ほんとにどうしてお前はおれが忍んできたことがわかるのだ。」

女はぐんにやりと微笑つて

「どうしてつて……どうしても見えるんですもの。」

男は蒼くなつて、やはり立つたまま女の耳をふいと目に入れた。それは派手な白い菌のやうなかたちをしてゐて、ときどきぴりぴりと震へるやうに動いた。「人間の耳のうごくのといふものは何て變なあやしい氣をおこさせるものだらう。あれの耳の動くのを今日はじめて知つたのだ。これまで自分の知らなかつたときにも動いてゐたのだ」。男はさうおもひながら訊ねた。

「眼を閉つて考へあてるのか。それとも眼をあけて考へるのか。」

男は自分の質問の變なことを心でそれとかんじながらいふと

「どちらでもないの……。」

「どちろでもないのか……。」

男はさう答へて默つてひきかへさうとした。女はそのとき又床のなかへからだを入れやうとした。わき腹のほねが規則正しく波をうつて、むしろざらざらした感じで目に映つたので、男はこりこりなあばらの骨を手で撫でたやうな觸感をかんじた。

「そこを閉めていつてください。」

女はさういふと、ぬつと生白い首を布團から辷り出した。男はわけなく[illegible]

きの姿が目にのこつてゐて離れなかつた。

男はそとへ出てゐても、すぐ女の青白い顔がうつり出してきて落ちつかなかつた。電車に乗つてゐても、ふいと乗り合せの女のかほを目にいれると、ふしぎに家にゐる女のかほが掠めてしまふのである。暗い室がみえる。壁と障子の方をむいて、わざと向かされたやうになつて、まじまじと何か考へながらゐる横がほが見えてきてならない。きつと又出かけてきた道順や、町などを考へこんで「いまごろはあの町角をまがつて、ごちやごちやな辿りへ出て、石でも投げあげたやうに電車に乗つたにちがひない。そしてあの人はガマ口を出して切符を買つて……それから……」と男はいつも女のする想像を考へあてると、すぐそばに女が座つてゐるやうで、あたりをきよろきよろ見廻したりした。

男は電車を下りると、いつも行きつけたひつそりした家へはいつた。そこは横町裏の何處か艶めいたすだれや肘かけや細そりした煙草盆だのが置かれてある室であつた。つめたい紫檀のちやぶだい、襖のかげから見える長いよく磨かれた廊下などがみえた。

「しばらくいらつしやいませんでしたのね。おかけしませうか。」

女中がさう言ふと、男は疲れたやうなこゑで

「あ、それから急いで酒をもつてきて呉れ。」

男がかう命じると、すぐ女中が去つてしまつて、いつものやうにぼんやりと一人ひろい座敷にをかれた。雨のない重いやうな塞つたそとの空氣は、ひつそりと家内をしづまらしてゐた。間もなく電話の鈴が鳴つた。女にかけてゐるらしい

のである。

男はたばこをふかしながら、いつになく家をでるとき「早くおかへりなさいまし。」と女が言つたことをおもひ出した。病氣になつてから久しぶりに出かけようとしたとき、れいの蒼白い首を床から乘り出して女がさう言つたのだ。ぎらぎらした鮒のやうな目と、やせて尖がつた小鼻とがまた目にうつり出してきた。

「いけない、妙に氣がかりになつていけない。」

男はたばこをやめて、また、退屈な五六分をおくると、そこへ靜かに目さめるやうな派手な扮裝をした女が膝をついた。男はすぐさま明るい顏になつた。

「お久しぶりなのね。」とすこし膝を乘り出した。いそいで來たものらしく、おしろひの刷毛がよくとどかない地だけが茶がちな顏のいろを出して、そこだけ妙に焦げたやうにつるつるしてゐた。

「妙に默り込んでいらつしやるわね。どうかして――。」

「いや、別に何も考へてゐないのだ。重くるしい厭な日だな。」

「けふは變なことばかりあつたのよ。お湯屋の時計が停つてゐたし、うちのも三時で止つてゐたし、それに本統に妙よ。あたしののも止つてゐたの。」

男はかう聞くと機械的に

「ふむ――。」と帶のあひだをさぐつて、辷り出した時計を出して眺めた。小さな音をきざんでゐたので、ほつとしたやうに女は明るくなつて

「まあ嬉しい。あなたのも止つてゐたらあたしどうしようかと思つてゐたの。あたし妙に神經質で、かつぎ屋なの。」

男はふいと欄間のところをみると、そこに小さな潜戸が開けられてあつて、何か影のやうなものをちらと見たやうな氣がしてしかたがなかつた。特に何者であるといふことが判然しないが、變な氣がしてあたりをぐるぐる見廻した。なまこ色の壁と、障子と、床の間の小さな香爐とが目にはいつた。

「變だわね。あなたは……さつきから話の腰ばかり折つて落ちつかないのね。」

女はあちこち見廻す男の目を追つてから言ふと

「さうかな。何んだか落ちつかないんだ。變に静かなせいもある。」

男はさういふと、女はすぐ

「どんなお客でもみんな考へ込んで、へんに沈み込んでゐるのね。しよつちう、何か心のうちで捜つてゐるやうなところがあるわ。何を考へてゐるんでせう。」

「家のあるものは家のことを考へてゐるんだらう。」男は横になつた長いものや、障子と壁の方にむいた蒼白い顔を目にふいと入れると、もしかすると今夜あたりわるくなつてゐはしないか。あれが死ぬやうなことがあれば、あれが死ぬやうなことはないが、しかし惡くなるとすると……考へこむと、女はにつこりして

「おくさんのある方はやつぱりおくさんの事を考へ出すんでせうね。」

まじめな聲で言つた。

「まあさうだね。」

男は一向酒がきかなかつた。しかたなしに男は床の間の香爐の蓋をあけようとすると、女はすぐ袖をとらへた。

「いけないわ。また、あんたものを見ちやいけないわ。」

男は氣のくさくさするときは香爐の蓋をながめる癖があつた。蓋のうらには精細な、美しい男と女とが濃かに抱き合つてゐる赤繪がゑがかれてあつて、ふしぎに男はそれをみてゐるうち、からだに別なちからと勢力が湧き出すのがつねであつた。欝々したときはいつもその白い一疋のむつれあつた魚のやうにぬらぬらしたものに、永い間ひとみをさらすのであつた。

「氣がくさくさするんだ。見たつてかまうものか。」

男は蓋をとりあげると、まじまじと眺めた。これを見てゐると、くだらないことを忘れてしまへるからいいのだ。かれはそれを横にしたり透かしたりしてゐると

「おかしいわ。そんなに見ちや、は、は、は。」

女は微笑つて引つたくらうとした。と、かつきり描かれたやうなゐあゆのやうな腹赤な背が、男の目にいきいきとうつつてきたのである。男はぐなぐなな手をとらうとする。そのとき、ぴつしりと打叩かれた。いつもそんなことをしない女なんだが。

「莫迦。何をするんだ。」男は叩かれた手をさすりながらいふと

「何んにもしなくてよ。誰か叩いたやうだつたわね。」

「誰かが叩いたやうだとは――。」

「あたしぢやないわ。こつちの手に煙草をもつてゐるでせう。だから叩くことができないわ。おかしいわね。は、は、は。」

男は女の左の手をみると、指とおなじい[illegible]白さをもつた紙卷が挾まれて、しづかに煙をあげてゐた。

「嘘を吐け。」男はさう言つて、わけのわからない激怒をかんじて、手をあげて女を打たうとした。ぐらぐらした苛立つた癇癪が額に筋を立てた。

「は、は、は、だ。」

女は不貞くされて高い聲で笑ひだいたとき男はぴつしりと張りつけた。と、蒼くさつと洗つたやうに蒼くなつた女はびつくりして暫らくものをいはなかつた。が、また變に笑ひ出した。醉ふとさういふ癖のある女は、ただ可笑しかつた。

「あゝ……。」さうだ聞える。いやな。男はがつくりと首を床の上から疊に擦れ落ちたやうな音を耳にした。もしものことがあるとやはり可哀相だ。今夜あたりは危ないのだ。家にゐてやればよかつたと、男は考へ出したときは、もう醉が足もとをふらふらさせた。いつでも不平がましいことを言つたことがない。濟まないと思ひながら、こつそりと家を逃げ出してきたのだ。

「どうしたの。苦しいの。」

「寢言をいへ。酒をもつと持つてきてくれ。あつくして。」

女が梯子段を下りて行つたあとで、しばらく男はひとりでゐた。ひとりでゐると障子が餘りに白く鮮かで、なにかが映つてくるやうなあたらしい錯覺をさせた。壁にしろ、無氣味に廣い座敷にしろ、どうもいけない。男は敷島の袋を手にとつたときも、かさかさした紙屑のやうな音がしたので、ふしぎさうに眺め出した。

「と、何かしら變つた事が起きて居はしないか。それとも毎時のやうに壁の方を向いて寢てゐるだらうか。どうしてあれは壁の方ばかり向いて寢るくせがついてゐるのだらう。いつころだらう、あんな變な風な女になつたのは……。」

そのとき階下へおりた女が、長い廊下をしづかに歩いてくる足音がした。そして室へはいると

「まあ恐い――。」と言つて顔いろを變えた。脅えたやうに眉をそよがせてゐるのだ。
「どうして怖いのだ。」
「どうしても恐かつた。でも目ばかりくりくりさせてゐるんですもの。けふはどうかしていらつしやいますわ。」
「いつもと異つてゐるかな。」
「ほんとに變よ。手に何を持つていらしやるの。」
「何つて……何をさ……。」
氣がつくとまだ男は香爐の蓋をしつかりと握つてゐた。握つてゐた手が殆ど無感覺になるほど、永くつかんでゐた。
「いやなひと。まだあんな物をつかんでゐるんだもの。」
女は言つて又引き取らうとしたが、男はなかなか離さなかつた。
「すつかり忘れてゐたのだ。渡してたまるものか。」
男はさう言つて頭間に堅く握つてゐた。むづむづと這ひ出るやうな一疋の生きものの縮を、あたまに柔らかく痒いやうな心持でゐがきながら。
「ぢや、いつまでも持つていらつしやい。は、は。」
女は仕方なしにかう言つて、また酒をつぎ出した。男はいつか女に尋ねて見ようと思つてゐて、つひ言ひ出せなかつた喉のところの傷のことをたづねた。それは變に栗いろの二分ほどの長さの、氣味の悪い傷であつた。いろいろな想像を加へれば加へられる傷でもあつた。
「何んでもないのよ。おできを切つたあとが殘つたの。」

女は言つて人さし指で、その傷の上をなでてみた。柔らかい生白い、えずゐくゐのやうに廻つてゐるやうな首すぢ、その喉笛のしたにぽつちりついた傷が男には忌はしい妄念を驅らせたのであつた。

「おできなのか。おれはまた心中でも仕損なつたのかと思つたのだ。」

「さうなら氣がきいてゐるんだけれど……。」

女は言つてきうに默り込んだ。「何かがあつたのだ。と、おれが氣のつく程度で何事かがあつたのだ。あの傷はただの傷ではない。決してただの傷ではない。」男はさう考へ出した。女も默り込んだ。男はすぐまた家にゐる女の生白い首すぢ、ねぢ切れさうな门葱のやうな首すぢを考へた。ほんとに何も起つてゐてくれなければいいが、男は苦しさうに心でむしろそれを「何も起る筈がないのだ。ああして壁の方を向いてやすやすと睡てゐるにちがひないのだ。」と考へて、ほつとして杯を口にした。

「何事が起り得る筈があるものか。生むは案じるより安しだ。本統に何も起つてはゐなからう……が併し、あれは又何時の壁を見詰めて、かうして此處に座つてこの女と話してゐることをすつかり考へあてたとすると、若しくば考へあてやうと、ぎらぎらと例の斜視をやつてゐるとすると、と、彼女(あれ)は披つと惡く最つと細く、極端にヒステリックになつてゐはしないだらうか。」

男は鞄のことや、玄關の隣の間から誰何されたことを思ひ出して「あるひは意外に、眞統に意外に此處のすつかりを考へあててゐるかも知らない。此處にゐるおれのすつかりをだ。」男はかう思つたとき、ぎつくりした。吸殻がちやぶだいの上に、白くさらさらにくずれた。

「あたし今夜はこれで歸らしてほしいわ。よそから口がかつてゐるんですし……。」

女は恐さうに男の眼が異様に輝くのを眺めながら、おどおどと言つて、男が承諾するかどうかを目敏く讀んだ。

「歸へるか。ふむ。くちがかかつてゐるんならいいよ。止めないから。」

男は反對に怒りが沈みきつて、森とした頭になつた。

「わるく思ないでくださいな。」

女はわざと男のかほを覗き込むやうに、猫のやうな狎れた一瞬間の微笑をうかべると、すぐに座敷からでゝ行つた。あし音が長い廊下から消えた。「また一人になつてしまつたのだ。何も別にあの女でなければならないことはないのだ。ふむ。」と反感的に考へ込むと何故かふらふらと醉が一時に噴き出るやうにやつてきた。

金を拂ふと、のつそりと池の端のまはりを歩き出した。

「ともかく歸へらう。何にも起つてないことはちやんと信じてゐるのだ。きつとだ。」男は執拗く繰り返しくちのうちで言つて、瓦斯燈の青い光をびつしよりと浴びながら、二た足ばかりあるいたとき、何んだかばつさりと衝きあたつた。醉つてゐたせいで、すこし眼が眩んだ。あしもとを見ると藁屑がそこら一面にみだれてゐた。乾いたいやな匂ひでさらさらと鳴つてゐた。

男が電車に乗つたころ、女は蒼白い蛙のやうになつて、床から半身を乗り出し、極度の疲勞と凝視との世界から赦放されたばかりの荒い肩息を吐いてゐた。不思議に女はすつかりを眺めてゐたといふより、殆ど的確な想像で男の逐一な行爲を感知してしまつたのであつた。女は女自身にあつても之等の凝視の世界が、果してどれだけまでが想像であるか、

幻覺であるか、または一種の透視的な夢幻界を彷徨したものであるかといふ區別を判明することができなかつた。かれはいつもその男の姿が街へ浮び出し、街の混雑のなかに紛れない色別をその姿に見出すとき、はつきりとその歩行や動作や、または女の家に運入ることや、そこの室内に於けるあらゆる細部の動作までを、漏なく、平常の男の生活や動作や言葉の内に感じ出して、ありありと描き出すことに馴れてゐたのであつた。

女はそのとき、男が今何處の通りを歩いてゐるかといふ自分との隔離を、その次第に近づいて來る隔離を殆ど透明なものを視るやうに、的確に感じ出してゐた。いろいろな商店や通行人や電燈や緣日商人などのなかを、一歩づつ黑づんだ姿を運んでくるのが、その町の家並がだんだん背後に遠く抉つてゆくのと一しよに寫し出してゐた。女の見た男は非常に疲れてゐたし又甚しい苛々した表情で、何か頻りに考へ詰めてゐるやうな鬱陶しい歩みをつづけてゐたのである。女はそれを以て明らかに自分の上にかかはつてゐること、自分以外にかれの意識が働いてゐないこととを確めることができたとき、女が能くやる隱れた微笑みをうつすりと浮ばしたのであつた。

男が土橋をわたりかけると、その橋の上でも叩くやうな跫音が女の耳そこにきこえたとき、かの女はすつぽりと毛布をかむつて、やすやすと睡つた風をした。表があいた。くらい土間から上つてくると、すぐ障子をすらりとあけた。そして

「べつに變化りはないか。睡つてゐるのか知ら。」彼は語尾をひとり言のやうに言つて、女のあはい顏をみた。うつそりと目をあけた女は、だるい聲で

「おかへりなさいまし。たいへんお晩うございましたのね。」

女はこれだけ言つて、いつもより親しさうな微笑をうかべた。「何事もなかつたのだ。もしかすると非常な不吉なこと

が、疑つてゐはしないかと思つてゐたのだ。」男は安心したやうな顔を

「うむ。すこし手間のとれることがあつて晩くなつた。變化りがなくて何よりいい鹽梅だ。」

戸口に落ついてから言ふと、女はくつすりと微笑つて、すぐ元のまじめな顔になり澄した。へんな奴だ。ああいふ微笑ひがほをこのごろになつて時々するのだ。そんなときおれの方で何時も何か言ひあてられたやうな氣がするのだ。

男は默つて自分の座へもどらうとすると、女は

「あの……すこし……。」

と言ひ吃つて、男の左の袂をじろりと眺めた。男は機械的に左の袂に手をやると、何か堅い陶器のやうな物がはいつてゐるのに氣がついた。「きさまか酔つてゐても彼様ものを入れて歸へる筈がない。筈がないが……併し別に外の物が這入つてゐる筈もないのだ。」さう男が思ひついたとき、突然、ほとんど芝居に思ひついたのが香爐の蓋であつた。まさかあんなものを……と思つたが、顔はすぐ熱く火のやうに赤らんで了つた。

「見せてくださいましな。」

女がからかつて、ぐんにやりと伸されたやうに微笑つたとき、ぎつくりして男は機械的に袂から香爐の蓋をとり出した。出したとき男は羞恥も頓着も無い、不明な、むしろ嫌厭するやうな顔をして、

「見たつてしやうがないぢやないか。下らない。」

さう言ひ棄てると、女はいきなり長い蛇のやうな白い手をぬらぬらと這はせるやうに、布團のあひだから引きずり出した。そしてその香爐の蓋を手にとると、これも又突然に殆ど奇聲ともいふべき高い猿のやうな叫びごゑを立てた。が直ぐどうなるかと思ふくらゐ發作的にわなわなと縁へ出した。つぎの瞬間には崩れるやうにげらげら笑ひ出して

「あゝ、おかしい。あゝ、可笑しい。」

と、そこらぢうを轉がりはじめた。白い馬鈴薯のやうな細いからだが、氣狂ひのやうに筋ばつて這つてあるいたのであつた。

「馬鹿。」

男はかう怒鳴ると、ころがつてゐたからだが、坂の下にでも行きついたやうにぴつたりと停つた。それと同時にこんどはゆるゆると顏を擡げはじめた。その顏は汗と熱とに濕つて眞青であつた。いちめんにぐらぐらと煮え立つたやうなところもあつた。眼と眉と鼻とが呼吸をそろへて喧嘩でもしてゐるやうに、各々別々な形と光と憤怒とに揉みあげられ、男のかほを目がけて烈しい速力で擊ろ叩きつけられたのであつた。

さうかと思ふと分のわからない響音のやうな調子で叫び出して、此處らぢう搔き掴むやうながりがりした音を立てた。男の動悸は極度の不安と激しい亂打とに湧き立つた。「ひよつとすると氣がふれたかも知れない。あの眼はただごとではないぞ。ひよつとするとだ。だが既う疾くに狂れてしまつた後の瞬間かも知れないのだ。」さう思つて

「落ちついたらいいぜ。なんだそのだらしのない恰好は……ぢつと落ちついて……ぢつと動かないでゐるんだ。」

なだめるやうに慌てて低いこゑで言ふと、女はさつと目も鼻も一時に死んだやうな靜謐さに返つたが、また、ぐらぐらとその澄んだ靜かな表情をいきなり叩きこはしてしまつて、目は火のやうな炎を吐きながら正面に男にすゑ込んだ。

「も一度言つてごらんなさい。何ですて。しかし一體これは何です。何んです。ああ、これは何んです。」

と又びつたりと香爐の蓋を手にとつて今にもそれに齧み附くやうに、ぎりぎりと恐ろしい齒がみを仕だした。男はそれを見てゐるうちにすつかり頭に不思議な恐怖と超自然的な威嚇とが乘りうつつて、ひとりでに胸が鳴り出し、輕い眩

惑さへかんじ出した。

「これが一體何んです。」

かうまた新しく叫び出してむつくりと起きあがつて、その生白い首を据ゑたかとおもふと、いきなり壁のところに香爐の盞をちから一杯に叩きつけた。古い陶器は白い肌をあらはして微塵に碎け散つた。

「やつたな。……。」

男がおもはずかう叫び返したとき女は何やら昂奮以上の昂奮で又叫び出したが、間もなくげらげら笑ひ出して

「あゝ、おかしい。おかしい。」

さう言ひて又轉がり初めた。が、そのときその轉がり方は弱々しく力なく、間もなく車の輪のやすむやうにぱつたり停つたかと思ふと

「あゝ……。」

と欠伸のやうな氣のぬけた聲を立てて、ぱつたりと平つたくつツ伏してしまつた。蒼白い顏がぐんにやりと潰れたやうに古い疊に減り込んで、瞳がどんよりと開けられきり動かなかつた。



厭離

徳田秋聲

一

陽吉はその頃、田舍の町で關係した或女に夢中になつてゐた。彼は自分の職業に必要な機械や何かを買入れるために、寧ろそれを口實に上京したときも、やはり其の女と一緒であつた。

勿論その女には、古くから彼女の世話をしてゐる男が外に一人あつた。で、その女を東京へ連出すについても、町の停車場で私と落合つて一驛二驛のあひだは別の客車に名々の座席を取らなければならないほど窮屈な思ひをしたのであつた。勿論そんな種類の女を挈帶することは、町に於ける紳士階級の彼の地位としては、餘り外聞の好いことでもなかつた。彼女はちよつとした動機から、今は町で酒客の機嫌を取るやうな種類の境遇にゐた。

衣子の話によると、彼女の家が以前横濱にあつた時分、生糸の仲買ひのやうなものをやつてゐたのであつたが、父が商賣に失敗してから、同じ横濱で、商賣上の失敗の挽回されるまでのつもりで、彼女はそんな社會へ足を入れることになつたのであつた。

しかし土地では知つた顏があつたり、餘り賣れもしなかつたところから、前橋、甲府などゝいふ風に、夫からそれへと短い月日のあひだに方々轉々して歩いたのであつた。今彼女が比較的長く落着いてゐるところは、陽吉の村から一里ばかりのところにある可也殷賑な一つの町であつたが、そこでは都會風の女が鮮かつたのと、彼女の座敷ぶりがいくらか巧くなつて來たのとで、是迄のやうに不幸ではなかつた。

陽吉がこの女を知つたのは、彼の兄の喜久男が上州と越後境に脈を引いてゐる或滿俺鑛の鑛山に取かゝつてゐて、その用事で時々出徊いた途中、弟の養家先を訪問した時、資金の融通の事か何かの話をかねて、久振で町で酒を飲んだときらしかつた。喜久男はその頃仕事の規模が小いながらにも財界の煽りを喰つて、ひどく苦しい境遇に陥ちてゐた。勿論鑛石を採掘するだけの資力は彼になかつた。たゞぼろ鑛山を安く手に入れて、それに幾許かの資本をかけなどして、資本家を見つけてブローカアや何かの手で其を賣りつけて、その間で好い汁を吸ふのが、彼のこの頃の餘儀ない生活であつた。最近彼は東北の方で二三年金をかけて來た小さい一つの山を賣つて、五六萬圓の金に有りつくことができたが、長い間の遣繰の結果として、負債や何かを差引いて、手についたのは其の半額くらゐの金しかなかつた。それでも彼は苦しみ通して來た今までの境界に比べると、その山を好い機會に手放したために、どのくらゐ助かつたか知れなかつた。のみならず彼は一時に小成金にさへなることが出來た。彼は自分のためにも妻のためにも、高貴な衣裳や裝飾品を澤山買つて、身のまはりをぴか〳〵させてゐた。ダイヤやプラチナムが何でもないものゝやうに、ちよつと近所の寄席へなど行くにも、彼や妻の帶や腕に氣味わるく光つてゐた。彼も妻も別にこれといふ趣味もなかつたので、遊ぶことゝいへば淺草の活動を見るか、江の島へでも行つて札びらを切るかするより外爲方がなかつたが、一緒になつてからもう四年にもなるのに、子供の一人をも産むことのできない彼の妻は、彼の仕事の性質をよく知つてゐるので、今のうちに出

來るだけ瀟洒な衣裳をでも作つておくのが、一番俐巧な爲方だとでも思つたやうに、近所の銀行へあづけてあつた金を引出しては、欲しいものをそれからそれへと無闇に買込んだ。勿論喜久男は拔目なく第二の幸運を掴むために、鐵などを買込んで、倉庫にあづけておいたりなどしたが、同時にどこからか女をつれて來て、竊と近所に圍つておいたりした。新設の會社の株式でもあつた。

陽吉はその頃ちよつと東京へ出たついでに、平生餘り往來もしなかつた芝の兄の家を訪問して、二三日そこに足を止めたことがあつたが、家が何だかだゝくさしてゐた。すばらしい姿見があつたり、贅澤な座布團が積んであつたりした。床には大家の新畫がかゝつてゐて、其下に置物の新しい美術品などがあつた。で、何事にも極度に拗けた風の嫂は、花を習ひはじめたと言つて、美事な薄端と筒に派手に生けた花を二杯も飾つてゐた。總ての生活が一變してゐるのに驚かされた陽吉は、兄にはやつぱり金儲けの腕があつたのだと云ふ氣がした。

「しかし儲けたからといつて、浮つ調子になつては可けないだらうね。それを資本に何か堅い商賣をやつては何うだね。」陽吉はさう言つて兄に注告した。

それに陽吉は、兄の健康も氣にかけないではゐられなかつた。彼は長いあひだ、金に有りつかう〳〵として血眼になつて東奔西走して來た結果として、まだ漸と三十三四にしかならないのに、可也更けてみえた。纖細な體も瘦せてゐたし、血色も好くはなかつた。生れつきの搾狹のほかこれといふ病氣はなかつたけれど、不規則な忙々した生活に疲れたと云ふ風が、あり〳〵見えた。

「堅いにも柔かいにも、金儲なんてものはさうさらに有るもんぢやないんだからな。勿論我々のは本來何にもないんだから、こゝくでも立廻らなけあ、汁も甘い汁は吸へつこはないんで、どう世惡錢だから身につかう譯もないのさ。しか

し十萬もできたらこんな事は止めたいと思つてゐる。生爪剝して山へかけ登るのも厭になつたから。」喜久男はさう言つて、子供のときからの持前の、酸つぱいやうな顏の顰め方で笑つてゐた。

滿俺の山にかゝつた時分には、喜久男はもう大分弱つてゐた。買込んでおいた鐵が遽に暴落したりなどしたために、彼は何千圓といふ倉庫賃の支拂ひにさへ差閊へるやうになつてゐた。そして其と同時に、引かゝつてゐた女と妻とのなかに葛藤が生じたりなどして、別れるとか別れないとか云ふ問題で可也頭腦を惱ましてゐた。で、陽吉の養家を訪問したときの兄の洋服には、もうプラチナムの鎖もダイヤのメタルも影を見ることすら出來なかつた。

陽吉が三千圓ばかりの金の融通を、喜久男に賴まれたのは其時であつた。

二

陽吉が女に別れて、芝の兄の家を訪ねたとき、兄は留守であつた。

陽吉は若し出來ることなら、女と一緒にどこか出端の好いところで宿を取りたかつたので、再三その事で女と協議してみたのであつたが、女の事情がそれを許さなかつた。

「あの人ほんとうに嫉妬淡なの。そして私が家へ行くと言つたら、自分も後から行くと言つてゐたから、家にゐないとまづいわ。」衣子はさう言つて拒んだ。

衣子が今の其の旦那を、さう好いてゐないことは、陽吉にもほゞ推定された。その旦那が農家出の無智な商人であることが、ちよつと文藝書類などを讀みかじつてゐて、芝居とか映畫とかに趣味があると信じてゐる彼女には飽足りなく思はれた。彼は町の兵營へ雜貨を賣込んだり、種苗を取扱つたりなどするやうな種類の商人であつた。年はまだ若かつ

たが妻も子供もあつた。若いといつても、陽吉に比べれば七八つも上ではあつたが……、で、衣子自身は二年も横濱の女學校にゐて、女學生氣質がいくらか遺つてゐるところから、若し巧く行つて其の旦那に落籍されて、彼のお神さんになつたところで、決して榮えた事ではないと考へてゐた。町はづれの兵營に近い新開地に彼の家があつた。そして其處に農夫とも商人ともつかないやうな惱ましい家庭を、彼の妻は二人の汚ない子供と一緒に守つてゐた。勿論彼としては衣子さへ承諾すれば、今にも妻子を振拂つてしまふくらゐの事は何でもないらしく思はれた。彼はもう大分の金を衣子のために使ひ込んでゐた。商賣の資本の融通にも困るほどの無理をしてまで、衣子に入揚げて來た。それだけに又衣子に對する彼の執着も深かつた。好い加減に衣子の方から、うまく逃げるより外爲方があるまいと、衣子の抱主や行きつけの料理屋の女將たちは、陰で氣を揉んでゐた。衣子自身も先を考へると、可恐しいやうな不安に襲はれた。そして隙があつたら逃を打たうと考へながらも、そんな態度を見せれば見せるほど、血眼になつて來る男の逆上方が怕かつた。

陽吉には、其の事情が諒解されてゐたが、彼女を全部所有することのできないのが焦しくて爲方がなかつた。何故もつと勇氣を出して其の男と切れてしまはないかと齒痒くてならなかつた。彼女に堅い決心さへあれば、總ての責任は自分で當然背負つていゝ筈なのに、衣子にその覺悟がなかつた。勿論彼女を家へ入れる段になると、彼の身邊にも相當の困難はあつた。

汽車のなかでも、陽吉はその事について時々衣子を勵し勇氣づけたが、衣子は憂鬱な顔をして、辯解するだけであつた。事によつたら、東京で彼女を巧く隱してしまはうといふ劃策さへ彼は持つてゐるのであつた。そして其にはそんな事に經驗のある兄の力を假りることも必要だし、策源地若しくは隱匿所として芝の家を擇ぶことも、適切な方法だと考へ

られた。そして其となく女にその事を說勸めたのであつたが、衣子は躊躇がちであつた。そのうへ然うした惡巧めいた手に乘るのは、おそろしい事のやうにさへ思はれたらしく、不快な表情をすら見せて、拒むのであつた。

年の若い陽吉は女のおかれた位置――女の然うした背景にひど〱興味を感じてゐたと同時に女の暗い心理に憐愍と不滿と猜疑とを感じた。でまた其到著點を早く明かに知りたいやうな焦燥を感じながら、いつとはなし女に惑溺してゐた。

陽吉は兆の家へ來ても、少しも心の落著を見出せなかつたが、兄のゐない事は却つていくらか彼の氣分を寬がせたことは爭へなかつた。

嫂――組子の話によると、喜久男は山のとで福島の方へ行つてゐるといふのであつた。「今度は何の山です。」陽吉は零落の影の何處となく漾つてゐる部屋のなかを見廻しながら訊ねた。でも、まださう暑くもないのに煽風器などが用意され、蓄音器も床の間にあつた。家のなかゞ何となく夏らしい樂しさに充されてゐた。何んなに困つても、外で何んな惡あがきをするにしても、住居だけはやつぱり愉快にしておくだけの用意があるのだらうと想像された。かうした都會人の生活が、陽吉には不思議に思はれた。勿論彼は長く東京にゐたけれど、家庭にはゐなかつた。彼の知つてゐるのは、たゞ山間の森のなかに營まれる慘めな白姓家の生活だけであつた。

「今度は違ひますの。」組子は帶など締直しながら出て來て、更めて挨拶した。

彼女は二十六であつたが、見かけはそれよりも若く、皮膚の白い柔軟かな肉體と、齒並の細かい脣の薄い口元と、切の長い目とが、顏の總ての缺點を蔽隱してゐた。何處でこんな女を見つけて來たか、また何んな出生の女で彼女があるかを、陽吉は一向知らなかつたが、越後の產だといふことは判つてゐた。それにしては彼女の目は南の方の女らし　柔かい情味が有すぎると思つた。

紐子の話によると、今度は喜久男は金主を見つけて東北の山林を物にしやうと云ふらしかつたが、其の山の所有權がひどく交錯した事情になつてゐるので、效果があがるか何うかゞ疑はれた。そんな不確實なものに、何故手を出すのかと陽吉は危んだ。

「あの人のすることは、皆な危い綱を渡るやうな事ばかりなんですもの。」紐子はちよつと顏を紅くして淋しげに笑つたが、「でも今のうちは爲方がないんですて。四十になるまで苦しむんださうです。」

「健康はどうですか。」

「この頃はまあ好い方なんです。」

「しかし何だ彼だと言つても、兄貴は氣樂ですよ。外に責任がないから。」陽吉は笑ひながら言つた。

「この上責任があつたら大變ですわ。さうでなくてさへ左右女に引かゝり易いんですから。」紐子はまた紅い顏をして、口をむづ／＼させてゐた。

「全盛時代に引かゝつてゐた女は何うしましたか。まだ關係してゐますか。」陽吉は興味ありげに訊いた。

「いゝえ、あれはもう悉皆切れてしまひました。」

「兄貴の方から……？」

「どつちからですかね。」紐子は咽喉をくすぐるやうな笑方をして、「まあ私が話をつけたやうなものでせうね。」

紐子の話によると、その女に一番熱中してゐたのは、彼の成金の夢がやゝ醒めかゝつた頃のことで、今度は越後へ行くとか、今度は東北へ行くとか言つては家をあけがちであつた。紐子の腕輪だの指環だのが、時々金の融通につかはれるといふ口實の下に、紐子の手から其の女の手の方へ運ばれて行つたりした。

「ちよつとあれを貸してくれないかと言ふものですから、私あの人の仕事の性質をよく呑込んでゐますから、こんな時の融通だと思つて、綺麗に持たせてやるんですよ。だけど、それが何うもへなんですの。」紐子は笑ひたがら格別それを重大問題とも思つてゐないやうな風で話した。

喜久男がその女を田舎からつれて來て、停車場近くの宿屋においてゐた時も、紐子は一度それと感づいて踏込んで行つたことがあつたが、それ以來別れたことになつてゐる女との關係が、容易に切れなかつた。寧ろ深入りして來た。そして近所に部屋借りをさせてあることが判明してから、紐子に對する彼の態度が、一轉しておそろしく大膽になつて來た。ひどく不人情にさへなつて來た。紐子はその女を家へ入れることに餘儀なく同意しない譯にいかなかつた。さうしなければ、彼女は彼と別れるより外なかつた。

「何しろそれが脈なら、別れろと言ふんですからね。」紐子は目を潤ませながら話した。

「それで私もその時餘程別れやうかと思つたんですけれど、あの人の運が傾きかけた時だつたものですから、何うしてもそれが出來ませんでした。」

女と一緒にゐるあひだも、彼女は決して幸福ではなかつた。女は威張つてゐた。朝は寢坊をして、夜はおそくまで喜久男と甘い話に耽つてゐた。喜久男は出來るだけ女の歡心を買ふことに骨を折つた。紐子の着物が誰の所有かわからなくなつた。紐子は涙を呑みながら、侮蔑を忍ばうと努力した。しかし負けてはゐなかつた。「出るやうにさへして下されば、いつでも出ますわ。」紐子はさう云ふ風に言つて、强ひて平氣らしく笑つてゐた。

「女だつて可哀さうなんですわ。あの人にすつかり瞞されて來たんですから。弱い點からいへば、私よりかずつと弱いんですわ。だから、私も女には好くしてやつたつもりなの。それにまだ年が若いんですもの。」

今まで組子はそんな打釋けた話を、陽吉に爲たことは一度もなかつた。彼女の心はまだ動搖から全く落着いてはゐないらしかつた。自分は勿論その女に對する喜久男の心持を不快に不安に思ふ心の悩みが、まだ消えなかつた。

陽吉は夜汽車で疲れた頭腦を、可也興奮させながら、組子の話に興味を惹かれた。組子の兄に對する侮蔑を寧ろ當然だとも考へ、痛快にも感じた。今まで眞の表面の事ばかりしか話し合ふ機會のなかつた彼女の性格に幾分觸れ得たやうな愉快をすら感じた。

「それで結局何うしたんです。」陽吉は組子を理解したらしい調子で訊ねた。

「そんな風で毎日々々睨めつくらをしてゐたつて爲方がないでせう。それに私といふものが、その女にも解つて來たものですから、氣の毒だと云ふ氣にもなつたんでせう。宅のゐない留守なぞに、仲好くお茶を呑みながら、お互ひに愚痴話をするといつた風なんです。それで終ひに女優になるなんて言出したんですけれど、そんな素養もないし、手蔓もなかつたものですから、到頭藝者になつてしまつたんですの。それにも隨分お金をつかひましたわ。お座敷着や何か、あれでも六七百圓もかけたでせう。宅が三越へ行つて見立てたり何かして、それあ大變でしたわ。」

そして其の女は喜久男の家から、芝浦の方へ毎晩々々俥で出かけて行つて、夜おそく又俥で歸つて來た。勿論喜久男はさうした打算的な遣方で、女を稼がせることに寧ろ何の苦痛も感じなかつた。

勿論それと同時に、女の心が喜久男から離れやうとする時期が速かに來つゝあつた。そして終ひに別れ話にまで進んで來た。女よりも寧ろ女にかけた物質の方に執着をもつた喜久男も、それを何うすることも出來なかつた。彼女の叔父だといふ職人風の男が、話をつけに來た。そして組子が、喜久男の厭がるのを、強ひて自分で出て、すつかりその男と問題を解決してしまつた。言ふまでもなく、組子は良人と反對に――寧ろ喜久男がはら[illegible]するほどに、總ての物質

默を離れてかゝつた。何もかも惜しげもなくくれてしまつた。

「先の男は感服してゐましたわ。私の度胸の好いのに。」組子は矜と羞恥との混交になつたやうな興奮した表情で言つて、自嘲的に淋しく微笑した。

「ふむ、さうですか。」陽吉は潤ひ耀く嫂の目を凝視めながら、應答をしてゐたが、ちよつと含羞んだやうに、目を伏せた。

「それあ一寸普通の女にや出來ない離れ業でしたね。」陽吉はさうも言つて笑つた。

「さうでもしてやらなければ、其の女だつて可哀さうですものね。」組子は目に涙を入染ませながら、「でも、何といつたつて私が一番割が悪いの。お金のあるときは、外で女を拵へられて、おとなしくなる時が、零落れた時なんですから。」

「それきり兄は女に逢ひませんか。」

「行つたつて逢やしません。この間も、未練があるものだから、その叔父さんの家を訪ねて行つて女を呼出したんですけれど、叔父さんの見張なしには逢はなかつたさうです。私に濟まないからつて……それあ誰にしたつてね、義理と人情はもつてゐますからね。宅ではまた時計や指環が惜しくてならないんですの。」

二人は顏を見合つて笑つた。

陽吉はその午後、洗湯へ行つてから、疲れを休めるために少し横になつてゐたが、長くも寢てゐなかつた。そして日の少しかげり始めた頃に、器械屋へ行くと言つてふらりと家を出た。

彼はその晩女をつれ出して、淺草へ遊びに行つた。

三

然し陽吉はその晩も餘り充實した氣分では別れることが出來なかつた。

淺草にある彼女の家では、父が何をしてゐるか判らなかつたが、何處かへ勤めてゐることだけは想像された。家には今一人小い女の子があつて、其の上の弟は奉公に出てゐると云ふ話であつたが、彼女は陽吉を母親などに逢はせることや、家を見せることを厭がつた。で、そんなやうな詰らない見えを、彼女は今でも陽吉に持つてゐた。陽吉は近所のカフエで少時間を移して、彼女の支度のできるのを待つてゐなければならなかつたが、女のさうした氣持は理解された。で、外で待されてゐる自分を馬鹿々々しくも腹立しくも思ひながら、やつぱり女を憐れんだ。淺草では歌劇へ入つてみたが長く見てゐられなかつたので、彼はぷり〳〵して更に活動へ入つた。そして歸りに鳥屋で御飯を食べた。

「どうだね、これから芝の方へやつて來ないかね。」陽吉は勸めてみた。

衣子は束髪に結つて、水玉模様の絽お召の單衣など着てゐたが、かうして廣場へつれ出してみると、どことなし間がぬけてゐるやうに思はれた。その上、芝の嫂などに比べると、表情に何の生彩もないことに氣がついた。勿論組子とても、ぱつとした顔ではなかつたし、いつも取止のない話ばかりして、様子にも東京育ちのやうなきり〳〵としたところはなかつたが、今日の話を聽いてから、彼女がさう檢束がない女でなかつたことが明かにされたやうに思へた。そして其に比べると、何かにつけて氣持の暗い、感じの鈍い衣子を相手にしてゐるのは、何だか張合のない仕事のやうに思へた。

「え、行つても可ござんすけれど、私貴方の兄さんの奥さんにお目にかゝるのは厭だわ。」衣子はちよつと美人に成損ねたとでも言ひさうな、或程度の安價な美しさを持つた顔に、やゝ氣取つたやうな嬌羞を浮べながら、甘へるやうに媚へ

た。

「しかし己と係ういふ關係を續けてゐる以上は、何うせ一度は顏を合さなけあならん人ぢやないか。」陽吉は悟かしさうに言つた。

「それあ然うね。」女は素直に頷いた。

「嫂は、それに可也物のわかつてゐる女だよ。思つたより苦勞してゐるよ。」

そして陽吉は兄と女と別れさした話の一端を話しだした。

「ぢや、それほど兄さんを思つていらつしやるんだわね。」衣子はそんな事を言つた。

「思つてゐるだらうが、また反感も持つてゐるんだ。そして其は彼の女としては、當然だよ。お前のやうに、たゞ盲目的に見込もない男に引摺られて、愚圖々々してゐるのと、少し譯がちがひはしないか。」陽吉は少し興奮した調子で言つた。

「何うして！」女は驚いたやうに、彼の顏を見た。

陽吉は何とも應へなかつた。說明するには少し面倒だと思はれた。

「何うしてさ。私そんな馬鹿？」衣子は不滿さうに言つた。

陽吉は紅い顏をして、たゞ笑つてゐた。

「だけれど貴方の思ふやうに、さうは出來ないことよ。私だつて餘り薄情な眞似はしたくないでせう。そのうちにはあの人もお金の工面に行詰つてくるでせうから、然うしたら自然切れる時期があるに決つてゐるんですもの。」

「けれど然うなれば、尙附絡つてくるぢやないか。それにあの男は、餘り評判の好い方でもないといふ話だから、お前

の態度次第では、自暴になつて何をするか解りやしない。今だつて然ういふ形迹は十分あると言ふ話だからね。」
「だから私こわいのよ。刄物でも振廻はされちや大變だからさ。」衣子はしたたか顔を顰めて見せた。そして、少し緊張した表情になりながら、
「どうしたつて、そこは人情でもつて巧く話をつけるより外ないんだわ。怨みのかゝらないやうに。」
「それには今がちやうど好い時機ぢやないか。」
「え、だけど駄目よ。貴方のことを薄々感づいてゐるから。今度だつて何しに東京へ行くつて、ひどく氣にしたのよ。私お父さんの商賣上のことで、少し纏まつたお金がいると言つて來たから、その相談かたがた家へ行くんですつて、さう言つて少し匂はしておいたにやおいたんですのよ。」
「お前も拔目がないね。さしたら何と言つてゐた。」
「そんなことなら、後から己も行つて相談しやうなんて言つてましたけれど、どうせ纏まつたお金の出來つこはありやしないのよ。この頃大分苦しくなつてゐることは、私も知つてゐますから。」
陽吉の氣持が惱ましくなつて來た。
「だけれど、事實そんな金の必要があるのかね。」
女は暗い目をして默つてゐた。まるきり其は男を凹ませる爲の口實のやうにも思へたし、陽吉には言ひにくゝても、實際そんな事情があるやうにも考へられた。
「そんな相談に、お前が乘つてやる必要はないぢやないか。一度酷い目にあはされて、義務はすんでゐるんだから。」
「お父さんの方ですか」と、衣子は上目使ひで彼を見た。

「さうさ。」
「それあそんな必要も、實はあるんですけれど……。」
「どの位の額なんだ。」
「少し大きいんですわ。」
「五百とか六百とか……。」
「え、まあ其のくらゐもあればね。」女は何となし自嘲的に笑つたが、それでは迚も足りないと云ふ意味にもとれた。
「ぢや一體いくらいるんだらう。」
女は默つてゐた。
陽吉はこれまで餘り女に金を貽つたことはなかつた。勿論ちび〳〵した小遣は時々やつてゐたが、女は欲しがりもしなかつた。いづれ戴くときには戴きますからと言つた風で、いつも笑つてゐた。陽吉にはそれが彼女を酷く金には綺麗な女のやうに思はせた。勿論本質的にそんな處のあることも事實であつた。
「次第によつては、己も出さんことはないが、共と同時に綺麗にお前の體の處置をつけるんでなくちやな。」陽吉は呟くやうに言つてゐた。
女はたゞ苦笑してゐた。
「ほんとうに其の金がいるのか。」
「いるにやいるんですけれどね」と、衣子は困惑のこなしで、「だけど貴方に心配していたゞく氣はないのよ。」
「いや、そんなことはないさ。いくら養子の身でも、五百や千圓くらゐの金なら、何うにかならんこともないんだから

ね。」

そして彼は兄に用立てゝある、千圓の金のことを考へてゐた。言ふまでもなく彼は厭でもその金の催促を兄にしてみなければならなかつた。彼は養母へ秘密で、銀行からそれだけの金を一時借入れたのであつた。さうでなくてさへ、彼は衣子と逢ふための費用などの工面をするのが、餘り樂でなかつた。銀行は彼——寧ろ彼の養家に信用をおいてゐたので、期限が來たところで、別に督促もしなかつたが、そんな事は養母の耳へ入れたくはなかつた。入れゝば急度問題になるだらうと想像された。勿論彼には養家から二ケ村ばかり隔つた實家に、おとなしく農業に從事してゐる兄や父母をもつてゐたし、他へ片著いてゐる妹もあつたが、それらは皆窃かに彼を頼りにしてゐるやうな哀れな人達ばかりであつた。で、母や兄の意嚮で、最後の一年半ばかりの學資を出してもらつて、今の養家を相續することになつたのであつたが、さうした山間の僻村へ引込むことは、長いあひだ學生生活を續けて、都會の空氣を吸つて來た彼には、此上もない窮屈であつた。彼は今少し醫學の研究に沒頭したいと希つてゐた。そして洋行ができないとしても、切めて博士論文くらゐは書きたいと考へてゐた。その頃の陽吉は、學問に對して、今よりも遙かに敬虔な感情と、熱心な欲望とを抱いてゐた。しかし其は養家の事情や、親類たちが許さなかつた。

今でも彼は全く自分の運命に服從する氣にはなれなかつた。そして友人の消息などを聞くと、消えかゝつた彼の大望が不意に刺戟されて、百姓たちの硬い汚い手ばかりを取つてゐる毎日々々の自分の仕事が、堪らないほど倦怠なものに思はれた。それに村では何處を擲いても、話相手になるやうな者がなかつた。陰鬱な森の蔭にある大きな家も、彼に取つては息苦しい牢獄に過ぎなかつた。荒寥たる高原の平野が、彼の門前に果しもなく續いてゐた。そして其が冬になると、一面の雪に裹まれた。どこを見ても青いもの一つ見ることが出來なかつた。生きてゐるものは、門を流れる小川だ

けであつた。彼は流刑にでも逢つたやうな、遣瀬ない寂寥と孤獨感に襲はれた。時には其の深い寂しさの底に横はつてゐる大きな自然の凄さを、陽吉は敏捷な恐怖の目を以て眺めることが出來たが、長い生涯を、この自然と偕に親しむことは、寧ろ堪へがたい苦痛だと思はれた。

陽吉の心は、自然に懐かしい町の明りを慕つて行つた。迚も東京とは比べられなかつたにしても、そこには幾箇かの劇場や映畫場があつた。球突場もあつた。料理屋や待合のやうなものもあつた。町の中心を流れる川沿ひの柳の集落を洩れる電燈の下には、白粉を塗つた、女の媚かしい姿や、浮いた笑聲や、燥いだ糸の音などがあつた。陽吉はそれらの安價な卑しい享樂を蔑視みながらも、いつとなし其の世界へ入つてゐた。そして其處にはまた田舍の町相應の興味のあることを感じた。町の同業者などゝ、彼は時々酒を飲んだ。そして遊ぶことに慣らされた。女たちの特異性が段々彼の目に分明して來た。今までは田舍の女だと云ふ一つきりの色にしか見えなかつたものゝうちに、彼は彼としての識別をもつやうになつて來た。

陽吉はその幾人目かに、現在の衣子を發見したのであつた。そして今のやうな關係――と言つても、彼としては其生温さにたへられないやうな女の氣分ではあつたが――に陷つたのであつたが、それと同時に、そこへ引込んだ當初から、養母たちが氣を揉んでゐる結婚談が、絕えず彼の耳へ入つて來た。彼は時々それに耳を傾けたが、どれも此も自分の氣に入りさうにもなかつた。田舍の女學校出などは、迚も話せないと云ふ氣がしてゐた。で、機會が熟したら、衣子の話を養母の前に持出してみやうかなどゝも考へたが、女自身の氣持がまだ分明判らないのが、牾かしかつた。勿論自分の主張が通るか否かについては、彼にも深い自信はなかつた。で、彼はそれを悲觀したが、女の氣持がそこまで深入りして來てくれさへすれば、彼の氣分の問題は到着點を見出す譯であつた。

差當つての問題は、衣子の仄めかした、金のことであつたが、彼女は別にそれを彼に要求しはしなかつた。陽吉にはその心配をしてやるのが、今までの關係上當然のことのやうに思へたが、しかし其と同時に女の決心が知りたかつた。彼は彼女を家へ入れるときのことを空想に描いてゐた。女が養母と息を合はして行けるか何うか。それよりも養母や薬局や下婢共を、巧く操縱して行けるか何うか。陽氣な浮いた境界を離れて、あの陰鬱な家に居つけるか何うか。村民たちに侮蔑されることなしに、醫師の夫人としての品位と人望を保つて行けるか否か。そして然うするには、少くとも一年や二年は、東京で眞面目な學校生活をさせるか、どこか確乎した嚴粛な家庭へ預けるかしなければならないと思はれた。

陽吉はそれらの話もしやうと思つたが、頭腦の暗い彼女に、一時にそれを言つて聞かせても、結果は彼女を畏縮させるばかりだと思はれた。

で、彼はいゝ加減に切揚げて、そこを出た。そして双方家への土產などを買つて、廣小路で別れた。彼はいくらか不機嫌であつたが、近いうち芝居へ行くことだけは、嫂の組子を同伴すると云ふ條件で約束させられた。

女はいそ〱と明い電車のなかへ入つて行つた。

「ちよつ、爲様がない。」陽吉は苦笑しながら、そこを離た。

四

陽吉はその後衣子のことを組子に話して、何う思ふかと言つて、彼女の意見を求めた。組子はそれについて可否を言はなかつたが、一度逢つてみてもいゝといふ事だつた。勿論陽吉は嫂の批判にさう大して重きをおく譯ではなかつたけ

れど一人でも彼女を認めてくれるものがあれば、幾分か心強いだらうと思つた。それに衣子を東京におくとなれば、その監視をしてくれるものは當然綫でなければならなかつた。若し然うなれば其の事も引受けても可いと、組子は言つて居た。陽吉は兄夫婦の不眞面目な生活について、餘り好い感じをもつてゐなかつた。そして衣子を東京におくにしても、彼女には彼女としての自信と批判を持たせなければならないとは思つてゐた。

衣子の要求で芝居など見てから二三日たつて、或日衣子が頭髮をハイカラに結つて訪ねて來た。組子は何だか家を見透かされるのを怖れでもするやうに、直ぐ二階へ上げたが、暫くして陽吉の註文した水菓子などもつて上つて行くと、彼女は陽吉と差向ひに餉臺の前に坐つて、團扇を使つてゐた。

「東京はお暑いんですね」など、衣子は組子にお愛相を言つて、細い小指で目尻にかゝつた毛を掻揚げた。

「え、家は殊に暑いんですよ。」組子は伏目になつた彼女の様子をぢろ〱見ながら、「いかゞです、帶でもお取りになつては。」

銀糸で刺繍した絽織の帶の波に、帶留の翡翠の魚が涼しさうに泳いでゐた。

「お前の家の方が、もつと暑いだらう。あすこは暑さうだ。」陽吉は言つた。

「あなた東京にお家があるんですね、結構ですわ。」

「お前たちのやうに旅から旅をあるいてると、家があつても家のやうな感じはしないだらう。」陽吉は皮肉のやうに言つた。

「え、まあ然うですね。」女は苦笑した。

「どうせ娘を賣るやうな親だから、愛情もないだらうし……」と、陽吉はつけ〱言つて、「何うだね、この家へ來てゐ

ては。こゝは兄貴は始終旅行してゐるし、姉さん一人だから至つて氣樂だよ。」

「さうなすつた方がいゝかも知れませんわね。私も至つて介意はない方ですから、ちつとも遠慮なんか入りませんわ。」組子も言つた。

衣子は輕い困惑の表情を浮べて、微笑してゐた。

「さうしなさい。こゝは此のとほり二階もあいてるんだから。己は最初からさう言つてるぢやないか。」

「え……」と、衣子は一重目縁の涼しい目元に、ちよつと剽輕らしい微笑を見せて、「いづれ能く考へまして。」

「考へることも何もないぢやないか。」陽吉はバナナの皮を剝きながら、「實際つまらない事だよ。お前は種屋のことを心配してるんだらうけれど、種屋なぞ何うでも可いぢやないか。」

衣子は紅くなつた。その上少し艴然となつた。

「種屋つて何です。」組子が不思議さうに二人の顔を見比べた。

「衣子の旦那のことです。何にどうせ見込はないんです。それを義理だの人情だのと言つて、ごたすた返してゐるんです。」

「だつて爲方がないぢやありませんか。今迄の行懸上、ぱつたり止すといふ譯にいかないんですもの。」衣子も少し高い調子を出したが、氣が差したやうに急に默つてしまつた。

「ぢや、その人と張合にでもなつてゐるんですか。」組子は訊いた。

「張合にも何にも、てんで問題にならないんです。」陽吉は鼻息を荒く喋つてゐた。

勿論それはこの間二人が芝居に行つた時からの聯續だらうとは、組子にも想像がついたが、何方に正當の理窟がある

のか、輕々しく口が出せないといふ風であつた。

「お客商賣をしてゐると、色々な氣苦勞があるでせうね。それは何うしたつてね。表面は呑氣のやうに見えたつてもね。」組子は女を加護ふやうな口調で言つた。

「何に、これが意氣地がないんです。決斷力がないから駄目なんです。」

そして彼は失望的な溜息をついた。

衣子は泣面をかきさうな顏をして、目に涙をためてゐた。

「來る早々から、さう頭ごなしにがみ〳〵言つたつて駄目よ、陽さん」と組子は今まで利いたこともない狎々しげな口の利き方をして、更に衣子の方へ「貴女だつて堪らないわね。」

衣子は困窘の色を浮べたが、しかし又どこか片意地のやうな平氣さで、默つてゐた。

「さあ何うです。お食んなさいよ」と、組子は水菓子の入つた伊萬里の丼を少し押出した。

「え、有難うございます。頂戴しますわ。」そして彼女は櫻實を摘んで、二つ三つ食べた。

「ビールでもお拔きいたしませうかね」と、組子は陽吉に謀るやうな調子で言つた。そして女にも「貴女も召食るんでせう。」

「いゝえ私澤山ですわ。」衣子はさう言つて窮屈さうにしてゐた。

「なあに、いくらでも飲む癖に」と、陽吉は苦笑した。そして「しかし晝間酒はいけない」と拒んだ。

「で、一體何ういふんです」と、組子は一膝乗出して來て、二人の顏を見た「その種屋さんが、夫婦にでもならうと言ふんですか。」

衣子が何か返辭をするかと、陽吉は其の顏を凝視めたが、彼女としては初めての人にさう氣輕に話せるやうな單純な事ではないらしかつた。で、また陽吉に責められるので、頭腦が幾分混亂してもゐた。彼女はたゞ陽吉を見て惱ましげに笑つたきりであつた。

「お前よく姉さんに其の事を話したら可いぢやないか。姉さんはそんな問題にかけては、お前なぞより何のくらゐ確りしてゐるか知れやしない。」

「わたし駄目だわ」と、組子は甘えるやうな調子で、ちよつと紅くなりながら、「私なんか、それあ迚も駄目ですけれど然ういふお話でしたら兄さんが好いかも知れませんよ。」

「ですけれど、別にそんなに難かしいお話でもないんですもの。人さまに中へ入つていたゞくやうなね。」衣子は陽吉の顏を見ながら、「それあ眞實にさうなのよ。あの人だつて是非夫婦にならうと言つてる譯ぢやないんですわ。無論私がさうして下さいつて言へば、然うするでせうけれど、私だつても、まさか女房子のある人とね……それこそ罪だわ。」

「ぢや何も心配することないぢやありませんか。陽さんが少し氣を揉みすぎるんでせう。」

衣子はにつと笑つた。

「馬鹿な!」陽吉はちよつと暗とした表情で、團扇の柄を弄りながら、「己はちつとも氣を揉んでなぞゐやしない。たゞ衣子の態度が曖昧だから……いつまで其の男にかゝつてゐても爲樣がないと思ふからさ。その男の問題に限らず、お前は一體ちと生溫すぎるよ。態度が不鮮明だよ。つまり頭腦が暗いんだ。もつと自分といふものについて、明白に眞面目に考へなけあ可かんよ。たとへば親のことにしてもだ、一度救つてやれば其で澤山ぢやないか。親が困るから可哀さうだと言つて、言ひなり放題に二度も三度も大切な體を賣るなんて、今時そんな無自覺な奴はありやしないぢやないか。然

うい ふ不意見な親がついてゐたんぢや、いくらお前を救はうと思つたからつて駄目な話さ。勿論それは金の問題ぢやない。金は何うにかなるとしたところで、お前自身が自覺しなければ、何時迄たつても不幸だよ。お前たちは、何か綺麗な着物でも着て、醉狂を相手にその日〳〵を面白可笑しく、浮か〳〵暮してゐれば、それが幸福だと思つてゐるんだらうけれど、それは胡麻化しの生活に過ぎないんだよ。」

「まさかね」と、衣子は組子と顏を見合して、につこと笑つた。「そんなお說教聞かなくたつて、私解つてゐるわ。」

「それあ誰にしたつてね」と、組子も少し苛々したやうな表情で、「そんなこと言へば　私なんか隨分沈次のない生活を送つてゐますわ。これも爲方がないんです。兄さんがあゝいふ商賣でせう。女にかけても餘り檢束のある方ぢやないでせう。だから私が自分でいくら眞面目にならうと思つたつて、計畫の立てやうも方針の取りやうもないんですもの。私つく〴〵厭だと思ふことがありますわ」

「貴女はさうさ。」陽吉は惱ましげな目をして、「貴女は氣の毒です。僕も折があつたら、兄に言つてみやうと思つてゐます。何か安定な生活方針を立てるやうにね。」

「え、ほんとうに言つて下さい。」組子は熱心に言つた。

「然しあゝなつてしまふと、容易なことでは眞面目になれないだらうな。」

「え、さう言つてますわ、俸給生活なんか死んでも厭だつて……。だから、私何うかすると可怕いことがありますわ。ほんとに可怕いことがありますからね。」そして組子は暗い色を目に浮べた。

「どんな事をやるんです。」

「どんな事つて、別にさう大して惡いことぢやないんですけどもね……まあ惡いといへば惡いでせうね。價値のないも

のを、あるやうに見せかけて、人にお金を出させるんだから。」

「だけど、それあ……」と、陽吉は打消さうとしたが、急に不安な目色になつて、「それはさうと、上州の滿俺鑛の山は何うなつたですか。」

「あれはあれきり……何時の事にか……。言はゞ抵當流れのやうなもんですわ。勿論惜しくもない山だと言つてましたから。」

「ぢや駄目か」と、陽吉は空虚な笑聲を出した。

勿論彼は全く當にはしなかつたことではあつたが、稀しく質の好い其の山さへ賣れゝば、金は返してもらへる筈になつてゐた。銀行の利子だけでも、今の彼としては可也重い負擔であつた。

空の色が夕氣づいて來た。紺子は二人の食べるものを、外へ註文したり、自分の手で拵へたりするために下へおりて行つた。

「わたし冷汗が出たわ。」衣子は怨みつぽい目で陽吉を睨にかけながら、「あなた何も彼も姉さんにお饒舌してしまつたのね。」

話しくたぶれた陽吉は、そこに横になつて、女の懷中鏡を取りあげて、長い顎を撫でながら、自分を凝視めてゐた。

「何うだい、種屋と己と何方が男がいゝ。」彼はさう言つて女を見た。

「それあ……」と、女は櫻桃を三四顆お手玉に取りながら、「でも、あの人ちよつと苦走つた顏なのよ。」

「だからお前たちは駄目さ。あんた非文明な顏なんか……。」

そして彼は起上つた。

「男振に文明非文明はないでせう。」女は目で笑つた。

「そんな奴があるものか。」陽吉はまた嵩にか丶るやうな氣勢を示して來たが、急に折れたやうに口を噤んだ。そして衣子の顔に恍手した目を注ぎながら、「お前はやつぱり好い女だな」と、いきなり指で頬をついた。

「何です、いけ好かない。」

電氣が悪戯ものか何かのやうに、ぱつとついた。二人はあわて丶天井を見た。

五

衣子はその後も二三度、不斷着のやうな風をして遣つて來たが、或時は二日三日も遊んで行つた。勿論その間には、江の島なぞへも遊びに行つたし、物も食べに出た。東京で商賣をするといふ問題についても、可也深く話が折込んで行つて、陽吉は自分の責貿上それだけの金を出さうと云ふことになつた。勿論組子もそれには略贊成であつた。しかし陽吉としては千圓以上からの金を、自分の手で何うすることも出來なかつた。兄の懐ろや工面を當てにするのは、此上ない不安だとは頭腦で思つてゐても。しかし何か頼になるやうな氣がしてゐた。何うしても取つてやらなければ……これが好い機會でも口實でもあるのだ。彼はさうも考へた。

「どうです陽さん、確かですか。」組子は時にはさう言つて、陽吉の企てを危んだ。女の心に疑念を抱いた。いくら確りしてゐるやうでも、陽吉はまだ若いのだからと云ふ氣がしてならなかつた。

「大丈夫です、姉さん、種屋なんか競爭者ぢやないんだから。殆んど問題にも何にもならんのですもの」陽吉は確言した。

「え、それぁ然うだけれど、衣子さんの心は何うですかね。」

「衣子だつてまさか十五や六の子供ぢやないんですから。だが、姉さんは不安を感じますか。」陽吉は詰問的に言つた。

「確かなら可ござんすけれど。私がついてゐて、何故そんな馬鹿な眞似をさせたらうつて、田舍のお母さんや兄さんたちがお思ひになつても困りますからね。」

そして彼女は、衣子が果して陽吉の妻として、たとひ其が養母や親類の前を巧く通過したとしても、それほど寂しい鬱陶しいところに、田舍の人などを相手にして、じつと辛抱してゐられる女か何うかと云ふ事をも、速に氣にしてゐた。陽吉は手もなくそれを打消した。彼の心を充してゐるものは、衣子より外に何にもなかつた。紐子の心は惱ましくかなつた。終ひに腹立しくなつた。

の家紐子自身は小さい時分から、母が異つてゐたなどの事情のために、辛うじて小學教育を受けたくらゐで、他人のな肉で送る日が左右多かつた。堅氣の奉公にも出てゐたし、機械場の女工にもなつた。北越の可也な都會で、中流階級庭に育つて、家は今でも相當に暮してゐるらしかつたが、十四五歳から女の生熟期にかゝる迄の四五年を、彼女の美しい體と感情は殊にも暗鬱な頽廢的なものに押潰されて來た。喜久男が彼女を見出したのは、彼がその頃採鑛の方へ傭はれてゐた或大きな銅山と聯絡した東北の小さい都市に於てゞあつたが、そこでは彼女は或年取つた男の世話になつて、球戯場を經營してゐた。球突の技術が巧かつたうへに、様子が好かつたので、山の若い職員たちが蟻のやうに彼女に集まつて來た。そして其の間に喜久男との戀が有りふれた形で、至極自然に進捗して行つたのであつた。勿論彼女を其の所有主であつた請負の親分の手から掠取るまでには、喜久男も相當の入費もかけたし、危險も冒した。地位を失つた。彼女はもう五六年も喜久男と一緒に暮して、殊に最近はダイヤモンドなどを體につけるやうな運が開いて來たのであつたが、今までの何の生活が一番幸福であつたかは、彼女自身にも判らなかつた。虐げられた生活の報償を、何處かで取ら

なければ濟まされないやうな氣が始終出てゐたが、總別若い美しい男女の戀などを見ると、彼女は空虚に責された自分の處女時代の寂しさが振返られた。組子は衣子に醉はされ切つてゐる陽吉に、何かしら淡い不滿を感じてゐることを、自分にも拒む譯にいかなかつた。

「大抵間違はないだらうと思ひますけれど、あなた眞實にしつかりしてゐなくちや。」組子はさうも言つた。

組子は陽吉に誘はれて、其の時明るい夜の町を一緒に歩いてゐた。陽吉はさう長くも東京にゐられないので、町の料理屋のお神への土産に、浴衣地や何かを買ふつもりで、それの見立をしてもらふために、嫂を誘つたのであつたが、家を出るとき、袍の隠しのなかの紙入を取出して、札の小出しをしてゐる陽吉の傍で、組子は留守で當座の小使に困るから少しばかりの融通をしてほしいと申出た。

「何うも濟みません。少しで可いのよ。陽さんにお金なぞ借りて、宅に叱られるかも知れませんけれど、立つとき幾許もおいて行かなかつたんですもの。私だつてそれあ困るのよ。毎日の小使だつて、なか〳〵かゝるんですから。」

陽吉はちよつと厭な氣がした。無意識的に彼女の顔を見た。その刹那に何だか此の女の賤しさに觸れたやうに感じた。その上彼女のもつてゐる生活の背景が、それとなく見透かされるやうにも感じた。しかし考へてみれば無理はなかつた。實際彼女のこぼすのにも同情していゝと思つた。兄は日常のことに餘り鄙吝でないとは言へなかつた。金のあるとき貴金物や着物を買つてやるのに、締はないにしても、それも自分の所持品を飾らうとする利己的な打算に過ぎないのだと思はれた。その上姉弟の親密さを味はうことすら出來ると感じた。

で、彼は札を三枚ばかり彼女の手に渡したのであつた。

「どうせ衣子が來て散財りをしたり、僕も厄介になつてゐるんですからな。もつと入用なら……。」

「澤山よ陽さん」と、組子の暗い顏が遽かに明くなつた。

「しかし兄貴も何とかしなけあ可けませんね。これぢや姉さんだつて堪りやしない。」

で、彼は途々姉の前生涯について、少しばかり訊いたが、組子は具體的のことは何一つ話さなかつた。たゞ父が町役所の書記をしてゐることや、繼母の腹にできた弟や妹が多いために、自分は相當の敎育もしてもらへなかつた事などを、ほんの抽象的に洩したに過ぎなかつた。

愛宕下の家を出て、佐久間町から櫻田本郷町の方へ二人は出て來たが、そつちこつちの飾窓などを覗きながら、取留のない話をしてゐた。路傍樹がもう鬱々と枝葉を濃く茂らせて、夏の夜らしい明が如何にも美しかつた。浴衣姿の女たちの姿や顏など、都會の夜の町の樂しさが、陽吉には嬉しかつた。

「都會人は實に幸福だな。」彼は自分の村の居まはりに loss御してゐる森のなかの暗い百姓家や、草や土のなかに埋もれて暮してゐる農民の生活を考へながら、一人で呟いてゐた。

「僕も養母が死んだら、あの家屋敷を賣拂つて東京へ引越して來るかな。」

「え、さうなさいよ。私も一生東京で暮したいと思つてゐますわ。」組子も唆られたやうに言つて、「貴方のお家は隨分廣いんですてね。」

「廣いたつて知れたものですけれど、田舍の家はたゞ廣いばかりで、東京の一般人の家庭のやうな小ぢんまりと洗錬された趣味がないから、不愉快です。」

「ぢや貴方はやつぱり町中の生活が好きなのね。」

「好きな女と一緒にでもゐれば、財産なんかなくても、小體に樂しく暮して行けますからな。俸給生活なんかも氣樂で

すよ。田舎で田地や山をもつてゐたつて、係累がありませんからな。」
「でも、結構ぢやありませんか。陽吉が一番幸福だつて、宅が羨しがつてゐましたよ。」
「それに長いあひだ村民なんかと一種の因縁が結ばれてゐるから、僕が村を見棄てるたつて、其の自由は許されてゐないんです。衣子を家へ入れるたつて、自然周圍の制裁があつて、問題はなか〱面倒です。」
「それは何うしてもね、田舎の人は堅いから。」
「堅いといふんでもないが、何となく人の批判をしたがるんです。口が煩いんです。だからまあ、衣子は當分何うしても、姉さんとこに預かつておいて戴いて……。」
「とにかく兄さんが歸つたら、よく御相談なさいよ。」
二人はそんな話をしながら、いつか暗い廣い通りへ出て來た。勿論誰の意志でもなかつたが、陽吉には衣子に對する心の焦燥を紛らせる道草の懈さがあつたし、組子の荒んだ心にも若やいだ或氣分があつた。公園の暗い樹木の簇りが、處々微かな電燈の光に濃い蒼さに反映されながら、立續いてゐた。花の咲いたやうな電車の走つてゐるのが小さく見えた。二人は何といふことなし彈んだやうな氣持で、その中へ入つて行つた。そして水邊を慕つて、森蔭の暗い小逕を歩いて行つた。
「わたし日比谷公園なんて、つひ入つて見たこともないわ。」組子は稀しさうに、四下を見まはしながら太息をつくやうに呟いてゐた。東京へ出てからの、少しの安靜も得られない此の三四年の生活を考へると、そこにはたゞ慌忙しい浮沈みの迹が殘されるばかりであつた。
仄暗い池の畔のベンチに、二人は疲れた足を少時休めてゐた。噴水が葛のやうに崩れ碎けて、絶え間なく水を叩いて

ゐた。水の上には、木葉ごしに蒼白めたアーク燈の影が、漾ひ流れてゐた。

「ほんとうに靜かね。」組子はうつとりした沈んだ聲で呟いた。

「夜見ると、こゝも何だか綺麗ですな。たゞ無雜作に木を植ゑたばかりなんだが……。」彼は苛ついたやうな調子で、「これぢや全く爲樣がない。もつと文明國の公園らしく、きちんと綺麗にしたら何うだらう。」

そして「さあ行かう」と言つて彼女を促した。組子も憂鬱な顏をして、懈さうな腰を起した。

「何だか淋しくなつちやつたわ。」組子は陽吉に縋るやうにして言つた。

「姉さんにもそんな事があるか知ら。」陽吉は空虛な聲で言つた。

「えゝ、ありますとも、何故！　私そんな陽氣に見えて？」

「さうぢやないが……」と、陽吉はちよつと打消すやうに言つて、「兄が留守がちのせいかも知れないな。」

「あら、そんな事ぢやないわ。」組子は咽喉で笑つたが、「でも淋しいには淋しいのよ。ヒステレーぢやないかと思ふくらゐよ。一度診て頂戴な、どこか體が惡かないかね……」と甘えるやうに言つた。

「診察しませうか。」陽吉は應へた。

「私心臟が惡いと思ふけれど……。」

「心臟！　そんなことはない。」陽吉は否定した。

「ぢや何うしたんでせう。この胸のどき／＼するのは。これも時々よ。」

そして「ほら」と言つて、彼女は陽吉の手に自分の手を持添えて、乳の下のところを抑へた。

陽吉はちよつと狼狽したが、わざとしつかり抑へて見た。白粉の匂ひが鼻をうつた。彼女の胸が彼の手の下に劇しく

波うつてゐた。

少時(しばらく)すると二人は、木立のなかにあるレストオランの外へ取出された白い食卓に倚つて、何か冷いものに匙をつけてゐた。

或日陽吉が留守のところへ、衣子が四五日ぶりで遣つて來た。其時には、喜久男は日に焦けた赭黝い顔をして歸つてゐた。勿論彼は目論見の山林については別に好い報告も齎らさなかつたが、その代りに石炭と木炭の仲次をするのだと言つて、歸つてからも方々取引をするやうな店を獵つて歩いてゐた。

「人間も落ちれば落ちるもんだ。今度は薪屋さんだ。」

彼はそんな事を言つて笑つてゐたが、陽吉と衣子の問題について、少しばかり組子が話したところで、彼は「何うか知ら！」と胡散くさい目つして苦笑してゐた。

「お前その女を見たか。」

「え、幾度も〳〵。」

そして彼女は詳しく女の容貌や、氣質などについて自分の感じただけを詳しく話した。

「ぢや、あれだ。あれに決つてゐる」などゝ、喜久男は首を捻つてゐた。

「今あの女を引かすには、千圓近くのお金がいるんですて。何だか親たちの差金らしいんですけれど、勿體ないわね。それだけのお金を出して引かすほどの女でもないぢやありませんか。」

「千圓？　馬鹿にしてら。」喜久男は噴笑した。

「それに其の女には、外に年取つた男が一人附いてるんですて。」

そして彼女はまた其事情を說明したが、陽吉に不利なやうな工合にばかり、話の氣分が傾いた。

「それで陽さんは、貴方の歸るのを待ち切つてゐたんですわ。」

それが夜おそく彼が歸つて、緣ちかくへ座蒲團を持出して、酒を飲んでゐる時のことであつたが、陽吉は二階に寢てゐた。翌朝は喜久男は朝がおそかつたし、陽吉は外出をしたので、ちよつと三十分ばかり下で顏を合したばかりで、其からも其の話をゆつくりしてゐる隙がなかつた。

陽吉は何かしら彼の前へ出るのに氣が咎めた。別に自分の方から、積極的の態度に出た譯ではなかつたけれど、然うした興味も全然なかつたとは斷言できなかつた。勿論その事自身が、彼女としても一時の氣紛とはいへないにしても、其の場合の特殊の氣分がさうさせたので、深く問題にするほどのものでないとは思つてゐた。しかし「危かつた！」といふ氣持は、今でも彼を戰慄させた。あの時自分の好奇心が、もう一歩自分を引摺込んで行つたら、何うなつたか知れなかつたのだと思ふと、何だか可恐しいやうな氣がしてならなかつた。ちやうど高い塔へ登つて、幾何十丈もの下を下瞰してゐるやうな氣持であつた。

「衣子にも濟まないことだ。どこに陥穽があるか知れたものぢやない。」彼はさうも考へた。

とにかく餘り長くこの家にもゐられないと云ふ氣がした。姉に對する弟らしい感情が、すつかり萎んでしまつたやうに思はれた。

絹子は案外平氣らしかつたが、病み傷ついたやうな心の惱みが、自然に彼女の表情を憂鬱にしてゐた。陽吉は隙を見

て、時には彼女の顔を偸視した。ふと折わるく四つの目が出逢つた。彼女は媚びるやうな、哀願するやうな意味の判らない表情をして、淋しい微笑を洩したりした。

「一體己といふ人間が、餘り輕卒すぎたんだ。問題を兄の留守の間に、姉のところへ持込んだのが無思慮だつた。」陽吉はさうも思つたが、それと同時に不思議な悩ましさを感じた。で、彼はちよく〳〵外を出歩いた。

「何といふ可哀さうな女だらう。」彼は外を歩いてゐて、ふとそんな事を考へて、不思議に感傷的な氣分を唆られた。

衣子が來たときも、彼は牛込の方の友人を訪問してゐた。

喜久男がちやうど家に居たので、早速彼女に逢つた。衣子は種屋が出て來てゐるので、此頃しばらく足を絶つてゐたが、輪田の草花の球根の取引か何かのことで、今朝横濱へ行くといつて出かけたので、急いで遣つて來たのであつた。

喜久男は暑熱に中てられて、少し弱つてゐた。頬の肉がおちて、目が潜んでゐた。

「まあ寛りして行つたら可いでせう。今に弟も歸つて來るでせうから。」彼はさう言つて火鉢の傍で、新聞の株式欄などに目を通してゐたが、孰もちよつと附穗がなかつた。

「暫らくでしたわね。宅は兩三日前に漸と歸つて來たんですよ。」紅子は火鉢の周りを取片着けながら、「貴女覺えてるでせう。」

「え、でも途中でお目にかゝつても、判らないかも知れませんわ。」

「さうですか。變りましたか。」

「え、お痩せなすつたやうだわ。」

「ふむ、さうかね、苦勞をするからだね。」喜久男はさう言つて衣子を見て、目元に小皺を寄せて笑つた。

紐子は先夜買つた反物などを見せた。そしてサイダをぬきながら、「衣ちやん、浴衣に着替へなさいな。少しべとつくやうだつたから、ざつと洗濯しておきましたよ。」

「さう、何うも濟みませんね。」

喜久男は煽風器を女の方へ廻はしなどして、「大分持てゝるさうぢやないか。家も待合でも初めやうかと思つて……」と氣輕らしく揶揄つた。

衣子はちよつと紅くなつた。

「あら、あんなこと言つて。……隨分お口が惡いんですね。ちつとも持てゝやしないわ。叱られてばかし居るんですわ。ねえ姉さん。」衣子は浮ずつた空虚な聲で言つて、帶留を直してゐた。

「數がさ。已の言ふのは陽吉のことだよ。」

「それあ何うだか判りませんわ。何處かで持てゝるでせう。」衣子は投遣りの調子で言つた。そして詰らなさうに底淋しい目で當所もなく外を凝視めてゐた。

喜久男は莨に火をつけながら、「いや、笑談は拔きにして、一體何んな話になつたんだね。已も心配だから聞いときたいんだが。」

衣子は然し默つてゐた。すると紐子も口を出した。

「稲屋さんの方は何うなつたんですの。巧く別れてくれさうなの。」

衣子は困惑の色を浮べた。そして忸怩してゐたが、少し間をおいてから、「私まだそんな話、して見ませんのよ。つひ隙がなかつたもんですから。」

「それあ然うだわ。陽さんの言ふやうにばかりも行きやしませんわね。」

すると衣子も其の話について、「それに何にも、此方の兄さんに間へ入つていたゞくやうな、そんな重大な問題でもないんですわ。」

「それ處ぢやない、己は貴女から陽吉を分れさせやうと思つてゐるんだ。」喜久男は唐突に言出した。

衣子も組子も暗い目を、默つてしまつた。

「貴女がいくら陽吉のことを思つてやつてくれたつて……それも、陽吉の方で獨で好い氣になつて騷いでゐるのかも知れないんだよ。實際然うかも知れないんだから。何分年が若いんだから。それに此頃少し金が自由になるところから、少しはお茶屋なぞにも、ちやほやされるだらうし、貴女たちにしたところで、其處は商賣のことだから、惡氣はないにしても好い加減調子を合していかなけあならない。」

衣子は悄れた顏をした。笑ひもしなかつた。

「しかし其は問題ぢやないんだ。二人の關係が眞實だか嘘だか、そんな詮索する前に、陽吉の家の事情といふものを考へなけあならんのだ。それは藝者だからつて、必ずしも堅氣になれないとは限りませんよ。貴女が陽吉と結婚して、生涯苦樂を偕にするといふなら、それも結構だが、實をいふとあの家は少し難しいんでね。」

そして喜久男は、少し息を入れてから、養母がなか／＼の喧ましやで豪物だといふことだの、亡養父の妹に未婚の娘が二人もあつて、姉は去年町の女學校を出たし、妹の方も現在同じ學校の二學年にゐるが、血統や門閥を重んずる土地の習慣から言つても、其のうち孰か一人をいづれ貰ふことにでもしなければ、親類達がとても收まるまいと云ふ事などを、世間なれた調子で說明した。

「弟は、己から御母さんに話をさせるなんて言つてるさうだが、己としても一寸立場に困るやうな譯で、いくら陽吉が熱度が高いからと言つて、到底圓滿な解決を見ることはできなからうと思ふ。それとも何うしても一緒になるといふなら、恩誼を蹂躙(ふみにじ)る氣であの家を出てしまふか。さうなれば其は又別問題だけれど、何もそれほどにしてまで、夫婦にならなくちやならないといふほどの事ちやあるまいと思ふが、貴方は何う思ふね。」

衣子は困窮の色を、目一杯に漾はせてゐたが、そこまで突詰めて分明考へてゐた譯でもなかつた。勿論第三者の喜久男にさう言はれると、今まで何かしら漠然とした希望に引摺られて來たのが、思ひがけなく急にふつつり途を切られたやうで、淡い寂しさと哀しみが、湧立つてくるのを感じた。

「でも、陽さんが可哀さうですわ。」糺子は取做すやうに言つた。

「一體お前なんかが、前後の思慮もなしに、陽吉に雷同するから可けないんだ。」

「わたし雷同なんかしやしないわ。」糺子は顔を顰めた。

「衣ちやん、己は惡いことは言はない。だが、これは考へもんだよ。」

衣子は嫣然笑つた。そして切なげに悶えてゐた。

「いづれ陽吉にも一論判するつもりだがね。まあ貴女もその積りでゐてもらひたい。手切くらゐのことは、そいつあ又己が陽吉から出させることにして上げよう。」

衣子は目に涙をためてゐたが、少し經つてから顔をあげた。

「解りましたわ、私。それあ私だつて、あの方のお家へ入れていたゞからうなんて、それは迚も駄目だと思つてゐたんでございますの。早く奥さんをお貰ひなさいと、然う言つてゐたくらゐなんですもの。眞實さうなんです。」

「さう、それなら可いけれど、」

枝葉の話が、それから又暫く續いた。

七

陽吉が三四冊の醫書をかゝへて歸つて來た時、衣子は喜久男夫婦に暇を告げようとしてゐた。

陽吉は下座敷でしばらく話してから、落着なく、洋服をぬぎに二階へ上つて行つた。そして衣子を呼んだ。

衣子は彼の脫棄てた、ワイシャツや下穿の汗ばんだのを手摺にかけながら、浴衣を出してやつた。

「細君は何うしたね。」陽吉は訊いた。

「横濱へ行つてますわ。」衣子は應へた。

陽吉は今見た下の氣分が、直に頭腦に響いた。

「兄が何か言やしなかつたか。」陽吉は緣側の籐椅子に腰かけながら、不安げな微笑を浮べて訊いた。

「いゝえ、」と、女は彼を見ないやうにして應へた。

「どうだ、己たちはもう歸らうね。」陽吉は不愉快らしく言つた。

「え、歸つても可いわ。」女は空虛な聲で應へた。

陽吉は苛々しさうに、指の節を鳴してゐたが、「それで衣ちやんは何うする氣だ。決心がついた？」

「私……？」と、衣子はへどもどしたが、平氣らしく嫣然笑つて、「決心つて別に……今が今どうするといふ譯にもいかないぢやないの」

陽吉は口元の筋肉をむづ〳〵させてゐた。そして空虚な目で、ぼんやり彼女を眺めてゐた。

「それあまあ然うだ。」彼は詰らなさうに言つたが、「さう〳〵、それよりか先決問題は金だ。」

そして彼は何か連に胸算用をしてゐたが、あわたゞしく手招にかゝつた洋服のポケットから小さい手帳を取出して、この間からの小使の覺書などを見てゐた。さうかと思ふと、鞄のなかの紙入を引出して、嚴重な表情で中を檢べてゐた。

「お前の借金は七百圓だつたね。」彼は藪から棒に訊いた。

「え……ですけれど、お父さんの方で、差當つて、此のお盆に何うしても拂はなけあならない問屋さんの借金が、三四百圓あるつていふでせう。だから東京で出ようと言つてるんですの。」

「さうか、やつぱり千圓か。」陽吉は呟いた。

暫くすると、喜久男が上つて來た。

「ほう、よくこんな暑いところに辛抱してるな。」彼は顔を顰めた。

陽吉は莞爾(にこり)ともしないでゐたが、やがて餉臺の傍へ寄つて來た。

「石炭の大取引でもできませんかね、此間の……。」

喜久男は、「まあ、ぼつ〳〵だ」と笑つてゐた。

その間に、衣子がこそ〳〵と下へおりて行つた。

陽吉は少しは打釋けた話をしなければ悪いと云ふ氣がしたが、兄の顔さへ見れば不思議に神經が硬直した。

すると喜久男が不意に低聲で言出した。

「おい、陽吉、お前あの女を何う思ふ。」

陽吉は兄の顔を凝視めたきり、返事も出なかつた。

「己の見たところでは、あれは何うも駄目だぜ。」

「駄目とは……何がです。」

「さう眞面目になつて訊かれると、困るがね、あんなものに懸つてゐると、今に酷い目に逢ふぜ。」

陽吉は苦笑したが、顔が熱つて來た。

「何かさう云ふ證迹がありますかね。」

「別に證迹といつちやないが、お前を東京まで咬へ出して來て、千圓も無心してるつてぢやないか。」

「いや、それあ然し解つてゐるんです」と、陽吉は目に冷笑の色を湛へながら、「そんな凄い腕なぞある女ぢやありませんよ。孰かといふと惘乎した、至極おとなしい方なんです。」

喜久男はまた其を打消して、彼に忠告の辭を繰返した。そして眞面目な結婚を勸めた。陽吉は終ひに不機嫌になつた。

喜久男も爲方なしに折れた。

「ぢやまあ、己は寛大な目で傍觀してゐるとしやうかね。」そして彼も多少機嫌を損ねた。

暫くしてから陽吉は思ひついたやうに、金のことを言出した。

「實は銀行から督促されてゐますので、後でまた何うにかするとしても、一旦返していただきたいんですが……」

喜久男は少し目の色を變へた。

「お前も餘程野暮だな。己があのことで、お前に少しばかり苦いことを耳に入れたからつて、さう現金に借金の催促までしなくたつて可かりさうに思ふが……それどころか、己はお前に、もう少し融通してもらひたいと思つてゐるくらゐな

んだ。」

陽吉も顔色を變へた。そして冷笑を浮べながら、「それあ貴方の誤解です。兄さんにも似合はないことです。女のことと此と混同されちゃ困るんです。勿論兄さんの手元を知つてゐます。しかし僕としては……それあ女にも金は使ひますが、それは此の方と全然別途の問題で……詰りあれは母に秘密で引出した銀行の債務ですから、……無論この秋頃にでもなれば僕がまた何とかしますから、目下のところ是非心配して戴かうと思つて、實は其の事で僕はわざ〳〵出て來たんです。」陽吉は心苦しげに言つた。

喜久男は一層不快な顔をした。

「だから、秋頃に融通できるものなら、それまで待つてもらはうぢやないか。其位のことは、お前だつてしてくれても可いだらうぢやないか。」

そして彼は陽吉の養子問題に、自分も骨を折つたことなどについて、彼の反省を促さうとした。

陽吉は反對に、養子の不幸を言立てた。で、また兄の生活について、此頃考へてゐた事をも、披瀝せずにはゐられなかつた。別に喧嘩といふほどの事ではなかつた。のみならず喜久男も陽吉も、時々笑顔をさへ裝つて、相手の言に耳を假したり、自分を主張したりしたのであつたが、お互の興奮は爭へなかつた。

勿論それは然う長くも續かなかつた。そして電燈がついて、夕飯の支度のできる頃には、二人とも不斷の調子に返つて、久しぶりで酒を飮んでゐた。衣子がお酌をした。組子は傍で蓄音機をかけてゐた。陽氣な二上りなどが、座席の氣分を浮立せてゐた。

すると其時、淺草の衣子の家から、母が不意に訪ねて來た。衣子は女中の報告で、急いで降りて行つたが、しばらく

上つてこなかつた。もう十時過ぎであつた。

間もなく衣子が、不安げな顏をして上つて來た。

「濟みませんが、私ちよつと歸つて來ても可いでせう。」

陽吉は興ざめた顏で、目の色をかへた。

「何うしたんだ。」

「横濱から歸つて來て、家で待つてるんですて。」

「で、お前は歸ると言つたのか。」

「それあ爲方がないでせう。お母さんがわざ／＼迎ひに來たんですもの。」

失望的な冷笑が陽吉の目に漾つた。

「駄目々々。こんな奴爲樣があるもんか。可し、歸るなら歸つていゝ。」陽吉の語氣はひどく荒々しかつた。

衣子は遙かに躊躇したが、「まあ可いから心配しないでお歸り」と喜久男の言に力を得て、悄々下りて行つた。

翌朝十時頃に、陽吉は二階で歸る支度をしてゐた。組子が着物を疊んだり、散らかつた物を纏めたりして、鞄に詰めてゐた。

喜久男はもう外へ出てゐた。

「これに懲りず、また近いうち出て來て下さいね。」組子は頸垂れがちに、そんな事を言つてゐた。

「姉さんも何うです、一度いらしては。」陽吉もお愛相を言つた。組子がひどく狼狽してゐるやうに思へて爲方がなかつ

た。

「え、行きますわ、眞實に……。」紈子は熱心に應へた。

「ほんとにお出でなさい。」

「それに、私貴方にまだ爲殘したお話もあるのよ。」

「それは何です」と、陽吉は反問しやうとしたが、その刹那に氣分が萎縮した。

「私たちの關係は、迚も長く續かないだらうと思つてゐますの。あの女の話を片着けてからといふもの、私毎日そんな事ばかり考へてゐるんですよ。」

話はそれきりであつた。惱ましい時が二時間ばかり經つてから、陽吉は俥で出發したが、二度と兄の家の閾を跨ぐこともあるまいと思はれた。そして其と共に、兄夫婦――殊に嫂のために、衣子とのなかゞ失敗に了つたやうに思へて、何時までも務がかゝつたやうな氣持が除れなかつた。

勿論衣子は東京で出ることになるだらうと思はれた。



鮫人

谷崎潤一郎

第四篇　深夜の人々

第一章（つゞき）

斯くて、元來ならば風波の絶えない筈である梧桐の家庭は、夫人の賢い取り計らひと、それに懷いて居る二人の少女の睦ましい友情とで、主人の「暴君」との折り合ひもよく圓滿に收まつて居たのであつた。芝居がハネるのは大概十時から十一時前後、時とすると稽古の爲めに一時二時になることもあつたが、眞珠と蕙とは出るにも歸るにも夫人の側を離れるやうなことはなく、劇場から諏訪町の家まで七八町の間を、ぶらぶら歩きながら連れ立つて行くのだつた。たまには歸り路に何處ぞのカフェエへ立ち寄つたりしたけれども、それとても梧桐夫婦がつれて行くので、外の者とそんな所へ出入することは堅く禁ぜられて居たのである。で、歸つて來れば主人は三階へ上つてしまふし、他の三人は川縁の地下室に床を並べて、何かその日の出來事などをしやべり合ひながら、やがてすやすやと寢入つてしまふより外に用はなかつた。

「地下室」と云ふと、讀者は或は西洋風の穴藏を聯想するかも知れないが、實際その部屋は表の道路より下にあつたばかりでなく、座敷の感じよりは穴藏の感じがするところの、兩側を厚い壁で仕切られた、天井の低い、纔かに川に面した方の高い窓から明りを取つて居る、陰欝な場所だつたのである。そこは曾て風呂場に使はれて居たのを、梧桐が住むやうになつてからほんの少し手入れをして、――と云ふのは床へ疊を敷いただけで、三人の寢室に充てたものであつた。若しその部屋に寢泊りする者が花やかな女優たちでなかつたら、さうして其處に彼女たちの持ち物にふさはし簞笥だの鏡臺だのが置いてなかつたら、その夥しく濕氣を含んだ壁の色や、而もその壁がところどころ剝げ落ちて居たり、煙突の跡に煤がこびり着いて居たりする樣子などは、恐らく一層陰欝に見えたであらう。それに、廣さもやつと四疊半に三疊しかなかつたし、三疊の方には今も云ふ通りいろいろの持ち物が据ゑてあつたので、三人はぎつしり蒲團を並べて敷かなければならなかつた。その蒲團の並べ方は、(此れも何かの必要があるから書いて置くが、)一番出口へ近い方に夫人が寢、その次ぎに眞珠が寢、一番川の方へ寄つた所の、窓の下に薫が寢る、此の順序は長い間の習慣になつて居て、いつも狂ふことはなかつたのである。それには別に理由と云ふほどのものはなかつたけれども、最初さう云ふ順序にしたのは夫人の發議であつた。薫が充てられた位置は、その窓の外の石崖の直ぐ下まで大川の水が寄せて居て、夜が更けると其處を漕いで通る櫓の音が聞える。そのぎいぎいと云ふ靜かな響きが、夫人は耳について寢られないと云ふので、――たゞでさへ彼女は寢つきの惡い方だつたから――一番川から遠い所へ自分が寢て、最も寢つきのいゝ薫を窓の下へ寢かした。全く薫は寢つきのいゝ兒だつたので、つい今しがたしやべつてゐたかと思ふと、ぢきに好い心持ちさうな微かな息を立てながら、折々飛んでもない寢言を云つて二人に笑はれたりするのだつた。

「ゆうべも薫さんはおかしな寢言を云つてたわね、ほんたうに呑氣さうで羨ましい。」

夫人はよくそんな事を云ひ云ひして、寢つきの惡いのを苦にして居たが、近頃ではだんだん不眠症が昂じて來て、寢しなに必ず催眠藥を飮んで居た。然るに、ちやうど今から十日ほど前の晩に、夫人はふと、どうも出口に近い方は明け方になつて表を車が通るもんだから、それで眼を覺めるのかも知れない、と、さう云ひ出して、その夜から蒲團の順序を少し取り換へて見た。今までは眞珠が眞ん中で、その右に夫人が寢て居たのを、今度は夫人が眞ん中になつて、出口の方へ眞珠が寢た。「きつと此の方が工合がいゝかも知れない、試しに今夜だけ斯うやつて見よう」――などゝ云ひながら夫人は何氣なしにさうしてしまつたのである。

その出來事があつたのは、薫が眞珠のことを氣にして泣いた彼の日の晩だつた。勿論其れと此れとの間には何の關係もない筈ではあつたけれども、薫はなぜか、夫人がそれを云ひ出した時、さつと顏を紅くした。それは薫自身にも、自分の心にそんなものがあらうとは今迄夢にも知らなかつた不思議な感情だつた。――夫人がさうしたのは、夫人だけの都合からではなく、そこに或る懸念が潜んで居たのではなかつたか？ 薫と眞珠とを隣り合はして寢かして置くことは、何かしら良くないと云ふ考があつたのではないだらうか？ 薫はそんな風に氣を廻して見て、夫人が恨めしいやうな、極まりの惡いやうな氣持ちがするのを、我ながら怪しまずには居られなかつた。もう今夜からは眞珠の側へ寢られなくなつたと云ふ事實、それが齎らすところの云ひやうのない深い悲しみ、彼女はそれを思ふ時に、自分が今迄いかに眞珠を愛して居たかを、始めてはつきりと覺つたのである。いかに彼女は、地下室の毎夜の時間を樂しく感じて居ただらうか、眞珠の寢顏を眺めながら安らかな睡りに入ることが、どんなに嬉しかつたであらうか、その喜びは彼女に取つて幸福なものゝ凡べてであつた。彼女は屢々、友情と云ふものがこんなにも人を幸福にさせていゝのであるか、眞珠の側に居ることがこんなにも樂しくつて差支へないのであるかと、さう疑ぐつたくらゐだつた。彼女はそれを惡い事だとは考へな

い迄も、その樂しみが餘りに自分を醉はせるために時々はそれを怖れた。さうして少くとも、人に云はれない秘密な事として胸の奥に隱して居た。で、彼女が顏を紅くしたのは、强ひて說明を求めるとすれば、大方その心の秘密を觀破されたと思つたからであつたらう、實際夫人の理智の働きはそれほどに銳い場合があり、薰は殆んど迷信的に、彼女の非凡な洞察力に敬服もすれば危惧しても居たのであるから。

けれども又、夫人が秘密を見拔いたとしても、薰の淸い樂しみを妨げる理由が何處にあらうぞ！　それはたゞ單純な秘密であつて、秘密なるが故に惡いとは云へない。たつた一人の友に對する兄弟にも增した愛情、それがどんなに濃やかであらうとも、濃やか過ぎて惡いと云ふ譯はない筈である。まして夫人はあの通り親切な人だのに、そんな思ひやりのない事をするだらうか？――「いや、いや、そんな事がある譯はない、やつぱり私の邪推だつたのだ。あんまり幸福過ぎたので、その幸福を取られた爲めに飛んでもない邪推をしたのだ。何も私の事なぞは御存知なしに、お疑られない爲めにさうなすつただけなのだ。假りにも奥さんを恨むなんて、私はまあ何と云ふ馬鹿な女だらう。」――悧巧な薰は、やがてさう云ふ風に考へ直さなければならなかつた。いづれにしても、夫人が其の監督の下にある可憐な少女たちの不爲めを謀る筈はないのだし、車の音が耳につくと云ふ理由も、決して通り一遍の口實ではないのだつた。なぜかなら、あの諏訪町の道路は人も知る如く駄馬の往來の頻繁なところで、おまけに地盤が柔かいせゐか荷車の通る度毎に可なり地響きがしたのである。彼女は位置を取り換へてからはいくらかおちおちと寢られるやうになつた。さうして、薰には氣の毒であるが、結局その順序が新しい習慣となつてしまつた。

で、上述の如き次第であつたにも拘はらず、眞珠は夜な夜な誰の眼にも觸れないで、部屋を脫け出す事に成功して居た譯なのである。さうして又、それを梧桐が發見したに就いては、左に記すやうな事情があつたのである。――

梧桐は不断から、いついかなる場所にでも横になりさへすれば直ぐに鼾聲雷の如くに寝てしまふことを、（その鼾聲は鼻が惡いせゐであつた）自慢にして居る男だつた。「人間は此れでなくちやいかん。用の間に五間でも十分でもぐつすり寝られるやうでなくつちや、とても忙しい仕事なんか出來なしないぞ。偉大なる事實家はみんな昔から斯うだつたのだ。」——それが梧桐の口癖であつた。しかし彼のは用の合間に寝るばかりでなく、普通の人が寝る時間にも普通以上にぐうぐうと寝た。一旦床に這入つたが最後、ちつとやそつとの地震ぐらゐでは容易に眼を覺ましはしなかつた。然るにその梧桐が、二三日前の晩に、珍しくも夜中にふいと眼を覺ました、さうして何と思つたか、足音を忍ばせながら地下室へ降りて來たのである。

それはちやうど午前三時頃であつた。梧桐は梯子段を降り切つたところに暫く息を殺して佇みながら、纔かに川通りの窓の方から水に反射する夜の明りが、ほんのりとさして居るうす暗い部屋の中を視詰めて居た。最初に彼は、——瀧園の順序が變更されたことを知らなかつたので、——一番自分の足元に近い方に睡つてゐる筈の、夫人の寝息を窺はうとした。と、その瀧園は、人がもぐつて寝て居るやうな恰好に、枕の上まで夜具がすつぽりと蔽さつて居て、その隣りに夫人が心地好げな寝顔を仰向けにして、長い體を眞つ直ぐに伸ばしつゝ熟睡してゐたのである。此の行儀のよい端正な寝姿は彼女に特有なものであつて、梧桐はいつもそれを見ると、打つ倒れた彫像に對するやうな殺風景な氣持ちと、「寝てまでもいやに取り澄まして居やあがる」と云ふやうな反感とを抱かせられるのであつた。のみならず、すやすやした寝息が聞えれば聞えるほど、ほんたうに寝て居のかどうか分つたもんぢやないと云ふ風にも思へた。それから彼は向うの端に睡つて居る照の様子を窺つた後で、そつと眞珠の夜具に觸れて見た。

「はてな、便所へ行つたのぢやないか知らん、……」

ひよいとさう思つたが、いつ迄立つてもその空ツぽの蒲團の主は戻つて來ない。梧桐は何事をか深く考へ込んで二三度梯子段を上つたり降りたりしながら、何故か夫人を起して聞いて見ようとはしないのだつた。凡そ三十分ぐらゐの間、彼は默つて空ツぽの蒲團の上に眼を注いだまゝ突つ立つて居た。それから、恐ろしい昂奮を强いて抑へつけて居るかのやうに鼻息を荒らげながら、すうツと梯子段を上つて、三階の部屋へ戻つて、知らん顏をして寢てしまつた。

その明くる晩もその明くる晩も、さう云ふ事が三日ばかり續いた。いつも夜中の三時頃になると、きつと梧桐が地下室へ降りて來る、夫人と薫とはぐつすり眠つて居て何も知らない、眞珠の蒲團は空ツぽになつて居る、梧桐は暫く其處に立ち盡して、やがてこつそりと三階へ上つて行く。さうして朝になると、眞珠はちやんとその部屋に居て、夫人や薫と一緒に起きて來る。まるで何事もなかつたかのやうである。その惡[illegible]のやうな出來事を、梧桐は三日の間誰にも云はずにぢつと堪へて居た、が、四日目の晩になつて、彼の焦慮は不安の度を通り越して恐怖に近いものとなつた。

「こんな奇怪な事件があるのに、此の女は平氣で寢て居る。」

——彼は、安らかな夫人の寢顏を見ると覺えずかツとなつた。しかし其處には薫が居るので、今にも破裂しさうな癇癪をぐつと壓しつけて、燃え上る怒りを顫へる指先に集めながら、出來るだけ靜かに彼女を揺り醒ました。

「——?」

半身を起した夫人は、空ツぽの蒲團を指してゐる梧桐の手の方向に氣が附いたとき、さう云ふやうな眼つきをしてちよいと首を傾げたが、寢惚けて居たのか其れとも外に譯があつたのか、その樣子は相變らず落ち着いたものであつた。若しそんな場合でなかつたら、梧桐はいきなり其の横ツ面へピシリツ！と一つ喰らはしたところだつたであらう。

「少し話がある、此方へおいで。」

彼はさう云つて、夫人を二階の臺所の隣へ連れて行つた。

「あれを、お前は知らずに居るのか?」

梧桐の低い囁きの聲は、やゝともするとそれが忽ち激しい怒罵に變りさうであつた。夫人はしかし、その鋭い語氣に對しても極めて冷然とした態度で、寢起きのせゐか一層のつぺりと青ぶくれのした顏の筋を、微塵も動かさずにまぢまぢと夫の瞳の中を視詰めた。

「眞珠は一體何處へ行つてるんだ。あんな事があるのを今迄どうして氣が付かずに居たんだ。」

「まあ、奇態ですこと!――ほんとにどうしたと云ふんでせう、今時分何處へ行つちまつたんでせうか?」

だが、夫人は何か外の事を考へて居るらしく、その驚きはほんの口先だけのやうにしか取れなかつた。――それは夫人の悪い癖だつたので、彼女のやうに氣むづかし屋の夫に仕へたり多くの役者たちを操つたりして居れば、自然と其處に技巧的なところが出來て來るのではあらうけれども、兎に角彼女の表情や物の云ひ振りには、本心からか上ッ面なのか分らないやうなわざとらしさが、常に附き纏つて居た。さうして其れが、喜怒哀樂を色に現はさない賢夫人たる所以であつたと共に、梧桐を始め劇團の俳優どもに一種の畏怖を抱かせる武器ともなつて居た。

「何處へ行つたんでせうッて、それを知らずに居る法があるか。何だお前は? 何の爲めに消いて居るんだ?」

「ほんとに申譯がありません。實は此の頃睡眠劑を飲んで居るので、すつかり寢込んじまつたもんですから、……」

「いくら寢込んじまつたつて、隣に居るのが分らない奴があるもんか。それも今夜ばかりぢやないんだ。己は此れで三日も續けて見て居るんだ。」

「それぢやあなた、なぜ早くさう仰つしやつて下さいませんの?」

梧桐はそこへ來てぐつと詰まつた、太い青筋の立つた額からは汗がタラタラ流れ落ちた。が、依然として冷やかに自分を視詰めて居る夫人の眼を見ると、强ひて弱みを示すまいとするやうに、一と入語氣を荒らげずには居られなかつた。

「そんな事はどうだつてい丶、そんな事よりか己は貴樣の責任を糺して居るんだ。貴樣があの兒を預かつて置きながら、何處へ行つたか知りませんで濟むと思ふか？　さうして己が叱言を云やあ、その通りいけ洒あ洒あとして居やがる。」

「ほんとに申譯がありません、……」

さう云つて、夫人は徐ろに項を垂れた、同時に彼女はやつと聞えるくらゐな聲で附け加へた。

「でも、あの兒の居ない事は、あなたが御存知なんだらうと思つたもんですから、……」

「馬鹿ッ」

急に、夫人の瞳には、涙が一杯に浮かんだ。活氣のない、人形のやうに物靜かな顏の中に、その涙だけが生きて動いて居るかの如く頰を傳はつて潸々として流れた。彼女は再び頭を擧げて、今度は哀願するやうな眼つきで、默然と夫を見上げたのである。

長年連れ添うた女房ではありながら、夫人に斯う云ふ態度を取られるとき、梧桐はいつも此の女の氣心を解しかねるのであつた。彼女は何故に泣くのであるか？　それは何の爲めの涙か？　梧桐にはその意味が極端な善意にも考へられ又その反對にも考へられた。云ふ迄もなく、彼女はそれで自分の貞女振りを示した積りなのであらう、「私はあなたが眞珠さんを可愛がつて居らッしやるのをよく知つて居ます。ですから眞珠さんが脫け出すのに都合がい丶やうに、わざと蒲團の順序を取り換へて置いたのです。さうしてあなたがたが安心するやうに、催眠劑を飲んで寢たのです。どうか私の心やりを察して下さい。此れ程にして居る私を、そんなに叱らないで、たまには憐れんでやつて下さい。」――彼女の

眼つきは、それを訴へて居るやうにも見える。妬ましい事や口惜しい事の數々を胸に收めて、ぢつと辛抱して泣いてゐるいぢらしいその姿は、飽く迄も夫の犧牲となり、奴隷となる事に滿足して居る貞女の鑑のやうにも見える。しかし梧桐は、その貞女振りに對して二重の疑惑と懊惱とを抱かせられた。彼の頭の中には、それらのものが底の知れない深さを以て眩苦しく渦を卷いた。第一に彼女は、眞珠が居なくなつた事を知らなかつたと云ひながら、內々知つて居るらしい樣子である。知つて居るばかりか、何處迄も眞珠は三階に隱れて居るのだと、さう信じ切つて居るかのやうである。でなければいくら物に動じない女にしても、此れほど不思議千萬な出來事が起つたのに、あんなに落ち着いて居られる筈はない。さう思ふと梧桐は、痛くない腹を搜られたばかりでなく、多少痛い所もあつただけに、一層彼女の惡推量が忌ま忌ましくてならなかつた。が、問題は單にそればかりでなく、梧桐の方には更に夫人の裏を行く惡推量があつた、――彼女は果してほんたうに眞珠が三階に居るものと確信して居るのだらうか? それとも或は、確信して居るかの如く見せかけて、その實彼女を何處かへ隱して居るのではないか?――此の疑ひは、(少くとも梧桐に取つては)滿更理由のないものとは云へなかつた。なぜなら、眞珠が決して三階に居るのでない事は、今夜の梧桐の素振りから推して、餘りに明らかな事實だからである。梧桐は何の爲にわざわざ夫人を起しに來たか。自分で眞珠を匿まつて居るとしたら、そんな馬鹿な眞似をするだらうか?――聰明を以て聞えて居る綜子に、その邊の事が分らぬ譯はない。梧桐は彼女が、蘂と眞珠だけは外の女優とは特別にして、親身の妹のやうに愛して居るのを知つてゐた。せめて此の二人だけは夫の毒手に罹らせたくないと、さう願つても居るだらうと察した。いやそればかりか、眞珠が或る事を彼女に訴へると云ふやうな場合をも、決して想像出來なくはなかつた。「先生がいろんな事を仰つしやるのでほんとに困つてしまひます。夜が心配で仕樣がありません。」さう云つて眞珠が綜子に泣き着くとする。綜子はそれを見るに見かねて、勿論嫉妬から

ではなく少女の貞操を庇護する目的で、彼女を夜な夜な何處かへ逃がしてやつたとする。萬一それが見附かつたとしても、夫はそれに就いて餘り嚴しく糺彈する事が出來ないだけの弱味を持つてゐる。「わたしは睡眠劑を飮んで居るのですから何も知りませんでした」さう云つてしまへば、夫はそれ以上妻を追究することは出來ない。夫人のした事は其處まで考へた結果ではないだらうか？　梧桐の疑ひは、更に薫の上にまでも及んだ。彼奴も大方グルになつてやつた仕事だ、みんなで己を欺して居るんだ、みんなが眞珠を庇つて居るんだ、餘計な事をしやあがる！　梧桐の怒りは戀路の邪魔をされた事と、それに對して文句が云へない地位に置かれた事との爲めに、一層強く燃え上つた。彼は見す見す豫め仕組まれた夫人の罠に陷つたやうな心地がした。のみならずそんな皮肉な方法で夫を翻弄しようとしながら、自分は何處までも貞女面をするづうづうしい總子のやり方が、腹の底から憎らしかつた。それが強ち不良な動機から仕組まれたのではないだけに、尙更その憎みは激しかつた。

「さあ眞珠を出せ、彼奴が何處へ行つちまつたか貴樣は知つてるに違ひないんだ。さあ云へ！　白狀しろ！」

幾度かさう云はうとして梧桐は、それでもやはり彼女の淚に或る程度迄の信用と憐愍とを感ずるのだつた。その上彼は平素から好人物扱ひにされて居るので、成るたけ夫人に馬鹿にされまいとする意地があつた。惡く氣を廻して笑はれてはならない、迂濶な事を口走つて夫人の鎌に懸つてはならない、事に依ると此の女は、己が眞珠にどのくらゐ惚れて居るかを試して居るのだ。――彼女を疑ふ心の傍からさう云ふ用心が彼を引き留めた。それに又、假りに總子が眞珠を何處かへ隱すとしても、果して何處へ隱し得るだらう。こんな夜更けに、此の家以外の何處に彼女を預け得るだらう。そんな馬鹿々々しい事はてんで問題にもなりはしない。それを疑ふのは自分が如何に眞珠の爲めに夢中になり、如何に總子を恐れて居るかを、サラケ出すやうなものぢやないか。考へれば考へるほど、凡べてが梧桐には不可解であつた。默つ

てさめざめと泣いて居る夫人の顔を眺めて居るうちに、物狂はしい疑惑の雲が後から後からと彼の腦裡に塞がつて行つた。突然彼女を打ん擲つてやりたいやうな發作に驅られるかと思ふと、次ぎの瞬間には彼女の前に跪いて、「どうかほんたうの事を云つてくれ」と頼みたいやうな風にもなつた。「己には何も分らない、己は氣が違つたのぢやないか知らん？」彼はぞつとして身を顫はした。不意に眼の前が暗くなつて、自分の體が足元の地面と一緒に、ズシーンと沈んで行くやうな氣持ちがした。

彼は兎も角も一應夫人の疑念を晴らす爲めに、彼女を三階へ連れて行つた。そこにも眞珠が居ないと云ふ事が明かになれば、いかな彼女でも少しはびつくりするだらうと、梧桐はそれを豫期して居たのだが、不思議にも總子は別段騷ぐ色を見せなかつた。「まあどうしたと云ふんでせう、ほんたうに何處へ行つちまつたんでせう。」彼女は矢張りその空々しい言葉を繰り返した。

「よろしうございます、きつと此れから氣を付けるやうに致します。もう明日の晩からは催眠劑を飲まないやうにしますから。」

漸く最後に、彼女はさう云つただけであつた。

然るに、その夜の明け方になつて、眞珠は例の如くいつの間にか部屋に戻つて居たに拘はらず、それが何時頃であつたかは、遂に夫人には分らなかつた。夫人はその朝出來るだけ氣を付けては居たけれども、寢しなに飲んだ睡眠藥が利いて居たのと、夜中に起されたので睡氣が溜つて居た爲めに、ついとろとろとしてしまつた。さうして眼が覺めて見ると、隣りの蒲團に眞珠がすやすやと寢入つて居た。――少くとも、彼女自身が梧桐に語つたところはさうであつた。

「ほんとに今夜からは氣をつけます。夜ツぴて寢ないやうに致します。」

と、夫人は其の時もそんな事を云つて居た。

第二章

眞珠は、梧桐夫婦の間に自分がそれほど問題になつてゐるのを、少しでも氣取つたらしい樣子はなかつた。彼女はその朝も平氣で三階へ遊びに行き、相變らず梧桐の首ッ玉へ嚙り着いたり、膝の上へ腰掛けたりして、狆ころのやうにぢやれ廻つた。梧桐もそれをどうする事も出來なかつた。「今日は一つ遠廻しに聞いてやらう。」――さう思つては居たのだが、その決心は眞珠の顏を見ると同時に消えて行つた。その上、眞珠のふざけ方はいつでも妙に執拗い馴れ馴れしいものだつた。それでなくても女好きの梧桐は、さうされると一種抵抗し難い魔力で縛られるやうに感じた。彼の頭を一杯に塞げてしまふものは、もう昨夜からの疑惑でも憤懣でもなく、それよりも強い暴風のやうに荒れ狂ふ情慾だつた。彼は餌食に飢えた獸の眼つきで、しやぶり着きたいやうな眞珠の手足を、さうしてそれが飴のやうにしなしなと彼の體へ纏はり着くのを、例の鷹揚な態度で享樂しながら、ダラシなく何時間でも空費してしまふのだつた。――が、此の事に就いてはいづれ精しく後の章に述べるとして、今は其の晩から引き續いて起つた更に不思議な出來事の方へ、直ちに筆を進めるとしよう。

さて、その晩はどうだつたかと云ふと、梧桐は一體今度の事件に關しては、夫人のする事が何となくあてにならないやうな氣がしたのだけれども、「今夜はきつと氣をつけます」と云ふ彼女の言葉に安心したせゐか、いつもの睡り癖が出てつい明くる朝まで一と息に寢徹してしまつたのであつた。で、朝になつてから彼は總子を三階へ呼びつけてそつと尋ねた。

「ゆうべはどんな工合だつたね?」

「ゆうべは何も變つたことはございません。」

夫人はきつぱりとさう云ふのだつた。

「――ゆうべ私は、わざと寢た振りをしてまんぢりともしないで居ました。あの兒はあれでなかなか氣の付く方ですから、悟られてはいけないと思つて、寢しなに、矢張りいつもの通り催眠劑を飮む眞似をして見せたりしたんですけれど、それに氣が着いたのかどうか、ゆうべはとうとう何處へも行かずにしまつたんです。まあ今夜はどんな風ですか、もう二三日樣子を見るやうにして見ませう。そのうちに又始まるだらうと思ひますから。――」

「ふん、……」

梧桐は一と言云つたきりで、穴の明くほど夫人を睨み付けて居たが、彼女の冷靜な表情からは何物をも捜り出す譯に行かなかつた。「此の女は嘘をついて居る、己を欺して居る。」なぜと云ふ理由もなしに彼はたゞさう感じた。此女をあてにして居たらいつ迄立つても分る事ぢやない、己が自分で探索しなけりやとても駄目だ。――彼はイライラしながらさう思つた。彼の疑がひはますます濃くなるばかりだつた。

しかし、次ぎの晩も、どう云ふ譯か梧桐はウツカリ明くる朝まで寢徹してしまつた。「しまつた!」眼が覺めると同時に彼はさう云つて飛び起きたが、もう遲かつた。

「ゆうべも別に變つた事はございません。」

――夫人はその朝も同じやうなことを云つた。

「さうかね、」

と、梧桐はさう云つただけだつた。彼は總子の面を見るのもイヤな氣がした。

三日目の晩に、彼は時計を枕もとへ置いて蒲團の上にあぐらを掻いて居た。と、一時近くになつて恐ろしく睡くなつて來たので、今度は床の間の前にキチンと畏まつて据わつた。その床の間には例の「南無妙法蓮華經」の髯題目が懸つて居て、梧桐はそれを念じるやうな心持ちに、ぢーいツと息を張り詰めながら一生懸命に眼を睜つて居た。さうしたまゝ、三十分ぐらゐは立つたであらう、……一時、……一時半、……と、その時分まで彼はぼんやり覺えて居るのだが、やがて又たまらなく睡くなつて來て、いつの間にかこくりこくりやり始めて、……それから先はどうなつたかまるで分らなかつた。ハッと氣が付いた時分には、もう夜がすつかり明け放れて、彼は床框に打つ俯したまゝ何も知らずに寢て居たのであつた。

「ゆうべも別に變つたことはございません。」

「さうかね、」

その朝も、夫婦は判で押したやうな冷淡な言葉を云ひ交はした。

その次ぎの晩もその次ぎの晩も、結果は常に同じだつた。梧桐の寢まいとする努力は一時間と續かなかつた。きつと、十二時から一時頃になると、意識が朦朧と翳つて來て、頭の中が痺れるやうになつて、直きに、たわいもなく昏々と深い睡りに誘はれてしまふ。……ひよつとすると、此れには何か譯があるのぢやないか知らん? 己は誰かにどうかされてるのぢやないか知らん?――彼は總子が睡眠劑を持つて居るのを思ひ出した。彼女が若し、それを夫に知らせずに飲ませようと云ふ意志があるなら、決してその機會がないことはない。なぜなら、梧桐は寢しなに餅菓子を摘まみ喰ひする癖があつて、毎夜缺かさずにそれを買はせて置くのだから。先づ芝居から歸つて來ると、三階へ上つてドッカリと腰を据

える。それから、女中を呼んで、床を取らせて、枕もとへ菓子を運ばせる。自分で茶簞笥から菓子皿を撰り出して、竹の皮包みの菓子を鄭寧にそれへ移す。——煎茶道樂の彼は、いろいろの茶器や菓子器を持つて居たので、そんな事をする間が、一日の勞苦を忘れる樂しい時間なのであつた。——次ぎには湯加減を見て、徐ろに紫泥の急須へ玉露を入れる。さうして菓子を摘まんでは玉露を啜りながら、いかにも浩然の氣を養ふと云つた風に、悠々と愛玩の器物を手に取つて眺めたりする。それが濟んでから、さていよいよ寢ると云ふ時に、葡萄酒をコップに一杯飲む。尤も此の葡萄酒だけは睡氣を催す恐れがあるので二三日前から止めにしては居たけれども、その代り珈琲の濃いのを二杯も三杯も飲むのだつた。で、それらの飲食物の孰れかしらに睡眠劑を混ぜて置くことは、夫人自らが手を下さないでも容易く出來る譯なのである。かりに、眞珠も夫人とグルになつて居るとする、勝手に二階へ出入する事を許されて居る彼女は、梧桐の隙を窺つて茶簞笥の中の葡萄酒の壜へなり、珈琲の罐へなり、そつと藥を入れて掻き交ぜて置く。或は又、あの餅菓子にしたつて細工が出來ないことはない。菓子を買ふのは留守番の女中の役目ではあつたが、女中と雖なかなか油斷はならないのである。夫人は不斷から家内中の者を手なづけて、彼女の方へばかり同情が集まるやうにし向けて居たので、いさと云ふ時に梧桐の味方をする者は一人もない、恐らくは女中でも書生でも皆彼女の手先となつて働くだらう。「奥さんのなさる事に惡い事は一つもない。先生に睡眠劑を飲ませるのだつて、それもみんな先生御自身の爲め、眞珠さんの爲め、役者たちの折り合ひや取り締まりの爲めを思つてなさる事だ。」奉公人どもはそんな風に考へるだらうし、それに少しは燒餅も手傳つて、總子の云ひ附けとあればどんな事でもやりかねない。梧桐は此の家の暴君でありながら、その實みんなが寄つてたかつて彼を陷れて居る。威張れば威張るほど皆が陰で舌を出して居る。夫人の采配の下に、内中が總がゝりで陰謀を企て、主人を嬲り物にして居る。——自分は今、そんな場合に置かれて居るのぢやないか知らん? 眞

珠の行くへを知らないのは自分だけで、奉公人は勿論のこと、外の役者たちも殘らず知つて居るのぢやないか。劇團全體が總子の味方をして、眞珠を庇つて居るのぢやないか。さうだとすれば、凡べての食ひ物凡べての人間が悉く怪しい。己は誰にも、一刻も氣を許すことは出來ない！――梧桐はさう云ふ風に想像を逞しくした。いやに空ツ惚けた夫人の顏を見る度毎に、それが激しい强迫觀念となつて彼を襲つた。

次ぎには又、かう云ふ事も推測出來るのであつた。――果して自分が睡眠劑を飲まされて居るのだとすれば、眞珠はそれで安心して居る譯であるから、もう此の頃は夜中に逃げ出さないのかも知れない。「ゆうべも別に變つたことはございません」と云ふ總子の言葉は、或は事實かも知れない。總子は最初、夫が地下室へ忍んで來るのを恐れた結果、眞珠を何處かへ隱したのである。ところが其れを夫に感づかれたので、今度は夫が眼を覺まさないやうな手段を取つた。さうして其の手段がうまく行つて居る以上、もはや眞珠を隱す必要がなくなつた筈である。さうだとすると、一つ此方でも謀の裏を掻いてやらう。寢たと見せかけて、夜中に不意に地下室へ降りて行つて、否應なしに眞珠を三階へ連れて來てやらう。――

そこで、或る夜のこと、梧桐はいつものやうに枕もとへ菓子を持つて來させて、わざと下の者へ聞えよがしに茶を入れたり珈琲を煎じたりしたが、その晩はそれらのものを一つも喉へ通さずに居た。果して彼は一時になり二時になつても、睡くならないのであつた。ちやうど三時が打つた時に彼は、そうツと梯子段を降りて地下室へ這入つて行つた。――ところがどうであらう！ 夫人と蕪とは矢張り好い心持ちさうに睡つて居ながら、依然として眞珠の蒲團は空ツぽであつた。念の爲めに部屋と云ふ部屋を一つ一つ覗き廻つたけれども、彼女の姿は何處にも見出だされなかつた。さうして、梧桐がその邊をみしみしと往つたり來たりしながら、可なりうるさく電燈のスヰツチをパチパチやらせて居る

間も、家内中の者は何も氣が付かないらしくしいんと寢靜まつて居た。梧桐はもう夫人を呼び起して聞いて見る勇氣もなかつた。

「今夜の結果で見ると、自分が睡眠劑を飲まされて居たことは確かなのだ。明瞭になつたのは唯それだけだ。」

彼は、眞珠が未だに何の目的で、如何なる方法で家を脫け出すのであるか？　その問題をもう一度始めから考へ直さねばならなかつた。事件は今まで想像して居たところとは全く違つたもの丶やうに見え出して來た。たとへば彼に睡眠劑を飲ませたのも、夫人が與かつて居るのではなく、眞珠獨りの仕事かも知れない。家中の者が梧桐を欺して居るのではなく、彼等の凡べてが眞珠に欺されて居るのかも知れない。――そんな風にも思はれて來た。

明くる日の朝、總子を三階へ呼び寄せた梧桐は、いつもよりは稍打ち解けた態度で尋ねた。

「ゆうべの模樣はどうだつたね？」

「ゆうべも別に變つたことはございません。」

夫人は矢張り自若とした顏つきでさう答へた。

此の、最後の出來事があつたのは、それがちやうど南が梧桐の樂屋を訪ねた其の日の朝だつたのである。

「ねえ君、一體どう云ふ譯なんだらう？　誰かと妙な關係でも出來て、其奴の處へでも忍んで行くのぢやないかとも思ふんだけれど、それにしても腑に落ちない所があるし、兎に角實に不思議なんだ。僕は此の問題の爲めに此の間から散々頭を惱まして居るんだ。」

その晩、南が歸つたあとで、梧桐は服部を奥の萬盛艇へ連れて行つてその話をしたのであつた。

「そりや僕にも分らないが、しかしあの兒は上海でも不思議な事があつたんださうだね。」

「上海で?――」

さう云つて、梧桐はおかしいほど眼を圓くしながら服部の顏を覗き込んだ。

「――君はそれを誰から聞いた?」

「南から聞いたんだよ。」

「さうか、成る程、……聞いたら聞いたで仕方がないが、少し譯があるんだから、あんまり人に云はないやうにしてくれ給へ。だがあの事件に就いて南君は何と云つてたね? どう云ふ解釋をして居たかね?」

「どうと云つて、たゞ事實を話してくれただけなんだ。要するに不思議な事件だと云ふ以外には、何も考へちや居なかつたやうだ。」

「僕はあの事件が日本へ傳はらないやうに、總子と相談して好い加減に揉み消してしまつたんだが、考へれば考へるほどいろいろ不思議なことがあるんで、あの眞相は未だに僕等にも分らないんだ。だがまあそんな事はどうだつていゝ、あれと今度の事件とは別に關係がないんだから、――」

「いや。關係があるかも知れない。」

と、服部が云つた。

「なぜ?」

「なぜつてことはないんだけれど、僕にはどうもさう云ふやうな氣がするんだ。上海の事件が分らなければ、今度の事

件だつて分らないやうな氣がするんだ。」

「まあさ、そんな事を云はないで一つ骨を折つてくれ給へ。あの兒の行く先を突き止めさへすりやあ、事件は明瞭になるんだから。――僕も今夜から一層氣を付ける積りだが、君は僕の內の前に待つて居て、あの兒が出て行つたらそうッと跡をつけてくれ給へ。何しろ今度は總子の奴までが怪しいんで、君より外に賴む者はないんだよ。」

「僕だつて怪しいかも知れないぜ、僕もあの兒に惚れてるんだから。」

「ほんたうかい？」

梧桐はそんな時に直ぐと眞に受ける男だつたが、その晩は殊に血迷つても居るらしかつた。

「いや冗談だよ。惚れてる事だけは確かたがね。」

さう云つて服部はニヤニヤ笑つた。

斯くて、その日の夜中に、次ぎのやうな事件が起つたのである。――



甘き世の話

―新浦島太郎物語―

宇野浩二

一

何の事はない

「浦島太郎は龜に乘り……」

と言つた風な流儀なのだ、それでも無論日本帝國の政府が經營してゐる鐵道會社の汽車に違ひはないのだが、恐らく龜の背中の方がもつと乘心地がよい位のものであらう、中央線飯田町の停車場を乘り出して、新宿、中野、八王寺、と汽車はガタ馬車のやうに揺れながら、甚だ威勢惡く走るのだ、何處へ行くとて走るのだ？……今の世に龍宮なんてないことだ！

汽車が信州に進むと、四邊の景色が忽ち眞白になつてしまつて、そのうちに窓硝子も磨硝子に變つたやうに凍つてしまつて、やがて十一月の日は暮れて、私、半子半四郎が目指す下諏訪町に着いた時はもうすつかり夜の景色であつた。

暗い、しよんぼりした下諏訪の停車場を下りたところで、山からか湖水からか、私の耳に吹いて來る風は東京の二月の位に鋭いのである。

「早くから寒くなるんだね、」と私が俥の上で首を縮めながら叫ぶと、

「いんや、まだ〳〵寒くなります。」と車屋は泥濘が泥濘のまゝに凍つて固まつた道を走りながら言ふのである。それを大凡四五町も行くと、それから急に阪道になるところで、今迄の一筋道が二筋に分れるのであるが、私の俥はその左を取つてよつち〳〵とだら〳〵阪の道を二町あまり上り詰めた突當りにある、私が二度目にその門をくゞるところの、旅館花屋に這入るのである。

「この前の時のお部屋が今丁度閉いて居りますので、表の方の三階――三階は一間切りで、この家では一番閑靜な部屋でございます、眺望も一番宜しうございます、」と株式會社になつてゐるその旅館の、支配人の息子の丈治が私を案内しながら言ふのである。なる程、その部屋の西に面した窓に立つと、下諏訪の町中が一目に見へるのである、鼠色の湖水も見へるのである。あの手前の正面に見へる山の裾の邊から天龍川が始まるのであります、と丈治が數へたことである、あの向ふの山のその又向ふの左手には、晴れた時には木曾の御嶽山も見へるのであります、又停車場から此方の方を見ますと、甲州八ケ嶽の頭 見へるでありませう、あそこからは諏訪湖の隅の方の、山と山とが切れたところに駿河の富士山も指跡のやうに見へます、と私が山を見ることが大好きだと言ふのを聞いて、二十四歳で、金時見たいに太つた、大男の丈治は色々と數へてくれたことである。だが、今暗い寒い窓に立つて、湖水の向ふ側の右手にちら〳〵と大都會のやうに無數の電燈の光つてゐる、四萬の工女が住んでゐるといふ岡谷の町の夜景や、ずつと近く私のすぐ目の下に夜目にも一筋に明るく通つてゐる、今私が停車場から俥で來た道の兩側の景色や、更に近く私の目の下の右手に明る

い陽氣な障子の影を見せて、その中から醉うてうたふ人々のざわめきの聞える料理店秋野屋の夜の景色や、それ等を見てゐるのか見てゐないのか、兎に角それ等の景色を前にして、寒い風に吹き曝されながらぼんやりと立つてゐる私の心の中が、阿呆らしや、三十面を下げて、如何にセンチメンタルに傾いてゐたか、それを話すに就いては、先づそれより二ケ月前に第一回目に私がこの町に來た時のことから始める方が便利である。

二

手取り早く言つてしまはう、私はその前に始めてこの町に來て、旅館花屋に十日ばかり滯在してゐた間に、旅のつれづれに呼んだ藝者ゆめ子に心をとられたのである、だから私自身が誰であるか？ それは話の中で追々に織りまぜて話すことにして、最先に藝者ゆめ子が誰であるか？ を話しておきたいのである。

藝者ゆめ子はその時二十一歳であつた、背はすらりと高くて、撫で肩の恰好のいゝ女である、顏は幾分かしやくれ顏で色は少し淺黑い方ではないかと思へる、お世辭にも大層美人であるとは言ひ難いが、私には彼女が始終俯向き加減にしてゐて、口數が少なくて、その髮の毛は少し太い質ではないかと思へる上に、幾分か大きな波を打つ癖があるのだが、そのために結ひ立ての時でも撫で付けて來た時でも、島田の髷がいつでも心持ち投げやつたやうに傾き加減に見へるのさへ、少々ならず氣に入つたことであつた、よく見ると口の邊が少うし不吊合ひにふくれてゐて、二三本の金齒の外に二三本の味噌齒さへあるのだが、それまでも私には氣に入るのである。

女には、男でもだが、一寸見のよい女と、ぢつと見てゐるうちに案外別嬪になつて來る女との二種類があるものだが、私のゆめ子はその前者であつた。始めて彼女が「今晩は、あり」と言つて私の部屋の入口に手を突いて、そして私の向

つてゐる机を兼ねた食卓の斜め右の端に俯向いて坐つた時、私はこんな田舍町にも隨分いゝ藝者がゐるものだなア、とつくづく感心させられたことである。彼女はほんの十七歳で、藝者ではあるが、知らぬ男の前になぞ未だ一度も出たことがないと言ふやうに見へたものだ。

「君は近頃藝者に出たの？」と私が聞くと、

「いゝえ、もう隨分長く……」と彼女の答である。「お酌の時分からですから、もう七年になります。」

「では年は幾つなの？」と私は思はず膝を乘り出して聞いたものである。

「もう二十一です。」と言つて彼女は一寸上げた顏を又俯向かせて唇を嚙むのである。

私、その者はその時二十九歳で、獨身で、だが生れてからずつとの獨身ではなく、その以前に激しい、ヒステリイの婦人と連添つたといふ經歷を持つてゐた上に、少年の頃十五六年の間大阪の或色町に住んでゐたことで、その頃は言ふ迄もなく、その後も、今人生の三十歳の阪に來る迄も、一人として善き婦人に會つたことがなかつた、女は皆不道德家ではない無道德家で、腹からの嘘つきで、良心といふもを持たなくて、惡者でない惡者だ。三千世界の女共みな、私自身の妹だつて、妹だつて、悉く鬼に食はれてしまへと思ひ込んでゐた私は、それでゐてこの世の中で一番私の心を引きつけるものは學問でもなく、名譽でも、仕事でも、金儲けでもなく、その鬼にやりたい女人どもなので難儀してゐた私は、斯う言へば賢明な諸君は十分察してくれるだらう、何と並々ならぬロマンチストである私は、どんなにその後追々と、三度が五度とゆめ子と顏を會はすうちに、彼女に心をとられたかを。だが、それはずつと後の話なのである。

今年私は三十歳で、そんなら諸君、今言つた話の時からやつと月日は一年しか經たないことだのに、二十九歲の暮を下宿屋の部屋住で暮した私は、今は借家ながらに一軒の家長になつて、私の女中を使つて、私の女房と呼ぶ者を持つ身

となり變つたのである。ところで、この話は、その今の私の女房が、今言ふ私が三十年の人世に於いて心から親愛したところの、そして今も愛し、これから後も私の墓の下まで愛するであらうところの、藝者ゆめ子ではないのである。

話が脇道に反れたが、さて私は始めて會つたゆめ子とぽつり〳〵と四方山の話をしたことである。「自前とか分とか七三とかつてあるやうだが、君はその中の何なの？」と私が聞くのである、すると彼女は微かに笑つて、「いゝえ、」と言つて俯向くのである。「こゝではさういふ區別はないの？」と聞くと、「ございます、」と彼女は答へるのである。「ぢやあ、君はその中の……？」と聞くと、「私……」と言つて彼女はやつぱり微かに笑つて俯向いて答へないのである。

が、だん〳〵氣が付いて見ると、ゆめ子の身に着けてゐるもの、着物から帶は言ふに及ばず、櫛から、簪から、半襟から、指輪から、帶締に至るまでも仲々そこらの田舍藝者にはなく贅澤なことであつた。これでは餘程よい旦那が付いてゐるのに違ひないと思ひ付くと、私は今夜始めて會つた間柄をも忘れて、最早や燒餅をやいて、味氣ない氣持に襲はれたものだ。が、後で知つたことには、彼女は下諏訪の町の藝者家中での一番金持であると評判されてゐる、夢の家の娘分だといふことである。彼女の眞の叔母に當る彼女の養母であるところの夢の家の主人は、以前やつぱり藝者をしてゐたものだが、有數な辣腕家で、藝者を止めて藝者家になつてからは益々金を貯めることを心がけて、その爲に人の評判はよくないが、その爲に稼業は益々發展して、今では隣の町の上諏訪とこの下諏訪とに二軒の藝者家を經營してゐるといふ話であつた。

「三味線をひいてくれない？」と私が言ふのである、「木曾の御嶽山をうたつてくれ給へ、ついでに伊那節も教へてくれ給へ。」

「私駄目なんですよ、」と半分聞える聲で言つて、ゆめ子は極く素直に傍の三味線を取つて、場所が宿屋であることの遠

處からなのであらう、極めて低い水調子で、

ヘ木曾のなア、ナカノリサン、と歌ふのである、三味線の調子が低いので如何にも歌ひづらさうに歌ふのである。

ヘ木曾の御嶽山はナンチヤラホイ、とだが一寸も不平も言はず、辯解もしないでつゞけるのである。

ヘ夏でも寒いヨイヨイヨイ、とそして一節うたひ終ると、「駄目ですわ、」と言つて一層下を向いてしまふのである、彼女の唄の聲は聞き手に彼女の幼な聲を思ひ出させるやうなそれであつた、その唄の意味に就いては無論のこと、何の爲にさういふ稽古をせねばならぬかといふことも何にも知らぬ幼年の頃に、彼女の剛慾な叔母の養母からか、癇性な藝者上りの師匠からか、二尺さしで叩かれたり、恐い目で睨まれたりしながら、無心の聲を張り上げて歌つた頃の聲を忍ばせるのである。それは又私、少年の頃に私が養はれた、大阪の色町にあつた私の叔父の家の隣の、私の幼な馴染で私と同い年の小さいおもよの事を私に思ひ出させるのである。おもよの姉は二人とも藝者であつた、だから小さいおもよも藝者になることに定つてゐたのである。小さい私と小さいおもよとが、大阪の小路では夏になると此方側の家と向ふ側の家との屋根から屋根に布切の日覆を張り渡すのである、そこらは色町のことだから、藝者が芝居をしたり踊の會をしたりした時に、客や贔屓の者たちから贈られた幟や幕の古いのをその日覆に廢物利用がされるのである、だから私とおもよとはその幟の日覆の下で、夏の日盛に、道には犬一疋も通らず、大人は皆家の中で晝寢をしてゐる頃を、お母さんごつこをして遊ぶのである。が、私たちが夢中でお母さんごつこをしてゐるうちに、いつか時計は四時になつて、恐いおもよの姉さんが、「おもよちやん、そんなとこでいつ迄も遊んでゐないで、お稽古をしな、さあ、直お歸り、」と呼ぶのである、そこでおもよは彼女の家に歸るのである。小さい私は連れに捨てられて悲しくなつて、おもよの歸つたおもよの家の表の格子戸の外に立つのである。夏のことだから、格子戸の内側には障子の代りに簾が吊つてあるので、格子の桟につかま

つて、家の中を覗き込むと、小さいおもよが體を斜めにして大きな三味線にすがり付きながら、手に餘る撥をつかんで姉さんの前に坐つてゐるのが見えるのである、そして、

〽一本目には池の松、とおもよは冬になつてから鳴く蟋蟀見たいな、枯れた悲しげな聲を上げて歌ふのである、雁越しだからさう見へるのかも知れないが、おもよの顏は歪んで泣き顏に見へたものだ。ゆめ子の唄は今私にそれを思ひ出させるのである。

尚、餘談だが、おもよと私とはいくら友達にからかはれても、早い話が同じ家に住んでゐるやうな感じになつて、好きは好きでも戀の好きにはならなかつたところが、十五歳の時から三年程の間私たちはお互に妙に恥かしくなつて、道で會つても餘り話をしなくなつて、終にはだん／＼知らぬ顏をするやうになつて、中學生の私と藝者の彼女とはもう永久に並んで坐るやうなことにはなるまいと思はれてゐたのに、ふとした事から十八歳の夏に二人は戀仲になつた、それは彼女が病氣で藝者を休み、私も病氣で學校を休んだ間のことである。そこで戀仲の私たちがどんな話をし合つたか、今はもうすつかり忘れたが、私は藝者が止めたくて止めたくて仕樣がない、と何かの時彼女が呟いて言つたのを覺えてゐる。私は今ゆめ子の顏を見てゐると、そんな事も思ひ出すのである、するとゆめ子とおもよとがどこやら似てゐるやうにさへも思へて來るのである。

〽伊那の平に蕚なら二本、思ひ切るよし、思ひ切るよし、切らぬよし。

とゆめ子が歌つた時、靜かになつた夜の表の方を、チョンチョンと拍子木を打つて通る音が聞えるのである、十二時を知らせる藝者町の、各々の藝者に引上げるべき時の來たことを知らせる合圖なのである。「さやうなら、」とゆめ子は叮嚀に挨拶をして歸つて行つた、後に私は坐つたまゝ、一時間ほどぼんやりとしてゐたものである。

三

その次の日の夕飯の時、束髪に結つた、丸々と肥つた、田舎の女學生見たいな、可愛い顔をした十七八位ひに見える女中のおむなが、「今夜も藝者をお呼びになりますか？　で、やりぱりゆめ子を掛けませうか？」と言つた時、「さあ、そんなに呼んでもいゝものかなア、」と私は冗談見たいに言つて、それはまだよかつたが、「ゆめ子さんはいゝけど、そんなに毎日呼ぶと惚れてるやうで悪いかなア？　今夜は誰か別の人にしようね？」とつい私一流の本心を晦ますやうな冗談見たいな言葉を吐いてしまつたので、直にその後から相手のおむなにもそれと察しられるやうに、「ゆめ子さん見たいな背のすらつとした、大人しくて悧巧でそして正直な優しい人を呼んでもらはうな、」と言つた、結局そんな人はゆめ子の外にあるまい、だからやつぱりゆめ子を呼んでくれ給へ、と言つた私のつもりなのである。だが、此方から何か言ふと、恥かしがるやうな恰好にその丸々として肩を拗るやうに縮めて、にやりと笑つて眞白な歯を見せる越後生れのおむなには、私のそんな廻りくどい言葉の通じよう筈はなく、やがて昨晩とは違つて割合にからりと快活に私の部屋の入口の襖が開いて、「今晩は、あり、」と言つて這入つて來たのは、ゆめ子ではなくて、後でその名を知つたのであるが三春家のくれ葉といふ藝者なのである。

くれ葉は顔も恰好も當り前の形をしてゐるのに、背の高さが五尺に足らぬものだから、小女といふよりは背低といふ種類の女なのである。彼女は部屋の入口で手を突いて、立上ると「御免下さい、」と言つて私の机を兼ねた食臺の眞正面につか〳〵と來て坐つた。少し胸が鳩胸で、突き出てゐるので、相對して見ると仲々りゆうとして見えるのである、それにしても重ね重ねその背の低いことが殘念に思はれるといふことは、少し荒れ性の膚かと思はれはするが、色は生地

から白くて、眉の恰好も目元も鼻附も十分に美しい女なのである、年の頃は二十二か三かと見へるが、難を言へば口が少し大きくて、笑ふと奇麗な、細かくそろつた歯がこぼれるやうに見へるにも拘らず、どこやら少し恰好でなささうに見へるのだ、さう言へばその張りのいゝ目の光も些か鈍いと思はれるのだ、だが、仲々いゝ藝者がそろつてゐるわいと私は心の中で思つたことである。

くれ葉はその顔から窺はれる通り、到底氣の廻りの早い、心のきいた藝者といふ譯には行かなかつたが、その代り善良なる事に於いては閻魔大王をも微笑ませるに違ひなかつた。

「君は若く見へるな、」と私は何氣なく言つたのであつた、「奇麗な人は徳だな。」

「私、これでもう……八なんですよ、」と眞正直にも彼女は口に袖を當てゝ言ふのである、もう二十八になると聞いて、實際私は大いに驚かされた。

「二十八でも三十でも、男でも女でも、兎に角獨り身が一番いゝな。獨り者、八千歳九千歳萬歳だな、」と私は言つた。先にも一寸言つたやうに、嘗てヒステリイの女と一年間連れ添つた間、毎日程彼女に打たれたり抓られたり、人に聞える大聲で泣き叫ばれたり、何處へ行くにも私を一人で外出さしてくれたことはなかつたところの、地獄見たいな夫婦生活がまだすつかり記憶から乾き切らなかつた時分のことで、私は何の氣もなくさう言つて、「ね、獨り者のうちが花だよ、君はこれ迄に世帯を持つたことがある？」と聞くと、

「……」と彼女は答へないで點頭くのである。

「この町で？」

「いゝえ、甲府で。」と彼女は答へるのである。彼女が私の聞くところに答へて言つたことには、彼女は甲府の生れで、

始め上諏訪で藝者になつて、そこで引かされて、男と一緒に甲府に歸つて一年餘り世帶を持つて、それから男と別れて又上田で藝者に出て、そして今はこの町で同じ稼業をつゞけてゐるとのことなのである。

「君、ゆめ子さん知つてる？」と私は當り前のことを聞いて見た、何とゆめ子のことが忘られないので、そんな風なことを言つて見たのだが、少し恥しくなつて、「知らない筈はないだらうが、昨夜、僕、あの人を呼んで見たの、大人しい人だね。ずつと去年から休んでゐて、四五日前から又出たんだつて？」

「えゝ、」とくれ葉は返事をする度に殊更に口を噤んで點頭く癖があつた、すると少し大振りな口元が受け口になつて、それも亦彼女の魅力になる仕方で、「赤ちやんが生れたもんですからね、」と言ふのだ。

こつんと私はその言葉で腦天を叩かれて、思はず目をつぶつた時のやうな氣がされたが、

「それは目出度いな、」と出來るだけ冷靜に答へたものだ、實際、私はさういふ時、腹の中はいくら煮え返つてゐても極めて冷靜を裝ふことが出來る質なのである。「で、旦那樣と一緒にゐるの？」と無論そんな筈はないとは萬々察しながらも、まあそんな風なことを聞いて見たのだ。

「いゝえ、」

「それやいけないね、」と私はわざと大きに驚いた見えをして見せた。

「だつて、此邊の人は皆薄情な人ばつかりなのよ。あなた、ばかに心配してるのね？」

「心配だよ、」と言つて、私はくれ葉と共に聲を合はせて無邪氣らしく笑つたことである。だが、その會話があつてから、私の一流の妙な冗談がもう口を突いて出なくなつたことだ、ゆめ子と、彼女とはその時私はまだ一度しか會つてゐない仲ではあるが、だが親愛極まる彼女と、その彼女の腹に子を附物にした男とに就いて、私の心は妙に抽象的に色々と物

思に沈んでしまつたのである。ずつと先から、表の料理店、多分秋野屋の二階でだらう、三味線に太皷が這入つて、かつぽれや、深川や、木曾節の囃子が秋の夜の空氣に響いて頻りに聞えて來るのである、年少のお酌たちの合唱として「そら來いアバよ、又來なよ、」と黄色い叫聲も聞えて來るのである。だが、かつぽれも深川も木曾節も、お酌の甲高い叫聲も、私の耳には皆諸行無常と響いたことである。

四

その時分は妙に雨ばかりつゞいたことであつた。二階の私の部屋の椽側に置かれた籐椅子に横たはつて、くれ葉に會つた翌日のことだが、一週間ぶりで空が晴れたのだ、秋の空を青い天に白い羊のやうな雲がふわり〳〵と浮いてゐるのである。當時、私の身と心はその白雲の如く悠然とした境涯にあつたことを、私はまだ諸君に話してなかつたが、私はその前の四五年の間といふもの、眞にその日その日の食に困るほど貧乏してゐたものである、もう少し身體が丈夫であつたなら私は恐らく町で立ちん坊をしたことに違ひなかつた、今少し臆病な性質でなかつたら多分私は盜坊になつてゐたかも知れなかつた、もし私が女であつたなら無論私は身を賣つて今頃は泣いてゐたことであつたらう。ところが幸か不幸か、年頃私が身を寠してゐた文學といふ變な夢見たいな仕事は、その外のどんな寛大な會社でも又主人でも、或ひは楠正成だつて、又大海のやうに度量の廣い神樣だつて、氣の毒だがこの人間は片輪です、何處へ廻しても何の役にも立ちさうにありません、死んだ方が此者の爲です、無論帝國にも無用の人物です、と言つて共和政府にだつて鼻つまみでせう、かと言つて過激派に入れたつて邪魔者に過ぎないでせう、仕樣がありません、島流しにしてしまひませうか、一思ひに殺してしまひませうか、と言はれるやうな人間の私を、何とその片隅に住むことを、長の苦勞の後だつたが、

許してくれたのであつた。だから、私は長い間の貧乏から稍々救はれ、恐いヒステリイの女房からも獨立し、さういふ私見たいな子を持つて、外に他依りにする者がないものだから、泣き泣き他人の家から家を轉々してゐた母親をもやつと私の下宿に引取り、そしてこの信州下諏訪の町に新稼業の小說を書きに來てゐた身の上だつたのである。ところで東京の雜誌社に頼まれてゐた二三の小說も最早や書き上げてしまつた時であつた。籐椅子の上に寢轉んで天を見てゐると、これは少しをかしいぞ、と私は自分と自分の身をそつと抓つて見たものである、うか／＼してゐると、私の目の前に突然ふつと烟が上つて、それと共に私は白髮のお爺さんになつて、そして墓の下に入れられてしまふんぢやないかな？だが、やつぱり夢ではないらしい、と思へるやうな身の上だつたのである。だが、諸君、私は言ふが、そんな時、人間はたとへ三十歲が四十歲、五十歲が六十歲であらうが、或ひは又虛無主義者であらうが、人道派であらうが、さては惡魔主義者であらうが、さては私のやうなロマンチストであらうが、うつかりしてゐると、トン／＼と彼の胸を叩きに來るものに見舞はれるのである、戀といふものである。

藝者ゆめ子には因業な養母があつて、おまけに子があるといふ事を聞いた時、私は一つこつんと頭を押されて突き飛ばされた氣になつたが、時計の秒針が一廻りしないうちに、私の心持は忽ちそんな溝を飛び越えてしまつて、因業な養母を持ちそして赤ン坊を生んだところの藝者ゆめ子にやつぱり熱心に戀したものである。だが、私の癖として、その日は晝間から彼女を呼んで、夕飯を一緒に食つて、そして十二時の拍子木が鳴るまで彼女と向ひ合つて坐つてゐたが、酒を飮まない私が彼女にした話はなるべく彼女を退屈させないように、面白い話や倦きない話をしたといふだけで、而もその形式はこの前の晩より一層洒々淡々と表現したものである、その中に一言や二言位、私はあなたが好きであります、といふ意味を盛つたとしても、それは到底相手に分らない程、廻りくどい言葉や、別の言葉や、冗談の言葉で言つたも

ので、而もそれが相手に通じさうになると、私は又あわてゝ忽ちそれを打消すやうな冗談でごまかしてしまふのである。

藝者ゆめ子はやつぱりこの前の晩のやうに、俯向き加減に行儀よくきちんと坐つて、「さうそんなに隅の方に坐つてないで、机の前まで來給へ、」と言ふと、一二度辭退してから私の言葉の通りにし、「何か食べない？」と聞くと、「いえ、今澤山です、」と答へ、それも二三度私がすゝめて、「ぢやあ、果物とサイダはどう、嫌ひ、食べる？」と聞くと、「いたゞきます、」と答へるのである。唯、その日は前の時と違つたことは、彼女はもう十七八には見えないで、二十一二の立派な、一人前の藝者に見えたことである。女はなるべく悧巧で、拔目がなくて、時々は悪いこと位企らんで、しかし成るべくぼろを見せないで、悪魔の子分位にはなれるやうな方がいゝ、と私はこれ迄度々考へ、今もやつぱりそんなのもいゝと思ふことであるが、それと共にやつぱり着實な考は、このゆめ子のやうな素直な、そして悧巧な、正直な女が一番いゝ女なのかなア、とつくづく思つたことである、私はこんな善い女を始めて見たと思つたことである、戀は輕信の母親だといふ諺があるが、諸君、私の話を笑はずに聞いてくれ給へ。

五

私はそれからまだ二三日の間何するといふ用事なしにその町に滯在してゐた、その間もう大抵外の藝者は呼ばずにゆめ子とばかし會つてゐた。近いうちに、明日にも、歸る歸ると言つてゐたので、時々ゆめ子から電話で聞き合はして來る、すると私は「來給へ、」と呼ぶ、そして又滯在を一日延ばす、と言つた風で泊つてゐたのである。その間に私の方からも無論彼女の方からも、彼女の赤ん坊に就いての話は一度も出さなかつた、そして私たちは或朝別れたのである。

私は私のゆめ子に對する戀心を、實は餘りはつきりと戀戀と言つてゐると、何だか自分と自分で誇張して物語つてゐるやうな氣もされるのである、だが、汽車がいつの間にか信濃の山を下つて、甲斐を通つて東京に進むに連れて、私の彼女を思ふ心が薄れて來ないのである、そしてセンチメンタルになるのである。私は私の母の待つてゐる東京の下宿に歸ると、早速彼女にゆめ子の話を聞かせたものだ、だが、お母さん、心配は入りませんよ、その藝者には子供があるのですよ、ハハハハハ、と言つて笑ふ後から、私は又なるべく淡白な済物を済せて實は惚氣の話を彼女に聞かせたものである。それを聞く老いたる彼女の心も亦哀れむべきものなのである、彼女は長い間、五六年前彼女が東京の私の傍に來て以來、始めの一二年の間こそ今にどうにかなるのだらう、とたよりないながらに望みを持つてゐたのではあるが、三年四年と經つと共に殆ど望を失つてしまつて、のみたらず一方ならぬ激しいヒステリイの嫁に虐待されたり、自分の持つてゐた着物をみんななくされたり、この世は長生して住むに宜しくないところだと觀じてゐたものに違ひない、それがいつどんな事をその不甲斐ない息子がし出かしたのか知らないが、今年になつてから、而もこの二三ケ月以來大分彼にも運が向いて來たやうに見へる、神樣有難うございます、と思つてゐたのである、この上は、どうぞ彼によい嫁が來ますよう、その嫁は別にどんな無學な者でも卑しい身分の者でも、彼の氣に入つた者でありさへすれば、そして願はくは前のヒステリイの嫁女のやうに無道に私を虐めるやうなものでさへなければ、私はもうこの上の願はありません、と思つてゐた者であつた。だから、今私から諏訪の藝者のゆめ子が如何に大人しくて素直で、優しくそして悧巧な女であるかと聞かされた時、私がどんなにそれを何でもなささうに、別に惚れた譯ぢやありませんよ、と淡白に話したとはいへ、六十年に近い彼女の浮世の經驗は、そのゆめ子とかいふ女、息子の大分氣に入つたものらしいな、子供があるとかいふが、それは少し困つたことだが、まあ、それも一緒に貰つて育てるとか、里親にやるとか、何とか仕樣があるであら

う、と彼女は思つたに違ひないのである。そこで彼女は、その人は幾歳ぐらゐ？ ヒステリイ氣はない？ 子供は男の子、女の子？ そのうち私も一度湯治かた〴〵行つて、會つて來ようか知ら？ などといふのである。それを聞くと、長い間この世に關してなるべく自棄に出鱈目に、不逞に、味氣なく考へ馴れてゐた私も、久しぶりでこの世の甘さに泣ける氣になつたことでゐる。

「ところで、僕は妙に變なはにかみやですから、色々世話になつてゐながら、到頭一度もゆめ子に祝儀といふものをやつて來なかつたのです、で、子供に何か玩具のやうなものを送つてやりたいと思ふのですが、お母さん、何か買つて來て下さいませんか？」

「よし〳〵、」と母は言つて、それを買つて來ては、こわれてはいけないが、何か木の箱を造らせなければいけないだらうか、すつかり綿で包んだものだらうか？ などと色々と心配して荷造をして、これは小包郵便よりも鐵道便の方がいゝだらう、では、私が夕方散歩かた〴〵、牛込の停車場に持つて行つて來よう、と言つて老の白髪を秋風に吹かれながら、その表に下諏訪町夢の家ゆめ子樣と書いた荷札を附けた小包を、私の息子も他所の藝者にたとへ僅な物でも送つてやるやうになりました、この上は私を邪魔物にしない大人しい嫁が彼のために一日も早く出來ますよう、と心で祈りながら、彼女も亦世の中は長生もせねばならぬ、私が一年前に心に願つてゐたことをお神樣が直にお取上げになつて、その時死んでしまつてゐたなら、今のこの世の甘さを知らずに墓に行つたらう、と思ひながら夕方の神樂坂を下りたことに違ひないのである。

或時は又彼女は自分の下駄を買つたついでに、こんな下駄を買つて來た、と言つては私に二十歳の女の下駄を見せるのである、彼方はこれから寒い、雪の多いところなんだらう、だから日和下駄をと思つたけれど、歯の高いのにしたの、

直に荷造りをして送つてやりませうね、今度は私の名にしてやらうか、と母は四十年も前の娘の時にしたかと思はれるやうな、子供らしい首の傾げ方をして私に言ふのである。

「いや、それはいけません、」と私は唾を呑みながら、わざと快活に、「それでは向ふで僕の細君だと思ひますよ、女名前ちやいけませんよ、」と言つて磊落に笑つたものである。

けれども、それ等に對してゆめ子の手紙はいつも餘りに淡白極まるものなのである、それは無論私のやうに裝つた淡白ではないことに違ひない、有難く存じ候、一日も早くお出で下さるやう指折り數へて待入候、と書いてあるのである。二度ともさう書いてあるのである、「書簡文手引」か、「女の文の數々」とか、そんな本の文句そのまゝなのである、だが、それ故に私は尙一層彼女に心を引かれるのである。

そして私はその年の十一月の末の頃、一ケ月ももつとも滯在してゐるつもりで、この話の第一回に書いたやうに、浦島太郎のやうに勇んで、ゆめ子の町へと立つたのである。

六

さうして第二回目に下諏訪に着いた晩、私は心の中では、早速ゆめ子を呼びたい思に充ちてゐたが、それでは餘り心の中を見透かされるやうな氣がするので、女中の入れてくれた炬燵の前に坐つて、これで先づゆめ子の町に來たことだ、と海岸で朝の深呼吸でもするやうな氣持になつて、心よ靜まれ、靜まれと思ひながら、私は頼まれてゐた雜誌の小說を書き始めたのである。そして書き疲れると、部屋の南側の梯子段の下り口のところにある、中間の廊下に立つのである。そこに立つと南に向つて中間の硝子窓が嵌まつてゐて、それを通して下諏訪の町の南の部分が見えるのである。方々に

風呂屋の煙突のやうな煙突が百本も立つてゐるのである、製糸工場の煙突である、その中の何本かの持主がゆめ子の子の父親なのであらうと思ふと、無心の煙突も憎らしく見へるのである、それ等の煙突よりもずつと近くの私の目の下に見へる町々が、その中にゆめ子の家もあるところの、下諏訪の色町なのである、ゆめ子よ、健在であるか、と思つて、私は又部屋の中に這入つて原稿紙に向ふのであつた。

一つの題目の原稿を書き上げてから、とも思つたし、何よりも宿屋の丈治などはどうでもいゝが、ゆめ子に彼女に對する私の心持を見透かされることが恥ぢられて、私はそこに着いてから三日の間辛抱して彼女を呼ばなかつた。だが、四日目の晩に彼女を呼んだ時、私の心は彼女の顏を見るまで少年のやうに震へたものである。だが、二ケ月振りで私たちは向ひ合つて坐ると、先づ彼女が叮嚀に私の贈物の禮を言ひ、私は「お禮を言はれては閉口です。」と挨拶を返し、隨分寒いところですねとか、今年はまたこれで寒くない方なんですよとか、二人の會話は普通の客と藝者との初對面の會話の十二倍も冷淡なのである、私のはさうでない感情をさういふ衣で包んだのであるが、彼女のはそれが表面でもあり內容でもあると見へるのである。この前の時は、到頭彼女に、あることは知つてゐながら私から彼女の赤ン坊に就いての話をしなかつたが、今度は玩具や何かの事があるので、いつとなく彼女からその話をし出した。始めのうちはお座敷に出てゐても、乳が張つて來て困つたものだとか、夜家に歸つて行つた時分に丁度一眠りした坊やが目を醒ましますので、私が抱いて寢させるのである、坊やの體はそれは溫かいのですよとか、その可愛さは十二人の市村羽左衛門とでも換へ事が出來なさうに、眞に可愛いもののやうに彼女は色々と話すのであつた。私は少しばかり平らかでない心持を抑へながら、赤ン坊よりも可愛いものはないでせうね、自分の腹から生れた子を持たない女なんてものは、女であつて女でない、女は元來男の肋骨一本から神樣がこしらへたもので、人間と獸との間位のところのものだが、子の愛を知つて

始めて人間の仲間に這入れるものだと物の本に書いてありますよ、それは本當のことですよ、今こそあなたには坊やはあなたの苦の種に違ひないけれど、それはあなたの玉手箱で、金庫で、寶石で、命ですよ、僕は今のところ女房といふものは一寸も欲しいとも、それがないと不自由とも思ひませんけども、自分の子といふものは本當に欲しいと思つてますよ、男の僕だつてさうなんです、貰つた子供なんて駄目なことです、目がつぶれてゐても、足が一本位なくても、自分がなくてはこの世に出て來なかつたところの、自分の子といふものがなくてならないのですよ、と私はそんなこと、口で言へなくても私の十二倍も心で感じてゐるに違ひないゆめ子に、今更らしく言つて見るのである。

相變らずゆめ子は下を向いたまゝ、時々一層下を向いて點頭くのである。そして「母さんはね、」と彼女は言ふのである。

「うちの母さんはそれや喧ましくつてね、私が自分の乳が十分にやれないものですから、半分はミルクで育てるんでせう？　それが何處のはいけないとか、あそこのは薄いとかつて、それや厳しいんですよ、」そればかりではない、彼女は彼女の養母の話を、色々と賞めてするのである。餘り露骨でない程度で、彼女が若い頃どんなに三味線や唄がよく出來たかといふことや、自分は二歳の時に貰はれて來たので本當の母さんのやうな氣がするとか、又その母さんはどんなに自分の爲を思つてくれるか、從つて厳しく叱るかとか――私はこの文章の始めに彼女の母親が因業で、慾張りで、金の爲にはどうやら人の義理などは平氣で缺かす女のやうに書いたが、無論それはゆめ子から聞いたのではなくて、他の人々から後に聞いたことなのである。他の人の言ふのには、あんな喧しい、厳しい人はない、ゆめちやんはそれでも自分の眞の叔母さんだからでせうが、まあよく辛抱したものですよ、御覧なさい、藝者もあそこの家で一年なり二年なり勤められたら、それだけでその人間が信用が出來ると言はれてゐる位ですよ。

「それにしてもゆめちやんは、」とこれはこの物語のずつと後で出て來る小瀧といふ老妓が話したことである、彼女が言

ふのである。「私はゆめちやんが未だお下げに結つてお辨當を下げて學校へ行つてる時分に、あの家に抱えられて行つたのでしたが、それからずつと四五年あの家でお世話になつてゐましたが、あゝ、夢のやうですね、學校の歸りが遲いと言つては叱られ、お稽古の覺えが悪いと言つては叱られ、女の癖に炬燵に足を出して坐つたと言つては叱られてゐたゆめちやんが、もう人の子の母さんになつてるんですからね。大人しい子でしたよ、だが、とても强情な子でしたよ。その代り、ゆめちやん、これは誰にも言つちやいけませんよ、と一言口止めしておいたら、誰が何と言つても口を切られても喋らないやうな子でしたよ。私はゆめちやんが身持になつたといふことを聞いた時には何遍嘘だと思つたか知れませんよ、私も迂濶ですわね、あの人が七ヶ月になるまで知りませんでしたの。ゆめちやんはね、七ヶ月になるまでお母さんにその事を言はなかつたんですよ、今日は言はう、明日は打ち明けよう、と思つてから二ヶ月經つたと言ひますものね、いつその事死んでしまはうと、お坐敷の歸りに濠水の傍へ行つたことが幾度あつたか知れなかつたと言つてます、到頭私がその事を聞いて、私から母さんに話して上げたんですよ、」と老妓小瀧はつゞけるのである。「そして愈よ赤ちやんが出來るとね、母さんは少しのお金を附けて、やつてしまはうと言ふんでせう、ゆめちやんはどうぞ堪忍して育てさして下さい、どうぞ人にやらないで私の乳を無駄にさせないで下さい、と色々とあつた末、それぢやあ私は知らない、お前藝者に出てお前の力でお養ひなさい、といふことになつたんださうです。ね、可哀さうに、そんなにしなくたつて、あそこのお家はお金はどつさりあるんだつて言ふんですものね、ゆめちやんの一人ぐらゐ結構遊んで居られるんですから、せめて赤ちやんが乳を離れるやうになる迄、ね……」

七

でも、その頃は私は一日おき位にゆめ子と會つてゐた、少しでも原稿を書く時間を縮めて彼女と會ふ時間を長くし、そして向ひ合つて坐るとぽつり〳〵と張り合ひのない話をするだけであつた、が、私にしてはさうして彼女の顔を見て、彼女と切々の話をして、彼女と一つの膳に着くことだけで十分の喜びを感じられたのであつたし、大人しいゆめ子にしても酒を飲んで大騒ぎをしたり、直に體を觸りに來たりする亂暴な客の席に出るよりも、私の席に來る方が、蝸のやうに退屈な客ではあるが、如何程か保養になると思つてゐたのに違ひなかつた。ところが、それが一週間か十日程した日のことであるが、上諏訪の町に、その町の藝者の演藝會がこの十二月の十五日に催されるとかで、彼女の母親がその町にも藝者家を經營してゐる關係上、抱え子に餘り藝の出來るものがゐないからといふ譯で、ゆめ子がそれに出ることになつて、彼女はこの寒いのに毎朝九時の汽車でその町に稽古に出かけるのである、稽古を終つて歸るのが午後の四時の汽車になるのである。私は妙な私の遠慮する心から、すると、今迄のやうに日のあるうちは無論彼女は隣の町に行つてゐてゐないのだし、夜だからと言つてもさう自分だけのもののやうに呼び附けておくことはどうか知ら、と氣が引けるのである。折から町の名産の生糸の相場は天井知らずで、未曾有の高値といふ好景氣なのだ、從つてこの町では犬も藝者を呼ぶ時なのだ。それに金と約束とに縛られてゐる私の原稿も急がねばならなかつた。午後の四時頃になると、私は原稿のペンを置いて、私の部屋の西に面した窓に立つのである、何を見るとて立つのであるか？ ポツポツと白い烟を吐いて、上諏訪からの午後四時の汽車がこの町の停車場の屋根の下に止まるのである、あの汽車でゆめ子は稽古を終つて歸つて來るのであると思つて、私は彼女の停車場から家への通路を考へるのである、それは當然私の窓の下に一直線に通つてゐる道に來て、私の宿の下で曲つて、溫泉町らしいでこぼこの町の阪の中途に建つてゐる、彼女の家に歸るに違ひない、だが、彼女を見ようとして窓に立つ私を彼女に見られることは、人の七倍も恥かしがりな性質の私には氣が引けてなら

ぬので、私はその窓のところに坐つて、目だけを窓の縁に出して眺め又眺めたものであるが、十分待つても三十分まで待つても、到頭私は一度も彼女の姿を捕へたことはなかつた。停車場から彼女の家へもつと遠つた近道でもあるに違ひなかつた。

八

花屋旅館の私の窓の、その家と隣り合はせのやうになつた、私の斜め右手には先にも言つた料理店秋野屋の座敷が見へるのである。ところで、花屋は丁度一本の道の突當りの位置にあつたので、その道の兩側の角に、それと三角形の各々の頂點の位置をとつて、私の窓から向つて左には旅館角屋、そして右には諏訪ホテルが、私の方の位置が一段高いところにあつたので、目の下に見へるのである。毎日窓に立つて、ゆめ子の姿の見へるのに待ちあぐんでゐる私の目を、いつも必ず引く一つの部屋があるのである、それはその角屋の三階の二間を占領して、多分湯に這入つては炬燵にあたり炬燵にあたつては酒を飲んでゐるので、この寒さにも拘らず絶えず體が暑いのであらう、眞白な雪空を背景にして障子を一ぱいに開けて、いつでも一人か二人の藝者を傍に置いて、屢々取卷らしい一人の男を傍に置いて、いつも獅子のやうに大聲に叫んで飲んでゐる一人の男の遊蕩する光景である。始め私はその取卷の方の男を主人公だと思つてゐた、そして叫んでゐるのもその男のやうに見へてゐた、何故と言つて、そこと私との間は近いやうで可成り離れてゐたから。で、顏の形がやつと見へるか見へないか位であつたが、よく見ると、主人公の方が色の眞黑な、五尺に足りないかと思はれる小男なのである、そして取卷の方が確に髭を生やした瘠せてはゐたが背の高い立派な男だつたのである。その事を發見したのは、或時、それはゆめ子を見ようとしてゞはなく、湯上りの體を冷ますために私が例の窓に立つてゐると、

その私の姿を認めて「ワーイ、君――君――」と叫んで向ふの窓に立ち上つたのが、その獅子のやうな大聲で、そしてそれが小男の方だつたのである。

そこに、二人の時でも一人の時でも、或ひはもつと大勢ゐる時でも、必ず缺かさずに呼ばれてゐる藝者は、どうも三春家のくれ葉らしく見へるのである、そして後で聞いたことであるが、確にそれはくれ葉で、そのくれ葉を贔負にする大聲の小男は伊那の大百姓とかで、長い間彼の女房との間がうまく行かなかつた、二人の間には子もあるのだつた、が今度愈よ全財産を眞二つに分けて、その半分を女房に、後の半分を自分が持つて家を出て來たのださうである。そして彼はもう一ヶ月半ほど角屋に泊つてゐるのだが、持つて來たその女房と山分けの財産を全部そこの料理人の熊といふ男に管理さして、あの口髭を生やした立派な男の取卷といつたのは料理人の熊だつたのである、連日連夜さうして遊んで居たのださうであるが、近頃、彼は誰に勸められたのか、妙な事を考へついたのださうである、と言ふのはくれ葉を彼の女房として身受して、彼女にしる粉屋を出さして、自分もそれを渡世にして送らうと計畫したのである。そこで、あれこれと物色した結果、兄弟で飛脚を渡世にしてゐる、角屋の筋向ひの某といふ者の家を買收して、その二人の獨身の飛脚に汁粉をこしらへたり、出前をしたり、或ひは家に食べに來た客の前にしる粉を運ぶ役をさせることにして、勘定場にくれ葉を坐らして、自分は奥の間で風雲を見てゐよう、そしてよい機會には相場でもしよう、と斯う考へたのださうである、そして一週間ほど前からその飛脚の家に大工を入れて、それを汁粉屋に改築してゐるのださうである。

「ところがね、その方お酒飲みなんでせう、」と或晩藝者ゆめ子は、上諏訪で買つて來ましたと言つて、私に私の好物の煎茶を持つて來てくれて、それを立てながら、持前の靜かな調子で話しつゞけるのである、「二日に一遍位はその普請場に出かけて行つて、飛脚さんの兄弟も、大工さんや左官さんも、みんな集まれ、集まれと言つてね、その鉋屑だらけの

中に坐つてお酒をお上りになるんでせう、だから普請がちつとも進まないんださうですよ。」

「何といふ人なの?」と私は興味を覺えて聞くのである、「主人公といふのは、あの小さい、色の黒い、獅子見たいな聲を出す人でせう?」

「えゝ、」とゆめ子は俯向いたまゝ更に俯向いて點頭く樣をして、「何でも加取横右衛門とかつて聞きましたが、よく存じません。」

そんな他所の人の噂をして、私とゆめ子とは彼女が上諏訪に通つてゐる時でも、三日に一度は一緒に御飯を食べて話し合つたことであるが、何故か、それは幾ら甘い私でも戀してゐるからと言ふばかりでなく、私の態度もさう下品ではないが、彼女の上品な顔立や、態度や、往來する度數が増すに從つて益々彼女が貞淑な女の心持を持つてゐることが見へるにつけて、私は固くなるのか、言葉使ひも女友達に對するやうに叮嚀になつて行つたものだ。そんな貞淑な女がどうしてその爲に我と我身を湖水に身を投げようと再三企てるやうなことに至らせたところの、人の子供を身持するやうになつたのか? 諸君よ、女の腹から生れた人間で、誰かこの女に石を投げる資格があるか! それは神樣でなければ知らないことである。

だが、私が信じて疑はないことは、姦淫の罪を犯した者として、死んで彼女と彼女の子の父とが閻魔の前に引出されて、姦淫を犯した者は地獄の法として、一身兩頭の獸に墮して、魂の生きてゐる限り、その獸は針の林を駈けながら、兩方の頭と頭とが一刻も休まずに憎み合つて嚙み合はねばならぬところの責苦を受けるのだ、そら、小使の青鬼よ、この兩人の體を一つにして、首だけをそのまゝ二つ一つの體につけて、劍の林に追ひやれ! と閻王が宣告する時、一日に萬里を走る白馬に跨がつて、觀音菩薩が現はれて、その女を助けてやれ、その女の罪は釋迦牟尼如來が許すと仰せら

れたぞと言つて、ゆめ子を自分の白馬の上に抱えて、極樂の國へ連れて行かれるのは疑ひないことである。

九

或日私が宿の湯に這入つてゐると、「申子半四郎先生ですか、お正月の雜誌の小說でお忙しうございませう、しかしお退屈な時ちつとお遊びに入らつして下さい、私は九番の部屋にゐる者でございます、」といふ男があつた。四五日前から時々顏を合はしてゐた人物だが、彼はその日始めて斯う物を言ひかけたもので、黑いたつぷりある髮の毛をまん中から分けた、少し赤ら顏で、自動車の運轉手にしたら隨分よく似合ふだらうと思はれるが、無論一寸した美男で、少し舌の短かいやうな物の言ひ方をする男である、後で知つたのだが、切塚重十郎といふ名で、何を職業としてゐる人物だか、終よで到頭知らなかつた。「青島の司令官大島大將ですな、あの方にお目に掛りまして、」とか、「實業家組合總長の森山夏吉さんですな、あの人の家の隣に、」とか、色々な人間の名を擧げて、何の話をするにも悉くそれ等の名前に結びつけて說明する癖があつたが、同業者なら隨分無名な人の名でも知つてゐるが、少し方面の違つた人だと一億圓の財產家でも、大將の中の一番えらい大將の名さへ知らない迂闊者の私のことだから、「はゝあ、いや、知りませんが、その人が、？」と言つた風な答へ方をするので、相手の切塚重十郎は私との會話の緒を見付けるのに持て餘した恰好で、今度は目先を變へて、「あなた、谷崎潤一郎さんを御存知ですか？」と聞くのである。「いゝえ、名前は無論知つてゐますが、會つたことはありません、」と私が言ふと、「私、始終谷崎さんのとこへ伺ひます、」と言ふので、「谷崎潤一郎のとこへ始終入らつしやるなら、佐藤春夫も御存知でせう？」と私が聞くと、「えゝ、時々お見へになります、存じて居ります、」と答へるのである。そして「私、長田幹彥さんとは京都でよく一緒にお酒を飲みましたが、面白い方ですね、」とも言ふのであ

る。

それが始まりで、私の部屋に遊びに來たり、自分の部屋に私を女中を使に寄越して呼びに來たりした結果、重十郎と私は段々一日おき以上に往來するやうになつた。すると重十郎の隣の部屋にゐる、佐々丸四八ともすぐ知合ひになつた。四八は重十郎とは違つて隨分醜男の方で、年も彼の言ふところに依ると、「私は自分の生れ年月を忘れないやうに、親が四八と附けてくれたんです、明治四年の八月生れです、」と言ふから、その時四十九歳に違ひなかつた。彼は印刷業だと自ら名乘つてゐたが、その後彼の口振から察すると、印刷だけでは儲からないので、何でも生糸業者の名簿のやうなものをこしらへて賣りつける計畫を立てゝ、その準備にこの土地にやつて來たものらしかつた。顏中が凸凹だらけで、色が赤銅のやうに黑くて、目が一寸見付からない程細いのである。

「如何です、花を引きませうか？」と彼等と知り合ひになつた始めての日だつたか、重十郎の部屋に私が招待されて行つた時、四八が言ひ出した、無論カラ花である。が、男三人では興味がないと言ひ出して、「それぢやあ、私が藝者をおごりませう、その代り私の惚氣の丸子を呼ばして下さい。」

さう言ふ前に、私は四八と重十郎との會話の中に再三その丸子の話が出てゐたので、どんな綺麗な娘なのだらう、この四十九歳の四八がもうその爲に三四百圓の金をこの町に來てから使つたといふ程の女は、と思つて窃かに期待してゐたところが、現はれた丸子を見て私が二度吃驚したことには、それはなる程、四八と似合ひの夫婦だと思はれるやうな、丸々とした、怒り肩の、縮れつ毛の、さしづめ宿場女郎と言つた風な藝者なのだ。ところが、その宿場女郎の藝者丸子は始めて見る私などが列席の場にも拘らず、露骨に四八に好意を見せないのである。「さあ、一杯やらう、」と四八がさし出す盃を、「いや、私今ほしかないの、」と酒だけは下諏訪中での藝者にもひけをとらないと言ふ丸子は、さういふ挨拶する

のである。まあ、さう言ふなよ、今日はこれからずつと時間（十二時の拍子木の時）までゐてもいゝのだらう？」と四八が言ふと、「いえ、六時からお約束があります、」と凛としていふのである。「でも、もう六時ちやないか？」「えゝ、だからもう行かなければならないのです、」などといふ會話のうちに、四八の醜い顔の表情がだん／＼険しくなつて來るのである。何でもこの女は、かの女にもやはり色男と呼ばれる者があると見えて、時々四八の座敷に呼ばれてゐる間に、一寸家に忘れ物をしたからとか、或ひは四八が酔ひ潰れてゐる間を窺つて、無論四八の玉を懸川してその色男と相引するといふ事を、後で重十郎が言つたことである。田舎の下諏訪でも可成り劣等な藝者に違ひない彼女に、彼女の外に色ん藝者のゐることを、腐つても東京から來た四八に分らぬ譯ではあるまい、それにも拘らずそんな丸子を特別に贔負にする四八の心根は哀れなのである、が、この女なら大丈夫だらうと彼女に目を付けたのが四八の悲しむべき失敗だつたのである。

「女なんか抜きにしませう、さあ／＼、三人で花を引きませう、」と私たちは言つて、それから花を引いたのである。すると四八は花を引きながら、時々口の中で「丸子の畜生、あの恩知らずめ！」などと獨言ちてゐたが、突然彼に自分の家にゐる彼の女房の自慢を始めるのである、かと思ふと、彼女が一方ならぬ燒餅やきだと呟くのである。すると又一轉して重十郎が好男子であることを羨む言葉を放つのである。その時の四八の言葉に依ると、重十郎は何とかいふこの町の藝者に惚れられてゐながら、彼の方で嫌つて振つてゐるのださうである。すると又四八はこんな厭な町はない、と下諏訪の町を罵倒し始めるのである、私が桑名に行つた時は、あそこの藝者はこゝのたぞとは比べものにならない、そこの金太といふ藝者が私に惚れて、いまだに東京に手紙をくれるものだから、女房に燒かれて困つてゐる、と四八は變な話を持ち出すのである。さう言へば、それから後も私は彼の口からこの桑名の金太の話を何度聞かされたか知れない、だ

[illegible]と重十郎とで彼に桑名の金太といふ綽名を與へたことである。

が、私たちが知り合ひになつて間もなくの事だつたが、四八はだん〳〵宿の方から不信用になつて、彼がいくら藝者を掛けても、その返事にもうふさがつたとか、ひどい時は女中に命じても返事がなかつたりするやうな狀態になつたのである。そして重十郎も同じ狀態らしかつた。私が彼と知り合ひになる迄は隨分賑かにやつてゐたらしいのに、彼も亦毎日ぽかんと部屋の中で口笛を吹いて炬燵に當つてゐるのは、彼は年こそ若いが四八よりは悧巧で、厭な目を見ない前に彼の方から用心して、藝者を呼ぶことを謹んでゐるらしかつた。それはさておき、しかし私が困るのは、彼の話が相變らず私に餘り愉快な印象を與へないことである。やれ、自働車を、もう二臺ばかり買つたが、もう一臺買らないと小遣が不自由ですとか、私の從兄弟が青島の大島大將（又大島大將だ！一體そんな大將がゐるのか知ら？）に特に目をかけていたゞいて製鹽業をやつてゐる、今では四五百萬圓出來たので、去年は八十噸ばかりの汽船を一艘こしらへた、半子先生、來年の春には如何です、是非青島へお供しませうか、青島の棧橋からその從兄弟のとこの船に乘つたら、一時間で彼の家に着きます、方々に案內しますよ、と言ふやうな類の話ばかりするのである。

幸ひにして、彼等は私のゆめ子を知らないやうであつた。だから私はゆめ子を呼ぶ時は、私の方からわざと彼等の部屋に遊びに行つてゝ、そして丈治に頼んでそつとゆめ子を掛けておいて、そのうちに彼女が來たら、女中に、お客樣ですと言はせて、私の部屋に歸つて行くことにしてゐたのである。ゆめ子の出る演藝會は十二月の十四十五の兩日であつた。彼女はそれを自分の意見にしないで、「あの、母さんが先生に是非いらつしつて下さるやうに、と言つてました、私、恥かしいんですけど……」と言ふのである。私も行きたい心は十分あつたが、やつぱり恥かしい氣がしたので到頭行かなかつた。その十五日の晩のことだつたが、私の部屋に重十郎と四八とが遊びに來た、そして又花をしようと言ふことに

なつたところで、人傳てに噂を聞いてゐたのであらう、四八が私に、半子先生、あなたのゆめ子さんといふ方を是非拜ましていたゞきたいものですな、と言ふのである、で、私は、呼んでも宜しいが、彼女は餘り花を好かないやうですから、と斷つた、實際彼女はそれを好かなかつたし、又よくそのやり方さへ知らなかつた、「それよりも、」と私は言つた、「一つ花の出來さうな藝者を、あなた方は色んな藝者を御存知でせうから紹介して下さいな、私が玉の方は持ちますから、」と、正直者の四八は一寸首をひねつて、「ぢやあ、さうしませう、私にすると、丸子がいゝが、皆さんはあれをあんまりお好きでないやうだから……」と、そして亜十郎と相談して、丸子と同じ家の、喜扇といふ藝者を呼んだのである。

十

新梅鉢家の藝者喜扇は丑の九紫で、その時十九歳であつた、背のすらりと高い割に、一體が骨細で、丸顏で、くるくとした目をした、口元の可愛い、鼻の小さく低いのも亦彼女の魅力の一つとなつて、見たところ未だ大人の骨組になつてゐないやうな恰好だものだから、十六七歳にしか見へなかつた、鼻の邊にそばかすがあつたが、白粉をつけるとそれも目に立たなかつた、髮は癖のない毛だつたが、少し赤くて分量が少ないやうに思へる、しなやかな小さな手を持つてゐた、斯う私が言つたら、讀者にも大凡想像がつくだらうが、一目で私の氣に入つた女になつたのである。

彼女も決して口數の多い方ではなかつた、だが、ゆめ子がおつとりと、どうかすると取澄ましてゐるやうに見へたのに反して、喜扇は笑はなくても快活に見へ、口をきかなくても沈んでゐるやうに見へなかつた、一口に言ふと萬人向きのする藝者であつた、私だつて利益のためにこの二人の女のどちらを抱えようかといふ事になつたら、恐らく後者をとるに違ひなかつた、だから、喜扇は土地でも指折りの賣れつ子だつたのである。私は又ゆめ子に對するのとは別の心持

で彼女が好きになつて、それから二日おき位に直十郎や四八を呼んで、そして花を引く席に彼女を招いた。男三人と女一人とが炬燵の四方を圍むのである。餘り寒いと、私はどてらの上からインバネスを羽織るのである。或時寄扇が寒いといふので、ぢや、僕のインバネスを貸したげようと言ふと、えゝ、有難う、ぢや、一緒にその中に入れて下さい、と云つて、四八などが冷かすのも平氣で、私が少々赤くなるのもかまはずに、私の袖の下に這入つて、大きに私に藝者らしい好意を見せてくれたものだ。又、炬燵に當りながら花を引いてゐる時、彼女はゆめ子とは違つて遠慮なく、札を持たない空いてゐる方の手を炬燵の中にぐつと入れるのである、と、前隣に坐つてその中に投げ出してゐる私のに彼女の手が觸るのである。始めは、すると、彼女はその手を引込めたが、いつとなく「私の手、冷たいでせう?」と言つて、しつかりと私の足をつかむのである。「いゝ氣持ですよ、」と私は言ふのである、何と可愛い奴だらうと私は甘くなつて思ふのである、終ひに炬燵の中で私の手と彼女の手が行き合ふのである、それもいつとなく握り合ふやうになつて、終には炬燵の中でお互の手を探し合ふやうにさへなつた。

その時分のことであるが、佐々丸四八は無斷で花屋から姿を消してしまつた、もつとも一寸上諏訪までと言つて、私に、濟みませんが、今夜歸つたら直お返ししますから、十圓お貸し下さいませんか、と云つて、實はそれを汽車賃にして東京まで歸つてしまつたらしいのである、女には振られ、宿屋からは虐待され、金はなくなつて、心細くなつたのであらう。だから、それからは私は直太郎と寄扇と三人で花を引いたものである、そして或晩のことである、十二時の拍子木などは夙に鳴つてしまつて、二時三時と時が過ぎてしまつたのである、寄扇も歸らうと言はなかつたし、私も彼女を歸したくなかつたのである。その時は何かの都合で、さうだ突然ゆめ子が他所のお座敷の歸りなぞに、一寸私の部屋を尋ねてくれた時に、彼女を呼ばないで寄扇がゐるとよく思はれないだらうと遠慮して、その晩は直十郎の部屋で花を

引いたのであつた。が、三時になつた時分にはみんな眠くなつて、疲れて來た上に、炬燵の火がなくなつてしまつた。これはいけない、と言つて、私は立つて私の部屋へ火を見に行つた、喜扇も一緒について來た、見ると、私の方には幸ひ僅ばかりの火があつたので、それに炭をついだりなぞして、ちやあ、重十郎さんも呼んで來て、三人でこゝで寢ませう、といふことになつて、喜扇に重十郎を呼びにやると、やがて歸つて來た彼女の答に、重十郎さん、もうぐう〳〵言つて寢てしまつたのよ、と言ふのである。

「それはいけない、あんなとこでごろ寢をしたら風を引いてしまふ、僕、起して來ませう、」と言つて私は重十郎の部屋に向つて走り出した、ゆめ子以來、いつとなく私はすべての藝者に敬語を使ひ出した、と思つてくれ給へ。あわてた私は喜扇と二人で私の部屋で一夜を明かすことが夫のある夫人とでもさうすることのやうに考へたのか、そんな害のある譯もないが、と言つて、そんなら重十郎が風を引くことがそんなに心配になつたのかと言ふと、無論そんなこともさう心配になる筈もないのである、現に角私は何といふ事なくひどく狼狽して、このところ喜扇が男で私が生娘になり代つた場合のやうなあわて加減で、震へながら重十郎の部屋に飛び込んで見ると、彼は花札の散らばつた中に、なる程、ぐう〳〵と大いびきをかいて寢てゐるのである。

「切塚重十郎さん、切塚重十郎さん、」と私は叫んだ、が、重十郎は僅かにうゝむと呻つたゞけで、一瞬間に又元のいびきに戻るのである。私は、心の中でおゝ、喜扇と二人では嬉しくて困る、困る、嬉しいが困る、とさうくり返し思ひながら、寢てゐる重十郎の肩を搖すつて、「切塚重十郎さん、風引きますよ、風引きますよ、僕の部屋にお出でなさい、火がありますから、」と言つて、荷物のやうな狀態になつてゐる重十郎を抱き起した、今考へると、喜扇と二人で何故あの時一夜を明かさなかつたのだらう、と殘り惜しい氣がするが、そして私は荷物の重十郎をハア〳〵と重い息を吐きなが

ら、二階の彼の部屋から三階の私の部屋に押し上げた。重十郎は「済みません、ウー、ウー、」と言ひながら、私が手を放した炬燵の一角で、そのまゝ完全な會話は一言も交はさずに、又大いびきを立てながら寝てしまつた。「まあ、重十郎さんつたら、意氣地がないのね、」と言つて、喜扇はその可愛い顔を一層可愛らしく笑はせながら言ふのである。はアゝと私は溜息を吐くのである、が、直又立ち上つて、勝手を知つてゐる二階の隅の大押入のところに出かけて、一人前の夜の物と女枕とを引擔いで、私は三階の部屋に歸つて來ると、床の間の柱にもたれて襟に頤を埋めて思案らしい恰好をして立つてゐた喜扇は、「まあ、すみません、」と言つて蒲團を下ろした私の傍にやつて來た。普段は小さい、十六七の小娘にしか見えない彼女が、その時は正體のまゝの、痩せ形だが五尺五分餘の堂々たる十九歳の藝者に見えた。私は、あゝ、この嬉しい時間、長くつゞけ、と思つた瞬間、喜扇の手が私の手をきゆつと握つた、臆病な私もきゆつと握り返したが、その時一頻り大きなぐうといふ重十郎のいびき聲に私たちは一度に握り合はした手を離した。それから炬燵を中心にして、西の方に體を延ばして寝てゐる重十郎に對して、喜扇の寝床をその隣りに南稍々東にゆがめて敷き、私の寝床は彼女の隣に東稍南に向つて延ばした。

帶だけ解いて臺の着物のまゝで左を下にして寝た喜扇と、やつぱり臺の着物のまゝで右を下にして横になつた私との間は顔と顔との距離が向ひ合つて三尺離れてゐて、これが漏斗形に下になる程狹まつて、足の先において一つの炬燵で結び付いてゐる譯である、そして兩方から右と左の手を片つ方づゝ延ばして握り合つて、さあ、二時間程寝たり醒めたりしてゐるうちに、ほのぼのと雪の町の夜が明けたのである、その二時間程の間に私は十二度も目を開いたことである。そしてその度に三尺離れて向ひ合つてゐる喜扇の顔を見ると、恰もそれが彼女にもエレキで傳はるかのやうに、彼女も又ぱつちりと目を開くのである、喜扇の口は、否飽全體がさうして眺めると、西洋の眠り人形のそれに似てゐるのであ

る、彼女は睫毛の長い女である、兩方から目を開き合つて、見合はしてにつこり笑つて、そして兩方でそーッと目を閉さぢるのである、そしてその度毎に依然としてつなぎ合はしてゐる手にきゆつと力を込めるのである、そして夜が明けたよのである。諸君、斯ういふ場面は私の三十歳になる迄の生涯に、それ〴〵の場合にそれ〴〵の女と、七度以上も出遭つたことであるといふことを參考して貰ひたい、それがこの話の終の別の女との場合では、その女が一歩だけ積極的だつた爲に、玉手箱の蓋が開いて、白い煙がすつと立ち上つて、私の頭が禿げた、といふのが此物語の終であるのだが、それは後のこととして、この場面に依つても、諸君に私の人物の一端が十分紹介せられたことだらうと信ずる。

十一

甲子中四郎さんは一體どちらが好きでどちらが最員なのだらう、ゆめ子か、喜扇か？　などと宿の丈治を始め小さな町の仲町では取沙汰するのであるが、辨良なゆめ子にしても、検番の土間の壁に喜扇の札が花枝の札の下に下がつてゐるのを見れば心が平らかならぬのである、喜扇だつて、ゆめ子の札が花枝の下に掛つてゐるのを見ると、たとへ自分が他所の座敷に呼ばれて行く時、検番の壁をちらりと見たゞけのこととしても、やつぱりあの人はゆめ子姉さんのものか、と心が平らかでないのである、無論藝者のことであるから、色の戀のと言ふのではないが、他所の店で買物をされた商人の殘念さになるのである。

だから、二人が讓り合つて、私が喜扇を掛けて待つてゐると、彼女から電話があつて、ゆめ子姉さんも今聞いたら明いてるやうだから、一緒に、と言つて來るやうなこともあるのである。「あゝ、一緒に、一緒に、」と私は電話口で叱りながら答へることである。どちらか一人になさい、と學校の校長先生にでも命じられたら、私はどちらにしようと一寸迷

ふ程の狀態になつたのである。私のゆめ子は、こんな物の言ひ方をすると、私自身にも背中がむづ〱するが、私の三十年の浮世の苦勞に報ゐるために、神樣が送つて下された天使ぢやないか、恐らくさうに違ひない。私のやうな者だつて、プラトンの孫弟子位にはなることもあるのだ、どうして諸君は笑ふのだ？ 私のやうな人間だからこそプラトン的な戀もするのだ。この後も、神樣が私にまだ何年か何十年か何百年かの壽命を下さるならば、私の娑婆には幾度となしに颶風もあらうし、山崩れも、津波も、戰爭も、色んな事が起つて私は難儀することだらう、現に始めにも言つた通り今はこれ等の事のあつた時から一年の月日が經つのである、大神の時計で言へば唯の一秒にも過ぎないこの間に、私は今狹い東京の町の隅に細々の烟を上げて暮してゐる、一年前を思ふと夢としか思へない、今の私の心は終始曇り勝である、だが、諏訪にゐるゆめ子を思ふと私の心は晴れるのだ、ゆめ子は私のお伽話なのだ。

色んな別々の話をするが、私は雷といふものが恐くて恐くて堪らない、この夏は殊に多いやうだ、あれが鳴つて來るとたとへ私は大臣の前で勳章を貰つてゐる最中でも、忽ち前後を忘却して逃げ出して蒲團を頭から引被つて、目を閉つて兩方の耳を抑へて平太ばつてしまふのである。私のこの恐がり方は全く尋常のものではない、と私自身もつく〲と思ふ、やつぱり前世などといふものがあつて、何か私がその時犯した惡い罪の爲に、こんな思をさせられるのぢやないかとさへ思ふ、ところで私はさうして蒲團を被つて耳を抑へながら、口の中で屹度唱へる言葉がある、丁度老人が念佛を唱へるやうに、無意識に唱へるのである、何と唱へるか？ 〽木曾の御嶽山は夏でも寒い、と唱へるのである、それを雷が始まつて、終る間まで、百遍でも千遍でも唱へるのである、すると私の前には雷の代りにゆめ子が立つのである、此時ばり〱と雷が落ちて私が死んだら、私はゆめ子と死ぬ譯である、これこそ笑ひ話に違ひないが、「音樂は回想である、」と言つた、諸君、英吉利の詩人の言葉を眞似て、私は音樂はお伽話であると言ひたいのである。

十二

私は餘り感想に耽り過ぎたが、話が少し前に戻つて、私がその第二回目にこの町に來て、花屋の二階に通された時、炬燵に火を入れたり、茶を持つて來たりする女中が、この前のだつた越後生れのおむなではないので、おむなさんはどうしたの？　と聞くと、あの人は直この向ふのお醫者さんの家に奉公して居ります、との答である、さういふ女は、髮を銀杏返しに結つた二十二三の、色白の、平面（ひらおもて）の、妙に色つぽい姿態（しな）をする性質らしく、「君は？」と私が何氣なく聞くと、「私は今夜の汽車で國に歸るのです、」と言ふのだ、國はやつぱり越後で、もう三年前からこの家に來てゐるのだといふのである、「僕がこの前來た時はゐなかつたやうだが……？」と聞くと、「九月一ぱい一寸國に歸つて居りましたから、その時でせう、」との答だつた。

だから、その女中とは私はそれ切り會はなかつた、ところが、その翌朝から私の部屋に用事をしに來る子守女のやうな、十五歳の、何を言つても「へえ、へえ、」としか答へない女中が、後で聞くとその歸つた平面の女中の妹なのである、すると、その女と從姉妹に當るといふ、二十四五の右の目の邊に入墨のやうなあざのある女中が、それから二三日後にやつて來た、おたんといふのが彼女の名である。おたんはその大きな軀（からだ）にも拘らず、物を言つては一句毎に「おほほほほ、」とその熊のやうな黒い手を口に當てゝ、媚びるやうに笑ふ癖がある外には、何一つ厭味のない、神樣の小使見たいな善良な女であつた、そのおたんが言ふのである、「私はねえ、先生、おしよさんにだまされたんですよ、」おしよと言ふのは例の私が來た晩に國に歸つて行つた女中の名である、「だけど、おしよさんは私だけぢやない、あの妹の子の、そらこゝへ來たあの『へえ、へえ、』しか言へない十五六の女中があるでせう、あれがおしよさんの妹です、あの子までだま

したんです、私はおしよさんともあの子とも從姉妹になるんです、」とおたんの話はつゞくのである。

おしよの家もおたんの家も、越後の糸魚川在の有數な物持なのださうである、おたんは一度或家に嫁づいて、今年四歳になる子もあるのである、だが、「嫌ひな男といふものはどうしても好きになれないものですね、おほほほ、」とおたんが言ふには、去年到頭その嫌ひな亭主の家を子を連れて逃げ出して、此間までずつと自分の家に歸つてゐたのである、「ところが、私の旦那は、それや私と違つて、村でも評判のいゝ男振りなんですよ、だけど私は妙にその男が嫌ひなんです、おほほほほ、」とおたんは言つて笑ふのである、「すると、此間おしよさんが歸つて來て、『おたんさん、おたんさん、あんたさうして遊んでる位なら、私が此間まで行つてゐた諏訪の花屋といふ家、女中さんの手がなくて困つてゐるから、行つて見たらどうです、それは溫泉もあつて體の養生にもなるし、仲々いゝところです……』と言ふもんで一か八か、……」退屈で困つてゐたおたんは直に動かされて、子供を親の家に置いてきぼりにしたまゝ、そつと默つて家を出て來たのださうである、「一寸そこ迄買物に行つて來る、おみやを買つて來てやるよ、と言つたら、私の子は硝子障子のところから首を出して、母ちやん、あばよ、母ちやん、あばよ、と言ひました、あゝ、あゝ、歸りたくなつた、」とおたんは流石に家戀しさうな顏をするのである。

「君は默つて出て來たのか、赤ン坊までだまして？」と私が呆れて言ふと、

「えゝ、だけど罰が直に斯うして當りますから、惡い事といふものは出來ません、私はもう歸らう歸らうと此間から思つてるんですけど、あの子一人殘しとくのが、知らないうちは兎に角、可哀さうでね。」

「あの子つて誰？」

「おふねツ子です、あのおしよさんの妹です、」とおたんは言ふのである、「私こゝへ來て始めて聞いたんですが、おしよ

さんは身持になつたので、歸つたんださうですね、その癖その子の親が誰だか分らないんださうです、だけど、ね、先生、觀音樣の申し子ぢやありますまいし、その子の親はこの花屋の中にゐるのに違ひありません、あの支配人か、あの若支配人の丈治さんか、板場の留さんか。……あの支配人だつて、お上さんに一昨年死に別れた切りで、子供は四人もありますけど、獨り者で、まだ五十といへば男盛りですものね。丈治さんだつて二十四で獨り者でせう、留さんだつて獨り者でせう、男といふものは厭ですね。それに丈治さんには現に他所に隱し子が一人あるんださうですよ、やつぱりこゝの女中をしてた人との間に出來たんださうですがね、昨夜もあの子が言ふんですよ、あのおふねツ子がね、こゝの家はあたい何だか恐いから、姉さん歸りたいつてね、さういへば本當に何だか恐い家ですよ。……」

十三

その時分のことであるが、私は郵便局に行つた歸りに、町でバケツを兩手に下げて歩いて來る女中のおむなに會つた、おむなは二ケ月前と同じ丸々した顏をして、私を見るとバケツを路傍に置いて、白い齒を見せて笑ひながら、癖のその丸い肩を捻ぢるやうな恰好をして、「何處に今ゐるの？」と私が聞くと、「そこのお醫者樣の家に、」と答へた、「花屋を出てからずつとそこにゐたの？」と聞くと、「いゝえ、つい此間まで岡谷の某といふ呉服屋にゐましたの、」「ちつと遊びに來給へ、」「有難う、」と、私は彼女と別れた、その晩、夕飯の時に給仕に來た女中のおたんに何氣なく「君は前にこの家にゐたおむなといふ女中を知つてるかい？」と聞くと、「えゝ、あの今お醫者さんにゐる人でせう？　私、おんなじ國ですもの、」と言ふ、「さう、さう、やつぱり越後だつたね、おんなじ村かい？」と私が聞くと、「いゝえ、私たちの村から一里ほど離れた村の人です。あの人、先生、幾つだと思ひます？　もう二十八なんですよ、そして子供が二人もあるんですよ、に

と言ふ、私は吃驚して、「二十八は本當かい、子供は嘘だらう、」と言ふと、「何をそんなこと嘘を言ふもんですか、」とおたんが言ふには、おむなは國の方で子供を一人生んで、その子を人にやつて始めは岡谷に來たのだが、その町の呉服屋さんに奉公してるうちに、そこの息子さんの子を生んだんです、この川まで又その呉服屋さんに行つてたんださうですよ。けれどね、先月の末でしたか、その息子さんがお嫁さんをもらふ事になつたので、やつぱり厭でせうね、そこを出て今のお醫者さんのとこへ來たんださうです、いゝ人ですけど、お尻の落着かない人でね、こゝの家にも二三度も出入りしたさうですし、その岡谷の呉服屋さんにも出たり這入つたり、何でも三四度もしたさうですよ、どうも一つところにお尻が据わらないんですね、」「それにしちやあ、いつも笑つてるね、」と私が言ふと、「えゝ、吞氣な人ですからね、おほほほほ、」とおたんも、彼女自身も此上なく吞氣さうに笑つた。

色々と人の話を聞いて見ると、添髪せず、從つて生まさず、唯寺小屋に行つたやうに畏こまつて、殆ど膝の上に手を置かんばかりにして坐つて、話し合つてるだけで戀をしてゐるなんて、私の外にはゐないことである。

十四

その晩だつたか、喜扇と向ひ合つた時に、私は「この二三日あのかどやの二階の、くれ柴さんのお客の加取楢右衛門の聲が聞えないやうに思ふが、どうかしたんですか？」と聞くと、「さあ、その男で今大評判なんですの」と喜扇はその可愛らしい顔に笑凹を浮べて言ふのである、「何でもあの加取さんのお金をすつかり預かつてゐたかどやの髭の生えたいけ好かない料理番の旦那さんといふのがあつたでせう、あの人が預かつてゐたお金で、それを增やすつもりとかで、日歩貸をしたり、相場をしたりして大分なくしてしまつたと言ふんで

すけどね、實際は博奕をしてなくなしたらしいんですのよ、店の方はやつと八分通り出來上つたんですけど、肝心のお金がそんな譯でなくなつたものですからね、宿の姉もむつかしい程になつて來たんださうです。だけど、私あんな人大嫌ひですけど、あんな小さい、眞黑けの田舍者の癖に、加取さんといふ人、思ひ切りのいゝ人なんですね。さうか、ぢやあ仕樣がない、と言つてね、しかしもう田舍の家へ歸る譯には行かないでせう、お上さんが入れてくれないでせうからね、越前とかに材木屋をしてゐる弟さんがあるんださうです、その弟さんのとこへでも行つて當分厄介になつて來るつて、さう言つてやつと越前までの汽車賃をもつて、一昨日でしたか、立つてしまつたんですつて……」

「へえ！」と私は呆れた、「それぢやあ、くれ葉さん泣いたでせう？」

「いゝえ、くれ葉姉さん、まあ有難かつた、お汁粉屋にならなくて、まあよかつた、と言つて喜んでたわ。」だが、それに就いて音扇が註釋して言ふには、「くれ葉姉さんは決して惡氣のある人ぢやないんですよ、だけどあの加取さんといふ人があんなにお金をかけて、あゝして色々されたもんですから、あの人のお上さんになるのも、お汁粉屋を始めるのも厭で厭でしやうがなかつたんださうですけど、くれ葉姉さんはあんな氣の弱い人ですからね、それを厭だと斷れなかつたんですね、だから、今度そんな事になつたもんですから喜んでるんですのよ、無理はないんですわ。」

「無理はありませんね、」と私、「だけど、僕はあの加取といふ人とは話もしたことはないが、今迄は小さい、色の黑い、百姓見たいな體をしてゐて、時々獅子見たいな聲を出すので、それがこゝの座敷の硝子窓まで響くんですからな、非常に嫌ひだつたが、話を聞いて好きになつた。」

好漢、加取楠右衛門はくれ葉や、鶴の料理番や、角やの女中や、飛脚の兄弟に停車場まで送られて、ピイと汽車が走り出した時、「さよなら、萬歳！」と持前の獅子の聲で叫んで、帽子を振つたさうである。

十五

そして私の二十九歳の年の暮が近づいて來たのである。「今年は何十年ぶりでせう、珍しいことでございます、」と雨戸を開け閉めに來る若支那人の丈治が言ふのである。「湖水がまだ凍りません、えゝ、だけど未だ分りません、一月二月の極寒になつたら無論凍ります、スケートのお客様の入らつしやいますのも、大抵來年になつてからでございます、どうも今年は湖水のまわりの山の雪が少ないかと思ひます、あれが皆眞白になつてしまひませんと、湖水の水が凍りません。」と彼の言ふ通り、湖水のまわりの山はまだ眞白になり切つてゐないやうである、その山々の向ふに見える、木曾の御嶽山の頂は流石に氷のやうな色をして光つて見えるのである、私のその二階の窓の下を走る道の兩側には歳暮の賣出しの旗も見へそのである。

ところで、私のゆめ子を思ふ熱情の變らないことは諸君も疑はないであらう、その通りである、だがその外にもう一人喜扇を愛する心も仲々根を張り出したのである、プラトンの孫弟子なんて怪しいことである。私の隣人の佐々丸四八は東京に逃げて歸つたまゝ姿を見せないが、もう一人の隣人の切塚東十郎は相變らず私の部屋を尋ねて來るのだつた、彼が來ると、花を引くことになるのである、するとゆめ子より喜扇の方が適切になるのである。そんな譯で、二週間前までは、まだ私が喜扇も東十郎も知らなかつた頃、そしてゆめ子が上諏訪の演藝會の稽古に通つてゐた時分には、早く演藝會など濟んでしまへばいゝ、とあんなにゆめ子の體の暇になることを待つたことだのに、今は三と二との割合で喜扇の方と屡々會つた譯であつた。稀にゆめ子と喜扇とが並んで私の部屋に坐つた時に東十郎が居合はしたことがあつたが、その時彼は始めて彼女を見た譯である、彼女等が歸ると、東十郎が言ふには、「なる程、ゆめ子といふ藝者はいゝ藝者です

ね、品のいゝ藝者ですね、私の知人の、御存知でせう長野縣参事官天川地平さん、（私曰く、「知りません、」）あの人の息子さんの奥さんの、この人は松平杉村伯のお孃さんですがね、その人にそつくりです、並んで坐つてゐる喜扇が光を失ひますね、」と言つたことである。

「さうですかなア、」と私は自分の考へ事に耽りながら、上の空で答へた。

當時、諸君に斷つておくが、私はゆめ子に對して何の愛の報酬をも求めようとは思つてゐなかつたことである、始めは思つてゐたかも知れないが、段々思はなくなつたことである、私が思ふには、私の方だけで彼女を愛することで滿足しよう、とまあ口で言つて見ればそんな風に考へておいたのである、實際、たとへ私が火よりも熱く、湯よりも激しく私自身の死よりも強く彼女を戀したからとて、そして彼女がそれを感じてくれたからとて、彼女が彼女の薄情な男との間になした、子を愛する愛を奪ひ取ることも、もしくは割愛してもらふことも、それは出來ないことである、校長先生に頼んだつて、お廻りさんに頼んだつて、或ひは觀音樣にお願したつて、それは無理といふものである、私はあきらめるのである。だが、人間凡夫の淺間しさで、私がそれの代りに、それを藝者喜扇に求めはしなかつたか、咄、不屆者め——と叱る者があつたら、恐れ入りました、と私はあやまらなければならぬかも知れない。

十六

そして暮の二十五日のことであつた。

「先生、今夜こゝの劇場で、町の忘年會があるのですが、如何です、お供いたしませうか？」と宿の若支配人の文治に誘はれて、私は一人で行くのは困つたので、そんな時の退屈な逃として、重十郎と一緒に出かけることにした、丁度その

日も六時頃まで私の部屋には喜扇が來てゐたが、「忘年會は六時から始まるんですよ、私たちは寄附なのよ、だけど義務だから仕方がないわ。私一足お先に行つてますわ、」と言つて彼女は先に出かけて行つた、この町の藝者が總出で會に集まつて來た人々の接待をするのださうである。私たちは七時過に丈治に案内されて會場に出かけたのである。

諏訪の藝者は小瀧にくれ葉、奇麗どころはゆめ子に喜扇……

とか言ふ唄があるのである。例の雇人女中のおたんが或時私に言ふには、「どうも一人として藝者らしい藝者がゐませんね。まあ、先生のところへ來るゆめ子さんや喜扇さんはいゝ方でせうけど、私の町の藝者などとは比べものになりませんよ、」と言ひ言ひしてゐたおたんが、「先生、」と或時私の部屋に何かの用に這入つて來た時に、「私、こちらへ來てから始めて藝者らしい藝者を見ました、小瀧といふんださうです、この町で一番だといふ話ですが、少し年をとつてますけど、それやいゝ藝者ですよ、」と言ふのである、その小瀧もこれから忘年會の會場に行つたら見られますね、などと言ひながら私たちは凍つてかちんかちんと固まつた道を歩いた。

丈治を先頭にして、私がまん中で、重十郎を殿にして、會場である劇場に這入つて行くと、棧敷平戸間一面に町の老若の男たちが、思ひ思ひの姿をして、戰場のやうな亂雜さで盃を向けてゐる、正面の舞臺には高く赤い毛氈を敷いた上に、四五人の姉さん藝者が三味線を引きながら歌つてゐる、その前の舞臺で二人の若い藝者が踊つてゐる、確か『富士の裾野』を踊つてゐるのである。その中の一人を差して、「あれが喜扇ですよ、先生、」と丈治が言ふのである、さう言はれても、私の近眼のせゐか、どうも喜扇らしく見へないのである、場所が場所であるから可成りいゝ加減に踊つてゐるのではあらうが、縱橫無盡に舞臺の上を跳ね廻つてゐる喜扇は、どうもいつもの私の座敷に來て、口數少なく坐つてゐるあの喜扇とは別の喜扇に見へるのである。だが、その踊が濟んで、踊子等が舞臺の後に引込んだ後、暫くするとその同じ

喜扇が私たちの姿を認めたと見へて、挨拶にやつて來た、そして「ゆめ子姉さんも來てますよ、」と報告するのである。

「あの一番右の端に坐つて三味線を彈いてゐますのが、」とまた喜扇等が踊つてゐた時に丈治が數へて言ふのである、「あれが新三春家の小瀧です。」

「ほお！　あれが有名な小瀧ですか？」と私は言つた、あんなによい藝者らしく聞いてゐた小瀧に私も高いかも知れないが隨分と大きく太つてゐる上に、素氣(そつけ)ない大きな目をした、鼻と口との間に決して魅力を添えないところの大きなほくろを持つてゐて、厭に堂々としたところが人々風靡するやうな、私には期待したゞけに一向感心が出來ないやうな種類であるのに、私は失望したことである。

さて、それ等の踊も三味線も止んで、挨拶に來た喜扇の姿も何處かへ行つてしまつて、丈治ばかりがちびりちびりと酒を飲みながら、彼は流石に仲々の幅ききと見えて、色んな人々と「やあ、今晩は、」などと挨拶してゐるが、私と重十郎とは酒も飲めないし、肴に出された干物見たいな鯛ばかり突つつく譯にも行かず、いくら舞臺を見てゐても、どうやら藝者の餘興も先の喜扇等の『富士の裾野』で終らしいし、と閉口してゐるところへ、舞臺の前の花道のところの幕の下からさつと私のゆめ子が現はれたのである。無論、その邊には大勢の町の人々の間に無數の藝者が酒の酌に廻つてゐて、それ等が立つたり坐つたりしてゐるのだから、可成目まぐるしい光景の眞中であつたにも拘らず、その中に現れたゆめ子のりゆうとした姿がさつと現れて見へたとは、私だけの欲目ではないのである。ゆめ子は左の手で一人の、これ又彼女と見劣りのしない藝者の手を引いて、その藝者はゆめ子の後(うしろ)に半分前屈み加減になつてゐるので、私の方から顔はよく見えないが、ちよこちよこ走りで器用に着物の裾をさばきながら、明らかに私の方にとやつて來るのである、二人ともどういふ譯でか變に恥かしさうに袖で顔を蔽ひながら、何事か囁き合ひながら私の方に[illegible]

だか無論分らなかつた、もつともそれだけの間が時間にすれば一分のことであるが、私の傍に倒れかゝるやうに二人の藝者は坐つて、「先生、いらつしやいまし、」と言つて、ゆめ子が私に盃を出すと、彼女が連れて來た今一人の藝者が徳利を私に出したのである。それが今の先、赤い毛氈の臺の上の、居並ぶ藝者たちの一番上座で三味線を彈いてゐた、下諏訪一番の新三春家の小瀧なのである。傍で見た彼女は、先に遠くにゐるのを見た時とは大分私に違つた印象を與へたのである、先づその黑い、分量の多い髮の毛に私の目が引かれた、先にも見た通り大きな、可成り太つた女ではあるが、その年になるまでの藝者生活に依つてか、相當に體の恰好も整つてゐるのである、それに俯向き加減にして、目だけで見上げると、彼女の顏は可成り美人に見えるのである、成る程、やつぱりいゝ藝者なのかなア、と私は思つた、けれども、無論ゆめ子とは私にとつては比べられないのである、唯、これから時々ゆめ子と一緒に呼んで見ようと思つた位である。

そして、その翌晩だつたか、ゆめ子と一緒に小瀧を呼んだのが始まりである、何が始まりであるか？ それは後になつて自然と分ることであるが、さて、小瀧は二十九歳だから私と同い年であつた、彼女は前の年の秋から新三春家の看板を買つて、即ち既に一軒の藝者家の主人でもあつたのだ、つい二三月前まで抱え妓が一人ゐたが、それが身受けされたので、今は女中も何も使はずに、一人で暮してゐるとの話であつた。ずつと前のことだが、私が二度ばかり呼んだ女按摩がこの小瀧のことを、私との間に藝者の話が出ると、直に持出して盛んに推賞して言ふのには、あんないゝ藝者で、そして人間としても善く出來た人はありません、と女按摩は言ふのである、前の主人の三春屋のお上さんが、去年の夏胃腸炎で死にかゝつたことがあつたが、親身のものでもあんな介抱が出來るものではない、暑い夏の日盛りを彼女は毎日毎日上諏訪の病院に通つて、そして夜は夜でお座敷に出て、三春家のもう一人の抱え妓であるところの、くれ葉と一

緒に精出して稼いで、それでも元もと三作家さんは餘りお金のない家ですから、小瀧さんは自分で借金して三ケ月のお上さんの病院代を工面したといふ話ですが、全くあの人は三春家の主人の命の親です、あの人は佛樣見たいな人です、と言ふのである。その位の女なら、無論いゝ旦那があるんだらうな、と私が聞くと、えゝ、ある事はあるんでせうが、私はまだ一度も見たことはありません。おや、按摩さん、君は目が見へるのかい？ と私が笑ひながら聞くと、おほほほ、と按摩は顔にも似合はぬ優しい笑ひ方をして、いゝえ、見へは致しませんけど、いらつしやれば分ります、何でも東京の人で、あるといふことは聞いてゐますが……。

十七

もう四五日の中に正月が來ようといふのであるから、呑氣な私の東京の下宿にゐる母からも、一度歸つて來たらどうだ、と二三度位催促の手紙が來たので、明後日あたり歸らうと思つてゐた或晩の、夜の一時過に、私の三階の部屋に例の女中のおたんがおふねと一緒に這入つて來た。

「先生、こんなに遲く上つて誠に濟みません、」と彼女は言つて、「私、明日の朝の一番で急に國から呼びに來ましたので歸ることになりました、それでお別れに上りましたんです。就いてはおふねちやんをこゝに一人殘しとくと、又姉さんのおしよさん見たいにお腹がふくれると困りますから、私は連れて歸つてやらうと思ふのです、だからおふねちやんも一緒に挨拶に上りましたの、おほほほほ、」と彼女の唯一の色氣ある癖の、口を袂で抑えて笑ひながら、「おふねちやん、挨拶なさいな、」とおふねの方を向いて言ふ。十五歳で、獅子舞で、客の前に出ると、「へえ、へえ、」としか外の言葉の言へない、いつでも物に吃驚したやうな顔をしてゐるおふねは、小學校の生徒見たいに、兩手を膝の上で組み合はしてぴよこ

りと私にお辭儀した。女ならこんな子のお腹だつてふくれることがあるのかなア、と私は不思議に思ひながら、「さうか、ちやあさよなら、」と言つた。が、話好きのおたんは、これからまだ一時間以上も坐り込んで、この町は溫泉があるからこんなに鬼見たいに人が皆子供を生むんでせうかとか、先生、私藝者では小瀧さんが一番いゝと思ひますが、先生はやつぱりゆめ子さん？　喜扇さん？　とか、私よく下でからかはれましたわ、おたんさんは三階の先生にホの字にレの字だつて、先生、噓ですわね、惚れてるなんてね、噓ですわね、唯好きなんですわね、おほほほとか、終には私はだんだん下を向いたり、用もないのに無暗に頰ぺたをさすつたり、君はしかし可愛い赤ン坊があるからいゝな、僕は年寄つた母親が待つてゐるだけなんだからな、とかそんな別の事を言つて對抗しなければならなかつた。

そしてその翌々日、私も一先づ東京に歸つたのである。東京の町では歲暮の賣出しに、町といふ町では樂隊が囃してゐた、私は寢床から醒めて、寢呆けて朝と間違へた時見たいな、吃驚した顏をして、さういふ町の景色を見たものである。

十八

ところで、私が小說家であることは旣に述べたが、その十一月十二月に渡つての下諏訪町の滯在中に書いた「心」といふ小說が、正月の××雜誌に出たことで、小さい町のことだから妙なことで少し問題になつたのである、といふのはその中の一部に藝者ゆめ子のことをゆみ子として少し脚色したものである。近頃の日本の小說界の一部には不思議な現象があることを賢明な諸君は知つて居らるゝであらう、それは無暗に「私」といふ譯の分らない人物が出て來て、その人間の容貌は無論のこと、職業にしても、性質にしても一向書かれてなくて、そんなら何が書いてあるかといふと、妙

な感想のやうなものばかりが綴られてあるのだ、氣を附けて見ると、どうやらその小說を作つた作者自身が即ちその「私」らしいのである、大抵さう定つてゐるのである、だから「私」の職業は小說家なのである、そして「私」と書いたらその小說の署名人を指すことになるのである、といふ不思議な現象を讀者も作者も少しも怪しまない、小說家を主人公に使ふことも、「私」を主人公にすることも、恐く少しも排斥すべき事柄ではないが、その爲に小說の主人公の「私」は皆作者その人のことであつて、從つてその小說は恐く實際の出來事のやうに讀者がいつとなく考へるやうになつたことは嘆かはしい次第である。さて、その私の「心」といふ小說が「私」小說であつたために、中に書いたことが恐く事實と見られて、從つて私がゆめ子といふ人物を元として勝手に脚色したことも事實と見られて、私はどうでもいゝが、私の愛するゆめ子に多少迷惑をかけた次第である。正月になつて、その××雜誌が出ると、「ゆみ子＝ゆめ子？」とか、「ゆみ子はお蔭様にて大評判に候、」などといふ差出人匿名の葉書が二三枚も私の東京の下宿に舞ひ込んで來たものである、で、私は取敢ずゆめ子に詫の手紙を出しておいた。そして、一月の中頃に、私は又急いで書かねばならぬ原稿のために、何もそれを書く場所が諏訪に定つてゐる譯ではないが、又愛するゆめ子の町に出かけたものである。木屋の丈治は「いや、今年は實に珍しいことで、湖水がまだ少しも凍りませんので、スケートの方は大打擊です、我々宿屋連中も多少打擊です。喜んでゐるのは湖水の漁師だけです、」と言ふのである。そんなことは私にどうでもいゝのだが、何よりも先づゆめ子に會つて、詫をしたいと私は最先に思つたのだが、そんな事があつた後のことで、現に丈治も「ゆめ子がお蔭で大評判になりまして、なアに、いや、本人は內心は喜んでゐるに違ひありません、」などと言ふものだから、尙の事ゆめ子に會ひたし、會ひにくしと言ふ狀態で困つた末、ふと思ひついて、老妓小瀧を呼んだのである。

その晩、「今晩は、」と言つて私のいつもの三階の部屋の襖の外で手を突いた小瀧は、金屏風を背負つたやうに輝いて見

へた、先に紹介した彼女の漆黒の分量の多い髪の毛を、正月のことだから島田に結つて、すつかり上總縮緬の二枚襲を引きずつて、これも前に言つたと思ふが、お辭儀をして下げたまゝの顔を心持ち上げて、上目を使つた顔は、千兩に見へる女なのである。さうなると恰服もあり、姿に工風もついて居り、明けて私と同い年の、だがそれが女の三十歳の落着きを具へてゐることだから、出來したり出來したりと扇子で煽いでやりたいやうな姿であつた。

私は小瀧と向ひ合つて、先づ今度の私の小說「心」に就いて、その爲にゆめ子に及ぼした迷惑に就いて、簡單に辯解した末、どうぞ君からその事をゆめ子に詫び、それに就いて彼女の身邊に惡い評判でも立つやうなら、どうぞ一言辯解の勞をとつてくれ、といふことを賴んだ、すると、小瀧は三十年增の辯舌をもつて言ふには、

「いえいえ、先生、そんな事決して御心配には及びません。私はじめて先生にお目に掛りましたのはあの忘年會の酢劇場ででしたわね。あの時、ゆめちやんが突然私の傍に來て、姉さん、いらつしやい、姉さん、いらつしやい、どうしたの？と私が聞いても、唯いらつしやい、いらつしやいと言つて、ゆめちやんが私の手を引つ張つて花道をどん〳〵走るんでせう？そしてあの時先生のお傍へ引つ張つて行つたんですよ、何の爲にゆめちやんが私を先生の傍へ引張つて行つたんですか？……ところでね、先生と、先生、斯う言つてもお怒りなすつてはいけませんよ、と言ふのは先生とゆめちやんのことは、それや何も別にどうといふことはございませんでせうけれど、小さな町のことですからね、檢番や待合などの口からそれ〳〵そんなに傳はつてゐましたのよ。さうさう、私、あの忘年會の翌晩でしたか、先生のお座敷に呼ばれましたわね、そのお席でたしか切塚重十郎さんといふ方にお目にかゝりましたが、あの方先生のお友達？いえ、あれから、先生のお歸りになりました晩だつたと思ひますが、私又花屋から掛つて來ましたので、行つて見ますとね、十番のお座敷でしたが、そのお客様とあの切塚重十郎さんとがお友達らしいんです、あの方、話の面白い方でした

わね。で、その時、先生のお話が出て、あの方が仰るには、先生は、本當に好きなのはゆめちやんちやなくつて、喜扇さんなんだよ、と仰つてましたよ、ところが、先生はあんな靜かな方で、喜扇さんといふ藝者はあれで仲々騷ぎ手の方ですからね、それには軍十郎さんが喜扇さんによく言ひ含めて、先生のお座敷ではなるべく大人しくしてゐるようにと注意してあつたんださうです、そして先生のお歸りになる時にも、あんな方だから口にこそ出しはされなかつたけれど、どうも喜扇さんに會つて行きたさうな樣子がありありと見えるもんだから、僕が氣をきかして他所のお座敷にゐる喜扇を無理に一時間だけ貰つて、そして先生にお會はししたんだ、とまあ、こんな話なんでせう、まあ、先生聞いてらつしやいませ、私は何にも知らないものですから、まあ、さうですか、とさう思つてたんですよ、(一寸別の話ですが、あの切塚重十郎さんて方、その翌日だつたかこゝの家の長い間の勘定もしないで逃げてしまつたんですつてね、)ところが、今年のお正月にこの町のお醫者さんの新年宴會がありましてね、私もゆめちやんも呼ばれて行つたんですよ、するとその席に××雜誌の正月號が二三冊も置いてあつて、突然あの先生も御存知ですね、世羽先生(或醫者の名)があの中の先生の小說を讀み上げられたんでせう、するとゆめちやんが眞赤になりましてね。……で、ゆめちやんは子供の時分から私もおんなし家にゐましたし、それに一緒に先生のお座敷に呼ばれたことがありますやうな譯から、後で私に、實は姉さん斯う斯う斯ういふ譯なんです、と言ふんでせう、その時私は言つたんですよ。それがね、外の人なら兎に角、半子半四郎先生と言へば、日本中に知れ渡つた先生です、噂に立てられても決してゆめちやん不名譽ぢやないつてね……」

私の背中が如何にむづむづして來たかは諸君の想像に任さう。だが、ゆめ子が赤くなつたとか、ゆめ子がたとへ半日でも半時間でも私の爲に心を惱ましたといふだけで、甘くなつてゐる私は一方ならぬ滿足を覺えたものである。だから

「いや、そんな譯ですか、ちやあ、僕は明日は大抵仕事を終りますから、明後日、明々後日は東京に歸らなければなり

ませんで、明後日あなたとゆめ子さんと、それから世羽丁滿さんとを松風亭にでも來ていたゞいて、一緒に夕御飯を食べませう、」と言つたのである。

小瀧は話好きな女で、それに自前の藝者であるから、いくらチョン〳〵と十二時の拍子木が表を鳴つて通つても、主人や箱屋から迎ひに來られる心配もない身だから、色々とそれからそれと話すのである、「喜扇さんは、先生、口數の少ない大人しい人ですけど、あの人、默つてゝそして時々隨分思ひ切つたことをする人なんですよ、」と言つて、私もそれはこの前宿の丈治から聞いた話だが、喜扇がこの町に來た旅役者の後を自働車で追つ駈けた話などをした、爭はれぬもので、さう言へば、私の前に默つて坐つてゐる可愛らしい喜扇がそんな情熱的な事をしようとは思へないが、いつかの忘年會の時に彼女が踊つてゐた恰好は、なる程、さういふ性質の方が現れてゐたと私に思ひ出させたことである。

「まあ、ゆめちやんの事はゆめちやんの事として、」と小瀧は云ふのである、「先生も早く奥さんをお持ちになつたら如何です、私が勸めしますわ。」

「當分そんな覺悟はありませんねえ、」と私、「だが、これで人間生身(なまみ)の體ですから、三十が四十になつても、いつ何處でどんな女に惚れることになるか知れませんからね、神様に任しておきませう。それよりも小瀧さん、あなたこそ女だ、女はどんなにお金があつても、縹緻がよくても、男と連れ添はなければ後悔するものぢやありませんかね? 男だつてさうですが、女は尚のことさうですよ。浮氣は當坐の出來心で、その時その時に好きな男を持つのも一興ですが、やつぱり一人の男と身を固めるのが普通の人間の遣り方ぢやないですかね。」

「だけど、」と小瀧は妙に色つぽい目をして言ふのである、「私たちのやうな稼業のものは、どんなに正直に働いてゐても人が承知してくれませんから、行きたくても行きようがありませんわ。それや、私のやうなものでも、貰つてやらうと

言つて下さる方は時々ございますけれど、斯ういふ稼業をして居りますと、勿體ないことですが、男に口が肥えて、先様で望まれる方は此方で厭ですし、と言つて此方で望むやうな方は先様で相手にして下さいませんし、私はもうあきらめて居ります。……だけど又先生、」と三十年増の身分を忘れて、小瀧は愈よ色つぽくなつて、二十の女見たいに襟私中に頭を埋めて、「私、自分が藝者することも、たとへ一人でも二人でも藝者を抱えて藝者家をすることも、厭あになることが始終ございますわ。」

小瀧が自ら述べたところの、彼女の經歴に依ると、彼女は東京淺草の太物問屋の娘として生れたが、幼ない時分に母親に死なれて、四歳の時に繼母を持つて、十六歳の時に父親に死なれた、父親の死ぬ時分に家の身代が大分傾いてゐたところへ、繼母が番頭と變な仲になつて、十七歳の小瀧を同じ淺草の或藝者家に養女にやつた、そしてそこの息子の彼女は嫁になることをいつの間にか約束されてゐたのだが、その男が何と思つても蟲が好かないので、二度も三度も繼母の家へ逃げて歸つて、歸る毎に邪見に叱られて養家に戻されたものだが、養家の方でもどうしても息子の嫁になりさうにないのを見越して、十九の年にこの下諏訪に藝者に突き出されてしまつたのである、その始めて抱えられた家がゆめ子の夢の家だつたといふのである。

見たところ、彼女は惡い性質の女ではなささうだつた、丁度私と同じ年だから、よくその言ふ事や從つて性質などが私に呑み込めるのである、要するに、可成り悧巧な女だが、それと共に可成り氣の弱い女でもあるらしいのである、その悧巧が少し走り過ぎて、彼女は或時は隨分惡いことまで考へることがあつたとしても、その氣の弱さが決してそれを實行させないやうな性質に違ひない。この女、下諏訪一番の姉藝者で、どんな確かり者かは知らないが、この女の着物の下の氣の弱さと情にもろさとを突つついたら、乾坤落城するに違ひないと私には思はれた、だが、それはこの女と同

じ卯歳の一白水作であるところの、私の仕事ぢやないのである。

十九

その翌日の午後、私はこの町の人で、この前に私が來た時咽喉を痛めたので見てもらつた以來知り合ひになつた、醫師の世羽丁滿に電話をかけて、今夜失禮ですが松風亭で夕御飯を一緒にいたゞきたいと思ひますが、御都合は如何でせうか？　と聞くと、遠慮なくお供しませうとの返事であつた。

その後も私はこの人と時々松風亭とか、秋野屋とかいふ料理屋へ飯を食べに行つたことがあつたが、彼はこの町での智識階級の一人であるためばかりでなく、私などが交際するのに可成り好都合な性格の持主であつた。彼はドクトル・デル・メヂチイネの學位を持つてゐた、「獨逸に三年程小便しに行つて、免狀を買つて來ましたが、アハヽヽヽ」と言つて笑ふと、彼の醫者らしい獨逸型の顏が、そのカイゼル髭と共に忽ち形をくづして、漫畫化された猫の顏のやうに見へた、それが何とも言へず相手に愉快な印象を與へるのである。「お忙しいですか？　先生、」と聞くと、普通なら、「はあ、お蔭樣で、」といふところを、彼は定つて「なアに、門前雀羅を張るですよ、」と挨拶をした、從つて、こちらから夜分など訪問すると、必ず玄關には三四人の患者が詰めかけてゐたが　お客樣が見へたから、明日午前に來て下さい、死ぬやうな人はありません、と言つて追返した、電話で「夕飯を一緒にいたゞきたいと思ひますが、」と言ふと、「直、伺ひませう、」と答へる、で、「餘り斯う屢々お呼び立てしますと、先生のみならず患者たちにも迷惑を掛ける譯ですね、」と私が言ふと、「なアに、」彼とはいつも言ふことが同じだつた、「この町には醫者が澤山ありましてな、二十人に一人位の割合ですからな、不自由はありませんよ、」と始め半分までは極めて眞面目な、持前の内所話をするやうな口調で言つておいて、

言ひ終る一分前時分になると急に「ヘ、、、」と首を縮めて、これも持前の聲をひそめて笑ふやうた笑ひ方をした。
「晝間はこれで大抵働きますがな、夜はよく此方で頭痛を起したり、腹痛をやつたりするんですよ。」「どうしてゞす？」
「いや、患者を追拂ふ爲です、へ、、、」とドクトル・デル・メチチイネは大體さういふ人物であつた。

料理店松風亭に行く途々、

「半子先生、あなたの××雜誌のお作を拜見しましたよ。」と世羽丁瀾が言ふのである。「どうも不思議な氣がしますな、あなたのやうな、お目にかゝつて話してるのと、お作との感じの違ふ方は珍しいですな、お目に掛つてゐると極く謹嚴な、寧ろ窮屈なやうな感じを受けますが、お作は實に闊膽で、そして實にフライ（自由）ですな。」

「いや、恐れ入ります、世羽先生。」と私は言つた、道がカチン／＼に凍りついてゐるので、馴れない私はともすると辷りさうになるのを踏みこたへながら、「世羽先生、僕は實際は御覽の通り人の十二倍も氣の弱い困り者ですが、筆を取りますと、忽ち人の十二倍も氣が強くなりまして、早い話が鬼に催眠術を掛けられたやうな状態になります、その代り俺はこんな事を思つてるのかなア、と自分で自分の書いたことに後で吃驚することがあります、だけど、何が本當何が嘘と言つても、算段したり言つたりしてる事は人間相手ですが、これでも書くことは神樣相手ですからな、その方が本當かも知れませんよ。」

「では、やつぱりゆめ子が好きだと言ふ譯ですかな、半子先生、ハ、、、」

と言ふうちに、松風亭に着いた。そこではもうゆめ子と小瀧とが二十分も前から來て待つてゐた。先づ私たちの座敷に小瀧が這入つて來て、次にゆめ子の聲が長い間部屋の外でばかり聞えて、仲々這入つて來なかつたが、小瀧と女中とに勧められて、新婚の席へのやうに顏を抑へて這入つて來た。無論、さうして顏を合はして見れば、何も小學生や小學

生ではないのだから、誰もワッと囃し立てるものもない代りに、極く平凡にみんなで話したり、食べたりして時間を過した。

「世羽先生、」と何かの話のついでに小瀧が言ふには、「奥様は如何ですか？」

私が不思議に思つたことには、この醫師の先生は今から二十年も前に妻に別れて、彼女の忘れがたみのその時二十歳とかになる、しかし生れつき聾で啞である、娘が一人しかないと聞いてゐたからである。が、今小瀧が奥さんと呼んだのは、冗談に、その不具の娘を指したものであることを後で知つた、その娘は不具ではあるが極めて野女で、父の丁滿が茶屋遊びなどすると、その度に機嫌を惡くするとのことなのである。

「いや、」と丁滿は一寸頭を掻く眞似をして、直に眞面目な、知らない者が聞いてゐると、本當の細君の話をしてゐるのかと思へるやうな調子で、「いや、奥さんは近頃は寛大になりましたよ、」と言つたのである。

小瀧が三味線をとつて彈いてうたふのである、彼女はその三味線と共に十分自慢らしい聲を上げて、二上り新内をやつても都々逸をやつても、乃至は外の一寸した端唄をやつても、その文句が皆「いふにいはれぬ好いた仲」とか、「人の噂が何やら彼やら」とか、うつかりしてゐる世羽丁滿にはそれと氣が付かない迄も、私とゆめ子との顔を時々その大きな目で見比べながら、さういふ唄ばかりうたふのである、ゆめ子は俯向いてゐるのである。「ゆめちやん、何かおうたひなさいな、」と小瀧が言つた時だけ、「えゝ、」と言つて顔を上げて、そして直に俯向いてしまふのである、私は淋しいのである。と、

「日本の唄は皆亡國の調を帶びてますね、」と突然世羽丁滿は二三盃の酒に眞赤になつた顔を振つて、例のひそ〳〵聲で何か大事件かなどのやうに言ひ出すのである、「いや、斯ういふ唄に限らずですな、どんな陽氣な文句の唄でも、斯う節

だけ聞いてゐますと、そら駈落しろとか、いつその事心中してしまへとか、さあさ、何でもよいわいな、つてな事ばつかり言つてるやうなものですね、さうは思ひませんか、牛子先生？」

「全く、その通りですな、世羽先生、」と私は言つたのである。

で、十二時の時間と共に、松風亭を出て、私が丁満を彼の家の前まで送つて行つて、花屋の自分の部屋に歸つて來ると、いつの間にか松風亭からゆめ子と小瀧とが來てゐて、火鉢や炬燵の火を調べたり、寢床を敷き直したりしてくれてゐる最中であつた。「もう時間も遲いんだから、かまはずどうか歸つて下さい、」と私が言ふと、「さうさう、ゆめちやん、」と小瀧が言ふには、「あなた、赤ちやんもあるし、母さんが喧ましいから、御免蒙つて一足お先に。私、後をちやんとしときますから、」で、ゆめ子が歸つてから、小瀧は又お尻を据ゑて、彼女が歸つて行つたのは二時近くであつた。

その翌々日、私は出來上つた原稿を持つて、やつぱりこの町はいゝ所だ、今度東京へ歸つたら、荷物などを少しまとめて、半永久的の準備をしてやつて來よう、さよなら、愛する下諏訪、と言つて東京に歸つたのである。

二十

又汽車が信州に向つて走るのである。前の時から三週間と經たない二月の始のことである。丁度私がさうして第四度目の信州行の汽車に乘つた時、同じ箱の中で、「やあ、牛子君、君はもう向ふに行つてるんだと思つて、僕、これから二三日邪魔する豫定で、君のとこへ出かけようと思つて、行くところなんだよ、」と言つて私の前に立つた男があつた、同じ職業をする私の友達の地引俊吉といふ男である。彼と手を取つて、その翌朝早く下諏訪の町に着いて、旅館花屋に乘り込むと、いそいそと玄關に出て來た丈治が、いつもの三階の部屋に私たちを案内して、例の西に面した窓を開けなが

ら、「半子先生、今年は到頭湖水が凍りませんでしたよ、」と、この大男の若者は湖水のことばかり氣にしてゐる樣子である。

その晩、無論ゆめ子を呼ぶと、私の小說「心」を讀んでゐた俊吉は、彼一流の黃色い聲を張り上げて、「やあ、これが有名なゆみ子さんか、いや、これは始めまして、お名前は兼々……」などと、長い間の放蕩で練り上げた調子で言ふものだから、大人しいゆめ子は徹頭徹尾困り切つてゐた、で、私はこの前の切塚重十郎と同じく、俊吉の席にゆめ子を呼ぶのは氣の毒だと思つたので、氣を利かして、その次の日からは小瀧を呼んだのである。小瀧は無論俊吉を十分相手にしたばかりでなく、例の近り四方山話が盡きないと、一時が二時までも遊んで行くのである。そして三日目の晩の八時に俊吉が東京に歸つて行くのを、私が、彼女を私の部屋に殘しておいて、送つて行つて歸つて來て、氣の拔けたやうにぼんやりと炬燵の前に坐つてゐると、それを隔てゝ私と向ひ合つて坐つてゐる彼女が、「先生、急にお寂しくなつたでせう？」と變にセンチメンタルな調子で言ふのである。

「大いに寂しくなりましたね、」とだが私もそれに應じて、色々寂しい場合の話をしてゐるうちに、次第に夜が更けて行くのである。すると、小瀧の三十歲の顏が、二十の娘のやうな媚を無理に裝つて笑ふのである、だつて、恐らく私も三十歲にもなつて、十八の少年のやうな優しい表情を造らうと骨折つたのに違ひないのである。「もう隨分遲いんでせうね、」とどちらかゞ言つた時は實際もう二時を過ぎてゐた。が、「遲いやうですね、」と言つた切りで、又別の話題を兩方から無理に探し始めるのである、「寒いでせう、」「いゝえ、」「眠いでせう、」「ちつとも」そしてほのぼのと夜が明けたのである

——私はこの話を書き始めて暫らくした時、これは飛んだ話を始めたものだと思つたことである。小說家なんて、いづれ身を切つて賣るやうな稼業には違ひないが、それにしてもこれはあんまり見當違ひな話を始めたものだと後悔しな

から、五十枚書き、そしてつい百枚になり、斯く長々とつゞくのである。これは大正何年の小説の最も悪い見本であるかも知れない、これだけで切り上げても、先の「私」小説の流儀で言ふと、主人公半子半四郎を代表するこの小説の作者の罪は鞭に値するかも知れない、恐縮しながら私はこれから後をなるべく簡略に、早々に話の切だけを付けて筆を擱かうと思ふ、話半ばだが、寛大なる諸君の寛恕を乞ふ次第である。——

ところで、その晩はまだ私と小瀧との間に何の事もなかつたら、と言ふことは、これ迄屡々説いた私の性質から、諸君は十分察してくれるだらうと思ふ、だが又、さういふ状態が、その翌日か、その翌々日か、現に何近い日に於いてどういふ結果に導くかといふことは、誰も想像するに難くないことである。

私は先に藝者小瀧が下から上を見上げた時は、仲々美人に見へるといふことは屡々諸君に紹介したが、ところで、その反對に彼女を心持ち下の方から見上げる位置に立つと、頬骨が出てゐて、きめが荒くて、三十歳といふ年に嘘のないことはその後知る機會を得たが、何と三十五歳以上にも見へるのである。私は彼女とさうして特別の仲になつてからは、屡々心の中で計り事を廻らして思ふには、これは堪らない、早々東京に歸つて、彼女に手紙を遣つて、僕今まで君に隠してゐましたが、實は言ひかはした女があるのです、さよなら、と言つてやることにしよう、さう思ひながら、町に芝居が掛つたと言つては彼女と共に行き、隣の町に面白い活動寫眞があると言つては彼女と共に行き、そしてそれも始めのうちは必ずゆめ子を誘つたが、私にしてはさういふ風になつて小瀧が如何にもゆめ子を他人扱ひにするのを見るのが辛くて、終には誰か連れを誘ふにしても、くれ葉とかその外の藝者を誘つたものである。

或時、私と小瀧、そしてゆめ子との三人で芝居を見に行く約束をしたところが、ゆめ子が少し遅れることになつて、私と小瀧とで一足先に出かけたのである、すると、丁度座元が来てゐて、私たちの所へ挨拶に来たので、さあ、お坐り

たさい、と言つて枚數の小さな木の炬燵の三方を三人で圍んだ、どうも二人以上の人數で喜扇と私とが炬燵に手を入れると可笑しなことになるのである、といふのは、その芝居の煎餅のやうな掛蒲團の下で、彼女の手と私の手とが伸つて、それから大凡二十分程の間、遅れて來たゆめ子の姿が見へる時まで、何食はぬ顔をして握り合はしてゐたことである、「あゝ、ゆめ子姉さんが入らつしたわ、ちやあ、さよなら、又、先生、さよなら、小瀧姉さん、」と言つて、喜扇は自分の席をゆめ子に讓つて元の自分の席に歸つて行つた。

喜扇といふと、もう一度、或時彼女とそつと約束して、なるべく人の目に付かない或料理屋に一緒に行つて、私の流儀でそこに午後の四時頃から十二時まで、三味線を引いたり話をしたり、又

「先生、」と喜扇が、「みんなの噂では先生のとこへ小瀧姉さんがお嫁に行くといふ話ですが、本當ですか？ 噂と言つてもそれは小瀧姉さんがみんなにさう自分で言つてるんださうですよ。」

「そんな話があるもんか」と云ひながら私は赤くなつて、「僕は喜扇さんみたいな人が好きですよ。」

「だつて、私見たいなもの、」とこれも亦不正直者ではないところの喜扇が言ふのである、「それに私、さうなると、小瀧姉さんなんかと違つて、何と言つても抱へられてる身分ですから、先生に隨分お金の御迷惑をかけなければなりませんわ。」

だが、そして私と喜扇とは別れた切りである。ところが、私の最も親愛するゆめ子とは？ それは私の方からも時々呼び、又小瀧のゐない時にも呼んで、呼んでゐる最中に突然小瀧がやつて來て、可笑しな睨み合ひ見たいな場も見た位であるが、彼女は私と小瀧のことに就いては一言も、何にも言はなかつた。惚れた惚れぬは別として、町では私とあんなに評判が立つてゐたのを、それを急に横合から小瀧が取つて行つたといふ事になると、はしたない色町の者どもは厚

かましい小瀧を攻めないで、大人しいゆめ子を嗤ふだらう、だが、私のゆめ子はそれに就いては何にも、私には無論のこと、外の誰にも、時としては無遠慮な者があつて、ゆめ子さん、一體どうしたの？　と聞いても、私、何にも知りませんわ、と彼女は俯向いて半分耐える聲で言つたであらう。

三度ばかり、私が一度彼女の赤ン坊を見たい、見たいと言つてせがんだので、彼女は彼女の赤ン坊を連れて來たことがある。「ちつとも、ゆめ子さん、あなたに似てゐませんね、」と私が言ふと、「さうね、」と傍にゐた小瀧が引取つて言ふには、「ゆめちやんにちつとも似てないのね、お父さんそつくりね。」私は小瀧とそんな不倫な事になつて、ゆめ子にそんな恥を與へた後でありながら、その言葉を針の如くに感じたことである。或時は又彼女は、一寸母さんの用事で二三日甲府まで行つて來ましたの、と言つて、さういふ風にしてゐるとどんなにしても藝者とは見へないところの、髮を束髮に結つて、對の大島の着物に羽織を着て、「これをついでにお母さんに召上つて下さるように、お送り下さい、」と行餡のお菓子を右手に、赤ン坊を左手に抱えて來たこともあつた、彼女は私に、小瀧が來て以來、一層天使に見へるのである。

丁度小瀧が來てゐない時のことであつた、彼女が子供に飲ませる牛乳を下の臺所へ温めに行つてる間、私は彼女の赤ン坊を、坊や、よしよし、と外に何にも言ふことを知らないものだから、そんなことばかり言つてあやしながら、私は例の西の窓に立つて氷のやうに光つて見へる御嶽山を眺めたり、よくそこで獅子の聲を張り上げてゐた加取權右衛門のゐた借屋の三階の部屋の方を見たり、又は北の窓に立つて、そのうちの何本かどこの赤ン坊の父の物であるに違ひないところの、生糸工場の百本の煙突を眺めたりして、抱いて歩いてゐると、その中にどうしたのか赤ン坊が急に泣き出して泣き止まないのである。あんまり泣くものだから、半分温まつた牛乳の瓶を持つて、下から上つて來たゆめ子に、「さあ、母ちやんが來た、母ちやんだ、」と言つて渡すと、赤ン坊は私の着物の前に小便を一合ばかりかけてゐたことである。

二十一

さうして、半永久的なぞと意氣込んで出かけた私の第四回目の下諏訪の滯在も、やつと二月程ゐた後、四月の始めのこと、人には私が何かを得たと見へたかも知れない、だが私は實に何かを失つた心寂しさを感じながら、引上げることになつたのである。雨の降る晩のことで、一雨づゝ暖かくなる春の雨だらう、私が乘る汽車の着いたプラットフォームに小瀧と私のゆめ子が送つて來てくれた。私たちが停車場に着いた時、もう汽車が出かゝつてゐたので、「さよなら」と言つたゞけで、外に何の言葉を交す暇もないうちに、呆氣なくピーと汽車が出てしまつたものだから、小瀧の傍に立つてゐると何と初々しく見へる私の親愛なるゆめ子が、恐らく口の中で「さよなら、」と言つてだらう、一寸目を上げてそして俯向いた顏を、私は動いて行くプラットフォームの柱と一緒に、汽車の窓から一瞥して、そして別れてそのまゝ會はぬのである。

ゆめ子よ、私のやうな、そして又君の子の父のやうな、人間のそれではなく、變りない天地の惠み、いつ迄も君にあれ！

さて、この物語の始めに、去年の九月にはまだ獨身であつた私が、今はもう私の女房を持ち云々と書いたことを、諸君は覺えてゐるであらう、それは私がそれから東京に歸つた半月後に、信州からやつて來た藝者小瀧のことなのである。

尚、書き洩らしたが、四度目に私が花屋に行つた時、私がそこに始めて行つた時會つたところの、二人の隱し子を持つて、二十一二歳にしか見へない實は二十八歳になるところの、越後生れのおむなが又醫者の家を止めて來てゐたので

ある、そしてその同じおむなが小瀧に頼んで、私の家に女中に來たものである、が、彼女は東京に來た三日目に、おたんの所謂お尻の落着かないといふ特長を遺憾なく發揮して、私もう下諏訪は厭ですけど、岡谷に行きます、と言つて歸つてしまつた。

そして、案じた通り、浦島太郎は一百年と言ふが、私のは一年も經たないことだのに、私の前にふーッと烟が上つたかと思ふと、三十五歳以上に見へる三十歳の小瀧と、もう來年あたり頭がちやびんになりさうな三十歳の私とが、遠聞しや、先月だつたかも、雜誌○○に「新婚の半子半四郎氏の家庭」などと言つて、並んだ寫眞が口繪に出されたものである。

(九・八月、未定稿)



靴

里見弴

「おい〳〵、おちか、どんなやつだ、はつきり云つてみな、一體何もんだよ」

ひよろつくのを、やゝ股を割つた立身ながら、無理にへの字に結んだ口尻ごと、顎をグイと咽へ引きつけたので、斜右下を睨めつけようと云ふのに、眼鏡はかけてゐないが、慥に近眼らしい大きな出眼の、どんよりとした瞳を、酔漢らしい上目使ひに据えて「さア、云へ、何もんだ」

「静かにおしよ、野中の一軒家ぢアあるまいしさ」

さう云ふ口のしたで、朱羅宇の長煙管を、まんざら勧工場ものでもない長火鉢の灘溜木の縁へ、いやと云ふほどはたきつけて、ぽいとむかふへ投げ出すと、眉をあげて、下唇をうけ口のやうに突き出しながら、上向きに、細く煙を吐きあげたのは、かれこれ男と同い年か、でなければ、一つ二つ上の三十五六とも見える、面長で、口鼻だちの

ばらりとした、色の小白い、大柄な女だつた。

「なんだ、野中の一軒家ぢアない？　知れたこつた。しかも、……しかも帝都の眞ン中だ。恐れ多くもお膝もとに、かゝる不祥の淫賣宿だ。……大きな聲は地聲だい」

右下に女を見下ろしてゐた首が、例へばうしろから胴へ入れてゐた手で、すばやく柄でも廻したやうに、キクリと左へ振り向くと、その重みのかゝり具合の違ひで、よろけて、新築ながら安普請の、二階までも響けさうに、ドスンと背後をぶツつけたのが、いゝ安配に、二疊の玄關へ降る襖と、臺所へ通ふ一間の障子との間に挾まれた柱で。

「しようがないね、お前さん、またそんなに醉つて來ちア……」

女は色をも動かさなかつたが、行繋にいくらか調子を優しくして、重ね加減に浮かしてゐた右の膝頭を平手で叩きながら、「まアいゝから、こつちへ來て、一度お坐りよ」

「お前さんだ？　よせやい。痩せても枯れても大久保天洋だ。淫賣宿のおかみ風情に……」

「うるさいね。二言めには淫賣宿々々々つて。お前さんにお金を借りて始めやアしまいしさ、大きにお世話だよ」

そつぽを向いたたり、翡翠珠のうしろ差しでとめたぐる／＼まきの根へ、藥指を突込んで掻きながら、女は、羊に似たやうな目を、片一方細くした。

「ハヽ」

と、短く、變なところで笑つて、「大きにさうだとも、借りやうたつて、貸しツこはねえや。……痩せても枯れても……

……」

「わかつた、大久保天洋さんだ。舊の新體詩人兼花柳月旦の主幹で、その後お痩せになつて、お枯れあそばしても、×

×新聞社会部の記者先生だものねえ、女で食はふとも、めつたに女にア食はれやしないさ。……さア、これくらゐよくわかつてゐたらいゝんだらう？　今夜はおとなしくお帰ンなさい」

「悪くさばきアがるな？」

云ふなり、そこへ、ズングリ短い胴廻りの體を、投げ出すやうに、胡坐になつて、羽織なしの、まがひ大島の長袷の袖を肩へたくし上げると、「さうさばきアがるなら、いよいよもつて帰られねえ。さア、白状しろ、誰だ、何もんだ」

「二階かい？　いづれお客さ」

ほき出すやうに、それでもいくらか低聲になつて答へたが、「それアさうと、お前さん、……ぢアいけないんだつけ」

と、笑ふと、この女は、見かけによらないあどけない顔をした。

「何がいけない……」

吊り込まれて、濃い眉毛の頬を蹙めたが、男はやゝ正氣づいたやうに、ぢツと相手の笑顔を見詰めた。

「なにさ、お前さんと云ちア悪いんだつたらう？」

「結構！」

「何が結構。……ねえ、殘りもんだけれど、お鮨がちつとばかりあるんだよ」

云ひながら、左手をついて、横坐りのまゝ體を延ばして、ちやちな茶簞笥の、上の引き違ひをあけると、五つ六つ、うちの皿に盛りなほしたのを取り出して、男との間にあるちやぶ臺に載せた。

「あら、だいぶ作が變づちまつた」

「これがほんとの、まツくろの鮨だ」

「くだらない。……たべる?」

あゝあ

「まアいゝご返辭だ。ちア叔母さんがね、おしたぢを取つて來てあげるからね、それをたべたら歸るんですよ」

腰から下が長いので、立つと、一層大女に見えた。洗ひざらしの、地が透きさうな、年齢には少しあら過ぎるお召の袷の着崩れを、存外こぐめいに、腰紐を締め直したりしながら、臺所へ立つて行つた。

柱に凭れてゐた男は、そこの障子をあけやうとする女に、一寸ちよつかいを出したが、うまくかはされて、パタリと疊に手を落したのを、そのまゝつツかい棒に、體が斜になると、自然と天井を振り仰いだ。そこには、黒褐色な、雷よけの呪禁になる玉蜀黍がぶら下つてゐた。目はそこへとまつた。けれども、ちつと耳をすました心持は、そこを通り越して、二階まで行つた。が、しいんとしてゐる。あたりも、もう寢靜つてゐた。

「おい、ほんとに女が來てゐるのか」

「好いね。……さア、おしたぢを持つて來たから、おあがんなさいよ」

暗闇の臺所から、女は摺足で、醤油の小皿を盆にも載せずに、持つて出て來た。

「誰だよ」

「一々お客の名前は聞いてゐられないよ、お前さんも馬鹿々々しい人だね。よしんば聞いたつて、こんな所へ來て、さう〳〵本當のことを云ふやつばかりはありアしないよ」

「客の話ぢアない。女は誰が來てゐるつて云ふんだ」

「女かい? 女はなにさ……」

「來てゐやしめえ。來てやしねえんだ！」

急に男は殺氣立つた目つきをして、大聲に呶鳴つたが、長火鉢の前に戻つて、空嘯いてゐる女の方へ、ぢり／＼と膝行り寄つて、

「おちか、てめえ、旦那どりを始めたな」

「い〻加減にかんぐつてお置きよ」

煙管の雁首で、箱根細工の煙草入をひつかけて引き寄せると、一服つけて、すまして鼻の先へ吹きあげながら、「お客の手前もみつともないぢアないか。意氣地なしのくせに、お酒がはひると、いつだつてこれなんだもの……。やきもちやき！」

「フ、ン」

と、男は鼻のさきでせ〻ら笑つた。「往生ぎはの悪い女だ。ちやんと、もう、ねたはあがつてるんだ。氷川町のカウント・スケベエが、どこから嗅ぎつけたのか、この頃時々こ〻へ立ち廻ることまで、ちアんと小耳に挾んでゐるんだ……」

「そんな異人さんなんぞ來やしないよ」

「異人ぢアねえやい。遊びの名を『川』と云ふんだ。いかもの食ひで有名な伯爵よ」

「へえエ、そんな人も、來てゐるのか知らないが、わたしやちつとも知らないよ」

「しらア切るねえ。……あの狒々がまた、てめえをほつとくわけはねえんだ」

「おや、しよつてるよ」

「うるせえ。……旦那どりをするならするで、もうちつと氣の利いた人間にしてくれ。あんな、けだもの……」

「あれさ、みつともないつたら。近所があるんだよ。もうちつと静かにお云ひなね」

思はず、女の気が、はツと二階へ行つた。

「さてはいよ〳〵……」

ムク〳〵と男は身を起した。

「お前さん、悪あがきをすると承知しないよ」

蒼白むほど張りつめた面持で、女も続いてすらりと立つたが、手早く用箪笥の抽出をあけると、剃刀を逆手に持つた。

「商賣の邪魔をする気なら、してごらん。惚れもどうもしておやしないが、あたしも商賣冥利だ。指一本お客にさはつたら、その時だと思つておくれ」

臺所をぬけて二階へあがる梯子口へ、女は身を構えた。

「フム、てめえこそしよつてやがる。やきもちで云ふんぢアねえやい」

男はそつちへは目もくれずに、なんと思つたか、ふら〳〵と玄關へ出たが、軒燈の薄あかりにすかして、下駄箱をあけると、上等な栂革(ちやかは)の半靴を出して、懐へねぢ込んだ。

「おちか、角の靴屋さんを起して、安もんでいゝから、お客様の足に合ふやうなのを一足買つて來てやんな。これア俺が貰つて行くから……」

* * * * * * * *

三四日して、氷川町の伯爵は、「靴の行へ」と題する原稿を、金一千圓で買ひ取つたと云ふ。そして栂革の半靴そのものは、さる屑屋が、さる下宿屋で、たゞの八十錢で買ひ取つて、これは一儲したと云ふ……。

著文庫

を繙くは人生の至樂也

◇注文殺到◇

16 幸田露伴博士著 **悅樂**
幸田露伴先生高邁の識深遠の知を筆端に載せ人生の快樂を說く

17 加藤咄堂先生著 **旅から旅**
著者の足跡海内に遍く風景山水の美口碑傳說悉く本書にあり

18 菊地幽芳先生著 **幽芳集**
文壇の雄幽芳先生の近業短篇あり翻譯あり紀行あり興味深し

19 村上浪六先生著 **放言錄**
壇の陣に花を咲かせ果を結ばせて人生社會をコキ下したる快著

20 和田垣謙三博士著 **西遊スケッチ**
和田垣先生歐米を漫遊し犀利の觀察外人の腹底を抉り出したり

21・22・23 柳川春葉先生著 **うき世（全三冊）**
春葉先生の傑作中の傑作にして家庭小說中の壓卷なり

22 夏目漱石先生著 **金剛草**
不世出の文豪夏目漱石先生の靈活なる作品の精粹を一卷に收む

24 井上圓了博士著 **迷信と宗教**
妖怪學の大家たる著者が東西怪奇の例を集め迷信の夢を醒す

26 杉村楚人冠先生著 **弱者の爲に**
世に訴へんと訴ふるに由なき弱者に代りて懊惱の數々を物語る

27 知至先生著 **叛聲**
著者は思想家にして宗教家也吐く處學理に非ず天賦心靈の叫也

28 大町桂月先生著 **杖の跡**
先生紀行文を以て世に鳴る本書は關八州の景勝紙上に躍然たり

29 大庭柯公先生著 **世界家として**
著者が獲得の觀察と多角の趣味を以て世界の人と自然を描く

30 大町桂月先生著 **小生の手紙**
著者數年間の書簡を收む至純清高の心懷先生の面目を知るべし

31 高島平三郎先生著 **婦人の爲に**
心理の根帶に捉へて婦人の爲に教ふ婦人問題解決の鍵鑰なり

◇四六判總クロース特製美本◇紙數各冊四百頁以上五百頁內外◇

定價各冊貳圓廿錢
郵稅內地金拾貳錢

▲讀書の醍醐味を味はんとする者は▲
本書に來れ心身自ら養はるを覺ゆ

發兌 東京市日本橋本石町三丁目 **至誠堂** 電話本局三六六六番 振替東京一七四四番

古代希臘の思想と文藝

文學士 山原三郎氏新著

邦土、民族、時代及び社會生活を背景とし文化史を基礎とし、豐富なる材料と清新なる觀察と潤澤なる情趣とに依つて、古代希臘の思想と文藝とを精細に研究し縱横に叙述せるもの、現代の思潮と歐洲の哲學宗教、文學藝術、政治法律、道德學術との淵源は收めて此の一卷に在り

菊判洋裝上製
紙數四百六十頁
正價貳圓八拾錢
送料十二錢

東京市本石町 博文館

振替口座東京二四〇

文學博士 姉崎正治著

四六判總クロース 天金箱入

定價金參圓 送料一冊金拾貳錢

光あれ

學界の權威たる著者が文學、藝術、哲學、宗教、美術等に關する意見は本書に因つて知る事が出來る。其該博なる學問と高邁なる識見と洗練せる文章とは實に最近出版界の偉觀……

發行所
大阪南區大寶寺町西之丁
振替口座大阪七三三三番
電話南一一七七番
博多成象堂

▲聖誕記念 聖祖讃美歌 宣傳用文書 懸賞募集廣告

明春二月十六日は吾宗祖日蓮大聖人降誕七百年の嘉辰に相當す。斯の機會に於て日蓮主義大擧宣傳を行ひ高恩報謝に擬せんと欲し、左記規程に據り聖祖讃美歌及宣傳用文書を募集す。

大正九年八月

東京市芝區二本榎一丁目十五番地
日蓮宗々務院内
聖誕七百年記念宣傳協賛會

募集規程

第一種聖祖讃美歌

一、内容は必ずしも聖誕に限るを要せず宗門の諸有聖日に用ひらる樣宗祖の恩徳を讃嘆謳歌すべし

一、歌詞は四節以内とし各節の句脚は成るべく一樣ならしめ句數(例に七調、八八調)を避くべし

一、歌姿は典雅荘重にして而も俚耳に入り易からしめんことを要す

一、當選者には壹等參百圓(壹名)貳等百圓(壹名)參等五拾圓(壹名)選外佳作貳拾圓(參名)の賞金を呈す

一、選者(五十音順)

△文學博士 幸田露伴氏
△國柱會總裁 田中智學氏
△文學士 尾上柴舟氏

第二種宣傳用文書

一、内容は達意的讃仰的に日蓮主義を說述せるものたるべし

一、文章は口語體とし通俗平易を旨とすべし

一、原稿は二十字詰、四百行以上六百行以内とす

一、當選者には壹等貳百圓(一名)、貳等五拾圓(一名)、參等參拾圓(一名)、選外佳作(貳拾圓)一名の賞金を呈す

一、選者(いろは順)

△日蓮宗大學長 風間隨學師
△宗務總監 武田宣明師
△文學士 小林一郎氏

一、右二種共、募集期限を拾月拾日とす、其結果は十二月十日發行の日蓮宗宗報を以て發表す。

一、[illegible]原稿に記載せず別紙に認めて嚴封し之を原稿と同封して上封に『應募[illegible]稿』又は、『應募歌稿』と
[illegible]せらるべし。

○定價　金六拾錢郵税金貳錢（海外郵税拾錢但支那を除く）

冊數／國別	內國	外國	
六冊	金參圓六拾錢	金四圓貳拾錢	以上郵税共
十二冊	金七圓貳拾錢	金八圓四拾錢	

▲但し新年號春秋二期附錄號臨時號は各倍册に付普通號二册の代金を申請くべし、即ち一ケ年通計十七册分の割合なれば一ケ年分御注文の方は內國は金拾圓貳拾錢外國は金拾壹圓九拾錢の割となれども頁數の都合にて臨時變更することあるべし。

一振替貯金　口座は東京三十四番なり
一郵券代用　は謝絶す但し郵便局に不便の地に限り一割增にて代用せらるるを拒まず
一代金引替　小包の取扱は一切謝絶す
一集金郵便　御希望の方は拂込金額以外に左記料金を加へたる其總額を前以て弊社へ通知せらるべし、弊社は直ちに其取扱手續をなすべし但集金郵便の申込を受くるも現金受領濟にあらざれば雜誌を發送せず

一金一圓迄　金六錢
一金五圓迄　金七錢（集金委託料及送料共）
一金拾圓迄　金八錢

一中央公論及婦人公論　代金取り纏め御拂込みの場合には各誌割當て金額御指定を乞ふ
一受領證請求　は必ず返信料を要す

大正九年八月三十一日印刷納本
大正九年九月一日發行

（禁轉載）

發行兼編輯人　瀧谷憲治
印刷人　高木西三

東京市本郷區駒込西片町十番地
發行所　中央公論社
電話（小石川一四四一・小石川三四二〇）
電信略號コウロン

東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地
印刷所　秀英舍第一工場

CHUO KORON *(The Central Review.)*

By THE CHUO KORON SHA PUBLISHING Co., Published Monthly.
Terms of Subscription: Annual subscription *yen* 11,90; Single copy 70 *sen* including Postage. Entered at the Post Office at Los Angeles, Cal. U.S.A. as second-class mail matter.

明治三十年一月廿九日第三種郵便物認可

◎本號に限り特價金壹圓五拾錢



郵稅金四錢